

向矢部遺跡

北関東自動車道(伊勢崎～県境)地域
埋蔵文化財発掘調査報告書

2012

東日本高速道路株式会社
財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

向矢部遺跡

北関東自動車道(伊勢崎～県境)地域
埋蔵文化財発掘調査報告書

二〇一二

東日本高速道路株式会社
財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団



向矢部遺跡

北関東自動車道(伊勢崎～県境)地域
埋蔵文化財発掘調査報告書

2012

東日本高速道路株式会社
財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団



23号住居 カマド遺物出土状態・銅製容器出土状態



出土した銅製容器



銅製容器 柄取り付け部鋳留め



銅製容器 柄取り付け部鋳留め (内面)



銅製容器 側面に穿かれた3孔



銅製容器 側面に取り付けられた細い鋳留め



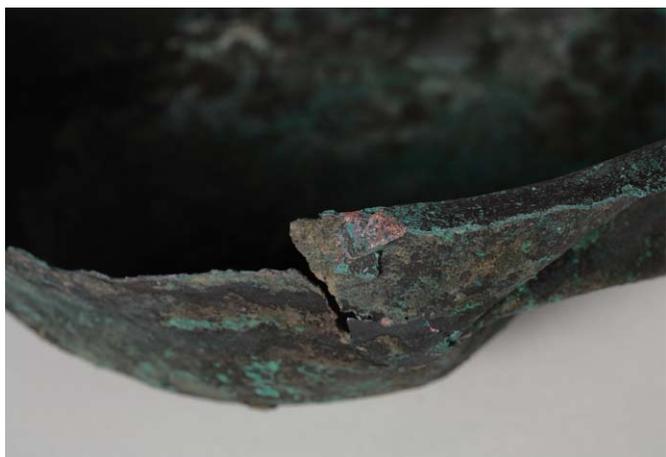
銅製容器 内面の黒色付着物状況



銅製容器 側面の凸凹状況 (内面)



銅製容器 底面 (逆位)



銅製容器 口端部の地金状況

序

向矢部遺跡は太田市只上町に所在し、北関東自動車道の建設に伴い平成17年に発掘調査された遺跡です。調査した場所は、全線が開通した北関東自動車道太田インターチェンジのすぐ北側にあたり、大きな話題ともなった古代の東山道駅路の発見された近くでもあります。

当遺跡周辺は、古代「山田郡」の中心的な地域でもあり、発掘調査では奈良時代から平安時代にかけての集落をはじめ、縄文時代から中近世までの多くの遺構や遺物が発見されました。特に、奈良時代の竪穴住居からは国内でも7例目となる希少な「鉄柄付銅製杓」が、また平安時代の竪穴住居からはこれまでに例のない「米」と「毛」の刻書文字のある紡錘車が発見され、マスコミ等で報道されたのは記憶に新しいところでもあります。

発掘調査から報告書の刊行に至るまでには、東日本高速道路株式会社関東支社、群馬県教育委員会文化財保護課、太田市教育委員会、地元関係者の方々に種々のご指導ご協力を賜りました。報告書の上梓に際し、関係者の皆様に心から感謝申し上げると共に、併せて本書が群馬県の歴史を解明する上で広く活用されますことを祈願し、序といたします。

平成24年3月

財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
理事長 須田 栄一

例 言

1. 本書は、北関東自動車道(伊勢崎～県境)建設に伴い発掘調査された、向矢部遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 遺跡は、群馬県太田市只上町甲592、658-1、658-2、658-3、658-4、661-1、661-2、661-3、661-6、664、665、669-1、669-2、669-3、670-1、670-2、696-1、696-2、697、698、701-1、701-2、701-3、701-4、701-5、701-6、701-7、701-8、702、703-1、703-2、703-3、705-1、705-2、706-1、706-2、706-3、707、708、713-1、713-2、714、715-2番地に所在する。
3. 事業主体 東日本高速道路株式会社関東支社(旧日本道路公団)
4. 調査主体 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
5. 調査期間 平成16年7月1日～平成17年3月31日
6. 調査面積 表面積 15.267㎡
7. 発掘調査体制は次の通りである。

発掘調査担当 専門員 谷藤保彦、主任調査研究員 黒澤照弘・阿久津聡、調査研究員 田村博
遺跡掘削請負工事 須賀工業株式会社
委託 地上測量：株式会社栗原総合測量 空中写真撮影：株式会社シン技術コンサル
8. 整理事業の期間と体制は次の通りである。

整理期間 平成23年4月1日～平成24年3月31日
整理担当 上席専門員 谷藤保彦
遺物写真撮影：佐藤元彦(補佐(総括))
保存処理：関 邦一(補佐)
9. 本書作成の担当は、次の通りである。

編集 上席専門員 谷藤保彦
執筆 上席専門員 神谷佳明(遺物観察表：土師器・須恵器・土製品、金属製品)、上席専門員 岩崎泰一 (遺物観察表：石器・石製品)、上席専門員 大西雅広(遺物観察表：陶磁器類、金属製品)、それ以外は谷藤が執筆した。
10. 石材同定は、飯島静男氏(群馬地質研究会)にお願いした。
11. 金属製品の自然科学分析は、株式会社加速器分析研究所に委託し、分析結果は第4章に掲載した。
12. 発掘調査諸資料および出土品は、群馬県埋蔵文化財調査センターに保管してある。
13. 発掘調査及び報告書作成に際しては、群馬県教育委員会、太田市教育委員会をはじめ、関係機関、毛利光俊彦、澁谷昌彦、壁伸明、川道亨の各氏ならびに多くの方々からご協力・ご指導をいただいた。感謝いたします。

凡例

1. 本報告書に掲載する遺構平面図の方位記号は、国家座標(2002.4改正前の日本測地系)の北を表す。真北は東偏 $0^{\circ}17'56''$ 、磁北は東偏 $7^{\circ}25'55''$ である。座標系は国家座標IX系である。
2. 各遺構図等のグリッド表記は、座標値のX軸・Y軸共に下3桁を記した。
3. 遺構断面実測図、等高線に記した数値は標高値であり、単位はmである。
4. 遺構名称は、遺構種類ごとに通し番号をつけ、番号と遺構種類名で呼称した。なお、調査時の遺構名から、整理時に遺構名を変更したのは、次の通りである。

変更前(調査時)	変更後(整理時)	変更前(調査時)	変更後(整理時)
60号土坑	3号井戸	137号土坑	4号井戸
135号土坑	6号井戸	186号土坑	7号井戸
136号土坑	5号井戸		

5. 遺物番号は、各遺構ごとに通し番号とし、遺物図・遺物観察表・遺物写真図版とも一致している。
6. 遺構・遺物実測図の縮尺は各図にそれぞれ示したが、基本としては以下の通りである。

遺構 遺構配置図関係……1/500・1/1000・1/1250 住居跡・掘立建物遺構・柱穴列……1/60
カマド……1/30 土坑・井戸……1/20・1/40 溝……1/40・1/60・1/250・1/500
水田……1/60・1/300

遺物 土器・陶磁器類……1/3・1/4 石器・石製品……1/1・1/2・1/3・1/4・1/6
金属製品……1/1・1/2・1/3

7. 遺構図中のスクリーン表示は、次のごとくである。

遺構 焼土 
遺物 漆  煤  油煙  粘土  黒色  磨滅 

8. 遺構の主軸方向・長軸方向・走向は、住居ではカマドのある方向を主軸方向とし、住居以外の遺構は長軸方向・走向を記した。主軸方向の表記は北を基準とし、東に傾いた場合はN- \circ -Eとした。長軸方向・走向については、東西南北の方位で表記した。住居の面積は、プランメーターで3回の計測を行い、その平均値を採用した。

9. 色調・遺物観察表の記載方法は、以下の通りである。

- ・土層および土器の色調表現は、農林水産省農林水産技術会事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修『新版標準土色帳』1993年版に準拠した。
- ・計測値は、口：口径、底：底径、高：器高、台：高台径、稜：模倣杯などの稜径、胴：胴部最大径、摘：摘み径である。なお、計測値の()は、残存値を示す。
- ・胎土表記中の礫・粗砂・細砂は、径2mm以上を礫、径2～0.2mmを粗砂、径2mm以下を細砂とした。

10. 本書で記載した地図は、下記のものを使用した。

国土地理院 地勢図1：200,000「宇都宮」(平成16年8月1日発行)

国土地理院 地形図1：25,000「桐生」(平成14年5月1日発行)「上野境」(平成元年12月1日発行)

「足利北部」(平成15年1月1日発行)「足利南部」(平成14年9月1日発行)

太田市 1：2,500地形図(平成18年8月測図)

目次

序	
例言	
凡例	
目次	
挿図目次・表目次・写真目次	
第1章 調査の経緯・経過と方法	
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の方法と経過	
1 調査の方法	1
2 調査の経過	3
第3節 基本土層	8
第2章 遺跡の地理的環境と歴史的環境	
第1節 地理的環境	10
第2節 歴史的環境	13
第3章 検出された遺構と遺物	
第1節 遺跡の概要	23
第2節 旧石器時代の調査	23
第3節 縄文・弥生時代の遺構と遺物	26
第4節 奈良時代以降の遺構と遺物	
1 竪穴住居	32
2 掘立柱建物・柱穴列	119
3 土坑	123
4 井戸	177
5 ピット	178
6 溝	182
7 水田	210
遺構一覧表	220
第4章 自然科学分析	231
第5章 調査の成果(総括)	
第1節 23号住居出土の銅製容器について	246
第2節 21号住居出土の刻書紡錘車について	251
第3節 総括	252
写真図版	
報告書抄録	

挿 図 目 次

第1図	遺跡位置図	1	第60図	18号住居・カマド平面図	76
第2図	調査区および隣接遺跡位置図	2	第61図	18号住居掘り方・カマド(旧)平面図	77
第3図	調査区設定図	4	第62図	18号住居出土遺物	78
第4図	グリッド設定図	4	第63図	19号住居・カマド平面図	80
第5図	向矢部遺跡全体図 1・2区	5	第64図	19号住居出土遺物	81
第6図	向矢部遺跡全体図 3～5区	6	第65図	20号住居・カマド平面図	83
第7図	向矢部遺跡全体図 5・6区	7	第66図	20号住居出土遺物	84
第8図	基本土層図	9	第67図	21号住居・カマド平面図	85
第9図	渡良瀬川扇状地の地質区分	11	第68図	21号住居出土遺物(1)	86
第10図	遺跡周辺地形分類図	12	第69図	21号住居出土遺物(2)	87
第11図	周辺遺跡位置図	17	第70図	22号住居平面図	88
第12図	旧石器時代試掘トレンチ配置図	24	第71図	22号住居出土遺物	89
第13図	旧石器時代試掘トレンチY=-39.330ライン土層断面図(1)	24	第72図	23号住居・カマド平面図	91
第14図	旧石器時代試掘トレンチX=36.500ライン土層断面図(2)	25	第73図	23号住居カマドおよび周辺遺物出土状態	92
第15図	縄文土器 遺構外出土平面図	26	第74図	23号住居出土遺物(1)	93
第16図	縄文・弥生時代遺構外出土土器(1)	28	第75図	23号住居出土遺物(2)	94
第17図	縄文・弥生時代遺構外出土土器(2)	29	第76図	23号住居出土遺物(3)	95
第18図	縄文・弥生時代遺構外出土土器(3)	30	第77図	23号住居出土遺物(4)	96
第19図	縄文・弥生時代遺構外出土土器	31	第78図	24号住居平面図	100
第20図	1号住居・カマド平面図	33	第79図	24号住居出土遺物(1)	101
第21図	2号住居平面図	34	第80図	24号住居出土遺物(2)	102
第22図	2号住居カマド平面図	35	第81図	25号住居平面図	103
第23図	2号住居出土遺物	36	第82図	25号住居カマド平面図	104
第24図	3号住居・カマド平面図	38	第83図	25号住居出土遺物	105
第25図	3号住居出土遺物	39	第84図	26号住居・カマド平面図	106
第26図	4号住居平面図	39	第85図	24～26・31号住居掘り方平面図	107
第27図	5号住居平面図	40	第86図	26号住居出土遺物	108
第28図	6号住居平面図	42	第87図	27号住居出土遺物	108
第29図	6号住居カマド平面図	43	第88図	27号住居平面図	109
第30図	6号住居掘り方平面図	44	第89図	28号住居・カマド平面図	110
第31図	6号住居出土遺物(1)	44	第90図	28号住居出土遺物	111
第32図	6号住居出土遺物(2)	45	第91図	29号住居平面図	114
第33図	6号住居出土遺物(3)	46	第92図	29号住居カマド・掘り方平面図	115
第34図	6号住居出土遺物(4)	47	第93図	29号住居出土遺物	116
第35図	7号住居・カマド平面図	50	第94図	30号住居・カマド平面図	117
第36図	7号住居出土遺物	51	第95図	30号住居出土遺物	118
第37図	8・9号住居平面図	53	第96図	31号住居平面図	118
第38図	8号住居カマド平面図	54	第97図	1号掘立柱建物平面図	120
第39図	8号住居出土遺物(1)	55	第98図	2号掘立柱建物平面図	121
第40図	8号住居出土遺物(2)	56	第99図	1・2号柱穴列平面図	122
第41図	9号住居出土遺物	57	第100図	1・2・8号土坑平面図	146
第42図	10号住居出土遺物	57	第101図	3～7・29・30号土坑平面図	147
第43図	10号住居・カマド平面図	58	第102図	9・10・16～23・28号土坑平面図	148
第44図	11号住居・カマド平面図	59	第103図	9・10・16～23・28号土坑土層断面図	149
第45図	11号住居出土遺物	60	第104図	11～15・31号土坑平面図	150
第46図	12号住居出土遺物	60	第105図	11～15・31号土坑土層断面図、25・26号土坑平面図	151
第47図	12号住居・カマド平面図	61	第106図	32～34・36・37号土坑平面図	152
第48図	13号住居・カマド平面図	64	第107図	38～43・47号土坑平面図	153
第49図	13号住居出土遺物	65	第108図	44～46・48・49号土坑平面図	154
第50図	14号住居・カマド平面図	66	第109図	50～53・58・59号土坑平面図	155
第51図	14号住居出土遺物	67	第110図	54～57・61～65号土坑平面図	156
第52図	15号住居・カマド平面図	68	第111図	66～74号土坑平面図	157
第53図	15号住居出土遺物	69	第112図	75～84・86号土坑平面図	158
第54図	16号住居・カマド平面図	72	第113図	87～98・127号土坑平面図	159
第55図	15・16号住居掘り方平面図	73	第114図	99～107号土坑平面図	160
第56図	16号住居出土遺物(1)	73	第115図	108～110・112～116号土坑平面図	161
第57図	16号住居出土遺物(2)	74	第116図	117～120・122～125・130号土坑平面図	162
第58図	17号住居出土遺物	74	第117図	126・128・129・131・132号土坑平面図	163
第59図	17号住居・カマド平面図	75	第118図	133・134・138・139号土坑平面図	164

第119図	140～145号土坑平面図	165	第144図	9・10・12・13・15・16号溝土層断面図	193
第120図	146～148・150～153・155・156号土坑平面図	166	第145図	14・20～22・24号溝平面図	194
第121図	157～164号土坑平面図	167	第146図	14・20～22・24号溝土層断面図	195
第122図	165～167・170～172号土坑平面図	168	第147図	12・25・26号溝平面図、土層断面図	196
第123図	173～179号土坑平面図	169	第148図	1号溝出土遺物(1)	197
第124図	180～185号土坑平面図	170	第149図	1号溝出土遺物(2)	198
第125図	1号土坑出土遺物	171	第150図	1号溝出土遺物(3)	199
第126図	2号土坑出土遺物	172	第151図	1号溝出土遺物(4)	200
第127図	11号土坑出土遺物	173	第152図	1号溝出土遺物(5)	201
第128図	14号土坑出土遺物	173	第153図	1号溝出土遺物(6)	202
第129図	15号土坑出土遺物(1)	173	第154図	2号溝出土遺物	206
第130図	15号土坑出土遺物(2)	174	第155図	3号溝出土遺物	206
第131図	16号土坑出土遺物	175	第156図	4号溝出土遺物	207
第132図	20号土坑出土遺物	176	第157図	11号溝出土遺物	207
第133図	26号土坑出土遺物	176	第158図	14号溝出土遺物	207
第134図	28号土坑出土遺物	176	第159図	20号溝出土遺物	207
第135図	1・2号井戸平面図	179	第160図	22号溝出土遺物	208
第136図	3・5・6号井戸平面図	180	第161図	25号溝出土遺物	208
第137図	4・7号井戸平面図	181	第162図	1区As-B下水田平面図	211
第138図	溝配置図	187	第163図	1区東壁土層断面図	212
第139図	1・2・7号溝平面図、2号溝断面図	188	第164図	遺構外出土遺物(1)	214
第140図	1・2・7号溝土層断面図	189	第165図	遺構外出土遺物(2)	215
第141図	1号溝遺物出土状態平面図	190	第166図	遺構外出土遺物(3)	216
第142図	3号溝平面図、土層断面図	191	第167図	遺構外出土遺物(4)	217
第143図	9・10・12・13・15・16号溝平面図	192	第168図	「鉄柄付銅製杓」集成図	248

表 目 次

第1表	周辺遺跡一覧表	18	第28表	29号住居出土遺物観察表	116
第2表	縄文・弥生時代遺構外出土石器計測・観察表	31	第29表	30号住居出土遺物観察表	118
第3表	2号住居出土遺物観察表	36	第30表	1号土坑出土遺物観察表	172
第4表	3号住居出土遺物観察表	39	第31表	2号土坑出土遺物観察表	172
第5表	6号住居出土遺物観察表	47	第32表	11号土坑出土遺物観察表	173
第6表	7号住居出土遺物観察表	51	第33表	14号土坑出土遺物観察表	173
第7表	8号住居出土遺物観察表	56	第34表	15号土坑出土遺物観察表	175
第8表	9号住居出土遺物観察表	57	第35表	16号土坑出土遺物観察表	175
第9表	10号住居出土遺物観察表	57	第36表	20号土坑出土遺物観察表	176
第10表	11号住居出土遺物観察表	60	第37表	26号土坑出土遺物観察表	176
第11表	12号住居出土遺物観察表	60	第38表	28号土坑出土遺物観察表	176
第12表	13号住居出土遺物観察表	65	第39表	1号溝出土遺物観察表	202
第13表	14号住居出土遺物観察表	67	第40表	2号溝出土遺物観察表	206
第14表	15号住居出土遺物観察表	70	第41表	3号溝出土遺物観察表	207
第15表	16号住居出土遺物観察表	74	第42表	4号溝出土遺物観察表	207
第16表	17号住居出土遺物観察表	74	第43表	11号溝出土遺物観察表	207
第17表	18号住居出土遺物観察表	78	第44表	14号溝出土遺物観察表	207
第18表	19号住居出土遺物観察表	81	第45表	20号溝出土遺物観察表	208
第19表	20号住居出土遺物観察表	84	第46表	22号溝出土遺物観察表	208
第20表	21号住居出土遺物観察表	87	第47表	25号溝出土遺物観察表	208
第21表	22号住居出土遺物観察表	88	第48表	遺構外出土遺物観察表	217
第22表	23号住居出土遺物観察表	97	第49表	住居一覧表	220
第23表	24号住居出土遺物観察表	102	第50表	土坑一覧表	222
第24表	25号住居出土遺物観察表	104	第51表	ピット一覧表	225
第25表	26号住居出土遺物観察表	108	第52表	掘立柱建物一覧表	229
第26表	27号住居出土遺物観察表	108	第53表	井戸一覧表	229
第27表	28号住居出土遺物観察表	111	第54表	溝一覧表	230

写真目次

- PL. 1 西へ延びる路線と金山丘陵(遺跡上空から南西方向を望む)
東へ延びる路線と県境(遺跡上空から北東方向を望む)
- PL. 2 1区 全景(空中写真 上空から)
2区 全景(空中写真 上空から)
- PL. 3 3・4区 全景(空中写真 上空から)
5・6区 全景(空中写真 上空から)
- PL. 4 1号住居 床面全景 西から
1号住居 カマド 西から
2号住居 床面全景 南から
2号住居 遺物出土状態 南から
2号住居 カマド 南から
2号住居 掘り方全景 南から
3号住居 床面全景 西から
3号住居 カマド 西から
- PL. 5 4号住居 西から
5号住居 西から
6号住居 床面全景 西から
6号住居 遺物出土状態 西から
6号住居 鉄製品出土状態
6号住居 カマド遺物出土状態 西から
6号住居 カマド 西から
6号住居 掘り方全景 西から
- PL. 6 7号住居 床面全景 西から
7号住居 カマド 西から
7号住居 カマド遺物出土状態 西から
8・9号住居 床面全景 南西から
8・9号住居 遺物出土状態 南西から
8号住居 カマド 西から
10号住居 床面全景 南西から
10号住居 カマド 南西から
- PL. 7 11号住居 床面全景 南西から
11号住居 遺物出土状態 南西から
11号住居 カマド 南西から
12号住居 床面全景 南西から
12号住居 遺物出土状態 南西から
12号住居 カマド 南西から
13号住居 床面全景 南西から
13号住居 カマド 南西から
- PL. 8 13号住居 掘り方全景 南西から
14号住居 床面全景 南西から
14号住居 カマド 南西から
15号住居 床面全景 南西から
15号住居 遺物出土状態 南西から
16号住居 床面全景 南西から
16号住居 カマド 南西から
15・16号住居 掘り方全景 南西から
- PL. 9 17号住居 床面全景 南西から
17号住居 カマド 南西から
18号住居 床面全景 南西から
18号住居 カマド 南西から
18号住居 カマド掘り方 南西から
18号住居 掘り方全景 南西から
19号住居 床面全景 南西から
19号住居 カマド 南西から
- PL. 10 19号住居 カマド 西から
19号住居 カマド掘り方 南西から
19号住居 掘り方全景 南西から
20号住居 床面全景 南から
20号住居 遺物出土状態 南から
- 20号住居 カマド 南から
21号住居 床面全景 西から
21号住居 遺物出土状態 西から
- PL. 11 21号住居 紡錘車出土状態
21号住居 カマド遺物出土状態 南西から
21号住居 カマド 西から
21号住居 掘り方全景 西から
22号住居 床面全景 西から
22号住居 掘り方全景 南から
23号住居 遺物出土状態 南西から
23号住居 遺物出土状態
- PL. 12 23号住居 床面全景 南西から
23号住居 カマド周辺遺物出土状態
23号住居 カマド周辺遺物出土状態
23号住居 カマド遺物出土状態
23号住居 銅製容器出土状態
- PL. 13 23号住居 カマド周辺遺物出土状態 南西から
23号住居 床面全景 南西から
23号住居 カマド 南西から
24号住居 床面全景 南から
25号住居 床面全景 西から
- PL. 14 25号住居 カマド 西から
26号住居 床面全景 西から
26号住居 カマド 西から
24・25・26・31号住居 掘り方全景 西から
24号住居 床下土坑 西から
25号住居 床下土坑 東から
27号住居 床面全景 南から
27号住居 掘り方全景 南から
- PL. 15 28号住居 床面全景 西から
28号住居 カマド 西から
29号住居 床面全景 南西から
29号住居 カマド 南西から
29号住居 掘り方全景 南西から
29号住居 床下土坑 南西から
30号住居 床面全景 南西から
30号住居 カマド 南西から
- PL. 16 縄文土器 遺構外出土状況
1号住穴列 北から
1号掘立柱建物(手前)と2号掘立柱建物(奥)全景 北から
1号井戸 南から
3号井戸 南から
- PL. 17 6区東側に集中する土坑群 北から
3～6号土坑 北から
11～14号土坑 東から
8・11～15号土坑 北から
16～23・28号土坑 北から
- PL. 18 1号土坑 北から
9号土坑 南から
32号土坑 北から
33号土坑 北西から
34号土坑 西から
36号土坑 北から
37号土坑 南西から
38号土坑 東から
39・40号土坑 西から
41号土坑 西から
42号土坑 西から
43号土坑 南から

	44・45号土坑	南西から		120号土坑	西から
	46号土坑	南から		122号土坑	北から
	47号土坑	南から		123号土坑	東から
PL. 19	48号土坑	西から		124・130号土坑	西から
	49号土坑	西から		125号土坑	西から
	50号土坑	西から		126号土坑	北から
	51号土坑	西から		126号土坑	東から
	52号土坑	西から		127号土坑	西から
	53・58号土坑	南西から		128号土坑	南から
	54号土坑	西から		129号土坑	西から
	55号土坑	西から		131号土坑	西から
	56号土坑	東から		132号土坑	南東から
	57号土坑	東から	PL. 24	133号土坑	西から
	59号土坑	西から		134号土坑	西から
	61号土坑	西から		135号土坑(6号井戸)	南西から
	62号土坑	西から		136号土坑(5号井戸)	西から
PL. 20	63号土坑	西から		137号土坑(4号井戸)	北西から
	64号土坑	西から		137号土坑(4号井戸)	東から
	65号土坑	東から		137号土坑(4号井戸)	東から
	66号土坑	南西から		138号土坑	南から
	67号土坑	東から		139号土坑	南から
	68号土坑	西から		140号土坑	北東から
	69号土坑	南から		141号土坑	南西から
	70号土坑	南から		142号土坑	南東から
	71号土坑	南から		143号土坑	南東から
	72号土坑	南から		144号土坑	南東から
	73号土坑	西から		145号土坑	南東から
	74号土坑	東から	PL. 25	147号土坑	南東から
	75号土坑	南から		151号土坑	南から
	76号土坑	西から		152号土坑	東から
	77号土坑	西から		153号土坑	北から
	78号土坑	西から		155号土坑	西から
	79号土坑	西から		159号土坑	東から
PL. 21	80・81号土坑	南西から		160号土坑	東から
	82・83・86号土坑	南東から		161号土坑	東から
	84号土坑	西から		162・163号土坑	東から
	86号土坑	西から		164号土坑	西から
	87号土坑	東から		165号土坑	東から
	88号土坑	東から		166号土坑	北から
	89号土坑	東から		170号土坑	南から
	90号土坑	東から		170号土坑	北西から
	91・92号土坑	南西から		172号土坑	東から
	93号土坑	西から	PL. 26	173号土坑	東から
	94号土坑	西から		174号土坑	東から
	95・96号土坑	西から		175号土坑	東から
	97・98・127号土坑	東から		176号土坑	西から
	99号土坑	北から		177号土坑	東から
	100号土坑	北から		178号土坑	北から
PL. 22	101号土坑	南から		180号土坑	南西から
	102号土坑	南から		181号土坑	北西から
	103号土坑	西から		183号土坑	南から
	104号土坑	西から		184号土坑	東から
	105号土坑	北から		185号土坑	南から
	106号土坑	西から		186号土坑(7号井戸)	南から
	107号土坑	南から	PL. 27	1号溝	北から
	108号土坑	北から		2号溝	南から
	109号土坑	南東から		2号溝	北から
	110号土坑	南から		3号溝	北から
	112号土坑	南東から		4号溝	北から
	113号土坑	西から	PL. 28	5・6号溝	北から
	114号土坑	東から		8・9号溝	東から
	115号土坑	東から		10号溝	南から
	116号土坑	南東から		12号溝北側	南から
PL. 23	117号土坑	西から		13号溝	西から
	118号土坑	西から		14号溝北側	北から
	119号土坑	西から		14号溝南側	北から

- PL. 29 12・15号溝 南東から
 15号溝 北西から
 19号溝 北から
 20号溝 西から
 22号溝 北西から
 12号溝南側・23号溝 北から
 24号溝 北東から
 25・26号溝 東から
- PL. 30 1区 As-B下面 東から
 1区 As-B下面 南東から
 1区 As-B下 水田全景 西から
 1区 As-B下 水田 南から
 1区 As-B下 水田 西から
- PL. 31 1区 As-B下 水田面 北西から
 1区 As-B下 水田面 北西から
 1区 As-B下 水田 東から
 1区 As-B下 水田 南西から
 1区 南東壁 東寄土層断面
 1区 南東壁 中央南寄土層断面
 1区 南東壁 南端土層断面
 1区 南西端 旧河道跡 南東から
- PL. 32 旧石器試掘 No. 11 土層断面 南西から
 旧石器試掘 No. 21 土層断面 南西から
 旧石器試掘 No. 25 土層断面 南西から
 旧石器試掘 No. 27 土層断面 南西から
 旧石器試掘 No. 34 土層断面 南西から
 旧石器試掘 No. 40 土層断面 南西から
 旧石器試掘 No. 46 土層断面 南西から
- 旧石器試掘 No. 50 土層断面 南西から
- PL. 33 縄文時代遺構外出土土器
 PL. 34 縄文時代遺構外出土土器
 弥生時代遺構外出土土器
 PL. 35 2・3・6号住居出土土器
 PL. 36 6・7・8・9号住居出土土器
 PL. 37 10・11・12・13・14・15号住居出土土器
 PL. 38 15・16・17・18・19・20号住居出土土器
 PL. 39 21・22号住居出土土器
 PL. 40 23号住居出土土器
 PL. 41 23・24号住居出土土器
 PL. 42 24・25・26・27・28・29・30号住居出土土器
 PL. 43 1・26号土坑、1号溝出土陶磁器類
 PL. 44 1・2・3・4・11・14・22・25号溝出土陶磁器類
 PL. 45 古代以降遺構外出土遺物
 PL. 46 縄文・弥生時代遺構外出土石器
 6・8・9・20・21・22号住居出土石製品類
 PL. 47 21・24・25号住居出土石製品類
 1・16号土坑出土石製品
 1号溝出土石製品
 PL. 48 古代以降遺構外出土石製品
 PL. 49 2・6・14・15・21・23・24・27号住居出土鉄製品類
 1号溝出土鉄製品
 16号土坑出土鉄・銅製品
 近世以降遺構外出土銅製品・古銭
- PL. 50 23号住居出土銅製容器
 PL. 51 23号住居出土銅製容器X線写真

第1章 調査の経緯・経過と方法

第1節 調査に至る経緯

北関東自動車道(伊勢崎～県境)建設に伴う伊勢崎インターチェンジから栃木県境までの17.7kmの発掘調査が開始されたのは平成12年度である。北関東自動車道(伊勢崎～県境)建設事業予定地の埋蔵文化財発掘調査が行われるまでには、平成7年から調査を開始した北関東自動車道(高崎～伊勢崎)の発掘調査事業を平成12年7月までに終了し、12月まで基礎整理作業を行うこととなっていた。平成12年6月、日本道路公団、群馬県土木部、群馬県教育委員会、財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団の4者による協議において、道路公団から橋梁下部工事等の工事優先区間等の一部について、平成12年8月から発掘調査実施の要請があった。これを受けて当事業団は用地解決状況、残土置き場の確保、側道と本線の調査地区分の検討等、調査実施への準備を進めた。平成12年8

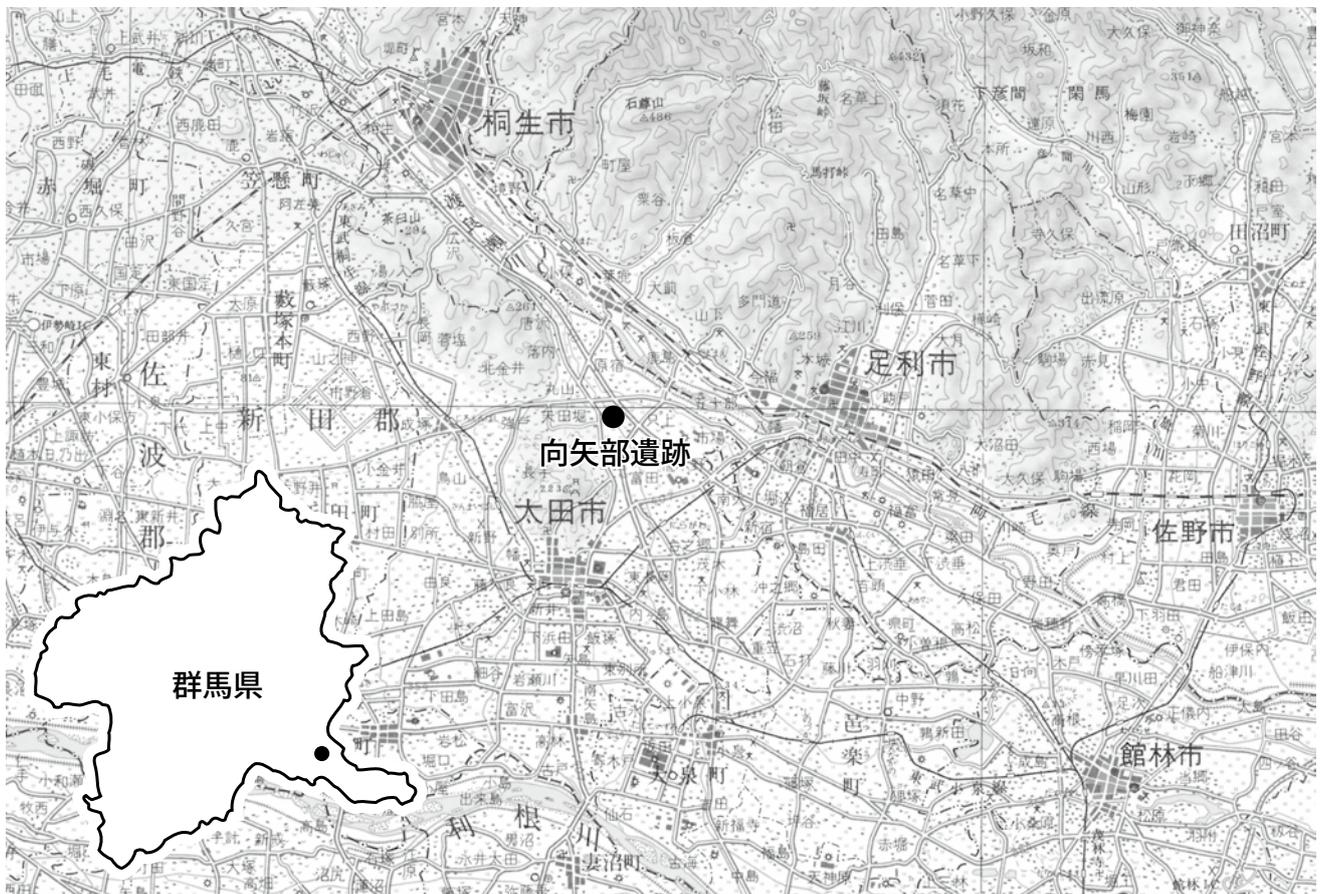
月1日、日本道路公団、群馬県教育委員会、当事業団の3者による「北関東自動車道(伊勢崎～県境)建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査に関する協定書」を締結し、また、協定書に基づく道路公団と当事業団による平成12年度発掘調査の契約が結ばれ、発掘調査は伊勢崎市書上遺跡から着手となった。

本遺跡の発掘調査については、平成16年7月から実施し、平成17年3月に調査を終了した。

第2節 調査の方法と経過

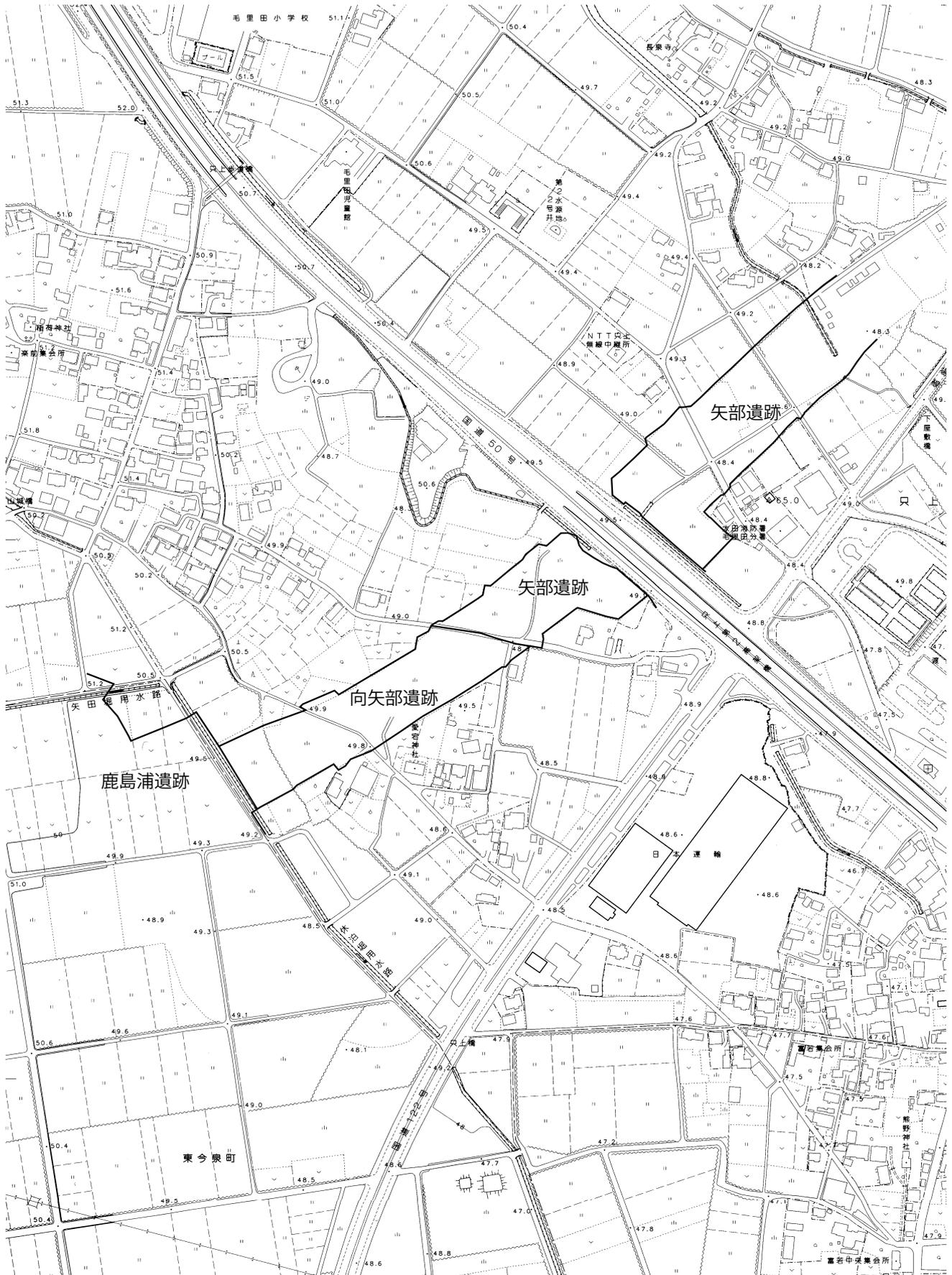
1 調査の方法

向矢部遺跡の調査対象地内は、道水路によって各調査区を区分したため、一部の調査区は入り組む形となっている。調査対象地(路線)は南西から北東に延び、各調査



第1図 遺跡位置図(国土地理院 地勢図1:200,000「宇都宮」(平成16年8月1日発行)使用)

第1章 調査の経緯・経過と方法



第2図 調査区および隣接遺跡位置図

(この地図の作成にあたっては、太田市長の承認を得て、同市発行の2,500万分の1の地形図を使用し、複製したものである。)

区は鹿島浦遺跡(太田インターチェンジ)に隣接する南西端側から順に設定され、1区は南西端の一段低い低地部、2区は南西斜面となる台地上、続く3～6区は台地の北東斜面となり、6区の北東端は矢部遺跡に接する。なお、2区の一部に未買地が存在したため、協議の上で調査を行った。

調査に用いたグリッドは、5m×5mを基本とした。グリッドの呼称は、本遺跡特有の名称を設定せずに、国家座標IX系(旧日本測地系)を用い、X・Y座標の下3桁をそれに当てて表記することとし(X=36.480、Y=-39.350の場合、480-350)、その南東隅のポイント座標をグリッド名とした。さらに、地点を細かく表示する場合は、この下3桁の数字をそのまま用いた(例：5mないし10mにこだわらず、1m単位で481-352と表している)。

予想される遺構が、住居や土坑、溝等であったため、調査方法に特殊なものではなく、ごく標準的な方法を用いた。その概略は以下の通りである。

表土除去は、基本的に重機を用いた。表土除去終了後は、ジョレンを用いて遺構確認を行い、確認できた遺構について調査を行った。遺構の種類には、住居、掘立柱建物のほか、土坑、井戸、溝、ピット、柱穴列であり、住居は土層観察のための十字のベルトおよびカマド観察用のベルトを設定し、土坑は半裁して土層観察を行う等、それぞれに適した方法を用いた。数の多いピットについては、先ず半裁し、遺構と判断されたものに限って記録することとし、土層も類別して注記した。遺構名は、調査区にかかわらず、遺構の種類毎に通し番号で表した。遺構の測量は、平面図・断面図共に作業員による手実測を主としたが、調査期間の短縮を図るため一部は測量業者に委託して行った。縮尺は、1/10、1/20、1/40を基本とし、それぞれの遺構の性格に合わせて適宜使用した。写真撮影は、6×7白黒、35mm白黒、35mmカラーリバーサルの3種類を基本とした。調査区的全景写真は、調査の進展にあわせて業者委託し、ラジコンヘリによる空中撮影を行った。

遺構の調査が終了した後、台地上におけるローム層の堆積が良好であったため、旧石器時代の試掘調査を行った。調査は、2×4mのトレンチを台地上の全域(面積の4%に相当)に設けて行ったが、遺構・遺物とも検出されなかった。

2 調査の経過

本調査は、平成16年7月1日から平成17年3月31までを発掘調査期間とし、工場跡地の産業廃棄物撤去といった準備作業の後、現地における調査を開始したのは7月5日からである。

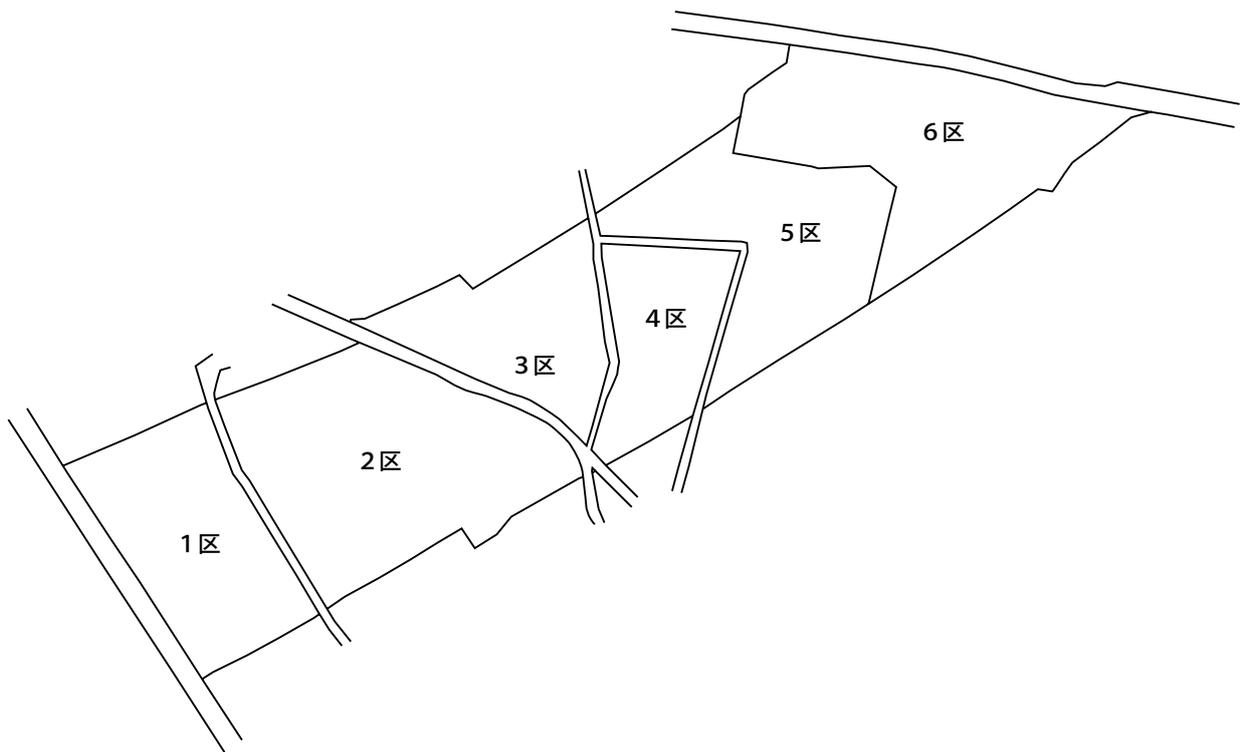
調査対象地内を大きく1区、2区、3～6区とし、未買地箇所の内容も考慮した結果、北東端の6区から3区までの南西側へ、順次調査を展開する予定で安全対策を講じながら表土掘削を開始した。同時に、3区から6区の南東側と北西側に試掘トレンチを設定し、土層の堆積状況および遺構の存在を確認しながら調査を進めさせた。なお、6区の東隅となる三角地については、後日の調査とした。

遺構確認作業は、5・6区の表土除去が終了した場所から開始し、7月20日からは遺構掘削作業に移った。特に、6区は工場の跡地であったために、工場の基礎等による攪乱が著しく、遺構の残存状況は極めて悪く、遺構確認にも時間を要した。また、中・近世以降と考えられたクランクする1号溝、南北に走向する2・3号の大溝の存在から、遺構掘削にもかなりの時間を要した。

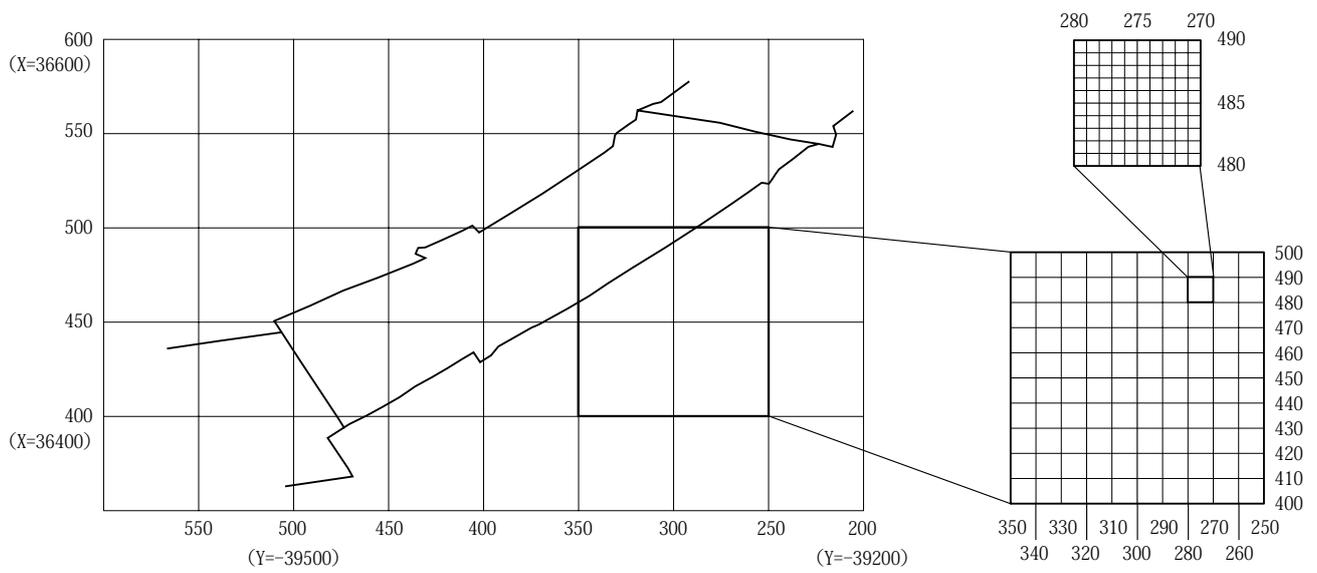
8月17日からは4区の遺構確認作業を開始し、その後5・6区から続く2号溝等の遺構掘削作業を行った。9月13日に調査当初からの担当であった黒澤弘昭が、田村博と交代となった。また、3区の遺構確認作業を開始したのも同日からである。

10月6日には連日の大雨、同月20日には台風により、相次いで調査区内が冠水し、調査の進行の妨げとなったが、その間の10月14日に4～6区を対象にラジコンヘリによる空中写真撮影を行った。同月22日には6区の未調査部分であった東端の三角地の表土掘削を開始し、表土除去後に遺構確認および遺構掘削作業を行った。

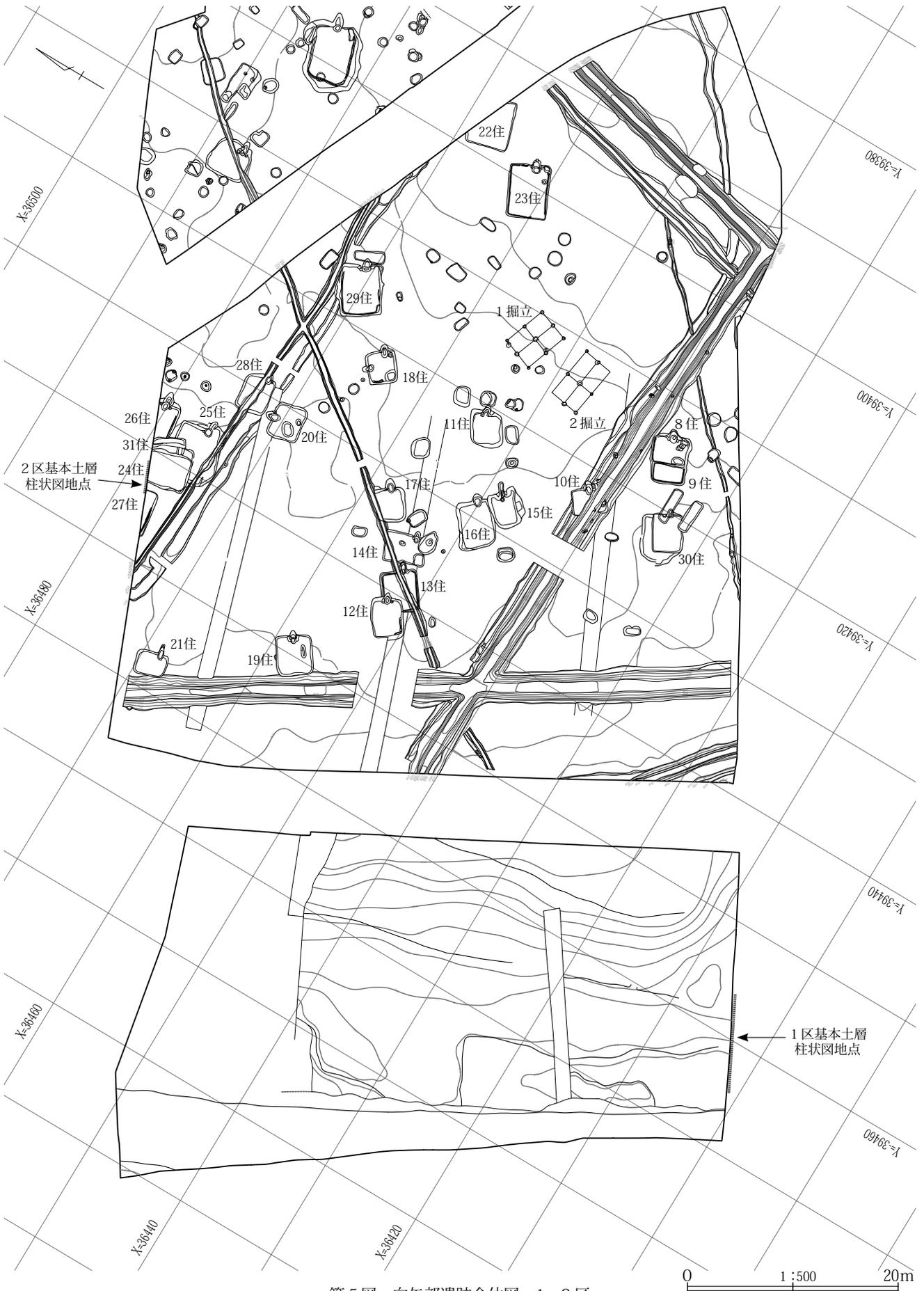
本調査の後半に予定していた1・2区調査の前段として、10月27日より1・2区の試掘調査を開始する。試掘調査に当たっては、1・2区間の水路に鉄板を敷設し、トレンチを設定した上で3日間の予定で行った。試掘の結果、一段低い1区では、薄くAs-B軽石が残存していると共に、その直下に水田耕土が存在することが判明した。台地上の南西斜面となる2区では、住居や土坑、溝等の遺構の存在が確認された。この試掘結果から、2区



第3図 調査区設定図



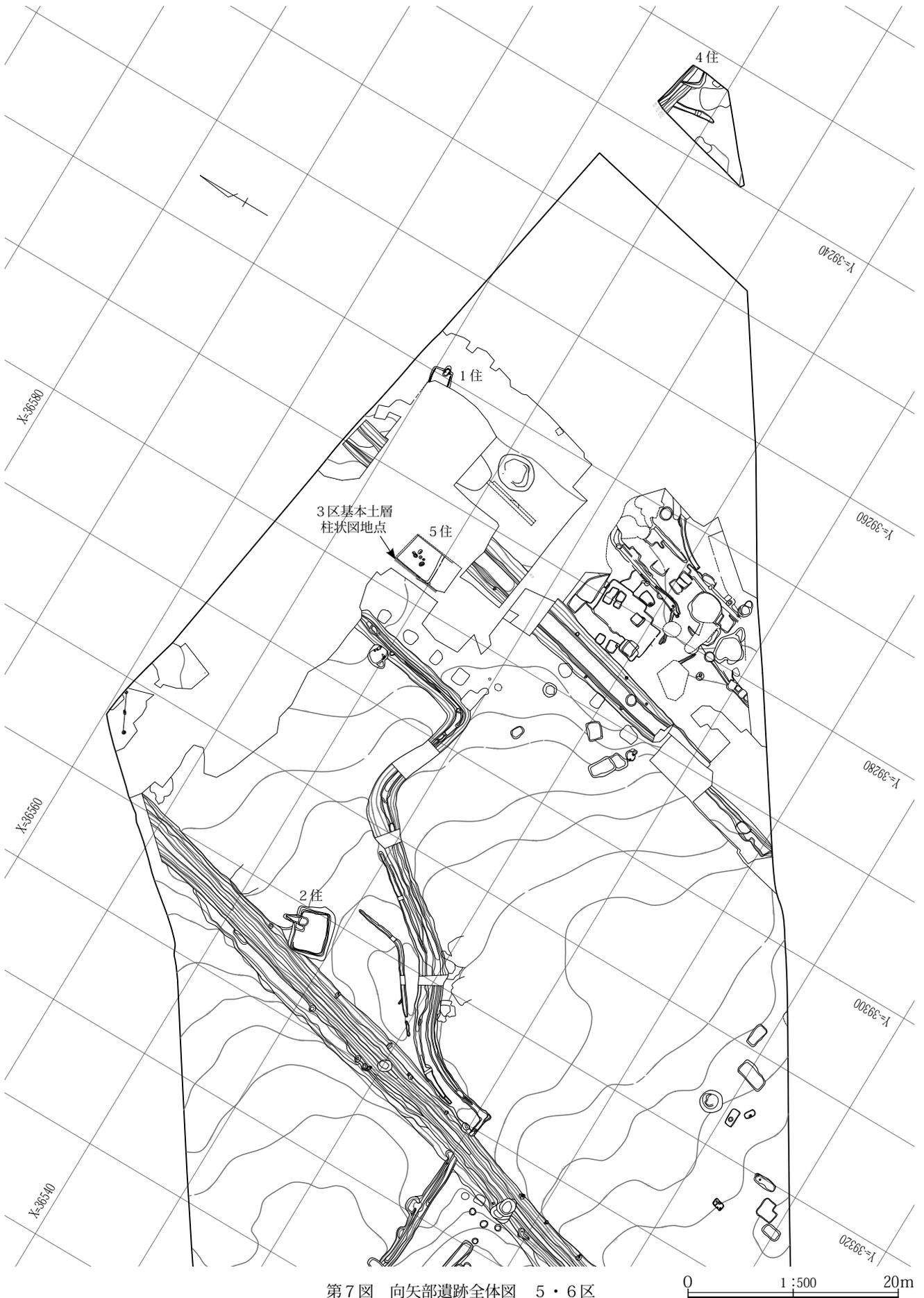
第4図 グリッド設定図



第5図 向矢部遺跡全体図 1・2区



第6図 向矢部遺跡全体図 3～5区



第7図 向矢部遺跡全体図 5・6区

の一部に存在する未買地箇所の調査について協議が図られた。

11月4日より、ローム層上面までの調査が終了した6区から旧石器時代の試掘調査を開始した。同月11日には、3・4区を対象にラジコンヘリによる空中写真撮影を行う。同月24日から1区の表土掘削を開始し、12月7日より遺構確認作業に入った結果、予測されたAs-B下水田が検出されるに至った。

一方、調査が進行していく中で、埋め戻しを開始したのは12月13日からで、全ての調査が終了した6区から、順次3区までの間を継続させた。

12月20日より2区の表土掘削を開始し、遺構確認作業に入ったのは、1区の水田調査を終了した1月13日からである。なお、12月22日を年末の現地作業終了日とし、明けて1月7日より現地作業を再開した。

1月14日に1区を対象にラジコンヘリによる空中写真撮影を行い、2月23日には2区を対象に空中写真撮影を行った。2区の旧石器時代の試掘調査を開始したのは3月10日からで、旧石器時代の遺構・遺物が検出されることなく、同月18日には調査を終了した。その後、1・2区の埋め戻しを開始し、現地における発掘調査の全ての作業を終了したのは3月28日である。

第3節 基本土層

本遺跡の地形は、調査区の南西端となる1区は一段低い低地部で調査前は水田、2区は南西斜面となる台地上で調査前は畑、続く3～6区は台地の北東斜面となり調査前は畑・宅地として利用されていた。このため、各調査記によって多少の差が見られる。ここでは、南西端の1区、台地上南西斜面の2区、台地上の3区、北東斜面の6区における遺構確認面までの土層を確認する。

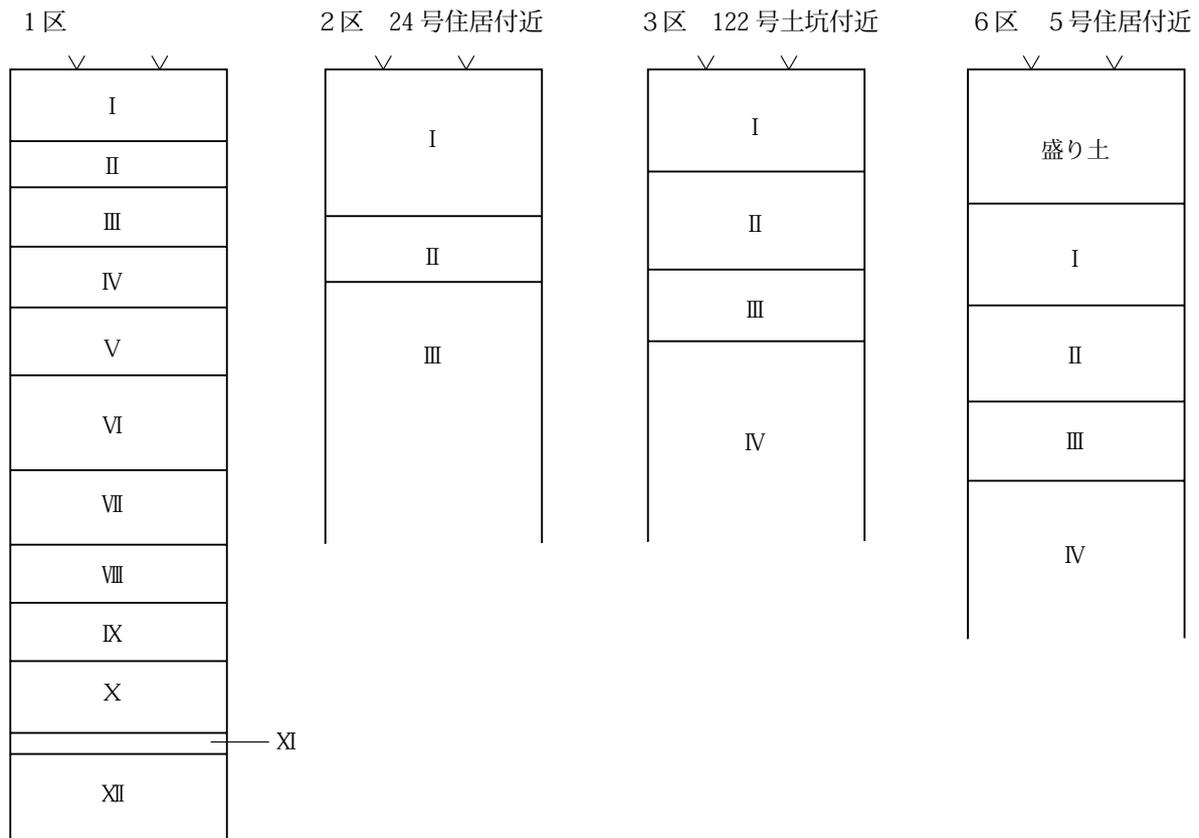
1区では、表土に現在の水田耕作土および鉄分沈着層となるI・II層が覆い、III・IV層の灰黄褐色土、V層の鈍い褐色土、VI層の褐灰色土、VII層の暗褐色土が堆積し、III～VII層は共にシルト質で、IV～VI層の下部には鉄分の沈着および沈着層が見られ、水田の耕地であったことが窺える。さらに、VIII層のシルト質な暗褐色土、IX層においてはシルト質な黒褐色土と砂層・橙灰色粘土層が薄く

互層となって堆積している。このIX層の堆積のあり方は、洪水等に起因した水性堆積の状況が想定される。そしてX層のAs-B混土層となる暗褐色土が堆積し、XI層として浅間山を給源とする1008年降下のAs-B軽石層(純層)が0.5～1cm前後と薄く堆積しており、その下面はAs-B下水田面となりシルト質の粘性の強い黒色土でXII層となる。

2区の24号住居付近では、I層に表土(耕作土)となる暗褐色土が厚く堆積し、その下はII層の黄褐色土がローム漸移層となり、以下がローム土となる。

3区の122号土坑付近では、I層に表土(耕作土)となる暗褐色土があり、II層に暗褐色土の混入物のあまり見られない層が堆積する。ただし、この層は台地全体に確認することはできず、2区ではみられない。そして、III層の黄褐色土がローム漸移層となり、この層以下がローム土となる。

6区の5号住居付近では、上層に工場跡地の攪乱土・盛り土があり、その下に旧耕作土(旧表土)となる白色軽石粒をやや多く含む砂質なI層の暗褐色土があり、II層として遺物包含層で白色軽石粒をやや多く含む黒褐色土が堆積する。この層は、先の3区122号土坑付近のII層に対応する土層と思われる。そして、III層の黄褐色土がローム漸移層となり、この層以下がローム土となる。



1区

- I 褐灰色土 表土（現在の水田耕土）。粘性が強い。
- II 鈍い赤褐色土 シルト質で、粘性あり。鉄分の沈着が強い。
- III 灰黄褐色土 シルト質で、粘性あり。
- IV 灰黄褐色土 シルト質で、粘性あり。3層より鉄分の沈着が多くみられる。
- V 鈍い褐色土 シルト質で、粘性あり。下部に鉄分の沈着が強い。
- VI 褐灰色土 シルト質で、粘性が強い。下面に薄く鉄分の沈着層がみられる。
- VII 暗褐色土 シルト質で、粘性あり。やや黒味が強い。
- VIII 暗褐色土 シルト質で、砂質。やや粘性あり。
- IX 黒褐色土 シルト質で、黒褐色土を主とし、砂層・橙灰色粘土層が薄く互層となる。
- X 暗褐色土 15層に近似するが、As-Bをより多く含み、下面にAs-Bの純層が堆積する。
- X I As-B層 浅間山を給源とする降下火山軽石。
- X II 黒色土 シルト質な粘性の強い水田耕土

2区 24号住居付近

- I 暗褐色土 表土（現代の耕作土）。
- II 暗黄褐色土 ローム漸移層。
- III 黄褐色土 ローム土で下位ほど硬く締まっている。

3区 122号土坑付近

- I 暗褐色土 表土。（耕作土）
- II 暗褐色土 混入物のあまり見られない堆積層。
- III 暗黄褐色土 ローム漸移層。
- IV 黄褐色土 ローム土で下位ほど硬く締まっている。

6区 5号住居付近

- I 暗褐色土 旧表土（旧耕作土）。白色軽石粒をやや多く含み、砂質。
- II 黒褐色土 土器片が出土する遺物包含層。白色軽石粒をやや多く含む。
- III 暗黄褐色土 ローム漸移層。
- IV 黄褐色土 ローム土で下位ほど硬く締まっている。

第8図 基本土層図

第2章 遺跡の地理的環境と歴史的環境

第1節 地理的環境

本遺跡のある太田市は、関東地方北西部に位置している。この地域は大別して、山地・火山地・丘陵地・台地および低地に分けられる。山地としては、南西に関東山地、北東に足尾山地が分布しており、火山地としては赤城山・榛名山がある。丘陵地は関東山地の北から東の前縁に低い山々が連続的に分布している。台地は丘陵地の下方に広がり、それらの台地を刻みながら利根川と支流の渡良瀬川が流れ、河川によって完新世に入ってから形成された沖積低地が広がっている。

太田市域を見ると、市の北東部に、この地域において最も顕著な地形である、八王子丘陵と金山丘陵が存在している。八王子丘陵は北西から南東方向にのびる分離丘陵で、長楕円形を呈している。長さ約7km、幅約2.8km、最高点は293.9mである。金山丘陵も平野に孤立する分離丘陵で、最高点は235.8mである。八王子丘陵の南東に位置し、現在はごく低い鞍部を境として離れているものの、かつては一続きだったと考えられている。いずれの丘陵も元々は足尾山地の延端部であったものに断層が生じ、さらに大間々扇状地を形成した渡良瀬川が約24,000年前ころから流路を東へ変えたことにより、現在の独立した丘陵になったとされている。

八王子・金山丘陵の西には大間々扇状地が存在している。大間々扇状地は、渡良瀬川の谷口、旧大間々町を扇頂とし、太田-伊勢崎を結ぶ線(標高50～55m)を扇端とする、南北約18km、扇端の幅約13kmの大規模な扇状地である。この扇状地は、大きく西半部の桐原面と東半部の藪塚面の新旧2面からなっている。桐原面は扇頂の旧大間々町桐原から伊勢崎市東部、旧境町にかけて発達する古期扇状地で、藪塚面とは比高4～6mの緩斜面状段丘崖で分けられ、境界部を早川が南下している。この面には厚さ2m以上の上部・中部ローム層が堆積している。藪塚面は大間々市街地から旧笠懸町、旧藪塚本町、旧新田町へと発達する新时期扇状地で、厚さ1m前後の上部ローム層に覆われる。

八王子・金山丘陵の東には渡良瀬川扇状地が存在し、

本遺跡はこの扇状地上に立地する。渡良瀬川扇状地は八王子・金山丘陵と足尾山地の間に広がる扇状地で、桐生市赤岩橋付近(標高120m)を扇頂部とし、太田市下小林から足利市御厨地区(標高30m)を扇端部とする、南北18km・東西7.5kmを測る大規模扇状地である。「太田市史通史編自然」によると、扇状地はⅠ～Ⅲ面に区分され、最古期のⅠ面が八王子丘陵から金山丘陵の東麓に沿って細長く分布し、その東側にⅡ面が、さらにその東、現河道側に扇状地Ⅲ面が広がる。その形成年代はⅠ面がAs-BP降下以前に遡り、Ⅱ面は洪積世末の再堆積ローム、Ⅲ面については完新世の所産とされている(1)。

この区分に従うと、当遺跡は扇状地Ⅱ面にあり、南西端および北東端は旧河道ならびに沖積低地の後背低地Ⅰに位置していることが解る。このため、1区の低地部位外となる2～6区にはロームが堆積し、そのローム下にも砂質層や礫層が存在していることが理解できる。

しかしながら、北関東自動車道関連の発掘調査の結果、降下テフラの堆積に齟齬が生じており、再検討の余地が生じている(2)。太田市八ヶ入遺跡(3)や東長岡戸井口遺跡(4)では暗色帯を切る洪積世の再堆積ローム、及び、その上面のAs-YPを確認しており、より複雑な地形発達が予想されることになり、図の修正が必要とされる。

八王子・金山丘陵以東の北関東自動車道関連の発掘調査では、西から、峯山・萩原・古氷条里制水田跡・二の宮・八ヶ入・大道西・大道東・楽前・鹿島浦・向矢部・矢部・只上深町・新島・道原の14遺跡、関連事業に伴い東今泉鹿島遺跡の発掘調査がなされている。先に刊行された『大道東遺跡(1)』(2009 群馬県埋蔵文化財調査事業団)では、八ヶ入遺跡での暗色帯以上のローム層が通常堆積した細石刃石器群の出土地点と、それより東の河川性再堆積ロームの堆積地点が存在したことから、渡良瀬川変流(東遷)に伴う侵食による地形であることを指摘し、東長岡戸井口遺跡例を挙げ同段階の台地が金山丘陵東縁に広がり、太田市竜舞地区の岩宿面に続く地形面であるとしている。また、沢口原図においては、扇状地Ⅰ面を大道西・大道東2遺跡の所在する東今泉の台地が該当するが詳細は明らかでなく、太田市史通史編の図1-24の3地

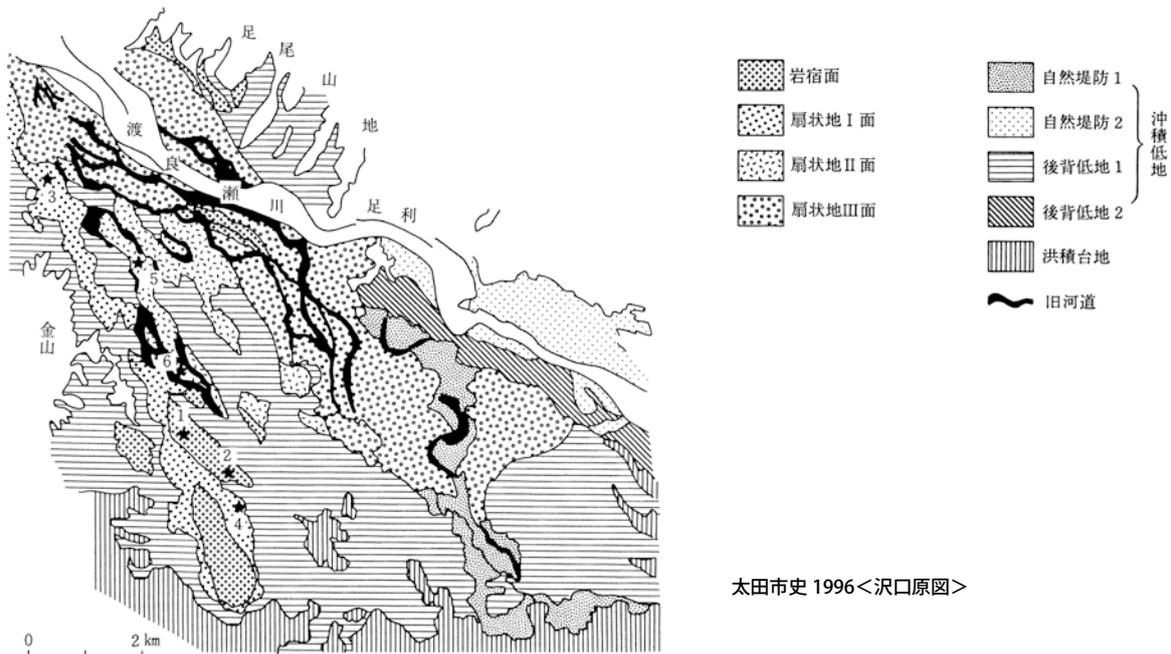
点ではAs-BPの堆積が確認されている点、扇状地Ⅱ面は矢部遺跡以西が該当する点、扇状地Ⅲ面では縄文から古代の集落が発見されている点を挙げ、渡良瀬川の東遷には途中時期に矢場川付近を流れる段階があり、扇状地Ⅲ面が細分される可能性が高いことを示唆し、加えて金山丘陵末端の台地縁辺(古氷条里制水田跡・八ヶ入)を除く東今泉の台地の一部に、従来の地形区分を見直す必要が生じていることを報告している。

しかし、当遺跡が扇状地Ⅱ面にあるということは変わらないと考えられる。今後、これらの発掘調査成果を総

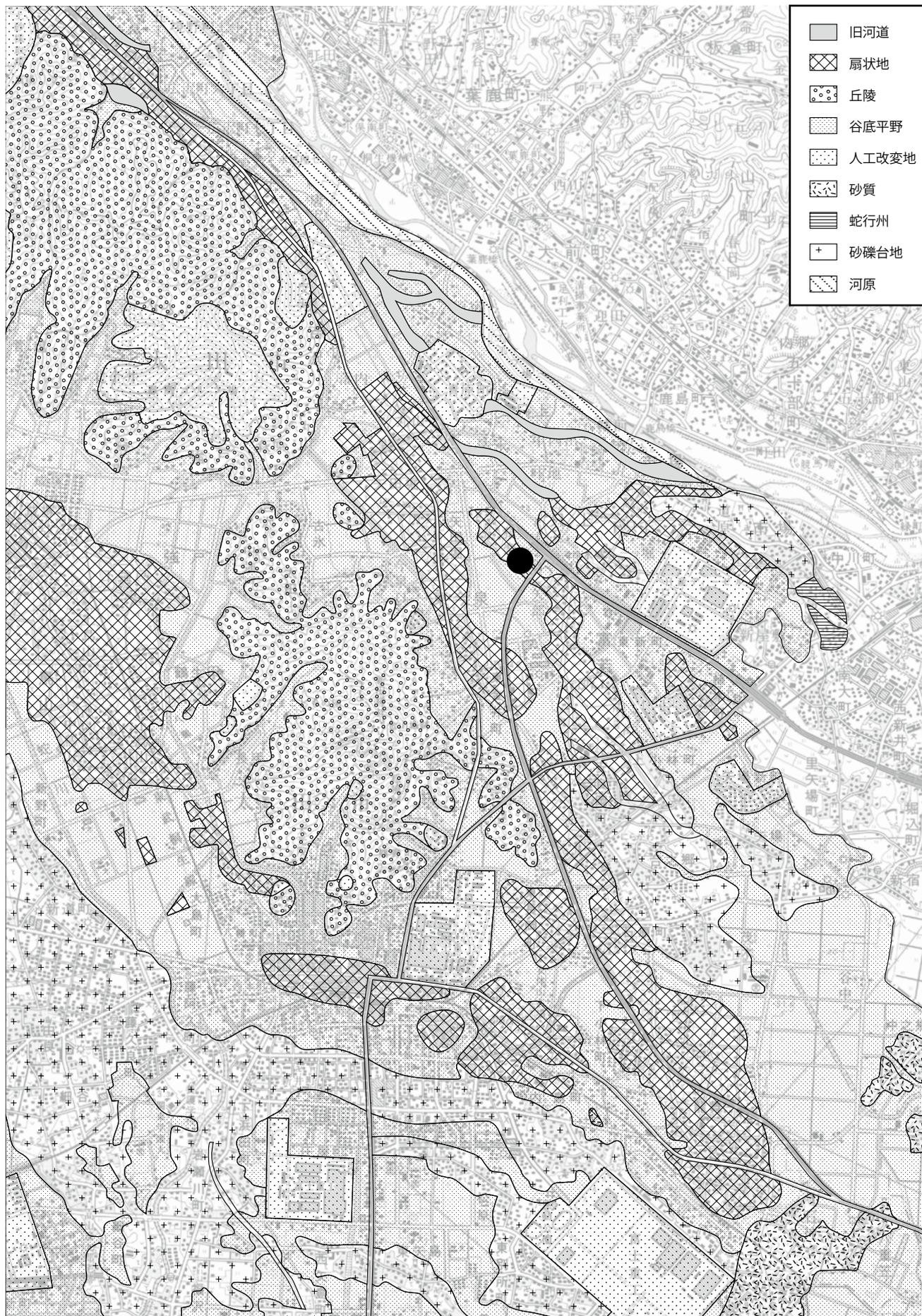
合することにより、この地域における扇状地の地形発達の詳細が判明し、地域発達の様相解明が期待できると考えられる。

註

- (1) 澤口 宏 1997 「第6節 平野の地形・地質」『太田市史 通史編 自然』 太田市
- (2) 岩崎泰一 2009 「1 自然環境」『大道東遺跡(1)』群馬県埋蔵文化財調査事業団
- (3) 関口博幸 2009 『八ヶ入遺跡1』群馬県埋蔵文化財調査事業団
- (4) 木津明博 1999 『東長岡戸井口遺跡』群馬県埋蔵文化財調査事業団



第9図 渡良瀬川扇状地の地質区分



第10図 遺跡周辺地形分類図

第2節 歴史的環境

向矢部遺跡は、渡良瀬川中流右岸に位置し、渡良瀬川と八王子丘陵・金山丘陵に挟まれた渡良瀬川扇状地上に存在する。以下、当遺跡周辺の歴史的環境を、時代を追って述べることにする。

(1) 旧石器時代

渡良瀬川扇状地地域での旧石器時代の遺跡は少なく、石刃および石刃製ナイフ形石器を伴う石刃石器群が、東長岡戸井口遺跡から出土している。扇状地西端部に位置する八ヶ入遺跡からは、湧別技法による細石刃群が出土している。また、本遺跡の北に隣接する矢部遺跡2区からは、チャート製の剥片が出土している。

本遺跡からやや離れるが、扇状地の西側となる八王子・金山丘陵間の鞍部にあたる場所にも旧石器時代の遺跡が点在する。峯山遺跡では、チャート製の石器群と黒曜石製の切出形ナイフ形石器を組成する石器群との2つの文化層が確認されている。また、強戸口峯山遺跡では、硬質頁岩性の荒屋型彫刻刀形石器が採集されている。さらに、八王子丘陵の焼山遺跡も旧石器時代の遺跡として知られている。

渡良瀬川左岸においても旧石器時代の遺跡は少なく、平石遺跡からチャート製の石器が出土している程度である。

(2) 縄文時代

渡良瀬川流域の縄文期遺跡は、渡良瀬扇状地Ⅰ面に多く見られる。扇状地の地質区分に従えば、より新期の太田市東部域の扇状地表面には縄文遺跡は存在しないということになるが、この地域は地盤沈下が著しく、渡良瀬の氾濫層に厚く覆われ、その実態は不明である。

太田市域の縄文遺跡は八王子丘陵、及び、その周辺部台地、大間々扇状地Ⅱ面・由良台地等の台地縁辺部に多く立地している。渡良瀬川扇状地上では、金山丘陵東部北寄りの下宿遺跡に検出された草創期の土坑が最も古い遺構で、爪形文土器を出土している。

早期では、金山丘陵北東部の東今泉鹿島遺跡で押型文土器が、鹿島浦遺跡で押型文土器および野島式土器が、

矢部遺跡においても条痕文土器が出土している。

前期では、金山丘陵東部南寄りの細田遺跡と同南東部の下小林上遺跡および東長岡戸井口遺跡、北部丘陵沿いの二の宮遺跡で集落が、東今泉鹿島遺跡で土坑が検出されており、鹿島浦遺跡においても関山式・黒浜式・諸磯式土器が、楽前遺跡でも諸磯式土器が出土している。また、矢部遺跡では諸磯式土器が、渡良瀬川沿いに位置する道原遺跡では黒浜式・諸磯式土器が出土している。

中期前半の遺構検出例は少なく、東長岡戸井口遺跡のみである。鹿島浦遺跡や楽前遺跡、道原遺跡では、五領ケ台式・阿玉台式・勝坂式土器が出土している。

中期後半から後期初頭にかけての時期になると、金山丘陵北東部の大道東遺跡から楽前遺跡および鹿島浦遺跡にかけて数多くの住居や土坑等の遺構が検出され、大集落の体をなし、多量の遺物も出土している。また、東長岡戸井口遺跡でも同様である。さらに、道原遺跡からも加曾利E式期の集落が、矢部遺跡においては中期後半～後期初頭の土坑が検出されている。

後期前葉以降になると遺跡は減少し、堀之内式土器を出土させる遺跡には大道東遺跡、楽前遺跡、鹿島浦遺跡、矢部遺跡、道原遺跡がある。

晩期ではさらに減少し、楽前遺跡と道原遺跡に僅かに出土が見られるのみである。

渡良瀬川左岸では前期までの遺跡が多く、宿居館跡から撚糸文系の土器や前期の土坑が、平石遺跡からも撚糸文系土器を含む草創期から前期の遺物が出土しており、春日遺跡からは前期の集落が検出されている。しかし、中期以降の遺跡は少なく、遺構もほとんど検出されていない。

(3) 弥生時代

渡良瀬川流域における弥生時代の遺跡は極めて少ないとされ、金山丘陵北東部の小丸山遺跡で遺物の散布が認められるほか、同東部の磯之宮遺跡で中期の住居が検出されており、さらに東の渡良瀬川流域付近の八幡山・芋の森遺跡で中期の土器が確認されている程度である。しかし、金山丘陵や八王子丘陵周辺、沖積地内の低台地上においては、中期の遺跡・資料が増加してきている実態がある。本遺跡周辺においても、渡良瀬川沿いの道原遺

跡で中期、矢部遺跡で中期・後期の土器が出土しており、さらに大道東遺跡においても僅かではあるが後期の土器片が出土している。

渡良瀬川左岸でも弥生時代の遺跡は少なく、大前西山遺跡で遺物の散布が認められる程度である。

(4)古墳時代

古墳時代前期になると、八王子・金山丘陵西部において遺跡の分布が急激に増加する。渡良瀬川扇状地上では多くはないが、集落は八王子丘陵南東部の丸山北遺跡で確認されているほか、金山丘陵東部にやや離れて位置する磯之宮・矢場向・駒形・駒形南遺跡や、南東部にやや離れて位置する下小林上遺跡で検出されている。他に東今泉鹿島遺跡で前期末から中期初頭にかけての集落がみられ、竪穴住居11軒がまとまって検出されている。他の遺構としては、古水条里制水田跡で前期の土器が多量に出土した溝が検出されている。墳墓においては、古墳として金山丘陵東部に前方後円墳で全長80mの矢場薬師塚古墳、同じく前方後方墳で全長117.8mの藤本観音山古墳が、周溝墓には渡良瀬川沿いの道原遺跡や金山丘陵南東部の細田遺跡で方形周溝墓が見られる。しかし、全体的に遺跡数は少なく、丘陵の西部とは大きく異なっている。渡良瀬川左岸では前期の遺跡はさらに少なく、春日遺跡で方形周溝墓が検出されている以外は、確実に前期と断定できる遺構のある遺跡はほとんどない。

中期以降、遺跡は次第に増加する傾向にあり、後期になると集落が増加するだけでなく、古墳も多く存在、さらには須恵器窯等の生産遺跡が見られるようになる。

中期の集落は前述の東今泉鹿島遺跡や八ヶ入遺跡など、金山丘陵北東部地域や、丘陵東部のやや離れた位置にある、旧太田工業高校北裏遺跡や前期から続く駒形遺跡・矢場遺跡、丹羽倉遺跡等で住居や遺物が検出されている。中期の古墳は少なく、丘陵南東部に天神山・女体山古墳がある。他に中期とわかる古墳は、円墳で径60mの上小林稲荷山古墳があり、金山丘陵東部からやや離れて位置する。

後期の集落は、金山丘陵北東部の大道東および柴前付近に100軒以上住居が集中しており、金山丘陵で開始された須恵器等の生産との関連が窺える。他に八王子丘陵

南東裾部、金山丘陵南東部等で見られるが、遺跡数は少なく、検出住居数も多くない。渡良瀬川左岸地域においても同様である。

古墳は、群集墳が多く築造されるようになり、中期以前に比べ数が圧倒的に増えている。分布が多いのは、金山丘陵北東部から八王子丘陵南東部にかけての地域や、金山丘陵南東部、金山丘陵南西部、金山丘陵から東にやや離れた矢場川流域等であり、渡良瀬川左岸にも多くの古墳群が存在している。金山丘陵北東部では、亀山京塚古墳、家型石棺を有する今泉口八幡山古墳、菅ノ沢御廟古墳、東毛地域唯一の終末期方墳である巖穴山古墳等が集中しており、この時期この地域の中心的な場所であったことが窺え、金山丘陵の窯跡群との関連も考えられる。金山丘陵南東部では、丘陵の裾に沿って金井口古墳群、亀山古墳群、内並木古墳群、馬塚古墳群、寺ヶ入古墳群、東山古墳群とほぼ間断なく続き、やや東に離れて焼山古墳群もある。矢場川流域には、かつて90基が存在したとされる矢場川古墳群があり、前期前方後方墳である藤本観音山古墳や、前期前方後円墳の矢場薬師塚古墳、後期前方後円墳である勢至堂裏古墳、淵ノ上古墳等もこれに含まれている。渡良瀬川左岸では、足利市街地北の丘陵部に物見古墳群、東山古墳群、西宮西古墳群、吾妻古墳群、立岩古墳群、足利公園古墳群等が存在している。

生産遺跡は、金山丘陵北東部を中心に検出されている。菅ノ沢遺跡、八幡窯跡群、辻小屋窯跡群、亀山須恵器窯跡等、須恵器窯が40基以上確認されており、この時期の一大生産地であったといえよう。操業開始時期は、表採資料等から6世紀前半まで遡ると考えられるが、大規模に生産されるようになるのは6世紀中ごろ以降で、7世紀前半までの間に丘陵東裾から北裾にかけて集中して30基ほど存在している。7世紀末から8世紀初頭になると、丘陵西側に移動して操業しており、この時期に大きく窯場が移動している。

(5)奈良・平安時代

この時期になると、集落は広範囲で見られるようになる。金山丘陵北東部では、古墳時代後期に柴前、大道東遺跡に限られていた集落が大きく広がり、二の宮、八ヶ入、大道西、東今泉鹿島、鹿島浦、猿楽、向矢部、矢部の各

遺跡から、多数の住居が検出されている。他の地域も、基本的には古墳時代後期の集落からさらに広がっている状況で、金山・八王子丘陵と渡良瀬川間の大部分で集落が見られるようになってきている。これに対し、渡良瀬川左岸ではこの時代の集落も少なく、宇津木遺跡で竪穴住居が検出されている程度である。

北関東自動車道関連の八ヶ入、大道西、大道東、鹿島浦の各遺跡からは、道路遺構が検出されている。幅約13mで両側に側溝をもち、4遺跡間の約1kmをほぼ直線で結んでいる。上野国内での東山道駅路は、現在の碓氷峠のあたりから安中を抜け、国府推定地である前橋市元総社町付近まで直線的に進むルート(国府ルート)が推定されているが、東部では東西に直線的に延びる古代道路2本が発掘調査により確認されている。その内、南側の道路遺構は、「牛堀・矢ノ原ルート」と呼ばれており、幅約13mの規模を持ち、7世紀後半～8世紀代のもと考えられている道路で、西部の高崎市や玉村町で検出されている道路につながるとされ、東山道駅路であると推定されている。北側の道路遺構は、幅約12mで、「下新田ルート」呼ばれ、延長上に佐位郡家である伊勢崎市三軒屋遺跡と新田郡家である天良七道遺跡があるため、郡家同士をつなぐ伝路であるという説や、牛堀・矢ノ原ルートが廃絶された後の東山道駅路であるという説などがある。北関東自動車道で検出された道路遺構は、規模や位置から牛堀・矢ノ原ルートになる可能性が高い。これまでに確認されている金山丘陵以西のルートは、東西方向やや北向きの走向であるが、金山丘陵以東のルートは、やや南向きの走向になっており、丘陵を境に走向が変わっている。

寺院・官衙については、金山丘陵北西の寺井・天良地区から小金井・市野井にかけての地域に、古代寺院や地方官衙跡に比定される遺跡が多く存在している。この地域は、『和名抄』によれば、「新田郡」に属すと考えられ、新田郡の郡家と推定される天良七堂遺跡や、寺院跡では8世紀中葉の小規模寺院である釣堂遺跡や、7世紀後半の創建と推定される寺井廃寺がある。この天良七堂遺跡については、これまでに幾度かの調査が行われている。昭和30年の調査では、南北16m、東西7mの6間×3間の南北棟大型総柱礎石建物跡が検出され、付近から炭化米が多数出土しており、この大型総柱礎石建物跡が新田

郡家正倉院を形成する倉庫群の内の一棟と考えられ、この遺跡が新田郡家の位置である可能性が指摘された。平成19年の調査では、一辺が50m前後に及ぶ長大な掘立柱建物跡を西で3棟、東と北で2棟ずつ、南に1棟の計8棟が確認され、掘立柱建物跡に取り付く柵列から一辺が100m前後の逆台形ないし方形の規模であることが判明した。また、中央には礎石建物跡や、区画内部が石敷きであったことも確認され、建物の変遷から4回の立て替えが想定された。出土した土器から、7世紀後半から9世紀にかけてのものと考えられ、さらに確認された遺構は、『上野国交替実録帳』にみる新田郡庁の記述に合致する内容をもっている。天良七堂遺跡の調査は、その後も進められている。一方、当遺跡が位置する金山丘陵東部は「山田郡」に属すと考えられており、山田郡の郡家は金山丘陵北部の「古氷」の地であると推定されていることから、当遺跡周辺は山田郡の中心地域と考えられる。郡家の存在を裏付ける遺構・遺物が検出された遺跡はないが、北関東自動車道関連の遺跡である八ヶ入、大道西、大道東、楽前、鹿島浦、矢部の各遺跡からは、三彩陶器片・軒丸瓦片・円面硯・獣脚円面硯・漆紙文書といった遺物が出土していることから、近隣に寺院や官衙的施設の存在を窺わせる状況がみられる。

生産遺跡については、金山丘陵において、前代に開始された須恵器生産が引き続き行われている。前述のように、7世紀末から8世紀初頭に丘陵西側に窯場が移動していると考えられているが、金山丘陵の北にある八王子丘陵南東部でも須恵器の生産が行われるようになり、丸山北窯跡などで須恵器が焼成されている。また、丸山腰巻遺跡では、丘陵ではなく台地を利用して構築された須恵器窯が検出されている。そして、峯山遺跡の北側には、寺井廃寺に供給したと考えられている萩原瓦窯がある。

さらにこの時期には、鉄生産も開始される。場所は少し離れるが、太田市旧藪塚本町域にある西野原遺跡では、7世紀後半～末に操業されたと考えられる大規模な製鉄遺構群(製鉄炉(箱形炉)、排滓場、竪穴状遺構、粘土採掘坑、鍛冶遺構等)が検出されており、金山丘陵北端部の峯山遺跡からも8世紀初頭の製鉄炉(箱形炉)、鍛冶遺構が検出されている。また、9世紀の竪形炉として著名な金山丘陵北東部の菅ノ沢I遺跡、さらに北西部の高太郎I・II遺跡等で製鉄炉(竪形炉)や炭窯が、寺中遺跡で

は鍛冶遺構が検出されている。また、渡良瀬川左岸でも春日遺跡から、鑄造炉の可能性のある炉が検出されている。

水田跡では、古氷条里制水田跡でAs-B下水田が確認されているが、畦畔が方形に走向しており、条里地割に乗っていると考えられている。水田の開削時期は奈良時代後半から平安時代前半と考えられており、この時期に条里地割が導入されたことが判明している。また、金山丘陵以西となる上強戸遺跡群、大鷲遺跡、成塚遺跡をはじめとした多くの遺跡で、As-B下水田が検出されている。

(6)中世以降

中世の城郭としては、金山城がある。これは金山丘陵上にある山城であり、文明元(1469)年岩松家純によって築城された。以後、享禄元(1528)には岩松氏の重臣横瀬氏へ(主君である岩松守純を追放して、自ら金山城主となった横瀬成繁は、「由良」の姓を名乗り、戦国大名由良氏による当地支配が、その後しばらく続く。)、さらに天正12(1584)には後北条氏へと城主が変わっており、その間東毛地区の中心的な城として重要な役割を果たしたが、天正18(1590)年に後北条氏が滅亡した後は廃城となった。その城域は広大で、山頂部に実城を置き、山頂部から延びる西尾根に西城を、北に延びる観音山に北城を、南の中八王子山には八王子山の砦を構える、複合的城郭である。山頂部の実城域に日の池・月の池の大池を持ち、石垣・石敷き通路・石組み排水路・石組み井戸など山城としては珍しい石組みの施設を有する。発掘調査は平成4(1992)年度から行われ、その結果を受けて史跡整備が行われている。

さらに、中世の城館跡については、金山城をはじめとして、萩原館跡、丸山の砦跡、矢田堀館跡、只上の砦跡、矢部城跡、国済寺城跡、市場城跡、狸ヶ入館跡、今泉城跡、東金井城跡、富田館跡、宗金寺環濠遺構、植木野城跡、本矢場城跡等が、金山丘陵北部から東部にかけて多く存在している。

北関東自動車道関連の発掘調査で中世以降の遺構の検出される遺跡については、八ヶ入、大道西、大道東、鹿島浦、矢部、道原の各遺跡があり、特に大道西遺跡では14・15世紀を中心とした掘立柱建物群が多数検出され、

複数の屋敷地の存在が確認されている。

渡良瀬川左岸地域には中世以降の遺跡が多く、宿居館跡、山下本郷館跡、大前堀之内館跡等の居館跡や、鹿島薬師廃寺、智光寺跡、緑町廃寺、連岱寺跡、宝幢寺跡等の寺院跡が分布している。



第11図 周辺遺跡位置図(国土地理院1:25,000地形図「上野境」「足利南部」「桐生」「足利北部」使用)

第2章 遺跡の地理的環境と歴史的環境

第1表 周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名	旧石器	集落・溝等○墳墓●生産跡□水田・畠■遺物のみ△													備考	文献			
			縄文						弥生		古墳			奈良	平安			中世	近世	
			草	早	前	中	後	晩	中	後	前	中	後							
1	向矢部遺跡				△	△	△		△					○	○	○	○	古墳後期～平安集落	32・33・34・35・50	
2	矢部遺跡			△	△	○	○		△	△					○	○		○	縄文中～後期土坑 奈良平安集落 漆紙文書出土	28・29・37・43・46・47・49
3	只上深町遺跡															○	■	■	平安集落・畠	29・46・47
4	新島遺跡													○	○		○	○	当該遺跡 奈良平安集落 古墳後期～平安畠	49
5	道原遺跡				△	○	△	△	△		●	■	●	○	○		○	○	縄文中期集落 古墳前期方形周溝墓 古墳 平安時代道路	46・47
6	国済寺城跡(道原城跡)															○			16世紀 堀 土居	60
7	市場古墳群												●						後期群集墳	1
8	八幡林遺跡									△									古墳遺物散布	44
9	市場城跡															○			二重堀、土居 16世紀	60
10	市場稲荷山古墳												●						後期円墳 径32m 6世紀前半	1
11	高瀬前原遺跡		△																縄文遺物散布	44
12	高瀬台遺跡		△																縄文遺物散布	44
13	源氏屋敷跡															○			源氏屋敷の字名 遺構不明	62・63
14	猿楽遺跡												●	○	○				後期古墳群 奈良平安集落	1・38・42
15	矢部城跡																○		16世紀 堀 土居 碑	60
16	只上の砦跡																○		16世紀 堀	60
17	七日市古墳群												●						古墳後期	44
18	丸山古墳群												●						6世紀末～7世紀前半前方後円墳 1基 円墳8基	1
19	流作場遺跡										○	○	●						古墳中後期集落 埴輪棺	1・22
20	吉祥寺遺跡																		時期不明ビット群	22
21	諏訪古墳												●						後期円墳	44
22	反丸遺跡											○	○	●					古墳後期集落 古墳 祭祀遺構	1・22・53
23	原宿川向遺跡										△								古墳遺物散布	44
24	落内遺跡													○	○				古墳後期・奈良集落	1・25
25	宮の上遺跡										△								古墳遺物散布	25
26	丸山北遺跡											○							古墳前期集落	24
27	丸山の砦跡																○		16世紀 腰郭 烽火台	60
28	丸山遺跡									△									弥生・古墳遺物散布	44
29	丸山腰巻遺跡													□	○				須恵窯1基	36
30	小丸山遺跡													△					縄文～平安遺物散布 瓦塔出土	1
31	二の宮遺跡				○										○	○			縄文前期集落 奈良平安集落	53
32	古氷条里制水田跡										○				■				As-B下水田	1・53
33	寺中遺跡															□			平安鍛冶遺構	1
34	寺前遺跡											○							古墳集落	16
35	上宿遺跡												○			○			古墳・平安集落	38
36	東田遺跡															○			平安集落	27
37	矢田堀前田遺跡																		時期不明土坑等	25
38	矢田堀館跡																○		16世紀 堀 土居 戸口	60
39	矢田堀古墳群												●						終末期群集墳	44
40	巖穴山古墳												●						1辺30m方墳 複式構造横穴式石室 7世紀中葉	1・21
41	大道西遺跡													○	○		○		東山道駅路 馬形埴輪出土	23・54
42	楽前遺跡				△	○	○	△						○	○	○			縄文中期～後期集落 古墳後期～平安集落	1・25・26・27・30・31・52
43	大道東遺跡					○	○		△					○	○	○	○		縄文中期～後期集落 古墳後期～平安集落 東山道駅路	1・55
44	鹿島浦遺跡			△		○	△							○	○		○		奈良平安集落 東山道駅路	56
45	東今泉鹿島遺跡			△	○					○			○		■				縄文前期土坑 古墳前期末～平安集落 漆紙文書出土	51
46	八ヶ入遺跡	△									○		○	○			○		古墳中期・奈良平安集落 東山道駅路	57
47	菅ノ沢Ⅱ遺跡											○							灰原 須恵器出土	21
48	菅ノ沢御廟古墳													●					直径30m円墳 横穴式石室	1
49	今泉口八幡山古墳													●					前方後円墳 横穴式石室 家形石棺 6世紀末～7世紀初	1・16
50	菅ノ沢古墳群													●					円墳5 7世紀	1・21

第2節 歴史的環境

51	八ヶ入窯跡													△				灰原 須恵器・鉄滓出土	44	
52	諏訪ヶ入遺跡													△				灰原 須恵器出土	44	
53	菅ノ沢Ⅰ遺跡													□	□			須恵窯、炭窯、製鉄炉、古墳	1・3・6・21	
54	菅ノ沢Ⅲ遺跡														□			生産遺跡	44	
55	川西遺跡													□				須恵窯	44	
56	八幡Ⅰ遺跡													□				須恵窯4基 灰原	20	
57	八幡Ⅳ遺跡													□				窯 灰原	20	
58	八幡Ⅱ遺跡													□				窯2基 灰原	20	
59	八幡Ⅴ遺跡													□	●			窯 灰原 円墳1基	20	
60	八幡Ⅲ遺跡														□			窯1基 灰原	20	
61	狸ヶ入Ⅱ遺跡													△				灰原 須恵器出土	44	
62	辻小屋遺跡													□				須恵窯4基	1	
63	辻小屋窯跡群													□				須恵窯4基	20	
64	大長谷遺跡														□			須恵窯	19	
65	狸ヶ入Ⅰ遺跡													□				窯1基	44	
66	狸ヶ入館跡																○	堀 土居 戸口	60	
67	今泉城跡																○	16世紀 堀 土居	60	
68	入宿Ⅱ遺跡													△				灰原	20	
69	入宿Ⅰ遺跡													△				灰原	20	
70	入宿Ⅲ遺跡													△				灰原 須恵器出土	20	
71	母衣埴輪窯跡													□				埴輪窯	1	
72	金井口埴輪窯跡													□				埴輪窯3基以上	1	
73	聖天沢遺跡													●			●	円墳 横穴式石室 中世墓	5	
74	丸屋敷の砦																○			
75	西山古墳群														●			終末期群集墳	1	
76	金井口古墳群													●					44	
77	東金井城跡																○	15・16世紀 堀 土居 戸口 腰郭	60	
78	亀山古墳群														●			後期群集墳	1	
79	亀山京塚古墳														●			後期円墳 陶棺 6世紀中	1	
80	亀山窯跡													□				須恵窯2基 灰原	1	
81	金井口遺跡	△												□	□			埴輪窯2基 製鉄窯1基	9	
82	宿裏遺跡													△			△	古墳・平安遺物散布	11	
83	下宿遺跡		○								○						○	○	縄文草創期土坑 古墳前期・平安集落 中世溝	10・12・13
84	正郷遺跡													△				古墳遺物散布	44	
85	富田館跡																○	16世紀 堀・土居・戸口	60	
86	堂目木遺跡																□	●	10世紀小鍛冶 中世火葬墓	26
87	宗金寺環濠遺構																	○	16世紀 2重の堀	60
88	相方遺跡																△	平安遺物散布地	1	
89	植木野城跡																	○	16世紀 堀・土居・戸口	44
90	駒形遺跡									○		○		○				古墳前期～中期集落	1・24	
91	磯之宮遺跡									○		○					○	弥生中期・古墳前期・平安集落	1・25	
92	上小林稲荷山古墳														●			中期円墳 径60m	1・25	
93	八坂神社古墳														●				44	
94	西浦遺跡										○						○	●	平安集落 中世墓坑	25
95	安良岡古墳群																●	後期群集墳	1	
96	塚本遺跡													○				古墳集落	41	
97	原店遺跡													△				古墳遺物散布	44	
98	塩ノ山遺跡														●			円墳1基	1	
99	焼山北遺跡 焼山北古墳	△	△												●	△		旧石器～古墳遺物包蔵地 後期円墳または帆立貝式古墳	1・2	
100	内並木古墳群																●	円墳3基現存	1	
101	内並木遺跡	△													△	△		旧石器包蔵地 灰原 須恵器出土	1	
102	馬塚古墳群																●	後期群集墳	1	
103	寺ヶ入遺跡 寺ヶ入古墳群																●	円墳約30基現存	1・14	
104	富士山古墳群														●				44	
105	東山古墳群																●	終末期群集墳	1	
106	金山城跡																	○	1469年築城 石垣・石敷き通路・石組み排水路・石組み井戸等	15・17・18
107	高山古墳																●	後期前方後円墳	1	
108	本陣跡																	○	礎石建物 土坑	39
109	宮内遺跡		△								○		○				○	古墳前期～後期・平安集落	40	
110	浜町古墳群																●	後期群集墳	1	
111	北田環濠遺構群																	○	堀、二つの環濠	60
112	焼山南遺跡 焼山古墳	△															●	△	旧石器～平安遺物包蔵地 後期前方後円墳	1・2

第2章 遺跡の地理的環境と歴史的環境

113	焼山古墳群																				前方後円墳1基(焼山古墳) 円墳6基以上	1・2
114	細田遺跡	△			○					●											旧石器包蔵地 古墳前期方形周溝墓 縄文前期・平安集落	7・8
115	伊豆ノ山遺跡	△																			旧石器包蔵地	1
116	安良岡遺跡									△											古墳遺物散布	44
117	星ノ宮遺跡									△											古墳遺物散布	44
118	東長岡戸井口遺跡	△	○	△	○	○	○							○	○						縄文・古墳中期～平安集落 中世館跡	48
119	東長岡I遺跡				△					△											縄文・古墳散布地	44
120	東長岡金井町遺跡		○							○				○							縄文土坑 古墳前期溝 奈良集落	1
121	旧太田工業高校北裏遺跡													○							古墳中期集落	4
122	満所遺跡									△											古墳遺物散布	44
123	新堀遺跡									△											古墳遺物散布	44
124	石原二ツ山古墳									●												44
125	雷遺跡		△																		縄文遺物包蔵地	59
126	大日山古墳													●							35×41mの円墳 礫椰 6世紀初	1
127	大日山古墳群									●												44
128	下小林館跡(大倉城)																			○	15・16世紀 堀・土居・戸口	60
129	下小林上遺跡				○					○											縄文前期・古墳前期集落	59
130	清水田遺跡				○					○				○							古墳～平安集落	1・58
131	清水田II遺跡													○	○						古墳～平安集落	1
132	登戸遺跡									△											古墳遺物散布	44
133	本矢場城跡																		○		堀・土居・戸口 16世紀	60
134	相場観音経塚																			●	一字一石経塚 江戸中期か	44
135	矢場寄合遺跡									△				○	△						古墳後期集落	1
136	稲荷宮遺跡																			○	平安集落	24
137	矢場氏累代の墓																			●	五輪塔・宝篋印塔等の墓石群 永禄5年等の銘あり	44・45
138	矢場向遺跡									○										○	古墳前期・平安集落	1・24
139	芋の森遺跡				△					△	△									△	縄文・弥生土器・土師器・須恵器散布	1
140	里矢場温井遺跡																		△		土師器・須恵器散布	1・62
141	駒形南遺跡									○				○	○						古墳前期・後期・奈良集落	1
142	里矢場上屋敷館跡																			○	中世館跡 土塁現存	62
143	丹波倉遺跡 杉原遺跡									△	△			△						△	古墳中期土師器出土	1・62
144	矢場川古墳群													●							約90基存在したか 現存数基	1・62
145	矢場薬師塚古墳									●											前期前方後円墳 全長80m 4世紀代か	1
146	鶴巻山古墳									●											前期前方後方墳 全長43m 4世紀後半	1
147	上宿古墳(勢至堂裏古墳)													●							前方後円墳 6世紀前半か 全長45m	1・68
148	淵ノ上古墳													●							後期前方後円墳 全長64m	1
149	矢場川城跡																			○	中世城郭 矢場国隆が築城か	62
150	新宮遺跡		△											△							土師器・須恵器・埴輪散布	62
151	藤本観音山古墳									●											前期前方後方墳 全長117.8m 4世紀中葉か	77
152	堀込新田遺跡																			△	土師器・須恵器散布	62
153	堀込宮前遺跡																			△	土師器散布	62
154	大将陣跡																			○	伝源義家陣跡 遺構・遺物なし	62
155	南大町遺跡									●				○	○						古墳後期・古代集落 古墳前期方形周溝遺構確認	1・62・76
156	南大町古墳群													●							現存なし 8基ほど存在したか	62
157	八幡山古墳群													●							円墳71基現存 直刀・金環・切子玉・埴輪等出土	62・75・78
158	八幡山遺跡				△					△											縄文・弥生土器散布	62
159	八幡八幡宮																			○	神社跡 江戸後期社殿現存 土塁	62・74
160	神宮寺跡																			○	八幡八幡宮の別当寺院 現在は廃寺	62
161	古河堤跡																			○	近世渡良瀬川堤防	62
162	水道山・足利公園古墳群													●							後期群集墳 16基以上存在か	64・65・66・67・68・78
163	緑町廃寺																			○	寺院跡 現在は宅地化	62
164	連岱寺跡																			○	中世寺院跡	62
165	足利公園遺跡				△																縄文土器・石器散布	62

第2節 歴史的環境

166	宝幢寺跡																		○	寺院跡 溝検出 近世瓦出土	62・65
167	立岩遺跡				△							△								縄文土器が主に散布	62
168	立岩古墳群																			円墳7基現存	62
169	吾妻古墳群																			円墳7基現存	62
170	東山古墳群																			円墳7基現存	62
171	物見古墳群																			円墳13基現存	62
172	中堀古墳群																			円墳1基現存	62
173	西山古墳群																			円墳1基現存	62
174	丹南藩五十部陣屋跡																		○	近世岡田家陣屋跡	62
175	中山古墳群																		●	円墳3基現存	62
176	離山遺跡				△															縄文土器散布	62
177	山前駅遺跡																		△	土師器散布	62
178	鹿島薬師廃寺																		○ ○	寺院跡 中世瓦・須恵器・板碑等出土	62
179	山下台遺跡																		△ △ △	土師器・中近世土器散布	62
180	山下本郷館跡																		○	中世館跡 堀・土塁現存	62
181	春日岡古墳群																		●	方墳1基・円墳7基現存	62
182	春日遺跡				○														● □ ○ ○	縄文前期集落・古墳・古代铸造炉等検出	70
183	山王遺跡				△														△ △ △	縄文・古墳～平安・中近世の遺物散布	62
184	智光寺跡																		○	中世寺院跡 基壇・礎石建物検出	71
185	平石遺跡	△	○																	縄文草創期～前期遺物出土 撚系文系土器多数	64・69・72・78
185	平石古墳群																		●	円墳3基現存	62
186	大平古墳群																		●	17基現存	62
187	宿居館跡				△	○	△	△	△										○ ○	縄文前期土坑・撚系文系土器 中世後半居館跡	73
188	宿古墳群																		●	円墳2基現存	62
189	大前堀之内館跡																		○	中世館跡 小此木備中守の居館か	79
190	東台遺跡				△														△	縄文土器・土師器・埴輪散布	62
191	台山遺跡				△															縄文土器散布	62
192	宇津木遺跡																		△ ○ ○	奈良平安集落 中世堀検出	66
193	大前西山遺跡				△														△	縄文・弥生土器散布	69
194	大前坂遺跡				△															縄文土器散布	62
195	上山古墳群																		●	3基現存	62

第2章 遺跡の地理的環境と歴史的環境

参考文献

1	太田市 1996 『太田市史 通史編 原始古代』
2	はにわの会 1968 『焼山遺跡総合調査報告』
3	日本考古学会 1970 『考古学雑誌』56巻3号
4	太田市教育委員会 1972 『太田工業高等学校 北裏遺跡発掘調査報告書』
5	太田市教育委員会 1972 『聖天沢遺跡調査報告書』
6	駒沢大学考古学研究会 1978 『菅ノ沢遺跡、巖穴山古墳調査概報』
7	太田市教育委員会 1978 『細田遺跡発掘調査概報』
8	太田市教育委員会 1979 『細田遺跡発掘調査略報Ⅱ』
9	太田市教育委員会 1979 『金井口遺跡発掘調査略報 —第2次調査—』
10	太田市教育委員会 1985 『下宿遺跡発掘調査概報』
11	太田市教育委員会 1986 『下宿遺跡—宿裏地区—』
12	太田市教育委員会 1987 『下宿遺跡E地点』
13	太田市教育委員会 1988 『下宿遺跡F地点』
14	太田市教育委員会 1992 『寺ヶ入遺跡発掘調査報告書Ⅰ・Ⅱ』
15	太田市教育委員会 1994 『金山城跡大手道発掘調査』H6年3月
16	太田市教育委員会 1997 『今泉口八幡山古墳発掘調査報告書』
17	太田市教育委員会 1997 『金山城跡・月ノ池』
18	太田市教育委員会 2001 『史跡金山城跡環境整備 報告書発掘調査編』
19	太田市教育委員会 2002 『長手谷遺跡群発掘調査報告書』
20	駒澤大学考古学研究室 2007 『群馬・金山丘陵遺跡群Ⅰ』
21	駒澤大学考古学研究室 2009 『群馬・金山丘陵遺跡群Ⅱ』
22	群馬県教育委員会 1983 『渡良瀬川流域遺跡群発掘調査概報』
23	群馬県教育委員会 1984 『渡良瀬川流域遺跡群発掘調査概報』
24	太田市教育委員会 1985 『渡良瀬川流域遺跡群発掘調査概報』
25	太田市教育委員会 1986 『渡良瀬川流域遺跡群発掘調査概報』
26	太田市教育委員会 1987 『渡良瀬川流域遺跡群発掘調査概報』
27	太田市教育委員会 1988 『渡良瀬川流域遺跡群発掘調査概報』
28	太田市教育委員会 1989 3月28日 『渡良瀬川流域遺跡群発掘 調査概報』
29	太田市教育委員会 1989 3月31日 『渡良瀬川流域遺跡群発掘 調査概報』
30	太田市教育委員会 1988 『渡良瀬川流域遺跡群発掘調査概報』
31	太田市教育委員会 1994 『渡良瀬川流域遺跡群発掘調査概報 —案前遺跡—』
32	太田市教育委員会 1996 『渡良瀬川流域遺跡群発掘調査概報 —向矢部遺跡(第Ⅱ次農政分)—』
33	太田市教育委員会 1996 『渡良瀬川流域遺跡群発掘調査概報 —向矢部遺跡(第Ⅱ次文化庁分)—』
34	太田市教育委員会 1997 『渡良瀬川流域遺跡群発掘調査概報 —向矢部遺跡(第Ⅲ次農政分)—』
35	太田市教育委員会 1997 『渡良瀬川流域遺跡群発掘調査概報 —向矢部遺跡(第Ⅲ次文化庁分)—』
36	太田市教育委員会 2000 『渡良瀬川流域遺跡群発掘調査概報 —丸山腰巻遺跡—』
37	太田市教育委員会 1993 『市内遺跡Ⅸ』
38	太田市教育委員会 1997 『市内遺跡ⅩⅢ』
39	太田市教育委員会 2003 『市内遺跡ⅩⅠⅩ』
40	太田市教育委員会 2005 『市内遺跡21(第Ⅱ次)』
41	太田市教育委員会 1992 『埋蔵文化財発掘調査年報2』
42	太田市教育委員会 1993 『埋蔵文化財発掘調査年報3』
43	太田市教育委員会 1994 『埋蔵文化財発掘調査年報4』
44	太田市教育委員会 2006 『太田市の遺跡地図』
45	太田市HP 太田の文化財 恵林寺矢場氏墓石群
46	(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 2006 『年報24』
47	(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 2007 『年報25』
48	(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1999 『東長岡戸井口遺跡』
49	(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 2006 『矢部遺跡・新島遺跡』
50	(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 2007 『向矢部遺跡』
51	(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 2007 『東今泉鹿島遺跡』
52	(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 2009 『案前遺跡(1)』 2010 『案前遺跡(2)』
53	(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 2009 『古氷条里水田跡二の宮遺跡』
54	(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 2010 『大道西遺跡』

55	(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 2009 『大道東遺跡(1)』 2010 『大道東遺跡(2)』 2010 『大道東遺跡(3)』
56	(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 2010 『鹿島浦遺跡』
57	(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 2010 『八ヶ入遺跡Ⅰ』 2010 『八ヶ入遺跡Ⅱ』
58	(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1985 『太田東部遺跡群』
59	(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1980 『庚塚・上・雷遺跡』
60	群馬県教育委員会 1989 『群馬県の中世城館跡』
61	群馬県文化財情報システムWEB版
62	足利市教育委員会 1988 『足利市遺跡地図』
63	足利市教育委員会 1989 『昭和62年度埋蔵文化財発掘調査年報』
64	足利市教育委員会 1992 『平成2年度埋蔵文化財発掘調査年報』
65	足利市教育委員会 1993 『平成3年度埋蔵文化財発掘調査年報』
66	足利市教育委員会 1994 『平成4年度埋蔵文化財発掘調査年報』
67	足利市教育委員会 1995 『平成5年度埋蔵文化財発掘調査年報』
68	足利市教育委員会 1996 『平成6年度埋蔵文化財発掘調査年報』
69	足利市教育委員会 1998 『平成8年度文化財保護年報』
70	足利市教育委員会 1977 『春日遺跡第1次発掘調査報告書』
71	足利市教育委員会 2000 『智光寺跡第2次発掘調査報告書』
72	毛野古文化研究所 1973 『平石遺跡』
73	足利市教育委員会 2001 『宿居館跡発掘調査報告書』
74	足利市教育委員会 1983 『八幡八幡宮土塁発掘調査報告書』
75	足利市教育委員会 1986 『八幡山古墳群山辺小学校裏 第4号墳発掘調査報告書』
76	足利市教育委員会 1999 『南大町遺跡第1次発掘調査報告書』
77	足利市教育委員会 2005 『藤本観音山古墳発掘調査報告書Ⅰ』
78	栃木県教育委員会 1981 『栃木県史 資料編 考古Ⅱ』
79	栃木県教育委員会 1982 『栃木県の中世城館跡』

第3章 検出された遺構と遺物

第1節 遺跡の概要

本調査で検出された遺構・遺物には、縄文時代中期後半の埋設土器が1箇所、奈良・平安時代(8世紀後半～9世紀)の竪穴住居が31軒、奈良時代以降の掘立柱建物2棟、柱穴列2列、土坑172基、井戸7基、ピット530基、溝26条、水田1面がある。これらの各種の遺構の中でも、水田はAs-B軽石下に検出された水田で、1区とした南西端の低地部からである。それ以外の遺構は、2～6区までの台地上に検出されたが、住居跡は2・3区に集中し、5・6区では希薄となる。土坑は2・3区および6区の東側に集中する。また、溝は中・近世に関わるものが主体となり、大溝は南北方向ないし東西方向に走向をとる。

本遺跡の南西約300mほどに、7世紀第3四半期から8世紀第1四半期とされる東西方向に延びる東山道駅路が位置し、集落が群在する。本遺跡での住居跡の構築がやや新しい傾向にあるものの、本遺跡がそうした周囲に群在する集落の一端であることは想像に難い。

第2節 旧石器時代の調査

本調査地内において、ローム層の堆積が良好であった2区から6区に至る台地上を対象として、旧石器時代の試掘調査を行った。

本遺跡周辺で旧石器時代の遺構・遺物を出土させた遺跡には、本遺跡の南西で金山丘陵の北東麓に位置する八ヶ入遺跡において、As-YP降下以前の細石刃石器群が検出されている。また、国道50号線を挟んだ矢部遺跡においても、ローム層中の礫層上面からチャート製の剥片が出土している。

1 試掘調査の結果

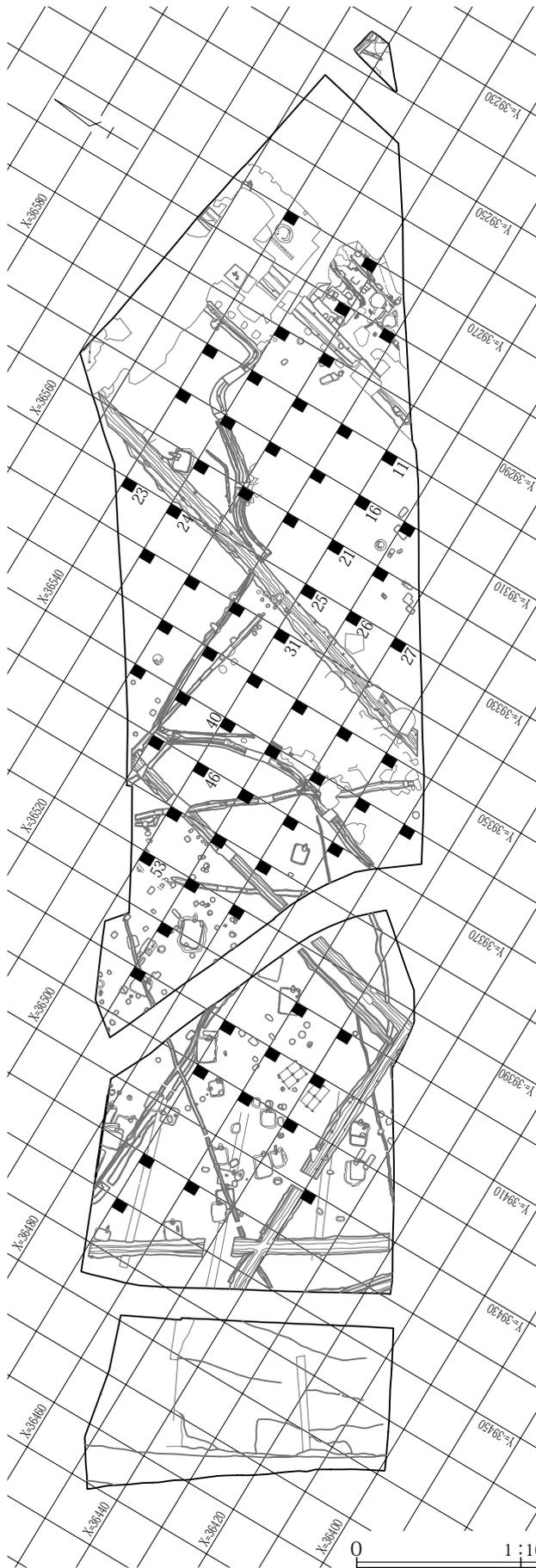
調査は、第12図に示すように、10×10mに対し、2×4mのトレンチを台地上の全域に69カ所設定して行った。

八ヶ入遺跡での細石刃石器群の検出例から、同等層位

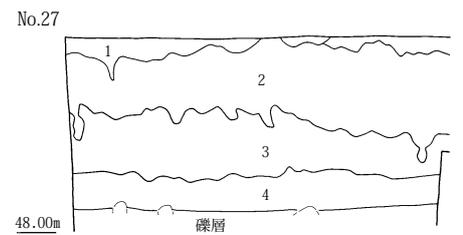
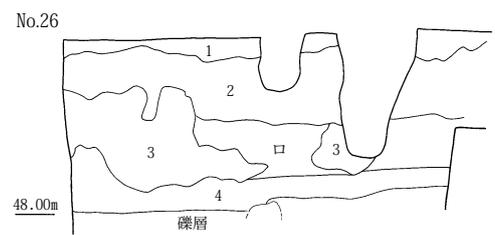
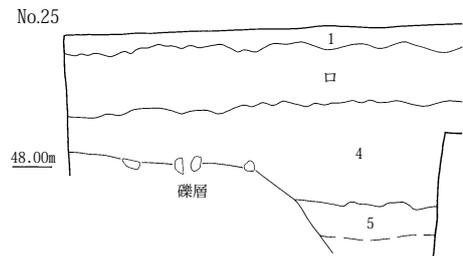
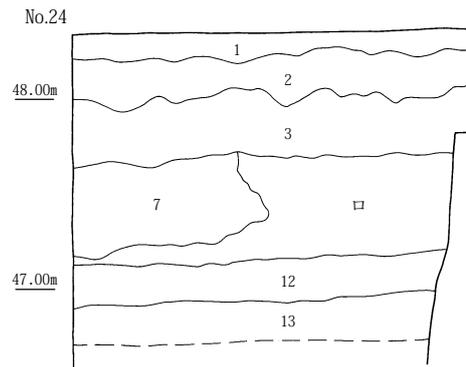
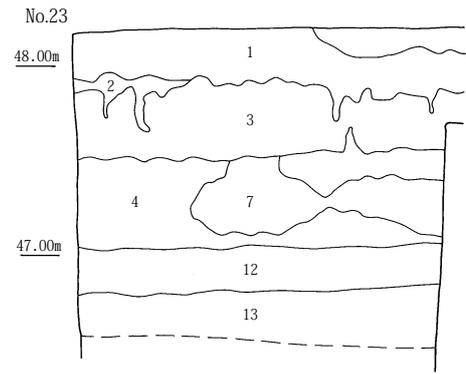
までは、特に念を入れて試掘に当たった。しかし、いずれの試掘トレンチからも、遺構・遺物は検出されなかった。

なお、ローム層中の記録は、南西斜面となる2区においては国家座標のX=36.460ラインに位置する試掘トレンチNo61・64・68、中央から北東斜面にかかる3～6区ではX=36.500ラインに位置するNo11・16・21・25・31・34・40・46・50・53、Y=-39.330ラインに位置するNo23・24・25・26・27の各試掘トレンチで作成した。

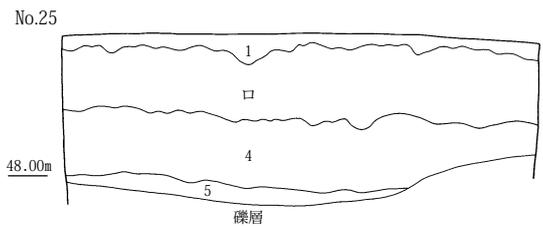
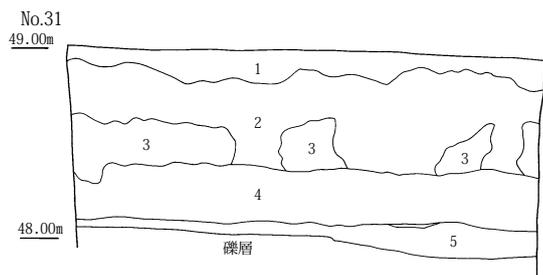
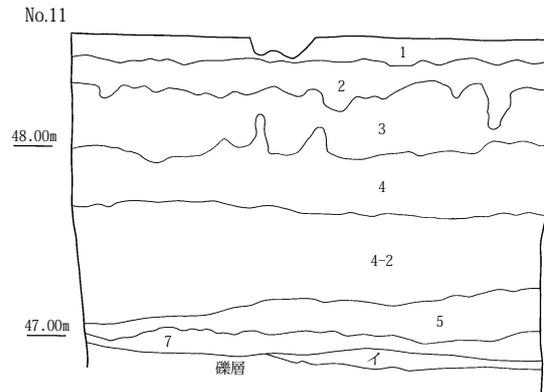
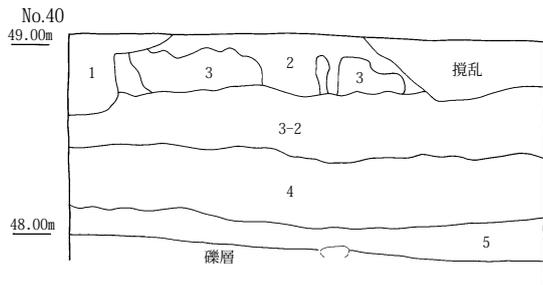
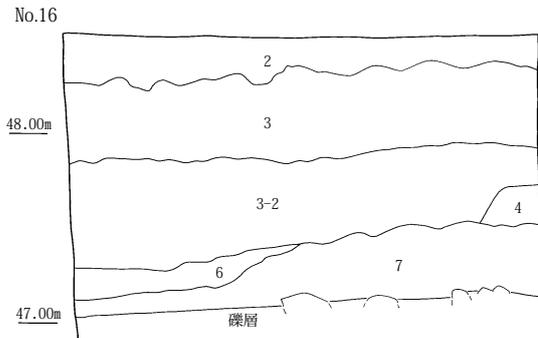
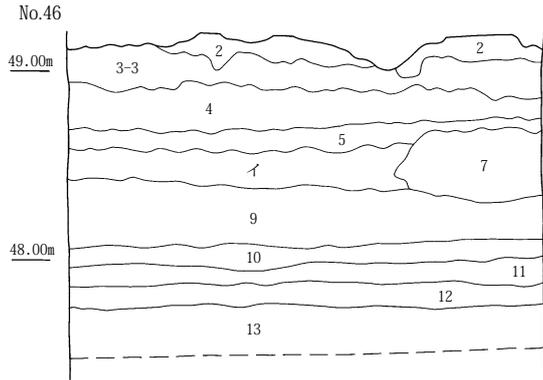
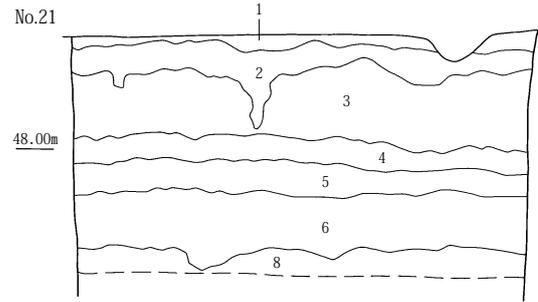
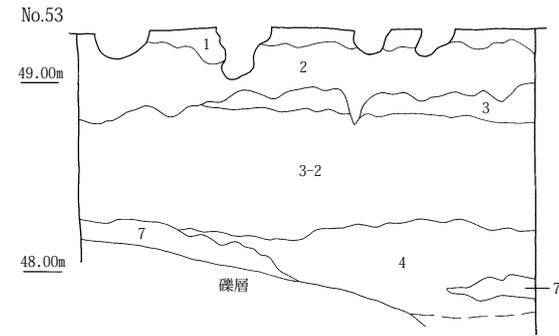
ローム層の堆積状況は、比較的良好であるが、全体的に砂質気味で、基盤となるローム層下部には礫層を有する。1層としたローム漸移層となる暗黄褐色土上面からは、縄文時代中期の土器片が出土している。2層の黄褐色ローム土は、ソフトロームにあたるが下位ほど堅く締まる。3層は青灰色の砂質分の多い堅く締まった粘性土であるが、部分的により砂質の多い箇所や、やや黄灰色気味となる箇所もあり、記録上は3・3-2・3-3・ロ層と分層した。4層は黄褐色ローム土であるが、粘性および締まりが共に弱い。この4層も、4・4-2層に分層した。5層は暗黄褐色ローム土で、上層の4層よりも暗く、粘性も強い。6層は灰色砂質土で、7層は灰色砂層となる。この灰色砂層は、下位の礫層間にもみられる。礫層は5層ないし7層下に検出されているが、Y=-39.330ラインの試掘トレンチNo23・24では礫層がみられない。同様に、X=36.500ラインのNo21・46・50においても確認されていない。これら礫層のない地点では、8層として暗黄褐色ローム土があり、部分的に層の上位に小礫を混入させる箇所もある。9層は黄色砂質土となり、10層以下は黄褐色粘質土と黄色粘質土が互層となる堆積状況にあった。



第12図 旧石器時代試掘トレンチ配置図



第13図 旧石器試掘トレンチY=-39.330ライ土層断面図(1)



- 1 暗黄褐色土 ローム漸移層である。この上面から縄文中期(加曾利E式)が散在する。
- 2 黄褐色土 ソフトロームであるが下位ほど硬く締まっている。
- 3 青灰色砂質粘性土 かなり硬く締まった、砂質分の多い粘性土。
- 3-2 青灰色砂質土 3層よりやや灰色が強く、粘性的な硬さがない。砂質分がかなり多い。
- 3-3 黄灰色砂質土 3層と3-2層を混在させ、灰色がみで砂質。
- 口 黄色土 2層と3層が混在し、全体に砂質がみで粘性があり、硬く締まっている。
- 4 黄褐色土 土色は2層に近似するが、全体に軟らかい。
- 4-2 黄褐色土 4層とほぼ同質であるが、やや粘性がみ。
- 5 暗黄褐色土 4層よりも暗く、砂質が強い。
- 6 灰色砂質土 7層の砂を多量に混在させた砂質分の多い土。
- 7 灰色砂層
- イ 黄褐色砂質土 7層の砂質を多量に混在させた土で、磔層との間層となっている。
- 8 暗黄褐色土 5層に近似する。硬くしまったローム土。
- 9 黄色砂質土 イ層に類似する。層の上位ほど砂質が強い。
- 10 黄褐色砂質土 7層とは異なる砂粒を層の下位に少量含み、粘質が強い。
- 11 黄色粘質土 砂粒をわずかに混在させる。粘質であるが弱い。
- 12 黄褐色粘質土 10層より褐色度が強く暗い。細砂を少量含むが粘質は弱い。
- 13 黄色粘質土 土色は11層に近いが、砂粒を多く混在させる。

0 1:40 1m

第14図 旧石器試掘トレンチX=36.500ライン土層断面図(2)

第3節 縄文・弥生時代の遺構と遺物

本遺跡周辺での縄文時代の遺構が確認されている遺跡には、本遺跡の南東側に位置する国道122号道路改築に伴う発掘調査を行った東今泉鹿島遺跡、本遺跡の南西に隣接する鹿島浦遺跡、楽前遺跡、さらに西側に大道東遺跡、八ヶ入遺跡が、北側に矢部遺跡、道原遺跡がある。この中でも、大道東遺跡から楽前遺跡にかけて、それと道原遺跡には集落が存在する。出土した土器には、早期、前期、中期、後期とあるが、中期後半の加曾利E3式土器が主体をなし、後期初頭の称名寺式土器までを比較的多く出土させている。

一方、弥生時代の集落遺跡は、東毛地域では極めて少なく、太田市の北西部に位置する西野原遺跡を挙げるのみである、本遺跡の周辺では、南西側に八ヶ入遺跡、北側に矢部遺跡、道原遺跡があり、いずれの遺跡においても中期後半の土器を出土させているが、遺構は検出されていない。

本遺跡における縄文時代の遺構は、検出されていない。出土した遺物は、全て遺構外からである。また、弥生時代の遺物についても同様である。

1 遺構外出土遺物

出土した縄文・弥生時代の遺構外遺物は、2～6区にわたる台地上の広い範囲に、集中する状況もなく散漫に出土している。これらの遺物を包含する層は、6区の基

本土層Ⅱ層(黒褐色土)下位からローム漸移層となるⅢ層(暗黄褐色土)上位までの間からで、2・3区においてはローム漸移層上位からである。また、奈良・平安時代の住居および中・近世の土坑や溝からの出土もあるが、それらの遺物も遺構外遺物として扱った。

(1) 縄文時代の土器(第15～18図、PL.16・33・34)

縄文時代の遺構外出土土器には、前期に中葉および後葉の土器、中期に後葉から末葉の土器、後期に初頭から前葉の土器がある。

以下、各時期ごとに記述する。

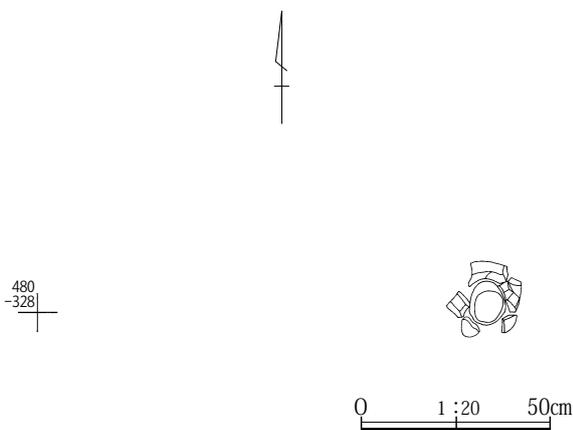
a. 前期の土器(第16図1～12)

1～10の胎土には繊維を含有する。1は突起状の小波状を有する平口縁で、口端直下に半裁竹管による爪形刺突をもつ平行沈線を巡らせ、以下にLと1本付加のRによる羽状縄文が施される。2は頸部の括れ部に半裁竹管による爪形刺突をもつ平行沈線を巡らせ、頸部に1本付加のRによる縄文が施される土器で、1と同一個体の可能性がある。3は口縁部文様に半裁竹管による爪形刺突をもつ平行沈線で、菱状の文様を描く。4は頸部の括れ部に半裁竹管による平行沈線を巡らせ、Lの縄文が施される。5は平口縁となる口縁以下に、LRLの縄文を施す。6・8はRLの縄文を、7はLRLの縄文を、9はLRの縄文を施した胴部片である。10は無文の大型の底部で、底面径は14cm前後を測り、高台が張り出すように付くことから浅鉢土器の可能性をもつ。11・12の胎土は無繊維で、胴部に細かなLRの縄文を施している。

これら1～10は黒浜式に、11・12は諸磯a式に比定される。

b. 中期の土器(第15・16・18図13～28・52)

13は波状口縁となる口縁部の波頂部で、口縁部に沈線による渦巻き文を施す。14は平口縁となる口縁部に沈線で渦巻き文や楕円区画を配する。15は平口縁となる口縁部に隆帯と沈線で渦巻き文や楕円区画を配し、区画内にRLの縄文を施す。16は大きく内反する波状口縁でキャリパー形を呈し、胴部上半に沈線による曲線的な渦巻き文が描かれ、文様区画内にRLの縄文が施される。17は大きく内反する平口縁のキャリパー形を呈し、口縁部は無文帯となり微隆帯を巡らせて区画する。胴部上半には微隆帯と沈線による逆U字状の曲線的な文様が描かれ、



第15図 縄文土器 遺構外出土平面図

R Lの縄文が施される。18・19は胴部に沈線による懸垂文を有し、区画内にR Lの縄文が施される。20～22は胴部上半に微隆帯と沈線による曲線的な渦巻き文が描かれ、文様区画内にR Lの縄文が施される。なお、20の胴部の括れ部で、上半の文様帯の区画部が横位にみられる。23は胴部に微隆帯で曲線的な文様が描かれている。24・25は胴部に縦位の条線が施されている。26～28は同一個体と思われる、胴部に微隆帯と沈線による曲線的な文様や懸垂文が描かれ、R Lの縄文が施される。52は胴部下半に垂下する低い隆帯をもつ底部で、その出土状況は第15図に示したように、5区において土器の底部が逆位に出土し、掘り込み等は検出されていない。

これら13～28・52は、加曽利E3・4式に比定される。

c. 後期の土器(第17・18図29～51)

29は直立する平口縁の口縁部が肥厚し、口縁部に横位の沈線と円形刺突を施し、口縁部下に1条の沈線を巡らせて文様帯区画し、胴部にはJ字文等の曲線的な文様が沈線で描かれる。30は直立する平口縁の口縁部はやや広目の無文帯となり、胴部にJ字文等の曲線的な文様が沈線で描かれ、文様区画内にL Rの縄文が施される。31は外反ぎみの平口縁で、無文となる口縁部下に横位の沈線をもつ。32は外反ぎみの平口縁で、無文となる口縁部下に横位の沈線を巡らせ、胴部には曲線的な文様を沈線で描き、文様区画内にL Rの縄文が施される。33は直立ぎみの平口縁で、幅狭な無文となる口縁部下に横位の沈線を巡らせ、沈線下にL Rの縄文を施す。34は口縁部の把手で、沈線による渦巻き文を有する。35は胴部に横位の沈線と、沈線下にL Rの縄文を施す。36は胴部に沈線でJ字ないしはV字状の文様を描き、文様区画内にL Rの縄文を施す。37は胴部上半に沈線でJ字状等の文様を描き、文様区画内および胴下半にL Rの縄文を施している。38～40も胴部に沈線でJ字状等の曲線的な文様を描き、文様区画内にL Rの縄文を施す。41は胴部に沈線で横位および曲線的な文様を描く。42～49は胴部に沈線で曲線的ないし直線的な文様を描くもので、45にはL Rの縄文が施され、47は沈線間に刺突を有する。50は頸部が大きく外反し口縁部が屈曲する平口縁で、口縁部に2条の沈線が巡り、頸部は広く無文帯となる。51は頸部の括れ部に3条の横位沈線と8字状貼付文をもち、貼付文下に半円状の文様を有する。

これら29～49は称名寺式に、50・51は堀之内式に比定される。

(2) 弥生時代の土器(第18図53～56、PL.34)

53～56は弥生時代中期の土器で、いずれも4区から出土している。

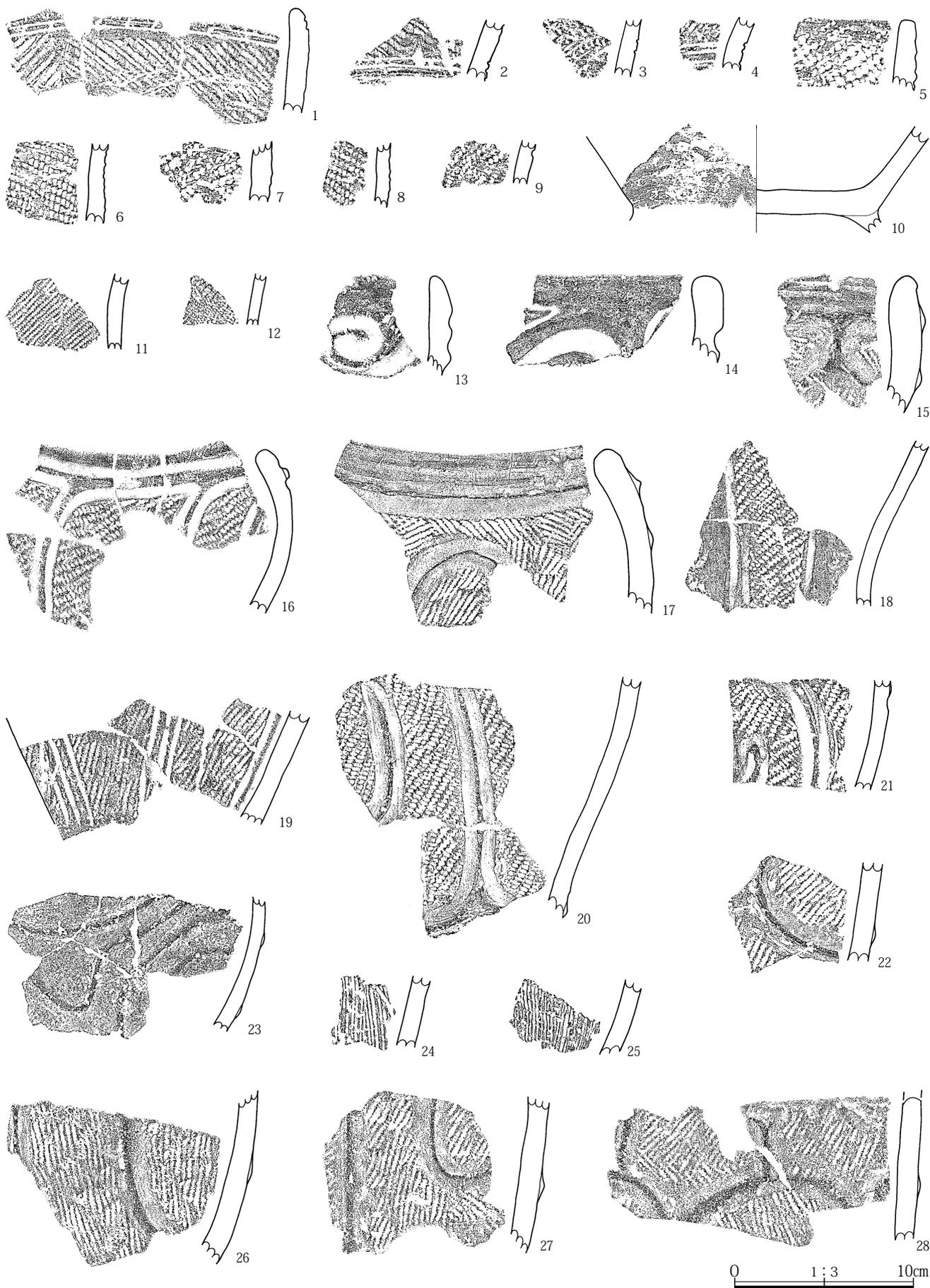
53～55は同一個体の甕形を呈する土器と考えられ、54には頸部の無文帯が僅かに残る。頸部無文帯下には2条単位の太い沈線を巡らせて文様帯を区画し、胴上半には同様の沈線で三角ないしは菱状の崩れた変形工字文が描かれている。また、胴上半には地文に細かなL Rの縄文が施され、胴下半は無文となる。56は、条痕が施された胴部片である。

(3) 石器(第19図、第2表、PL.46)

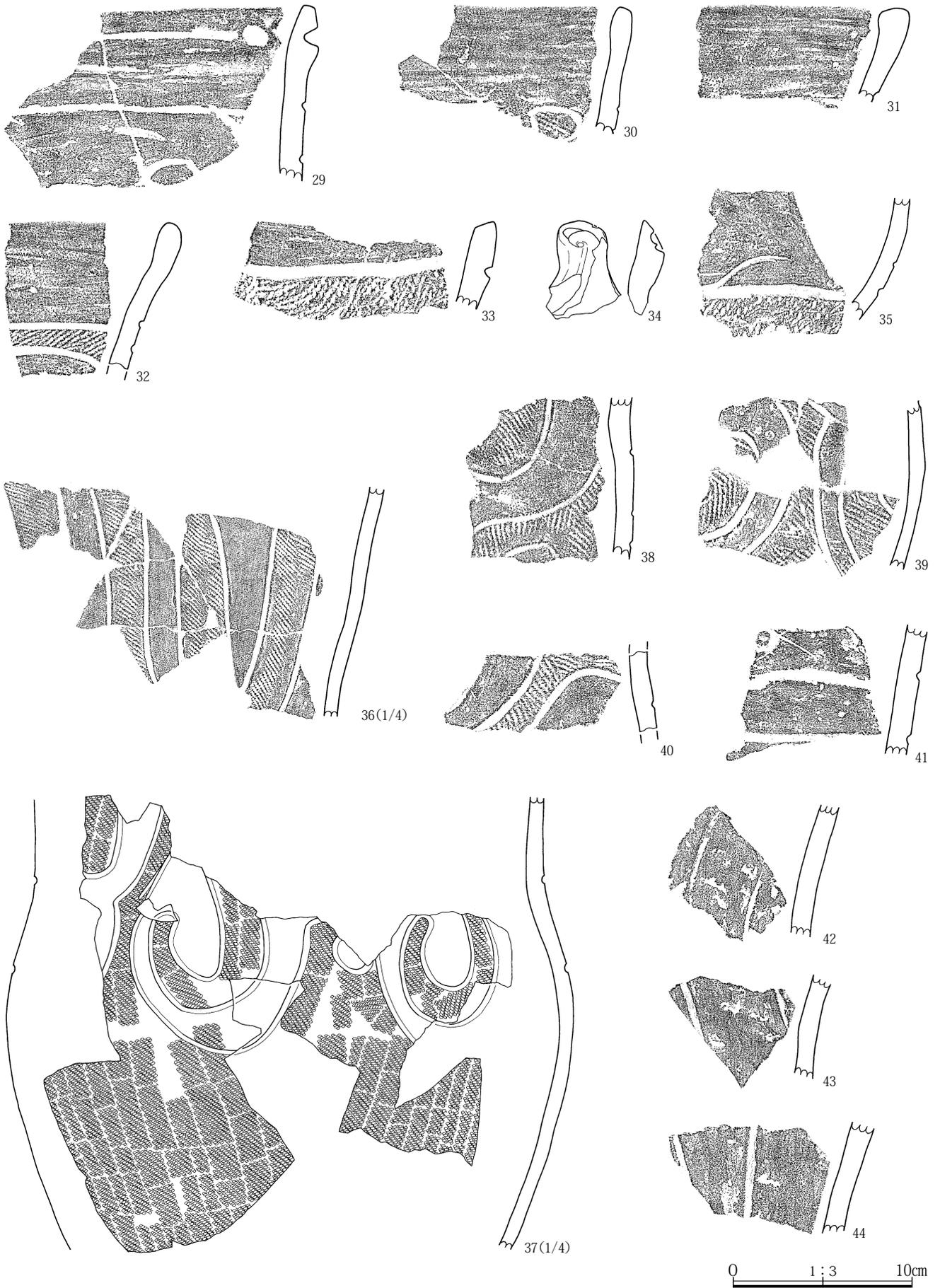
出土した石器は、量的に少ない。石鏃1点、打製石斧6点、石鍬3点、石核1点、加工痕を有する剥片2点で、他に剥片がある。図示したのはその一部で、表2に全ての石器を掲載した。また、これらの石器は包含層中からの出土であり、縄文・弥生時代の遺構に伴ってはいない。

使用される石材は、石鏃と石核に黒曜石が、他の石器にはホルンフェルスが主体を成しており、地域性を窺わせている。

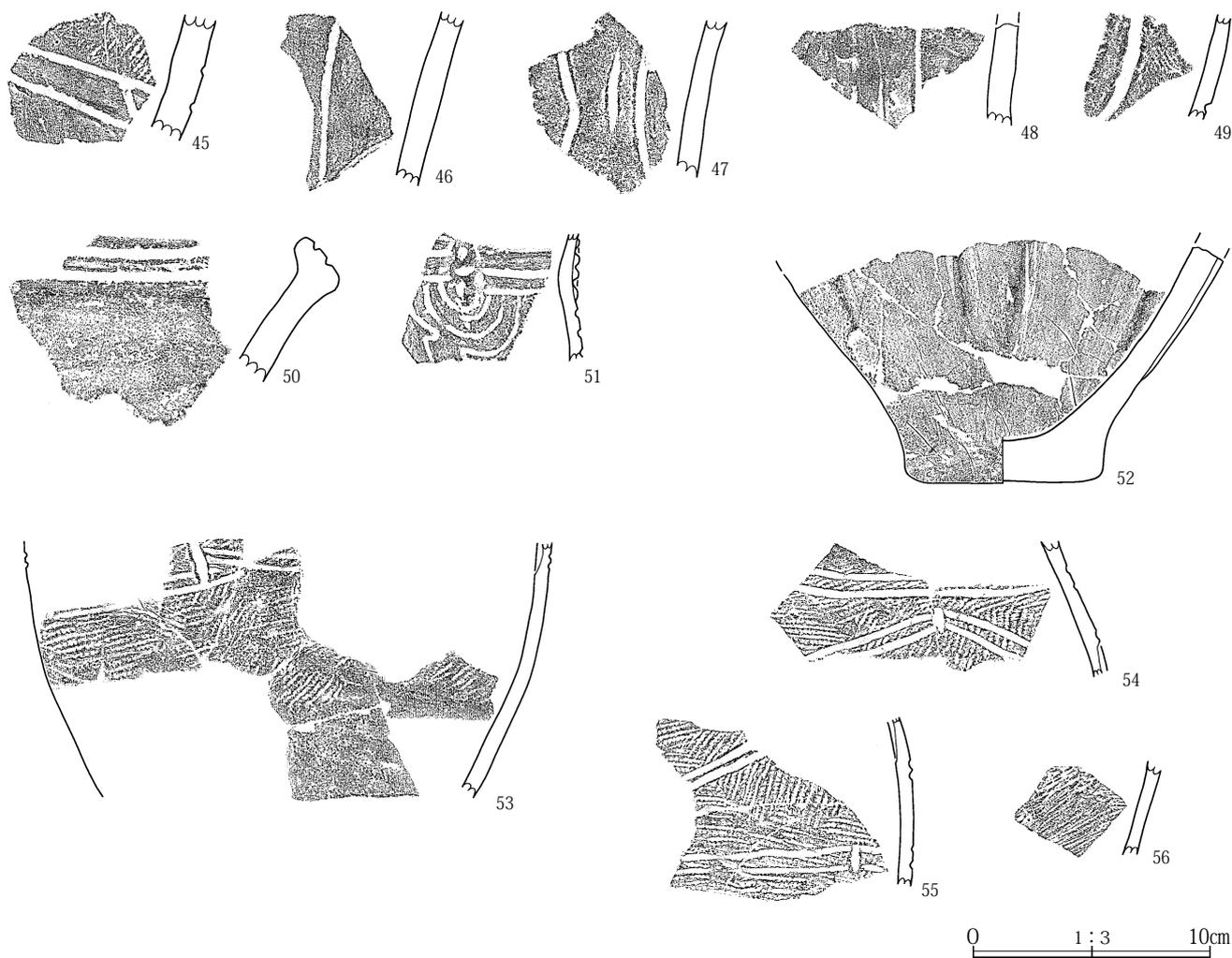
なお、石鍬とした3点は、その形態等から弥生時代の石器の可能性がある。



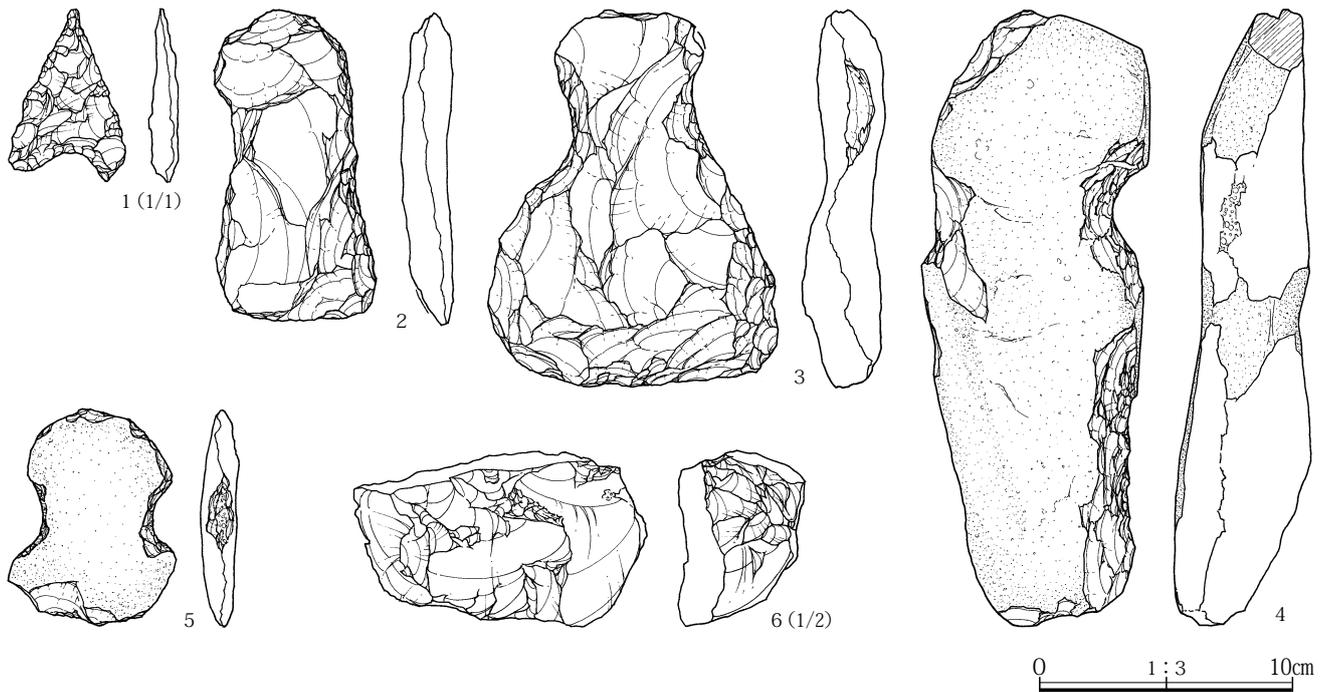
第16図 縄文・弥生時代遺構外出土土器(1)



第17図 縄文・弥生時代遺構外出土土器(2)



第18図 縄文・弥生時代遺構外出土土器(3)



第19図 縄文・弥生時代遺構外出土石器

第2表 縄文・弥生時代 遺構外出土石器計測・観察表

挿図番号 図版番号	No	器 形態・素材	出土位置	長 (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	重 (g)	製作・使用状況	石 材
第19図 PL.46	1	石鏃 凹基無茎鏃	5区包含層	2.3	1.5	0.4	0.8	完成状態。右辺側「返し部」を欠損、加工状態は粗い。	黒曜石
第19図 PL.46	2	打製石斧 短冊型	2区包含層	12.3	6.3	2.0	176.6	完成状態。右側縁は直線的だが、左側縁は上端側が弱く抉れ、装着部が上半側にあることが分かる。風化は激しく、刃部摩耗・捲縛痕は不明瞭。	ホルンフェルス
第19図 PL.46	3	石鏃	5・6区 包含層	14.9	11.3	2.1	507.0	完成状態？上端側に幅の狭い装着部を作出したもので、刃部は直線的で、広鏃様を呈する。剥離面の稜・側縁のエッジは新鮮で、使用されていない可能性が高い。	ホルンフェルス
第19図 PL.46	4	打製石斧 分銅型	5区包含層	24.8	9.0	5.4	1319.8	未製品。上半部両側縁をノッチ状に抉り、装着部を作出しようとする意図は明らか。刃部作出は見られない。	ホルンフェルス
第19図 PL.46	5	打製石斧 分銅型	1号溝	9.5	6.6	1.9	94.0	完成状態。小型で、石斧本来の機能を果たしたのか不明。装着部は摩耗しており、属性的には実用品として理解されよう。	ホルンフェルス
第19図 PL.46	6	石核 分割磔	3号溝	4.7	3.3	7.7	134.3	石核右辺で小片を剥離した痕跡があるだけで、明確な剥離の痕跡は見られない。	黒曜石
PL.46	7	打製石斧 分銅型	20号住居	10.2	6.1	1.5	111.5	完成状態？器体中央の側縁をノッチ状に抉る。エッジはシャープで未製品としての可能性も残る。	ホルンフェルス
PL.46	8	石鏃？	5・6区 包含層	(8.5)	(8.2)	1.9	115.8	未製品。破片であり詳細は不明だが、装着部の作り出し・形態的な特徴から、上端側に幅の狭い装着部を作出するタイプの石鏃とすることができよう。	ホルンフェルス
PL.46	9	打製石斧 分銅型	5区包含層	11.2	5.5	1.4	126.0	完成状態。上半部側縁をノッチ状に抉るタイプ。風化して不明瞭だが、装着部は摩耗しているように見える。	ホルンフェルス
PL.46	10	打製石斧 分銅型	包含層	8.9	8.1	2.4	248.4	未製品。幅広剥片の周辺部を粗く加工、抉れ部で破損している。	ホルンフェルス
PL.46	11	石鏃？	4区包含層	(14.2)	(11.3)	1.8	285.6	完成状態？風化して刃部摩耗等は不明。刃部破片。	ホルンフェルス

第4節 奈良時代以降の遺構と遺物

本項で扱う遺構の中で、古代の集落を構成する竪穴住居は、8世紀後半から9世紀代の時期に位置付けられる。住居以外にも掘立柱建物や土坑、さらに井戸、溝、ピット等が数多く検出されているが、中世から近世・近代に至る遺構も多数存在する。また、調査範囲の南端となる1区からは、古代のAs-B下水田が検出されている。

本遺跡周辺での奈良・平安時代の集落が確認されている遺跡としては、先ず、同じ「向矢部遺跡」として国道122号道路改築に伴う発掘調査を行った本遺跡の東側に位置する地点があげられ、本遺跡に南西に隣接する鹿島浦遺跡、楽前遺跡、さらに西側に大道東遺跡、大道西遺跡、八ヶ入遺跡と続き、これらの遺跡からは東山道駅路も検出されている。一方、本遺跡の西側に猿楽遺跡が、北側に矢部遺跡が隣り合う。特に、矢部遺跡1区は、本遺跡6区の北側に隣接する地点であり、集落構成上は同一の集落としてみる事ができる。

1 竪穴住居

本調査で検出された竪穴住居は、8世紀後半から9世紀代に位置付けられた住居である。各調査区での検出軒数は、2区に24軒、3区に3軒、5区に1軒、6区に3軒の計31軒である。その分布は、2・3区の南緩斜面に比較的集中し、北関斜面となる4～6区では希薄となる。6区の北側となる矢部遺跡1区においても、9世紀代の住居が数軒検出されている。

なお、本遺跡を特徴付ける遺物に、8世紀後半に位置づけられる23号住居からは銅製容器が出土している。また、9世紀に位置づけられる21号住居からは、2文字の刻書をもつ紡錘車が出土している。

以下、各遺構ごとに記載する。

1号住居（第20図、第49表、PL. 4）

位置(座標)：X軸=36,549～36,551

Y軸=-39,268～39,271

形状：方形

規模：長辺(1.65)m 短辺2.05m 壁高43cm

主軸方向：N-83°-E

床面積：(2.31) m²

本住居は、調査範囲北東端の6区中央付近に位置し、住居の西側は工場跡地のコンクリート基礎により壊されている。本住居の西南西15mには、5号住居がある。

住居の残存状態は、西壁は検出できなかったがほぼ良好で、埋土は暗褐色土を主に、黒褐色土が壁際での三角堆積をなし、埋土中のローム土の存在から人為的堆積と考えられる。壁の状態は、直立ぎみに立ち上がり、掘り込みは深い。床面はほぼ平坦であり、北壁際と南壁際には壁周溝をもつ。カマドを有する東壁際では、壁周溝は検出されていない。周溝は、幅10cm、深さ4cmを測る。カマドは東壁の中央南寄りに位置する。残存する規模は全長1.08m(焚き口から燃焼部長79cm、煙道部長29cm)、幅82cmを測る。残存状態は比較的良好で、両袖部は住居内に僅かに張り出し、燃焼部は住居壁の外側に大きく突出する。また、燃焼部の壁上位は、被熱により焼土化している。焚き口部付近はやや窪み、燃焼部へと続く。貯蔵穴や柱穴は検出されていない。

遺物の出土状況は、土師器の甕の胴部片が床面付近から僅かに出土しているものの、ほとんどが埋土中からであり、出土量は土師器片が80片と少ない。また、図示できる遺物はなかった。

出土土器から、本住居は9世紀後半と考えられる。

2号住居（第21～23図、第3・49表、PL. 4・35・49）

位置(座標)：X軸=36,530～36,536

Y軸=-39,319～39,325

形状：横長方形

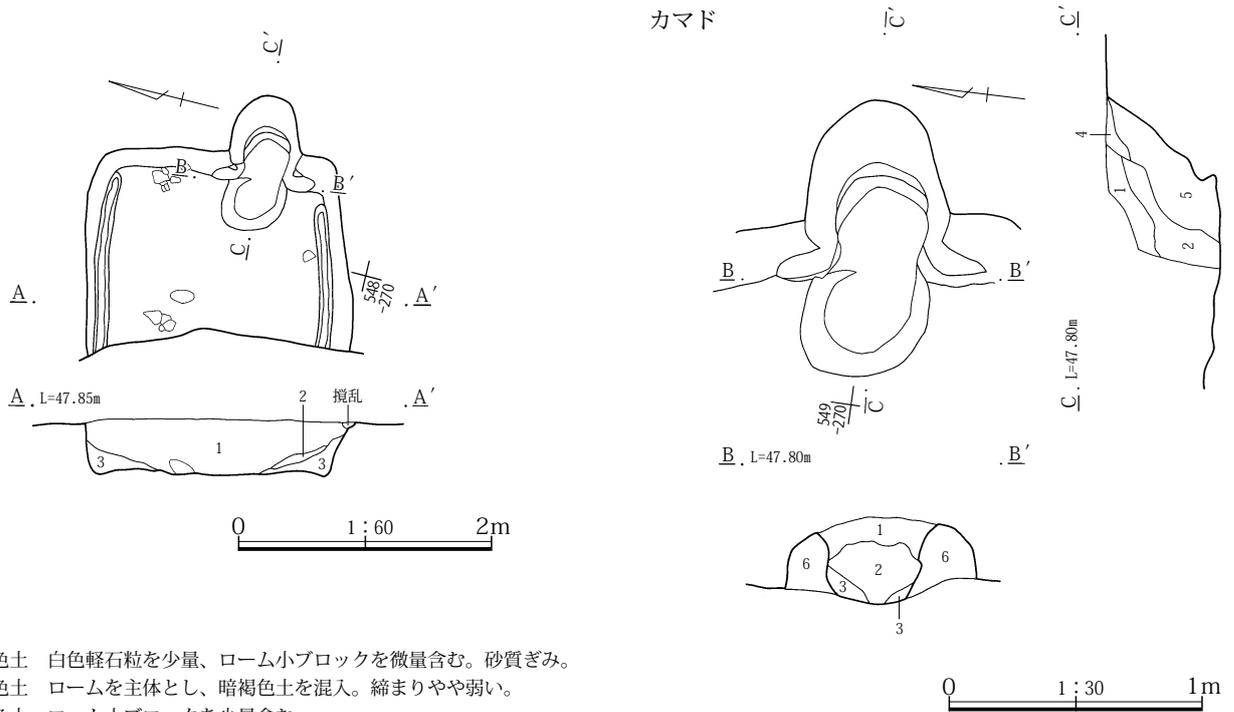
規模：長辺4.8m 短辺3.85m 壁高55cm

主軸方向：N-12°-W

床面積：13.34m²

本住居は、5区の北西側で6区との境付近に位置し、南北方向に延びる2号溝の東側にあり、2号溝と一部を重複する。この2号溝よりも本住居が古い。周囲には同時期の遺構はなく、本住居の東北東33mに5号住居がある。

住居の残存状態は、住居の北西隅を2号溝と重複するものの、床面までの掘り込みも深く、かなり良好な状態にある。埋土は、3層の黒暗褐色土、4層の明暗褐色土、7層の明暗褐色土を主体に分層でき、埋土中にローム



第20図 1号住居・カマド平面図

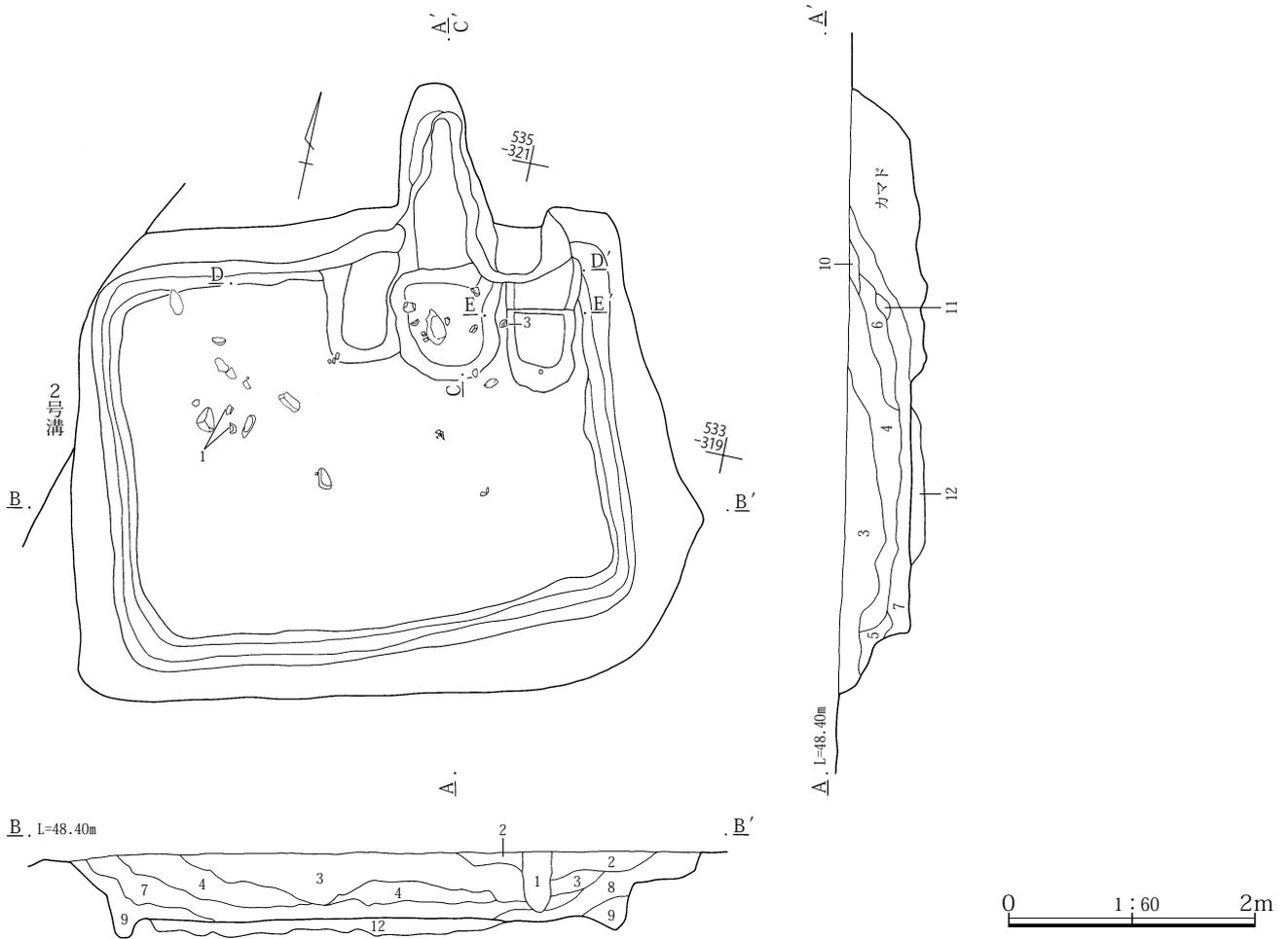
ロックを混在させることから人為的堆積と考えられる。壁の状態は、中部以下は比較的直立ぎみとなるが、上部は広がる傾向にある。掘り込みは深い。特に、南東隅付近では、段(ステップ)状に大きく広がり、床面形状に比べ上面プランはやや歪な形状となっている。床面は平坦であり、壁周溝をもつ。壁周溝は、北壁のカマド部を除いてほぼ全周し、幅23cm前後、深さ10cmを測る。ただし、北壁側は比較的浅い状態であった。カマドは北壁の中央東寄りに位置する。残存する規模は全長2.4m(焚き口から燃焼部長91cm、煙道部長1.49m)、幅2.02mを測る。残存状態は良好で、両袖部は住居内に大きく張り出し、燃焼部は住居内にあり、煙道部が壁の外側に長く突出する。また、焚き口部から燃焼部底面が窪む。さらに、断面観察から、煙道部にはロームを主とした黄褐色土の天井部が残存しており、天井下部は比熱し、焼土化していることも確認されている。残存する袖部は、暗灰色砂質土ブロックを多く含む暗褐色土を土台とし、ロームを主とした黄褐色土等を積み上げて構築されている。なお、支脚

等は検出されていない。貯蔵穴はカマドの右側で、住居の北東隅に位置する。長方形を呈し、規模は長軸97cm、短軸60cm、深さ10cmを測る。柱穴は検出されていない。

床面下には、部分的ではあるが掘り方が確認された。住居中央から西壁周溝付近に至る部分で、不整形に、底面は凹凸状をなし、その埋土はロームを主体とする黄褐色砂質土で、床面となる上面は強く硬化していた。

遺物の出土状況は、住居の北半に比較的多く、カマド内およびカマド周辺に土器片が散在している。また、大きさの様々な自然石が多い。しかし、出土した多くは埋土中からであり、床面付近からは皆無であった。図示した1～3の須恵器杯3点は埋土中から、4の台付き甕の脚、5の甕はカマド内からの出土である。6は鉄鏝の頸部片で、埋土中からの出土である。他に、未掲載遺物として土師器片108片、須恵器片3片が出土しており、量的には少ない。

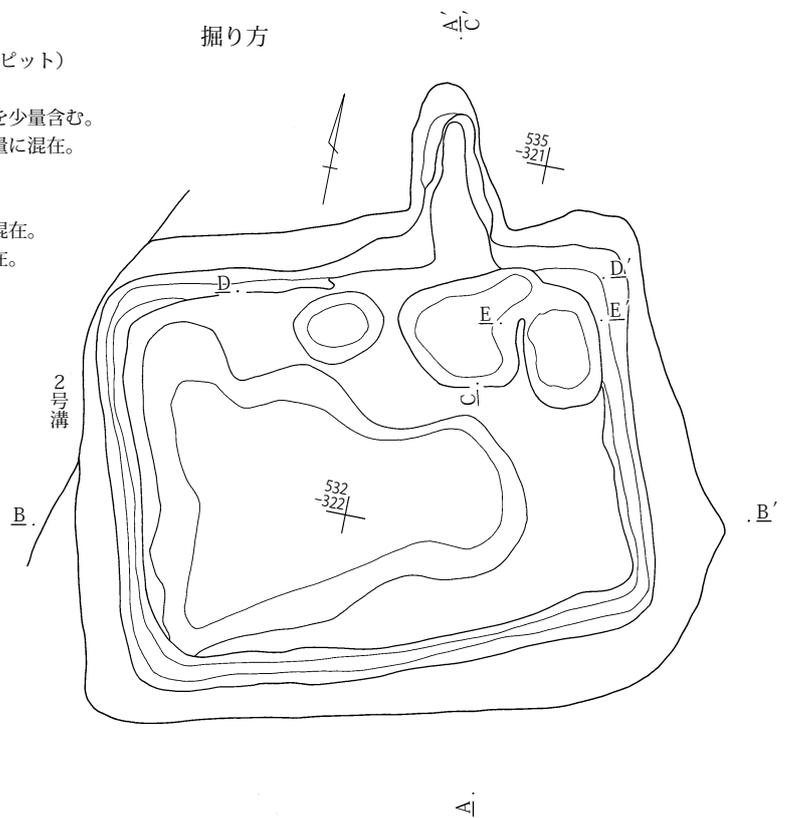
出土土器から、本住居は9世紀第2四半期と考えられる。



2号住居

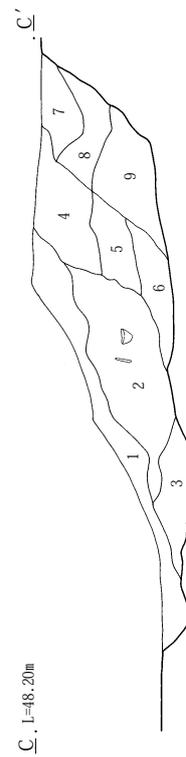
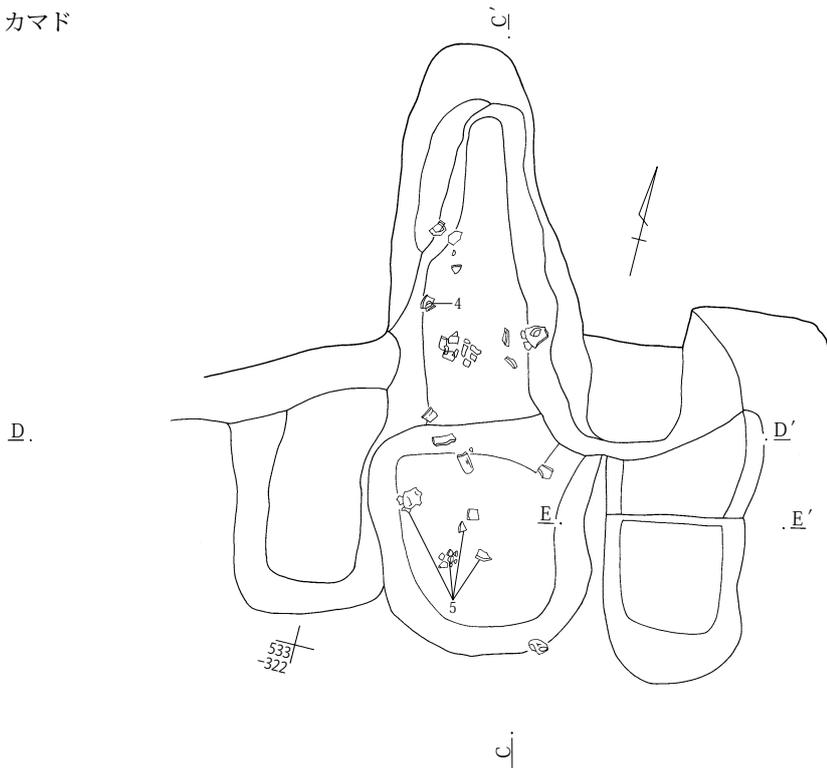
- 1 暗褐色土 ローム粒を混入するが、締まり弱い。(近世?ピット)
- 2 明暗褐色土 汚れたロームブロックを多量に混在させる。
- 3 黒暗褐色土 汚れたローム小ブロック、炭化物、焼土粒を少量含む。
- 4 明暗褐色土 3・5層より明るい。ロームブロックを多量に混在。
- 5 明暗褐色土 4層に近似するが、ローム粒を主体とする。
- 6 暗褐色土 炭化物、焼土粒を含み、やや粘質ぎみ。
- 7 明暗褐色土 8層よりやや暗い。ロームブロックを斑に混在。
- 8 明暗褐色土 7層よりやや明るい。ローム粒を多量に混在。
- 9 明褐色土 ロームを主体。壁の崩落土と思われる。
- 10 暗褐色土 黄褐色粘土を混入する。
- 11 黄褐色土 粘土を主体とし、暗褐色土を微量含む。
- 12 黄褐色砂質土 ロームを主体とする。(掘り方覆土)

掘り方



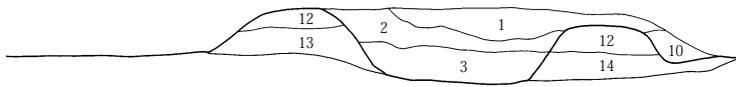
第21図 2号住居平面図

カマド



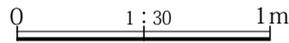
D, L=48.20m

D'



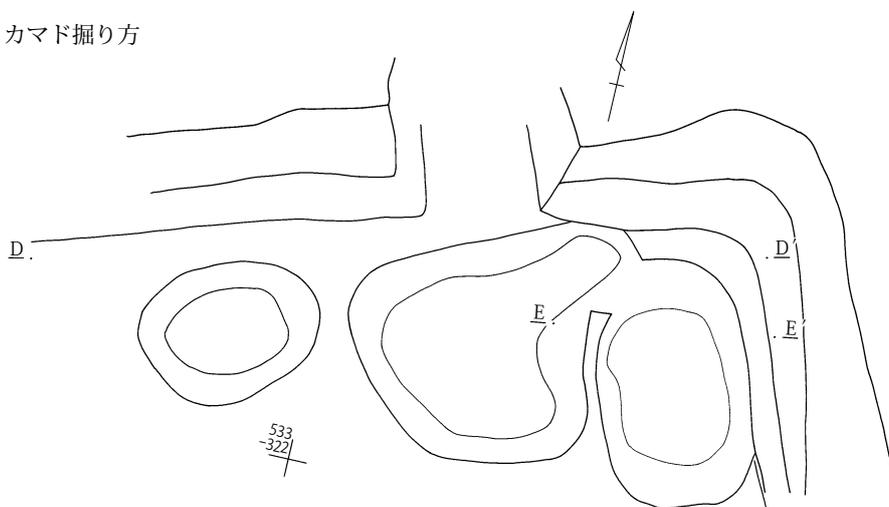
E, L=47.90m

E'



2号住居E-E' (貯蔵穴)
暗褐色土 暗灰色砂質土小ブロックを少量含む。

カマド掘り方

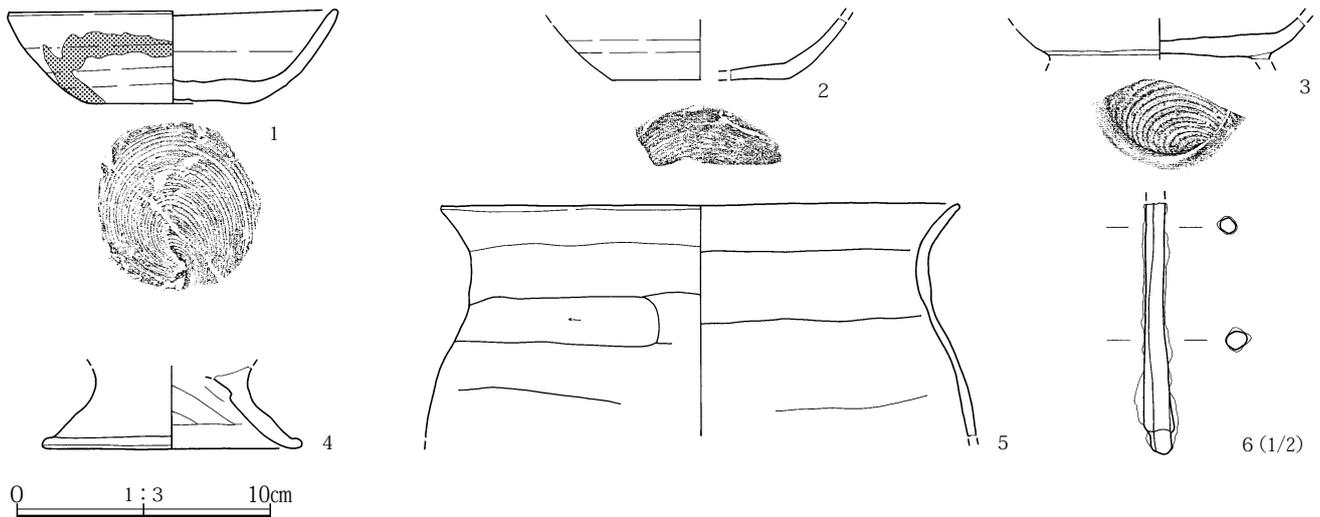


2号住居カマド

- 1 明暗褐色土
ローム粒・ブロックを斑に混在させる。
- 2 暗褐色土
ローム粒、焼土粒を少量含む。
- 3 暗褐色土
暗灰色砂質土小ブロックを少量、焼土粒を微量含む。
- 4 黄褐色土
ロームを主体とし、暗褐色土を少量混入。
下部は被熱し焼土化する。(残存煙道天井部)
- 5 暗褐色土
ローム、焼土粒を微量含む。
- 6 暗褐色土
焼土粒・小ブロックを多く含む。
- 7 暗褐色土
焼土粒を微量含む。
- 8 暗褐色土
ロームブロックを多量混入。
- 9 暗褐色土
焼土粒を少量含む。
- 10 暗褐色土
暗灰色砂質土ブロックをやや多く、炭化物を少量含む。
- 11 暗褐色土
ローム土を少量含む。
- 12 黄褐色土
ロームを主体とし、暗褐色土を微量含む。
酸化鉄分を少量含む。(残存袖部)
- 13 暗褐色土
暗灰色砂質土ブロック、白色軽石粒を少量含む。(残存袖部)
- 14 暗褐色土
暗灰色砂質土ブロックを多く、炭化物を少量含む。(残存袖部)

第22図 2号住居カマド平面図

第3章 検出された遺構と遺物



第23図 2号住居出土遺物

第3表 2号住居出土遺物観察表

挿図番号 図版番号		NO.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値(cm)	胎土／焼成／ 色調	成形・整形の特徴	摘要
第23図 PL.35	1	須恵器 杯	埋土中 1/2	口 12.8 高 3.6 底 6.6	細砂粒／酸化焰／ 鈍い橙	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転糸切り無調整。	外面に煤の付着部分がある。	
第23図	2	須恵器 杯	埋土中 底部～体部片	底 6.8	細砂粒・白粒／還元焰／灰	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転糸切り無調整。		
第23図	3	須恵器 杯	埋土中 底部～体部片	底 8.8	細砂粒／還元焰／灰	ロクロ整形、回転右回り。高台は貼付、底部は回転糸切り		
第23図 PL.35	4	土師器 台付甕	カマド内 脚部片	脚 9.6	細砂粒／良好／赤褐	脚部は貼付、外面は器面剥離のため不鮮明、内面は上半がナデ、下半は横ナデ。		
第23図 PL.35	5	土師器 甕	カマド内口縁部 ～胴部上位片	口 20.2	細砂粒／良好／鈍い黄橙	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。		

金属製品

挿図番号 図版番号	NO.	種類 器種	出土位置 残存率	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	特徴・状態	備考
第23図 PL.49	6	鉄器 鏃	埋土中 頸部片	(6.6)	0.7	0.4	(6.7)	頸部にねじれがみられる。錆化。	

3号住居 (第24・25図、第4・49表、PL. 4・35)

位置(座標)：X軸=36,485～36,489

Y軸=-39,410～39,415

形状：方形

規模：長辺3.8m 短辺3.6m 壁高28cm

主軸方向：N-89°-E

床面積：10.23㎡

本住居は、3区西側に位置し、住居の西壁に119号土坑、北東方向に延びる14号溝とは対角状に重複する。土層断面の観察から、これら重複する遺構よりも本住居が古い。周囲の同時期の遺構には、本住居の北東に129号土坑、東に6号住居がある。

住居の残存状態は、119号土坑および14号溝と重複す

るものの、かなり良好な状態にある。埋土は暗褐色土を主体にするが、2層に分層でき、埋土中に黄褐色粘土小ブロックを混在させることから人為的堆積と考えられる。壁の状態は、やや傾斜をもって立ち上がる。床面は平坦であり、特にカマド前から中央にかけて堅く踏み締まっている。壁周溝は検出されていない。カマドは東壁の中央南寄りに位置する。残存する規模は全長1.45m(焚き口から燃烧部長47cm、煙道部長98cm)、幅1.11mを測る。残存状態は良好であるが、左袖の一部を後世の攪乱によって壊されている。左袖部は住居内に大きく張り出すが、右袖は壁の一部を利用する形で僅かに出張る。燃烧部は住居内にあり、煙道部が壁の外側に突出する。また、焚き口部付近は底面が窪み、被熱による焼土化がみ

られる。さらに、断面観察から、残存する袖部は10層の暗褐色土を土台とし、ロームを主とした黄褐色土を積み上げて構築されている。なお、支脚等は検出されていない。貯蔵穴、柱穴も検出されていない。

遺物の出土状況は、住居内全体から散漫に出土しており、その大半が埋土中からで、出土量もあまり多くはない。図示した1の須恵器杯には体部外面に墨書(文字不明)があり、2の甕は床面付近からの出土である。他に、未掲載遺物として土師器片183片、須恵器片52片がある。

出土土器から、本住居は9世紀第3四半期と考えられる。

4号住居 (第26図、第49表、PL. 5)

位置(座標): X軸=36,542 ~ 36,543

Y軸=-39,232 ~ 39,234

形状: 方形

規模: 長辺(2.0)m 短辺(1.7)m 壁高35cm

主軸方向: 不明

床面積: (1.14) m²

本住居は、道路際で調査範囲の最も狭い6区の最東端に位置する。調査範囲の北側沿いに東西方向に延びる17号溝と重複し、住居の一角(南西隅付近)を僅かに調査することができた。本住居の西36mには、1号住居がある。

住居の残存状態は、本住居より新しい17号溝と大きく重複することから、かなり悪い状態である。調査区東壁での土層断面では、現地表下には厚く盛り土(客土)がなされ、その下に旧耕作土として1層の暗灰褐色土が堆積し、10層のローム漸移層上面まで達する。旧耕作土下には、まず2~6層までに分層された17号溝の埋土が確認でき、本住居の埋土は17号溝埋土に壊された形で7・8層の暗褐色土がある。また、この7層はローム漸移層を切り込んでいることも確認できたが、人為的堆積かは不明。僅かに検出された床面は、ほぼ平坦で、西壁際と南壁際には壁周溝をもつ。周溝は、幅15cm、深さ8cmを測る。カマド等については不明。

出土遺物も極めて少なく、土師器片5片、須恵器片1片のみで、図示できる遺物はなかった。

不明な点も多いが、出土土器から本住居は9世紀代と考えられる。

5号住居 (第27図、第49表、PL. 5)

位置(座標): X軸=36,540 ~ 36,544

Y軸=-39,284 ~ 39,288

形状: 方形

規模: 長辺(3.8)m 短辺(3.0)m 壁高53cm

主軸方向: 不明

床面積: (10.02) m²

本住居は、6区のほぼ中央に位置し、工場跡地のコンクリート基礎に囲まれた僅かな範囲に検出された。このため、住居の南壁および南西隅は確認できたが、他の壁は検出できていない。周囲の同時期の遺構には、本住居の北東15mに1号住居がある。

住居の残存状態は、南壁以外の壁は検出できなかったが、住居内部の大半が調査でき、床面までの掘り込みも深く、かなり良好な状態にあると言える。調査区東壁の土層断面では、工場跡地下に1層の暗褐色土が旧耕作土としてあり、その下位に遺物包含層である2層の黒褐色土が堆積する。2層の下は11層としたローム漸移層であるが、本住居はこのローム漸移層を切り込む形で埋没していることが確認できる。住居の埋土は、3層の暗灰褐色土と4層の暗褐色土を主として、8層に分層することができる。埋土中に、ローム小ブロックやローム土を堆積させることから人為的堆積と考えられる。南壁の状態は、やや傾斜をもって立ち上がる。床面は平坦であるが、北側に焼土を伴うやや不定型な浅い窪みが検出されている。この窪みの西脇には、長さ30cm程の自然石が出土している。南壁際には、周溝は検出されていない。カマドは不明であるが、北側の窪みがカマドの一部とは位置的にも考え難い。また、鍛冶に関連する遺物は、全く出土していないことから鍛冶炉の可能性もない。

出土遺物も極めて少なく、土師器片29片、須恵器片1片のみで、図示できる遺物はなかった。

不明な点も多いが、出土土器から本住居は9世紀代と考えられる。

6号住居 (第28~34図、第5・49表、PL. 5・35・36・46・49)

位置(座標): X軸=36,480 ~ 36,488

Y軸=-39,395 ~ 39,403

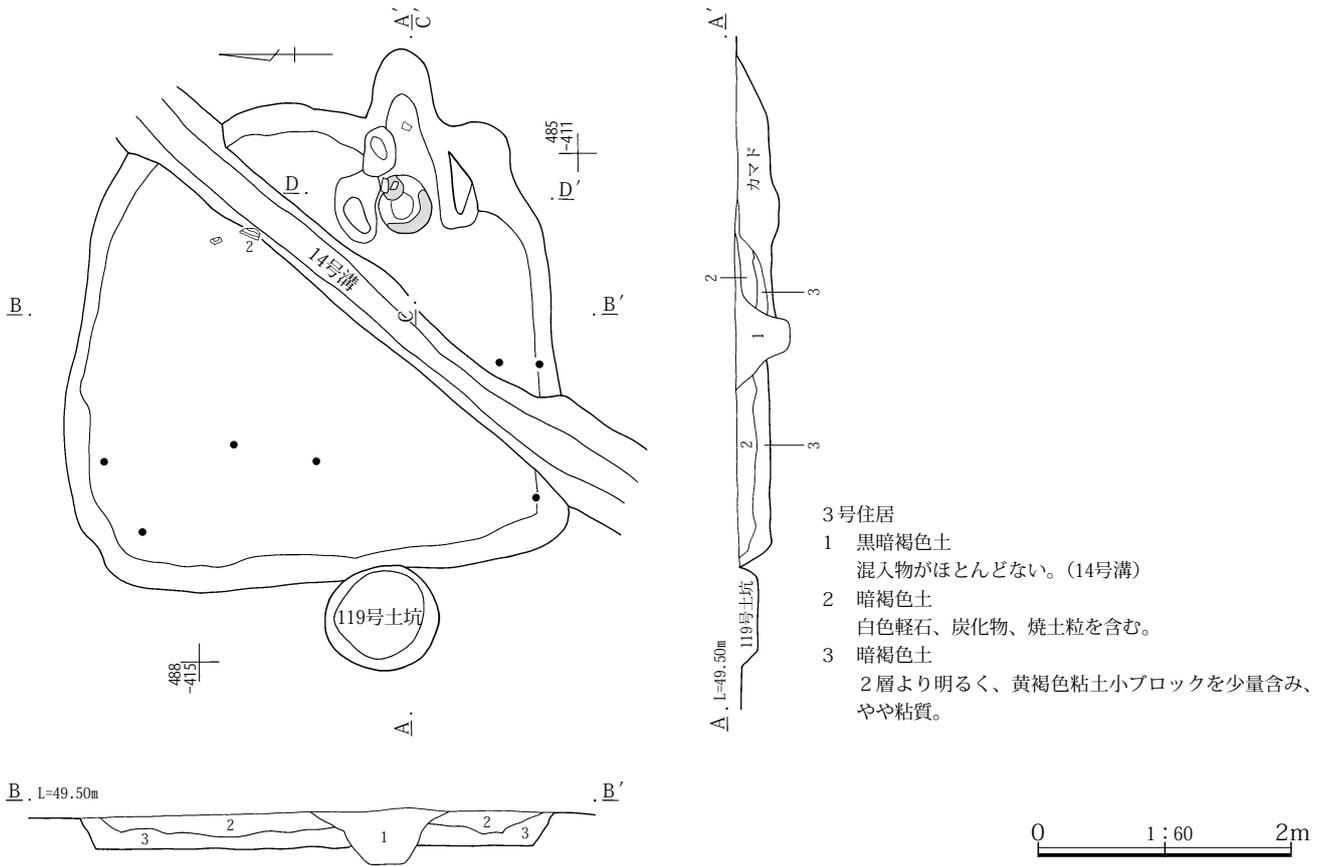
形状: 縦長方形

規模: 長辺6.9m 短辺5.0m 壁高53cm

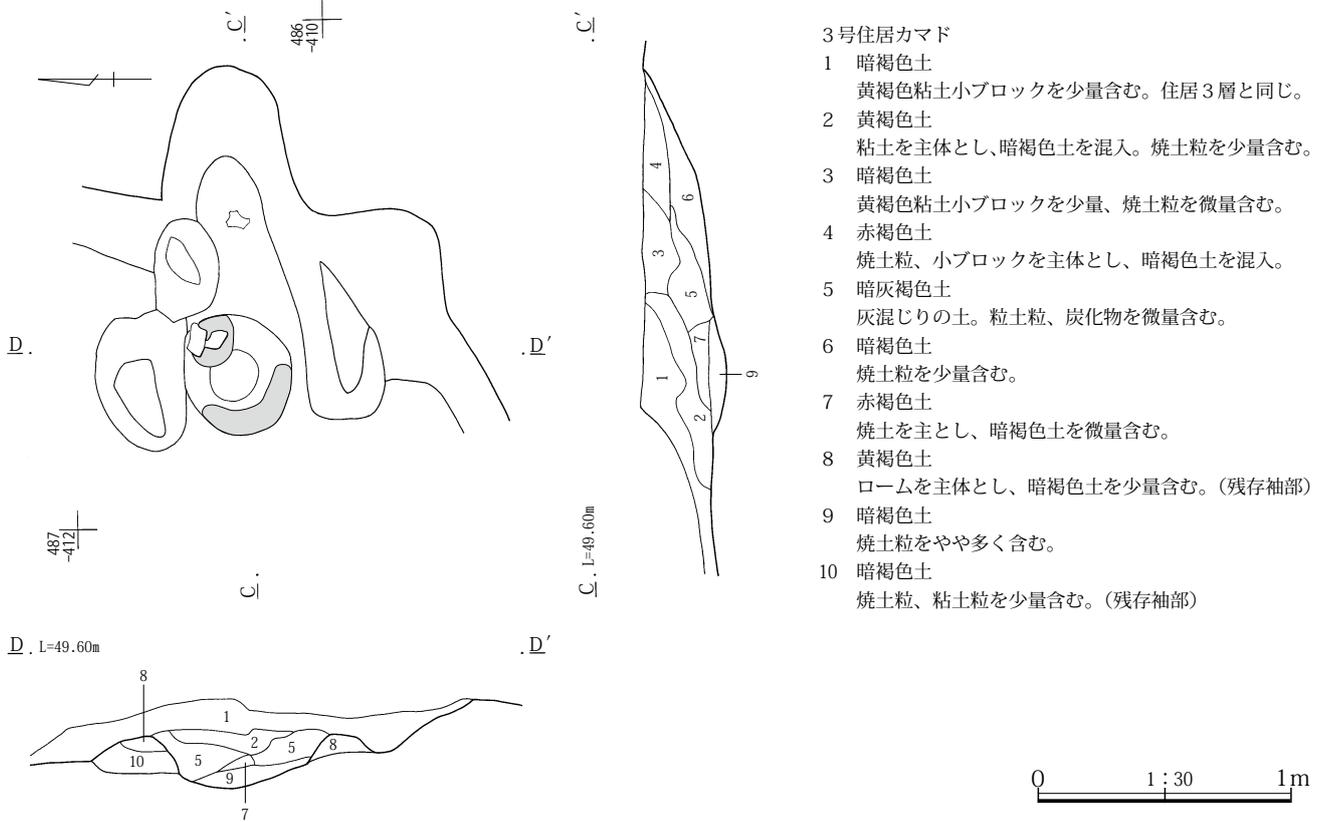
主軸方向: N-71°-E

床面積: 23.29m²

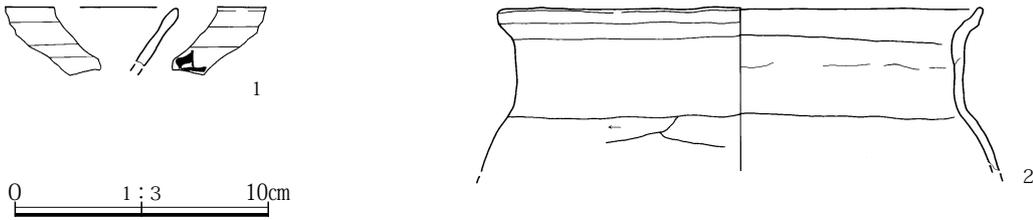
本住居は、3区の中央に位置し、住居の西側に101号



カマド



第24図 3号住居・カマド平面図

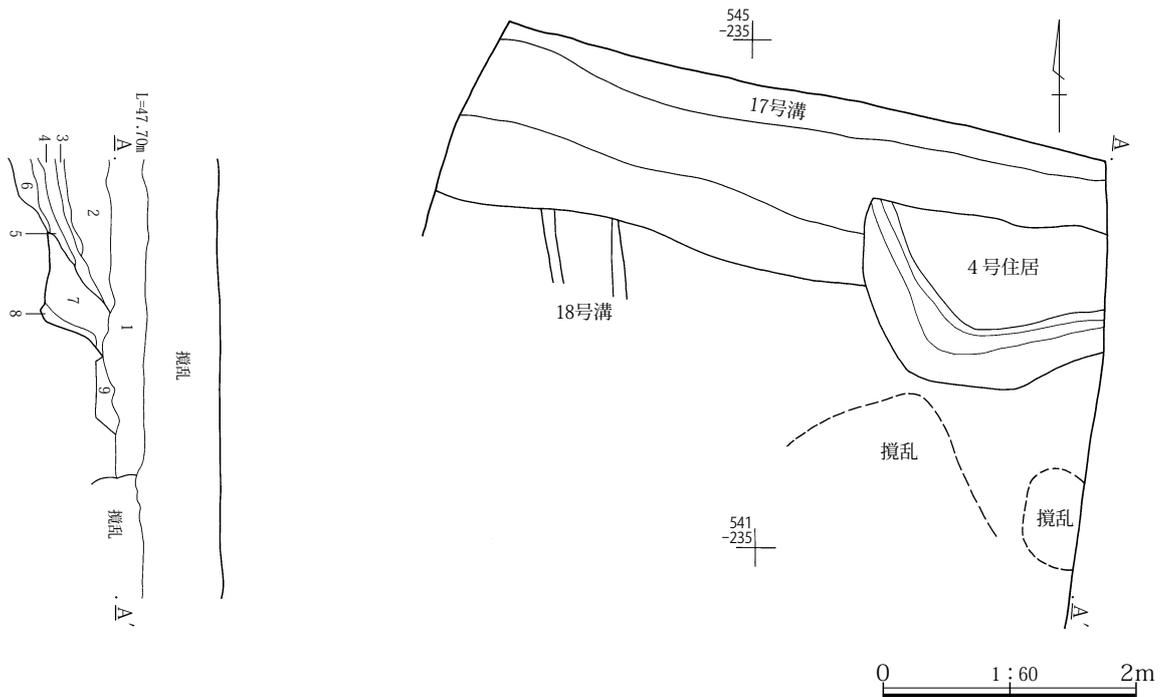


第25図 3号住居出土遺物

第4表 3号住居出土遺物観察表

土器類

挿図番号 図版番号	NO.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値(cm)	胎土／焼成／色調	成形・整形の特徴	摘要
第25図 PL.35	1	須恵器 杯	埋土中 口縁部片		細砂粒／還元焰／灰白	ロクロ整形、回転方は小片のため不明。	外面口縁部に墨書、一部のため判読不明。
第25図 PL.35	2	土師器 甕	床面付近 口縁部～胴部上 位片	口 18.8	細砂粒／良好／鈍い橙	内面頸部に輪積み痕が残る。口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラナデ。	

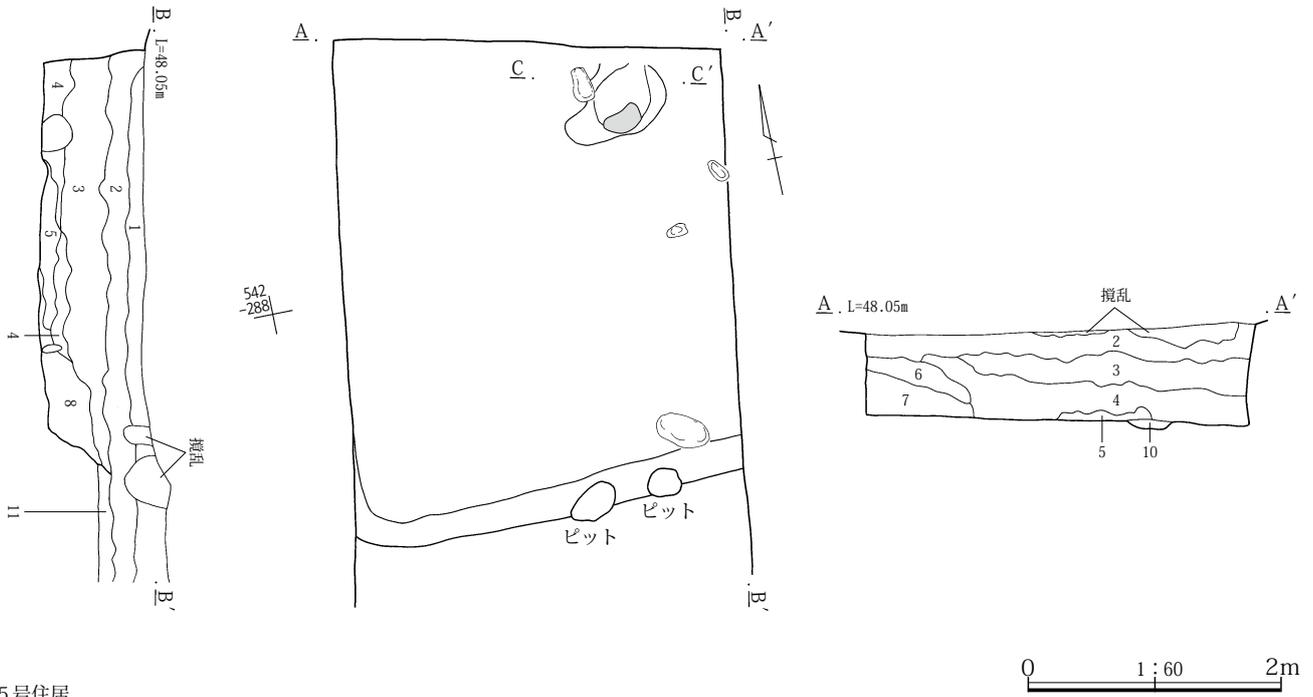


4号住居

- 1 暗灰褐色土 旧耕作土。白色軽石粒を少量含み、砂質。
- 2 暗褐色土 暗灰色の川砂をやや多く含む。(17号溝)
- 3 暗灰色粘質土 川砂を少量含む。酸化鉄分を少量含み、若干砂質ぎみ。(17号溝)
- 4 暗灰褐色土 暗褐色土を混入し、白色軽石粒を少量含む。(17号溝)
- 5 明灰色粘質土 暗灰色粘質土を混入し、酸化鉄分を少量含む。(17号溝)
- 6 暗褐色土 ローム粒・小ブロックをやや多く含む。(17号溝)
- 7 暗褐色土 黒褐色土、白色軽石粒、ローム粒を少量含む。(4号住)
- 8 暗褐色土 ローム粒小ブロックを混入。(4号住)
- 9 黒褐色土 ローム小ブロックを少量、白色軽石粒を微量含む。
- 10 黄褐色土 ローム漸移層。

第26図 4号住居平面図

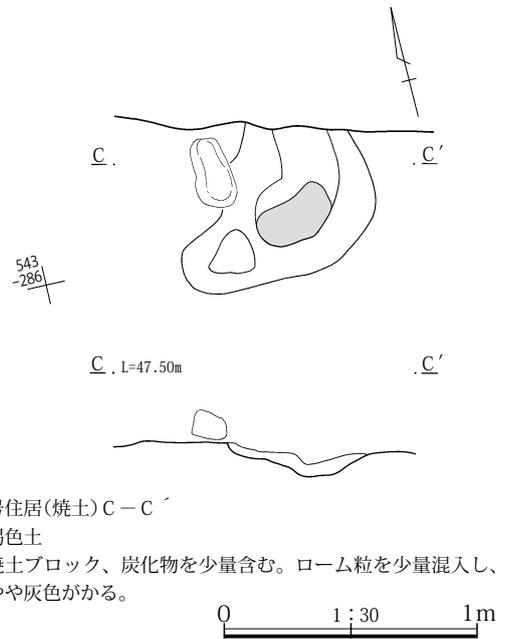
第3章 検出された遺構と遺物



5号住居

- 1 暗褐色土
旧耕作土。白色軽石粒をやや多く含み、砂質。
- 2 黒褐色土
土器片が出土する遺物包含層。白色軽石粒をやや多く含む。
- 3 暗灰褐色土
白色軽石粒を少量、焼土粒を微量含む。酸化鉄分を少量含む。
- 4 暗褐色土
ローム粒小ブロックをやや多く、白色軽石粒を少量、焼土粒を微量含む。酸化鉄分を含む。
- 5 黄褐色土
ローム土を主体とし、暗褐色土を少量、焼土粒を微量含む。
- 6 暗褐色土
白色軽石粒をやや多く、ローム粒を少量含む。
- 7 暗褐色土
黒褐色土を混在させ、白色軽石粒をやや多く、ローム粒を少量含む。
- 8 暗褐色土
白色軽石粒をやや多く、酸化鉄分、ローム粒を少量含む。焼土粒、炭化物を微量含む。
- 9 黄褐色土
ローム土を主体とし、暗褐色土を少量含む。
- 10 黒褐色土
ローム土を微量含む。炭化物、焼土粒を少量含む。
- 11 黄褐色土
ローム漸移層。

焼土部分



5号住居(焼土) C-C'

黒褐色土

焼土ブロック、炭化物を少量含む。ローム粒を少量混入し、やや灰色がかかる。

第27図 5号住居平面図

土坑、北側に103・131号土坑と近接する。また、102号土坑とは、本住居内で重複するが、遺構確認時点で本住居が旧いことが明確であった。周囲の同時期の遺構には、本住居の北西に129号土坑、南東に96・127号土坑、西9mに3号住居、東南東20mに7号住居が点在する。

住居の残存状態は、102号土坑と重複するものの、床面までの掘り込みも深く、かなり良好な状態にある。埋土は、1～4層の暗褐色土・黄褐色土を主体に分層でき、埋土中にローム小ブロックを少量混在させることから人為的堆積の可能性をもつ。壁の状態は、一部が急角度で立ち上がるものの、西・南壁は周溝よりも大きく外側に張り出す。また、北西隅付近でも、壁の位置が大きく外側に張り出している。このため、周溝からする床面形状に比べ、上面プランはかなり歪な形状となっている。床面は平坦であり、周溝をもつ。周溝は、東壁のカマド部を除いてほぼ全周し、幅20cm前後、深さ13cm前後を測る。ただし、東壁側は比較的浅い状態であった。カマドは東壁の中央やや南寄りに位置する。残存する規模は、全長1.65m(焚き口から燃焼部長68cm、煙道部長97cm)、幅77cmを測る。残存状態は比較的良好で、両袖部は残存していなかったが、焚き口部から燃焼部底面の窪みが住居内から壁の外側に僅かにかかり、煙道部が壁の外側に長く突出する。また、断面観察から、煙道部にはロームを主とした黄褐色土の天井部が残存しており、天井下部は比熱し、焼土化していることも確認されている。なお、この煙道部天井から続く、燃焼部の天井の一部と思われる部分が僅かに残存していた。支脚等は検出されていない。貯蔵穴はカマドの右側で、住居の南東隅に位置する。長方形を呈し、規模は長軸1.13m、短軸45cm、深さ10cmを測る。柱穴は検出されていない。

床面下には、部分的ではあるが掘り方が確認された。住居中央部を除く周囲に掘り方が認められ、特に南側から東側にかけての床面下に著しい。底面は凹凸状をなし、その埋土は黄褐色土を混在させた暗褐色土で、床面となる上面は堅く硬化していた。さらに、この床面下において、カマドの左側に円形の床下土坑を検出した。規模は、径85cm、深さ15cmを測る。

遺物の出土量は、本調査の中では最も多い。表土との兼ね合いもあるが、1層上位からは陶磁器類の出土(1号土坑出土の第125図10と接合した半胴甕片、遺構外出

土遺物として扱った第167図65～68の古銭等)もあった。遺物の出土状況は、南西隅付近および北壁付近で出土量がやや少ないものの、カマド周辺から中央部にかけてと北西隅に集中する状況にあった。特に、カマド右脇においては、住居の壁の外側の遺構確認面よりやや高い位置から、壁際下の床面までの間に土器が集中して出土しており、接合・復元率も高い。図示した19の甕は、壁の外側遺物と壁際床直遺物との接合。20の甕は、壁の外側遺物と住居内出土の接合。24の甕は壁の外側遺物を主に接合している。一方、カマドの煙道部天井から続き、僅かに残存した燃焼部天井の上面付近から出土した甕片、燃焼部埋土中から出土した甕片、カマド右脇の床面から出土した甕片、カマド周辺出土の甕片が接合したのが21とした甕である。こうした遺物の出土のあり方および接合の状況、さらにカマドの燃焼部位置が住居壁の外側にかかる点から推測すると、少なくともカマドを有する壁側は、壁沿いに床よりも一段高いテラスを持っていた可能性が高く、そのテラス上に土器(甕)があったと考えられるのではなかろうか。このことに付随して、カマド側の住居壁は直立する壁建ちであったことも推測できよう。

図示した遺物には、須恵器の杯12点の内、3・6・10は床直出土で、5は内面に墨書を有するが文字不明。須恵器碗の11・15も床直出土で、11の内外面の一部に煤が付着している。さらに、1の須恵器杯蓋、16の灰釉陶器瓶の底部片がある。土師器の甕も12点と多く、コ字口縁甕を主とする。なお、24と27は同一個体の可能性が高い。金属製品には、31の鉄鏃の頸部片、32・33の鉄釘、34の刀子がある。石製品には、29の砥石片(珪質粘板岩製)と、30の孔を有する砥石(砥沢石製)ある。他に、未掲載遺物として土師器片1748片、須恵器片233片が出土している。

出土土器から、本住居は9世紀第3四半期と考えられる。

7号住居 (第35・36図、第6・49表、PL. 6・36)

位置(座標)：X軸=36,472～36,476

Y軸=-39,372～39,378

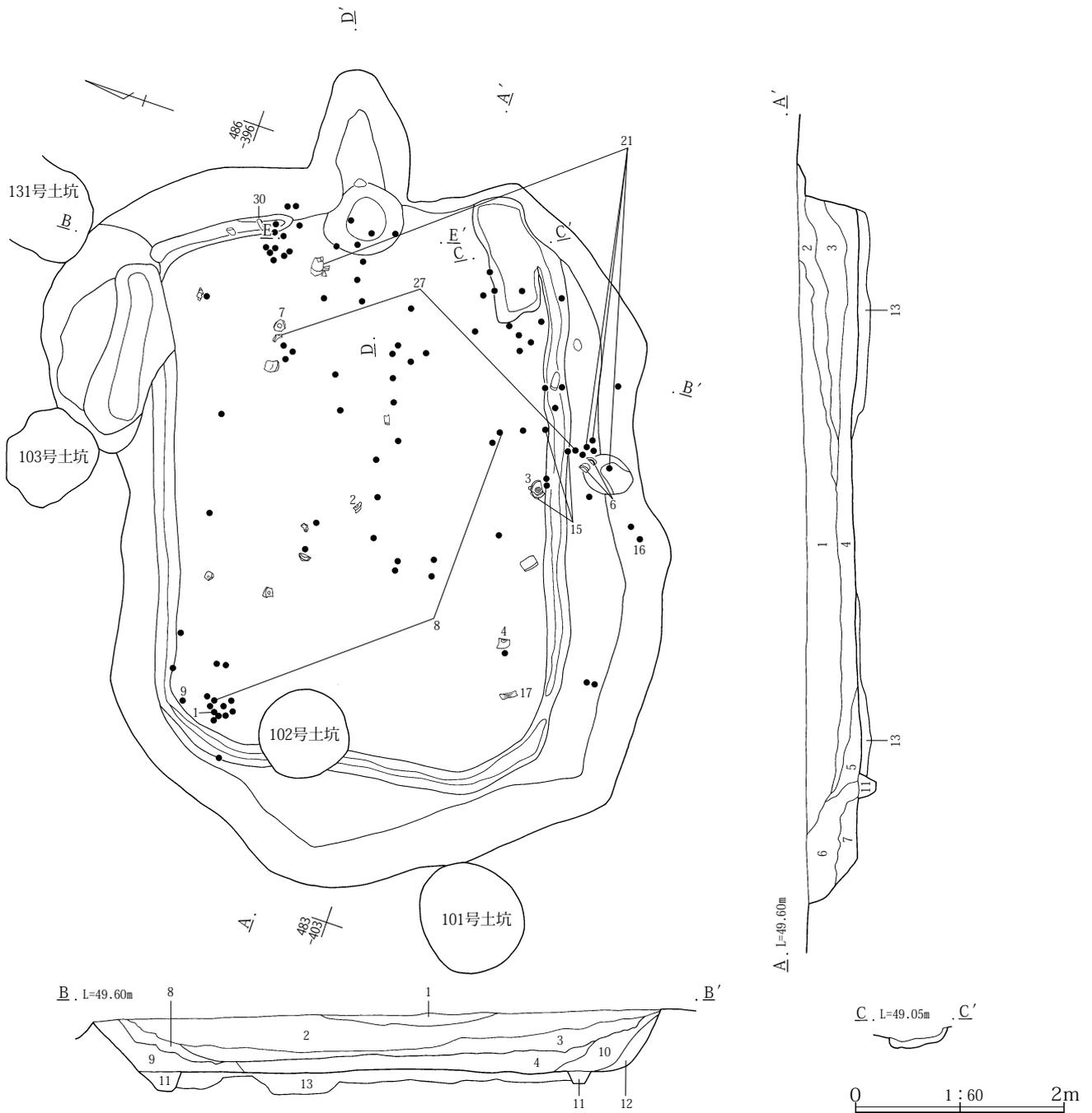
形状：縦長方形

規模：長辺3.7m 短辺3.1m 壁高20cm

主軸方向：N-87°-E

床面積：9.77㎡

本住居は、3区の東側に位置する。周囲に検出された



6号住居

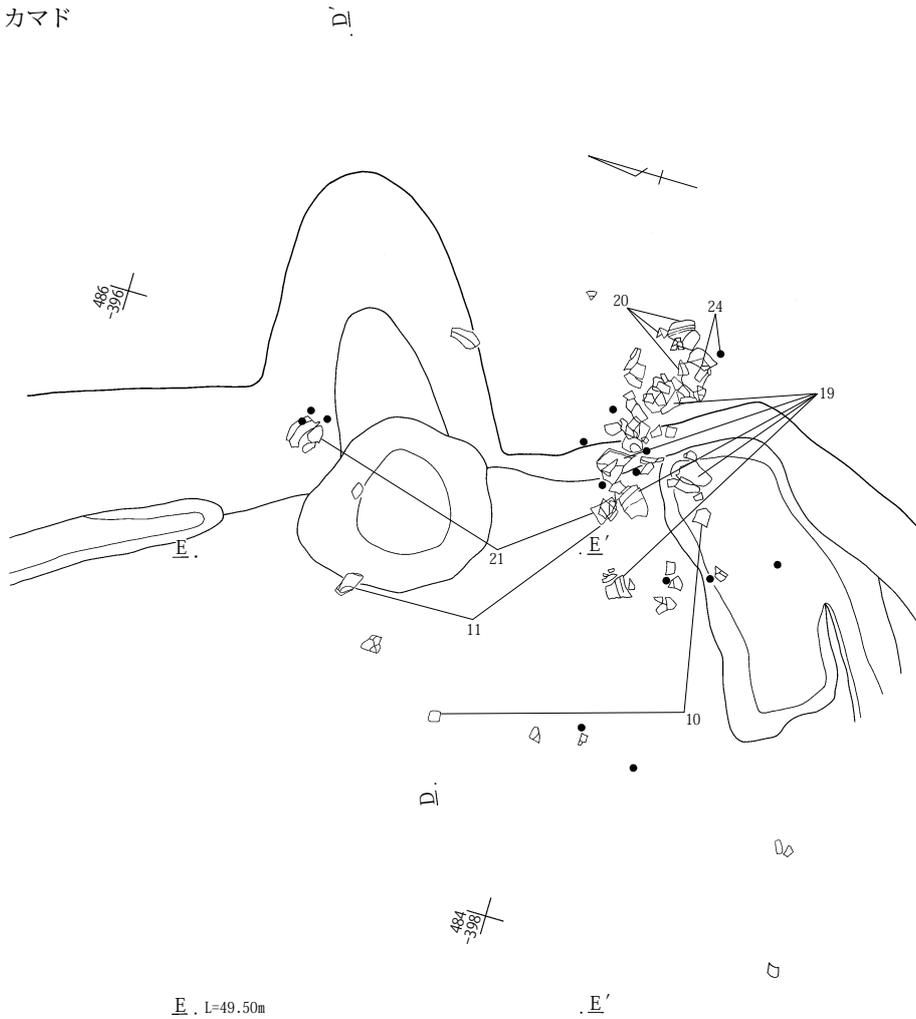
- 1 暗褐色土 白色軽石をやや多く、焼土粒を少量、炭化物を微量含む。砂質ぎみ。
- 2 暗褐色土 白色軽石を少量、焼土粒をやや多く含む。
- 3 暗褐色土 焼土・ローム粒をやや多く、炭化物を少量含む。白色軽石を微量含む。
- 4 暗褐色土 焼土粒をやや多く、ローム粒・炭化物を少量含む。白色軽石を微量含む。若干粘質。
- 5 暗褐色土 焼土粒・炭化物を微量、ローム小ブロックを少量含む。白色軽石をやや多く含む。
- 6 暗褐色土 白色軽石、5mm大の礫を微量含む。
- 7 黒褐色土 白色軽石を微量、ローム粒を少量含む。若干粘質。
- 8 黒褐色土 暗褐色土小ブロックを少量混在させ、焼土粒・白色軽石を微量含む。
- 9 黄褐色土 暗褐色土・黒褐色土を混入。焼土粒・白色軽石を微量含む。
- 10 暗褐色土 焼土・ローム粒を少量含む。
- 11 暗褐色土 ローム粒を少量含む。
- 12 黄褐色土 ローム土を主体とするが、暗褐色土を少量混入。堅く締まる。
- 13 暗褐色土 焼土粒を微量含み、黄褐色土を混在する。上面は堅く硬化する。(掘り方覆土)

6号住居 貯蔵穴 C-C'

暗褐色土 焼土粒を少量、炭化物を微量含む。

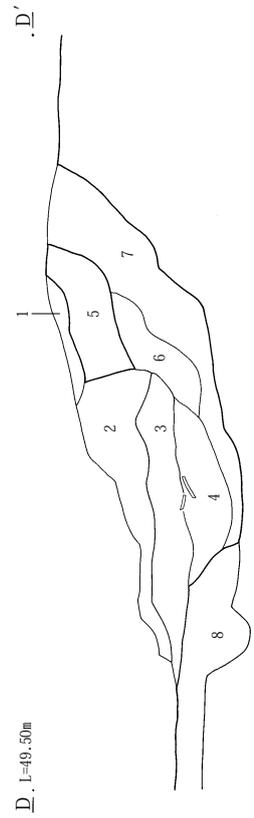
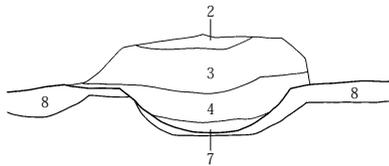
第28図 6号住居平面図

カマド

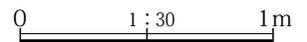


E, L=49.50m

E'



D, L=49.50m

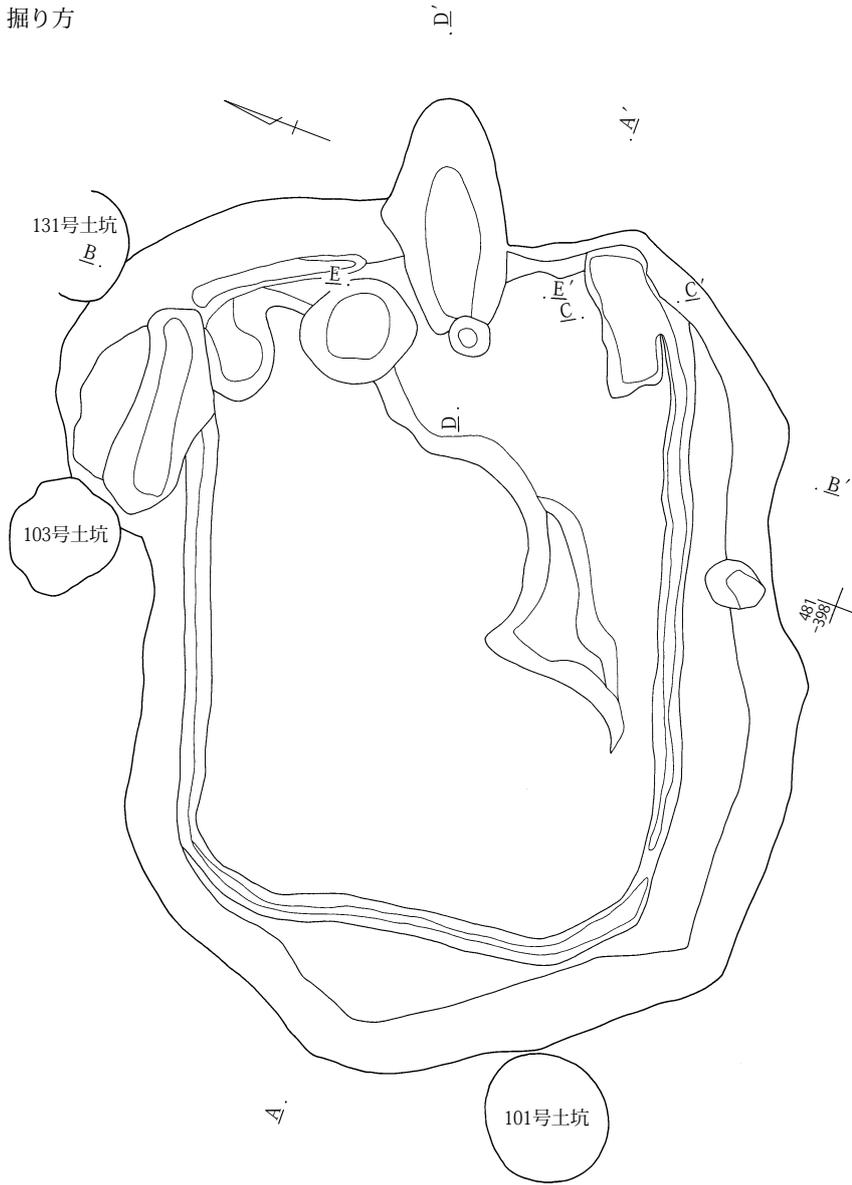


6号住居カマド

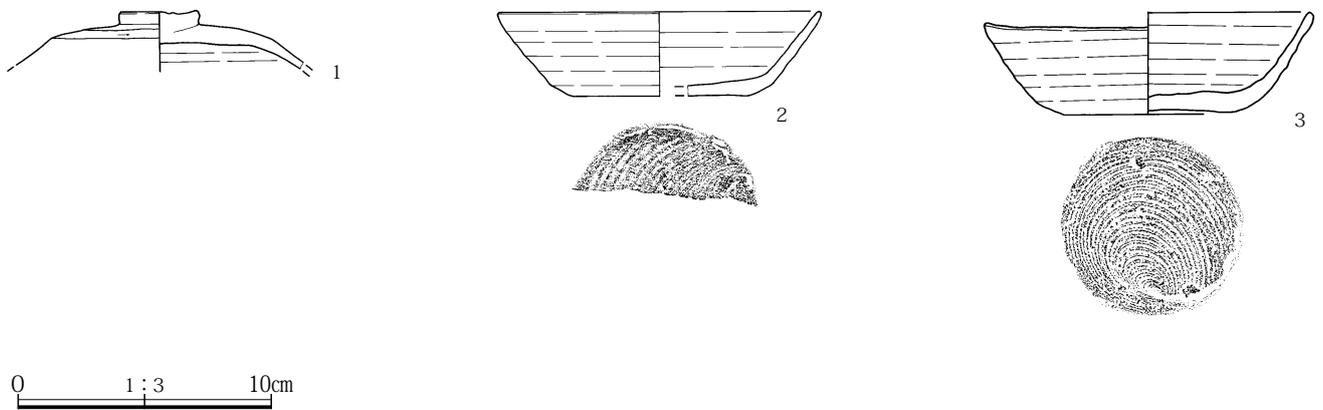
- 1 暗褐色土 ローム土を混入。焼土粒を少量含む。
- 2 黄褐色土 ローム土を主体とし、暗褐色土を混入。焼土粒・白色軽石粒を少量含む。
- 3 暗褐色土 ローム小ブロックを少量、焼土粒をやや多く含む。白色軽石粒を少量含む。
- 4 暗褐色土 焼土粒、灰を多く含む。上位に土器片を含む。
- 5 黄褐色土 ロームを主体とする。下部は被熱し、焼土化する。(残存煙道天井部)
- 6 暗褐色土 焼土粒・ブロックを少量含む。
- 7 黄褐色土 暗褐色土、焼土粒・ブロックをやや多く含む。
- 8 暗褐色土 焼土粒を微量含み、黄褐色土を混在する。住居13層と同じ。(掘り方覆土)

第29図 6号住居カマド平面図

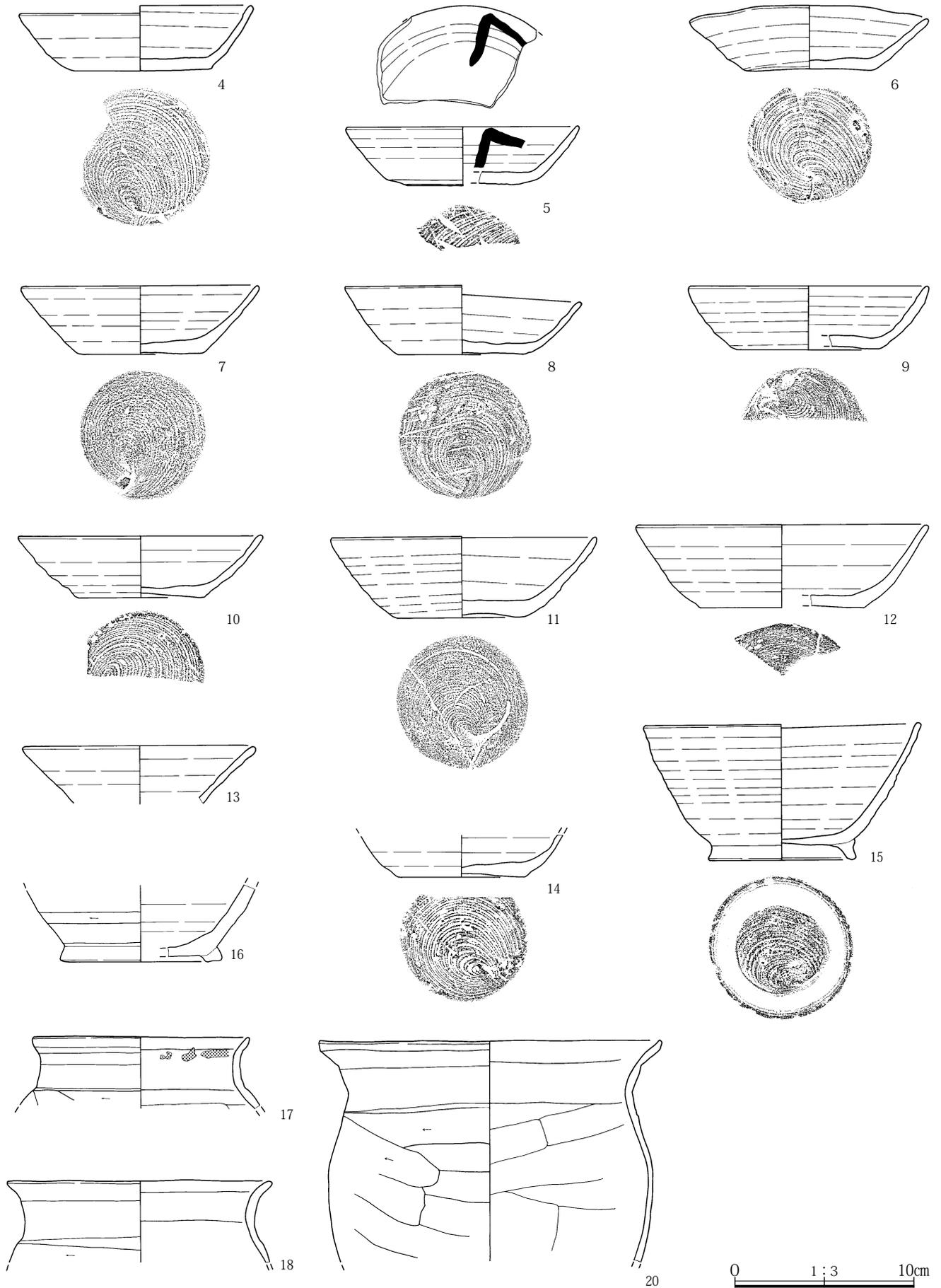
掘り方



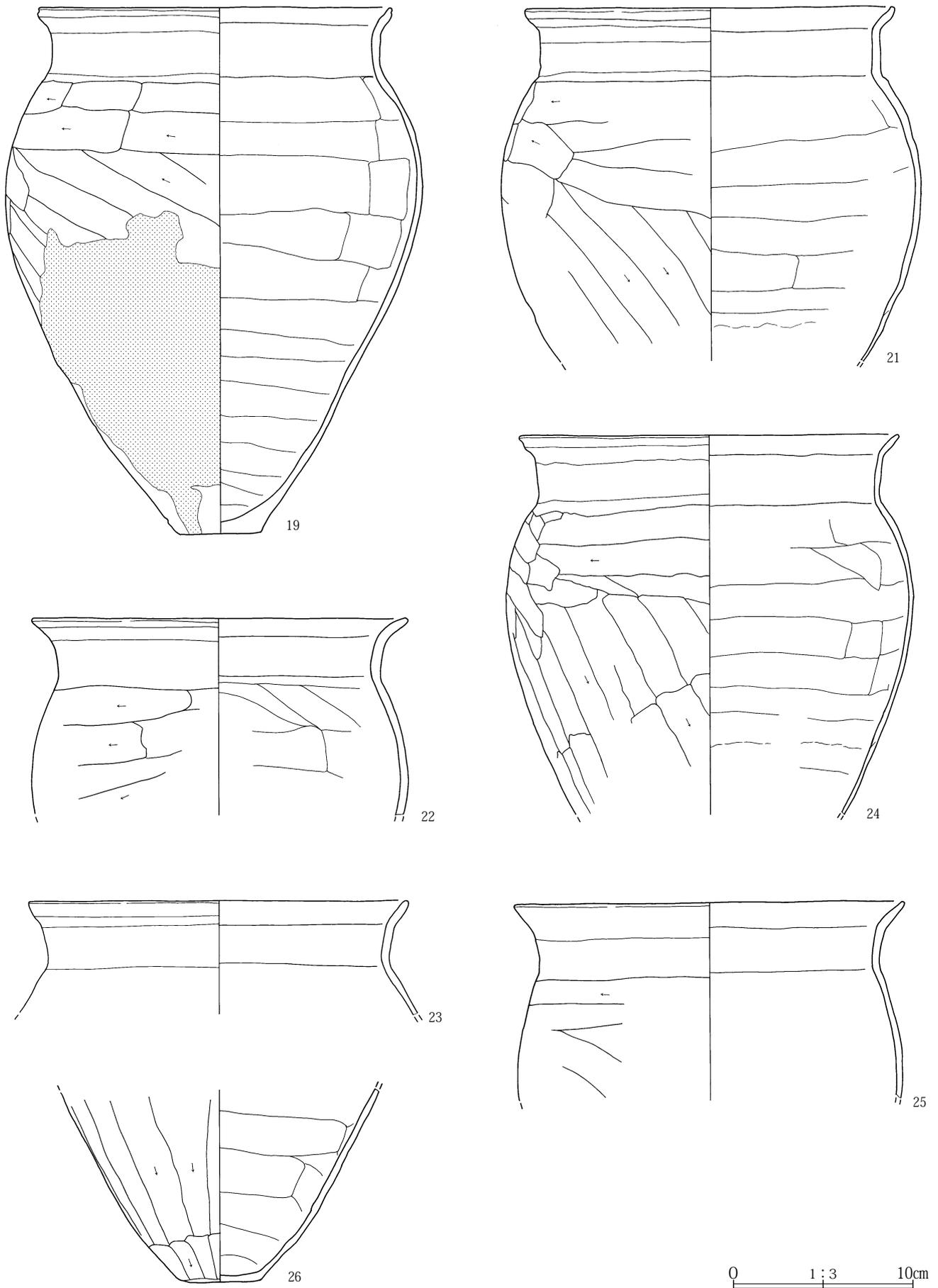
第30図 6号住居掘り方平面図



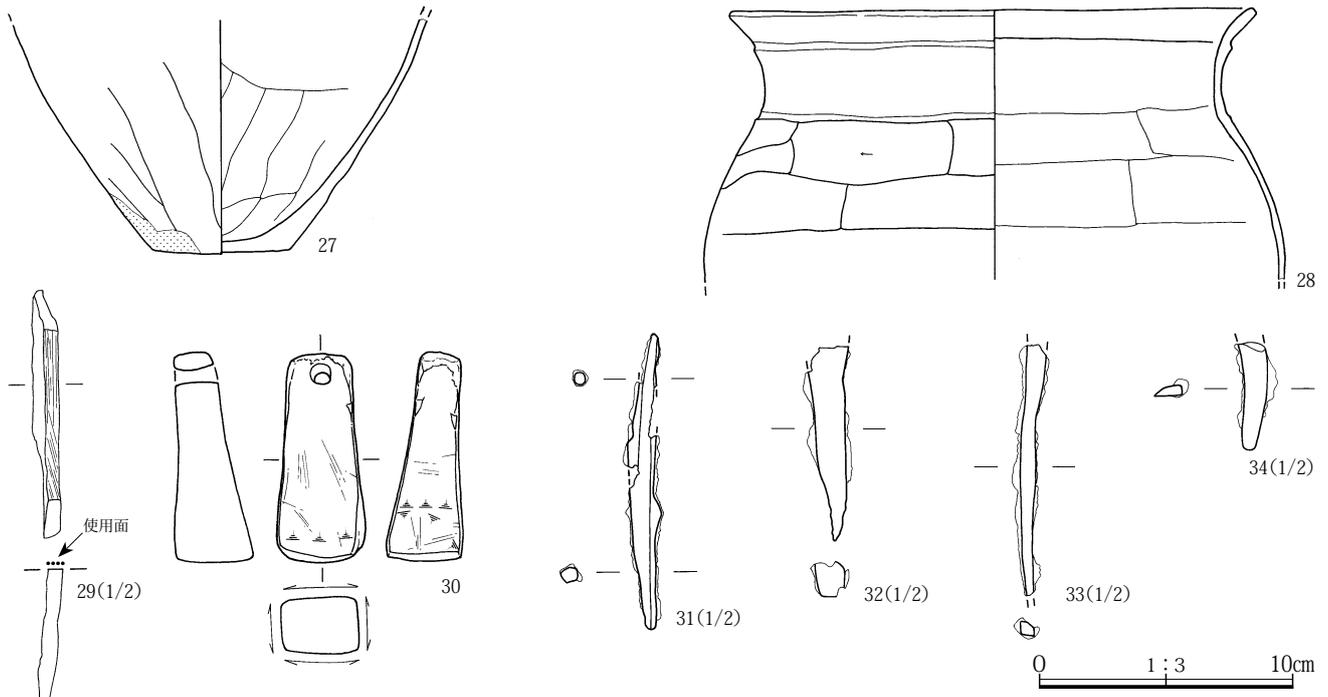
第31図 6号住居出土遺物(1)



第32図 6号住居出土遺物(2)



第33図 6号住居出土遺物(3)



第34図 6号住居出土遺物(4)

第5表 6号住居出土遺物観察表

土器類		出土位置		計測値(cm)	胎土／焼成／色調	成形・整形の特徴	摘要
挿図番号 図版番号	NO. 種類	残存率					
第31図	1 須恵器 杯蓋	埋土中 天井部中ほど片		摘 3.0	細砂粒・粗砂粒・ 長石／還元焰／灰	ロクロ整形、回転右回り。摘みは貼付、天井部は中ほどまで回転ヘラ削り。	
第31図	2 須恵器 杯	埋土中 口縁部～底部片		口 12.4 高 3.3 底 7.0	細砂粒／還元焰／ 灰オリーブ	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転糸切り無調整。	
第31図 PL.35	3 須恵器 杯	床直 口縁部1/3欠損		口 12.7 高 4.0 底 6.8	細砂粒／還元焰／ 灰	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転糸切り無調整。	
第32図 PL.35	4 須恵器 杯	埋土中 3/4		口 12.8 高 3.6 底 7.7	細砂粒・長石／還 元焰／灰	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転糸切り無調整。	
第32図 PL.35	5 須恵器 杯	埋土中 口縁部～底部片		口 12.8 高 3.2 底 6.6	細砂粒／還元焰／ 灰黄	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転糸切り無調整。	内面口縁部に墨書、一部のため判読不能。
第32図 PL.35	6 須恵器 杯 (杓状)	床直 4/5		口 13.0×11.2 高 7.0 底 3.6	細砂粒／還元焰／ 灰	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転糸切り無調整。	
第32図 PL.35	7 須恵器 杯	埋土中 2/3		口 13.0 高 3.8 底 7.0	細砂粒／還元焰／ 灰	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転糸切り無調整。	
第32図 PL.35	8 須恵器 杯	埋土中 3/5		口 13.0 高 3.8 底 7.4	細砂粒・白粒／還 元焰／灰	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転糸切り無調整。	
第32図 PL.35	9 須恵器 杯	埋土中 1/3		口 13.1 高 3.5 底 7.8	細砂粒／還元焰／ 暗灰	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転糸切り無調整。	
第32図 PL.35	10 須恵器 杯	床直 1/4		口 13.4 高 3.4 底 7.0	細砂粒／還元焰／ 灰	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転糸切り無調整。	
第32図 PL.35	11 須恵器 椀	床直 2/3		口 14.5 高 4.5 底 7.5	細砂粒／還元焰／ 灰黄	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転糸切り無調整。	内外面の一部に煤が付着。
第32図	12 須恵器 杯	埋土中 口縁部～底部片		口 16.0 高 4.6 底 9.0	細砂粒／還元焰・ 黒斑／灰	ロクロ整形、回転右回り。底部回転ヘラ削り。	
第32図	13 須恵器 杯	埋土中 口縁部片		口 12.6	細砂粒／還元焰／ 灰	ロクロ整形、回転右回りか。	
第32図	14 須恵器 杯	埋土中 底部～体部片		底 7.0	細砂粒・褐粒／還 元焰／灰	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転糸切り無調整。	
第32図 PL.35	15 須恵器 椀	床直 口縁部1/4欠損		口 15.1 高 7.6 底 7.9 台 7.9	細砂粒・粗砂粒・ 長石・角閃石／還 元焰／灰	ロクロ整形、回転右回り。高台は貼付、底部は回転糸切り。	
第32図	16 灰釉陶器瓶	埋土中 底部～胴部下位片		底 8.4 台 7.2	微砂粒／還元焰／ 灰白	ロクロ整形、回転右回り。高台は貼付、底部は回転ヘラナデ、胴部下位は回転ヘラ削り。	内面底部に降灰が付着。

第3章 検出された遺構と遺物

挿図番号 図版番号	NO.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値(cm)	胎土／焼成／ 色調	成形・整形の特徴	摘要
第32図	17	土師器 甕	埋土中 口縁部～胴部上 位片	口 11.8	細砂粒／良好／鈍 い赤褐	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面胴部はヘ ラナデ。	内面口縁部に 煤が付着。
第32図	18	土師器 甕	埋土中 口縁部～胴部上 位片	口 14.4	細砂粒・雲母／良 好／赤褐	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面胴部はヘ ラナデ。	
第33図 PL.35	19	土師器 甕	カマド右側 3/4	口 19.4 高 29.3 底 4.6 胴 22.8	細砂粒多・雲母／ 良好／赤褐	口縁部から頸部は横ナデ、胴部から底部はヘラ削り。内面 は底部から胴部はヘラナデ。	外面胴部下半 に粘土付着。
第32図	20	土師器 甕	カマド右側 口縁部～胴部上 位片	口 18.9	細砂粒／良好／に ぶい赤褐	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面胴部はヘ ラナデ。	
第33図 PL.35	21	土師器 甕	埋土中 口縁部～胴部中 位	口 20.1 胴 23.2	細砂粒多・ガラス 質粒／良好／明赤 褐	内面胴部に輪積み痕が残る。口縁部から頸部は横ナデ、胴 部はヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。	
第33図	22	土師器 甕	埋土中 口縁部～胴部上 位片	口 20.5		細砂粒／良好／鈍い赤褐	口縁部から頸 部は横ナデ、 胴部はヘラ削 り。内面胴部 はヘラナデ。
第33図	23	土師器 甕	埋土中 口縁 部～胴部上位片	口 20.6	細砂粒／良好／鈍 い赤褐	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面胴部はヘ ラナデ。	
第33図 PL.35	24	土師器 甕	カマド右側上口 縁部～胴部中位	口 20.8 胴 22.6	細砂粒／良好／赤 褐	内面胴部中位に輪積み痕が残る。口縁部から頸部は横ナデ、 胴部はヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。	
第33図	25	土師器 甕	埋土中 口縁 部～胴部上位片	口 21.2	細砂粒／良好／鈍 い橙	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面胴部はヘ ラナデ。	
第33図	26	土師器 甕	埋土中 底部～胴部下位	底 4.2	細砂粒・雲母／良 好／褐灰	底部と胴部はヘラ削り。内面はヘラナデ。	
第34図 PL.35	27	土師器 甕	埋土中 底部～胴部下位	底 5.2	細砂粒／良好／明 赤褐	底部と胴部はヘラ削り。内面はヘラナデ。	外面の一部に 粘土付着。
第34図 PL.36	28	土師器 甕	埋土中 口縁部～胴部上 位片	口 20.4	細砂粒・褐粒／良 好／鈍い黄橙	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面胴部はヘ ラナデ。	

石製品

挿図番号 図版番号	NO.	器 形態・素材	出土位置	長 (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	重 (g)	製作・使用状況	石 材
第34図 PL.46	29	砥石 切り砥石	埋土中	(6.5)	(0.7)	(3.7)	13.1	層理面で薄く剥がれ、背面のみに使用面が残る。石材的 には、仕上げ砥として多用されることが多い。	珪質粘板岩
第34図 PL.46	30	砥石	埋土中	8.2	3.4	2.0	108.7	上端側小口部を除く各面を使用。上端側に径5mm(最小径) の孔を両側穿孔する。	砥沢石

金属製品

挿図番号 図版番号	NO.	種類 器種	出土位置 残存率	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	特徴・状態	備 考
第34図 PL.49	31	鉄器 鍔	埋土中 茎部～頸部 片	(5.2)	1.0	0.8	(9.3)	頸部にねじれがみられる。錆化。	
第34図 PL.49	32	鉄器 釘	埋土中 先端部片	(5.2)	1.0	0.8	(9.3)	錆化が激しい。	
第34図 PL.49	33	鉄器 釘	埋土中 先端部側片	(6.6)	0.5	0.5	(5.7)	ねじれがみられる。錆化が進んでいる。	
第34図 PL.49	34	鉄器 刀子	埋土中 一部片	(2.8)	0.7	0.3	(1.4)	錆化が激しい。内部が空洞化している。	

遺構は極めて希薄で、重複もない。周囲の同時期の遺構には、本住居の西北西16m付近に127号土坑、西北西20mに6号住居が点在する。

住居の残存状態は良好であるが、床面までの掘り込みはやや浅い。埋土は、1層の旧耕作土で上面が荒れ、暗褐色土を主とした2～5層に分層できる。埋土中には、

ローム土を少量混在させることから人為的堆積の可能性をもつ。壁の状態は、全体にやや傾斜をもって立ち上る。床面は平坦で、周溝をもつ。周溝は、カマドを有する東壁の北東隅付近から西壁中央南寄りまでと、南東隅から南西隅付近までの間で、西壁際は連続せずに途切れる。幅17cm、深さ5cm前後を測る。カマドは東壁の中央

南寄りに位置する。残存する規模は、全長1.57m(焚き口から燃焼部長1.49m)、幅94cmを測る。残存状態はやや良好。左袖の一部は残存していたが、右袖は残存していない。焚き口部から燃焼部底面の窪みが住居内にあり、煙道部が壁の外側に突出する。また、断面観察から、残存する袖部はロームを混在させた暗褐色土等で構築されている。支脚等は検出されていない。貯蔵穴はカマドの右側で、住居の南東隅に位置する。楕円形を呈し、規模は長軸30cm、短軸23cm、深さ6cmを測り、小さい。柱穴は検出されていない。

床面はローム面に構築されており、下部構造は検出されていない。

遺物の出土状況は、住居内全体から散漫に出土しており、その大半が埋土中からで、出土量は少ない。ただし、カマド先端となる煙道部に、僅かに集中している。図示した1～3の須恵器杯3点の内、2はカマド煙道部から出土。4の須恵器椀は南西隅付近の周溝上面の床直。5の甕はカマド煙道部からの出土である。他に、未掲載遺物として土師器片44片、須恵器片3片がある。

出土土器から、本住居は9世紀第2四半期と考えられる。

8号住居 (第37～40図、第7・49表、PL. 6・36・46)

位置(座標)：X軸=36,435～36,439

Y軸=-39,413～39,417

形状：横長方形

規模：長辺3.6m 短辺2.95m 壁高50cm

主軸方向：N-65°-E

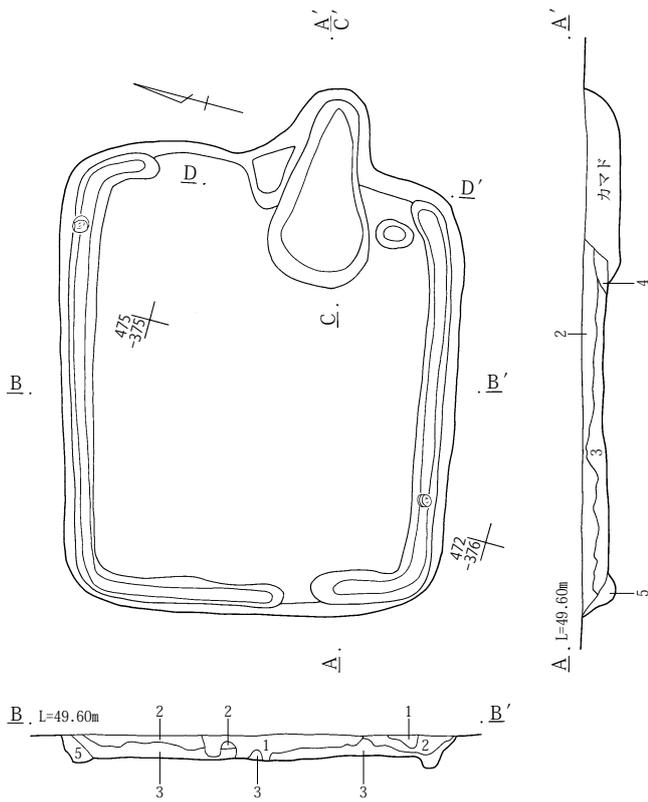
床面積：8.28㎡

本住居は、2区の南側で調査範囲境付近に位置し、東西方向に延びる20号溝の南側にあり、20号溝と一部を重複する。この20号溝よりも本住居が古い。また、住居の西側が9号住居と重複する。プラン上での重複状況は、南壁ラインがほぼ同一線上にあり、9号住居の西壁ラインが本住居の東壁ラインに平行し、北壁ラインが僅かに食い違いを生じていた。調査当初は1軒の住居として調査を進めたが、床面の高さが両者で異なる点、さらに土層断面の確認から両者は異なる住居であり、本住居が新しいことを確認した。周囲の同時期の遺構には、本住居の北西5mに10号住居が、南西4m程には30号住居が近接する。

住居の残存状態は、住居の北東隅を掠めるように20号溝と重複し、西側で9号住居と重複するものの、床面までの掘り込みが深く、かなり良好な状態にある。本住居の埋土は、第37図に示した1～4層に分層でき、暗褐色土と黒褐色土を主としている。ちなみに、5・6層は重複する9号住居の埋土である。埋土中には、ローム小ブロックを多量に混在させることから人為的堆積と考えられる。壁の状態は、やや傾斜をもって立ち上がるが、カマドを有する東壁では下部は直立ぎみとなるが、上部は広がる。また、南東隅では、南側に膨らみをもつように出張る。床面は平坦であり、部分的に壁周溝が検出された。壁周溝は北壁から西壁にかけてで、幅17cm前後、深さ5cmを測る。カマドは東壁の中央に位置する。残存する規模は、全長1.26m(焚き口から燃焼部長74cm、煙道部長52cm)、幅1.09mを測る。残存状態は良好で、両袖部は住居内に張り出し、焚き口部から燃焼部底面の窪みが住居内から壁の外側に僅かにかかり、煙道部が壁の外側に突出する。また、断面観察から、煙道部にはロームを主とした黄褐色土の天井部が残存しており、天井下部は比熱し、焼土化していることも確認されている。残存する袖部は、ロームを掘り残して袖の芯とし、その周囲にロームを混在ないし主とした暗褐色土・黄褐色土を積み上げて構築されている。なお、支脚等は検出されていない。貯蔵穴はカマドの右側で、住居の南東隅に位置する。楕円形を呈し、東壁に接するように横長に配置され、規模は長軸85cm、短軸43cm、深さ31cmを測る。柱穴は検出されていない。

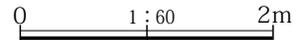
床面はローム面に構築されており、掘り方は無いものの、床下土坑が検出されている。床下土坑は、南西隅付近と貯蔵穴の西側に接した箇所位置する。南西隅付近の床下土坑は、長軸方向を西壁に平行した楕円形を呈し、長軸1.2m、短軸73cm、深さ23cmを測る。貯蔵穴の西側に接する床下土坑は、径50cmと径60cmの円形の2基からなり、深さは両者28cmを測る。

遺物の出土量は多いものの、調査当初の段階で重複する9号住居を合わせた1軒として埋土中の遺物を取り上げたため、その帰属性は不明なものが多い。本住居遺物として帰属の明確な遺物は67点である。遺物の出土状況は、カマド周辺から中央部にかけての範囲に比較的多く、貯蔵穴周辺に目立つ。ただし、床直の遺物は少ない。ま

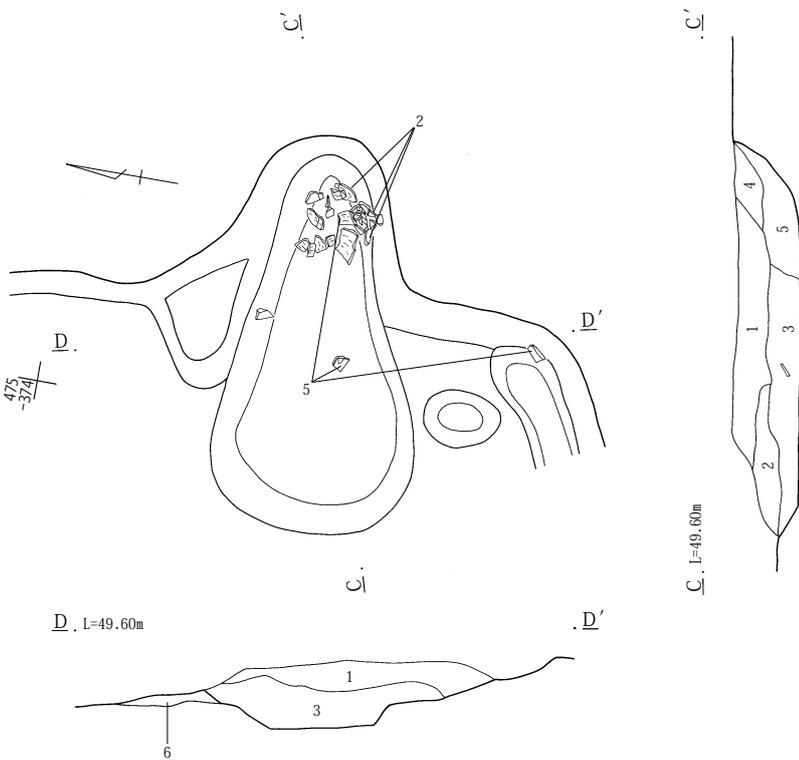


7号住居

- 1 暗褐色土
旧耕作土。白色軽石粒をやや多く含み、砂質。
- 2 暗褐色土
白色軽石粒をやや多く、ローム粒を少量含む。
- 3 暗褐色土
白色軽石粒を少量、ローム土少量含む。
- 4 暗褐色土
ローム小ブロック、焼土粒、炭化物を微量含む。
- 5 暗褐色土
ローム土をやや多く混入。

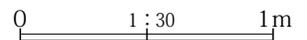


カマド

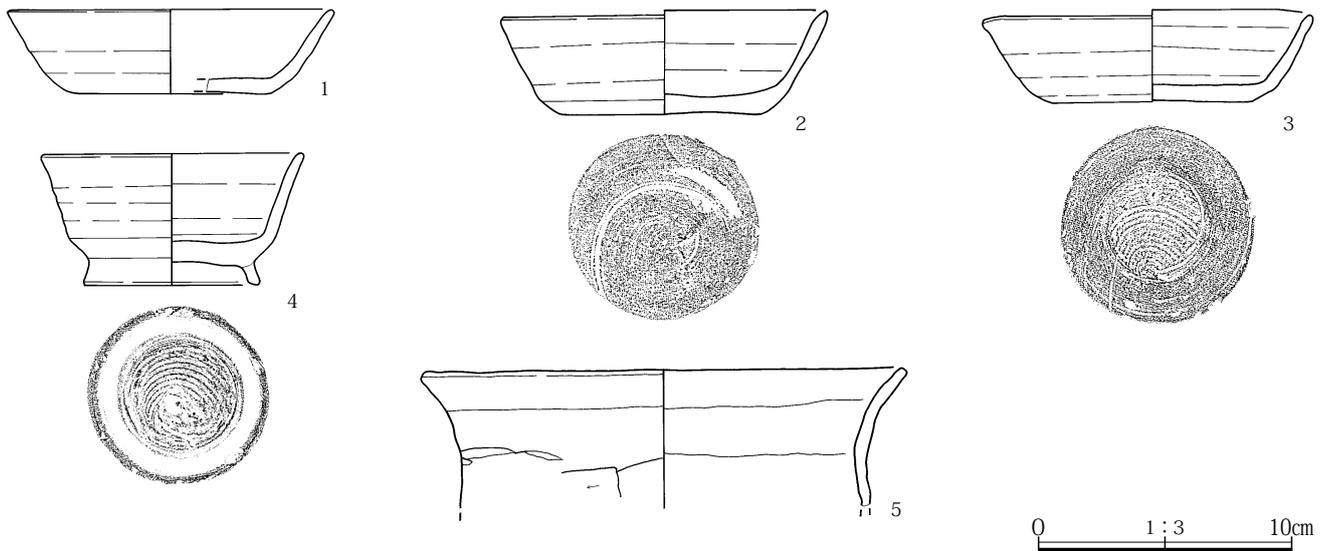


7号住居カマド

- 1 暗褐色土
旧耕作土が混入し砂質。白色軽石粒を微量含む。
- 2 暗褐色土
粘土粒、白色軽石粒、焼土粒を微量含む。
- 3 暗褐色土
2層に似るがやや暗く、炭化物を微量含む。
- 4 赤褐色土
焼土小ブロックを主体とし、暗褐色土を混入。
- 5 暗褐色土
焼土粒を含みや赤味がかかる。ローム小ブロックを少量含む。
- 6 暗褐色土
ローム土を混在。焼土粒・炭化物を微量含む。
(残存袖部)



第35図 7号住居・カマド平面図



第36図 7号住居出土遺物

第6表 7号住居出土遺物観察表

挿図番号 図版番号		NO.	種類	出土位置 残存率	計測値(cm)	胎土／焼成／ 色調	成形・整形の特徴	摘要
第36図		1	須恵器 杯	埋土中 1/5	口 12.4 高 3.3 底 8.0	細砂粒・褐粒／酸 化焰／鈍い赤褐	ロクロ整形、回転右回り。底部回転ヘラ削り。	
第36図 PL.36		2	須恵器 杯	カマド内 4/5	口 12.6 高 4.1 底 7.4	細砂粒／酸化焰／ 鈍い黄橙	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転糸切り無調整。	
第36図 PL.36		3	須恵器 杯	埋土中 完形	口 12.7 高 3.6 底 7.9	細砂粒／酸化焰／ 黄褐	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転糸切り後周囲を回転ヘラ削り。	
第36図 PL.36		4	須恵器 椀	床直 完形	口 10.0 高 5.2 底 6.5 台 7.0	細砂粒／還元焰／ 灰白	ロクロ整形、回転右回り。高台は貼付、底部は回転糸切り。	
第36図 PL.36		5	土師器 甕	カマド内 口縁部～胴部上 位片	口 18.6	細砂粒／良好／鈍 い橙	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。	

た、カマド右脇となる貯蔵穴際の壁の外側位置から、図示した10の甕が纏まって出土しており、先述した6号住居例に類する住居構造が推測される。

図示した遺物には、1～3の須恵器杯、4の須恵器椀がある。14は須恵器の甕で南西隅付近の床下土坑から出土し、26・28号住居出土の破片と接合しており、住居間の関係を示している。ちなみに、この甕の内面底部付近には、受け状の小孔を3カ所確認でき、2孔一対の小孔と考えられる。5は土師器の小型台付き甕の脚部、6～13の甕はコ字口縁甕を主に8点と多く、6はカマド内からの出土である。9は貯蔵穴の西側に接する床下土坑から出土している。他に、8・9号住居の帰属不明遺物を含め、未掲載遺物として土師器片597片、須恵器片105片、灰釉陶器1片が出土している。

出土土器から、本住居は9世紀第3四半期と考えられる。

9号住居 (第37・41図、第8・49表、PL. 6・36)

位置(座標)：X軸=36,434～36,438

Y軸=-39,415～39,419

形状：方形

規模：長辺3.3m 短辺(1.83)m 壁高37cm

主軸方向：不明

床面積：(4.74) m²

本住居は、2区の南側で調査範囲境付近に位置し、東西方向に延びる20号溝の南側にあり、住居の東側が8号住居と重複する。プラン上での重複状況は、先述した通りで、調査当初は1軒の住居として調査を進めたが、床面の高さが両者で異なる点、さらに土層断面の確認から両者は異なる住居であり、本住居が古いことを確認した。周囲の同時期の遺構には、本住居の北西4mに10号住居が、南西3m程に30号住居が近接する。

住居の残存状態は、東側で8号住居と重複することか

ら、住居の西半が残存し、カマドの痕跡は確認されていない。本住居の埋土は、第37図に示した5・6層に分層でき、暗褐色土を主としている。ちなみに、1～4層は重複する8号住居の埋土である。埋土中には、ローム小ブロックを多量に混在させることから人為的堆積と考えられる。壁の状態は、僅かに傾斜をもって立ち上がる。床面は、重複する8号住居の床面より15cm程高い位置にあり、平坦で壁周溝が検出された。壁周溝は残存する壁際を全周し、幅15cm前後、深さ5cmを測る。カマドは残存していない。

床面はローム面に構築されており、掘り方等の下部構造は検出されていない。

出土した遺物についても、先述したようにその帰属は不明なものが多く、本住居遺物として帰属の明確な遺物は少ない。遺物の出土状況は、全体に散漫で、床直遺物は少ない。図示した遺物には、1の須恵器杯、2の小型台付き甕の脚部、3～5の甕で計5点である。3と4は同一個体と考えられるコ字口縁甕であり、床直付近から出土。他に、帰属の明らかな遺物には、未掲載遺物として土師器片50片、須恵器片5片が出土している。

出土土器から、本住居は9世紀第3四半期と考えられる。

10号住居（第42・43図、第9・49表、PL. 6・37）

位置(座標)：X軸=36,439～36,443

Y軸=-39,421～39,425

形状：横長方形

規模：長辺3.35m 短辺(2.85)m 壁高55cm

主軸方向：N-45°-E

床面積：(4.09) m²

本住居は、2区の南側に位置する。東西方向に延びる20号溝と大きく重複し、20号溝の北側を併走する24号溝とも重複する。遺構確認時および20号溝調査後に、本住居の存在が明らかとなり、これら重複する両溝よりも本住居が古いことを確認している。周囲の同時期の遺構には、本住居の南東5mに8・9号住居が、南4mに30号住居が、さらに北西5mに15号住居が近接する。

住居の残存状態は、20号溝と大きく重複するため、住居の南東隅から西壁中央にかけて帯状に残存していない。また、24溝との重複では、住居の床面までの掘り込みが深いことにより、カマドの上部が壊されるにとど

まっている。このため、残存するのは、カマドを含めた住居の北半と、20号溝底面を挟んだ住居の南西隅部分である。埋土は、暗褐色土と黒褐色土を主に2～5層に分層できる。ちなみに、1層は重複する24号溝の埋土である。埋土中には、ローム小ブロックを多く混在させることから人為的堆積と考えられる。壁の状態は、直立ぎみに立ち上がる。床面は平坦であり、壁周溝は検出されていない。なお、南西隅付近のピットは、近世以降のものである。カマドは東壁の中央やや南寄りに位置する。残存する規模は、全長1.36m(焚き口から燃焼部長1.01m、煙道部長35cm)、幅1.07mを測る。残存状態は良好で、両袖部は住居内に張り出し、焚き口部から燃焼部底面の窪みが住居内から壁の外側に僅かにかかり、煙道部が壁の外側に突出する。煙道の内側口の位置は、燃焼部底面よりも一段高い位置から続く。また、断面観察から、残存する袖部はロームを掘り残して構築したことがわかる。支脚等は検出されていない。貯蔵穴は不明。

床面はローム面に構築されており、掘り方等の下部構造は検出されていない。

遺物の出土状況は、その大半が埋土中からで、出土量も少ない。図示した須恵器の杯1点も埋土中からである。他に、未掲載遺物として土師器片41片、須恵器片7片がある。

出土土器から、本住居は9世紀第3四半期と考えられる。

11号住居（第44・45図、第10・49表、PL. 7・37）

位置(座標)：X軸=36,451～36,456

Y軸=-39,420～39,424

形状：縦長方形

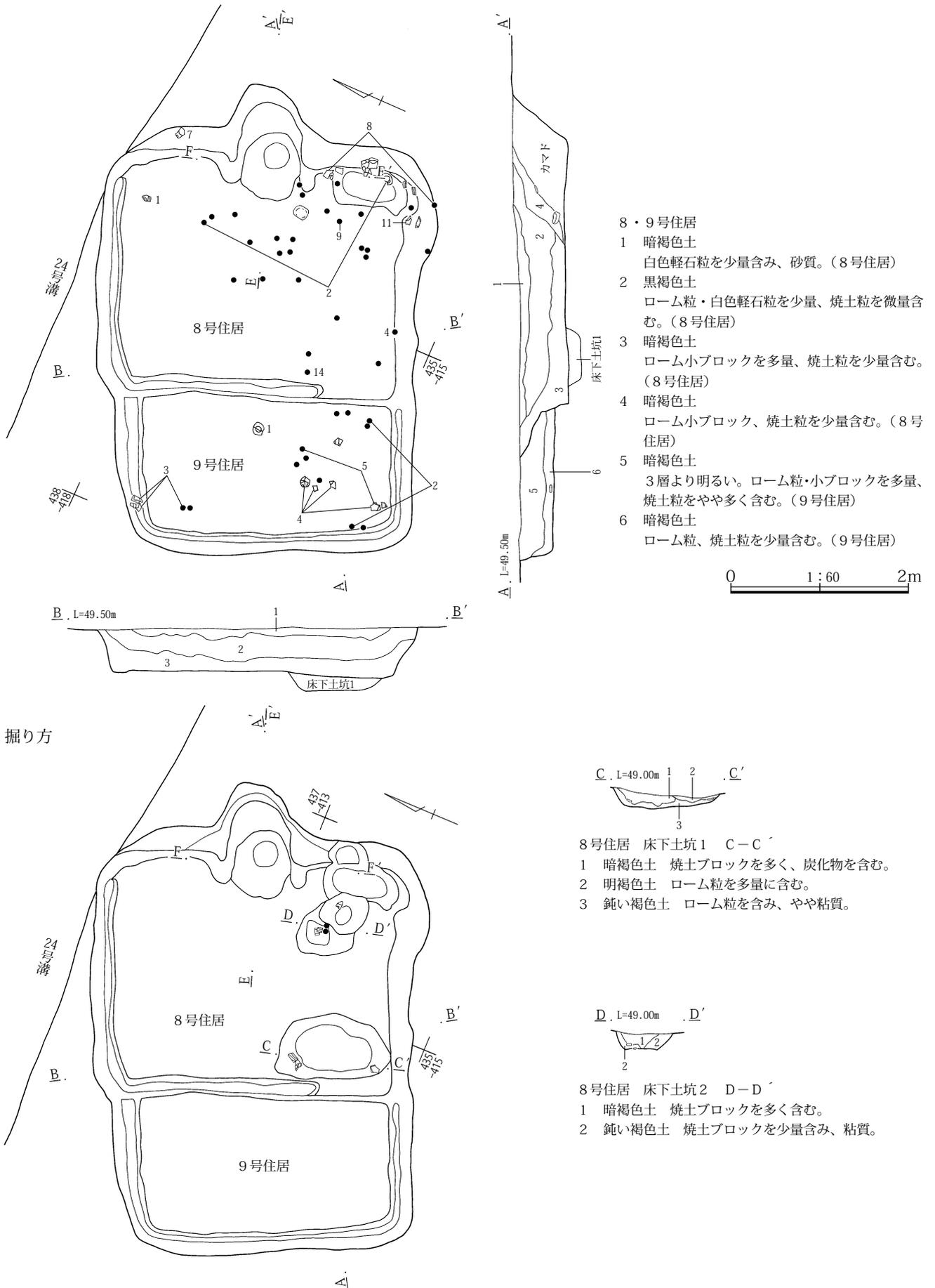
規模：長辺3.5m 短辺3.0m 壁高47cm

主軸方向：N-73°-E

床面積：6.78m²

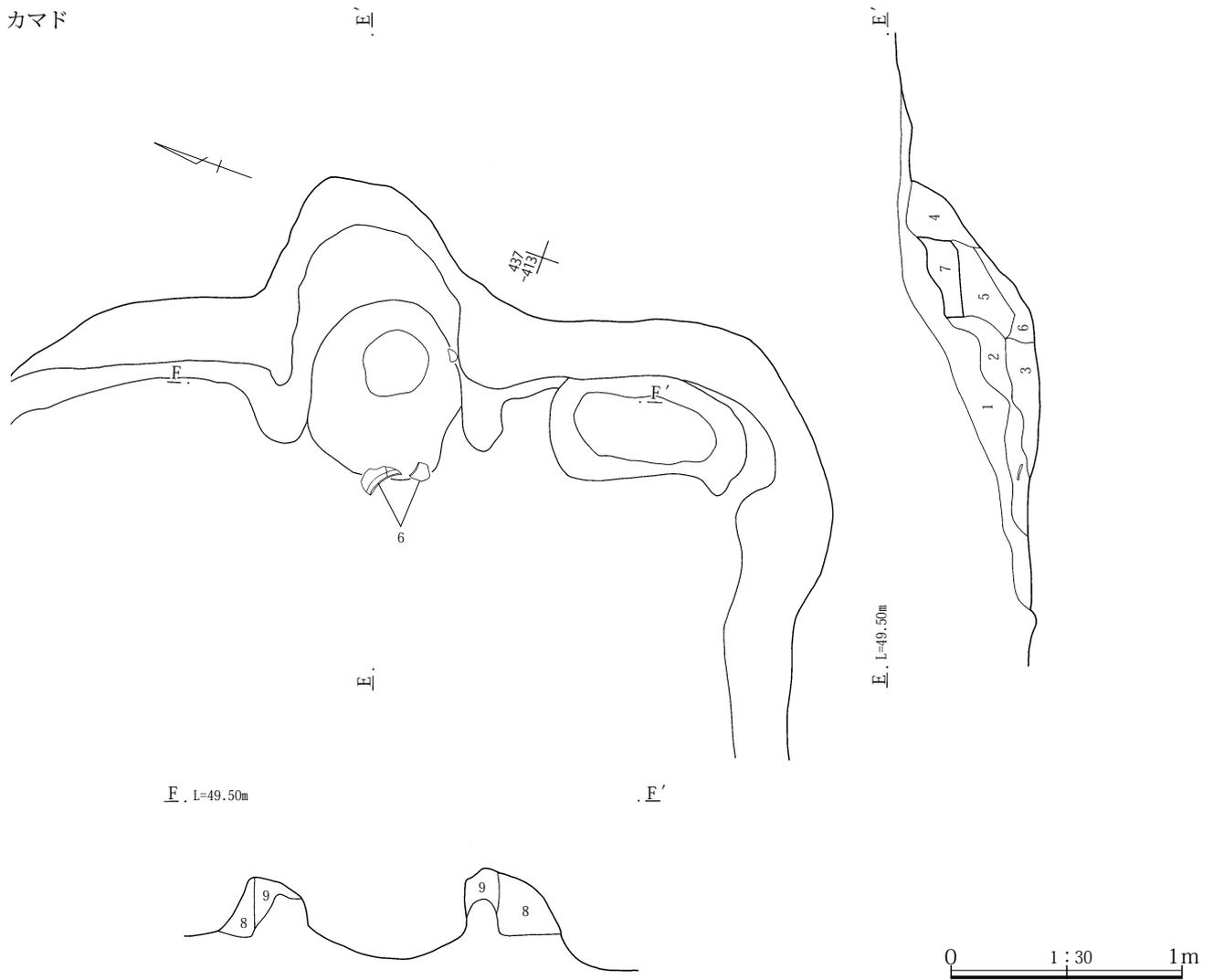
本住居は、2区の中央付近に位置し、住居の東側が僅かに161号土坑と重複する。遺構確認および土層断面の確認から、本住居が新しいことを確認している。周囲の同時期の遺構には、本住居の南西5mに重複する15・16号住居がある。また、東側には総柱となる1・2号掘立柱建物がある。

住居の残存状態は、カマド煙道部の先端が僅かに161号土坑と重複するものの、床面までの掘り込みも深く、



第37図 8・9号住居平面図

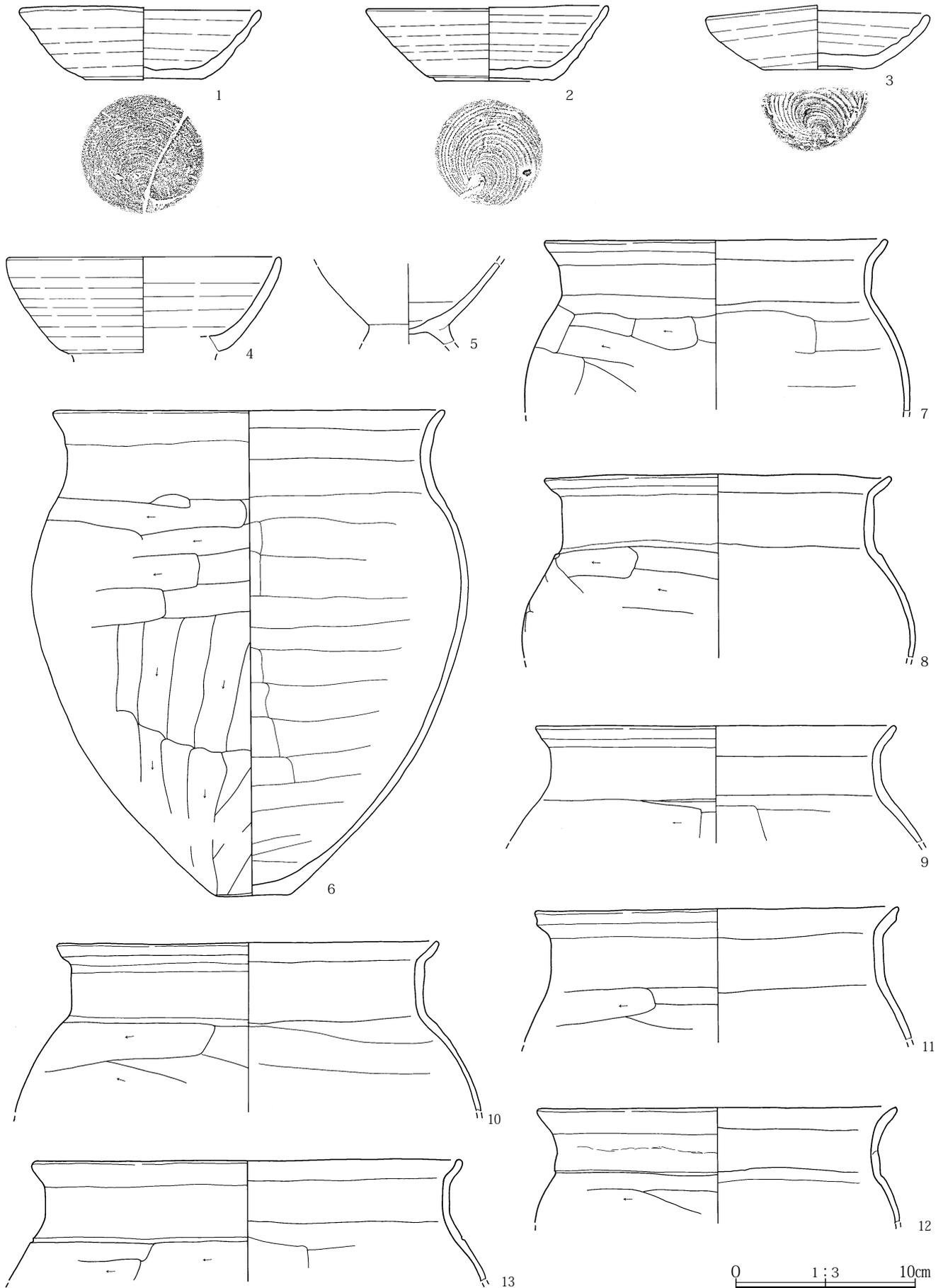
カマド



8号住居カマド

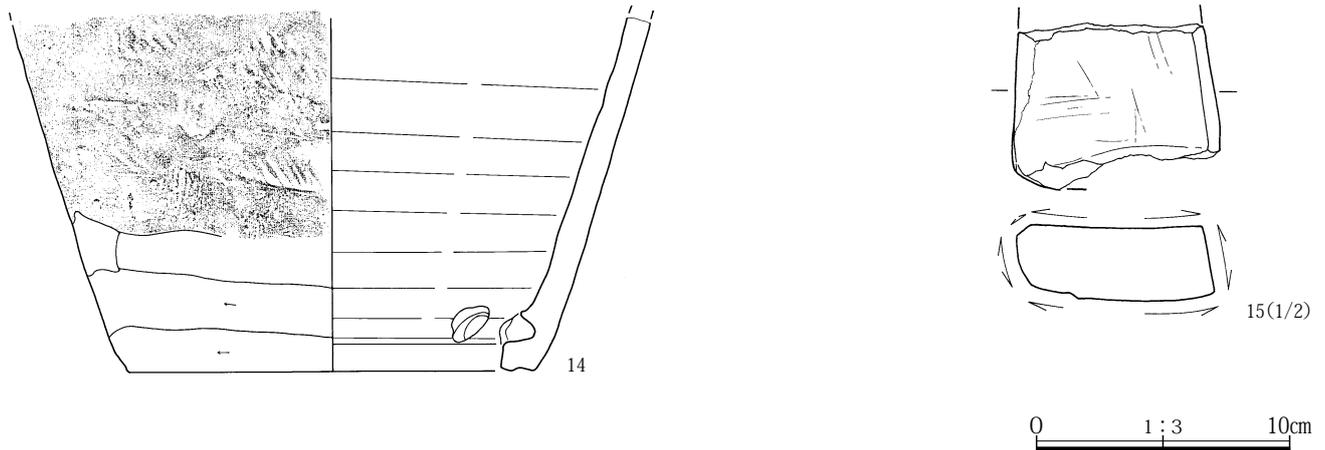
- 1 暗褐色土 ローム小ブロック、焼土粒を少量含む。住居4層と同じ。
- 2 黄褐色土 ローム土を主体とし、焼土粒を少量含む。
- 3 赤褐色土 焼土混入し、赤味がかかる。焼土粒をやや多く含む。
- 4 黄褐色土 ローム土を主体とし、焼土混入し赤味がかかる。
- 5 暗褐色土 焼土粒・ブロックを多量、炭化物を少量含む。
- 6 暗褐色土 ローム粒・小ブロックを多く、焼土粒を少量含む。
- 7 黄褐色土 ローム土を主体とし、堅く締まる。下部は被熱し、焼土化する。(残存煙道天井部)
- 8 暗褐色土 ローム土を多量に混在する。(残存袖部)
- 9 黄褐色土 ローム土を主体とし、暗褐色土・焼土粒を微量含む。(残存袖部)

第38図 8号住居カマド平面図



第39図 8号住居出土遺物(1)

第3章 検出された遺構と遺物



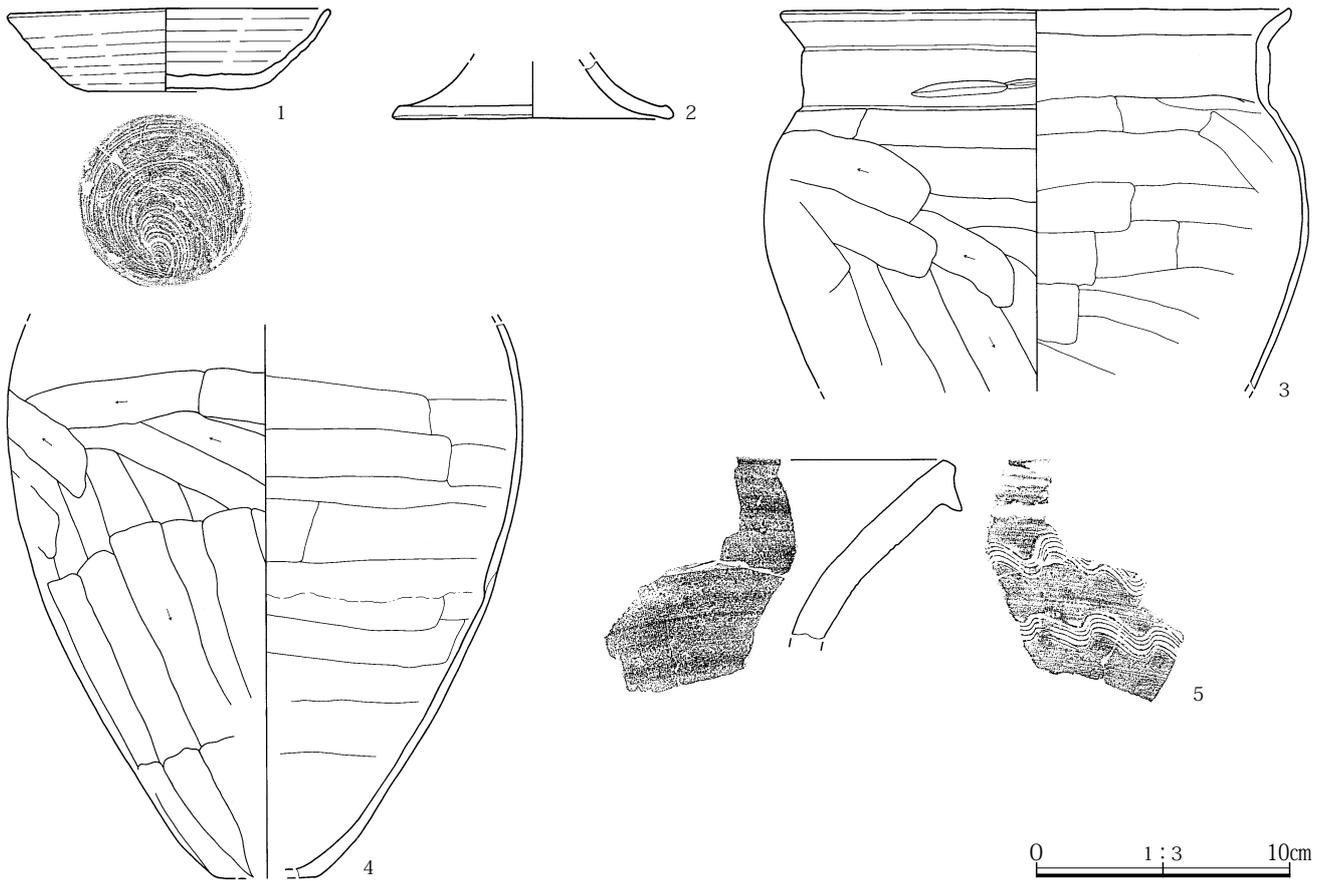
第40図 8号住居出土遺物(2)

第7表 8号住居出土遺物観察表

挿図番号 図版番号		NO.	種類	出土位置 残存率	計測値(cm)		胎土 / 焼成 / 色調	成形・整形の特徴	摘要
第39図 PL.36	1	須恵器 杯	埋土中	2/3	口 13.2 底 6.9	高 4.1	細砂粒 / 還元焰 / 灰オリーブ	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転糸切り無調整。	口縁部に歪がみられる。
第39図 PL.36	2	須恵器 杯	埋土中	口縁部1/4欠損	口 13.2 底 7.0	高 4.2	細砂粒 / 酸化焰きみ / 灰オリーブ	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転糸切り無調整。	
第39図 PL.36	3	須恵器 杯	埋土中	3/4	口 12.0 底 6.0	高 3.4	細砂粒・粗砂粒 / 還元焰 / 灰	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転糸切り無調整。	
第39図	4	須恵器 椀	埋土中	口縁部～体部片	口 14.8 底 8.4		細砂粒・角閃石 / 還元焰 / 灰黄	ロクロ整形、回転右回り。高台を有する形態。	
第39図	5	土師器 台付甕	埋土中	胴部下位～脚部 上位片	底 4.5		細砂粒 / 良好 / 赤褐	脚部は貼付か、胴部はへら削り、脚部は横ナデ。内面は胴部がへらナデ。	
第39図 PL.36	6	土師器 甕	カマド内	1/2	口 21.4 底 4.0	高 27.0 胴 24.1	細砂粒 / 良好 / 鈍い赤褐	口縁部から頸部は横ナデ、胴部から底部はへら削り。内面は底部から胴部はへらナデ。	
第39図	7	土師器 甕	埋土中	口縁部～胴部上位片	口 18.8		細砂粒 / 良好 / にぶい赤褐	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はへら削り。内面胴部はへらナデ。	
第39図 PL.36	8	土師器 甕	埋土中	口縁部～胴部上位片	口 19.0 胴 21.7		細砂粒 / 良好 / にぶい赤褐	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はへら削り。内面胴部はへらナデ。	
第39図	9	土師器 甕	床下土坑内	口縁部～胴部上位片	口 19.6		細砂粒 / 良好 / 赤褐	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はへら削り。内面胴部はへらナデ。	
第39図	10	土師器 甕	埋土中	口縁部～胴部上位片	口 20.8		細砂粒・角閃石 / 良好 / 明赤褐	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はへら削り。内面胴部はへらナデ。	
第39図	11	土師器 甕	埋土中	口縁部～胴部上位片	口 20.0		細砂粒・ガラス質 / 良好 / 鈍い赤褐	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はへら削り。内面胴部はへらナデ。	
第39図	12	土師器 甕	埋土中	口縁部～胴部上位片	口 19.8		細砂粒 / 良好 / 灰褐	外面頸部に輪積み痕が残る。口縁部から頸部は横ナデ、胴部はへら削り。内面胴部はへらナデ。	
第39図	13	土師器 甕	埋土中	口縁部～胴部上位片	口 23.6		細砂粒 / 良好 / 明赤褐	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はへら削り。内面胴部はへらナデ。	
第40図 PL.36	14	須恵器 甕	床下土坑内	底部～胴部下位	底 16.0		細砂粒・角閃石 / 還元焰 / 灰	ロクロ整形、回転右回り。胴部は平行叩き痕が残る、底部付近は回転へら削り。	内面底部に2孔一対の小孔がある。

石製品

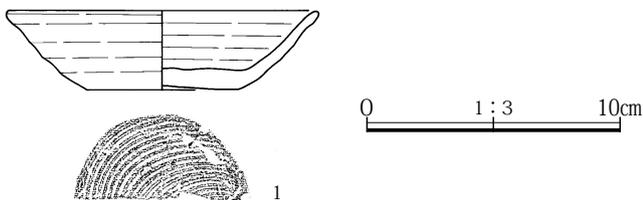
挿図番号 図版番号	No	器種 形態・素材	出土位置	長 (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	重 (g)	製作・使用状況	石材
第40図 PL.46	15	砥石 切り砥石	埋土中	(4.4)	5.4	2.5	62.5	四面使用。各面とも研ぎ減り、大きく変形している。	砥沢石



第41図 9号住居出土遺物

第8表 9号住居出土遺物観察表

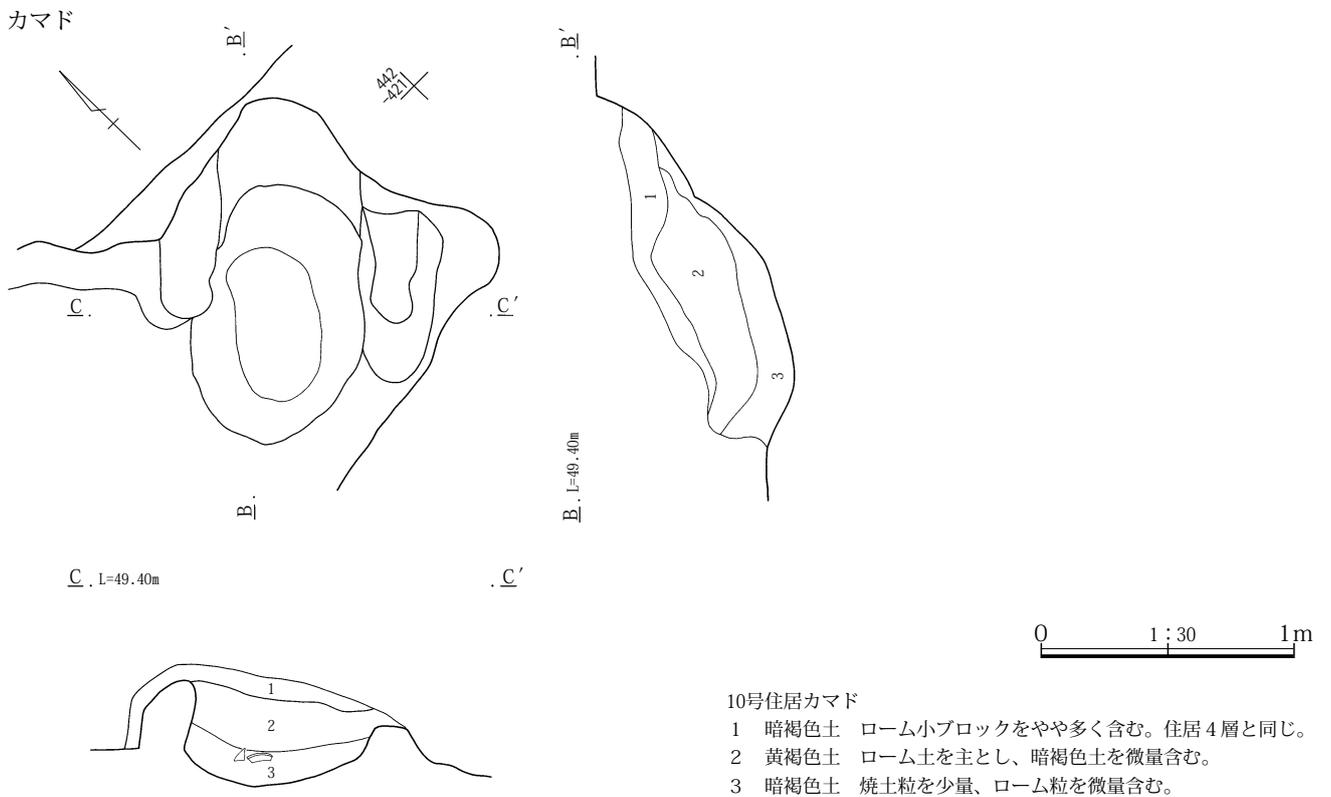
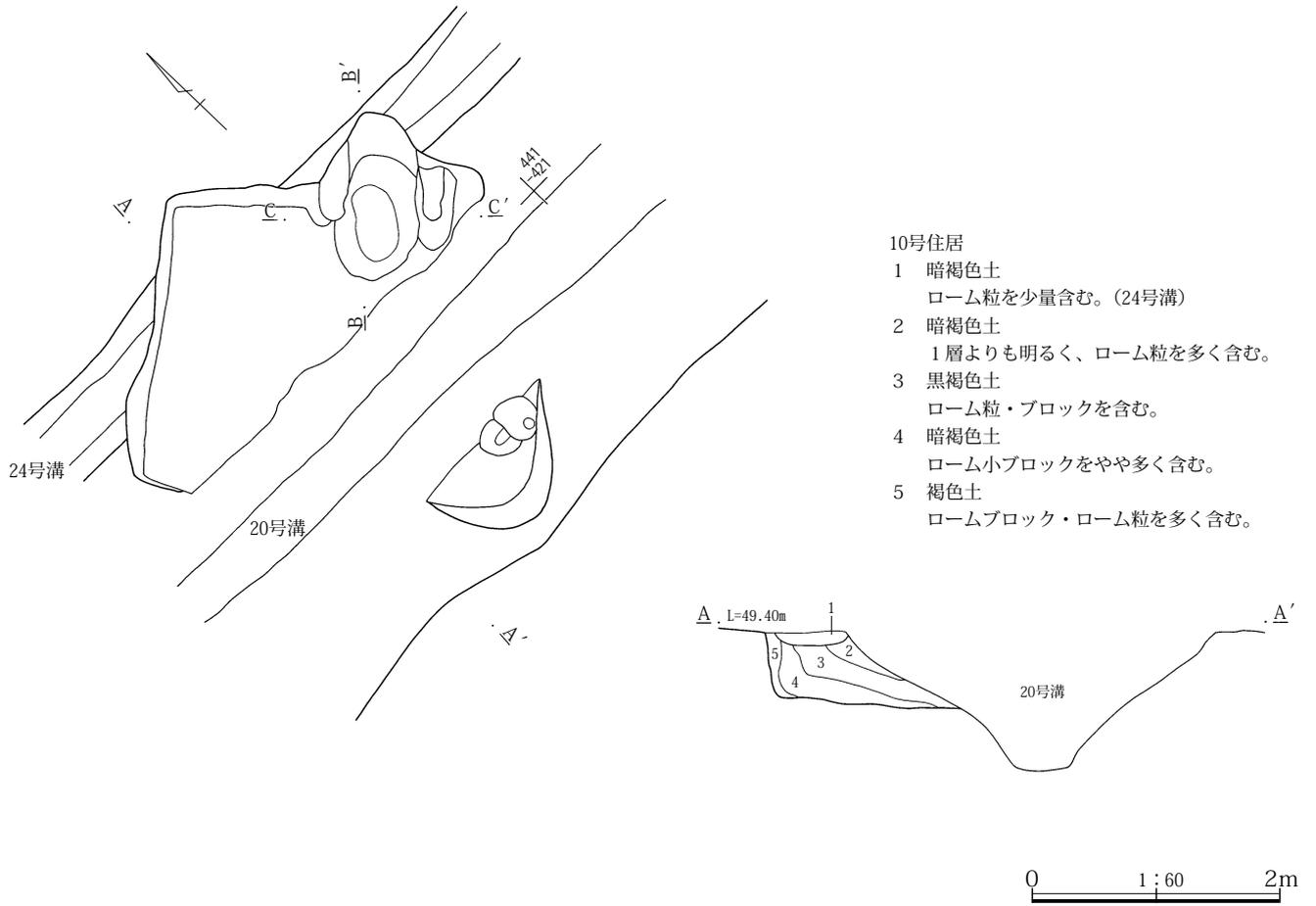
挿図番号 図版番号		NO.	種類	出土位置 残存率	計測値(cm)	胎土／焼成／ 色調	成形・整形の特徴	摘要
第41図 PL.36	1	須恵器 杯	埋土中 口縁部を僅かに 欠損	口 12.4 高 3.3 底 6.3	細砂粒／還元焰／ 灰	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転糸切り無調整。	口縁部径やや 楕円形に歪む。	
第41図 PL.36	2	土師器 台付甕	埋土中 脚部片	脚 10.6	細砂粒／良好／暗 赤褐	内外面とも横ナデ。		
第41図 PL.36	3	土師器 甕	床直付近 口縁部～胴部上 半片	口 19.8 胴 21.3	細砂粒／良好／鈍 い赤褐	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はへら削り。内面胴部はへ らナデ。		
第41図 PL.36	4	土師器 甕	床直付近 底部～胴部片	底 3.8 胴 20.0	細砂粒／良好／褐 灰	内面胴部中位に輪積み痕が残る。胴部と底部へら削り。内 面はへらナデ。		
第41図	5	須恵器 甕	埋土中 口縁部片		細砂粒／還元焰／ 灰	口縁部はロクロ整形、外面に2段の波状文が巡る。		



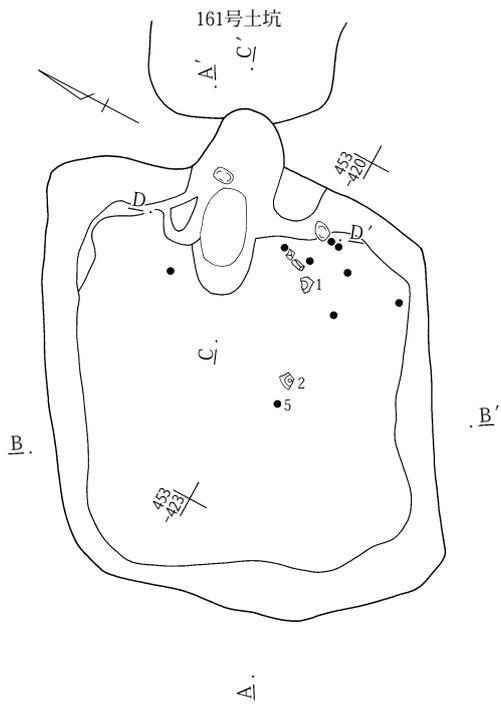
第42図 10号住居出土遺物

第9表 10号住居出土遺物観察表

挿図番号 図版番号		NO.	種類	出土位置 残存率	計測値(cm)	胎土／焼成／ 色調	成形・整形の特徴	摘要
第42図 PL.37	1	須恵器 杯	埋土中 1/4	口 12.0 高 3.1 底 6.0	細砂粒／還元焰／ 灰	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転糸切り無調整。	内面と外面底 部は酸化焰焼 成。	

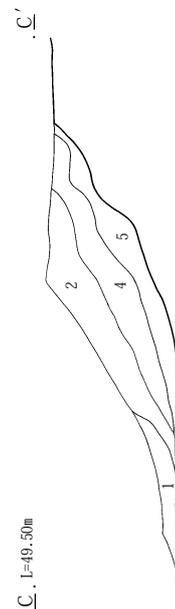
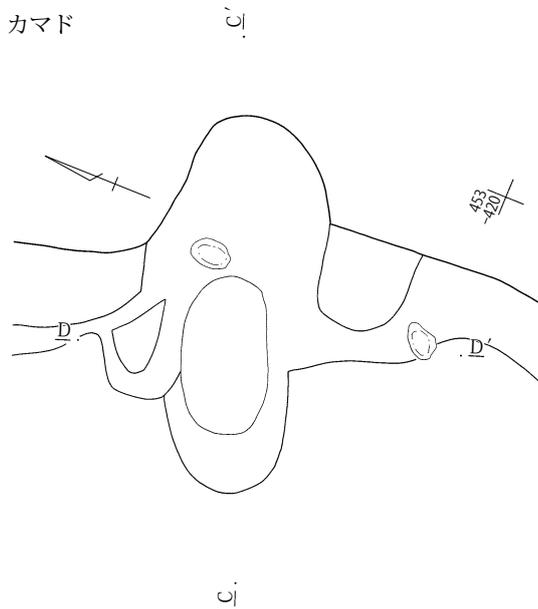
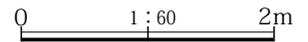
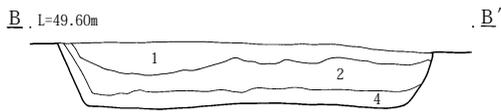


第43図 10号住居・カマド平面図



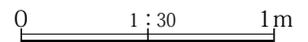
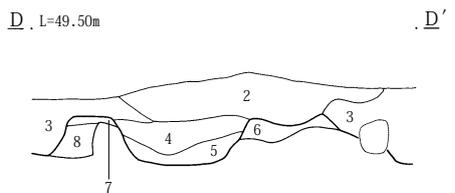
11号住居

- 1 暗褐色土
白色軽石粒を含む。
- 2 暗褐色土
1層よりやや明るく、ローム粒・ロームブロックを含む。やや粘質。
- 3 黒褐色土
白色軽石粒を僅かに含む。
- 4 暗褐色土
ローム粒・ロームブロックを多く含む。粘質。



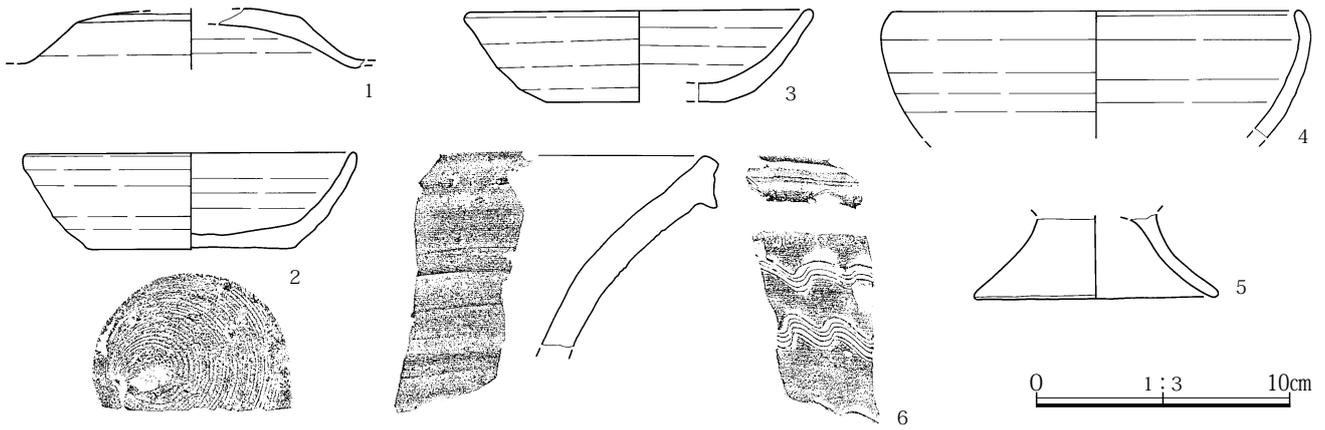
11号住居カマド

- 1 暗褐色土
ローム粒、ロームブロックを多く含む。住居4層と同じ。
- 2 暗褐色土
白色軽石粒、焼土粒を少量含む。
- 3 暗褐色土
ローム土を混入。焼土粒を微量含む。
- 4 黄褐色土
ローム土を主体とし、焼土粒を少量含む。
- 5 暗褐色土
焼土粒・小ブロックをやや多く、炭化物を少量含む。
- 6 黄褐色土
ローム土を主とし、暗褐色土を微量混入。(残存袖部)
- 7 黄褐色土
ローム土を主体とする。(残存袖部)
- 8 黄褐色土
ローム土を主体とし、暗褐色土を混入。(残存袖部)



第44図 11号住居・カマド平面図

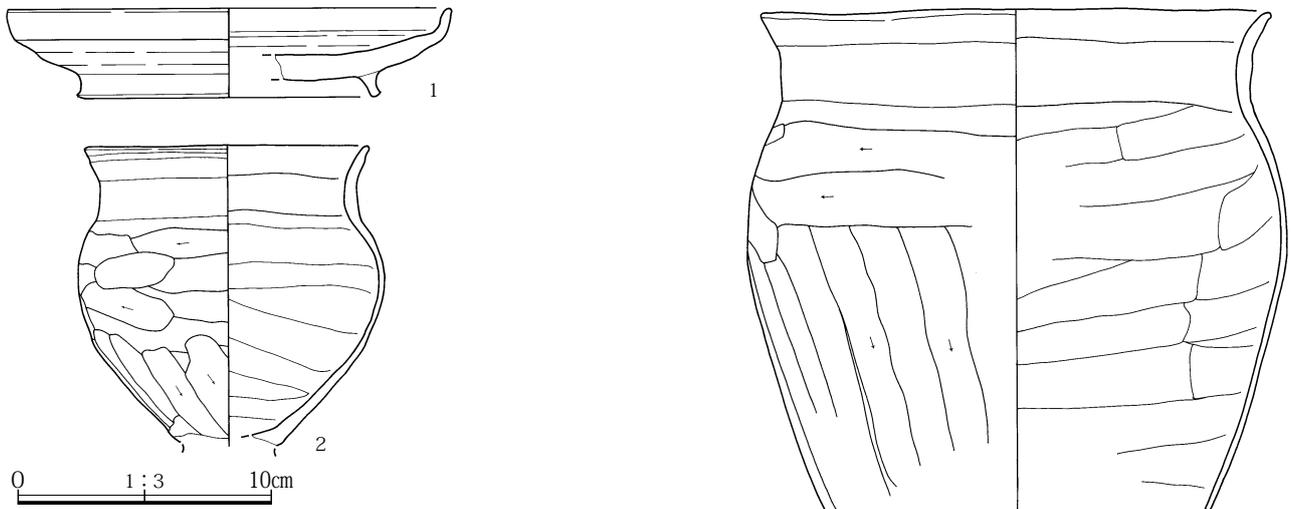
第3章 検出された遺構と遺物



第45図 11号住居出土遺物

第10表 11号住居出土遺物観察表

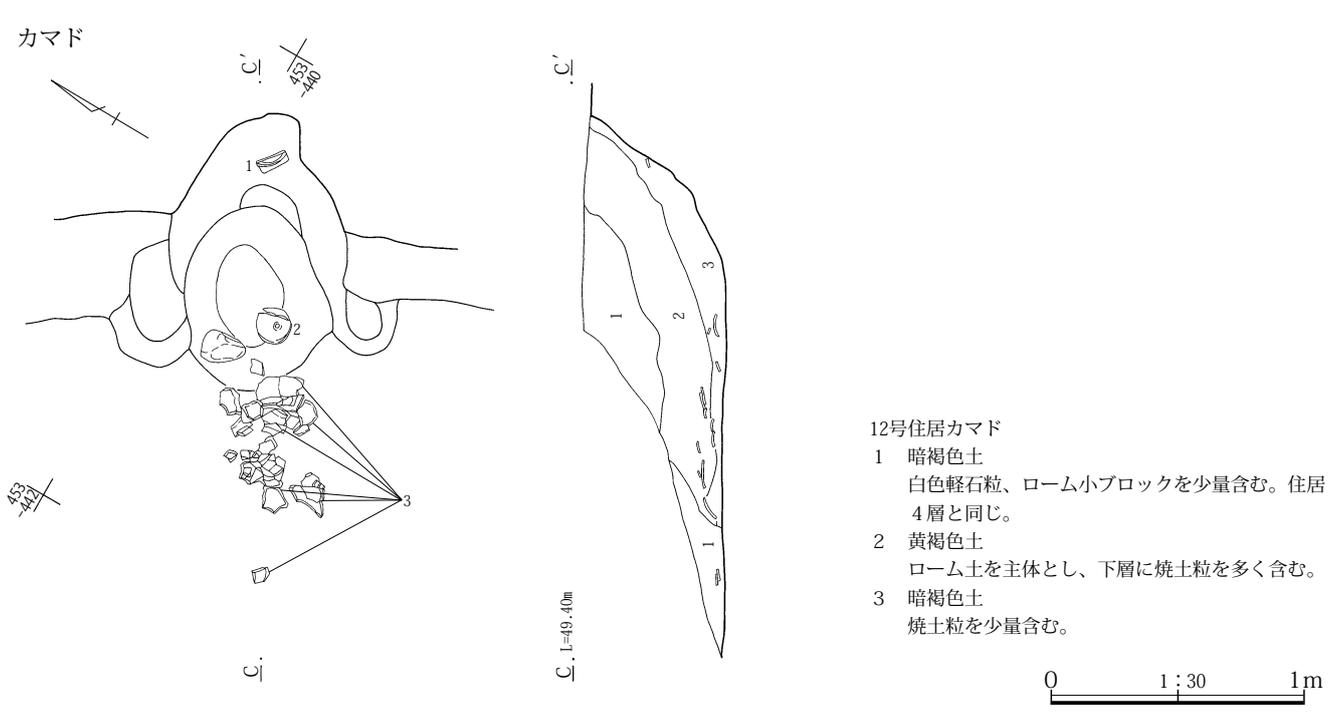
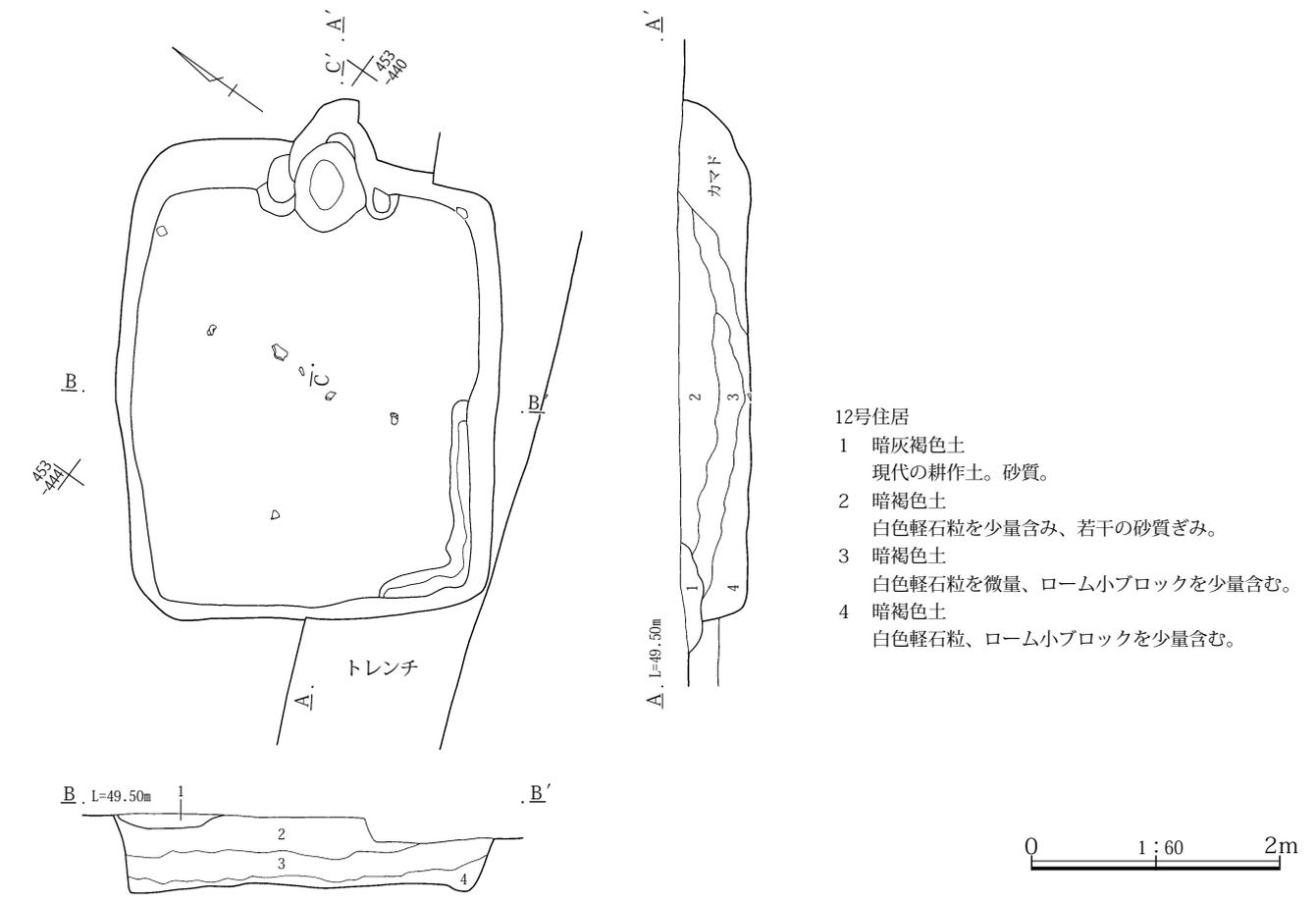
挿図番号 図版番号		NO.	種類	出土位置 残存率	計測値(cm)	胎土／焼成／ 色調	成形・整形の特徴	摘要
第45図 PL.37	1	須恵器 杯蓋	床直 天井部片			細砂粒／還元焰／ 灰白	ロクロ整形、回転右回り。摘みは貼付が剥落、天井部は中ほどまで回転ヘラ削り。	
第45図 PL.37	2	須恵器 杯	床直付近 1/2	口 12.7 高 3.8 底 8.2		細砂粒・白粒／還 元焰／灰	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転糸切り無調整。	
第45図 PL.37	3	須恵器 杯	埋土中 1/3	口 13.3 高 3.6 底 6.9		細砂粒／還元焰／ 灰オリーブ	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転ヘラ削り。	
第45図	4	須恵器 鉢	埋土中 口縁部片	口 15.6		細砂粒／還元焰／ 灰白	ロクロ整形、回転右回り。	鉄鉢
第45図 PL.37	5	土師器 甕	埋土中 脚部片	脚 9.4		細砂粒／良好／鈍 い橙	内外面とも横ナデ。	
第45図	6	須恵器 甕	埋土中 口縁部片			細砂粒／還元焰／ 灰	口縁部はロクロ整形、外面に3段の波状文が巡る。	



第46図 12号住居出土遺物

第11表 12号住居出土遺物観察表

挿図番号 図版番号		NO.	種類	出土位置 残存率	計測値(cm)	胎土／焼成／ 色調	成形・整形の特徴	摘要
第46図 PL.37	1	須恵器 盤	カマド内 1/4	口 17.1 高 3.5 底 12.0 台 11.2		細砂粒／還元焰／ 灰白	ロクロ整形、回転右回り。高台は貼付、底部は回転ヘラナデ。	
第46図 PL.37	2	土師器 台付甕	カマド内 胴部一部・脚部 欠損	口 10.9 胴 11.9 底 3.8		細砂粒／良好／明 赤褐	脚部は貼付、口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。	
第46図 PL.37	3	土師器 甕	床直 口縁部～胴部中 位	口 19.7 胴 21.1		細砂粒／良好／明 赤褐	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。	



第47図 12号住居・カマド平面図

良好である。埋土は1～4層に分層でき、暗褐色土を主に3層の黒褐色土が堆積する。埋土中には、ロームブロックを多く混在させることから人為的堆積と考えられる。壁の状態は、全体に傾斜をもって立ち上がり、部分的に傾斜が緩く上部が広がる。このため、プランがやや歪んだ形状を成す。床面は平坦で、周溝は検出されていない。カマドは東壁のほぼ中央に位置する。残存する規模は、全長1.48m(焚き口から燃焼部長85cm、煙道部長63cm)、幅70cmを測る。残存状態は良好であるが、右袖の残りが悪い。焚き口部から燃焼部底面の窪みが住居内にあり、煙道部が壁の外側に突出する。また、断面観察から、残存する袖部は、ロームを掘り残して袖の芯とし、その周囲にロームを主とした黄褐色土を積み上げて構築されている。支脚等は検出されていない。貯蔵穴および柱穴も検出されていない。

床面はローム面に構築されており、下部構造は検出されていない。

遺物の出土状況は、住居内全体から散漫に出土しており、その大半が埋土中からで、出土量は少ない。図示した1の須恵器杯蓋はカマド周辺の床直からの出土。2・3は須恵器杯で、2は床直付近から出土。5の台付甕の脚や6の甕は埋土中からである。他に、未掲載遺物として土師器片96片、須恵器片37片がある。

出土土器から、本住居は9世紀第3四半期と考えられる。

12号住居 (第46・47図、第11・49表、PL. 7・37)

位置(座標)：X軸=36,449～36,454

Y軸=-39,440～39,445

形状：縦長方形

規模：長辺3.85m 短辺3.03m 壁高50cm

主軸方向：N-60°-E

床面積：8.59㎡

本住居は、2区の中央の西寄りに位置し、住居の東側を13号住居と重複する。遺構確認および土層断面の確認から、本住居が新しいことを確認している。周囲の同時期の遺構には、重複する13号住居の東に14号住居が重複し、その東に17号住居が近接する。また、本住居の北西5mには19号住居があり、住居が比較的集中する。

住居の残存状態は良好で、床面までの掘り込みも深い。埋土は2～4層までの3層に分層でき、暗褐色土を主と

している。埋土中には、ロームブロックを少量混在させることから人為的堆積の可能性をもつ。壁の状態は、全体に直立ぎみに立ち上がるものの、東壁は傾斜をもち上部が広がる。床面は平坦で、南西隅付近に周溝が検出された。周溝は幅18cm、深さ5cmを測る。カマドは東壁のほぼ中央に位置する。残存する規模は、全長1.08m(焚き口から燃焼部長73cm、煙道部長35cm)、幅1.13mを測る。残存状態は良好で、残りの悪い両袖部は住居内に僅かに張り出し、焚き口部から燃焼部底面の窪みは住居内から壁の外側に大きく張り出し、煙道部がさらに外側へ突出する。また、断面観察から、残存する袖部は、ロームを掘り残した状態にある。なお、焚き口部からやや大ぶりの礫が出土しているが、支脚石とは考え難い。貯蔵穴および柱穴も検出されていない。

床面はローム面に構築されており、下部構造は検出されていない。

遺物の出土状況は、カマド前となる焚き口部付近に集中するが、全体的には散漫で、その大半が埋土中からである。図示した1の須恵器盤はカマド煙道部の埋土中から、2の小型台付き甕は脚部を欠損し、カマド焚き口部底面から逆位で出土。3の甕は焚き口部前の床面から出土している。他に、未掲載遺物として土師器片307片、須恵器片40片がある。

出土土器から、本住居は9世紀第1四半期と考えられる。

13号住居 (第48・49図、第12・49表、PL. 7・8・37)

位置(座標)：X軸=36,449～36,455

Y軸=-39,437～39,442

形状：縦長方形

規模：長辺4.0m 短辺3.52m 壁高30cm

主軸方向：N-56°-E

床面積：(10.13)㎡

本住居は、2区の中央の西寄りに位置し、住居の東壁カマド付近から南西隅にかけて14号溝が重複し、住居の西側を12号住居、東側を僅かに14号住居と重複する。遺構確認および土層断面の確認から、14号溝より本住居が旧く、西側に重複する12号住居とでは本住居が旧く、東側の14号住居とでは本住居が新しいことを確認している。周囲の同時期の遺構には、重複する14号住居の東に17号住居が近接し、本住居の北西8mには19号住居が、

南東5mには16号住居があり、住居が集中する。

住居の残存状態は、14号溝によって帯状に東壁カマド北側から南西隅にかけて壊され、住居の北西隅付近を12号住居に壊されているが、比較的良好と言えよう。埋土は2～3層の2層に分層でき、暗褐色土を主としている。埋土中には、ローム小ブロックを微量に混在させるが人為的堆積かは不明。壁の状態は、全体が直立ぎみに立ち上がる。床面は平坦で、壁際に周溝が検出された。周溝は東壁のカマド部を除いてほぼ全周し、幅18cm前後、深さ10cmを測る。カマドは東壁の中央南寄りに位置する。残存する規模は、全長1.22m(焚き口から燃焼部長65cm、煙道部長57cm)、幅81cmを測る。残存状態は、14号溝により左袖を含むカマド北側が残存していないが、他は良好。右袖部は住居内に僅かに張り出し、焚き口部から燃焼部底面の窪みは住居内から壁の外側に大きく張り出し、煙道部がさらに外側へ突出する。また、断面観察から、残存する袖部は、僅かにロームを掘り残した芯をもつ。特に、右袖には甕を逆位に置き、甕の外側にロームを主とした黄褐色土を積み上げて袖を構築している。甕内部には、ローム粒、暗灰色砂質土小ブロックを少量含む暗褐色土が詰まっていた。支脚は検出されていない。貯蔵穴および柱穴も検出されていない。

床面下には、掘り方が確認された。掘り方はほぼ全面に及び、底面はやや凹凸ぎみとなる。床面から底面までの深さは5～10cmを測る。この掘り方覆土は、ローム粒・ローム小ブロックを少量含む暗褐色土で、床面となる上面は堅く硬化している。

遺物の出土状況は、全体的に散漫で少なく、大半が埋土中からである。図示した2の須恵器杯は、南東隅付近の周溝上の床面出土である。5の甕はカマド内から出土し、4の甕は先述したカマドの右袖材として出土したほぼ完形品である。他に、未掲載遺物として土師器片115片、須恵器片12片がある。

出土土器から、本住居は9世紀第1四半期と考えられる。

14号住居 (第50・51図、第13・49表、PL. 8・37・49)

位置(座標): X軸=36,451～36,456

Y軸=-39,433～39,438

形状: 横長方形

規模: 長辺3.87m 短辺2.87m 壁高25cm

主軸方向: N-70°-E

床面積: (9.21) m²

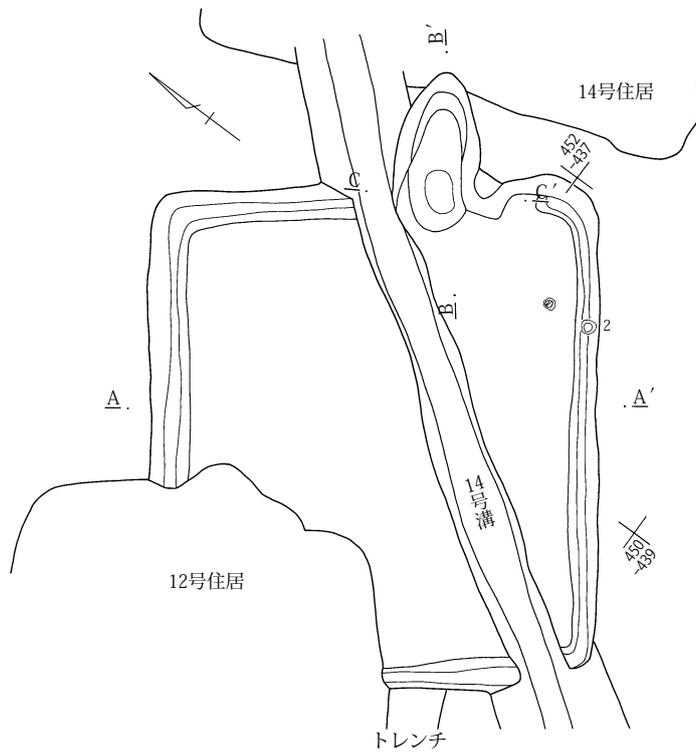
本住居は、2区の中央に位置し、住居の北側を14号溝と、西側を僅かに13号住居のカマドと重複し、南東隅は140号土坑と重複する。遺構確認および土層断面の確認から、13号住居とでは本住居が旧く、140号土坑においても本住居が古いことを、さらに14号溝が最も新しいこと確認している。周囲の同時期の遺構には、重複する13号住居の西に12号住居が重複し、北東に17号住居が近接する。また、本住居の北西10mには19号住居、東10mには11号住居、南東5mには16号住居があり、住居が集中する。

住居の残存状態は、14号溝によって帯状に北東隅から西壁北側にかけて壊され、住居の南東隅を140号土坑に壊されているが、比較的良好と言えよう。埋土は3層に分層でき、暗褐色土を主としている。埋土中には、ロームブロックを多く混在させることから人為的堆積と考えられる。壁の状態は、全体に直立ぎみに立ち上がり、壁高は25cmとやや浅い。床面は平坦で、周溝は検出されていないが、床中央付近に楕円状の窪みが確認された。窪みは、長軸63cm、短軸42cmを測り、底面はやや掘り鉢ぎみで深さ4cm程と浅く、焼土等は確認されていない。カマドは東壁の中央南寄りに位置する。残存する規模は、全長1.12m(焚き口から燃焼部長64cm、煙道部長48cm)、幅85cmを測る。残存状態は良好で、両袖部は住居内に僅かに張り出し、内壁が被熱し焼土化する。焚き口部から燃焼部底面の窪みは住居内から壁の外側に僅かにかかり、煙道部が外側へ突出する。また、断面観察から、残存する袖部は、ロームを主とした黄褐色土を積み上げて構築している。支脚は検出されていない。貯蔵穴および柱穴も検出されていない。

床面はローム面に構築されており、下部構造は検出されていない。

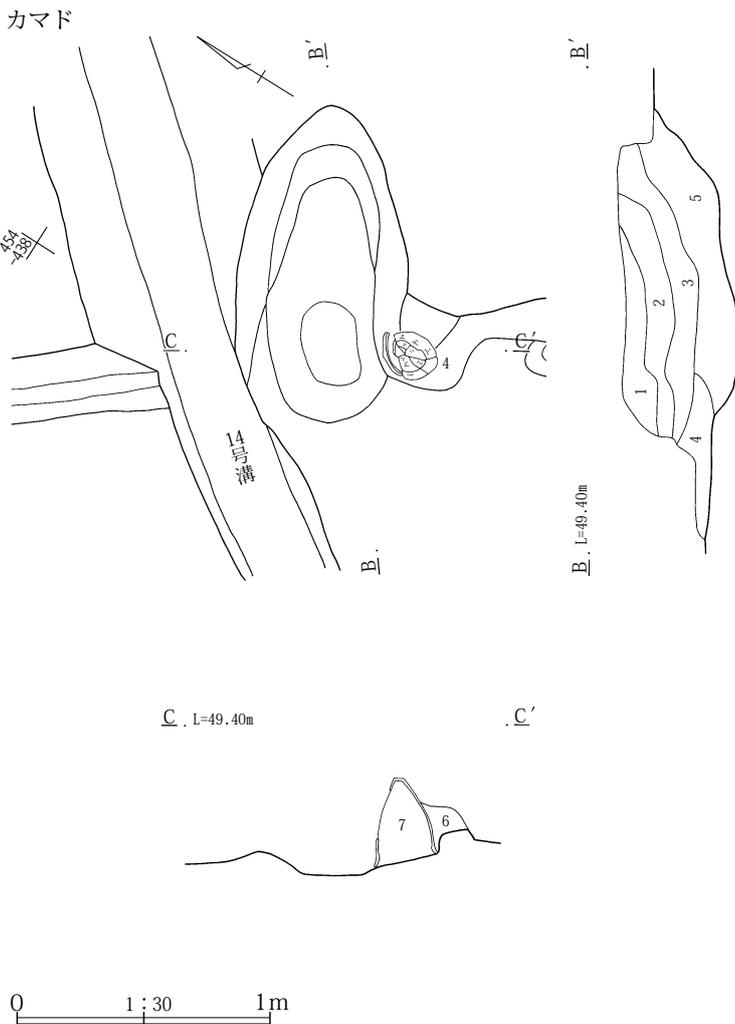
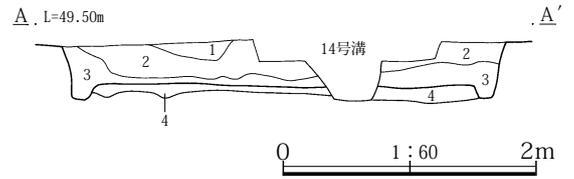
遺物の出土状況は、全体的に散漫で少なく、大半が埋土中からである。図示した1・2の土師器杯および4の須恵器甕の把手はカマド内から、3の須恵器杯は埋土中から出土している。また、1の杯の口唇部には煤が付着している。金属製品には、5の鉄釘?の1点がある。他に、未掲載遺物として土師器片187片、須恵器片26片がある。

出土土器から、本住居は9世紀第1四半期と考えられ



13号住居

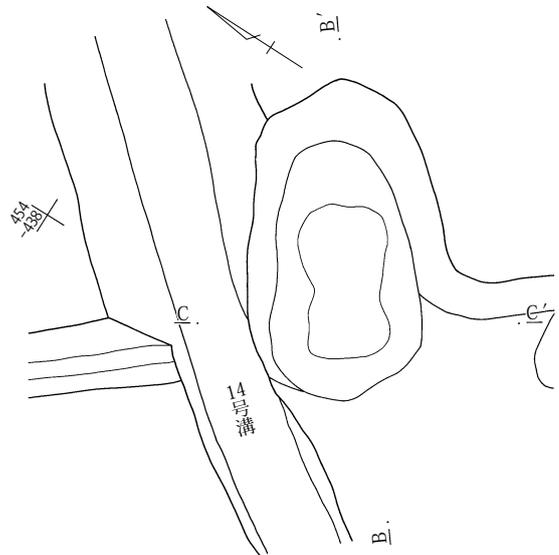
- 1 暗褐色土 現代の耕作土。砂質。
- 2 暗褐色土 白色軽石粒を少量、焼土粒、ローム粒を微量含む。
- 3 暗褐色土 白色軽石粒、ローム小ブロックを微量含む。
- 4 暗褐色土 ローム粒・小ブロックを少量含む。上面は堅く硬化する。(掘り方覆土)



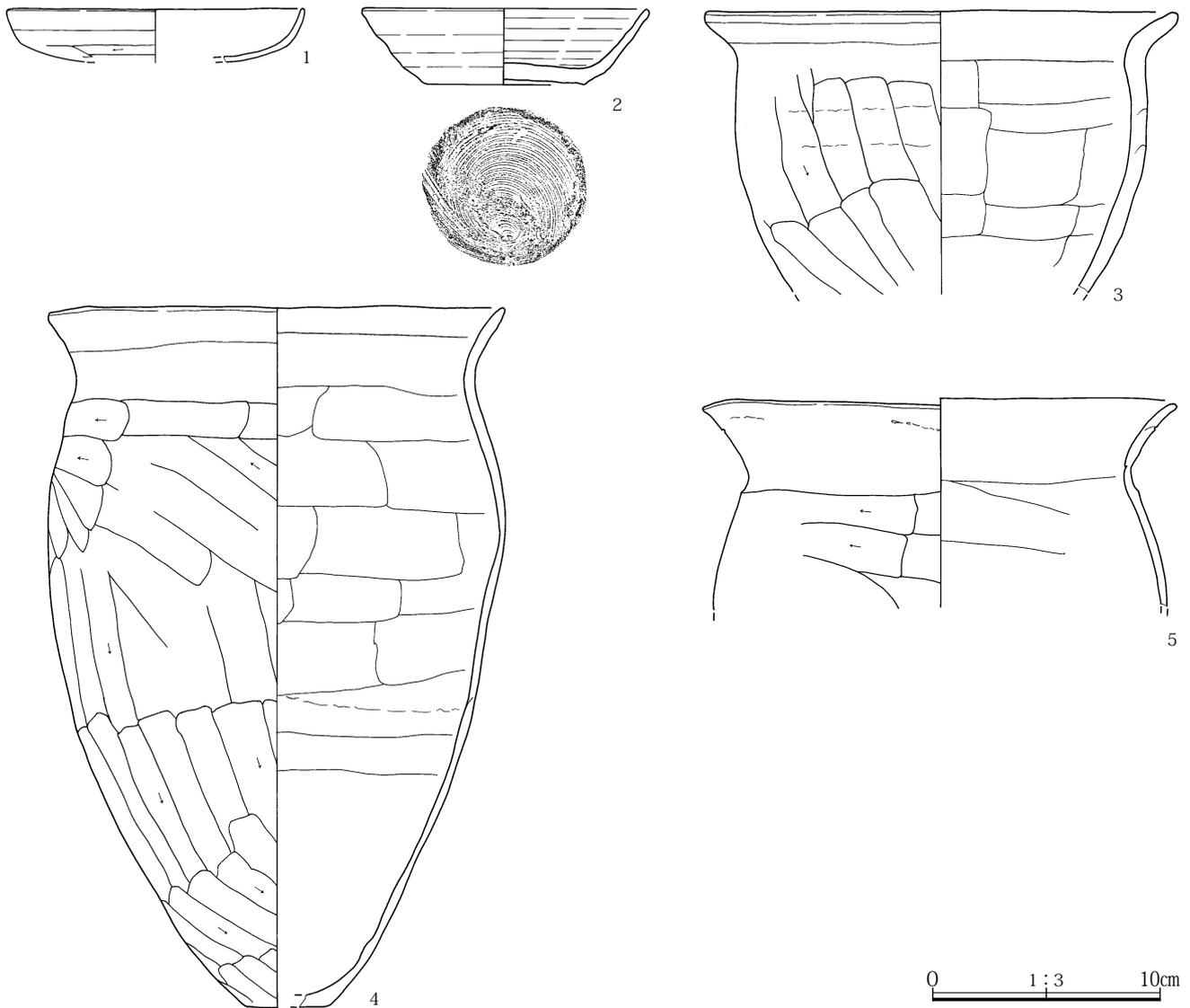
13号住居カマド

- 1 暗褐色土
白色軽石粒、焼土粒、ローム粒を少量含む。住居2層と同じ。
- 2 暗茶褐色粘質土
白色軽石粒、焼土粒を微量含む。粘質。
- 3 暗褐色土
焼土粒・ブロックをやや多く含む。
- 4 黒褐色土
ローム粒、焼土粒を微量含む。
- 5 暗褐色土
焼土粒・小ブロックを少量含む。
- 6 黄褐色土
ローム土を主体とし、暗褐色土が微量混入する。(残存袖部)
- 7 暗褐色土
ローム粒、暗灰色砂質土小ブロックを少量含む。(残存袖部)

カマド掘り方



第48図 13号住居・カマド平面図

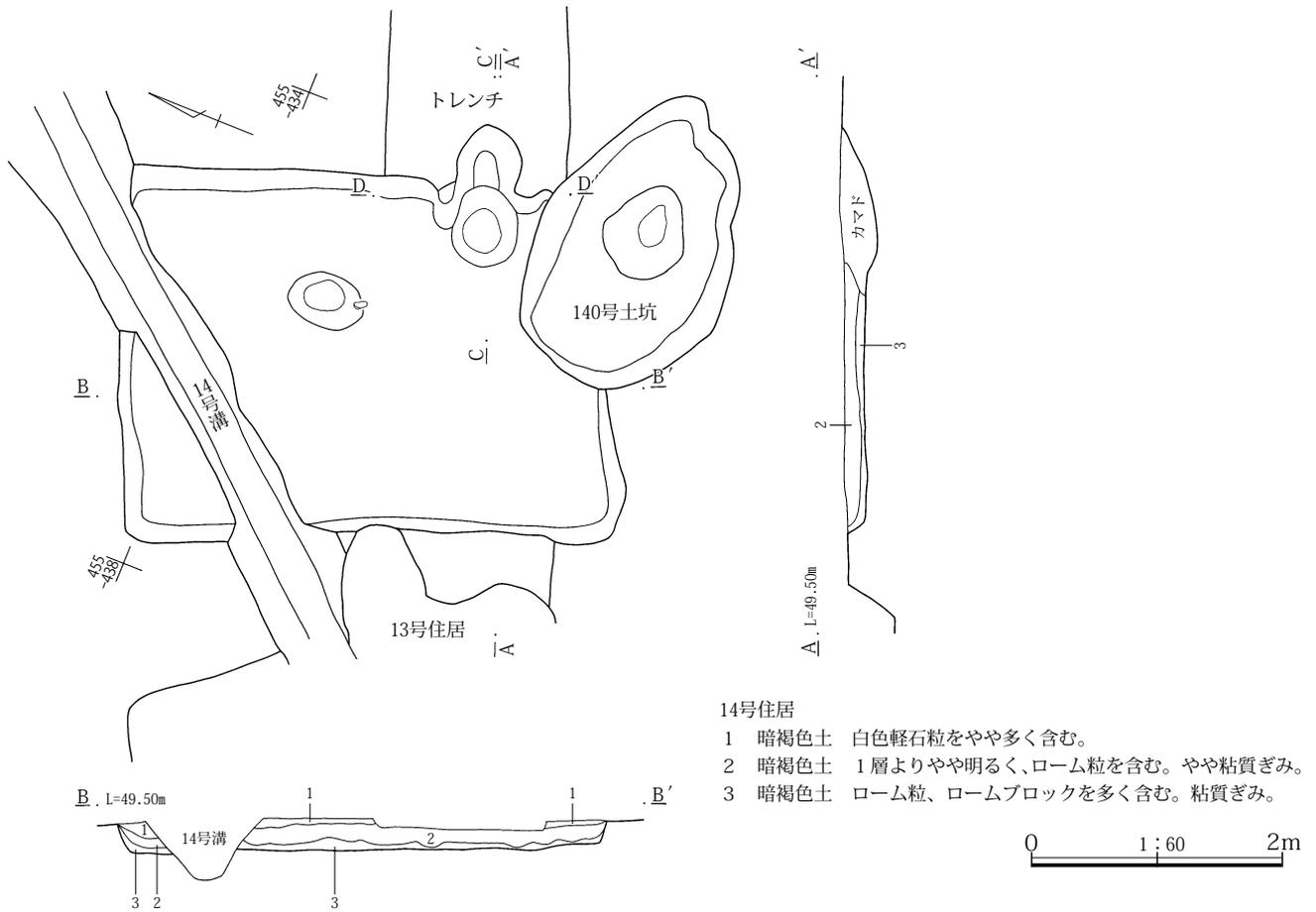


第49図 13号住居出土遺物

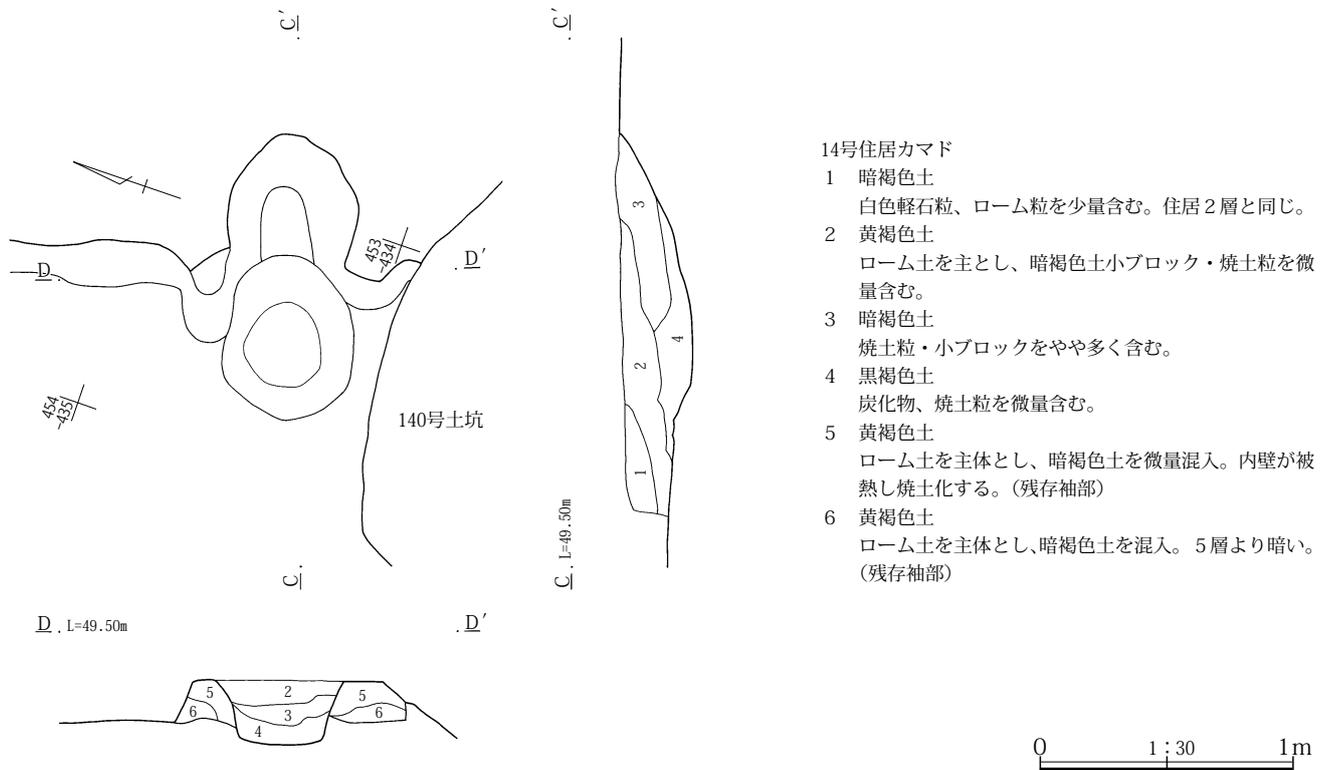
第12表 13号住居出土遺物観察表

土器類

挿図番号 図版番号	NO.	種類	出土位置 残存率	計測値(cm)	胎土／焼成／ 色調	成形・整形の特徴	摘要
第49図	1	土師器 杯	埋土中 口縁部～底部片	口 12.8	細砂粒／良好／明 赤褐	口縁部横ナデ、体部上半ナデ、下半から底部は手持ちヘラ 削り。	
第49図 PL.37	2	須恵器 杯	床直 口縁部を僅かに 欠損	口 12.2 高 3.3 底 7.0	細砂粒／還元焰／ 灰	ロク口整形、回転右回り。底部は回転糸切り無調整。	
第49図	3	土師器 鉢	埋土中 口縁部～体部片	口 20.3	細砂粒／良好／明 赤褐	外面体部に輪積み痕が残る。口縁部横ナデ、口縁部下はナ デ、体部はヘラ削り。内面は体部がヘラナデ。	
第49図 PL.37	4	土師器 甕	カマド右袖 3/5	口 19.7 高 30.7 底 3.6 胴 19.9	細砂粒・褐粒／良 好／明赤褐	内面胴部に輪積み痕が残る。口縁部から頸部は横ナデ、胴 部から底部はヘラ削り。内面は底部から胴部はヘラナデ。	
第49図 PL.37	5	土師器 甕	カマド内 口縁部～胴部上 位片	口 20.5	細砂粒／良好／鈍 い黄橙	外面口縁部に輪積み痕が残る。口縁部から頸部は横ナデ、 胴部はヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。	

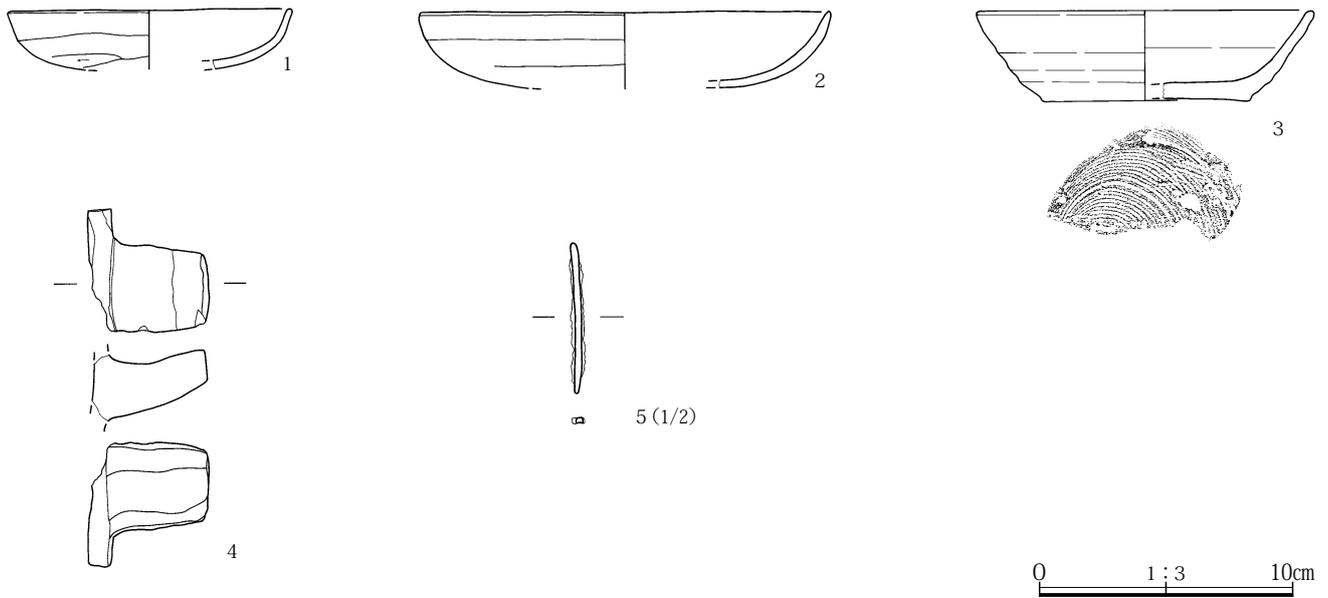


カマド



第50図 14号住居・カマド平面図

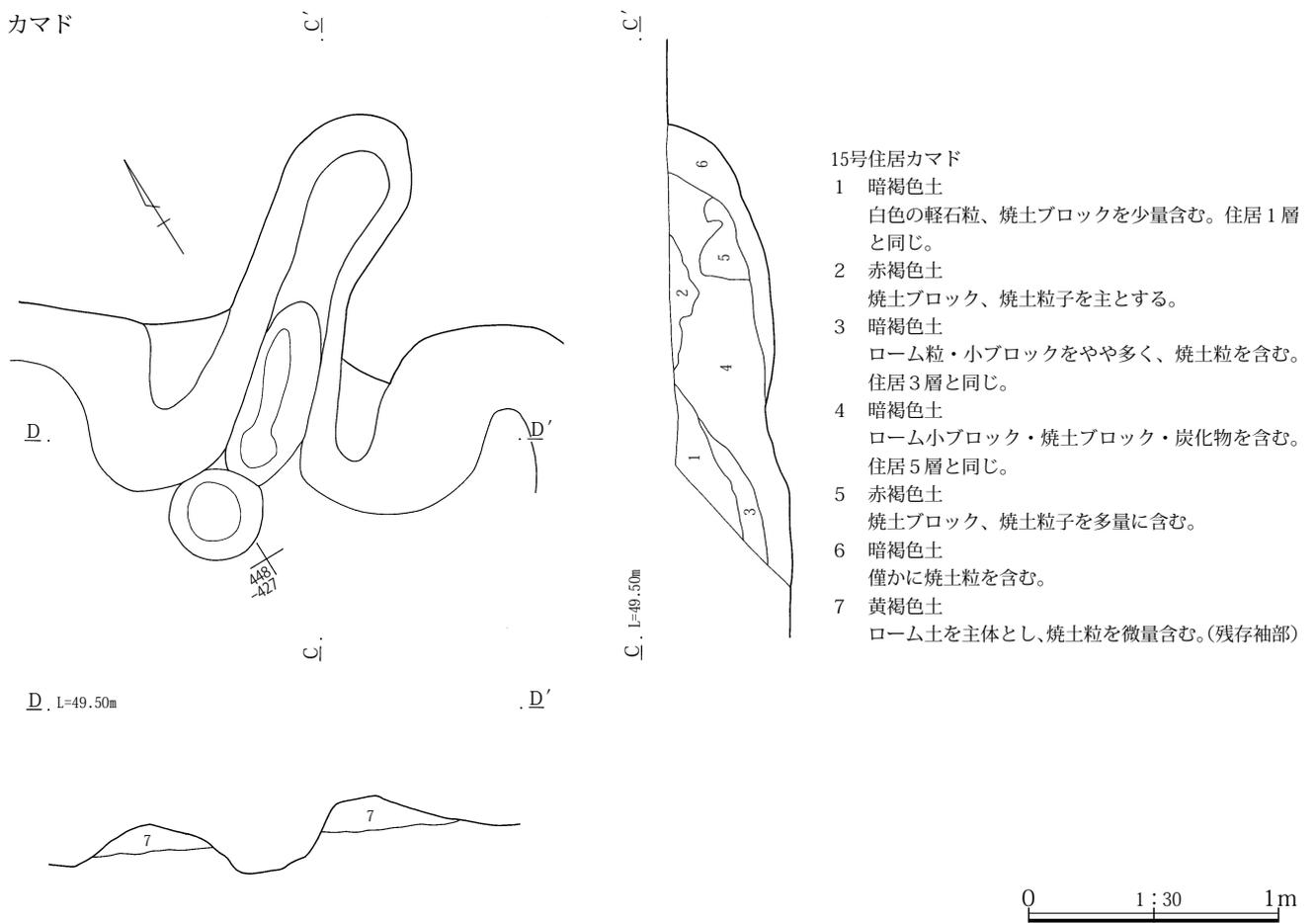
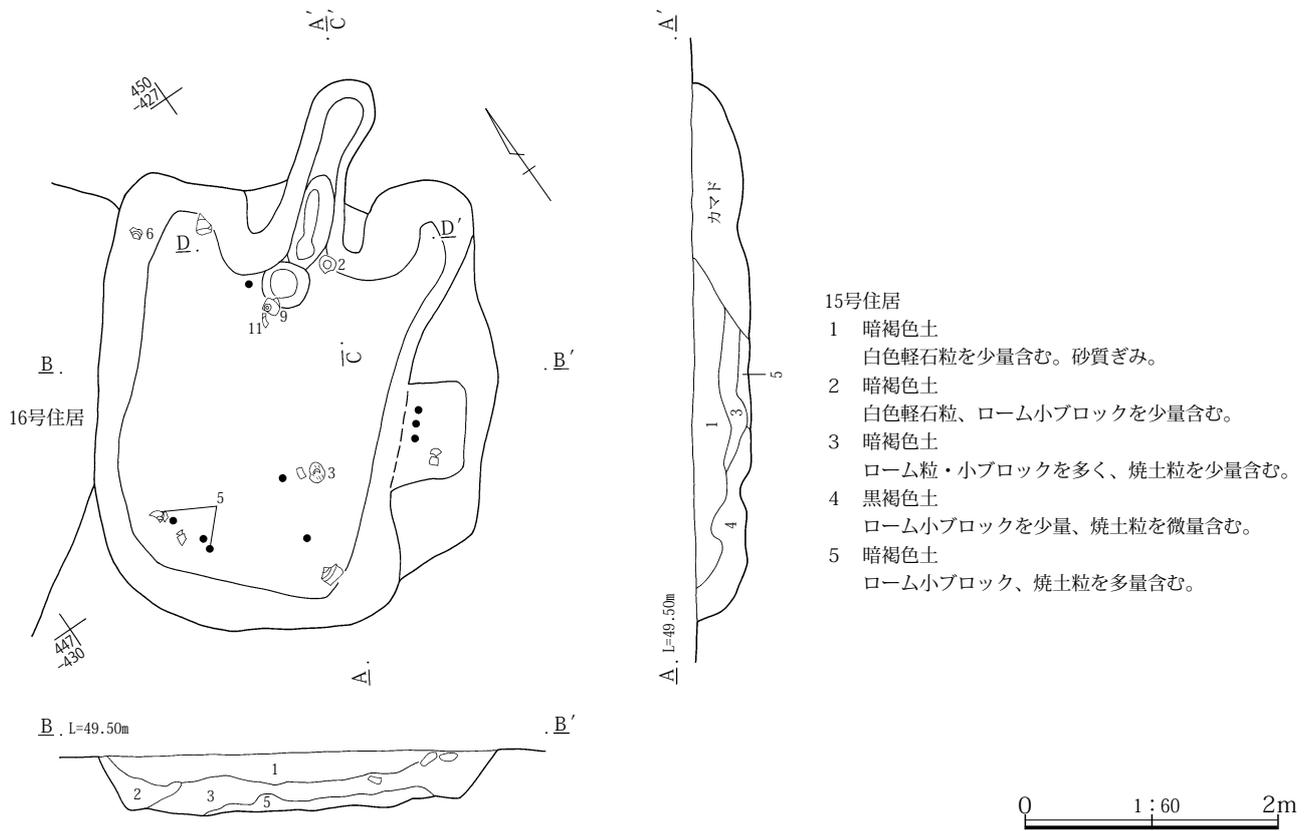
第4節 奈良時代以降の遺構と遺物



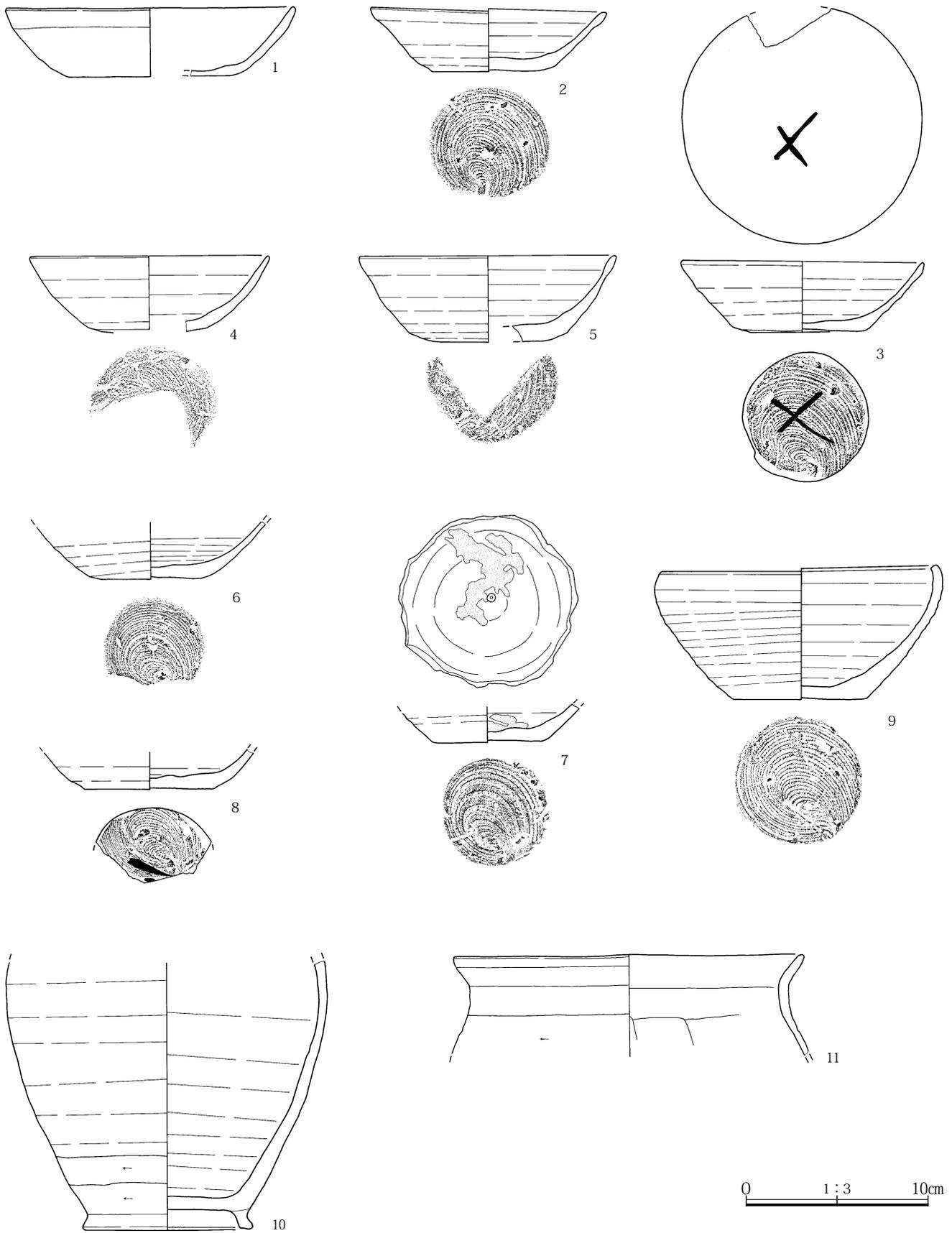
第51図 14号住居出土遺物

第13表 14号住居出土遺物観察表

土器類									
挿図番号 図版番号	NO.	種類	出土位置 残存率	計測値(cm)		胎土／焼成／ 色調	成形・整形の特徴	摘要	
第51図	1	土師器 杯	カマド内 口縁部～底部片	口 11.0		細砂粒／良好／明 黄褐	口縁部横ナデ、体部上半ナデ、下半から底部は手持ちヘラ 削り。	内外の口唇部 に煤が付着。	
第51図	2	土師器 杯	カマド内 口縁部～体部片	口 14.8		細砂粒／良好／鈍 い橙	口縁部横ナデ、体部上半ナデ、下半から底部は手持ちヘラ 削り。		
第51図 PL.37	3	須恵器 杯	埋土中 1/5	口 13.0	高 3.5 底 8.0	細砂粒／還元焰／ 灰	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転糸切り無調整。		
第51図 PL.37	4	須恵器 甌	カマド内 把手片			細砂粒／還元焰／ 灰	把手は貼付、上面はヘラ削り後基部にナデ、裏面・側面は ヘラ削り。		
金属製品									
挿図番号 図版番号	NO.	種類	出土位置 残存率	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	特徴・状態	備考
第51図 PL.49	5	鉄器 針?	埋土中 一部片	(3.9)	0.2	0.1	(0.7)	錆化が激しい。内部が空洞化している。	



第52図 15号住居・カマド平面図



第53図 15号住居出土遺物

第3章 検出された遺構と遺物

第14表 15号住居出土遺物観察表

土器類

挿図番号 図版番号	NO.	種類	出土位置 残存率	計測値(cm)	胎土／焼成／ 色調	成形・整形の特徴	摘要
第53図	1	土師器 杯	埋土中 口縁部～体部片	口 15.6 高 3.8 底 8.8	細砂粒／良好／橙	口縁部は横ナデ、体部はナデ、底部は手持ちヘラ削り。	
第53図 PL.37	2	須恵器 杯	カマド内 口縁部1/3欠損	口 12.6 高 3.6 底 5.8	細砂粒／酸化焰／ 灰黄	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転糸切り無調整。	
第53図 PL.37	3	須恵器 杯	埋土中 口縁部僅欠損	口 13.1 高 3.9 底 7.0	細砂粒・チャート ／酸化焰／鈍い黄 橙	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転糸切り無調整。	内外面の底部に「十」の墨書。
第53図 PL.37	4	須恵器 杯	埋土中 口縁部～底部片	口 13.2 底 6.0	細砂粒／酸化焰／ 鈍い橙	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転糸切り無調整。	
第53図 PL.37	5	須恵器 杯	床直 1/3	口 13.8 高 4.7 底 7.2	細砂粒多・角閃石 ／還元焰／灰白	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転糸切り無調整。	
第53図	6	須恵器 杯	埋土中 底部～体部	底 5.4	細砂粒・白粒／還 元焰／灰黄	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転糸切り無調整。	
第53図 PL.37	7	須恵器 杯	埋土中 底部～体部	底 6.0	細砂粒・角閃石／ 還元焰／灰黄	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転糸切り無調整。	内面底部の一部に漆が付着。
第53図 PL.37	8	須恵器 杯	埋土中 底部～体部片	底 7.0	細砂粒／還元焰／ 灰黄褐	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転糸切り無調整。	外面底部に墨書。一部のため判読不能。
第53図 PL.38	9	須恵器 鉢	埋土中 3/4	口 14.8 高 7.4 底 7.1	細砂粒／酸化焰／ 鈍い黄橙	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転糸切り無調整。	鉄鉢。
第53図 PL.38	10	須恵器 長頸壺	埋土中 底部～胴部	底 8.7 台 9.0	細砂粒・粗砂粒・ 褐粒／還元焰／灰 黄褐	ロクロ整形、回転右回り。高台は貼付、胴部下位に2段の回転ヘラ削り。	
第53図	11	土師器 甕	埋土中 口縁部～胴部上 位片	口 19.0	細砂粒／良好／明 赤褐	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。	

金属製品

挿図番号 図版番号	NO.	種類	出土位置 残存率	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	特徴・状態	備考
PL.49	12	腕形鍛冶滓	埋土中 1/2	径 4.0		1.5	—	側縁が弧状となる極小の腕形鍛冶滓で、半面を欠く。上面は平坦であるが、やや凹凸がある。下面は腕状。波面には気孔が認められる。	磁着あり。

る。

15号住居 (第52・53図、第14・49表、PL. 8・37・38・49)

位置(座標)：X軸=36,445～36,450

Y軸=-39,425～39,430

形状：縦長方形

規模：長辺3.5m 短辺3.12m 壁高44cm

主軸方向：N-51°-E

床面積：5.65㎡

本住居は、2区の中央に位置し、住居の北隅から北西壁にかけて16号住居と重複する。土層断面の確認から、本住居が新しいことを確認している。周囲の同時期の遺構には、重複する16号住居の西および北西に12～14・17号住居が、北東に11号住居、南東に10号住居が近接する。

住居の残存状態は良好で、床面までの掘り込みも深い。

埋土は、暗褐色土を主に4層の黒褐色土を含め、5層に分層できる。埋土中には、ローム小ブロックを少量混在させることから人為的堆積の可能性をもつ。壁の状態は、全体にやや傾斜をもって立ち上がるものの、南壁中央には床面よりも一段高いステップを外側に有し、ステップ周囲が大きく広がる。このため、住居プランが大きく歪む。ちなみに、このステップ部分の埋土には、3層および5層が堆積することから、住居に伴う施設であり、入り口部の可能性をもつ。床面は平坦で、周溝は検出されていない。カマドは北東壁のほぼ中央に位置する。残存する規模は、全長1.53m(焚き口から燃焼部長73cm、煙道部長80cm)、幅1.56mを測る。残存状態は良好で、両袖部は住居内に広く大きく張り出し、焚き口部から燃焼部底面の窪みは住居内に位置し、煙道部は細く外側へ長く突出する。また、焚き口部手前には径37cm、深さ20cm程の円形の穴を有する。断面観察から、残存する袖部は、

ロームを主とした黄褐色土で構築されている。支脚は検出されていない。貯蔵穴および柱穴も検出されていない。

床面はローム面に構築されているが、カマドの左側には径60cm、深さ12cmを測る床下土坑が検出された。

遺物の出土状況は、全体的には散漫で、大半が埋土中からである。なお、カマドの焚き口部付近の上位埋土中には、長さ20cm前後の円礫が6個纏まって出土している。図示したのは、1の土師器杯、2～7の須恵器杯7点の内、5は住居西隅付近の床面出土で、2はカマド内からである。3は底部の内外面に「十」の墨書を有し、8も底部外面に墨書(文字不明)がある。9は須恵器鉢。10は須恵器長頸壺。さらに、11の甕がある。また、図示しなかったが、埋土中から椀形鍛冶滓(第14表、PL.49)が出土している。他に、未掲載遺物として土師器片338片、須恵器片36片がある。

出土土器から、本住居は9世紀第4四半期と考えられる。

16号住居 (第54～57図、第15・49表、PL.8・38)

位置(座標)：X軸=36,446～36,452

Y軸=-39,427～39,434

形状：縦長方形

規模：長辺4.5m 短辺3.47m 壁高45cm

主軸方向：N-48°-E

床面積：11.64㎡

本住居は、2区の中央に位置し、住居の南東隅から南壁中央部にかけて15号住居と重複する。土層断面の確認から、本住居が古い。周囲の同時期の遺構には、本住居の西および北西に12～14・17号住居が、北東に11号住居、重複する15号住居の南東に10号住居が近接する。

住居の残存状態は、南東隅から南壁中央部にかけて15号住居の西壁と接するように重複するが、床面までの掘り込みも深く、比較的良好である。なお、北西隅は古い風倒木痕と重複していた。埋土は、1層の暗褐色土と2～5層の黒褐色土を主に、5層に分層できる。埋土中には、ローム小ブロックを多く混在させることから人為的堆積と考えられる。壁の状態は、全体にやや傾斜をもって立ち上がるものの、北壁から東壁にかけての上部は広がりぎみとなる。床面は平坦で、周溝は検出されていない。カマドは東壁の中央南寄りに位置する。残存する規模は、全長1.25m(焚き口から燃焼部長78cm、煙道部長

47cm)、幅1.02mを測る。残存状態は良好で、両袖部は住居内に僅かに張り出し、両袖共に袖石を有する。焚き口部から燃焼部底面の窪みは住居内から壁の外側に大きく張り出し、さらに煙道部が外側へ突出する。袖石は、両者共に長さ30cm程の長方体状の自然礫を使用している。また、焚き口部前の床面から、長さ19cm、幅7.5cm程の被熱した棒状の自然礫が出土しており、支脚石と考えられる。貯蔵穴はカマドの右側で、住居の南東隅に位置する。楕円形を呈し、南壁に接するように縦長に配置され、規模は長軸1.05m、短軸60cm、深さ15cmを測る。柱穴は検出されていない。

床面はローム面に構築されているが、床中央から北東側にかけて大型の床下土坑が検出された。床下土坑は、やや不整な楕円状を呈し、規模は長軸2.4m、短軸2.08m、深さ10～17cmを測り、底面はカマド前付近がやや深くなる。

遺物の出土状況は、全体的には散漫で、大半が埋土中からである。図示した1・2の須恵器杯の内、1はカマド左脇の床面出土で、2は住居北壁付近の床面出土である。3～7の土師器甕5点の内、3は北西隅付近の床面から、5～7はカマド内、4は床下土坑内からの出土である。また、床下土坑からは鉄鍬の頸部小片が出土している。他に、未掲載遺物として土師器片293片、須恵器片39片、緑釉陶器片1片がある。

出土土器から、本住居は9世紀第3四半期と考えられる。

17号住居 (第58・59図、第16・49表、PL.9・38)

位置(座標)：X軸=36,455～36,459

Y軸=-39,430～39,435

形状：方形

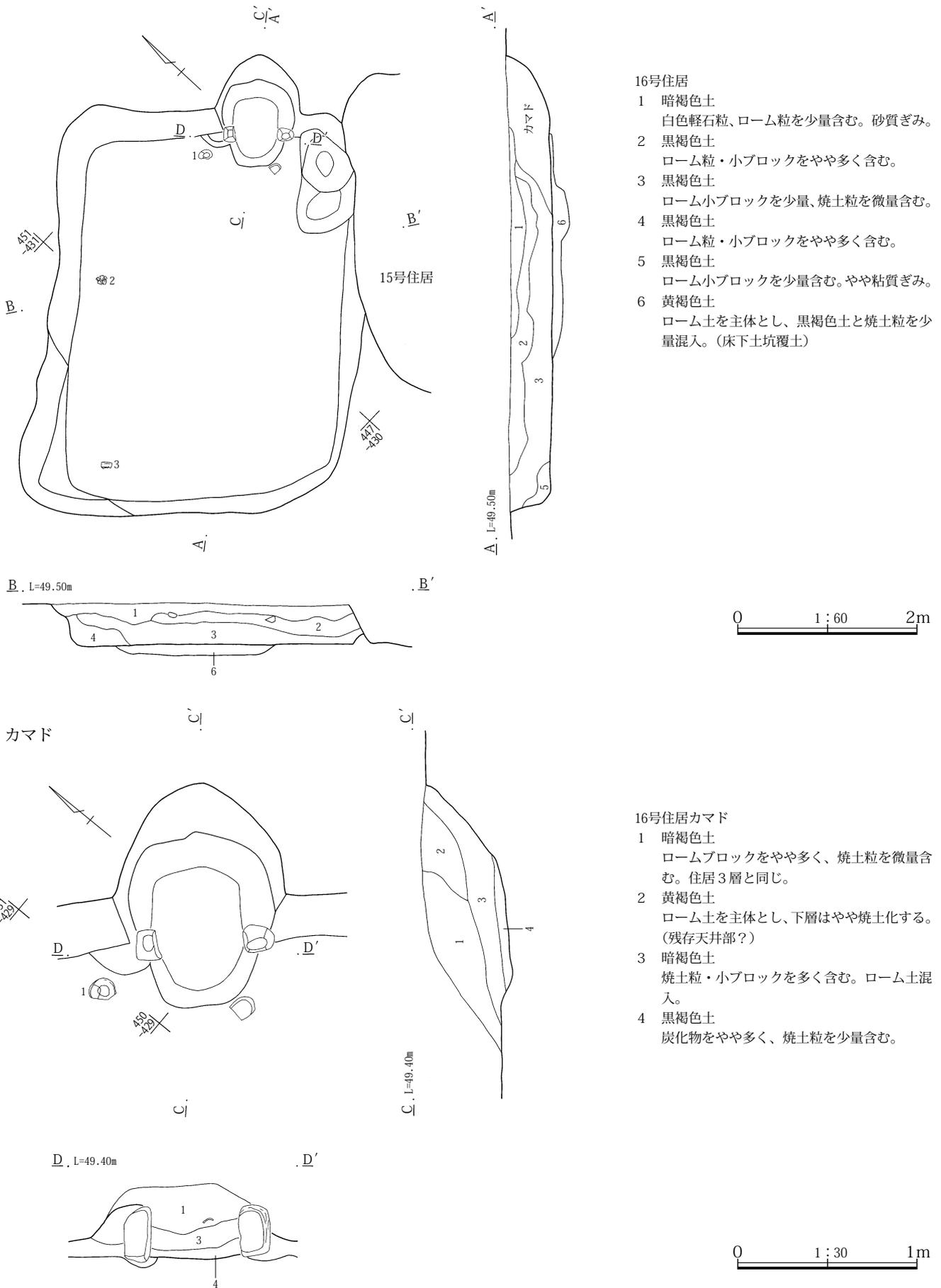
規模：長辺3.2m 短辺(2.75)m 壁高34cm

主軸方向：N-51°-E

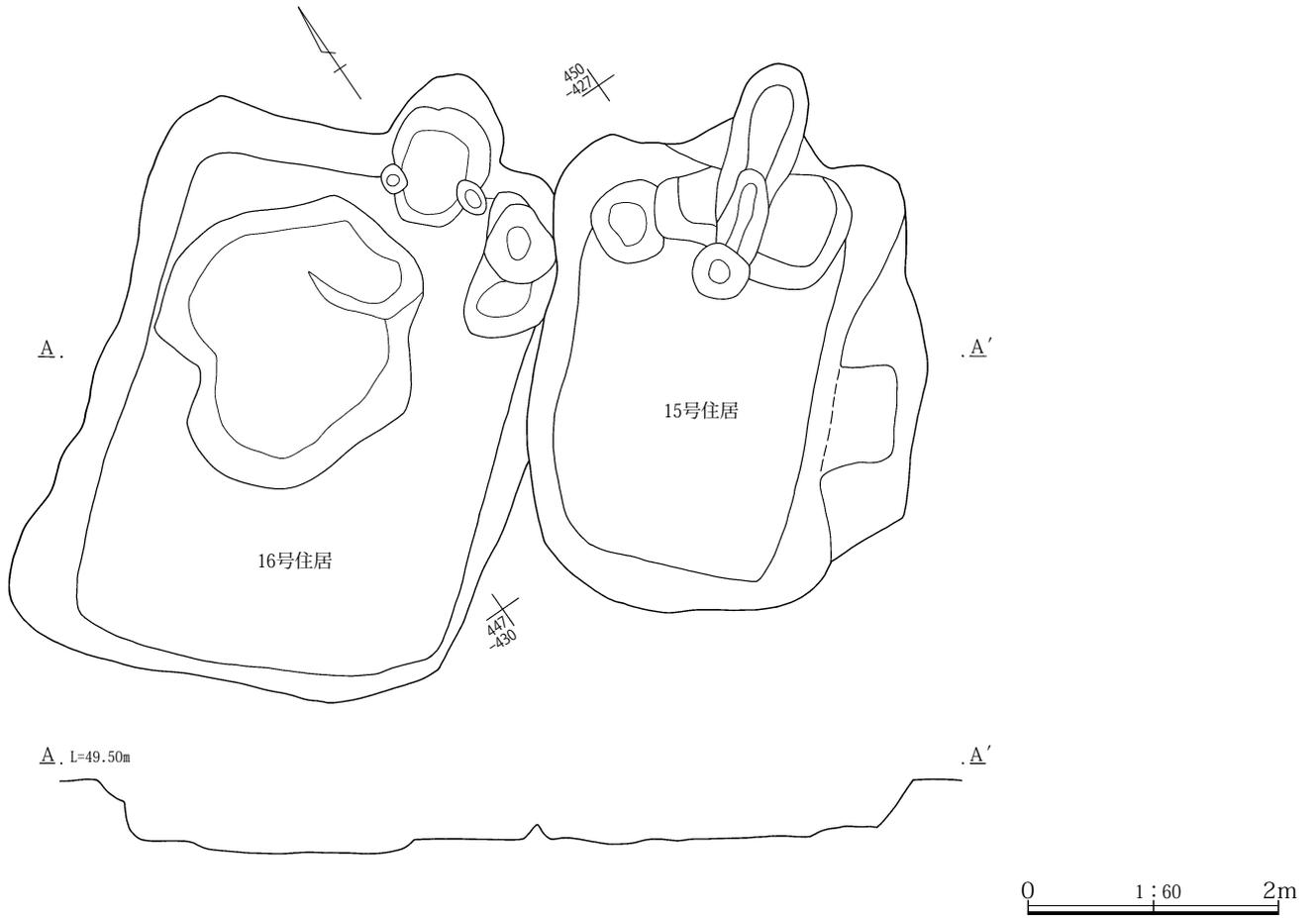
床面積：(6.12)㎡

本住居は、2区の中央に位置し、住居の北壁部分を14号溝と重複する。遺構確認において、本住居が古いことを確認している。周囲の同時期の遺構には、西側に12～14号住居・14号土坑が、南側に15・16号住居が重複して在り、南東8mには11号住居、北東10mには18号住居が点在する。

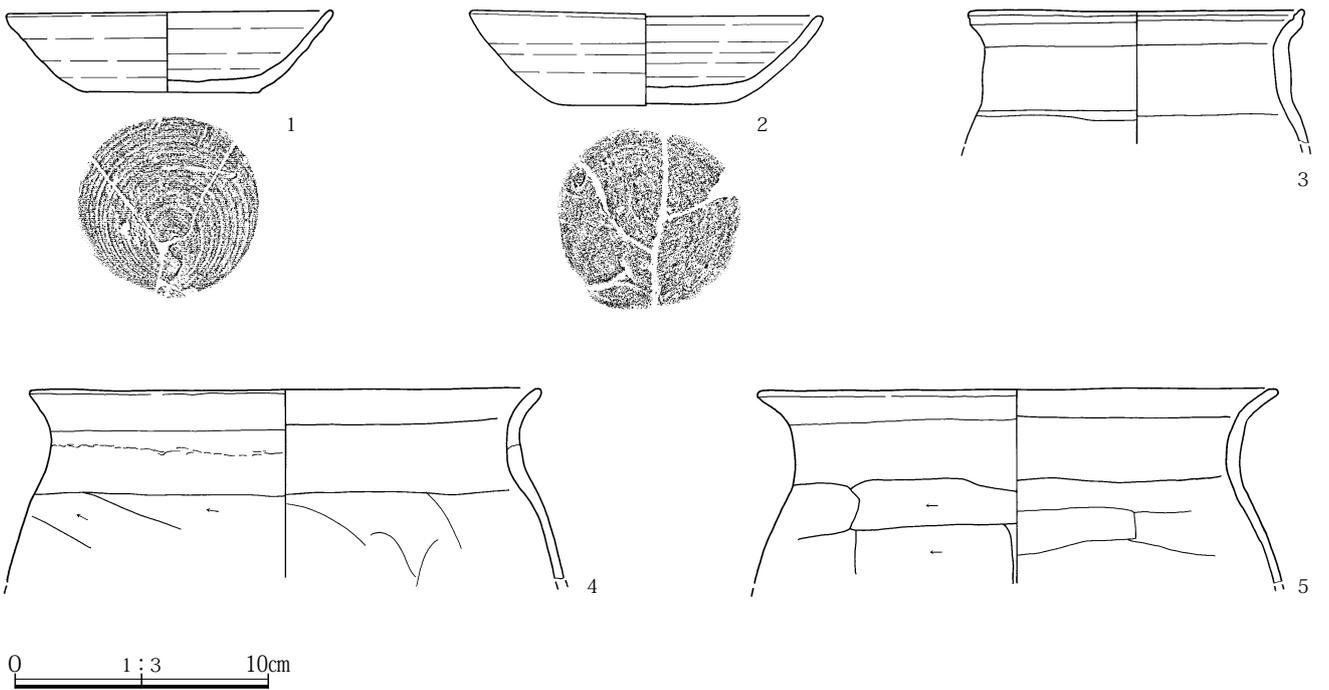
住居の残存状態は、14号溝と重複するため、北壁を検



第54図 16号住居・カマド平面図

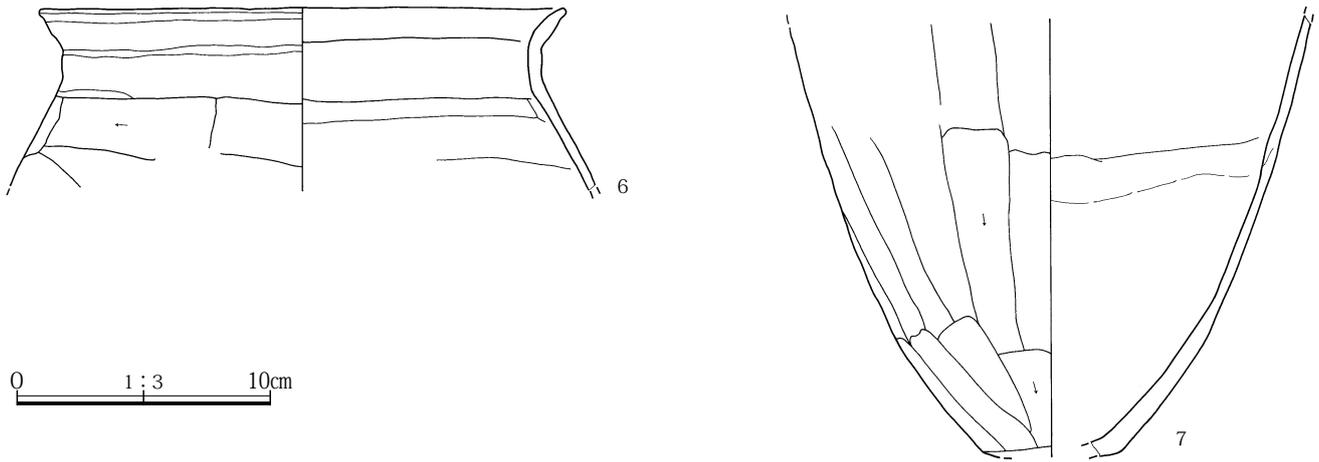


第55図 15・16号住居掘り方平面図



第56図 16号住居出土遺物(1)

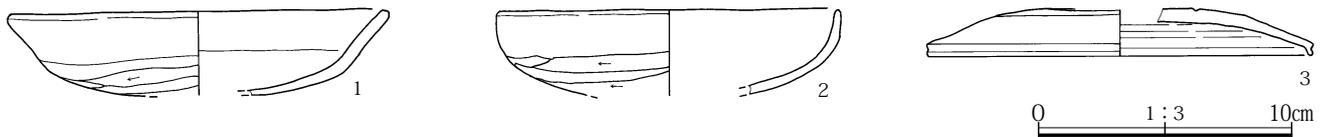
第3章 検出された遺構と遺物



第57図 16号住居出土遺物(2)

第15表 16号住居出土遺物観察表

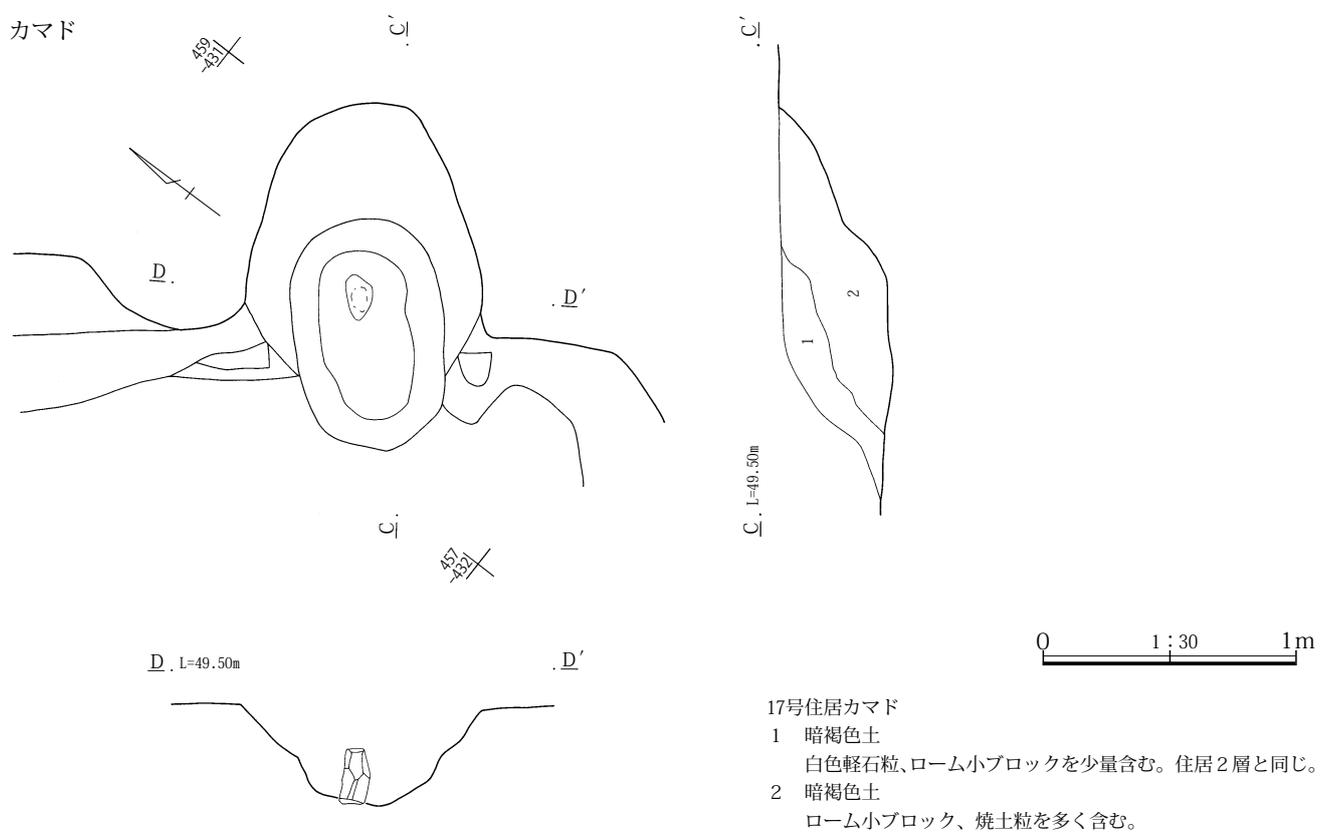
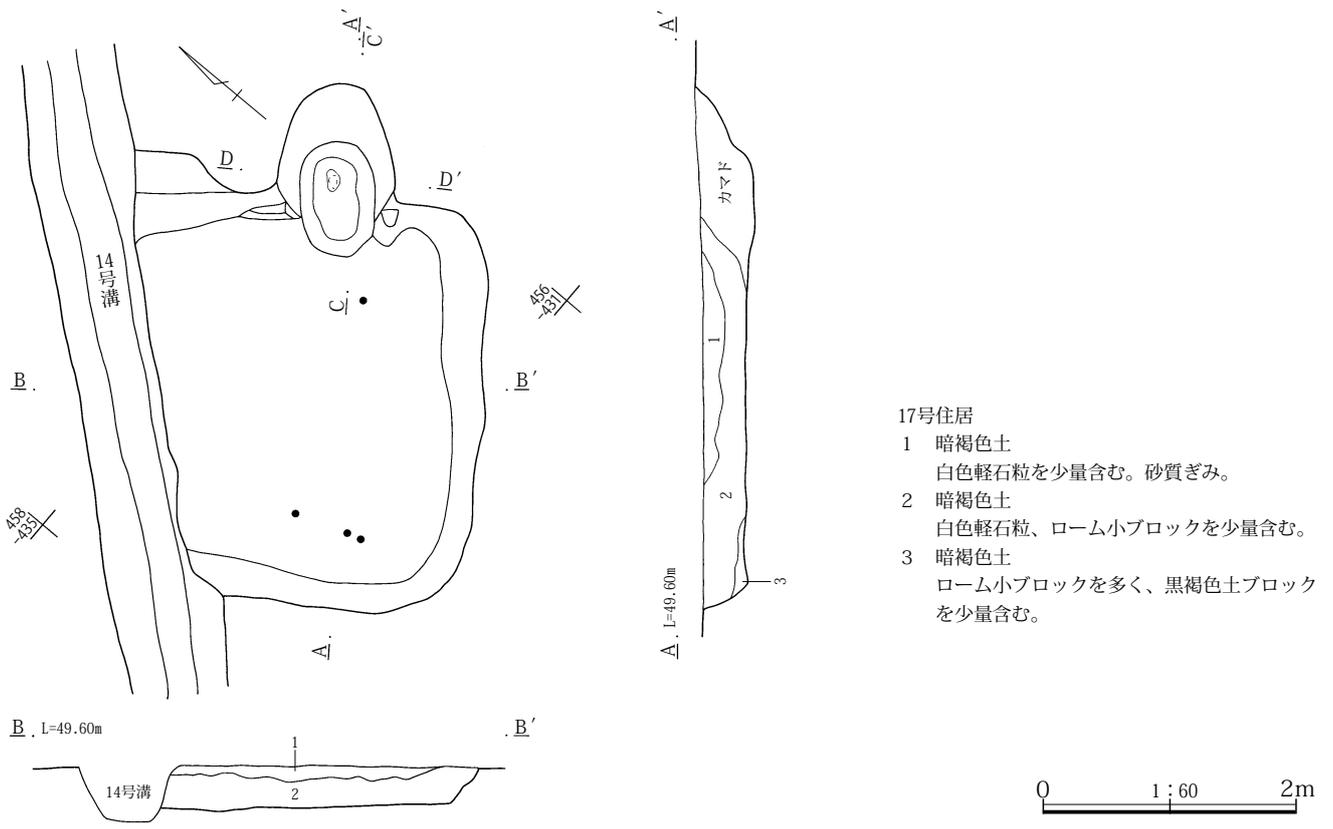
挿図番号 図版番号		NO.	種類	出土位置 残存率	計測値(cm)	胎土／焼成／ 色調	成形・整形の特徴	摘要
第56図 PL.38	1	須恵器 杯	床直 口縁部1/4欠損	口 12.7 底 6.9	高 3.2	細砂粒・白粒／還元焰／灰オリーブ	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転糸切り無調整。	
第56図 PL.38	2	須恵器 杯	床直 口縁部1/4欠損	口 13.6 底 7.0	高 3.8	細砂粒／還元焰／灰	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転糸切り無調整。	
第56図	3	土師器 甗	床直 口縁部～胴部上位片	口 13.0		細砂粒／良好／鈍い赤褐	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。	
第56図	4	土師器 甗	床下土坑内 口縁部～胴部上位片	口 19.8		細砂粒多／良好／明赤褐	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。	
第56図 PL.38	5	土師器 甗	カマド内 口縁部～胴部上位片	口 20.2		細砂粒／良好／鈍い赤褐	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。	
第57図 PL.38	6	土師器 甗	カマド内 口縁部～胴部上位片	口 20.4		細砂粒多／良好／鈍い黄橙	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。	
第57図 PL.38	7	土師器 甗	カマド内 底部～胴部下半片	底 5.2		細砂粒多／良好／鈍い赤褐	内面中位に輪積み痕が残る。底部と胴部はヘラ削り。内面はヘラナデ。	



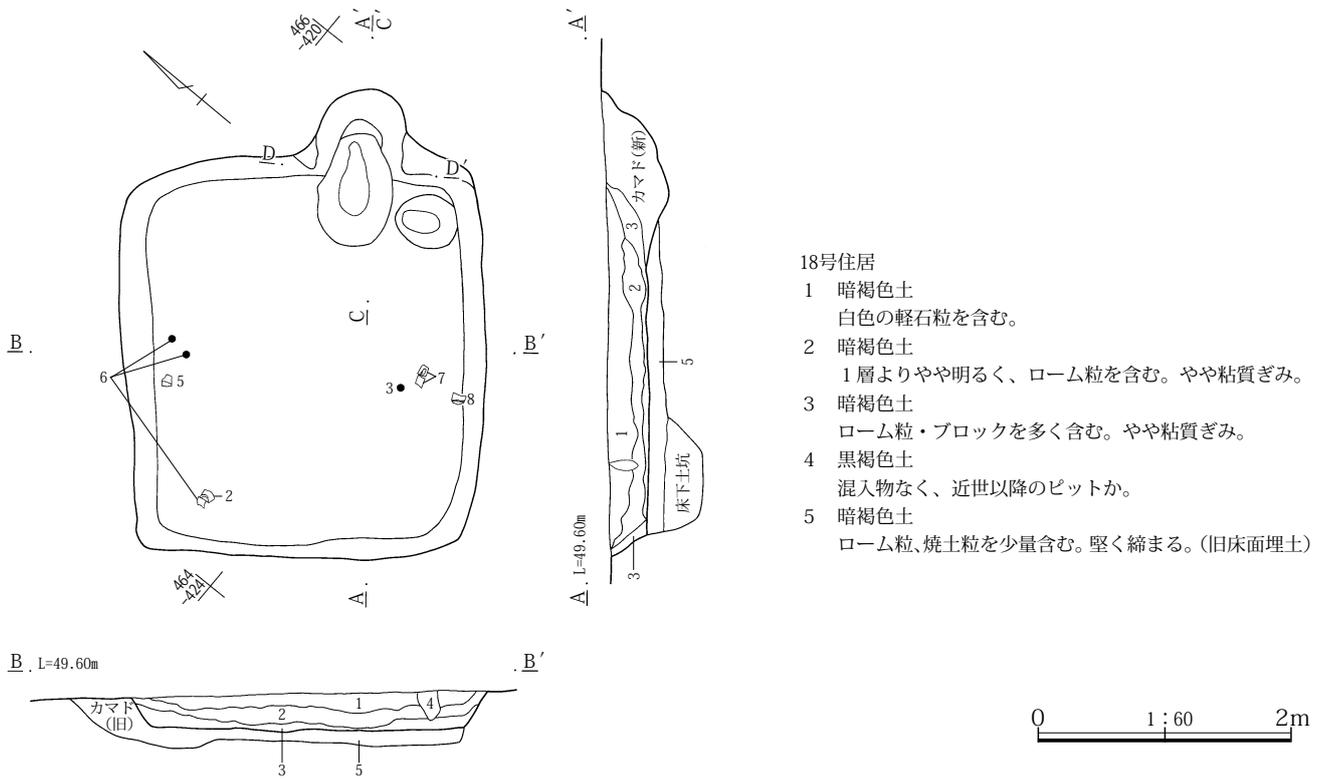
第58図 17号住居出土遺物

第16表 17号住居出土遺物観察表

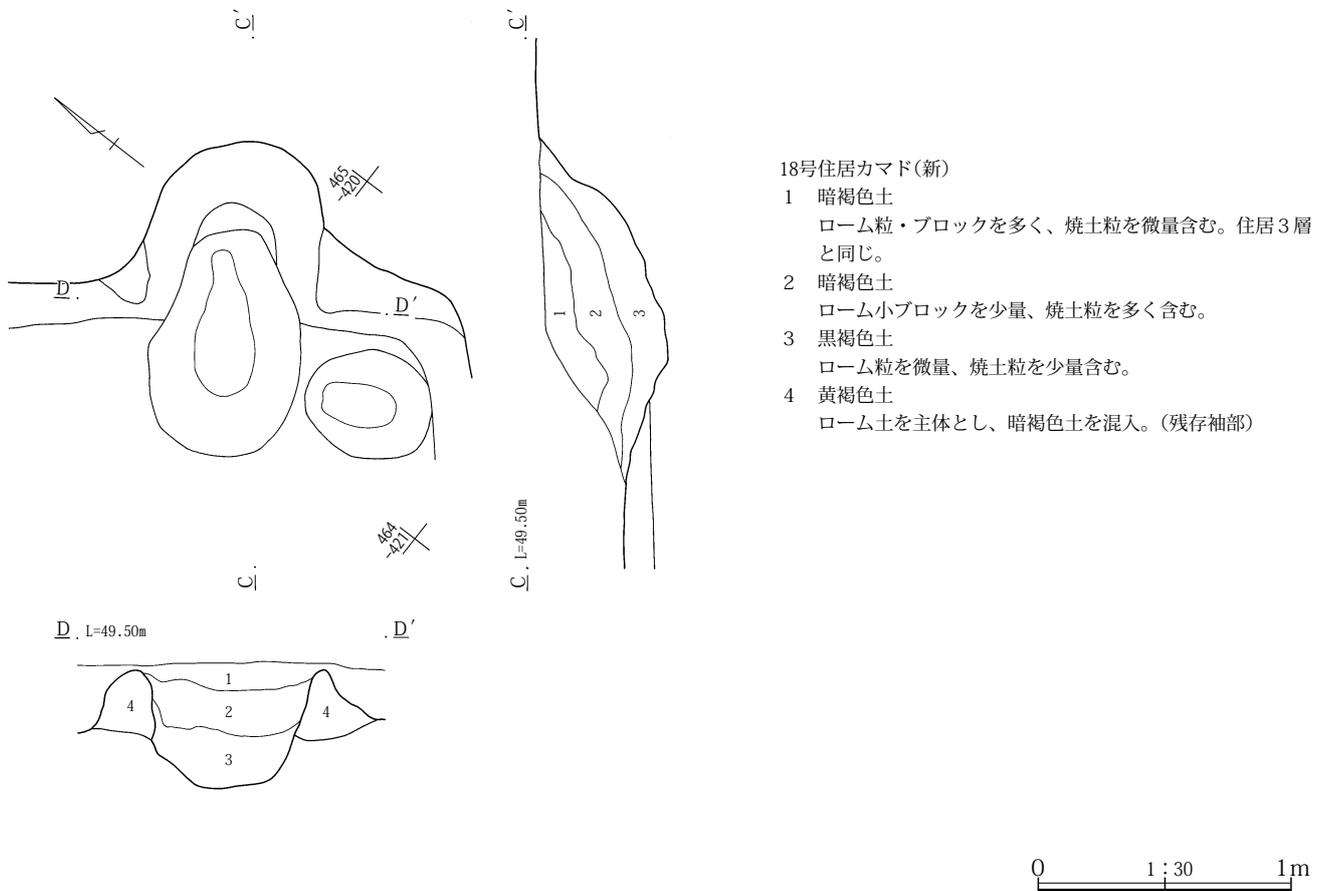
挿図番号 図版番号		NO.	種類	出土位置 残存率	計測値(cm)	胎土／焼成／ 色調	成形・整形の特徴	摘要
第58図 PL.38	1	土師器 杯	カマド内 1/3	口 14.6 稜 14.4		細砂粒／良好／鈍い黄橙	口縁部横ナデ、体部(稜下)上半はナデ、下半から底部は手持ちヘラ削り。	
第58図 PL.38	2	土師器 杯	カマド内 1/4	口 13.2		細砂粒／良好／鈍い黄橙	口縁部は横ナデ、体部から底部は手持ちヘラ削り。	
第58図	3	須恵器 杯蓋	カマド内 口縁部～天井部片	口 15.0		細砂粒・白粒／還元焰／灰	ロクロ整形、回転右回り。摘みは貼付か、天井部は中ほどまで回転ヘラ削り。	



第59図 17号住居・カマド平面図

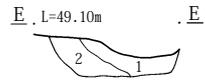
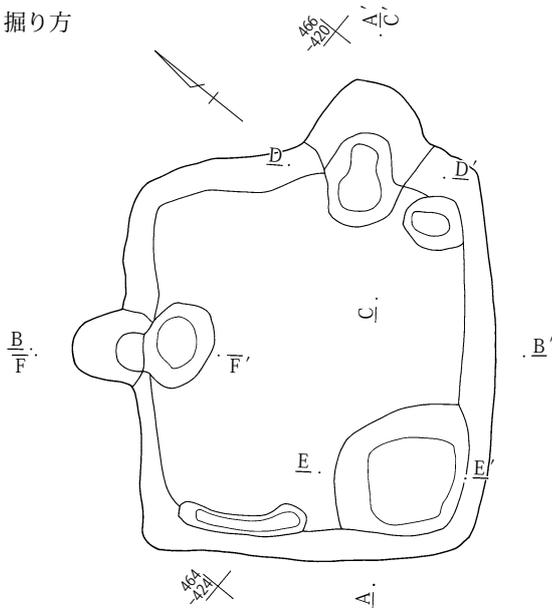


カマド (新)



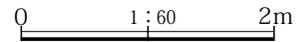
第60図 18号住居・カマド平面図

掘り方

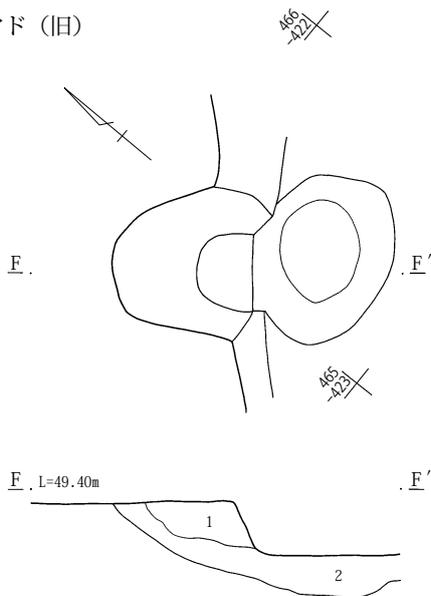


18号住居 床下土坑

- 1 暗褐色土
ローム粒を多量、焼土粒を微量含む。
- 2 暗褐色土
ローム小ブロックを少量含む。

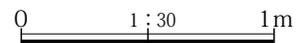


カマド (旧)



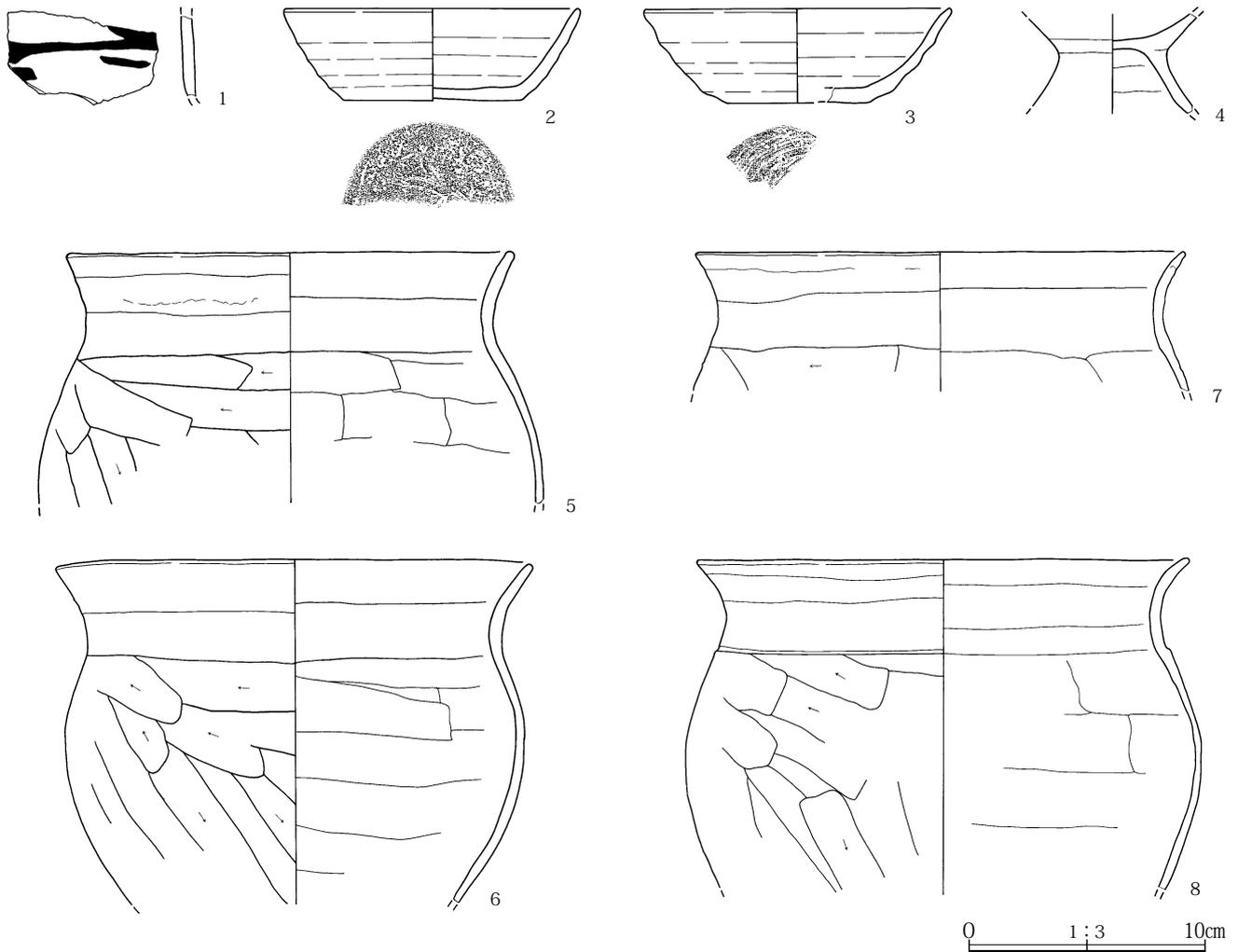
18号住居カマド(旧)

- 1 暗褐色土
ローム粒・小ブロックを多く、焼土粒を微量含む。
- 2 暗褐色土
ローム粒、焼土粒・ブロックを少量含む。



第61図 18号住居掘り方・カマド(旧)平面図

第3章 検出された遺構と遺物



第62図 18号住居出土遺物

第17表 18号住居出土遺物観察表

挿図番号 図版番号		NO.	種類	出土位置 残存率	計測値(cm)	胎土／焼成／ 色調	成形・整形の特徴	摘要
第62図 PL.38	1	土師器 杯	埋土中 底部小片			細砂粒／良好／鈍 い赤褐	底部は手持ちヘラ削り。	外面底部に墨 書？判読不 能。
第62図 PL.38	2	須恵器 杯	埋土中 1/3	口 12.2 高 3.9 底 7.4	細砂粒／還元焰／ 灰黄	ロクロ整形、回転右回り。底部回転ヘラ削り。		
第62図 PL.38	3	須恵器 杯	埋土中 1/4	口 13.0 高 4.0 底 6.0	細砂粒／還元焰／ 灰白	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転糸切り無調整。		
第62図 PL.38	4	土師器 台付甕	埋土中 胴部下位～脚部	底 4.6	細砂粒／良好／鈍 い赤褐	脚部は貼付か、脚部は内外面とも横ナデ。		
第62図 PL.38	5	土師器 甕	埋土中 口縁部～胴部上 位片	口 18.4 胴 21.2	細砂粒／良好／鈍 い赤褐	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面胴部はヘ ラナデ。		
第62図 PL.38	6	土師器 甕	埋土中 口縁部～胴部 中位片	口 19.8 胴 19.3	細砂粒／良好／橙	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面胴部はヘ ラナデ。		
第62図	7	土師器 甕	埋土中 口縁部～胴部上 位片	口 20.4	細砂粒／良好／鈍 い橙	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面胴部はヘ ラナデ。		
第62図	8	土師器 甕	床直 口縁部～胴部上 位片	口 20.6 胴 21.7	細砂粒／良好／明 赤褐	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面は頸部下 半から胴部にヘラナデ。		

出することはできなかったが、床面の掘り込みも深く、比較的良好である。埋土は、暗褐色土を主に3層に分層できる。埋土中には、ローム小ブロックを少量混在させることから人為的堆積の可能性をもつ。壁の状態は、全体に傾斜をもって立ち上がる。床面は平坦で、周溝は検出されていない。カマドは東壁の中央南寄りに位置する。残存する規模は、全長1.35m(焚き口から燃焼部長90cm、煙道部長45cm)、幅1.32mを測る。残存状態は良好で、両袖部は住居内に極僅かに張り出し、焚き口部から燃焼部底面の窪みは住居内から壁の外側に大きく張り出し、さらに煙道部が外側へ突出する。煙道の内側口の位置は、燃焼部底面よりも一段高い位置から続く。また、燃焼部底面の中央から、長さ22cm、幅11～17cmの棒状礫が支脚石として検出されている。貯蔵穴および柱穴は検出されていない。

床面はローム面に構築されており、下部構造は検出されていない。

遺物の出土状況は、全体的に散漫で、大半が埋土中からである。図示したのは、1・2の土師器杯、3の須恵器蓋で、これらはカマド内から出土している。他に、未掲載遺物として土師器片235片、須恵器片41片、灰釉陶器片1片がある。

出土土器から、本住居は8世紀第2四半期と考えられる。

18号住居 (第60～62図、第17・49表、PL. 9・38)

位置(座標)：X軸=36,462～36,467

Y軸=-39,420～39,424

形状：縦長方形

規模：長辺3.14m 短辺2.85m 壁高30cm

主軸方向：(新)N-53°-E

(旧)N-39°-W

床面積：6.73㎡

本住居は、2区中央の東に寄った辺りに位置する。周囲の同時期の遺構には、北東3mに29号住居が近接し、北西7mに20号住居が、南西10mに17号住居、南8mに11号住居が点在する。

住居の残存状態は、重複する遺構もなく、極めて良好である。埋土は、暗褐色土を主とした3層に分層できる。埋土中には、ロームブロックを混在させることから人為的堆積の可能性をもつ。壁の状態は、全体にやや傾斜を

もって立ち上がる。床面は平坦で、周溝は検出されていない。カマドは東壁の中央南寄りに位置する。残存する規模は、全長1.23m(焚き口から燃焼部長89cm、煙道部長34cm)、幅61cmを測る。残存状態は良好で、両袖部は住居内に極僅かに張り出し、焚き口部から燃焼部底面の窪みは住居内から壁の外側に大きく張り出し、さらに煙道部が外側へ突出する。断面観察から、残存する袖部は、ロームを主とした黄褐色土で構築されている。支脚は検出されていない。貯蔵穴はカマドの右側で、住居の南東隅に位置する。楕円形を呈し、横長に配置され、規模は長軸48cm、短軸41cm、深さ13cmを測る。柱穴は検出されていない。

床面下は、全体が堅く締まった暗褐色土であり、掘り方の存在を想定した。調査の結果、床面下は深さ10cm前後で、その底面は平坦なローム面が硬化しており、床面状を呈していた。また、西壁際には長さ1.0m程であるが、幅17cm、深さ5cmを測る周溝上の溝が検出された。さらに、北壁中央において、カマドの残痕が検出されるに至り、本住居の旧い段階の住居であることが判明した。つまり、北壁にカマドを有した横長方形の住居から、東壁にカマドを持つ縦長方形の住居へと改築したこととなる。なお、カマドの痕跡は、規模を全長1.11m(焚き口から燃焼部長56cm、煙道部長55cm)、幅65cmを測る。北壁中央に突出した煙道部と、床面上に残る燃焼部底面の窪みだけである。もう一つ、この旧住居調査時に、床下土坑が南西隅に検出された。方形を呈し、一辺1.0m前後、深さ32cmを測るが、新旧のどちらに伴うかは不明。

遺物の出土状況は、全体的に散漫でやや少なく、大半が埋土中からである。図示したのは、底部外面に墨書(文字不明)をもつ1の土師器杯、2・3の須恵器杯、4の台付き甕の脚部、5～8の甕4点であるが、8の甕は床直出土とカマド内出土の土器が接合している。他に、未掲載遺物として土師器片140片、須恵器片18片がある。

出土土器から、本住居は9世紀第1四半期と考えられる。

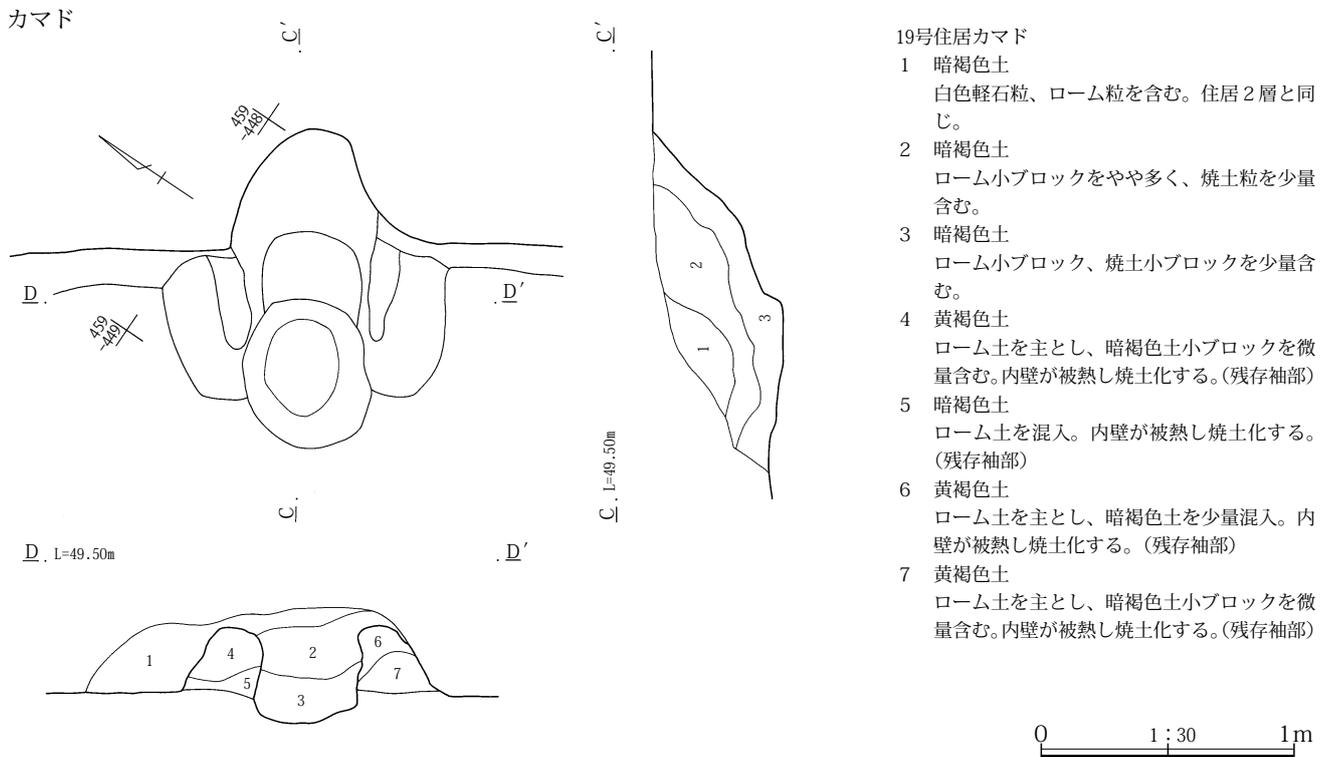
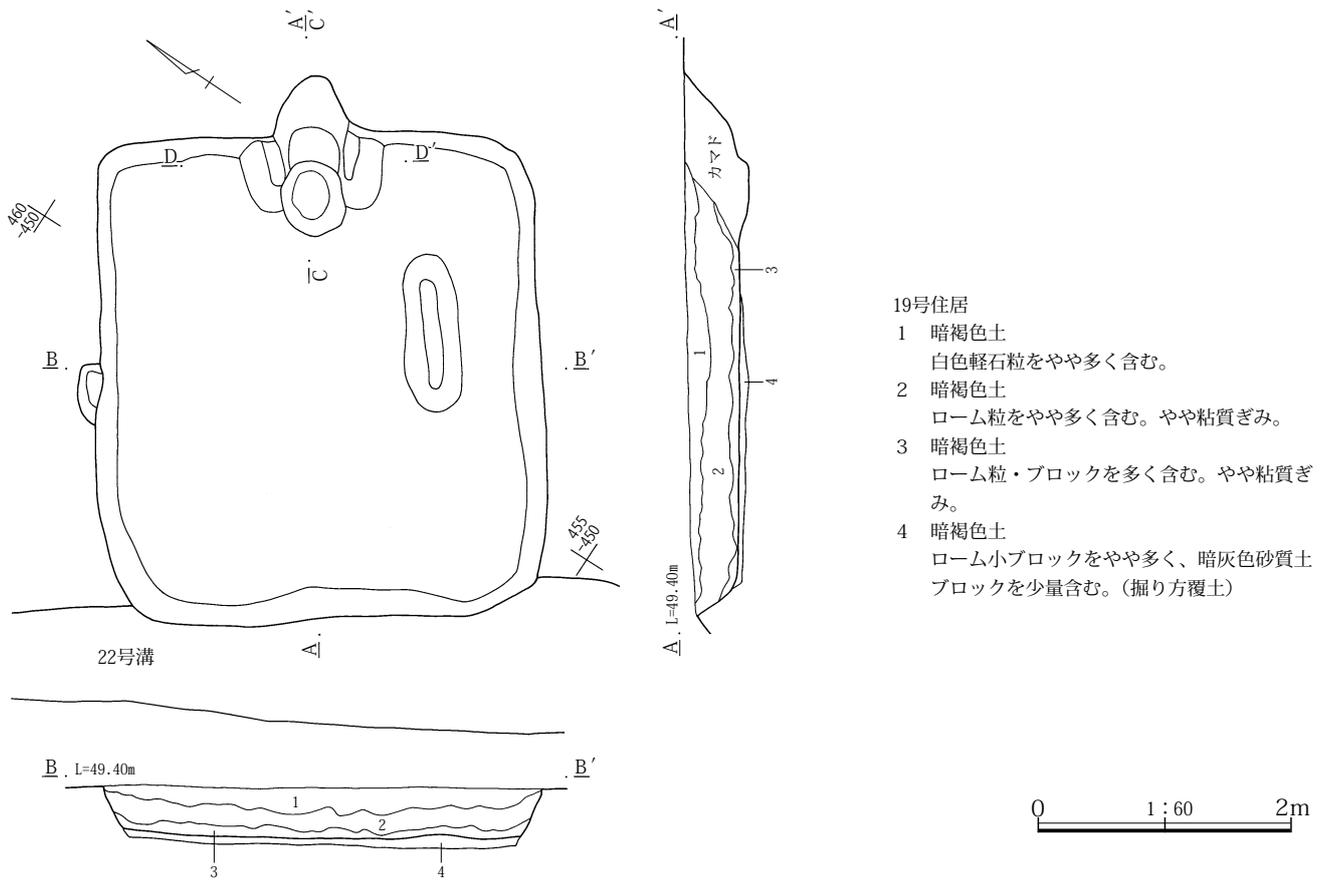
19号住居 (第63・64図、第18・49表、PL. 9・10・38)

位置(座標)：X軸=36,455～36,460

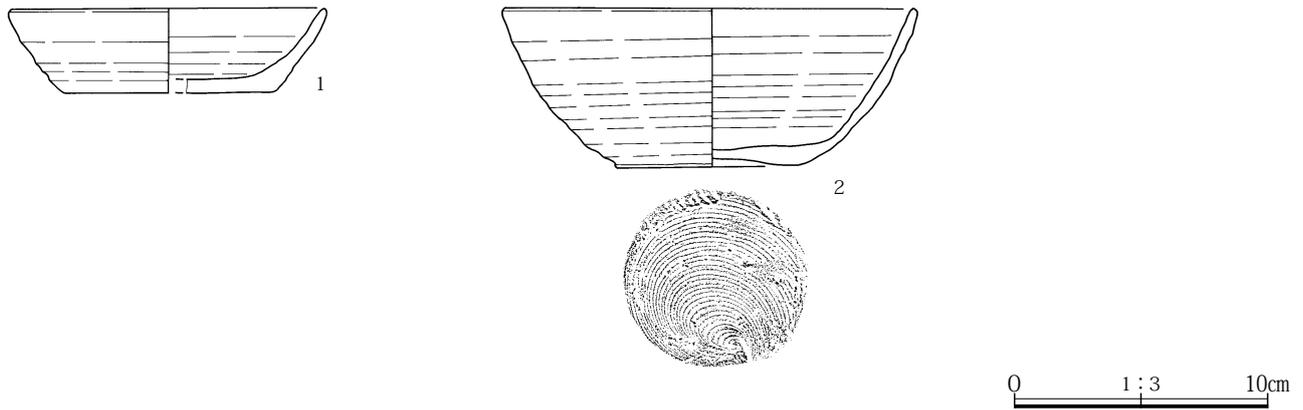
Y軸=-39,447～39,453

形状：縦長方形

規模：長辺3.85m 短辺3.45m 壁高40cm



第63図 19号住居・カマド平面図



第64図 19号住居出土遺物

第18表 19号住居出土遺物観察表

挿図番号 図版番号		NO.	種類	出土位置 残存率	計測値(cm)	胎土／焼成／ 色調	成形・整形の特徴	摘要
第64図		1	須恵器 杯	埋土中 1/5	口 12.2 高 3.3 底 8.0	細砂粒／還元焰／ 灰黄	ロクロ整形、回転右回り。底部回転ヘラ削り。	
第64図 PL.38		2	須恵器 椀	埋土中 3/5	口 15.8 高 6.3 底 7.2	細砂粒・粗砂粒・ 角閃石／還元焰／ 灰	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転糸切り無調整。	

主軸方向：N-58°-E

床面積：10.8㎡

本住居は、2区中央の北西に寄った辺りに位置し、調査区の西側を沿うように走向する22号溝の東際であり、住居の西壁を接するように22号溝と重複する。遺構確認時において、本住居が古いことを確認している。周囲の同時期の遺構には、南東6mに12号住居が、北西10mに21号住居が点在する。

住居の残存状態は、西壁を接するように22号溝と重複するが、床面までの掘り込みも深く、極めて良好である。埋土は、暗褐色土を主に3層に分層できる。埋土中には、ローム粒・ブロックを多く混在させることから人為的堆積と考えられる。壁の状態は、全体にやや傾斜をもって立ち上がる。床面は平坦で、周溝は検出されていないが、床中央南側に帯状の高まりが確認された。この高まりはかなり堅く締まり、長さ1.2m、幅40cm、高さ5cm前後で、頂部の幅は12cmを測り、南壁に沿うように、壁から45cm程離れて存在する。用途は不明であるが、先の15号住居の例から、入り口施設に関わる可能性もある。カマドは東壁の中央に位置する。残存する規模は、全長1.24m(焚き口から燃焼部長59cm、煙道部長65cm)、幅1.1mを測る。残存状態は良好で、両袖部は住居内に大きく張り出し、

内壁が被熱し焼土化する。焚き口部から燃焼部底面の窪みは住居内にあり、煙道部が外側へ突出する。断面観察から、残存する袖部は、ロームを主とした黄褐色土と、ロームを混在させた暗褐色土を積み上げて構築されている。支脚は検出されていない。貯蔵穴および柱穴も検出されていない。

床面下には、掘り方が確認された。掘り方はほぼ全面に及び、底面は平坦に近いが僅かに凹凸をもつ。床面から底面までの深さは5～8cmを測る。この掘り方覆土は、ローム小ブロックと暗灰色砂質土ブロックを含む暗褐色土で、床面となる上面は堅く硬化している。

遺物の出土状況は、全体的に散漫で、大半が埋土中からである。図示できたのは、1の須恵器杯と2の須恵器椀の2点のみである。他に、未掲載遺物として土師器片229片、須恵器片38片がある。

出土土器から、本住居は8世紀末から9世紀初頭と考えられる。

20号住居 (第65・66図、第19・49表、PL.10・38・46)

位置(座標)：X軸=36,467～36,472

Y軸=-39,429～39,434

形状：横長方形

規模：長辺3.54m 短辺2.95m 壁高35cm

主軸方向：N-9°-W

床面積：8.11㎡

本住居は、2区北側の住居が集中する一群の南に位置する。周囲の同時期の遺構には、北側1mに28号住居が近接し、北西に24～27・30号住居が集中し、東10mに21号住居、南東6mに18号住居が点在する。

住居の残存状態は、重複する遺構もなく、極めて良好である。埋土は、主に暗褐色土の1・2層と、褐色土の3層に分層できる。埋土中には、ローム粒を多く混在させることから人為的堆積の可能性をもつ。壁の状態は、全体にやや傾斜をもって立ち上がる。床面は平坦で、周溝は検出されていない。カマドは北壁中央に位置する。残存する規模は、全長1.4m(焚き口から燃焼部長1.08m、煙道部長32cm)、幅1.0mを測る。残存状態は良好で、両袖部は住居内に極僅かに張り出し、焚き口部から燃焼部底面の窪みは住居内から壁の外側に大きく張り出し、さらに煙道部が外側へ突出する。断面観察から、残存する袖部は、暗褐色土粘質土ブロックを多く含む暗褐色土と、ロームを主とした黄褐色土で構築されている。支脚は検出されていない。貯蔵穴および柱穴も検出されていない。

床面はローム面に構築されており、下部構造は検出されていない。

遺物の出土状況は、全体的に散漫で、大半が埋土中からであるが、比較的カマド周辺部に多い状況であった。図示した109の須恵器の椀はカマド内出土で、110の土師器の甕は北西隅付近の床面から出土している。他に、未掲載遺物として土師器片274片、須恵器片31片がある。

出土土器から、本住居は9世紀第1四半期と考えられる。

21号住居 (第67～69図、第20・49表、PL.10・11・39・46・47・49)

位置(座標)：X軸=36,467～36,471

Y軸=-39,455～39,459

形状：横長方形

規模：長辺3.05m 短辺2.37m 壁高28cm

主軸方向：N-75°-E

床面積：5.25㎡

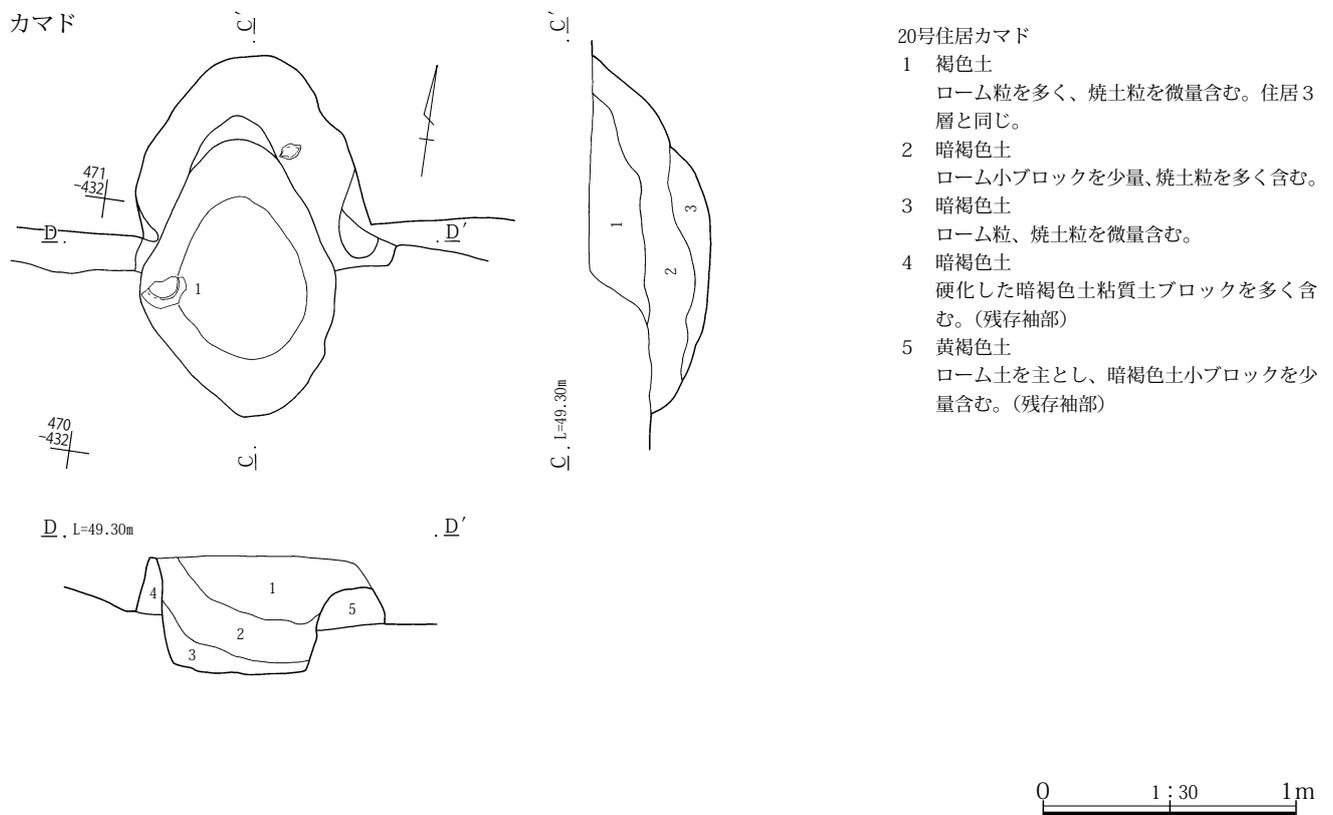
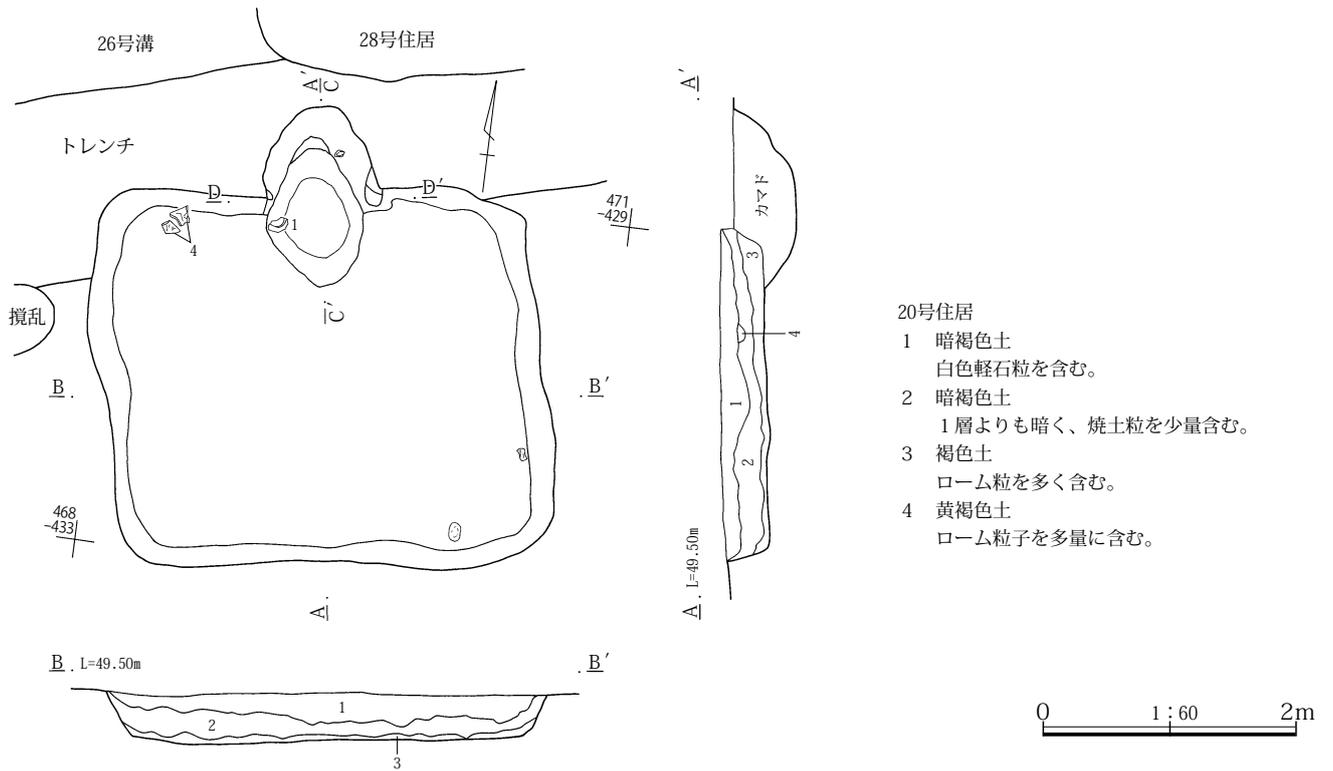
本住居は、2区の最も西に位置し、調査区の西側を沿うように走向する22号溝の東際にある。住居の西壁を僅かに接するように22号溝と重複する。遺構確認時に

において、本住居が古いことを確認している。周囲の同時期の遺構には、南東10mに19号住居が、北東11mに27号住居、同16mに24号住居が点在する。

住居の残存状態は、僅かに西壁を接するように22号溝と重複するが、床面までの掘り込みも深く、極めて良好である。埋土は、褐色土を主とし、暗褐色土との4層に分層できる。埋土中には、ローム小ブロックを多く混在させることから人為的堆積と考えられる。壁の状態は、全体にやや傾斜をもって立ち上がる。床面は平坦で、周溝は検出されていない。カマドは東壁の中央南寄りに位置する。残存する規模は、全長1.52m(焚き口から燃焼部長1.25m、煙道部長27cm)、幅47cmを測る。残存状態は極めて良好で、両袖部は住居内に僅かに張り出し、両袖共に袖石を有する。焚き口部から燃焼部底面の窪みは住居内から壁の外側に大きく張り出し、さらに煙道部が外側へ長く突出する。袖石には、右袖石に長さ20cm程の長方体状の自然礫を使用し、左袖石は長方体状に4面を面取りして形状を整えた凝灰岩質の石材が用いられている。また、断面観察から、残存する袖部は、袖石外側にロームを主とした黄褐色土を積み上げて構築している。特に、燃焼部位置には大小2個体の甕が正位で出土しており、左側の甕の下部から支脚石が検出された。支脚石には、棒状の自然礫が使用されている。貯蔵穴および柱穴は検出されていない。

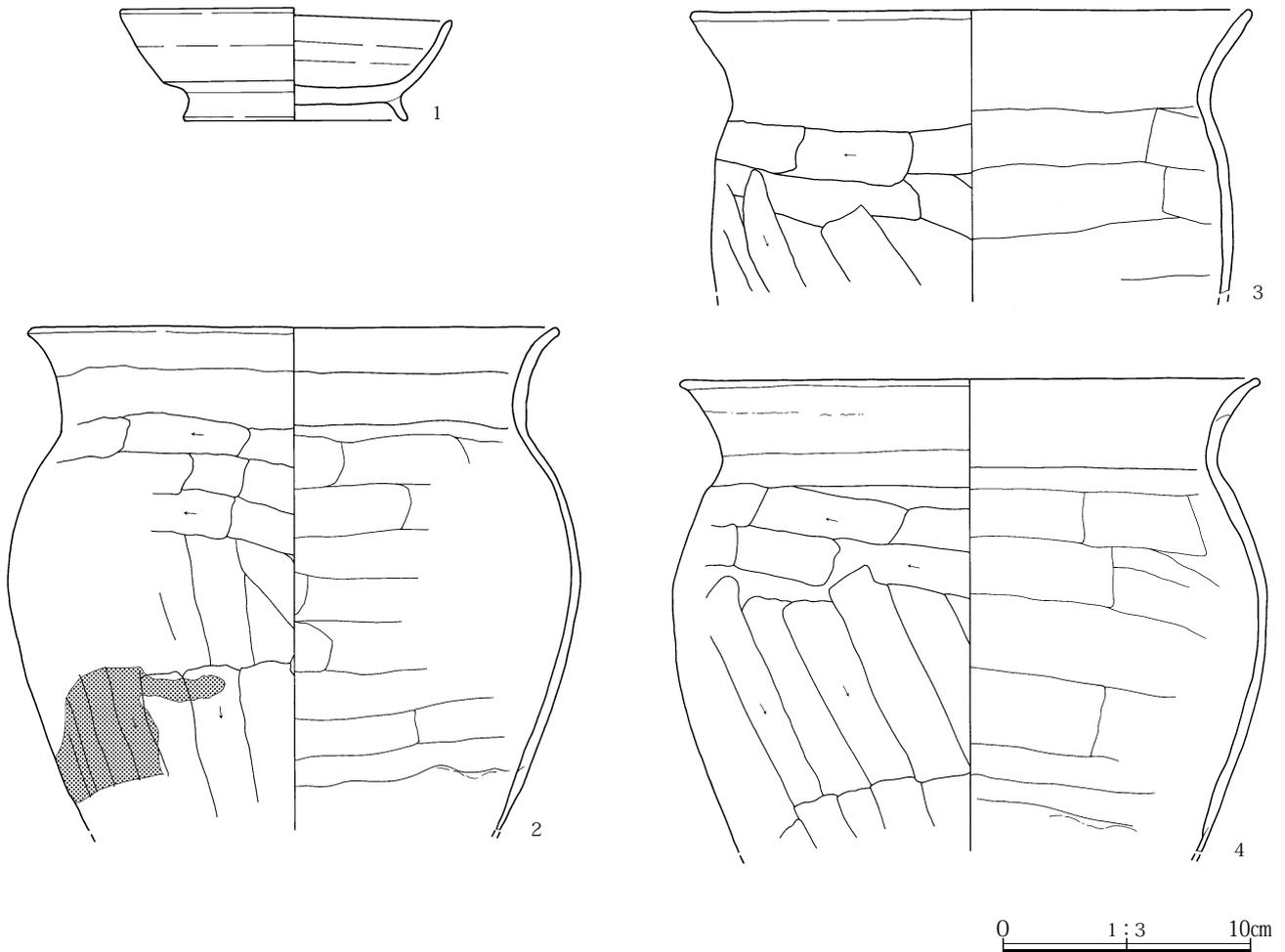
床面はローム面に構築されており、下部構造は検出されていない。

遺物の出土状況は、全体的に散漫であるが、極めてカマド内における出土状態が良好であった。カマド燃焼部位置に正位で出土した甕2点の内、左側に出土したのが7でほぼ完形。右側が4の小型台付き甕で脚部を欠く完形で出土。ただし、脚部は住居埋土からの出土で接合している。また、焚き口部位置で横位で出土したのが5の甕であり、半面を欠く半完形(2/3)である。1の土師器高盤は、体部の内面が黒色処理された土器で、東に54m程離れた23号住居出土の土器片と接合している。さらに、カマド右脇からは石製の紡錘車出土し、カマド前の床面上からは鉄製品片が出土している。紡錘車は蛇紋岩製で、上面には「米」と「毛」の二文字の刻書文字が確認できる。なお、床面付近からは、大きめな炭化材が多く出土している状況も認められた。図示していないが、厚板状



第65図 20号住居・カマド平面図

第3章 検出された遺構と遺物



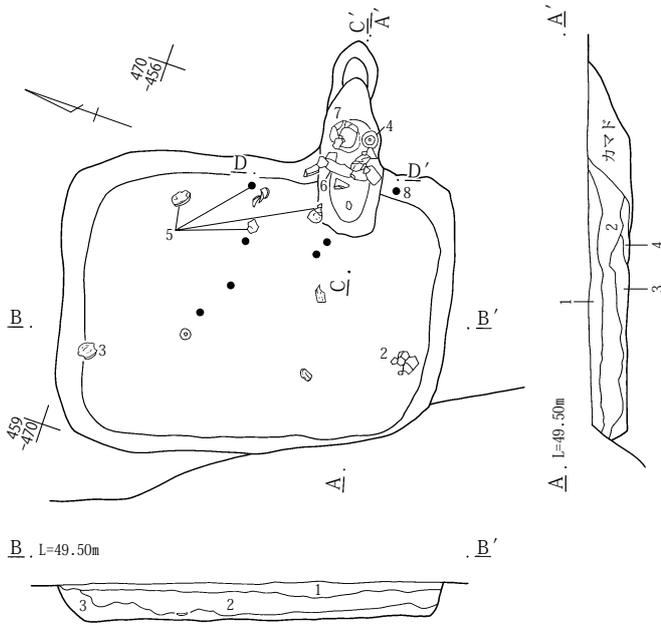
第66図 20号住居出土遺物

第19表 20号住居出土遺物観察表

挿図番号 図版番号		NO.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値(cm)	胎土／焼成／ 色調	成形・整形の特徴	摘要
第66図 PL.38	1	須恵器 杯	カマド内 3/4	口 13.2 高 4.5 底 8.6 台 8.8	細砂粒／還元焰／ 灰白	ロクロ整形、回転右回り。高台は貼付、底部回転ヘラ削り。		
第66図 PL.38	2	土師器 甕	埋土中 口縁部～胴部中 位片	口 21.0 胴 23.0	細砂粒／良好／橙	内面胴部に輪積み痕が残る。口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。	外面胴部下半に煤が付着。	
第66図 PL.38	3	土師器 甕	埋土中 口縁部～胴部上 位片	口 22.2	細砂粒／良好／鈍 い黄橙	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。		
第66図 PL.38	4	土師器 甕	床直 口縁 部～胴部中位片	口 23.0 胴 23.8	細砂粒／良好／橙	内外面に輪積み痕が残る。口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。		

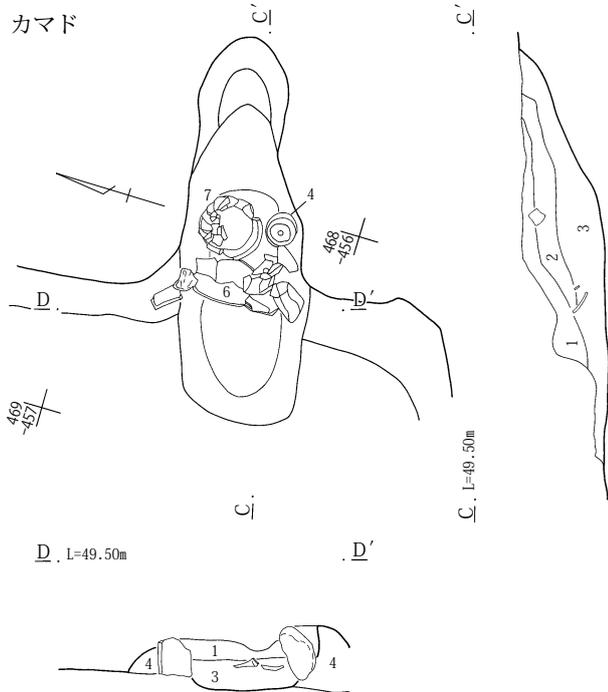
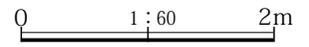
石製品

挿図番号 図版番号	NO.	器種 形態・素材	出土位置	長 (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	重 (g)	製作・使用状況	石材
PL.46	5	砥石 切り砥石	埋土中	(4.1)	(2.1)	(1.8)	12.9	背面・左側面に使用面(砥面)が残る。	砥沢石

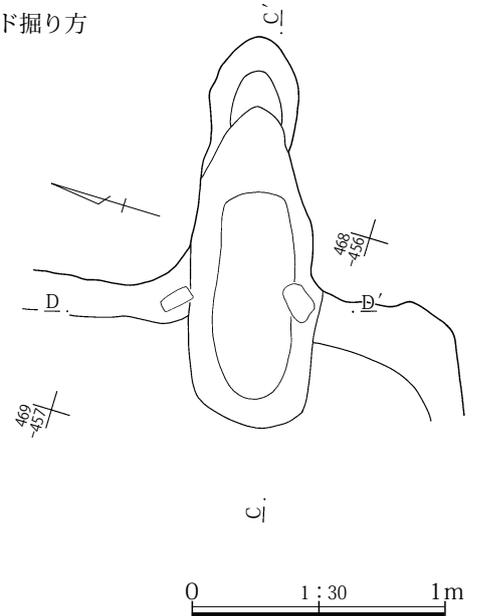


21号住居

- 1 褐色土
白色軽石粒、焼土粒、炭化物を含む。
- 2 褐色土
黄褐色土の小ブロックを多く含む。
- 3 暗褐色土
黄褐色土の小ブロックを含み、炭化物を多く、
焼土小ブロックを含む。
- 4 褐色土
1・2層より明るく、ローム土を混入。



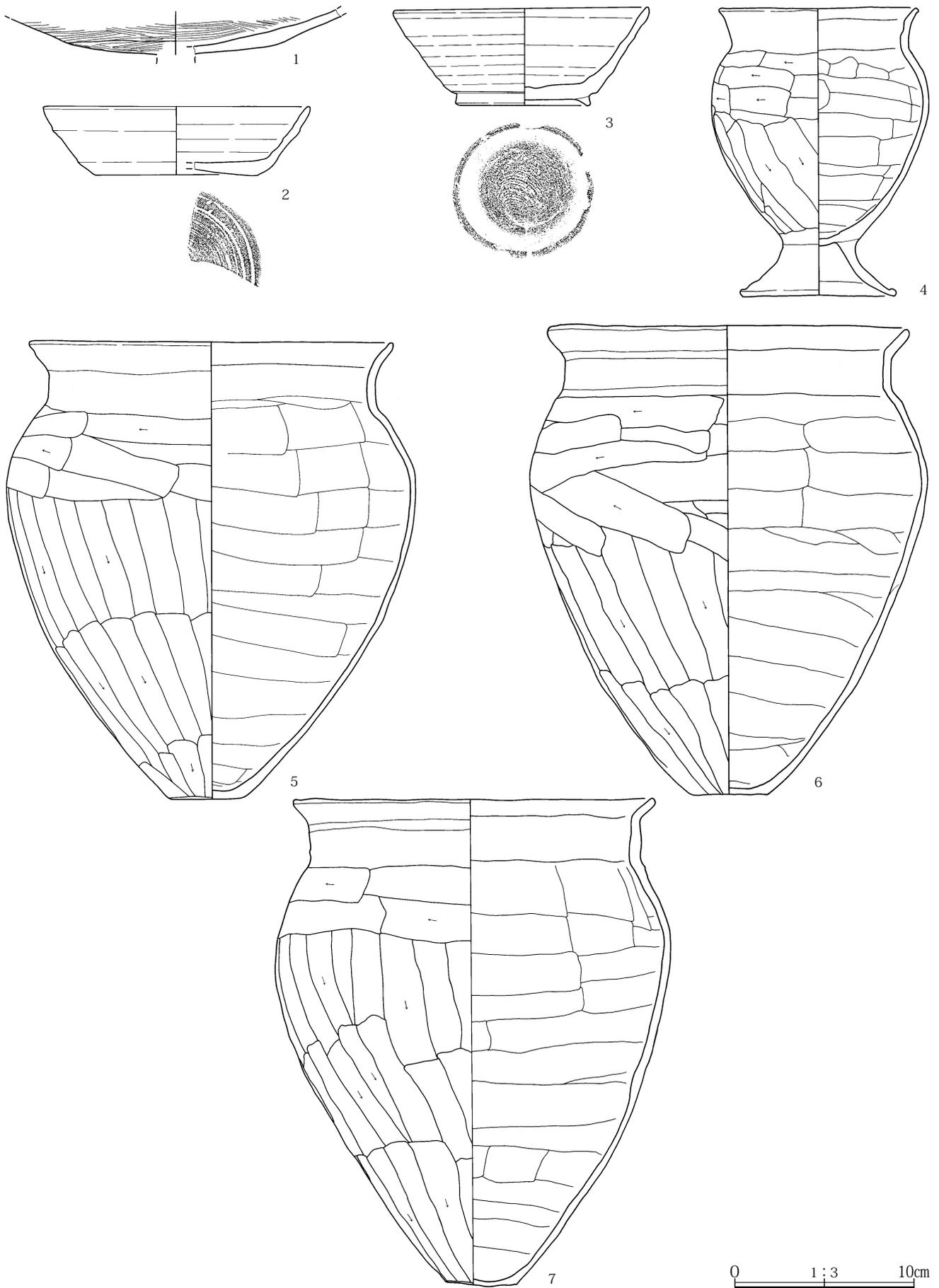
カマド掘り方



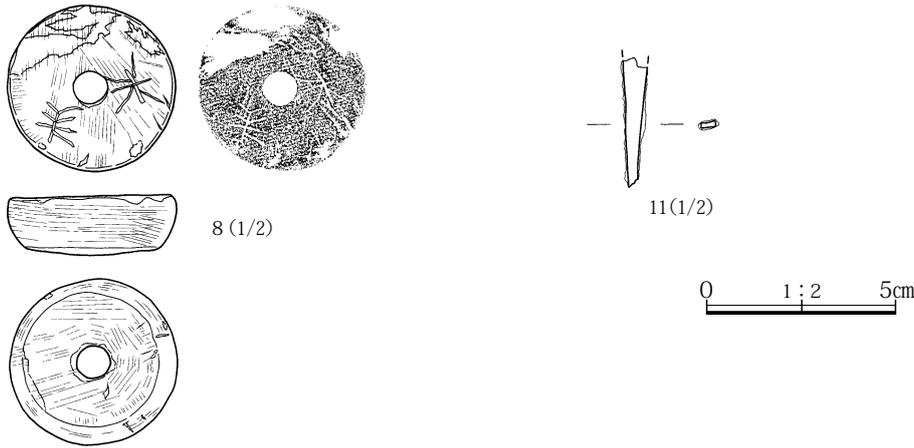
21号住居カマド

- 1 褐色土 黄褐色土小ブロックを多く、白色軽石粒を少量含む。住居2層と同じ。
- 2 暗褐色土 焼土粒を微量含む。
- 3 褐色土 ローム土を混入。炭化物を少量含む。住居4層と同じ。
- 4 黄褐色土 ローム土を主体とし、暗褐色土を少量混入。(残存袖部)

第67図 21号住居・カマド平面図



第68図 21号住居出土遺物(1)



第69図 21号住居出土遺物(2)

第20表 21号住居出土遺物観察表

土器類

挿図番号 図版番号	NO.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値(cm)	胎土／焼成／ 色調	成形・整形の特徴	摘要
第68図 PL.39	1	土師器 高盤	埋土中 杯身部底部片		細砂粒／良好／鈍 い黄橙	内面黒色処理。内外面ともヘラ磨き。	
第68図 PL.39	2	須恵器 杯	埋土中 1/3	口 14.6 高 3.8 底 9.0	細砂粒／還元焰／ 灰	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転糸切り無調整。	内面は酸化焰 焼成。
第68図 PL.39	3	須恵器 椀	埋土中 口縁 部を僅かに欠損	口 14.0 高 5.5 底 8.0 台 7.2	細砂粒・白粒／還 元焰／灰白	ロクロ整形、回転右回り。高台は貼付、底部は回転糸切り。	
第68図 PL.39	4	土師器 台付甕	カマド内 ほぼ完形	口 10.8 高 16.0 脚 8.3 胴 12.0	細砂粒／良好／鈍 い赤褐	脚部は貼付、口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り、脚部は横ナデ。内面胴部はヘラナデ。	
第68図 PL.39	5	土師器 甕	カマド焼き口 2/3	口 19.8 高 25.2 底 4.1 胴 22.6	細砂粒／良好／鈍 い赤褐	口縁部から頸部は横ナデ、胴部から底部はヘラ削り。内面は底部から胴部はヘラナデ。	
第68図 PL.39	6	土師器 甕	埋土中 1/2	口 19.8 高 26.1 底 4.2 胴 22.0	細砂粒／良好／赤 褐	内面胴部に輪積み痕が残る。口縁部から頸部は横ナデ、胴部から底部はヘラ削り。内面は底部から胴部はヘラナデ。	
第68図 PL.39	7	土師器 甕	カマド内 ほぼ完形	口 19.7 高 27.2 底 3.9 胴 21.8	細砂粒／良好／橙	内面胴部に輪積み痕が残る。口縁部から頸部は横ナデ、胴部から底部はヘラ削り。内面は底部から胴部はヘラナデ。	

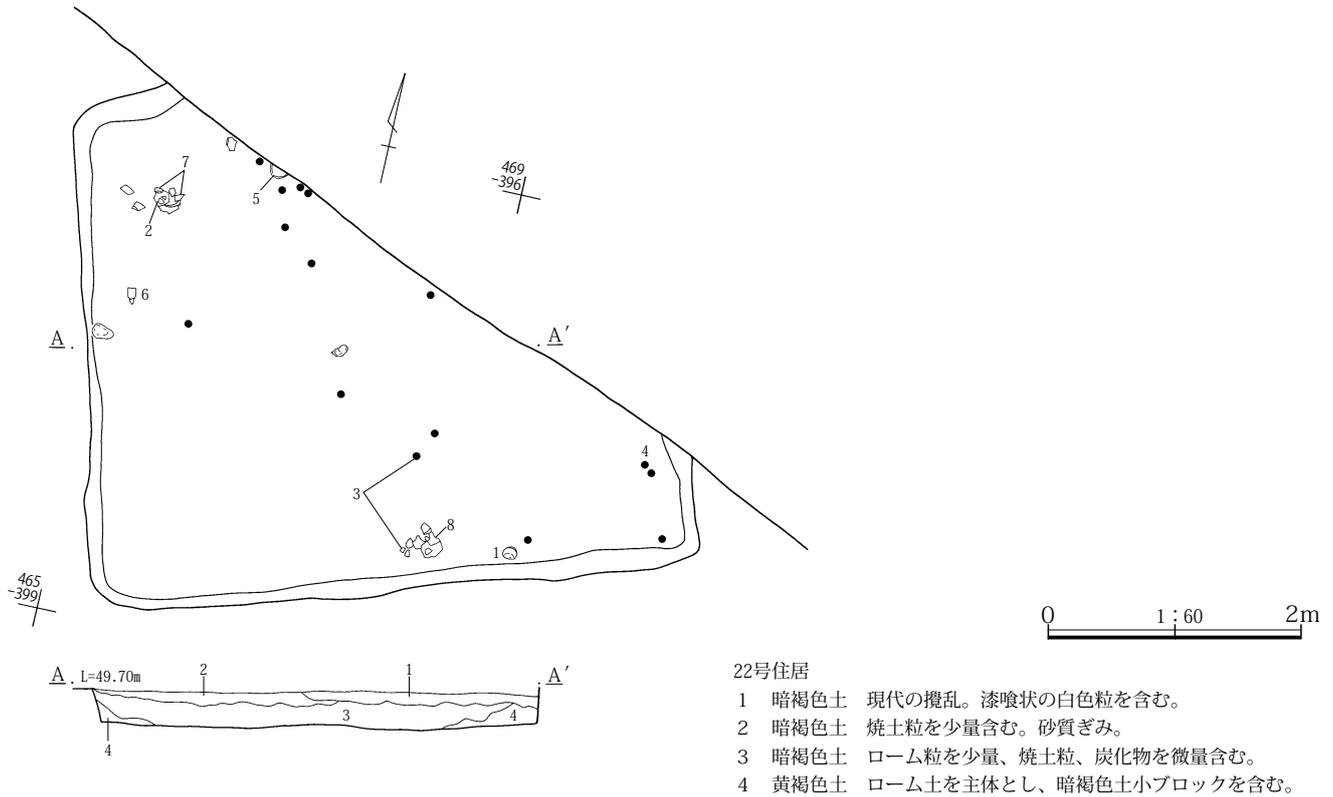
石製品

挿図番号 図版番号	NO.	器種 形態・素材	出土位置	長 (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	重 (g)	製作・使用状況	石材
第69図 PL.47 PL.46	8	紡錘車	カマド脇 床付近	4.4	4.4	1.6	48.9	全面が丁寧に研磨され、上面には「米」と「毛」の二文字の刻書文字がある。紡錘孔径：0.9cm	蛇紋岩
	9	カマド袖石	カマド袖	(19.8)	14.5	6.4	1835.3	厚板状(幅14cm・厚さ6cm)に加工、カマド構造材として使用。被熱して破損するため全長は不明。	未固結凝灰岩
PL.47	10	カマド袖石	カマド袖	(10.4)	(10.8)	—	544.2	厚板状に加工、カマド構造材として使用。被熱して破損するため全長は不明。	未固結凝灰岩

金属製品

挿図番号 図版番号	NO.	種類 器種	出土位置 残存率	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	特徴・状態	備考
第69図 PL.49	11	鉄器 鍬	床直 茎部片	(3.4)	0.6	0.2	(1.0)	錆化が激しい。	

第3章 検出された遺構と遺物



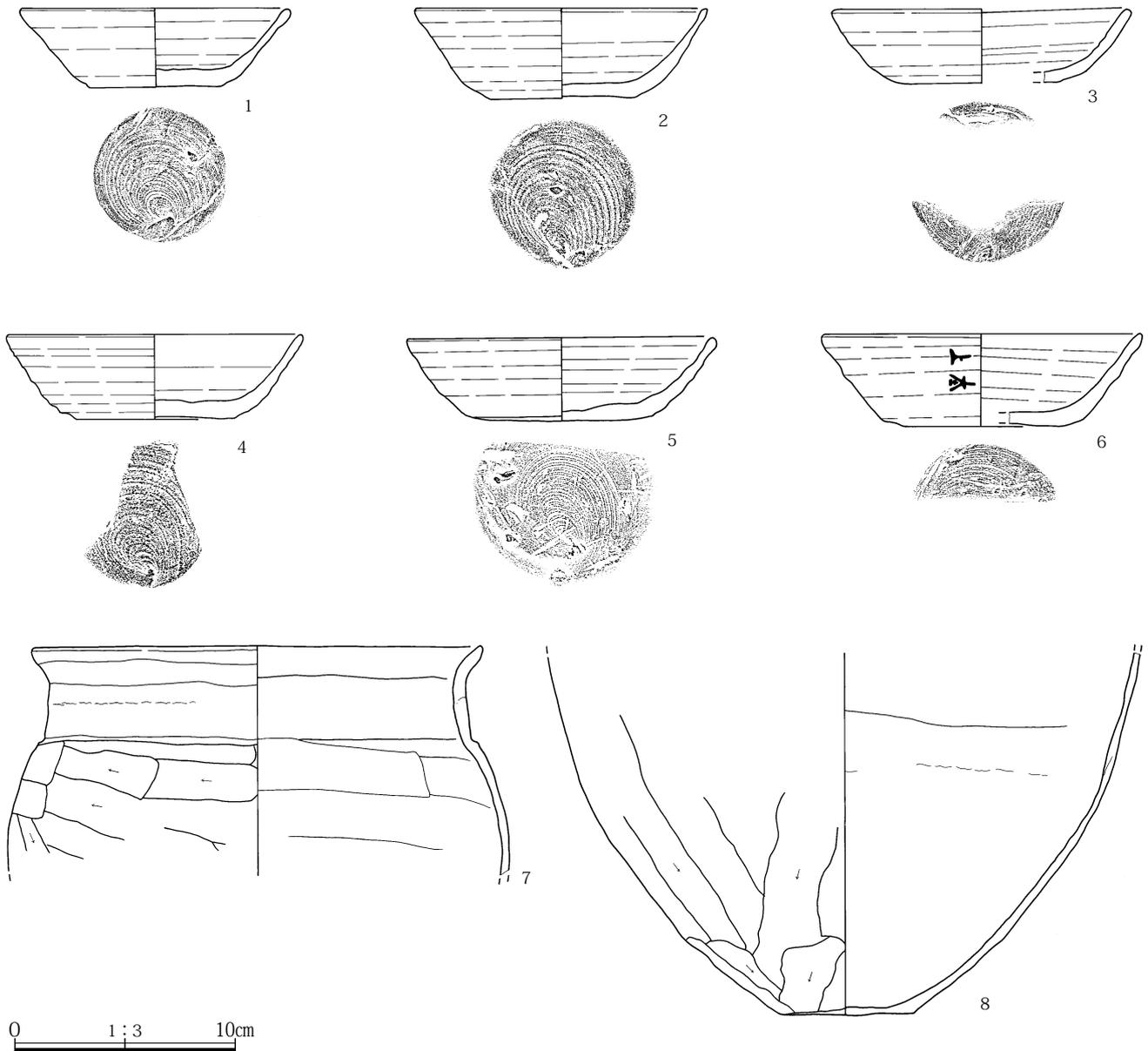
第70図 22号住居平面図

第21表 22号住居出土遺物観察表

挿図番号 図版番号		NO.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値(cm)	胎土／焼成／ 色調	成形・整形の特徴	摘要
第71図 PL.39	1	須恵器 杯	埋土中 完形	口 12.0 高 3.7 底 6.0	細砂粒／還元焰／ 灰	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転糸切り無調整。		
第71図 PL.39	2	須恵器 杯	床直 3/4	口 13.8 高 4.2 底 6.8	細砂粒／還元焰／ 灰白	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転糸切り無調整。		
第71図 PL.39	3	須恵器 杯	埋土中 2/3	口 13.1 高 3.4 底 7.2	細砂粒／還元焰／ 灰白	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転糸切り無調整。		
第71図 PL.39	4	須恵器 杯	埋土中 1/4	口 13.2 高 3.9 底 7.0	細砂粒／還元焰／ 灰	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転糸切り無調整。		
第71図 PL.39	5	須恵器 杯	床直 3/5	口 13.6 高 3.8 底 8.0	細砂粒／角閃石／ 酸化焰／鈍い黄橙	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転糸切り無調整。		
第71図 PL.39	6	須恵器 杯	床直 1/3	口 14.1 高 4.2 底 7.7	細砂粒／褐粒／酸 化焰／鈍い黄褐	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転糸切り無調整。	外面口縁部に「上●」の墨書。	
第71図 PL.39	7	土師器 甕	床直 口縁部～胴部上 位片	口 20.0 胴 22.6	細砂粒／良好／赤 褐	外面頸部に輪積み痕が残る。口縁部から頸部は横ナデ、胴部はへら削り。内面胴部はへらナデ。		
第71図 PL.39	8	土師器 甕	埋土中 底部～胴部下 半片	底 6.0	細砂粒／良好／暗 赤褐	内面胴部に輪積み痕が残る。底部と胴部はへら削り。内面はへらナデ。		

石製品

挿図番号 図版番号	NO.	器種 形態・素材	出土位置	長 (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	重 (g)	製作・使用状況	石材
PL.46	9	石製品 不明	覆土中	2.0	1.6	0.8	3.6	碁石様の玉石で、光沢面が広がる。	珪質頁岩



第71図 22号住居出土遺物

に加工された未固結凝灰岩製の袖石材が2点(第20表、P L.46・47)ある。他に、未掲載遺物として土師器片192片、須恵器片16片がある。

出土土器から、本住居は9世紀第3四半期と考えられる。

22号住居 (第70・71図、第21・49表、PL.11・39・46)

位置(座標)：X軸=36,465～36,470

Y軸=-39,394～39,400

形状：方形

規模：長辺4.76m 短辺4.07m 壁高27cm

主軸方向：不明

床面積：11.6㎡

本住居は、2区東側の調査区境に位置し、住居の北東部が2区と3区間の道路部分となる調査区外に当たる。周囲の同時期の遺構には、南側1mに23号住居が近接し、西15mに29号住居が、同22mに18号住居が点在する。

住居の北東部が調査区外にあるものの、住居全体の約2/3を調査することができ、残存状態は比較的良好と言えよう。上層の一部に攪乱土が及んでいるが、埋土は2・3層の暗褐色土を主に、4層の黄褐色土を含む3層に分層できる。埋土中には、ローム粒を少量混在させるが人為的堆積かは不明。壁の状態は、全体に直立ぎみに立ち上がる。床面は平坦で、周溝は検出されていない。カマ

ドは調査範囲内では検出できなかった。東壁にカマドを有するとすれば、縦長方形を呈する住居となる。柱穴は検出されていない。

床面はローム面に構築されており、下部構造は検出されていない。

遺物の出土状況は、全体的に散漫でやや少なく、北西隅付近には床直遺物が目立つ。図示したのは、1～6の須恵器杯、7・8の甕であるが、2・5・6の須恵器杯および7の土師器の甕は、いずれも北西隅付近の床面出土である。なお、6の口縁部外面には「上●」の墨書がある。石製品としては、9とした光沢面が広がる碁石様の玉石が出土している。他に、未掲載遺物として土師器片105片、須恵器片47片がある。

出土土器から、本住居は9世紀第3四半期と考えられる。

23号住居 (第72～77図、第22・49表、PL.11～13・40・41・49～51)

位置(座標): X軸=36,458～36,464

Y軸=-39,397～39,404

形状: 縦長方形

規模: 長辺5.12m 短辺3.84m 壁高30cm

主軸方向: N-63°-E

床面積: 17.81㎡

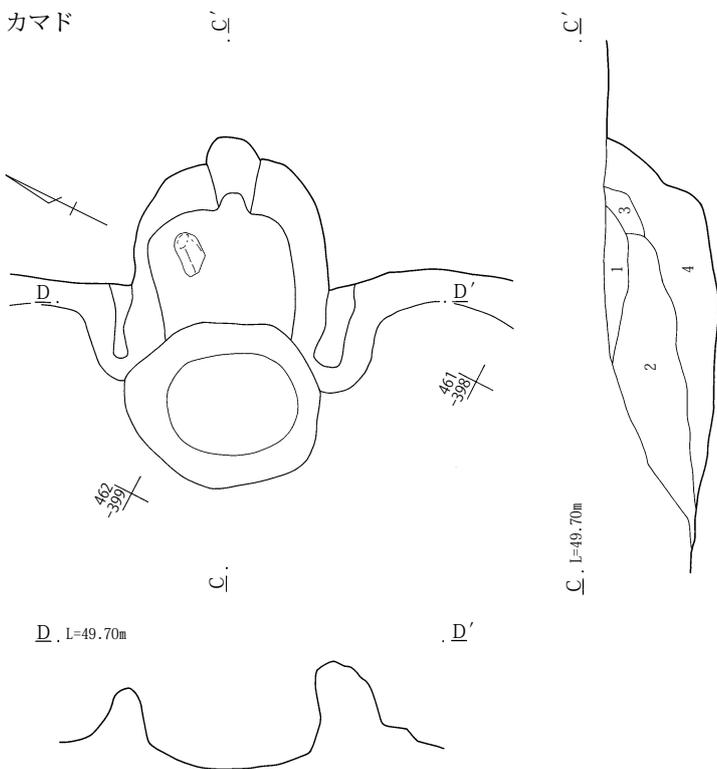
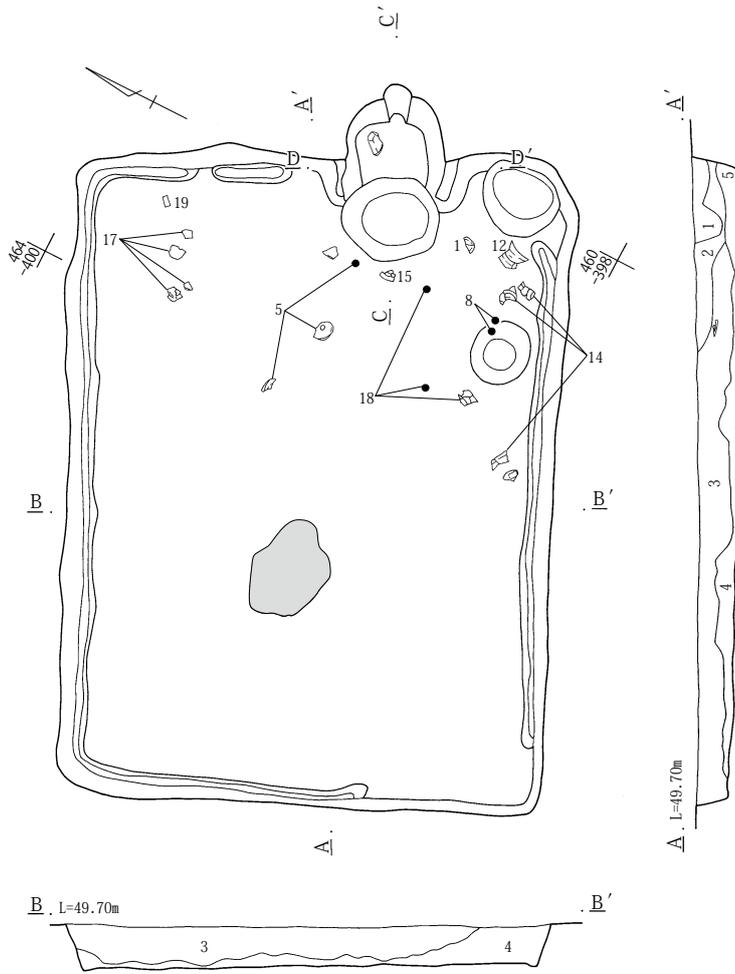
本住居は、2区の東側に位置し、重複する遺構はない。周囲の同時期の遺構には、北側1mに22号住居が近接し、北西13mに29号住居が、同17mに18号住居、南西19mに11号住居、同10mに1号掘立柱建物が点在する。

住居の残存状態は、極めて良好である。埋土は、暗褐色土を主とした2～5層までの4層に分層できる。ただし、床面を覆う4層中には、炭化物および小炭化材が多く出土していることが確認されている。埋土中には、ローム粒を少量混在させるが人為的堆積かは不明。壁の状態は、全体に直立ぎみないし僅かに傾斜をもって立ち上がる。床面は平坦で、周溝が検出されている。周溝は、幅13cm、深さ5cm程を測り、東壁のカマド付近および南西隅を除く壁際に巡る。また、床面中央のやや西側付近には、被熱による焼土化した部分が検出された。その形状は不整で、長さ80cm、幅55cm程を測る。カマドは東壁の中央南寄りに位置する。残存する規模は、全長1.38m(焚き口から燃烧部長1.08m、煙道部長30cm)、幅1.15mを

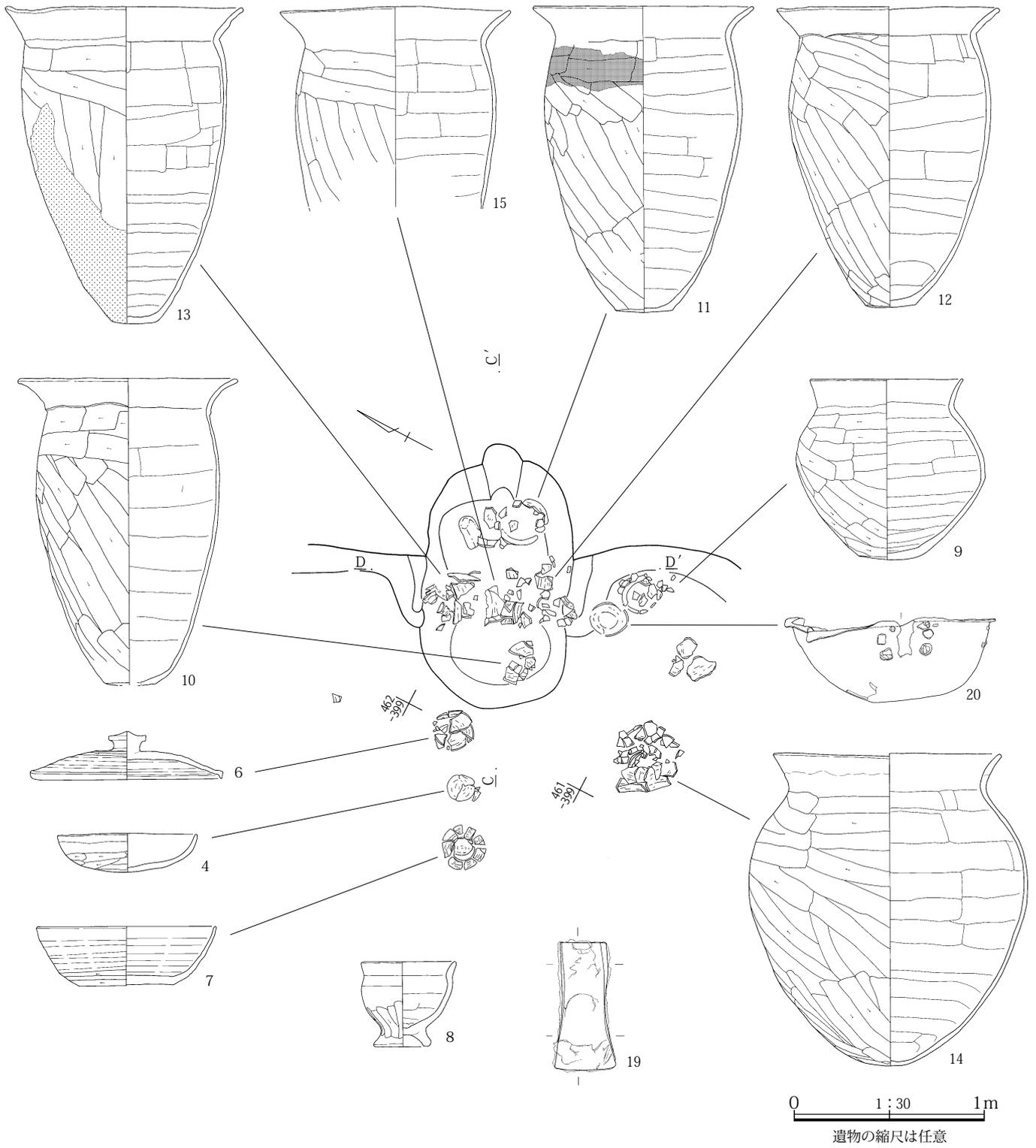
測る。残存状態は極めて良好で、両袖部は住居内に張り出し、焚き口部から燃烧部底面の窪みは住居内から壁の外側に大きく張り出し、さらに煙道部が外側へ僅かに突出する。また、断面観察から、煙道部天井の残存と考えられる焼土ブロック主体の赤褐色土が確認されている。残存する袖部は、ロームを掘り残した状態にあり、袖先端がやや低い。なお、燃烧部位置には燃烧部底面左側に棒状の自然礫を用いた支脚石が検出され、右側には11の甕が正位で出土している。さらに、焚き口部となる両袖間には、12(ほぼ完形)・13(ほぼ完形)・15(口縁部から胴部上半)の3個体の甕が横位に潰れた状態で出土している。ちなみに、13の口縁部は左袖側を向き左側に、15は口縁部が左側を向き中央に、12は口縁部が左側を向き右側に位置している。この3個体の甕の出土状況から、鳥居状となる焚き口部天井に用いられた可能性が高く、3個体の口縁部を同一方向(左向き)に連結させ、両端を袖に架けて構築していたと思われる。貯蔵穴はカマドの右側で、住居の南東隅に位置する。楕円形を呈し、隅壁に接するように配置され、規模は長軸65cm、短軸54cm、深さ10cmを測る。また、貯蔵穴の西側70cm程の南壁傍には、径50cm、深さ20cmの円形の土坑が検出されている。

床面はローム面に構築されており、下部構造は検出されていない。

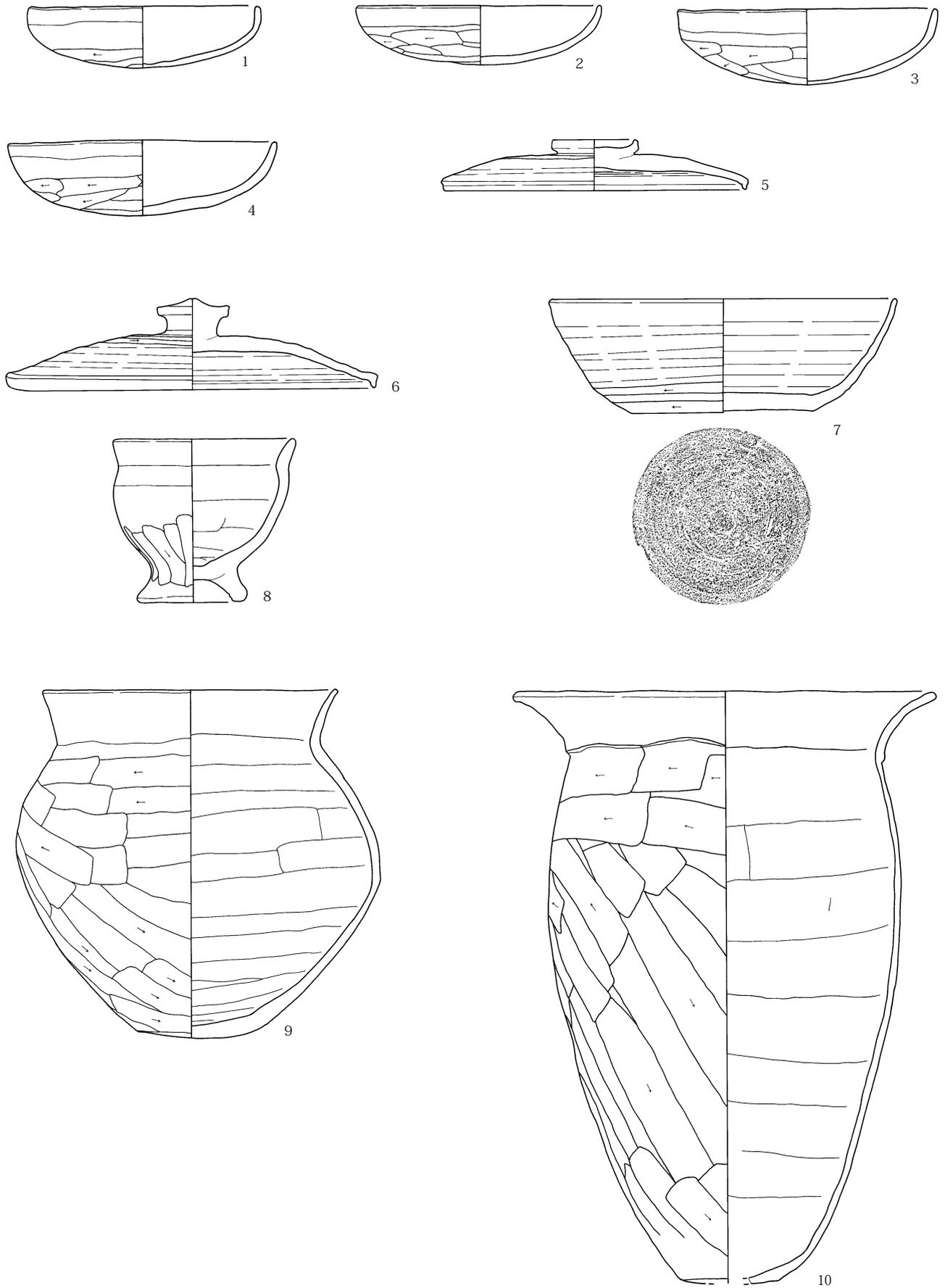
遺物の出土状況は、カマド周辺に多く集中し、カマド内およびカマド前・右側における出土状態が極めて良好であった。カマド燃烧部位置に正位で出土した甕1点、焚き口部での甕3点は先述した通りで、カマド前の床面上からは4の土師器杯、6の須恵器杯蓋、7の須恵器椀、10の甕が、カマド右袖際の床面から僅かに傾いた状態で20の銅製容器、そして9の甕、貯蔵穴と土坑の間の床面から14の大型の甕が出土し、土坑際の床面付近からは8の小型台付き甕が出土している。また、北東隅付近の床面からは、19の鉄斧が出土している。なお、20の銅製容器は、側面に三角形に3つの孔をもち、また鋕留め箇所を有する。鋕留め部は、鉄鋕と銅鋕の2種類があり、本来はこの部分に柄が付いたものと考えられる。図示した他の土師器杯や須恵器杯蓋、甕はカマド周辺からの埋土中出土であるが、比較的下位から出土している。さらに、これら出土遺物の内、2・3の土師器杯の一部には煤が付着し、5の須恵器杯蓋の内面が平滑化しているこ



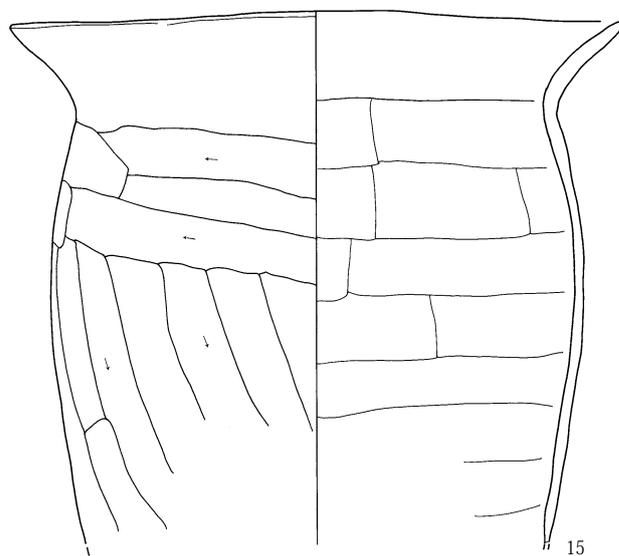
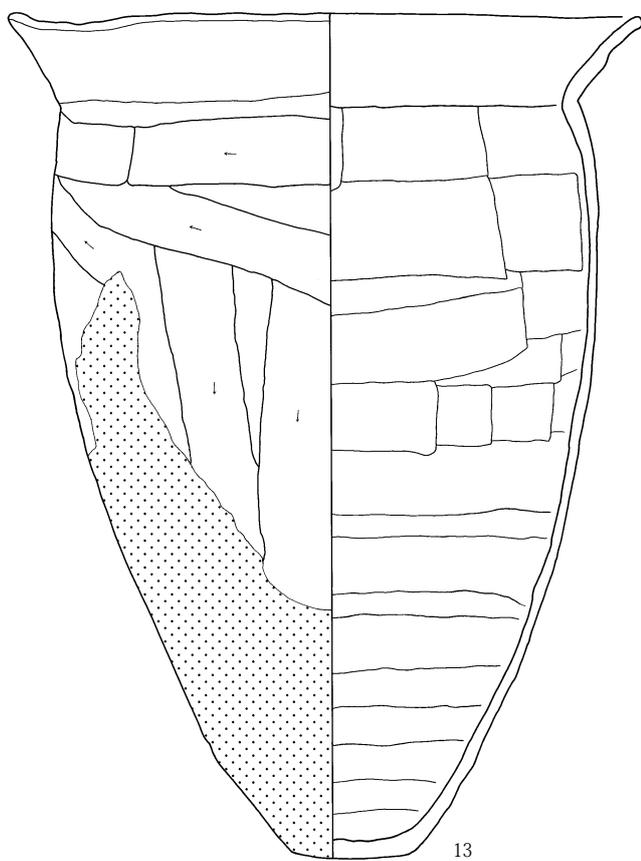
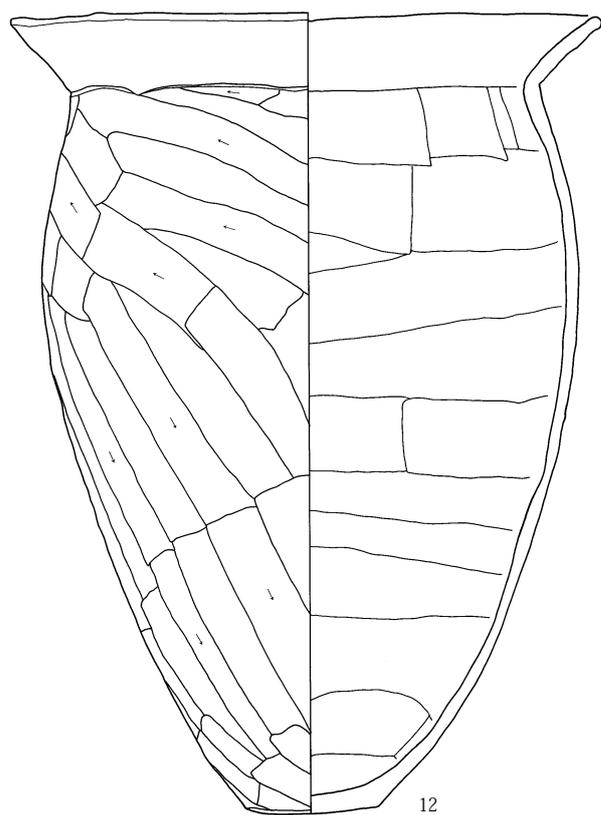
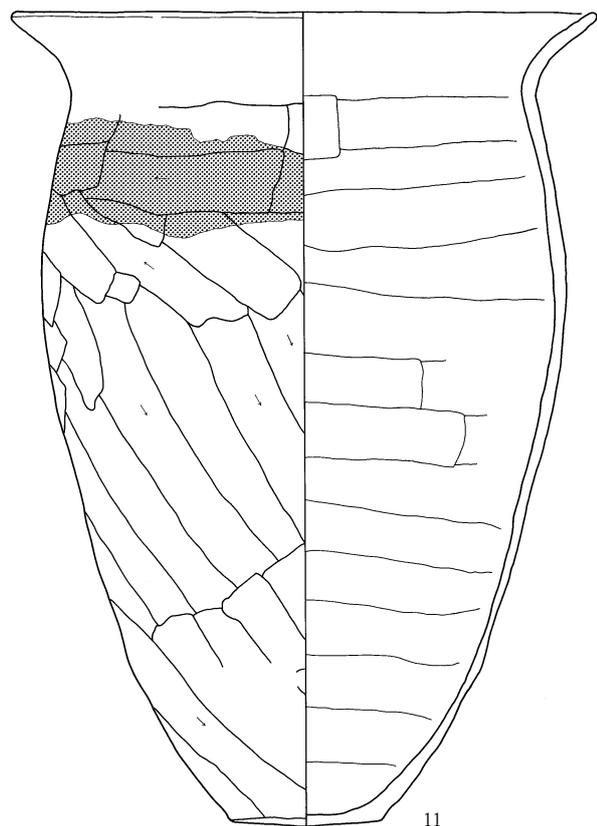
第72図 23号住居・カマド平面図



第73図 23号住居カマドおよび周辺遺物出土状態

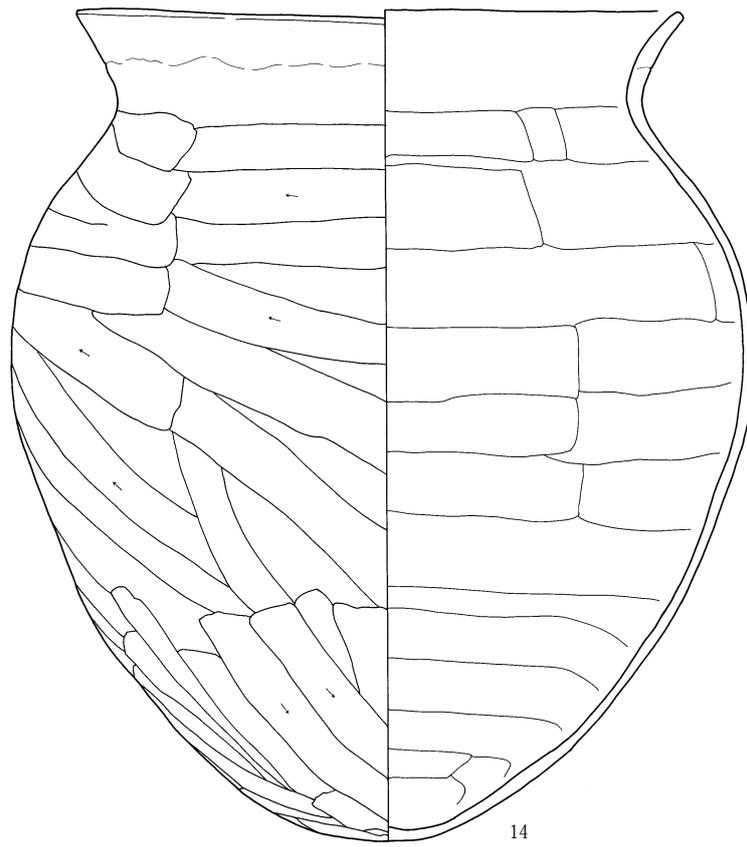


第74図 23号住居出土遺物(1)

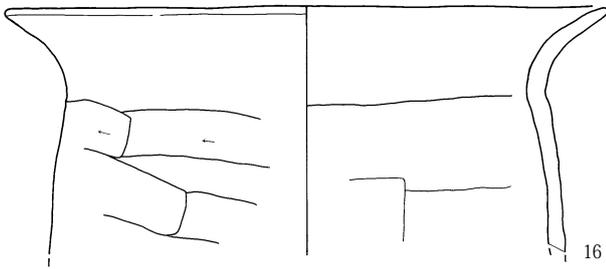


0 1:3 10cm

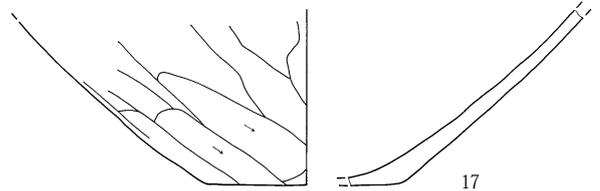
第75図 23号住居出土遺物(2)



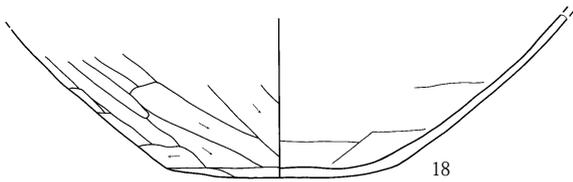
14



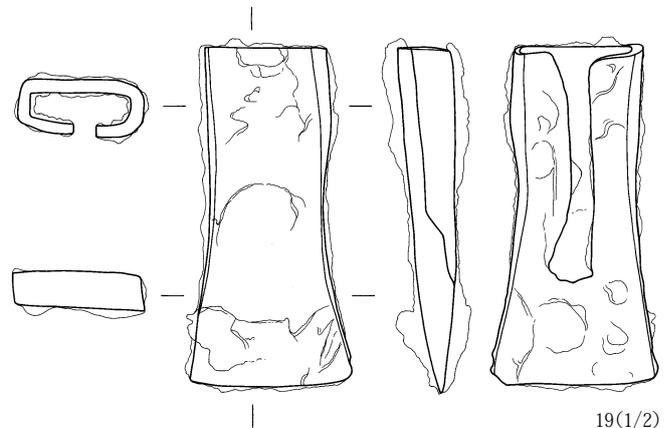
16



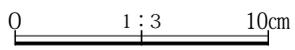
17



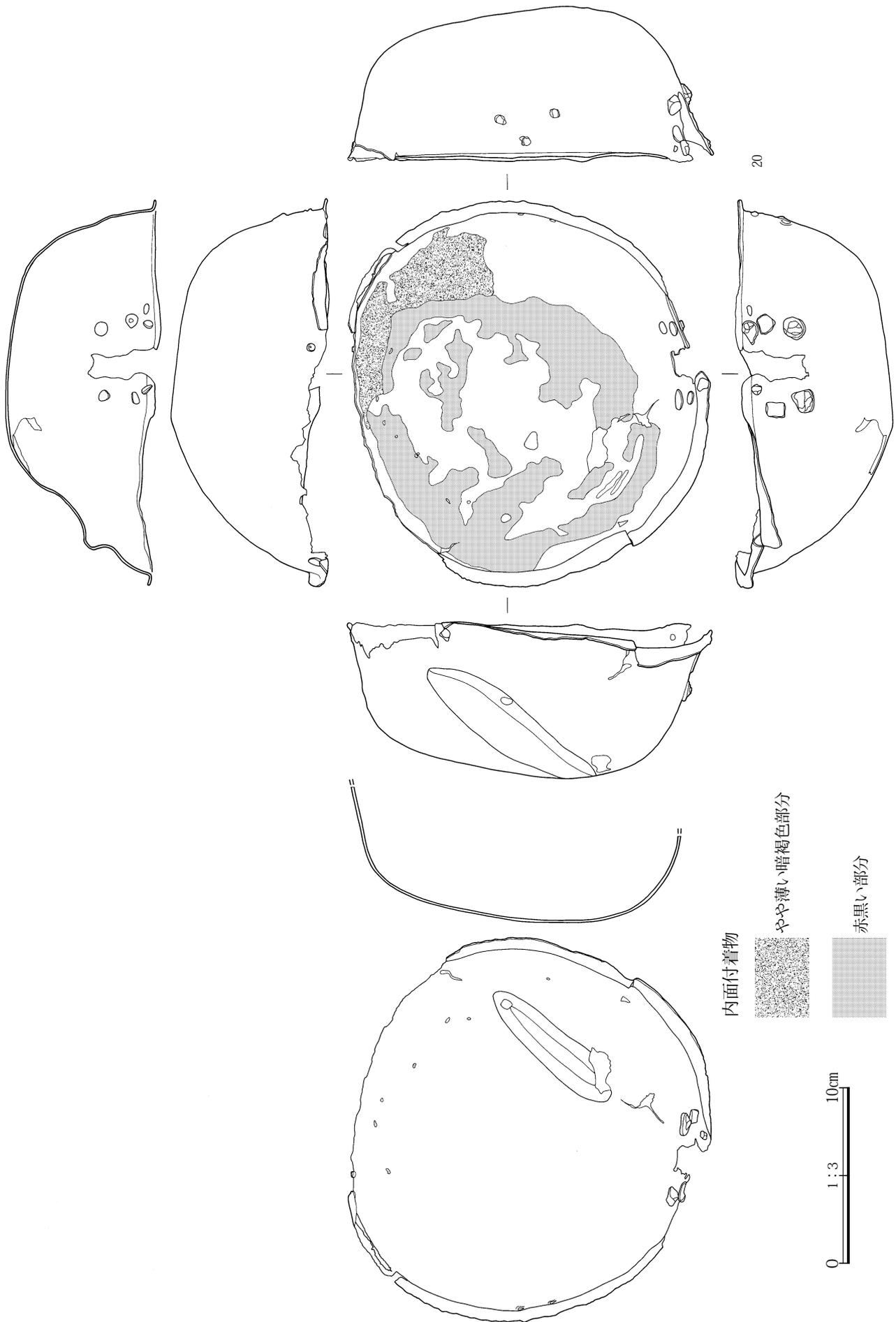
18



19(1/2)



第76図 23号住居出土遺物(3)



第77図 23号住居出土遺物(4)

第22表 23号住居出土遺物観察表

挿図番号 図版番号		NO.	種類	出土位置 残存率	計測値(cm)	胎土／焼成／ 色調	成形・整形の特徴	摘要
第74図 PL.40	1	土師器 杯	埋土中 3/4	口 12.2 高 3.3	細砂粒／良好・燻 ／鈍い赤褐	口縁部は横ナデ、体部はナデ、底部は手持ちヘラ削り。		
第74図 PL.40	2	土師器 杯	埋土中 4/5	口 13.0 高 3.2	細砂粒／良好・橙	口縁部横ナデ、体部上半ナデ、下半から底部は手持ちヘラ削り。	内外面尾の一部に煤が付着。	
第74図 PL.40	3	土師器 杯	埋土中 3/4	口 13.8 高 4.1	細砂粒／良好／鈍 い橙	口縁部横ナデ、体部上半ナデ、下半から底部は手持ちヘラ削り。	内面の一部に煤が付着。	
第74図 PL.40	4	土師器 杯	床直 ほぼ完形	口 14.3 高 4.0	細砂粒／良好・燻 ／鈍い橙	口縁部横ナデ、体部上半ナデ、下半から底部は手持ちヘラ削り。		
第74図 PL.40	5	須恵器 杯蓋	埋土中 ほぼ完形	口 16.2 高 2.7 摘 4.6	細砂粒／還元焰／ 灰	ロクロ整形、回転右回り。摘みは貼付、天井部は中ほどまで回転ヘラ削り。	内面は平滑化、転用硯として二次利用か。	
第74図 PL.40	6	須恵器 杯蓋	床直 完形	口 19.7 高 4.9 摘 3.9	細砂粒／還元焰・ 黒斑／灰	ロクロ整形、回転右回り。摘みは貼付、天井部は中ほどまで回転ヘラ削り。		
第74図 PL.40	7	須恵器 椀	床直 ほぼ完形	口 18.5 高 6.2 底 9.8	細砂粒・粗砂粒・ 長石・角閃石／還 元焰／灰	ロクロ整形、回転右回り。底部と体部下位は回転ヘラ削り。		
第74図 PL.40	8	土師器 台付甕	床直付近 4/5	口 9.6 高 8.9 脚 5.6	細砂粒／良好／灰 黄褐	内面(脚部除く)黒色処理。脚部は貼付、口縁部から胴部上半は横ナデ、下半から脚部はヘラ削り、裾部はナデ。内面胴部はヘラナデ。	裾部は磨滅で擦り減っている。	
第74図 PL.40	9	土師器 甕	床直 3/5	口 15.6 高 18.9 底 6.0 胴 19.5	細砂粒／良好／鈍 い赤褐	口縁部から頸部は横ナデ、胴部から底部はヘラ削り。内面は底部から胴部はヘラナデ。		
第74図 PL.41	10	土師器 甕	床直 4/5	口 22.5 胴 18.8 底 4.8	細砂粒／良好／赤 褐	口縁部は横ナデ、胴部から底部はヘラ削り。内面は底部から胴部はヘラナデ。		
第75図 PL.41	11	土師器 甕	カマド内 3/5	口 22.6 高 32.2 底 6.0 胴 20.3	細砂粒・粗砂粒・ 角閃石／良好／鈍 い赤褐	口縁部から頸部は横ナデ、胴部から底部はヘラ削り。内面は底部から胴部はヘラナデ。	外面頸部下に煤が付着。	
第75図 PL.41	12	土師器 甕	カマド焼き口 3/4	口 23.0 高 31.6 底 5.1 胴 21.0	細砂粒／良好／橙	口縁部は横ナデ、胴部から底部はヘラ削り。内面は底部から胴部はヘラナデ。		
第75図 PL.41	13	土師器 甕	カマド焼き口 3/4	口 24.4 高 33.3 底 4.2 胴 21.2	細砂粒／良好／明 黄褐	口縁部は横ナデ、胴部から底部はヘラ削り。内面は底部から胴部はヘラナデ。	外面の胴部下半は器面磨滅のため単位不明。	
第76図 PL.40	14	土師器 甕	床直 4/5	口 23.5 高 32.7 底 4.0 胴 29.0	細砂粒／良好／明 黄褐	外面口縁部に輪積み痕が残る。口縁部は横ナデ、胴部から底部はヘラ削り。内面は底部から胴部はヘラナデ。		
第75図 PL.40	15	土師器 甕	カマド焼き口 口縁部～胴部中 位	口 23.6	細砂粒／良好／鈍 い黄橙	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。		
第76図 PL.40	16	土師器 甕	埋土中 口縁部～胴部上 位片	口 23.0	細砂粒／良好／鈍 い黄褐	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。		
第76図	17	土師器 甕	埋土中 底部～胴部下位	底 7.5	細砂粒／良好／鈍 い黄橙	底部と胴部はヘラ削り。内面はヘラナデ。		
第76図	18	土師器 甕	埋土中 底部～胴部下位	底 9.0	細砂粒／良好／鈍 い黄褐	底部と胴部はヘラ削り。内面はヘラナデ。		

金属製品

挿図番号 図版番号	NO.	種類	出土位置 残存率	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	特徴・状態	備考
第76図 PL.49	19	鉄器 斧	床直 完形	8.9	4.3	1.5	140.1	錆化が進んでいるが、良好な残存状態。	
第77図 PL.50	20	銅製品 鉄柄銅製杓	カマド右袖 脇床直 鉄柄・本体 の一部を欠	21.9	20.3	0.1	272.7	本体の容器部は、口端部の一部を欠くが、ほぼ完形。口縁部は外側に1cmほど屈曲し、底部は丸底を呈する。器厚は極めて薄い。一部に歪みをもつ。側面には、6個の鉋留め(鉄鉋4、銅鉋2)と、上部を頂点とした三角形に3孔を有し、さらに細い銅鉋留め1個がある。内面には、凹凸状の痕跡が横位方向に浅く連続的に連なっている状況が数段みられる。また、内面には、炭化状の付着物が認められる。	

第3章 検出された遺構と遺物

とから転用硯として二次利用の可能性をもつ。他に、未掲載遺物として土師器片272片、須恵器片2片がある。

一方、先述した床面の焼土化した部分であるが、その範囲が不整である点、床面を覆う埋土中に炭化材等が多く認められた点、出土遺物に製鉄関連遺物が全く認められない点等の状況から、焼失に伴う被熱の可能性が考えられよう。

出土土器から、本住居は8世紀第3四半期と考えられる。

24号住居 (第78～80図、第23・49表、PL.13・14・41・42・47・49)

位置(座標)：X軸=36,474～36,479

Y軸=-39,439～39,443

形状：縦長方形

規模：長辺(4.0)m 短辺3.55m

壁高90cm (遺構確認面から55cm)

主軸方向：N-16°-W

床面積：(10.98) m²

本住居は、2区の北端の調査区境に位置し、本調査で最も住居が重複する場所にある。遺構確認でも明確なプランが確定できず、そのため調査時には、24A号住居として調査を行った。本住居と重複する住居との状況は、本住居の北東隅の調査区境に26号住居が、南東部に25号住居が重複し、さらに本住居の東側には25・26号住居の下から検出された31号住居(調査時には、先に24B号住居、後に31号住居としていた。)が重複する。これらの重複する新旧は、土層断面の確認から、本住居が最も新しく、25・26号住居は何れも本住居より旧く、最も古いのが31号住居であることを確認している。周囲の同時期の遺構には、調査区境の西側に27号住居が近接し、南東8mに20・28号住居が、南西16mに21号住居がある。

住居の残存状態は極めて良好であるが、北壁はぎりぎり調査区外となるため検出できなかった。北壁近くの土層断面観察では、表土下から住居の掘り込みが確認でき、掘り込みの深さは90cmを超していたものと想定される。埋土は、2～5層の暗褐色土を主とした4層に分層できる。また、重複する住居の中で、掘り込みも最も深い。埋土中には、ローム粒・ブロックを混在させることから人為的堆積と考えられる。壁の状態は、直立ぎみないし僅かに傾斜をもって立ち上がる。床面はほぼ平坦で、東

壁際に浅い周溝をもつ。周溝は、幅10cm、深さ2～4cmを測る。カマドは東壁にはなく、北壁近くの土層断面に現れているのが確認されていることから、北壁のほぼ中央に位置しているものと考えられる。残存する規模の全長は不明であるが、幅1.05mを測る。土層断面の状況からすると、両袖部は9層のロームを主とした黄褐色土で、住居内に張り出し、内壁が被熱し焼土化している。焚き口部は住居内で窪む。カマド埋土となる7・8層の上層には、6層としたロームを主とした黄褐色土があることから、天井部が崩落せずに残存している可能性が高い。貯蔵穴や柱穴は、検出されていない。

床面下には、掘り方が確認された。掘り方はほぼ全面に及び、底面は凹凸をもつ。床面から底面までの深さは概ね5～10cmを測るが、南西隅では不整形に深くなっている。また、住居中央に楕円形を呈す床下土坑をもち、規模は長軸1.7m、短軸1.18m、深さ20cmを測る。この掘り方覆土は、10層のローム小ブロックと暗灰色砂質土小ブロックを含む暗褐色土で、床面となる上面は堅く硬化している。

遺物の出土量は、本調査の中で6号住居に次いで多い。しかし、床面出土の遺物は極めて少なく、そのほとんどが埋土中からの出土である。図示した8の須恵器皿は床直出土、他は埋土中からで内面を黒色処理した1の土師器鉢、2～4の須恵器杯、4・7の須恵器碗、6の体部側面に1対の把手が付く須恵器双耳杯、9～14の小型甕・台付き甕・甕がある。この内、11・14の甕は掘り方覆土からの出土である。さらに、石製品として15の砥沢石製の砥石が、鉄製品として16の刀子片、17の紡錘車の軸部が欠落した円盤部が出土している。他に、未掲載遺物として土師器片1545片、須恵器片190片がある。

出土土器には9世紀第2から第3四半期のものが含まれるが、遺構の重複から本住居は9世紀第3四半期と考えられる。

25号住居 (第81～83図、第24・49表、PL.13・14・42・47)

位置(座標)：X軸=36,472～36,478

Y軸=-39,434～39,441

形状：縦長方形

規模：長辺5.5m 短辺4.5m 壁高47cm

主軸方向：N-91°-E

床面積：(13.74) m²

本住居は、2区の北側に位置し、本調査で最も住居が重複する場所にある。本住居と重複する遺構の状況は、東西方向に延びる25号溝が本住居の南壁から西壁にかけて重複し、本住居の北西部に24号住居が、さらに北西下には24・25号住居とも重複する31号住居が重複する。これらの重複する新旧は、遺構確認および土層断面の確認から、25号溝より本住居が旧く、24号住居より本住居が旧く、31号住居より新しいことを確認している。周囲の同時期の遺構には、北側の調査区境に位置する26号住居、北西の調査区境に位置する27号住居、東3mに28号住居、南東4mに20号住居が近接する。

住居の残存状態は、東西方向に延びる25号溝によって帯状に南壁から西壁にかけて壊され、さらに北西部では24号住居によって1/4程を壊されているが、床面までの掘り込みも深く比較的良好と言えよう。埋土は、1層とした近世以降のピット埋土、2層とした25号溝埋土を確認し、3～6層の暗褐色土を主とした4層に分層できる。埋土中には、灰色砂質土小ブロックを多く混在させることから人為的堆積と考えられる。壁の状態は、全体にやや傾斜をもって立ち上がるものの、南壁西半は外側に大きく広がる。また、東壁辺においても、カマドの南側となる南東隅が食い違い状となる。このため、住居プランが大きく歪む。床面はほぼ平坦で、周溝は検出されていない。カマドは東壁の中央南寄りに位置するものの、その軸は東壁に対しやや南東方向にずれる。残存する規模は、全長1.62m(焚き口から燃焼部長78cm、煙道部長84cm)、幅98cmを測る。残存状態はあまり良くない。左袖部は住居内に僅かに張り出すが、右袖部は残存していない。焚き口部から燃焼部底面の窪みは住居内から壁の外側に張り出し、さらに煙道部が外側へ長く突出する。断面観察から、残存する袖部は、ロームを掘り残した芯に、ロームを主とした黄褐色土と、暗灰色砂質土と暗褐色土を混在させた暗褐色砂質土を積み上げて構築しており、袖部の内壁は被熱による焼土化が確認できた。また、燃焼部位置中央には、長さ23cm、幅14cmの半截した自然礫を用いた支脚石が検出されている。貯蔵穴は検出されていない。

床面はローム面に構築されているが、床中央に床下土坑が検出された。床下土坑は楕円状を呈し、規模は長軸

1.55m、短軸0.93m、深さ85cmを測り、底面中央には径27cmの凹みをもち、埋土上面は堅く硬化していた。また、床下土坑の南側に径60cm前後、深さ15cm、北東側に径50cm、深さ30cmの円形のピット2基を検出したが、その位置等から柱穴とは考え難い。

遺物の出土状態は、他の遺構と重複することから、住居の東半に多い傾向ではあるが、床面出土の遺物は少なく、そのほとんどが埋土中からの出土である。図示した3の須恵器杯は床面出土で、6の甕は床面付近からの出土。他に須恵器の杯2点、土師器の甕3点の内、4は26号住居出土の土器片と接合している。また、7は須恵器杯の底部を転用した紡錘車で、北壁際の床面付近からの出土で、中央に孔をもち、周縁部は丁寧に研磨され、表裏面は使用による摩滅が認められる。さらに、床中央の床面付近からは、8の細粒輝石安山岩製の台石が出土している。他に、未掲載遺物として土師器片365片、須恵器片42片がある。

出土土器から、本住居は9世紀第3四半期と考えられる。

26号住居 (第84～86図、第25・49表、PL.14・42)

位置(座標)：X軸=36,478～36,481

Y軸=39,434～39,440

形状：縦長方形

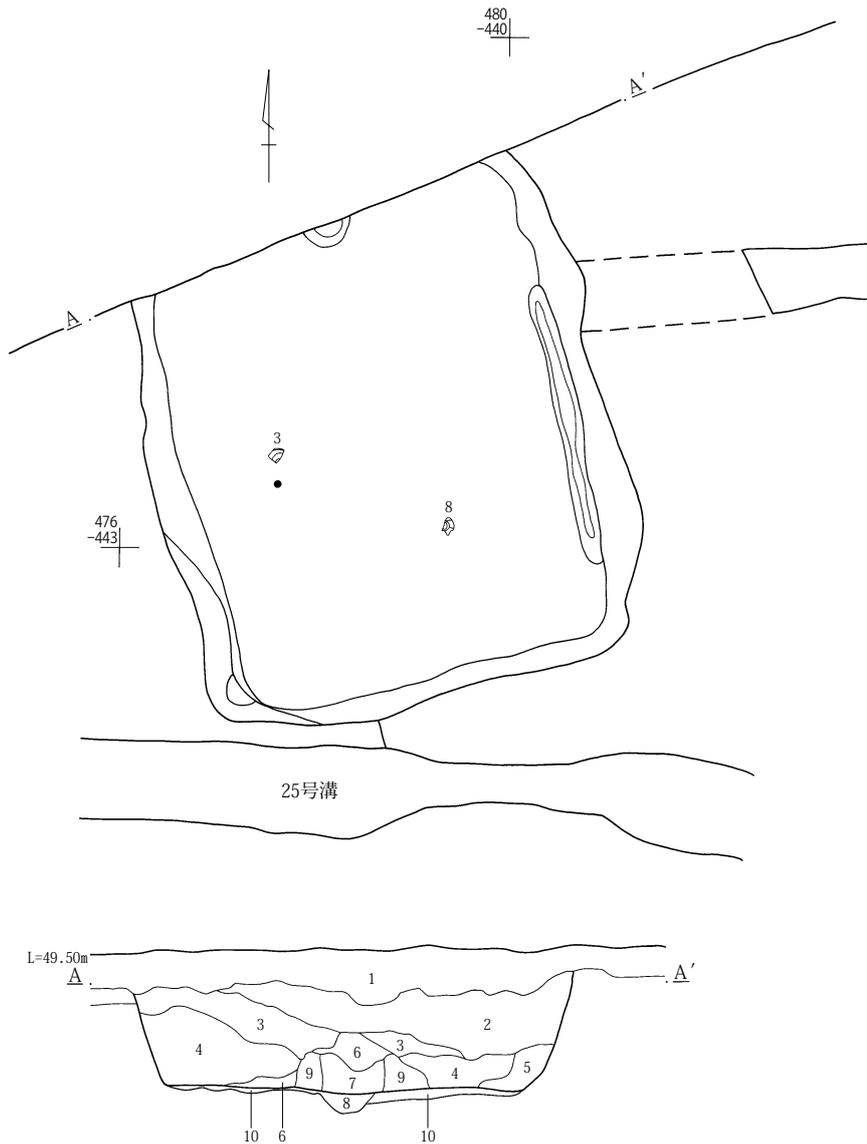
規模：長辺(4.5)m 短辺(2.2)m 壁高50cm

主軸方向：N-75°-E

床面積：(4.86) m²

本住居は、2区の北端の調査区境に位置し、本調査で最も住居が重複する場所にある。調査区境にあるため、住居の北半は調査区外となり、南半のみの調査となった。重複する他の住居との状況は、本住居の西端を24号住居と、さらに25号住居と同様に本住居の西側床下に31号住居が重複する。これらの重複する新旧は、土層断面の確認から、本住居跡は24号住居より旧く、31号住居より新しいことを確認している。周囲の同時期の遺構には、南隣に25号住居が近接し、重複する24号住居の西側に27号住居が、南東5mに28号住居、同9mに20号住居がある。

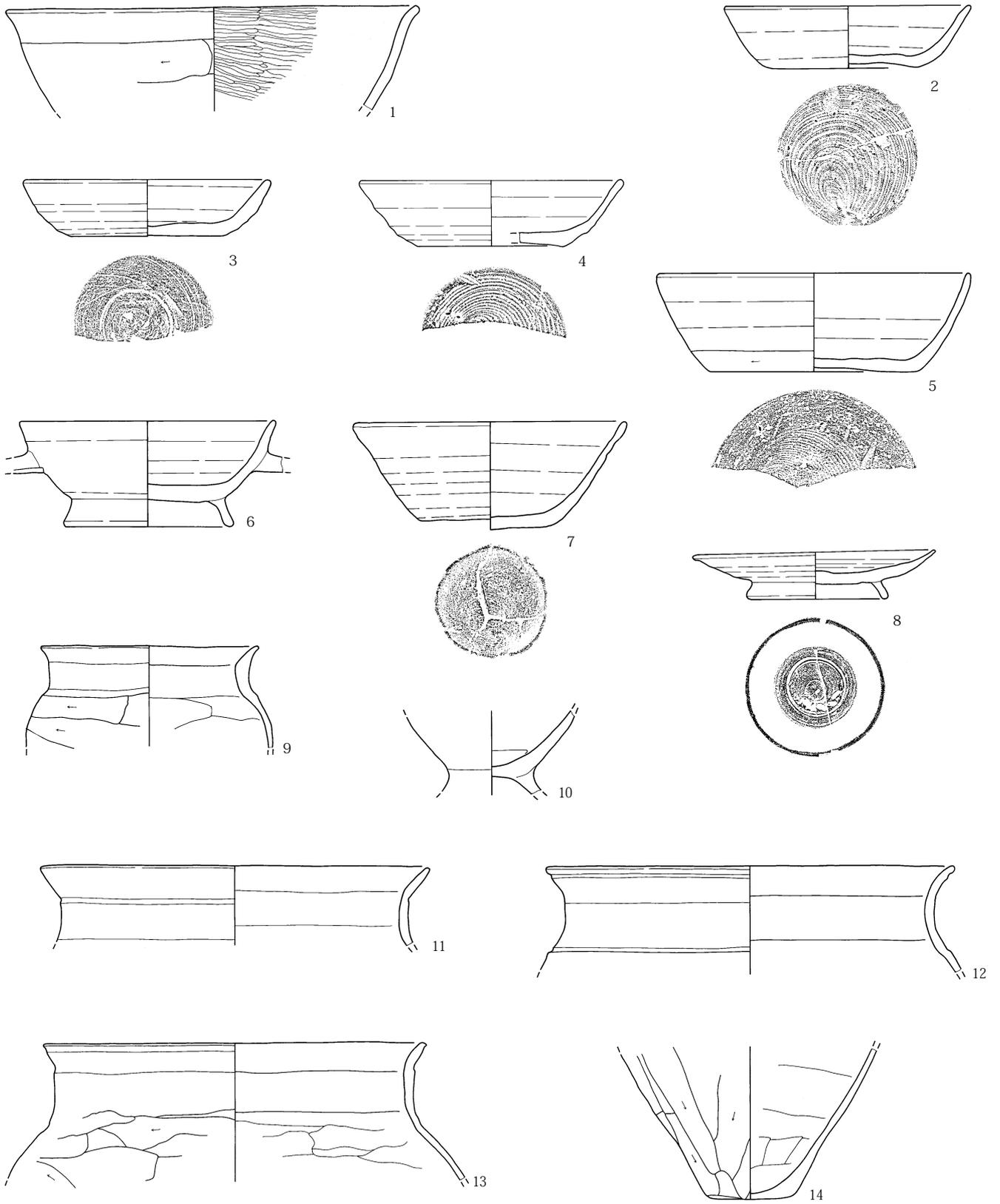
住居の残存状態は良好であるが、北半は調査区外となり、南西隅は24号住居との重複により検出できなかった。土層断面の観察では、表土下から住居の掘り込みが確認でき、埋土は2～5層の暗褐色土を主に黒褐色土との4



24号住居

- 1 暗褐色土 現代の耕作土(表土)。
- 2 暗褐色土 白色軽石粒を少量含む。ローム粒、焼土粒を微量含む。
- 3 暗褐色土 2層より明るい。ロームブロックをやや多く、焼土粒を少量含む。
- 4 暗褐色土 白色軽石粒、ローム小ブロックを微量含む。
- 5 暗褐色土 ローム粒・小ブロック、暗灰色砂質土小ブロックを多く含む。焼土粒を微量含む。
- 6 黄褐色土 ローム土を主体とし、暗褐色土を少量混入。焼土粒を微量含む。(カマド残存天井部?)
- 7 暗褐色土 ローム小ブロック、焼土ブロックをやや多く含む。
- 8 暗褐色土 ローム小ブロックを少量、焼土粒を微量含む。
- 9 黄褐色土 ロームを主体とし、内壁が被熱し焼土化する。(残存袖部)
- 10 暗褐色土 ローム土を多く、暗灰色砂質土小ブロックを少量含む。上面は強く硬化する。(掘り方覆土)

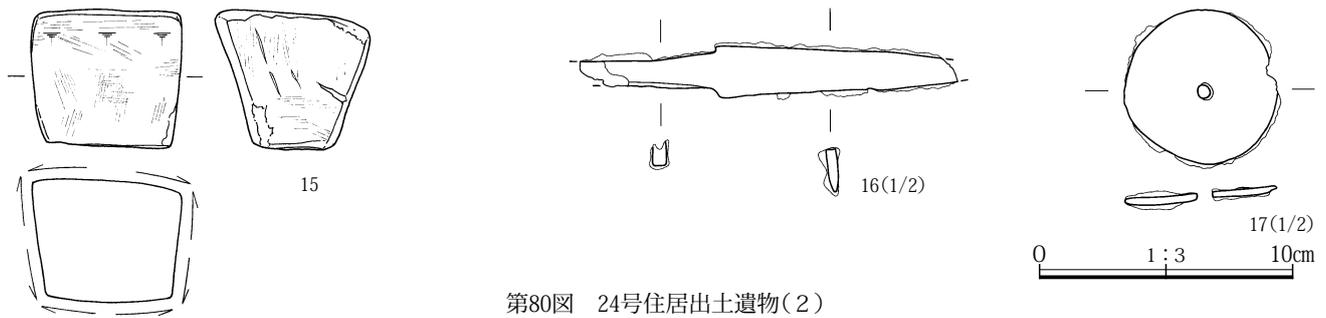
第78図 24号住居平面図



0 1:3 10cm

第79図 24号住居出土遺物(1)

第3章 検出された遺構と遺物



第80図 24号住居出土遺物(2)

第23表 24号住居出土遺物観察表

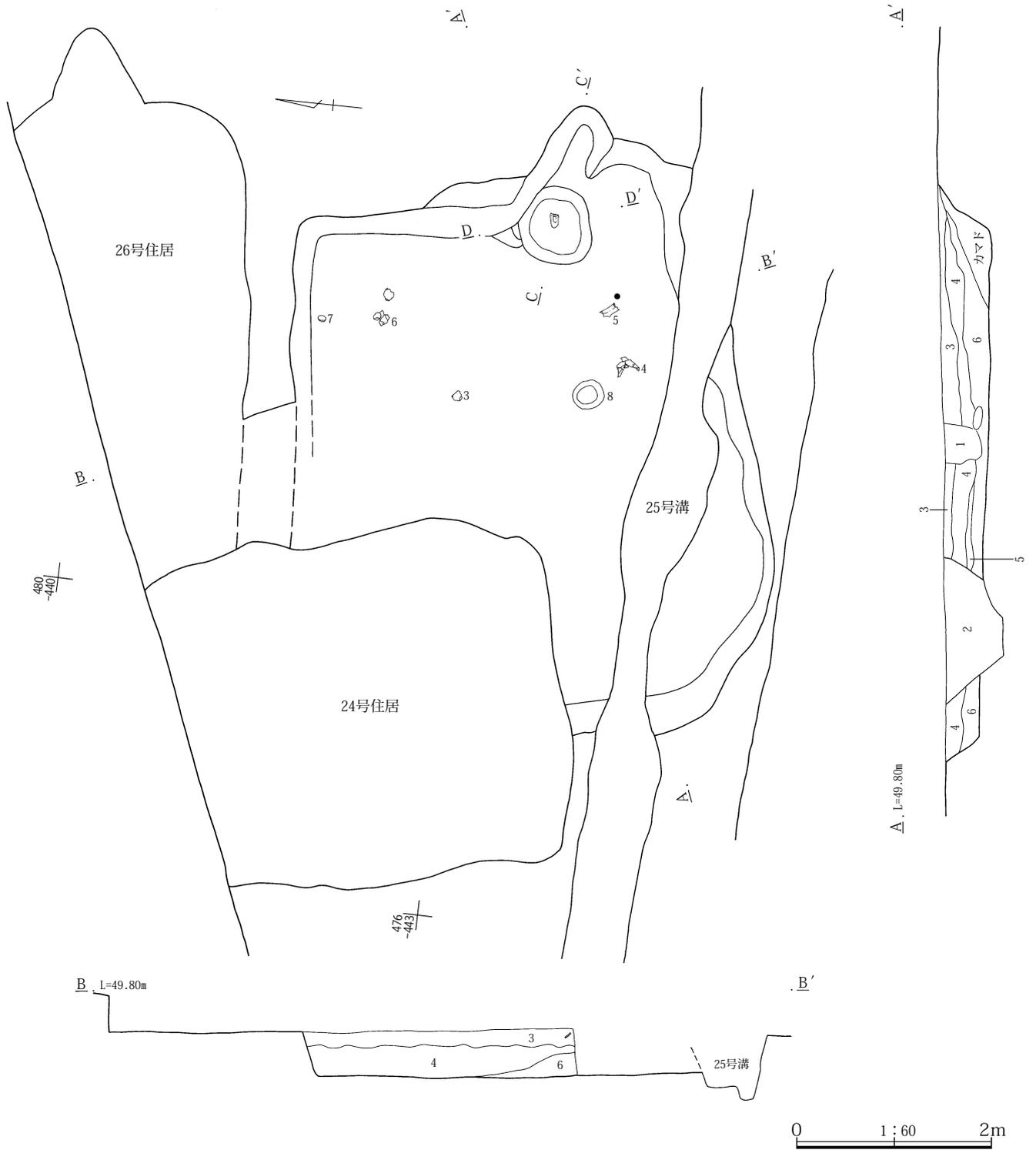
挿図番号 図版番号		NO.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値(cm)	胎土／焼成／ 色調	成形・整形の特徴	摘要
第79図		1	土師器 鉢	埋土中 口縁部～体部上 位片	口 21.7	細砂粒／酸化焰／ 鈍い黄橙	内面黒色処理。口縁部横ナデ、体部はヘラ削り。内面は横 位のヘラ磨き。	
第79図	PL.41	2	須恵器 杯	埋土中 口縁部1/3欠損	口 12.8 高 3.3 底 8.0	細砂粒／酸化焰／ 鈍い黄橙	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転糸切り無調整。	外面の口縁部 から体部の大 半は焼けてい る。
第79図	PL.41	3	須恵器 杯	埋土中 1/3	口 12.9 高 3.0 底 7.9	細砂粒・白粒／還 元焰・黒斑／灰	ロクロ整形、回転右回り。底部回転ヘラ削り。	
第79図	PL.41	4	須恵器 杯	埋土中 1/2	口 13.8 高 3.5 底 7.6	細砂粒／還元焰／ 灰白	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転糸切り無調整。	
第79図	PL.41	5	須恵器 碗	埋土中 1/3	口 16.4 高 5.2 底 11.0	細砂粒／還元焰／ 灰黄	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転糸切り後周囲と体部 下位を回転ヘラ削り。	
第79図	PL.41	6	須恵器 双耳杯	埋土中 1/2	口 13.4 高 5.6 底 8.0 台 8.5	細砂粒／還元焰／ 灰白	ロクロ整形、回転右回り。高台と把手は貼付、底部は回転 ナデ。	
第79図	PL.41	7	須恵器 碗	埋土中 2/5	口 14.2 底 7.8	細砂粒／還元焰／ 灰	ロクロ整形、回転右回り。高台は貼付、打ち欠きか。底部 は回転糸切り後ナデ。	
第79図	PL.42	8	須恵器 皿	床直 口縁部1/3欠損	口 12.6 高 2.6 底 6.8 台 7.1	細砂粒／還元焰／ 灰	ロクロ整形、回転右回り。高台は貼付、底部は回転ヘラナデ。	
第79図	PL.42	9	土師器 甗	埋土中 口縁部～胴部上 位片	口 11.4	細砂粒／良好／明 赤褐	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面胴部はヘ ラナデ。	
第79図		10	土師器 台付甗	埋土中 胴部下位～脚部 上位	底 4.4	細砂粒／良好／橙	脚部は貼付、胴部はヘラ削り、脚部横ナデ。内面胴部はヘ ラナデ。	
第79図		11	土師器 甗	掘り方 口縁部～頸部片	口 20.4	細砂粒／良好／鈍 い橙	口縁部から頸部は横ナデ。内面も横ナデ。	
第79図		12	土師器 甗	埋土中 口縁部～胴部上 位片	口 21.4	細砂粒／良好／鈍 い黄褐	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面胴部はヘ ラナデ。	
第79図		13	土師器 甗	埋土中 口縁部～胴部上 位片	口 20.0	細砂粒／良好／橙	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面胴部はヘ ラナデ。	
第79図		14	土師器 甗	掘り方 底部～胴部下位 片	底 4.5	細砂粒／良好／橙	底部と胴部はヘラ削り。内面はヘラナデ。	

石製品

挿図番号 図版番号	NO.	器種 形態・素材	出土位置	長 (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	重 (g)	製作・使用状況	石材
第80図	15	砥石 切り砥石	埋土中	5.5	6.0	6.1	268.6	四面使用。下端・小口部は欠損後、欠損面を研磨整形、使 用している。	砥沢石

金属製品

挿図番号 図版番号	NO.	種類 器種	出土位置 残存率	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	特徴・状態	備考
第80図	16	鉄器 刀子	埋土中 両端部欠損	(9.9)	1.3	0.4	(14.1)	錆化が進んでいる。	
第80図	17	鉄器 紡錘車	埋土中 円盤部	径 4.1	0.2	0.4	(10.5)	軸部は欠落し、孔だけが残る。	



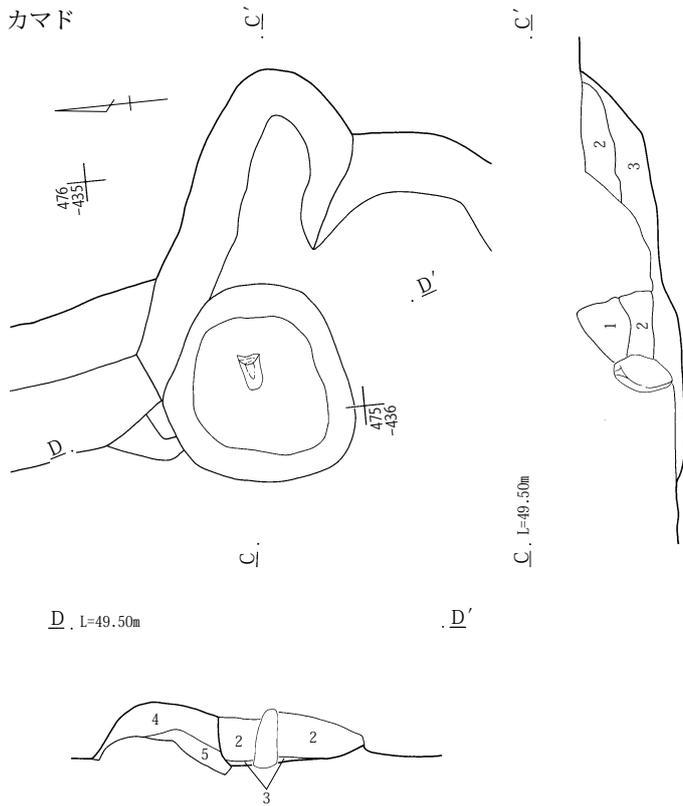
25号住居

- 1 黒褐色土 ローム小ブロックを少量含む。(近世以降のピット)
- 2 暗褐色土 砂質が強い。(25号溝)
- 3 暗褐色土 白色軽石粒、焼土粒を少量含む。
- 4 暗褐色土 3層よりやや明るい。白色軽石粒を微量、焼土粒を少量含む。
- 5 暗褐色土 暗く、焼土粒をやや多く含み、炭化物を少量含む。
- 6 暗褐色土 焼土粒を少量、灰色砂質土小ブロックを多く含む。

第81図 25号住居平面図

第3章 検出された遺構と遺物

カマド



25号住居カマド

- 1 暗褐色土
ローム小ブロックをやや多く、焼土粒を少量含む。
- 2 暗褐色土
焼土粒・小ブロックを多く、ローム粒を少量含む。
- 3 暗褐色土
焼土粒を微量含む。
- 4 黄褐色土
ローム土を主体とし、暗褐色土小ブロックを少量含む。
内壁が被熱し焼土化する。(残存袖部)
- 5 暗褐色砂質土
暗灰色砂質土と暗褐色土の混土。(残存袖部)

D, L=49.50m

D'

C, L=49.50m

0 1:30 1m

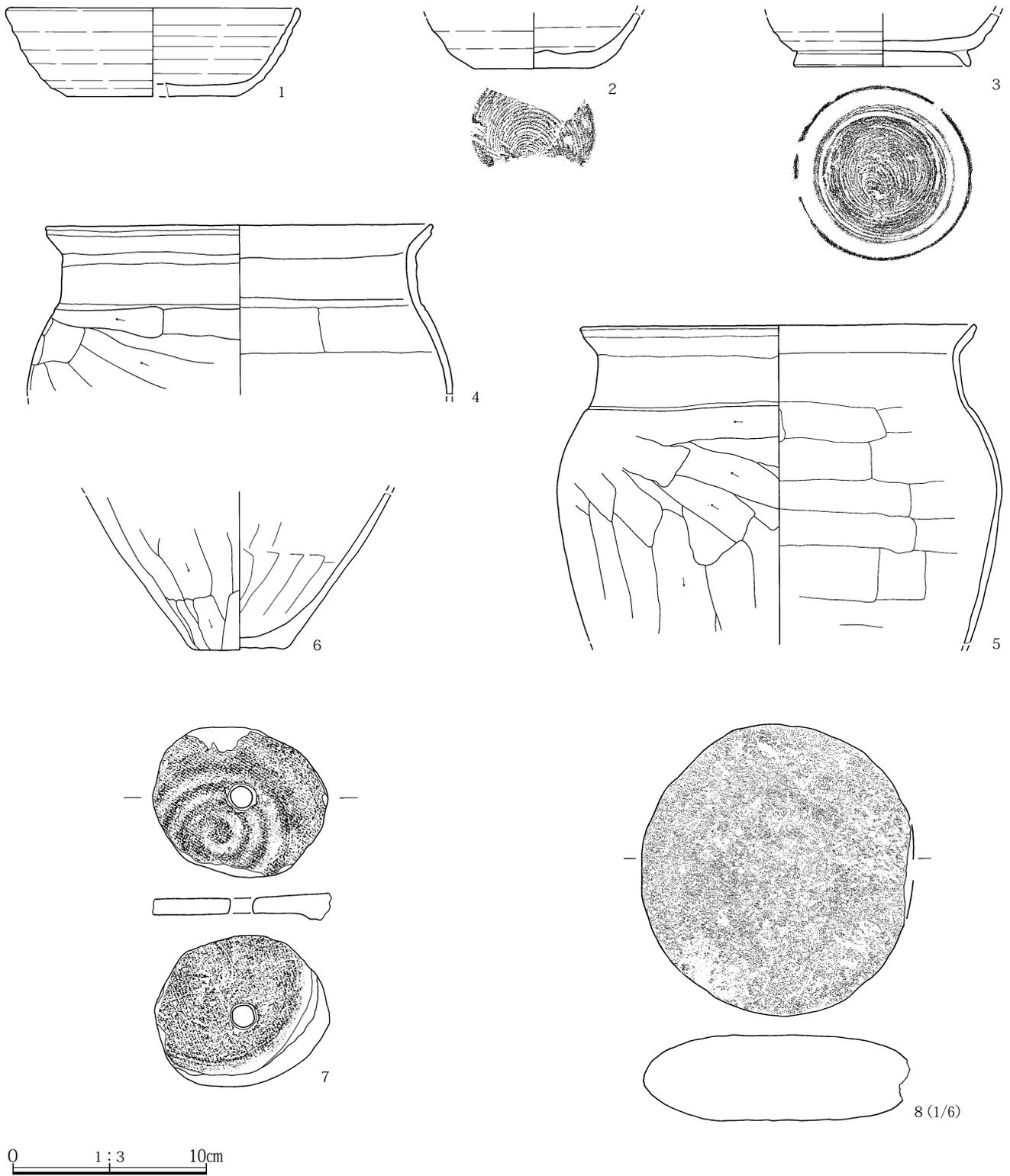
第82図 25号住居カマド平面図

第24表 25号住居出土遺物観察表

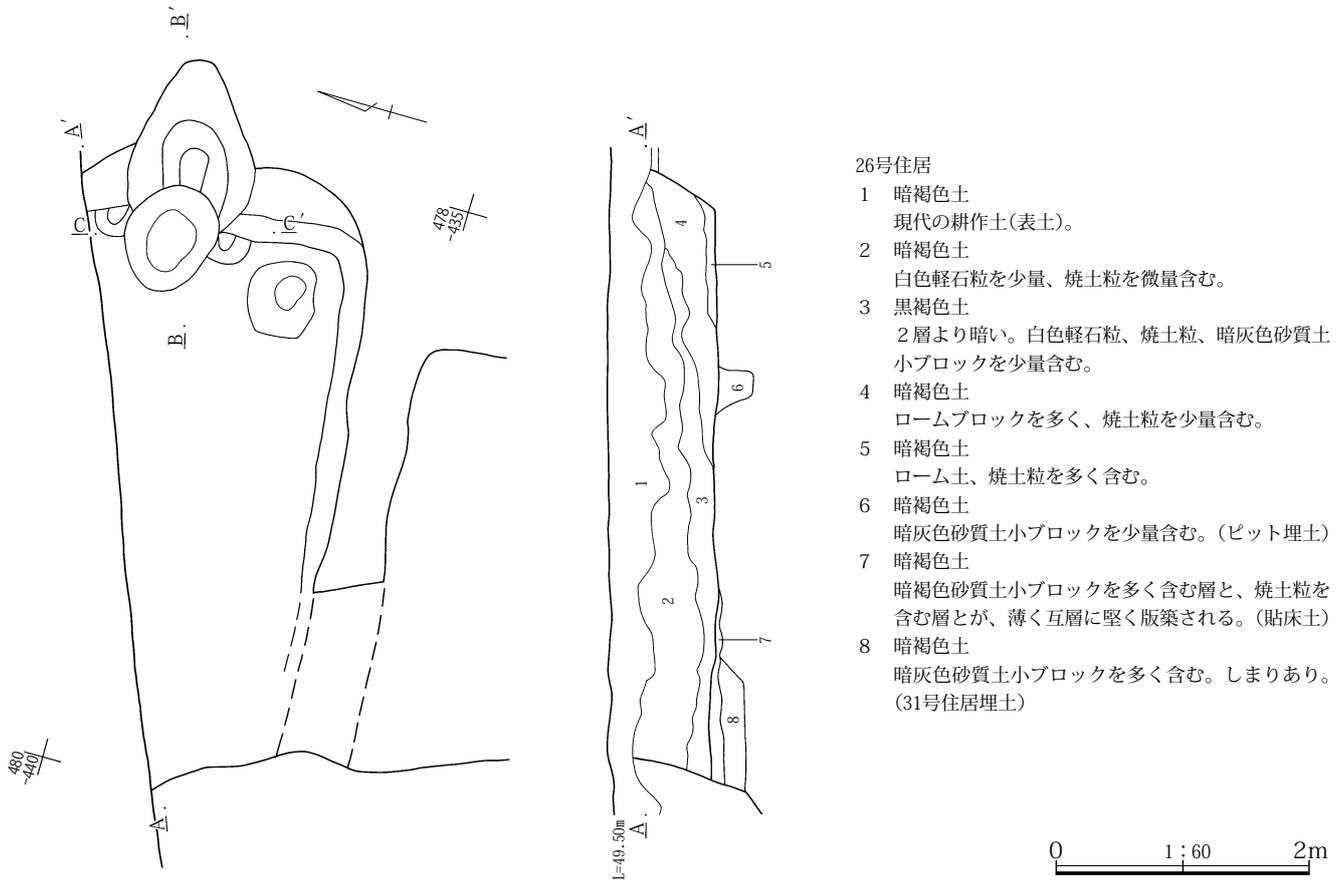
挿図番号 図版番号		NO.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値(cm)	胎土 / 焼成 / 色調	成形・整形の特徴	摘要
第83図 PL.42	1	須恵器 杯	埋土中 1/3	口 14.9 高 4.6 底 9.0	細砂粒・白粒 / 還元焰 / 灰	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転ヘラ削り。		
第83図	2	須恵器 杯	埋土中 底部～体部片	底 6.0	細砂粒 / 還元焰 / 灰	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転糸切り無調整。		
第83図	3	須恵器 杯	床直 底部～体部下位	底 9.2 台 8.7	細砂粒 / 還元焰 / 灰白	ロクロ整形、回転右回り。高台は貼付、底部は回転糸切り後周囲を回転ヘラナデ。		
第83図 PL.42	4	土師器 甕	埋土中 口縁部～胴部上位片	口 19.6	細砂粒・軽石粒 / 良好 / 鈍い黄橙	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。		
第83図 PL.42	5	土師器 甕	埋土中 口縁部～胴部上半片	口 20.0 胴 22.8	細砂粒 / 良好 / 橙	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。		
第83図	6	土師器 甕	床直 底部～胴部下位片	底 4.7	細砂粒 / 良好 / 明赤褐	底部と胴部はヘラ削り。内面はヘラナデ。		
第83図 PL.42	7	土製品 紡錘車	床直付近 一部欠損	径 5.8×5.2 孔 0.8 厚 0.8 重 24.8	細砂粒 / 酸化焰 / 灰黄褐	腕底部の転用、腕はロクロ整形、回転右回り。高台は貼付、底部は回転糸切り。	表裏とも使用によって摩滅。	

石製品

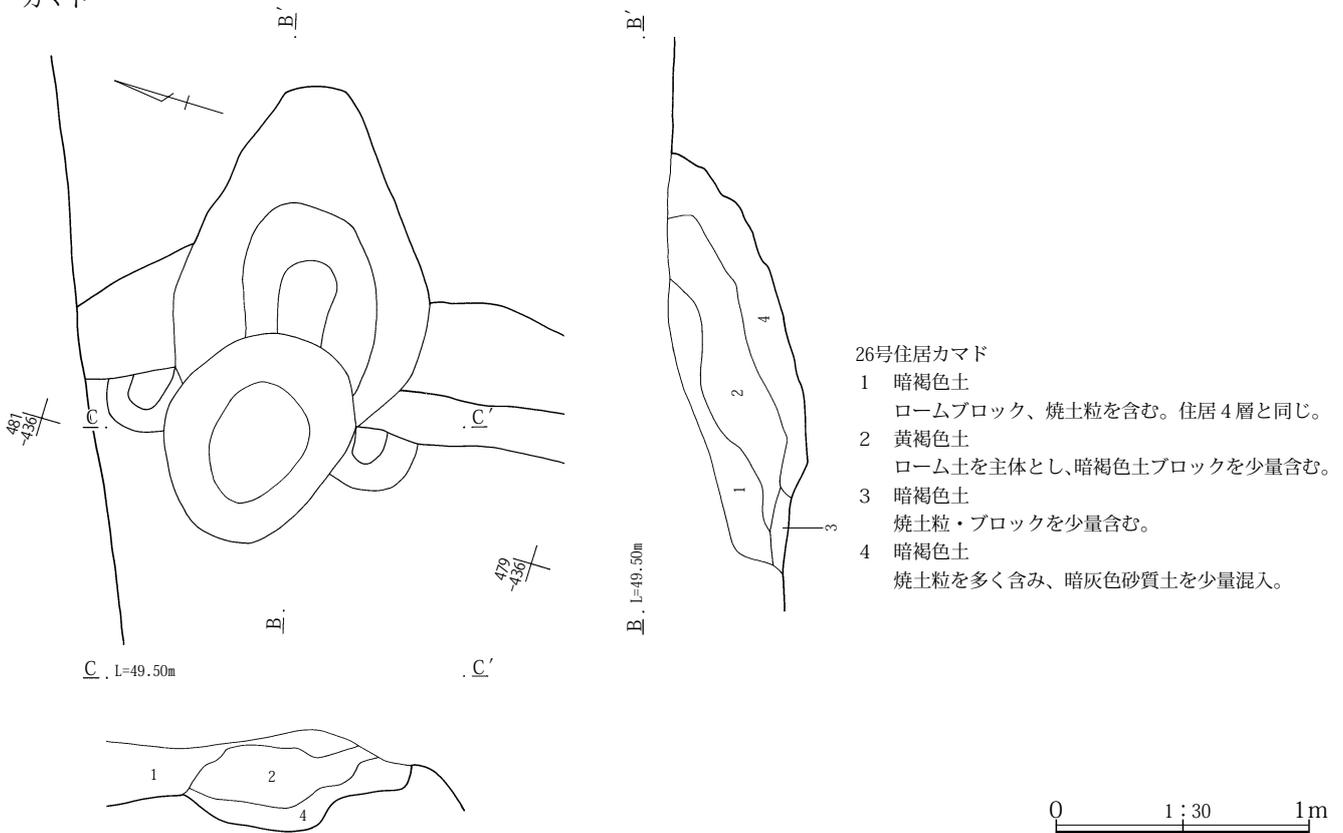
挿図番号 図版番号	NO.	器種 形態・素材	出土位置	長 (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	重 (g)	製作・使用状況	石材
第83図 PL.47	8	台石 楕円盤	床付近	30.3	27.1	9.0	10500.0	背面側・中央付近に弱い打痕があるほか、周辺部が摩耗する。表裏面とも被熱して盤面が黒く変色。	細粒輝石安山岩



第83図 25号住居出土遺物



カマド



第84図 26号住居・カマド平面図

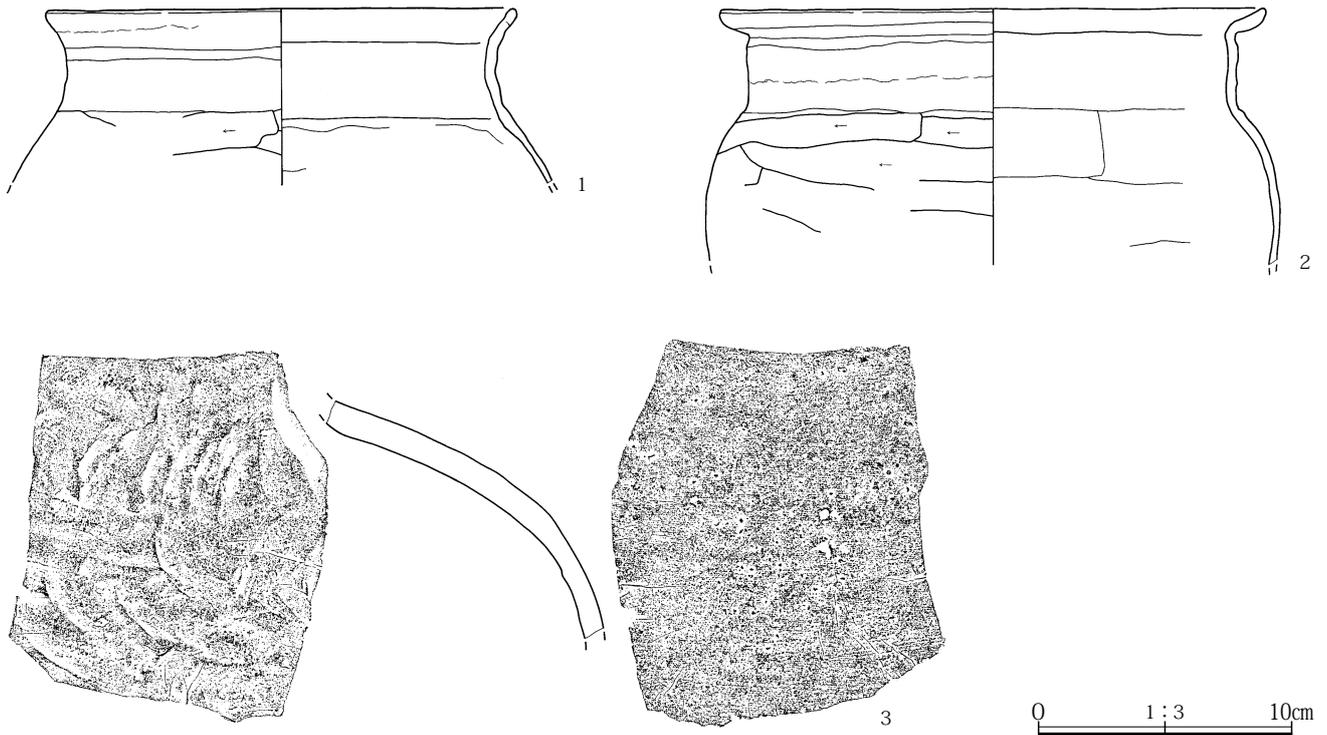


24号住居 床下土坑
 暗褐色土 ローム粒・小ブロックを多く、暗灰色砂質土小ブ
 ロック、焼土粒を少量含む。

25号住居 床下土坑
 1 暗褐色土
 ローム粒、暗灰色砂質土小ブロックを少量、焼土粒を微量含む。
 2 暗褐色砂質土
 暗灰色砂質土を混入し、ロームブロックを多く含む。

第85図 24～26・31号住居掘り方平面図

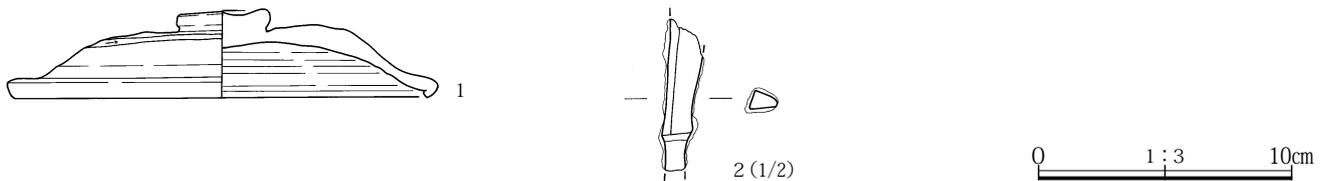
第3章 検出された遺構と遺物



第86図 26号住居出土遺物

第25表 26号住居出土遺物観察表

挿図番号 図版番号		NO.	種類	出土位置 残存率	計測値(cm)	胎土／焼成／ 色調	成形・整形の特徴	摘要
第86図 PL.42	1	土師器 甕	埋土中 口縁部～胴部上 位片	口 18.0	細砂粒・雲母／良 好／鈍い赤褐	口縁部に輪積み痕が残る。口縁部から頸部は横ナデ、胴部はへら削り。内面胴部はへらナデ。		
第86図 PL.42	2	土師器 甕	埋土中 口縁部～胴部上 位片	口 21.0	細砂粒／良好／鈍 い黄褐	外面頸部に輪積み痕が残る。口縁部から頸部は横ナデ、胴部はへら削り。内面胴部はへらナデ。		
第86図	3	須恵器 甕	埋土中 胴部 上位片		細砂粒・粗砂粒／ 還元焰／灰	外面は降灰付着で不明、内面にはアテ具痕が残る。		



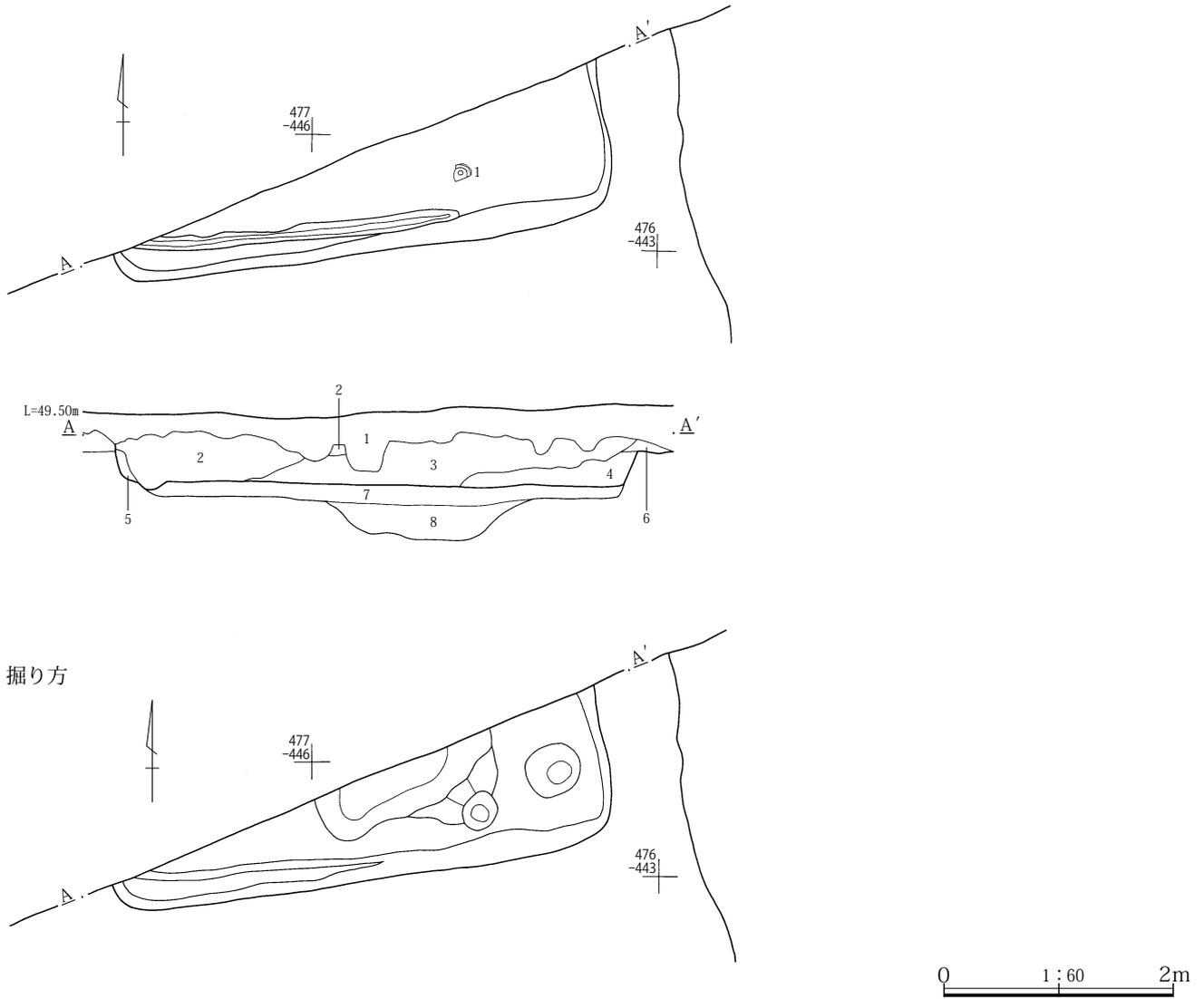
第87図 27号住居出土遺物

第26表 27号住居出土遺物観察表

挿図番号 図版番号		NO.	種類	出土位置 残存率	計測値(cm)	胎土／焼成／ 色調	成形・整形の特徴	摘要
第87図 PL.42	1	須恵器 杯蓋	床直 4/5	口 16.2 高 3.4 摘 3.7	細砂粒／還元焰／ 灰	ロクロ整形、回転右回り。摘みは貼付、天井部は中ほどまで回転へら削り。		

金属製品

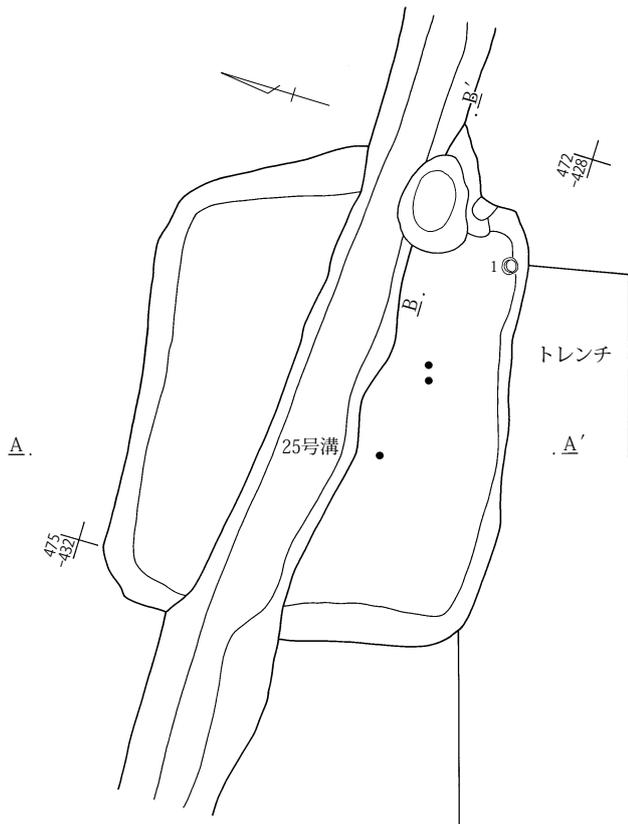
挿図番号 図版番号	NO.	種類	出土位置 残存率	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	特徴・状態	備考
第87図 PL.49	2	鉄器 鏃	埋土中 頸部片	(4.0)	0.8	0.6	(3.9)	頸部にねじれ？錆化が激しい。	



27号住居

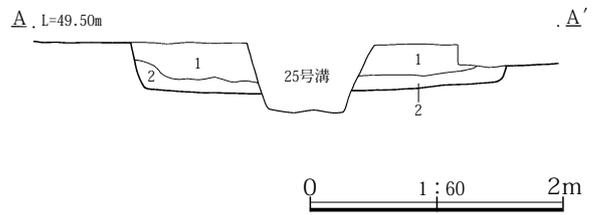
- 1 暗褐色土 現代の耕作土(表土)。
- 2 暗褐色土 暗灰色砂質土ブロック、焼土粒を少量含む。
- 3 暗褐色土 暗灰色砂質土ブロックをやや多く、焼土粒を少量含む。
- 4 暗褐色土 暗灰色砂質土ブロック、焼土粒を多く含む。
- 5 暗褐色土 ローム粒を多く含む。
- 6 黄褐色土 ローム土と暗褐色土の混土。焼土粒を多く含む。
- 7 暗褐色土 暗褐色土層と暗灰色土砂質ブロックを含む層とが、3 cm程の厚さで互層状に版築される。(貼床土)
- 8 暗褐色土 暗灰色砂質土ブロックを多く、焼土粒を微量含む。(床下土坑)

第88図 27号住居平面図

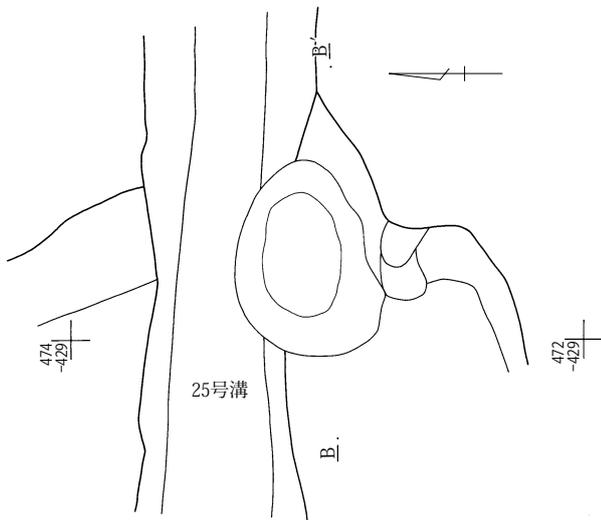


28号住居

- 1 暗褐色土
白色軽石粒を多く、焼土粒を微量含む。
- 2 暗褐色土
1層よりやや暗く、白色軽石粒を微量含む。

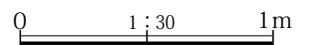


カマド

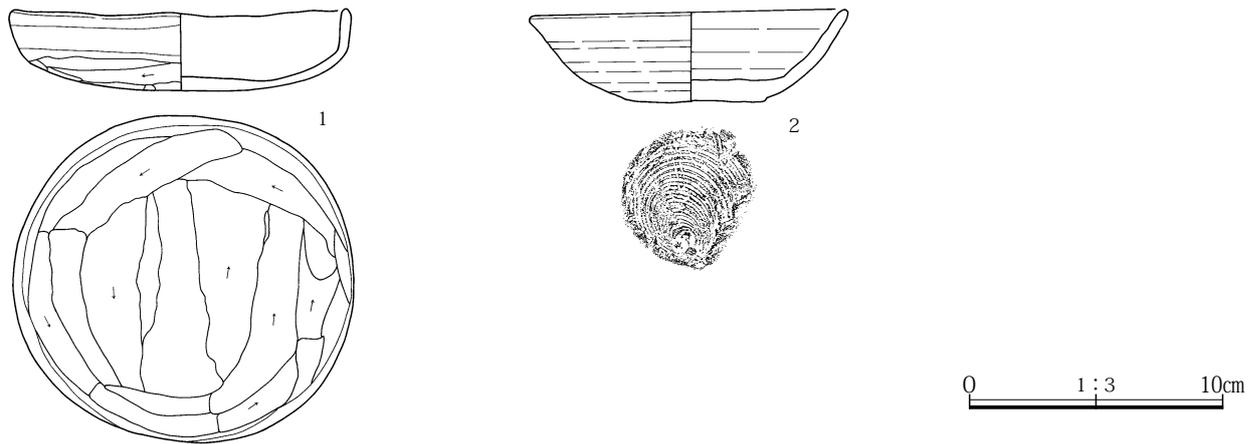


28号住居カマド

- 1 暗褐色土
焼土粒を少量、ローム粒を微量含む。
- 2 黄褐色土
ローム土を主体とし、暗褐色土を少量混入。
- 3 暗褐色土
ロームブロック、焼土粒を少量含む。



第89図 28号住居・カマド平面図



第90図 28号住居出土遺物

第27表 28号住居出土遺物観察表

挿図番号 図版番号		NO.	種類	出土位置 残存率	計測値(cm)	胎土／焼成／ 色調	成形・整形の特徴	摘要
第90図 PL.42	1	土師器 杯	床直付近 完形	口 13.0 高 3.2	細砂粒／良好／橙	口縁部横ナデ、体部上半ナデ、下半から底部は手持ちヘラ削り。		
第90図 PL.42	2	須恵器 杯蓋	カマド内 3/4	口 12.2 高 3.7 底 5.4	細砂粒／還元焰／ 灰	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転糸切り無調整。		

層に分層される。埋土中には、暗灰色砂質土小ブロックを少量混在させることから人為的堆積と考えられる。壁の状態は、やや傾斜をもって立ち上がるが、東壁のカマド脇では上部がやや広がる。床面はほぼ平坦であるが、西側ではやや高目となり、掘り込みは深い。周溝は検出されていない。カマドは東壁の中央南寄りに位置していると思われる。残存する規模は、全長1.83m(焼き口から燃烧部長83cm、煙道部長1.0m)、幅1.23mを測る。残存状態は極めて良好で、両袖部は住居内に僅かに張り出し、焼き口部から燃烧部底面の窪みは住居内から壁の外側に大きく張り出し、さらに煙道部が外側へ突出する。残存する袖部は、ロームの掘り残しによる。支脚は検出されていない。貯蔵穴はカマドの右側で、住居の南東隅に位置する。円形を呈し、規模は径60cm、深さ38cmを測る。また、カマド前付近にはピットが2基検出され、共に径30cm、深さ45cmを測る。さらに、南壁際にもピットが検出されており、径40cm、深さ40cmを測る。これらのピットは、柱穴になるかは不明。

床面はローム面に構築されているが、西側のやや高目となった床面下には31号住居が存在し、その埋土上面に、厚さ10cm程の貼り床が確認された。貼り床は、暗褐色砂質土小ブロックを多く含む層と、焼土粒を含む層とを、

薄く互層状に堅く版築されており、31号住居と重複する範囲に及んでいる。

調査範囲の割に、遺物の出土量は多いものの、床面出土の遺物は極めて少なく、そのほとんどが埋土中からの出土である。図示できたのは、1・2の土師器の甕と、3の須恵器甕だけである。他に、未掲載遺物として土師器片557片、須恵器片74片がある。

出土土器から、本住居は9世紀第3四半期と考えられる。

27号住居 (第87・88図、第26・49表、PL.14・42・49)

位置(座標)：X軸=36,475～36,478

Y軸=-39,443～39,448

形状：方形

規模：長辺(4.38)m 短辺(1.2)m 壁高30cm

主軸方向：不明

床面積：(2.96) m²

本住居は、2区の北端の調査区境に位置する。住居の北側の大半が調査区外にあり、調査できたのは南側の僅かな部分である。重複する遺構はなく、周囲の同時期の遺構には、東側に24号住居が近接し、その東側に25・26・31号住居が24号住居と重複する。また、南東12mに20・28号住居が、南西11mに21号住居がある。

調査できたのは南側の僅かな部分で、東壁の一部から南壁および南西隅までの全体の約1/3以下であり、カマドも検出されていない。土層断面の観察では、表土下から住居の掘り込みが確認でき、埋土は2～5層の暗褐色土を主とした4層に分層できる。埋土中には、暗灰色砂質土ブロックを混在させることから人為的堆積と考えられる。壁の状態は、直立ぎみないしやや傾斜をもって立ち上がるが、南壁の西側では床面よりも僅かに高いステップを有してやや外側に張り出す。床面は平坦で、南壁際に周溝が検出されている。周溝は、壁際からステップの内側を巡り、幅13cm、深さ8cmを測る。カマドは、調査範囲内では検出できなかったが、土層断面での6層がカマドに関わる埋土の可能性があり、東壁にカマドを有すると考えられる。

床面下には、掘り方が確認された。掘り方はほぼ全面に及び、底面は概ね平坦である。床面から底面までの深さは12～24cmを測り、その覆土は暗褐色土層と暗灰色土砂質ブロックを含む層とが、3cm程の厚さで互層状に版築され、床面となる上面が堅く硬化した貼り床となっている。また、底面中央に床下土坑をもち、形状は不明であるが長さ1.12m、深さ30cmを測る。南東隅においては、円形を呈する径48cm、深さ20cmを測る落ち込みを検出しており、位置的に貯蔵穴の可能性もある。さらに、径30cm、深さ44cmを測るピットが1基検出されている。

調査範囲が狭く、遺物の出土量も多くはない。埋土中からの出土が多く、図示した1の須恵器杯蓋が唯一床面から出土した。また、床下土坑から不明な鉄製品片1点が出土している。他に、未掲載遺物として土師器片87片、須恵器片27片がある。

出土土器から、本住居は9世紀後半と考えられる。

28号住居（第89・90図、第27・49表、PL.15・42）

位置(座標)：X軸=36,471～36,475

Y軸=-39,428～39,433

形状：縦長方形

規模：長辺3.29m 短辺2.9m 壁高36cm

主軸方向：N-85°-E

床面積：8.19㎡

本住居は、2区の北側に位置し、住居の中央を東西に延びる25号溝が重複する。遺構確認および土層断面の確認から、25号溝より本住居が古いことを確認している。

周囲の同時期の遺構には、20号住居が南に近接し、北西3mに25号住居とその西に24・31号住居が重複する。また、南東9mには18・29号住居がある。

住居の残存状態は、住居中央を南北に分断するように、25号溝によって带状に東壁カマド北側から西壁にかけて壊されているが、比較的良好と言えよう。埋土は2層に分層でき、暗褐色土を主としている。埋土中には、ローム粒やロームブロック等を含まないことから自然堆積の可能性をもつ。壁の状態は、直立ぎみないしやや傾斜をもって立ち上がるが、東壁辺ではやや食い違いぎみである。床面は平坦で、周溝は検出されていない。カマドは東壁の南寄りに位置する。残存する規模は、全長1.04m(焚き口から燃焼部長76cm、煙道部長28cm)、幅75cmを測る。残存状態は、25号溝により左袖を含むカマド北側が残存していないが、他は良好。右袖部は住居内に僅かに張り出し、焚き口部から燃焼部底面の窪みは住居内から壁の外側に大きく張り出し、煙道部がさらに外側へ突出する。支脚は検出されていない。貯蔵穴および柱穴も検出されていない。

床面はローム面に構築されており、下部構造は検出されていない。

遺物の出土量は極めて少なく、床面出土遺物も甕片が3点のみであった。図示した1の土師器の杯は南東隅壁際の床面付近から、2の須恵器杯蓋はカマドの上部からの出土である。他に、未掲載遺物として土師器片35片、須恵器片1片がある。

出土土器から、本住居は8世紀後半と考えられる。

29号住居（第91～93図、第28・49表、PL.15・42）

位置(座標)：X軸=36,467～36,473

Y軸=-39,413～39,420

形状：縦長方形

規模：長辺5.0m 短辺4.0m 壁高53cm

主軸方向：N-63°-E

床面積：16.01㎡

本住居は、2区の北東側に位置し、住居の北壁付近を東西に延びる25・26号溝と、カマド先端部を141号土坑が重複する。遺構確認および土層断面の確認から、いずれの遺構よりも本住居が古いことを確認している。周囲の同時期の遺構には、西9mに28号住居、同10mに20号住居が、南西3.5mに18号住居があり、南東13mに23号

住居、東15mに22号住居が点在する。

住居の残存状態は、26号溝によって住居の北壁の一部を、141号土坑によって東壁に位置するカマドの先端部を壊されているが、かなり良好である。埋土は、暗褐色土を主に、2層の黒褐色土および4層の黄褐色土を含め、6層に分層できる。埋土中には、ローム土やローム小ブロックを各層に混在させることから人為的堆積と考えられる。壁の状態は、直立ぎみないしやや傾斜をもって立ち上がり、掘り込みは深い。床面はほぼ平坦で、周溝が検出されている。周溝は、北壁際から西壁際および南壁際中央まで巡り、東壁にはなく、幅15cm前後、深さ6cmを測る。カマドは東壁の中央南寄りに位置する。残存する規模は、全長1.28m(焚き口から燃焼部長48cm、煙道部長80cm)、幅1.48mを測る。残存状態は、141号土坑により先端となる煙道部を僅かに壊され、さらに左袖の一部を近世以降のピットに壊されているが、比較的的良好である。両袖部は住居内に僅かに張り出し、焚き口部から燃焼部底面の窪みは住居内から壁の外側に大きく張り出し、煙道部がさらに外側へ突出する。断面観察から、残存する袖部は、ロームを主とした黄褐色土と、ローム小ブロックを多く含む黒褐色土を積み上げて構築している。支脚は検出されていない。貯蔵穴および柱穴も検出されていない。

床面はローム面に構築されているが、2基の床下土坑が検出された。1号床下土坑は床南東部のカマド前付近で、南北方向に長軸をもつ楕円状を呈し、規模は長軸1.3m、短軸90cm、深さ20cmを測り、埋土は黒褐色土であった。2号床下土坑は床北東部にあり、北壁と同方向の東北東に長軸をもつ楕円状を呈し、規模は長軸1.72m、短軸1.26m、深さ30cmを測り、埋土は黒褐色土と暗褐色土で、上層は堅く硬化していた。

遺物の出土状況は、全体的に散漫で、床面出土遺物は極めて少なく、大半が埋土中からである。図示した1の土師器杯は東壁際の床面付近から、3の須恵器杯蓋は南壁西寄りの壁際から、2の土師器杯および4の甕は南西隅からで4は床面付近から出土している。また、5の甕はカマドの燃焼部底面からの出土で、6の甕は2号床下土坑内からの出土である。他に、未掲載遺物として土師器片193片、須恵器片12片がある。

出土土器から、本住居は8世紀第2四半期と考えられ

る。

30号住居 (第94・95図、第29・49表、PL.15・42)

位置(座標)：X軸=36,431～36,436

Y軸=-39,419～39,424

形状：縦長方形

規模：長辺3.7m 短辺2.9m 壁高45cm

主軸方向：N-61°-E

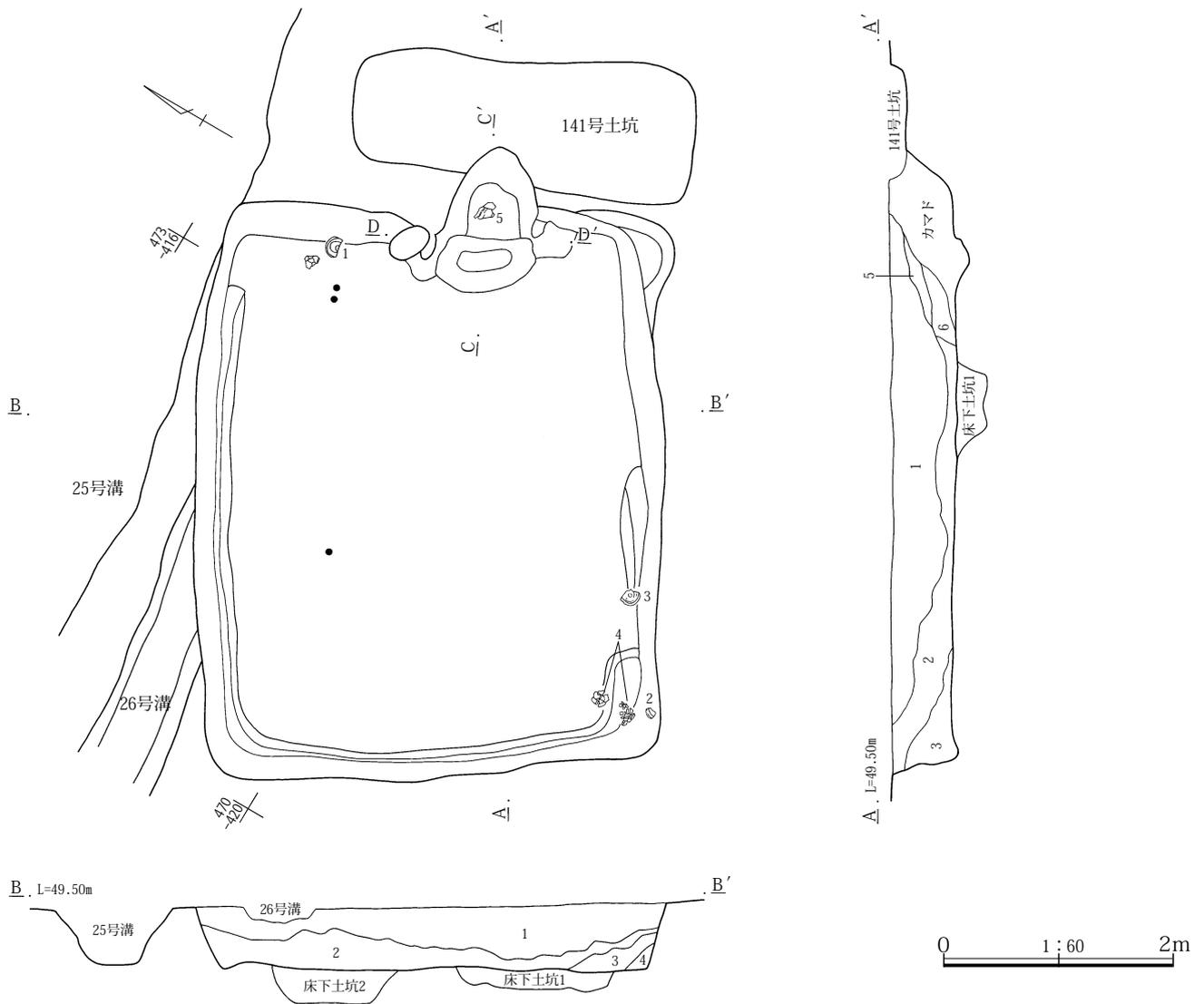
床面積：13.75㎡

本住居は、2区南側の調査範囲境付近に位置する。住居の北側から西側にかけて大きく風倒木痕があり、この為、遺構確認時には住居プランを確定しずらく、不確定なプランのまま調査を進行した。その結果、風倒木痕は比較的浅く、本住居より新しい時期のもので、風倒木痕の下に住居の壁を検出することができた。また、住居の南側には138号土坑が、東側には139号土坑が重複する。遺構確認および土層断面の確認から、いずれの土坑よりも本住居が古いことを確認している。周囲の同時期の遺構には、本住居の北東3mに9号住居およびその東に8号住居が重複し、北4m程には10号住居がある。

住居は、風倒木痕によって住居の北西側の大部分の上部を壊され、138号土坑には南壁と床の一部を、139号土坑にはカマドと東壁の上部を壊されている。しかし、残存状態は、比較的的良好と言えよう。埋土は、2層の黄褐色土と、3・4層とした暗褐色土の3層に分層できる。埋土中には、ローム土やローム小ブロックを各層に混在させることから人為的堆積と考えられる。壁の状態は、全体に直立ぎみに立ち上がり、掘り込みは深い。床面は平坦で、周溝は検出されていない。カマドは東壁の中央やや南寄りに位置する。残存する規模は、全長84cm(焚き口から燃焼部長54cm、煙道部長30cm)、幅1.12mを測る。残存状態は、139号土坑により上部を壊されているが、概ね良好である。右袖部は残存しないが、左袖部は住居内に僅かに張り出し、焚き口部から燃焼部底面の窪みは住居内から壁の外側に大きく張り出し、煙道部がさらに外側へ突出する。断面観察から、残存する袖部は、ロームを掘り残した状態にある。支脚は検出されていない。貯蔵穴および柱穴も検出されていない。

床面はローム面に構築されており、下部構造は検出されていない。

遺物の出土量は極めて少なく、図示できたのは1の須



29号住居

- 1 暗褐色土 ローム小ブロック、黒褐色土小ブロックを少量含む。
- 2 黒褐色土 ローム小ブロックを多く、暗褐色土を少量混入。
- 3 暗褐色土 ローム小ブロックを少量含む。
- 4 黄褐色土 ローム土を主体とし、暗褐色土を少量混入。
- 5 暗褐色土 ローム粒、焼土粒を少量含む。
- 6 暗褐色土 ローム小ブロックを多く含む。

第91図 29号住居平面図

恵器甕片と、土製品として2の土錘のみである。他に、未掲載遺物として土師器片17片、須恵器片8片がある。

出土土器から、本住居は9世紀後半と考えられる。

31号住居 (第84・96図、第49表、PL.14)

位置(座標)：X軸=36,475～36,480

Y軸=-39,437～39,440

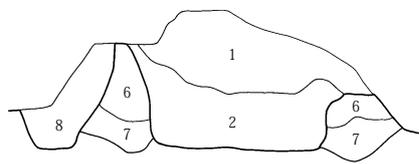
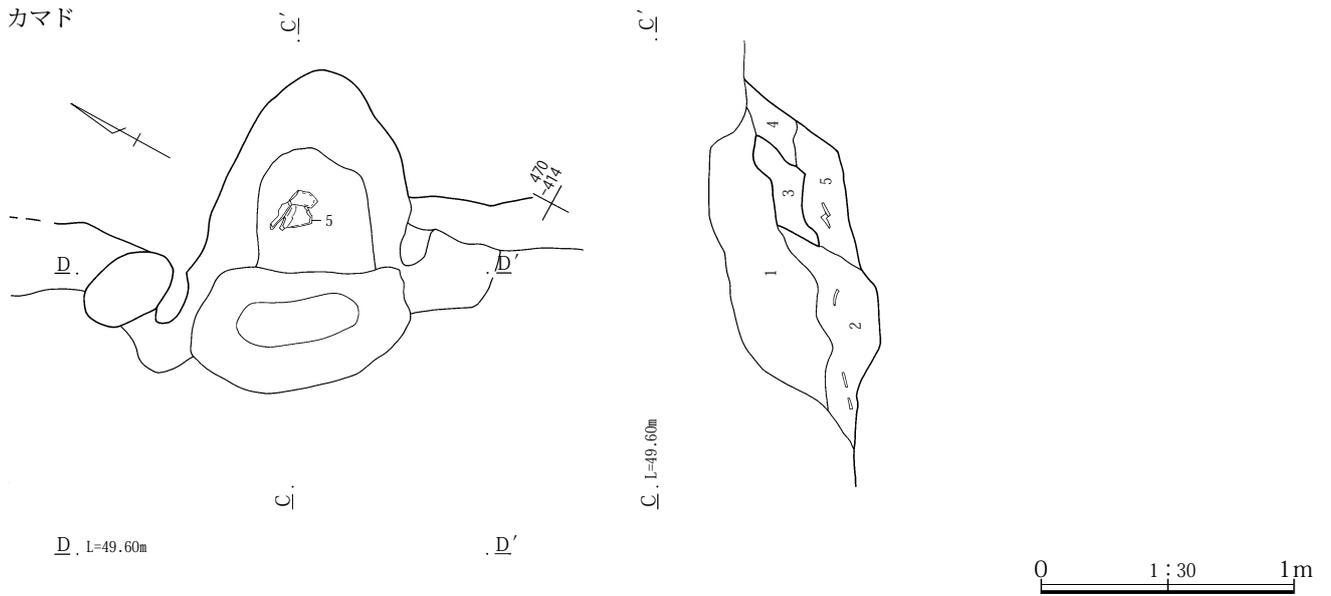
形状：方形

規模：長辺(3.9)m 短辺(1.35)m 壁高17cm

主軸方向：N-74°-E

床面積：(3.92) m²

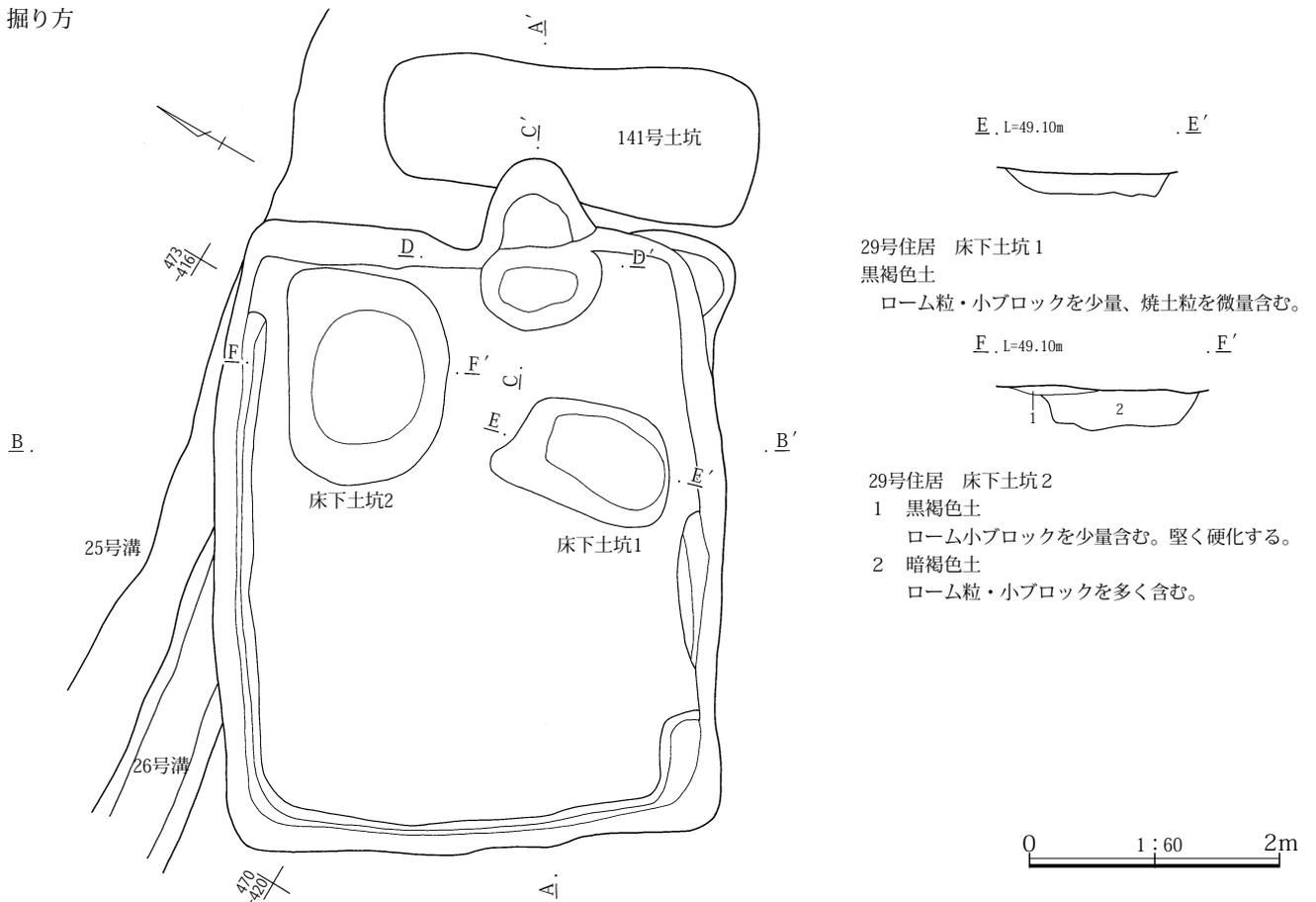
本住居は、2区の北端の調査区境に位置し、本調査で最も住居が重複する場所にある。遺構確認でも明確なブ



29号住居カマド

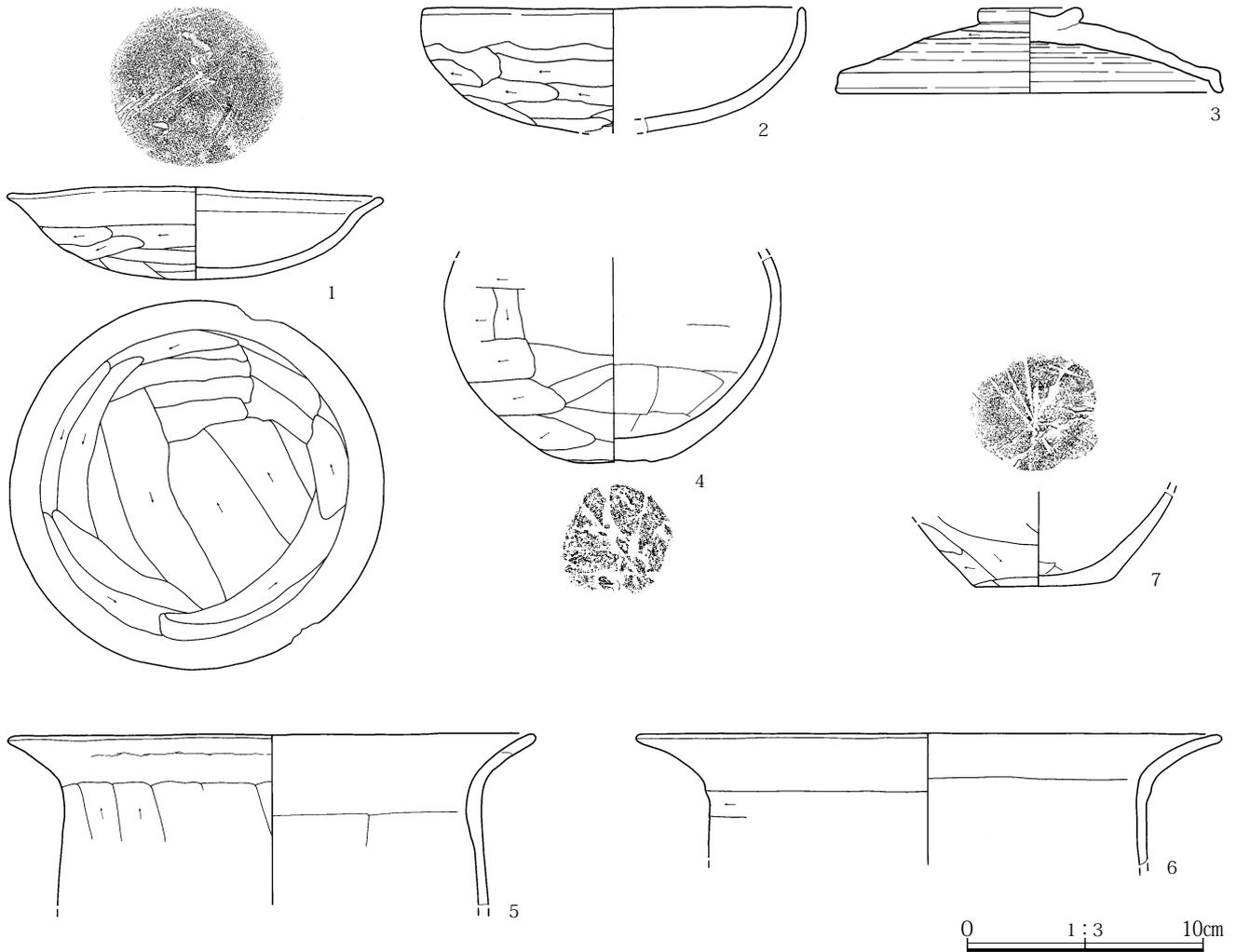
- 1 暗褐色土 ローム小ブロックを多く、焼土粒を微量含む。住居6層と同じ。
- 2 暗褐色土 ローム小ブロック、焼土小ブロックをやや多く含む。
- 3 黄褐色土 ローム土を主体とし、下層は被熱し焼土化する。(天井部?)
- 4 黄褐色土 ローム土を主体とし、焼土粒を多く含む。
- 5 暗褐色土 焼土粒・小ブロックを多く、炭化物を少量含む。
- 6 黄褐色土 ローム土を主体とし、暗褐色土を少量混入。やや粘質。(残存袖部)
- 7 黒褐色土 ローム粒・小ブロックを多く含む。(残存袖部)
- 8 暗黒褐色土 ローム小ブロックを多く含む。(近世以降のピット)

掘り方



第92図 29号住居カマド・掘り方平面図

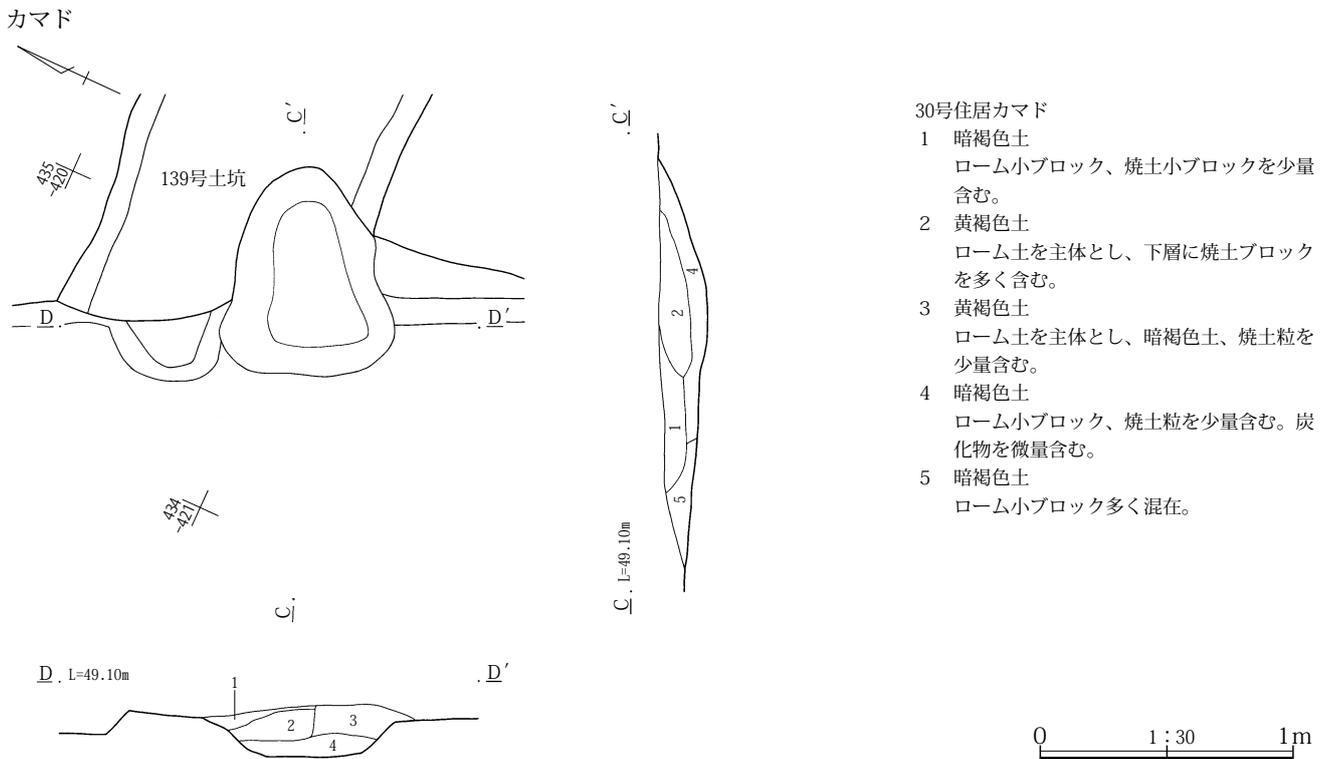
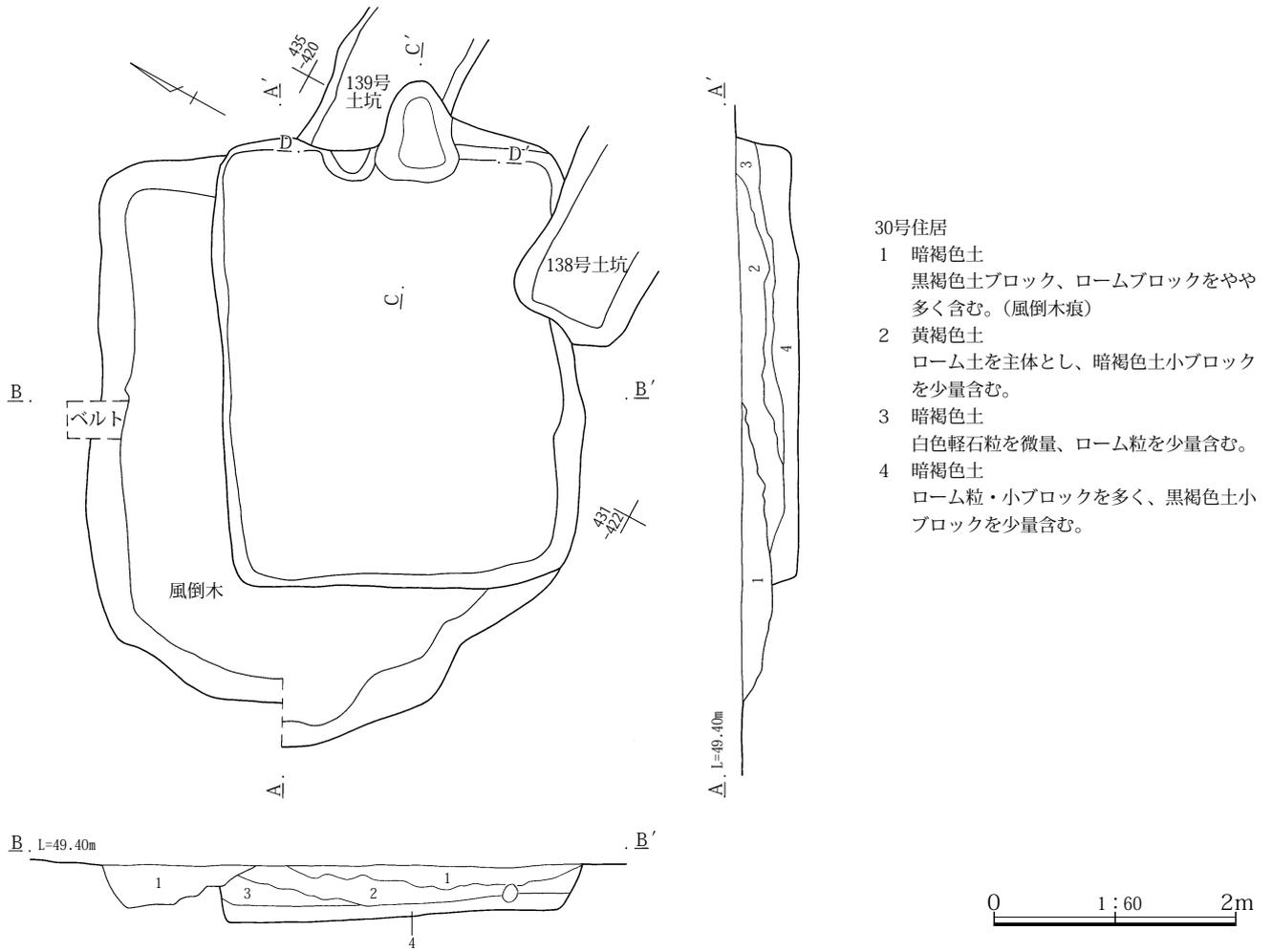
第3章 検出された遺構と遺物



第93図 29号住居出土遺物

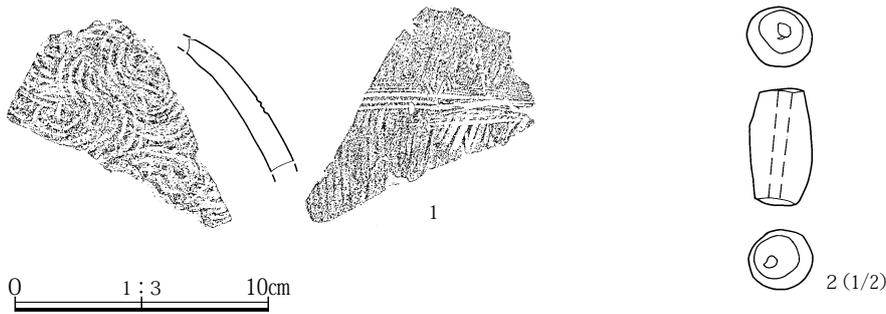
第28表 29号住居出土遺物観察表

挿図番号 図版番号		NO.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値(cm)	胎土／焼成／ 色調	成形・整形の特徴	摘要
第93図 PL.42	1	土師器 杯	床直付近 ほぼ完形	口 15.6 高 4.0 稜 12.9	細砂粒/良好/明赤 褐	口縁部横ナデ、体部(稜下)から底部は手持ちヘラ削り。		
第93図 PL.42	2	土師器 杯	埋土中 1/4	口 15.6	細砂粒/良好/鈍 い橙	口縁部は横ナデ、体部から底部は手持ちヘラ削り。		
第93図 PL.42	3	須恵器 杯蓋	埋土中 3/4	口 16.0 高 3.5 摘 4.4	細砂粒・角閃石/ 還元焰/灰	ロクロ整形、回転左回り。摘みは貼付、天井部は中ほどまで回転ヘラ削り。		
第93図 PL.42	4	土師器 壺	床直付近 底部～胴部下半	底 4.6 胴 14.1	細砂粒・褐粒/良 好/鈍い赤褐	底部は木葉痕が残る、胴部はヘラ削り。内面はヘラナデ。		
第93図	5	土師器 甗	カマド内 口縁部～胴部上 位片	口 21.8	細砂粒/良好/明黄 褐	外面口縁部に輪積み痕が残る。口縁部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。		
第93図	6	土師器 甗	2号床下土坑 口縁部～胴部上 位片	口 24.3	細砂粒/良好/橙	口縁部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。		
第93図	7	土師器 甗	埋土中 底部～胴部下位 片	底 5.7	細砂粒/良好/赤褐	底部と胴部はヘラ削り。内面はヘラナデ。		



第94図 30号住居・カマド平面図

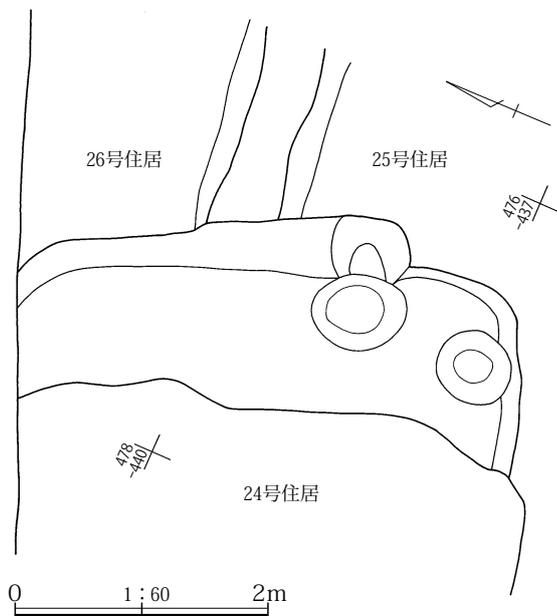
第3章 検出された遺構と遺物



第95図 30号住居出土遺物

第29表 30号住居出土遺物観察表

挿図番号 図版番号		NO.	種類	出土位置 残存率	計測値(cm)	胎土／焼成／ 色調	成形・整形の特徴	摘要
第95図		1	須恵器 甕	埋土中 胴部片		細砂粒／還元焰／ 灰	外面は平行叩き後間隔をあけて3条の凹線が巡る。内面は同心円状アテ具痕が残る。	
第95図 PL.42		2	土製品 土錘	埋土中 完形	長 3.1 径 1.6 孔 0.3 重 9.6	微砂粒／良好／明 赤褐	両端は径1.1cmの平坦をつくる、孔は斜めにとおっている。	



第96図 31号住居平面図

ランが確定できず、先述した25・26号住居の床面下に検出されたことで確定できた住居であったため、調査時には、先に24B号住居、後に31号住居として調査を行った経緯がある。本住居との重複状況は、本住居の西半の大部分が24号住居と重複して壊され、カマドを含めた南東部は25号住居が上位に重複し、さらに北東部は26号住居が上位に重複する。これらの重複する新旧は、土層断面の確認から、本住居が最も古いことが確認されている。周囲の同時期の遺構には、重複する24号住居の西側に27

号住居が、南東6mに28号住居、同7mに20号住居がある。

住居の残存状態は、24～26号住居との重複によりかなり悪い。また、北壁は調査区外となり検出できなかった。第84図の土層断面にあるように、26号住居の貼り床の下に、8層とした本住居の埋土が残るのみで、埋土は暗灰色砂質土小ブロックを多く含む暗褐色土であり、人為的堆積と考えられる。残存する東壁の状態は、傾斜をもって立ち上がる。床面はほぼ平坦で、周溝は検出されていない。カマドは東壁の中央南寄りに位置するが、残存状態は極めて悪く、痕跡のみであった。規模は、全長97cm（焚き口から燃焼部長58cm、煙道部長39cm）、幅75cmを測る。痕跡は、焚き口部から燃焼部と考えられる底面の窪みと、それに続く外側への煙道部である。貯蔵穴はカマドの右側で、住居の南東隅に位置する。円形を呈し、規模は径55cm、深さ8cmを測る。

床面はローム面に構築され、残存する範囲内に下部構造はない。

遺物の出土量も極めて少ない。僅かに、土師器の甕片が貯蔵穴付近の床面から出土しているのみである。図示できる遺物はなかった。

遺構の重複から、本住居は9世紀第3四半期以前と考えられる。

Y軸=-39,410～39,416

2 掘立柱建物・柱穴列

桁行方向：N-82°-W

本調査で検出された掘立柱建物は2棟のみで、共に2区から検出されている。建物の方向性や埋土等から、両者はあまり時間差のないほぼ同一時期の建物と考えられる。

一方、建物として認定しきれなかったピット列については、「柱穴列」として扱った。2列あり、6区から検出されている。

以下、各遺構ごとに記載する。

1号掘立柱建物（第97図、第52表、PL.16）

位置(座標)：X軸=36,451～36,456

Y軸=-39,409～39,415

桁行方向：N-69°-W

本掘立柱建物は2区の中央東寄りにあり、周囲には各住居や多くの土坑が点在し、南側には2号掘立柱建物が近接する。規模は梁行2間(3.3m)×桁行3間(4.4m)の長方形を呈する総柱の建物で、P1～P9の9本の柱穴が検出されている。桁行方向は西北西を向く。各柱間の距離は、ほぼ均等に梁行間1.65m、桁行間2.2mを測る。

各柱穴の規模および埋土は、P1が径28cm、深さ17cmを測り、暗褐色土でローム小ブロックをやや多く含む。P2が径30cm、深さ25cmを測り、暗褐色土でローム粒・小ブロックをやや多く含む。P3が径34cm、深さ36cmを測り、暗褐色土でローム小ブロックを少量含む。P4が径42cm、深さ46cmを測り、暗褐色土でローム粒を微量含む。P5が径45cm前後、深さ24cmを測り、暗褐色土でローム小ブロックをやや多く含む。P6が径35cm、深さ25cmを測り、黒褐色土でローム小ブロックを少量含む。P7が径30cm前後、深さ29cmを測り、暗褐色土でローム粒・小ブロックをやや多く含む。P8が径38cm、深さ26cmを測り、黒褐色土でローム粒・小ブロックをやや多く含む。P9が径33cm、深さ26cmを測り、黒褐色土・ローム粒・小ブロックをやや多く含む。なお、側柱柱穴に比べ、中央の柱穴がやや大きいのが特徴といえる。

出土遺物がなく、時期の特定は難しいが、周辺の状況等から古代の可能性はある。

2号掘立柱建物（第98図、第52表、PL.16）

位置(座標)：X軸=36,445～36,450

本掘立柱建物は2区の中央東寄りにあり、周囲には各住居や多くの土坑が点在し、北側には1号掘立柱建物が近接する。規模は梁行2間(3.0m)×桁行3間(5.1m)の長方形を呈する総柱の建物で、北西隅と南東隅に位置する柱穴を欠くが、P1～P7の7本の柱穴が検出されている。桁行方向は西北西を向く。先の1号掘立柱建物と比べると、規模はやや大きく、若干不整ぎみで、方向が僅かにずれる。

各柱間の距離は、梁行間1.45mと1.55m、桁行間2.35mと2.75mを測る。各柱穴の規模および埋土は、P1が径30cm、深さ24cmを測り、暗褐色土でローム粒を微量含む。P2が径29cm、深さ13cmを測り、暗褐色土でローム粒を微量含む。P3が径40cm前後、深さ15cmを測り、暗褐色土でローム粒を少量含む。P4が径50cm、深さ26cmを測り、暗褐色土でローム粒を少量含む。P5が径40cm前後、深さ32cmを測り、暗褐色土でローム小ブロックを少量含む。P6が径37cm、深さ12cmを測り、暗褐色土でローム土を僅かに混入。P7が径28cm前後、深さ27cmを測り、暗褐色土でローム粒を少量含む。なお、側柱柱穴に比べ、中央の柱穴がやや大きい点は、1号掘立柱建物と同様な特徴といえる。

出土遺物がなく、時期の特定は難しいが、周辺の状況等から古代の可能性はある。

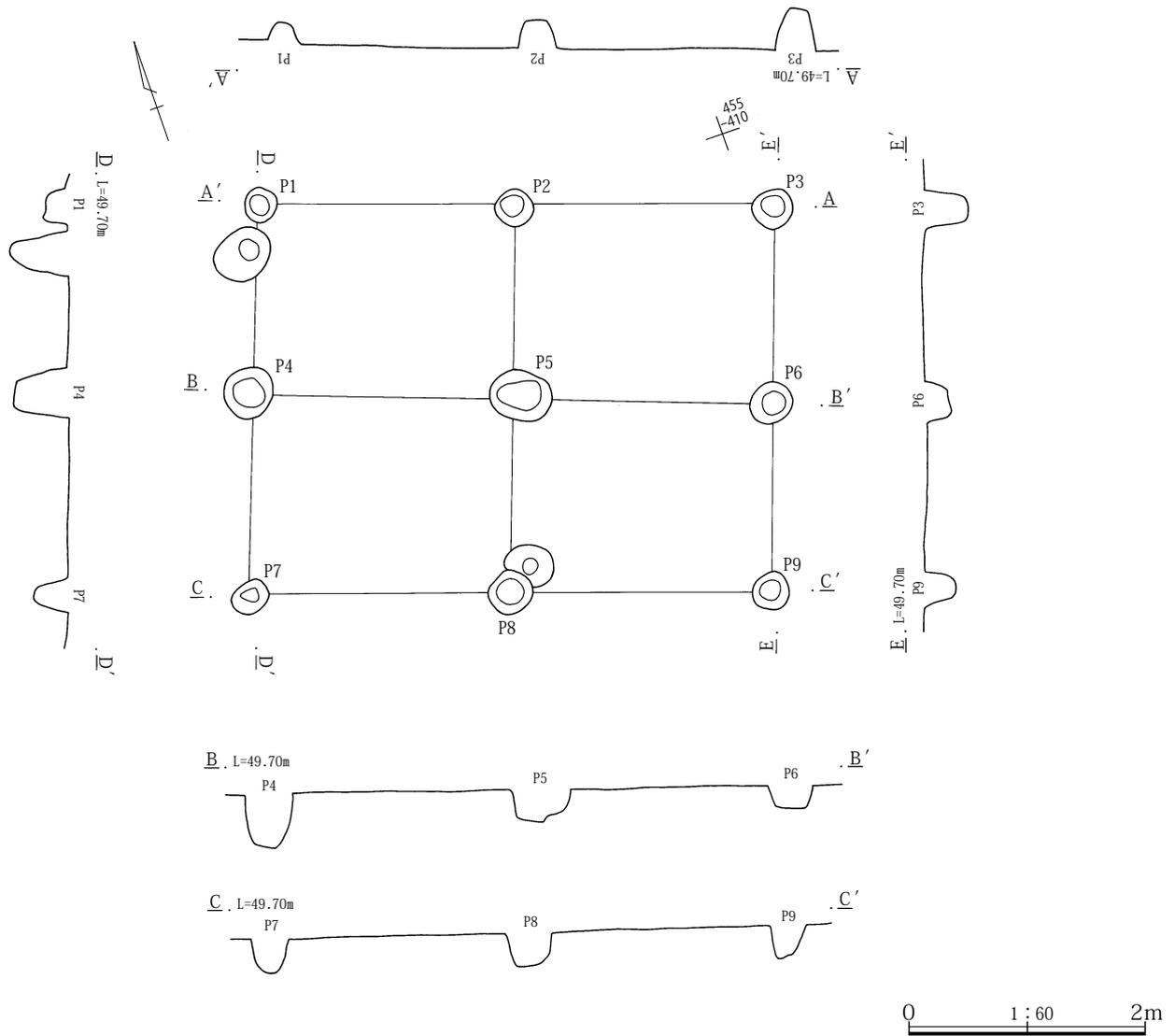
1号柱穴列（第99図、PL.16）

位置(座標)：X軸=36,557～36,560

Y軸=-39,311～39,315

本柱穴列は調査範囲の最北端となる6区北西端にあり、周囲は攪乱が著しく、僅かに遺構確認できた狭い範囲内での検出であった。そのため、3本の柱穴が等間隔で並んでいる状況が確認できたものの、遺構の全容は明らかではなく、建物の可能性も判然としない。柱穴列の方向は東北東を向く。規模は長さ3.8mで、柱間1.9mを測り、各柱穴は径30cm前後、深さ25cm前後を測る。各柱穴の埋土は、暗褐色土でロームブロックを多く含み、粘質である。

出土遺物もなく、時期の特定は難しい。



第97図 1号掘立柱建物平面図

2号柱穴列 (第99図)

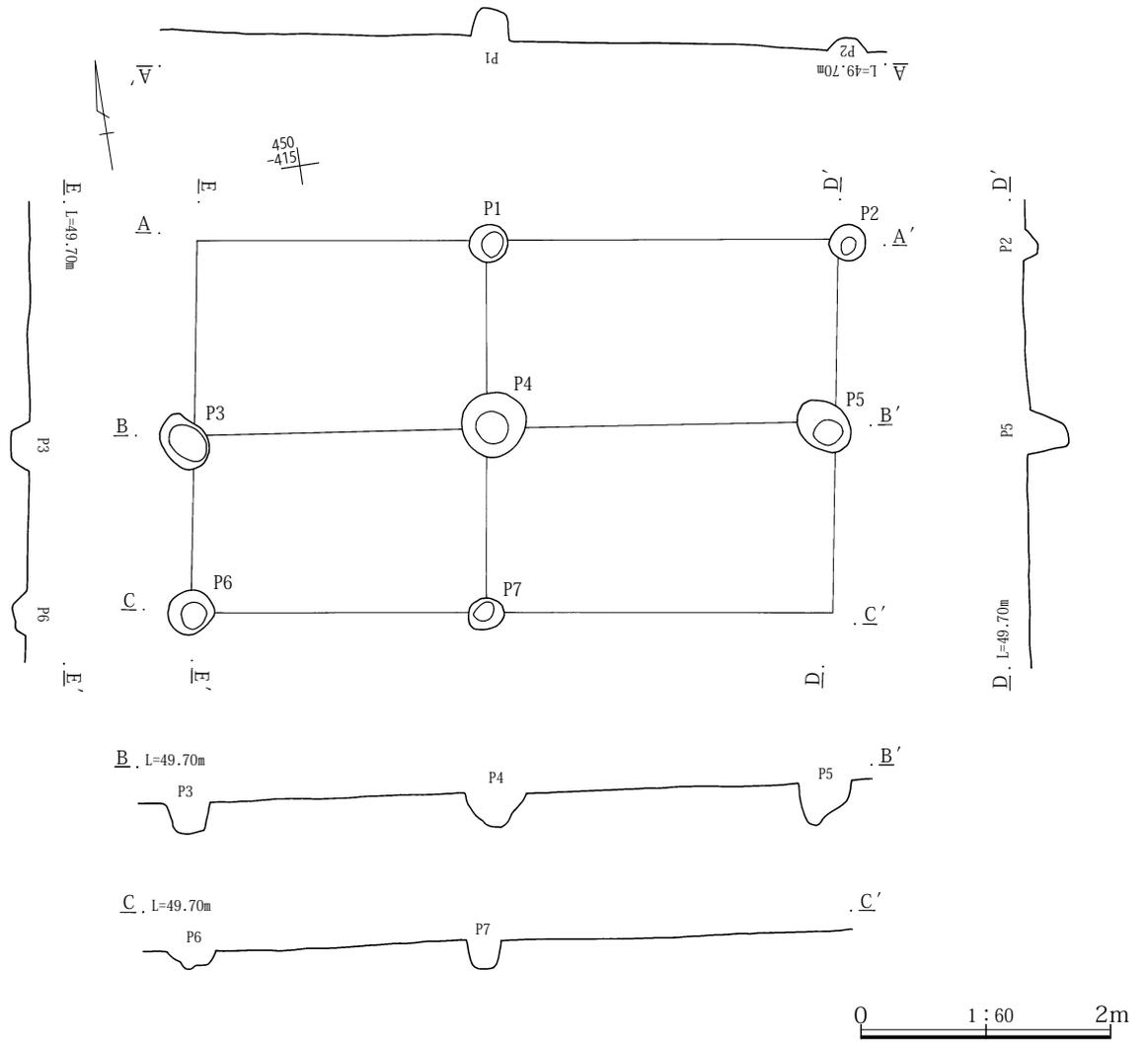
位置(座標) : X軸=36,509 ~ 36,513

Y軸=-39,281 ~ 39,284

本柱穴列は6区南側の土坑が集中する場所にあり、5号溝の西側に沿うように位置し、付近には1・15・25・26号土坑がある。検出された柱穴は計5本で、P1～3は長さ3.7mを測り、P1・2の柱間は1.55m、P2・3の柱間は2.15mを測る。このP2・3の東側に平行してP4・5があり、P2・5およびP3・4の柱間は1.1mを測る。このことから、P1～3で柱穴列、P2～5で1間×1間の掘立柱建物、或いはP1～5が掘立柱建物を構成する柱穴である可能性もあり、判然としない。ちなみに、P1～3の方向は北北東を向く。各柱穴の規模は、径27cm前後、深さ15～30cmを測る。埋土は黒褐

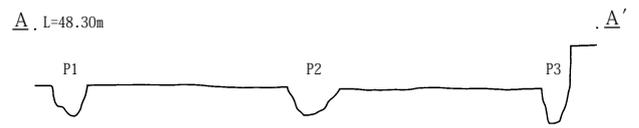
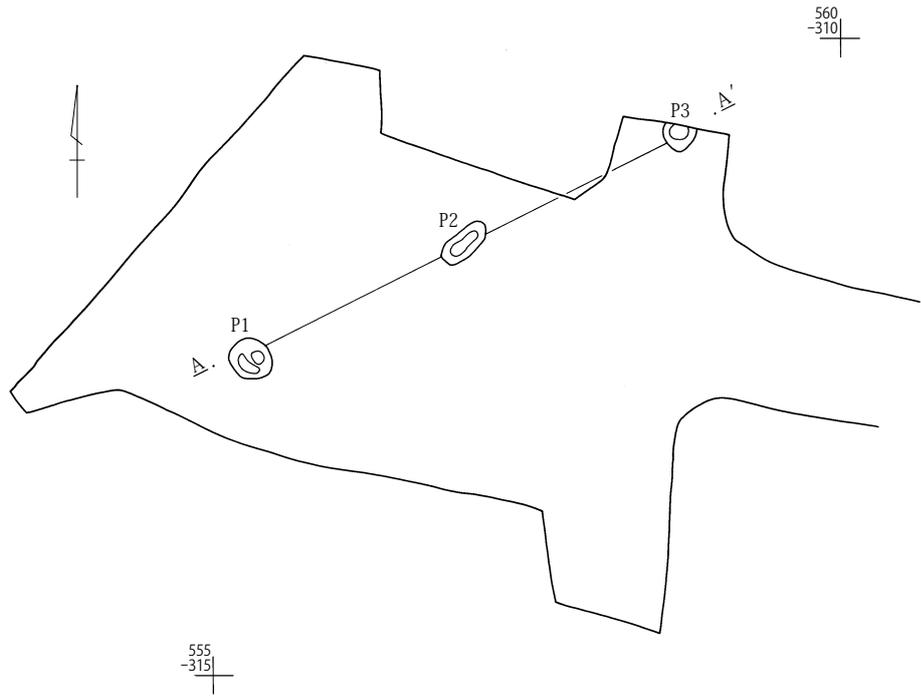
色土で、白色軽石粒を少量含み、やや砂質ぎみ。なお、埋土からすると、P2・3の間に位置するP6も一連の可能性はある。

出土遺物もなく、時期の特定は難しい。

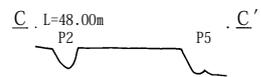
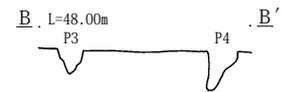
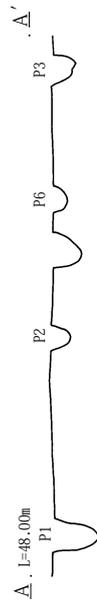
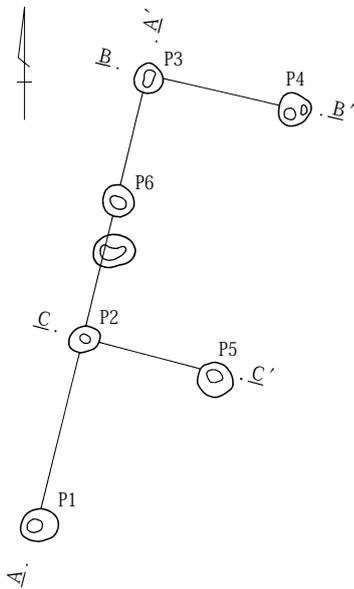


第98図 2号掘立柱建物平面図

1号柱穴列



2号柱穴列



第99図 1・2号柱穴列平面図

3 土坑

本調査で検出された土坑は、調査時には1～186号までの番号を付したが、遺構種別の変更や欠番等を割愛すると172基を数える。この内、古代の土坑は9基と少なく、近世土坑64基、近世以降の土坑32基、近代土坑15基、時期不明の土坑52基である。全体的に土坑出土の遺物は少なく、小片の出土にとどまっている例がほとんどで、近世以降の陶磁器類片を出土させる土坑が38基ある。特に、調査区北端となる6区では近世・近代に帰属する30基余の土坑が集中して検出され、中でも16号土坑は不整な大型長方形を呈している等、この場所の特異性を示している。また、5区の南端および西端、4区と5区の境付近、3区では12号溝の西側に集中し、2区では調査区全体に散漫に検出されている。なお、古代の土坑は2・3区で検出されている。

以下、各土坑ごとに記載する。

1号土坑（第100・125図、第30・50表、PL.18・43・47）

位置(座標)：X軸=36,514、Y軸=-39,280

本土坑は6区南側の土坑が集中する場所であり、15号土坑および5号溝と重複する。平面形状は円形を呈し、規模は径1.0m、深さ27cmを測る。底面は平坦。重複する5号溝より本土坑が新しく、15号土坑とは判然としない。埋土中からは、多量の遺物が出土している。

出土遺物には、図示した1の土師器杯、陶磁器類として2～6の碗類、7の杯、8・9の灯火受台、10の半胴甕、11の火鉢、釜輪1点がある。これらは、肥前磁器、瀬戸・美濃磁器、京・信楽系陶器、瀬戸・美濃陶器、在地系土器からなる。なお、10の半胴甕は、本土坑から遠く離れた3区の6号住居の埋土上層から出土した破片と接合している。石製品には13の雲母石英片岩製の板碑片がある。一方、未掲載遺物としては、近世の国産磁器29片、国産施釉陶器2片、近現代の陶磁器類45片、ガラス16片、不明な鉄製品の小片1点が出土している。

出土した陶磁器が江戸末から明治初期の所産であることから、本土坑の時期は近世以降である。

2号土坑（第100・126図、第31・50表）

位置(座標)：X軸=36,524、Y軸=-39,270

本土坑は6区南側の土坑が集中する場所であり、平面

形状は円形を呈し、規模は径1.15m、深さ18cmを測る。底面はやや凹凸がみ。埋土はやや砂質な暗褐色土と、褐灰色土に分層される。埋土中に黄褐色の地山ブロックを混在させることから、人為的堆積と考えられる。

出土遺物は図示した常滑陶器の甕片があり、他に未掲載遺物として須恵器の小片が出土している。本土坑の時期は不明。

3号土坑（第101図、第50表、PL.17）

位置(座標)：X軸=36,522、Y軸=-39,275

本土坑は6区南側の土坑が集中する場所であり、残存状態は悪い。東側は不明であるが、平面形状は方形を呈すると考えられ、残存する規模は長軸1.47m、短軸(1.06)m、深さ10cmを測る。長軸方向はほぼ南北を向く。底面はほぼ平坦。埋土はやや砂質な暗褐色土と、粘質な鈍い黄褐色土に分層される。埋土中に黄褐色の地山ブロックを混在させることから、人為的堆積と考えられる。

出土遺物には、未掲載遺物として土師器片と近現代の陶磁器片があり、本土坑の時期は近代か。

4号土坑（第101図、第50表、PL.17）

位置(座標)：X軸=36,520、Y軸=-39,276

本土坑は6区南側の土坑が集中する場所であり、5号土坑と重複する。平面形状は長方形を呈し、規模は長軸1.38m、短軸0.82m、深さ18cmを測る。長軸方向は北北東を向く。底面は平坦。埋土はやや砂質な暗褐色土で、黄褐色の地山ブロックが均質に混入することから、人為的堆積と考えられる。土層断面の観察から、5号土坑より本土坑が古い。

出土遺物には、未掲載遺物として土師器の小片、近世の国産磁器片、在地系焙烙・鍋4片があり、本土坑の時期は近世と考えられる。

5号土坑（第101図、第50表、PL.17）

位置(座標)：X軸=36,519、Y軸=-39,275

本土坑は6区南側の土坑が集中する場所であり、西側に4号土坑、東側に6号土坑と重複する。平面形状は長方形を呈し、規模は長軸1.22m、短軸(0.5)m、深さ8cmを測る。長軸方向は北北東を向く。底面は平坦。埋土はやや砂質な暗褐色土で、黄褐色の地山ブロックを少量混入することから、人為的堆積と考えられる。土層断面の観察から、4号土坑より本土坑が新しく、6号土坑よりも古い。

遺物の出土はなく、本土坑の時期は不明。

6号土坑（第101図、第50表、PL.17）

位置(座標)：X軸=36,520、Y軸=-39,274

本土坑は6区南側の土坑が集中する場所であり、西側が5号土坑と重複する。平面形状は長方形を呈し、規模は長軸1.35m、短軸0.75m、深さ15cmを測る。長軸方向は北北東を向く。底面は平坦。埋土はやや砂質な暗褐色土で、地山ブロックを僅かに含むことから、人為的堆積と考えられる。土層断面の観察から、5号土坑より本土坑が新しい。

遺物の出土はなく、本土坑の時期は不明。

7号土坑（第101図、第50表）

位置(座標)：X軸=36,522、Y軸=-39,278

本土坑は6区南側の土坑が集中する場所であり、残存状態は悪い。平面形状は概ね長方形を呈し、規模は長軸1.53m、短軸0.95m、深さ3cmを測り、浅い。長軸方向は北北東を向く。底面は平坦。埋土はやや砂質な暗褐色土で、地山ブロックを僅かに含むことから、人為的堆積と考えられる。

遺物の出土はなく、本土坑の時期は不明。

8号土坑（第100図、第50表、PL.17）

位置(座標)：X軸=36,513、Y軸=-39,274

本土坑は6区南側の土坑が集中する場所にある。上面の平面形状は長方形を呈し、長軸1.68m、短軸1.15mを測るが、底面状況は中央が径80cmの円形を成し、47cmの深さをもつ。本来の土坑は、この中央部の円形土坑であったと考えられる。底面は平坦。埋土はやや砂質な暗褐色土を主とし、3層に分層できる。埋土中に黄褐色の地山ブロックを混在させることから、人為的堆積と考えられる。

出土遺物には、未掲載遺物として近世の在地系焙烙・鍋1片のみで、本土坑の時期は近世か。

9号土坑（第102・103図、第50表、PL.18）

位置(座標)：X軸=36,522、Y軸=-39,284

本土坑は6区南側の土坑が集中する場所であり、西側に3号溝が接する。平面形状は長方形を呈し、規模は長軸1.31m、短軸0.95m、深さ18cmを測る。長軸方向は東西を向く。底面はほぼ平坦。埋土はやや砂質な暗褐色土で、黄褐色の地山ブロックを少量混入することから、人為的堆積と考えられる。

出土遺物には、未掲載遺物として近世の国産磁器1片、在地系焙烙・鍋1片があり、本土坑の時期は近世と考えられる。

10号土坑（第102・103図、第50表）

位置(座標)：X軸=36,523、Y軸=-39,284

本土坑は6区南側の土坑が集中する場所であり、西側が3号溝と重複する。平面形状は長方形を呈し、規模は長軸1.03m、短軸0.78m、深さ13cmを測る。長軸方向は西北西を向く。底面は平坦。埋土はやや砂質な暗褐色土で、黄褐色の地山ブロックを少量混入することから、人為的堆積と考えられる。重複関係は不明。

出土遺物には、未掲載遺物として土師器の小片、近世の国産磁器1片、近現代の陶磁器1片があり、本土坑の時期は近世以降と考えられる。

11号土坑（第104・105・127図、第32・50表、PL.17）

位置(座標)：X軸=36,516、Y軸=-39,276

本土坑は6区南側の土坑が集中する場所であり、全体が12号土坑と重複する。平面形状は不明であるが、土層断面からの規模は長さ(0.84)m、深さ48cmを測る。埋土はやや砂質な黒褐色土と、粘質な暗褐色土の2層からなる。埋土中に地山ブロックを混在させることから、人為的堆積と考えられる。土層断面の観察から、12号土坑より本土坑が新しい。

出土遺物には図示した志戸呂陶器の灯明皿、他に未掲載遺物として土師器の小片があり、本土坑の時期は近世以降と考えられる。

12号土坑（第104・105図、第50表、PL.17）

位置(座標)：X軸=36,516、Y軸=-39,276

本土坑は6区南側の土坑が集中する場所であり、11号土坑、南側が13号土坑、東側が4号溝と重複する。平面形状は大型な円形を呈し、規模は径3.0m、深さ60cmを測る。底面は平坦。埋土はやや砂質な黒褐色土および鈍い黄褐色土を主体に、4層に分層できる。埋土中に地山ブロックを混在させることから、人為的堆積と考えられる。また、土層断面の観察から、11・13号土坑より本土坑が旧く、4号溝より新しい。

出土遺物は未掲載遺物に近世の国産施釉陶器1片のみで、本土坑の時期は近世か。

13号土坑（第104・105図、第50表、PL.17）

位置(座標)：X軸=36,515、Y軸=-39,276

本土坑は6区南側の土坑が集中する場所にあり、北側を12号土坑と重複する。平面形状は不明であるが、土層断面では南北方向1.55m、深さ30cmを測る。底面は平坦。埋土はやや砂質な暗褐色土で、黄褐色の地山ブロックを多量に混入することから、人為的堆積と考えられる。土層断面の観察から、12号土坑より本土坑が新しい。

出土遺物には、未掲載遺物として近世の国産施釉陶器1片、在地系焙烙・鍋1片、近現代の土器類4片があり、本土坑の時期は近世以降と考えられる。

14号土坑（第104・105・128図、第33・50表、PL.17）

位置(座標)：X軸=36,514、Y軸=-39,276

本土坑は6区南側の土坑が集中する場所にある。平面形状は長方形を呈し、規模は長軸1.4m、短軸(0.96)m、深さ21cmを測る。長軸方向は西北西を向く。底面は概ね平坦。埋土はやや砂質な暗褐色土で、黄褐色の地山ブロックを混入することから、人為的堆積と考えられる。

出土遺物には図示した美濃陶器の皿、他に未掲載遺物として須恵器の小片、近世の国産磁器1片、在地系焙烙・鍋1片、近現代の陶磁器類2片があり、本土坑の時期は近世以降と考えられる。

15号土坑（第104・105・129・130図、第34・50表、PL.17・43）

位置(座標)：X軸=36,512、Y軸=-39,278

本土坑は6区南側の土坑が集中する場所にあり、西側に1号土坑と重複する。平面形状は不整形円形を呈し、規模は径2.5m、深さ68cmを測る。底面は平坦。埋土は砂質な暗褐色土で、地山ブロックを多量に混入することから、人為的堆積と考えられる。1号土坑との重複関係は不明。埋土中からは、多量の遺物が出土している。

出土遺物には図示した1・2の碗類(肥前磁器、瀬戸・美濃磁器)、3の摺り絵皿(美濃陶器)、4の火鉢(在地系土器)、5の平瓦、6・7の十能瓦があり、他に未掲載遺物として土師・須恵器片、近世の国産磁器9片、国産施釉陶器3片、近現代の陶磁器52片、土器類43片、瓦10片、十能瓦14片、ガラス4片がある。

本土坑の時期は近世以降と考えられる。

16号土坑（第102・103・131図、第35・50表、PL.17・47・49）

位置(座標)：X軸=36,522、Y軸=-39,280

本土坑は6区南側の土坑が集中する場所にあり、17

～23号土坑と重複する。平面形状は不整形な大型長方形を呈し、規模は長軸6.9m、短軸3.95m、深さ25cmを測る。長軸方向は北北東を向く。底面は平坦。埋土はやや砂質な暗褐色土で、黄褐色の地山ブロックを混入することから、人為的堆積と考えられる。土層断面の観察から、いずれの土坑より本土坑が新しい。

出土遺物には、未掲載遺物として土師器19片、近世の国産磁器24片、国産施釉陶器9片、在地系焙烙・鍋2片、近現代の陶磁器98片、土器類64片、瓦1片、十能瓦1片、ガラス7片がある。また、石製品には、図示した1～3の切り砥石があり、1は使用されていない可能性をもつ。さらに、金属製品として、図示した4の下端部がフック状となる鉄製品、5・6の環状の鉄製品、7の銅製品の煙管雁首がある。特に、5の環状鉄製品の内側には、近現代の染付磁器が挟まっている。金属製品の未掲載遺物には、棒状および不明な鉄製品片がある。

本土坑の時期は近世以降と考えられる。

17号土坑（第102・103図、第50表、PL.17）

位置(座標)：X軸=36,520、Y軸=-39,283

本土坑は6区南側の土坑が集中する場所にあり、16・18号土坑と重複する。平面形状は方形を呈すると思われる、残存する規模は長軸1.9m、短軸(1.0)m、深さ15cmを測る。長軸方向は北北東を向く。底面は平坦。埋土は鈍い黄褐色土で、黄褐色の地山ブロックを多く混入することから、人為的堆積と考えられる。土層断面の観察から、16号土坑より本土坑が旧く、18号土坑より新しい。

出土遺物は未掲載遺物の十能瓦1片のみで、本土坑の時期は不明。

18号土坑（第102・103図、第50表、PL.17）

位置(座標)：X軸=36,521、Y軸=-39,283

本土坑は6区南側の土坑が集中する場所にあり、16・17号土坑の底面下に検出された。残存状態は極めて悪く、平面形状は長方形を呈する。規模は長軸(1.5)m、短軸1.17m、深さ7cmを測る。長軸方向は西北西を向く。底面は平坦。埋土はやや砂質な暗褐色土で、黄褐色の地山ブロックを多く混入することから、人為的堆積と考えられる。土層断面の観察から、16・17号土坑より本土坑が古い。

遺物の出土はなく、本土坑の時期は不明。

19号土坑（第102・103図、第50表、PL.17）

位置(座標)：X軸=36,521、Y軸=-39,280

第3章 検出された遺構と遺物

本土坑は6区南側の土坑が集中する場所にあり、16号土坑の底面下に検出された。平面形状は正方形を呈し、規模は一辺0.95m、深さ22cmを測り、北北東を向く。底面は平坦。埋土はやや砂質な暗褐色土で、黄褐色の地山ブロックを多量に混入することから、人為的堆積と考えられる。土層断面の観察から、16号土坑より本土坑が古い。

遺物の出土はなく、本土坑の時期は不明。

20号土坑 (第102・103・132図、第36・50表、PL.17)

位置(座標)：X軸=36,524、Y軸=-39,279

本土坑は6区南側の土坑が集中する場所にあり、16号土坑の底面下に23号土坑と共に検出された。平面形状は長方形を呈し、規模は長軸0.98m、短軸0.78m、深さ10cmを測り、長軸は東西方向を向く。底面は平坦。16号土坑より本土坑が古いと考えられるが、23号土坑との関係は不明。

出土遺物は図示した瀬戸・美濃陶器の灯明皿のみで、本土坑の時期は近世以降と考えられる。

21号土坑 (第102・103図、第50表、PL.17)

位置(座標)：X軸=36,525、Y軸=-39,279

本土坑は6区南側の土坑が集中する場所にあり、16号土坑の底面下に22号土坑と共に検出された。平面形状は長方形を呈し、規模は長軸0.92m、短軸0.72m、深さ9cmを測り、長軸は東西方向を向く。底面は平坦。16号土坑より本土坑が古いと考えられるが、22号土坑との関係は不明。

遺物の出土はなく、本土坑の時期は不明。

22号土坑 (第102・103図、第50表、PL.17)

位置(座標)：X軸=36,525、Y軸=-39,280

本土坑は6区南側の土坑が集中する場所にあり、16号土坑の底面下に21号土坑と共に検出された。平面形状は方形を呈し、規模は長軸0.95m、短軸0.85m、深さ10cmを測り、長軸は東西方向を向く。底面はほぼ平坦。埋土はやや砂質な暗褐色土で、黄褐色の地山ブロックを多量に混入することから、人為的堆積と考えられる。土層断面の観察から、16号土坑より本土坑が古い。21号土坑との関係は不明。

遺物の出土はなく、本土坑の時期は不明。

23号土坑 (第102・103図、第50表、PL.17)

位置(座標)：X軸=36,524、Y軸=-39,280

本土坑は6区南側の土坑が集中する場所にあり、16号土坑の底面下に20号土坑と共に検出された。平面形状は方形を呈し、規模は長軸(0.65)m、短軸0.7m、深さ4cmを測り、長軸は東西方向を向く。底面はほぼ平坦。埋土はやや砂質な暗褐色土で、黄褐色の地山ブロックを多量に混入することから、人為的堆積と考えられる。土層断面の観察から、16号土坑より本土坑が古い。20号土坑との関係は不明。

遺物の出土はなく、本土坑の時期は不明。

25号土坑 (第105図、第50表)

位置(座標)：X軸=36,509、Y軸=-39,281

本土坑は6区南側の土坑が集中する場所にあり、西側が5号溝と重複する。平面形状は方形を呈し、規模は長軸(0.83)m、短軸0.75m、深さ11cmを測る。長軸方向は西北西を向く。底面は平坦。埋土はやや砂質な暗褐色土で、黄褐色の地山ブロックを混入することから、人為的堆積と考えられる。土層断面の観察から、5号溝より本土坑が新しい。

出土遺物には、未掲載遺物として須恵器の小片、近世の国産磁器2片、近現代の陶磁器1片がある。本土坑の時期は近世以降と考えられる。

26号土坑 (第105・133図、第37・50表、PL.43)

位置(座標)：X軸=36,510、Y軸=-39,281

本土坑は6区南側の土坑が集中する場所にあり、土坑の中央付近を5号溝が重複する。平面形状は方形を呈し、規模は長軸0.95m、短軸0.85m、深さ20cmを測る。長軸方向は西北西を向く。底面は平坦。埋土はやや砂質な暗褐色土で、黄褐色の地山ブロックを混入することから、人為的堆積と考えられる。土層断面の観察から、5号溝より本土坑が新しい。

出土遺物には図示した瀬戸・美濃陶器の灯明皿があり、他に未掲載遺物として土師器・須恵器片、中世の在地系鉢・鍋1片、近世の国産磁器1片、在地系焙烙・鍋2片が出土している。

本土坑の時期は近世以降と考えられる。

27号土坑 (第50表)

位置(座標)：X軸=36,513、Y軸=-39,282

本土坑は6区南側の土坑が集中する場所にある。平面形状は円形を呈し、規模は径0.7m、深さ27cmを測る。底面はやや凹凸。埋土はやや砂質な暗褐色土で、黄褐色

の地山ブロックを多く含むことから、人為的堆積と考えられる。

出土遺物には未掲載遺物に近現代の陶磁器1片があり、本土坑の時期は近代か。

28号土坑 (第102・103・134図、第38・50表、PL.17)

位置(座標)：X軸=36,527、Y軸=-39,280

本土坑は6区南側の土坑が集中する場所にあり、南側に16号土坑と隣接する。平面形状は長方形を呈すると思われるが、不明な点が多い。規模は長軸3.4m、短軸(1.72)m、深さ33cmを測り、長軸は東西方向を向く。底面は平坦。また、西側および16号土坑と隣接する南側には付随する落ち込みが存在し、16号土坑と同一な埋土となる。このことから、16号土坑と同一な遺構である可能性もある。

出土遺物には、図示した1・2の碗類(瀬戸・美濃磁器、肥前磁器か)、3の瓶(肥前磁器)があり、他に未掲載遺物として近現代の陶磁器2片、土器類6点がある。また、金属製品には未掲載遺物の棒状の鉄製品片が出土している。

本土坑の時期は近代か。

29号土坑 (第101図、第50表)

位置(座標)：X軸=36,523、Y軸=-39,276

本土坑は6区南側の土坑が集中する場所にあり、土坑の中央付近を6号溝が重複する。平面形状は長方形を呈し、規模は長軸(1.9)m、短軸0.9m、深さ19cmを測る。長軸方向は北北東を向く。底面はほぼ平坦。埋土はやや砂質な暗褐色土で、黄褐色の地山ブロックを僅かに含むことから、人為的堆積と考えられる。土層断面の観察から、6号溝より本土坑が新しい。

遺物の出土はなく、本土坑の時期は不明。

30号土坑 (第101図、第50表)

位置(座標)：X軸=36,525、Y軸=-39,275

本土坑は6区南側の土坑が集中する場所にあり、西側を6号溝が重複する。平面形状は方形を呈し、規模は長軸1.36m、短軸0.69m、深さ15cmを測る。長軸方向は北北東を向く。底面は平坦。埋土はやや粘質な暗褐色土で、黄褐色の地山ブロックを多く含むことから、人為的堆積と考えられる。土層断面の観察から、6号溝より本土坑が古い。

遺物の出土はなく、本土坑の時期は不明。

31号土坑 (第104・105図、第50表)

位置(座標)：X軸=36,517、Y軸=-39,274

本土坑は6区南側の土坑が集中する場所にあり、西側が4号溝と重複する。平面形状は長方形を呈し、規模は長軸1.63m、短軸(0.63)m、深さ5cmを測る。長軸方向は北北東を向く。底面はほぼ平坦。埋土は粘質な暗褐色土で、黄褐色の地山ブロックを多く含むことから、人為的堆積と考えられる。土層断面の観察から、4号溝より本土坑が古い。

遺物の出土はなく、本土坑の時期は不明。

32号土坑 (第106図、第50表、PL.18)

位置(座標)：X軸=36,491、Y軸=-39,309

本土坑は5区南東側にあり、付近には34・36・37号土坑が点在する。平面形状は長方形を呈し、規模は長軸2.17m、短軸1.15m、深さ17cmを測る。長軸方向は西北西を向く。底面はほぼ平坦。埋土は暗褐色土で、ロームブロックを少量混入することから、人為的堆積と考えられる。

遺物の出土はない。本土坑の時期は、埋土から近世と考えられる。

33号土坑 (第106図、第50表、PL.18)

位置(座標)：X軸=36,519、Y軸=-39,292

本土坑は5区東側にあり、付近には44～46号土坑が点在する。平面形状は長方形を呈し、規模は長軸1.74m、短軸1.42m、深さ33cmを測る。長軸方向は北東を向く。底面はほぼ平坦。埋土は暗褐色土と黒褐色土を主に、4層に分層できる。埋土中にロームブロックを混在させることから、人為的堆積と考えられる。

遺物の出土はない。本土坑の時期は、埋土から近世と考えられる。

34号土坑 (第106図、第50表、PL.18)

位置(座標)：X軸=36,490、Y軸=-39,312

本土坑は5区南東側にあり、付近には32・36・37号土坑や2号井戸が点在する。平面形状は長方形を呈し、規模は長軸2.88m、短軸1.55m、深さ27cmを測る。長軸方向は北北東を向く。底面はほぼ平坦。埋土は暗褐色土で、ロームブロックを僅かに含むことから、人為的堆積と考えられる。

遺物の出土はない。本土坑の時期は、埋土から近世と考えられる。

36号土坑 (第106図、第50表、PL.18)

位置(座標)：X軸=36,489、Y軸=-39,317

本土坑は5区南東側にあり、付近には34・37号土坑や2号井戸が点在する。平面形状は長方形を呈し、規模は長軸1.67m、短軸0.83m、深さ6cmを測る。長軸方向は西北西を向く。底面はほぼ平坦。中央付近にはピットを有するが、ピットは新しい。土坑の埋土は暗褐色土で、ロームブロックを多量に混在することから、人為的堆積と考えられる。

遺物の出土はない。本土坑の時期は、埋土から近世と考えられる。

37号土坑 (第106図、第50表、PL.18)

位置(座標)：X軸=36,488、Y軸=-39,315

本土坑は5区南東側にあり、付近には34・36号土坑や2号井戸が点在する。平面形状は長方形を呈し、規模は長軸1.07m、短軸0.63m、深さ5cmを測る。長軸方向は北西を向く。底面は平坦。中央付近にはピットを有するが、ピットは新しい。土坑の埋土は暗褐色土で、ロームブロックを多量に混在することから、人為的堆積と考えられる。

遺物の出土はない。本土坑の時期は、埋土から近世と考えられる。

38号土坑 (第107図、第50表、PL.18)

位置(座標)：X軸=36,483、Y軸=-39,320

本土坑は5区南東側にあり、付近には39～42号土坑が点在する。平面形状は楕円形を呈し、規模は長軸2.21m、短軸0.97m、深さ16cmを測る。長軸方向は南北を向く。底面は平坦。北側にはピットを有する。埋土は暗褐色土と明暗褐色土に分層でき、ローム粒を含むもの的人為的堆積かは不明。

遺物の出土はない。本土坑の時期は、埋土から近世と考えられる。

39号土坑 (第107図、第50表、PL.18)

位置(座標)：X軸=36,482、Y軸=-39,323

本土坑は5区南東側にあり、付近には38・41・42号土坑が点在し、40号土坑と重複する。平面形状は長方形を呈し、規模は長軸1.8m、短軸1.28m、深さ13cmを測る。長軸方向は西北西を向く。底面は平坦。埋土は暗褐色土で、ロームブロックを多量に含むことから、人為的堆積と考えられる。土層断面の観察から、40号土坑より本土

坑が新しい。

遺物の出土はない。本土坑の時期は、埋土から近世と考えられる。

40号土坑 (第107図、第50表、PL.18)

位置(座標)：X軸=36,482、Y軸=-39,322

本土坑は5区南東側にあり、付近には38・41・42号土坑が点在し、39号土坑と重複する。平面形状は方形を呈し、規模は長軸(0.53)m、短軸1.18m、深さ14cmを測る。長軸方向は北北東を向く。底面は平坦。埋土は暗褐色土で、ローム粒を少量含むもの的人為的堆積かは不明。土層断面の観察から、39号土坑より本土坑が古い。

遺物には未掲載遺物の土師器小片が僅かに出土しているが、本土坑の時期は、埋土から近世と考えられる。

41号土坑 (第107図、第50表、PL.18)

位置(座標)：X軸=36,480、Y軸=-39,324

本土坑は5区南東側にあり、付近には38～40・42号土坑が点在する。平面形状は長方形を呈し、規模は長軸1.77m、短軸1.05m、深さ42cmを測る。長軸方向は北北東を向く。底面は平坦。埋土は暗褐色土で、ローム小ブロックを少量含むことから、人為的堆積と考えられる。

遺物には未掲載遺物の土師器小片が出土しているが、本土坑の時期は、埋土から近世と考えられる。

42号土坑 (第107図、第50表、PL.18)

位置(座標)：X軸=36,486、Y軸=-39,324

本土坑は5区南東側にあり、付近には38～41号土坑が点在する。平面形状は長方形を呈し、規模は長軸1.1m、短軸0.67m、深さ12cmを測る。長軸方向は北北東を向く。底面は凹凸ぎみ。埋土は暗褐色土で、汚れたロームブロックを含むことから、人為的堆積と考えられる。

遺物の出土はない。本土坑の時期は、埋土から近世と考えられる。

43号土坑 (第107図、第50表、PL.18)

位置(座標)：X軸=36,459、Y軸=-39,357

本土坑は4区南側で、13号溝の南側にある。平面形状は円形を呈し、規模は径1.35m、深さ43cmを測る。底面はほぼ平坦。埋土は明暗褐色土と暗褐色土を主に、3層に分層できる。埋土中にロームブロックを多量に混在させることから、人為的堆積と考えられる。

遺物の出土はない。本土坑の時期は、埋土から近世と考えられる。

44号土坑（第108図、第50表、PL.18）

位置(座標)：X軸=36,516、Y軸=-39,293

本土坑は5区東側にあり、46号土坑に隣接し、45号土坑と重複する。平面形状は方形を呈し、規模は長軸1.58m、短軸(1.25)m、深さ26cmを測る。長軸方向は北北東を向く。底面はほぼ平坦。埋土は明褐色土で、ローム粒を多量に、ローム小ブロックを少量混在させることから、人為的堆積と考えられる。土層断面の観察から、45号土坑より本土坑が新しい。

遺物の出土はない。本土坑の時期は近代か。

45号土坑（第108図、第50表、PL.18）

位置(座標)：X軸=36,517、Y軸=-39,294

本土坑は5区東側にあり、44号土坑と重複する。平面形状は長方形を呈し、規模は長軸2.5m、短軸1.52m、深さ42cmを測る。長軸方向は北西を向く。底面は平坦。埋土は明褐色土を主に、3層に分層できる。埋土中にロームブロックを多量に混在させることから、人為的堆積と考えられる。土層断面の観察から、44号土坑より本土坑が古い。

遺物には未掲載遺物として土師・須恵器の小片、近現代の陶磁器6片、土器類2片、瓦1片が出土し、他に不明な鉄製品片1点が出土している。

本土坑の時期は近代か。

46号土坑（第108図、第50表、PL.18）

位置(座標)：X軸=36,515、Y軸=-39,292

本土坑は5区東側にあり、44号土坑に隣接する。平面形状は円形を呈し、規模は径0.98m、深さ13cmを測る。底面は概ね平坦。埋土は暗褐色土で、ロームブロックを混在することから、人為的堆積と考えられる。

遺物の出土はない。本土坑の時期は、埋土から近世と考えられる。

47号土坑（第107図、第50表、PL.18）

位置(座標)：X軸=36,525、Y軸=-39,295

本土坑は5区東側にあり、付近には33・48号土坑が点在する。平面形状は長方形を呈し、規模は長軸1.27m、短軸0.9m、深さ12cmを測る。長軸方向は西北西を向く。底面は平坦。埋土は明暗褐色土で、ローム粒を多量に含み、炭化物を混入。人為的堆積と考えられる。

遺物の出土はない。本土坑の時期は、埋土から近世と考えられる。

48号土坑（第108図、第50表、PL.19）

位置(座標)：X軸=36,525、Y軸=-39,290

本土坑は5区東側にあり、付近には33・47号土坑が点在する。平面形状は円形を呈し、規模は径1.26m、深さ51cmを測る。底面はほぼ平坦。埋土は明暗褐色土を主に、3層に分層できる。埋土中にロームブロックを混在させることから、人為的堆積と考えられる。

出土遺物には、未掲載遺物として土師器の小片、近世の国産磁器1片、近現代の陶磁器11片、土器類4片、瓦2片、十能瓦1片、ガラス1片がある。本土坑の時期は、近世以降と考えられる。

49号土坑（第108図、第50表、PL.19）

位置(座標)：X軸=36,511、Y軸=-39,346

本土坑は5区中央部にあり、付近には50～52号土坑が点在し、8号溝と重複する。平面形状は長方形を呈し、規模は長軸1.26m、短軸1.0m、深さ12cmを測る。長軸方向は北北東を向く。底面は平坦。埋土は明暗褐色土で、ローム粒を多量に含むことから、人為的堆積と考えられる。土層断面の観察から、8号溝より本土坑が新しい。

遺物の出土はない。本土坑の時期は、遺構の重複から近世以降と考えられる。

50号土坑（第109図、第50表、PL.19）

位置(座標)：X軸=36,510、Y軸=-39,342

本土坑は5区中央部にあり、付近には49・51・52号土坑が点在し、8号溝と重複する。平面形状は楕円形を呈し、規模は長軸1.5m、短軸1.2m、深さ25cmを測る。長軸方向は北北西を向く。底面は平坦。埋土は暗褐色土で、ロームブロックを少量含むことから、人為的堆積と考えられる。土層断面の観察から、8号溝より本土坑が新しい。

遺物の出土はない。本土坑の時期は、遺構の重複から近世以降と考えられる。

51号土坑（第109図、第50表、PL.19）

位置(座標)：X軸=36,511、Y軸=-39,339

本土坑は5区中央部にあり、付近には49・50・52号土坑が点在し、8号溝と重複する。平面形状は楕円形を呈し、規模は長軸1.65m、短軸1.3m、深さ40cmを測る。長軸は東西方向を向く。底面は掘り鉢ぎみ。埋土は暗褐色土で、ローム大ブロックを多量に混在することから、人為的堆積と考えられる。土層断面の観察から、8号溝

より本土坑が新しい。

遺物の出土はない。本土坑の時期は、遺構の重複から近世以降と考えられる。

52号土坑 (第109図、第50表、PL.19)

位置(座標)：X軸=36,506、Y軸=-39,346

本土坑は4区北側にあり、付近には49・50・53・59号土坑が点在し、9号溝と重複する。平面形状は円形を呈し、規模は径1.25m、深さ12cmを測る。底面は平坦。埋土は暗褐色土で、混入物少ない。人為的堆積かは不明。土層断面の観察から、9号溝より本土坑が新しい。

遺物の出土はない。本土坑の時期は、不明。

53号土坑 (第109図、第50表、PL.19)

位置(座標)：X軸=36,504、Y軸=-39,342

本土坑は4区北側にあり、58・59号土坑と近接し、9号溝と重複する。平面形状は円形を呈し、規模は径0.95m、深さ38cmを測る。底面は平坦。埋土は明褐色砂礫土と暗褐色土の2層に分層できる。人為的堆積と考えられる。土層断面の観察から、9号溝より本土坑が新しい。

出土遺物には、未掲載遺物に近現代の陶磁器6片、ガラス1片がある。本土坑の時期は近代か。

54号土坑 (第110図、第50表、PL.19)

位置(座標)：X軸=36,506、Y軸=-39,337

本土坑は4区北側にあり、付近には55～57号土坑が点在する。平面形状は円形を呈し、規模は径0.65m、深さ9cmを測る。底面はほぼ平坦。埋土は暗褐色土を主に、3層に分層できる。埋土中にロームブロックを多量に混在させることから、人為的堆積と考えられる。

遺物の出土はない。本土坑の時期は不明。

55号土坑 (第110図、第50表、PL.19)

位置(座標)：X軸=36,504、Y軸=-39,337

本土坑は4区北側にあり、付近には54・56・57号土坑が点在する。平面形状は円形を呈し、規模は径0.76m、深さ13cmを測る。底面はほぼ平坦で、焼土化している。埋土は暗褐色土で、炭化物を多く混入する。人為的堆積かは不明。遺物の出土はない。本土坑の時期は、埋土から近代か。

56号土坑 (第110図、第50表、PL.19)

位置(座標)：X軸=36,503、Y軸=-39,337

本土坑は4区北側にあり、付近には54・55・57号土坑が点在する。平面形状は円形を呈し、規模は径0.63m、

深さ22cmを測る。底面は平坦。埋土は暗褐色土で、炭化物と小礫を混入する。人為的堆積の可能性あり。

出土遺物には、未掲載遺物に近現代の陶磁器17片がある。さらに、底面から鉄製の桶の箍が出土している。本土坑の時期は近代か。

57号土坑 (第110図、第50表、PL.19)

位置(座標)：X軸=36,504、Y軸=-39,339

本土坑は4区北側にあり、付近には54～56号土坑が点在する。平面形状は円形を呈し、規模は径0.55m、深さ10cmを測る。底面はほぼ平坦。埋土は暗褐色土で、ローム粒と炭化物を多く混入する。人為的堆積の可能性あり。

遺物の出土はない。本土坑の時期は、埋土から近代か。

58号土坑 (第109図、第50表、PL.19)

位置(座標)：X軸=36,503、Y軸=-39,342

本土坑は4区北側にあり、53号土坑と近接する。平面形状は円形を呈し、規模は径0.68m、深さ8cmを測る。底面は平坦。埋土は暗褐色土で、ローム粒と炭化物を多く混入する。人為的堆積の可能性あり。

遺物の出土はない。本土坑の時期は、埋土から近代か。

59号土坑 (第109図、第50表、PL.19)

位置(座標)：X軸=36,504、Y軸=-39,343

本土坑は4区北側にあり、53号土坑と近接する。平面形状は楕円形を呈し、規模は長軸0.93m、短軸0.68m、深さ17cmを測る。長軸方向は北北東を向く。底面はほぼ平坦。埋土は暗褐色土で、ロームブロックを少量混入することから、人為的堆積と考えられる。

遺物の出土はない。本土坑の時期は、埋土から近世以降と考えられる。

60号土坑 3号井戸に変更。

61号土坑 (第110図、第50表、PL.19)

位置(座標)：X軸=36,517、Y軸=-39,361

本土坑は5区西側にあり、付近には3号井戸や62・63号土坑が点在する。平面形状は円形を呈し、規模は径0.85m、深さ8cmを測る。底面は平坦。埋土は暗褐色土で、ローム粒・ロームブロックを少量含むことから、人為的堆積と考えられる。

遺物の出土はない。本土坑の時期は、埋土から近世と考えられる。

62号土坑 (第110図、第50表、PL.19)

位置(座標)：X軸=36,513、Y軸=-39,364

本土坑は5区西側にあり、付近には3号井戸や61・63号土坑が点在する。平面形状は楕円形を呈し、規模は長軸1.0m、短軸0.85m、深さ18cmを測る。長軸方向は北北東を向く。底面は平坦。埋土は暗黒褐色土と明褐色土の2層に分層できる。埋土中にロームブロックを多量に混在させることから、人為的堆積と考えられる。

遺物の出土はない。本土坑の時期は、埋土から近世と考えられる。

63号土坑（第110図、第50表、PL.19）

位置(座標)：X軸=36,512、Y軸=-39,366

本土坑は5区西側にあり、付近には61・62・64号土坑が点在する。平面形状は方形を呈し、規模は長軸1.12m、短軸1.0m、深さ21cmを測る。長軸は東西方向を向く。底面はほぼ平坦。埋土は暗褐色土で、ローム小ブロックを少量混入することから、人為的堆積と考えられる。

遺物の出土はない。本土坑の時期は、埋土から近世と考えられる。

64号土坑（第110図、第50表、PL.19）

位置(座標)：X軸=36,513、Y軸=-39,372

本土坑は5区西側にあり、付近には61～63号土坑が点在する。平面形状は円形を呈し、規模は径0.81m、深さ52cmを測る。底面は平坦。埋土は暗褐色土を主に、4層に分層できる。埋土中にロームブロックを多量に混在させることから、人為的堆積と考えられる。

遺物の出土はない。本土坑の時期は、埋土から近世と考えられる。

65号土坑（第110図、第50表、PL.20）

位置(座標)：X軸=36,502、Y軸=-39,386

本土坑は3区を東西に分断する12号溝の西側にあり、付近には66～69号土坑が点在し、16号溝と重複する。平面形状は円形を呈し、規模は径1.1m、深さ47cmを測る。底面は平坦。埋土は暗褐色土で、ローム小ブロックを混入することから、人為的堆積と考えられる。土層断面の観察から、16号溝より本土坑が新しい。

遺物には未掲載遺物に土師・須恵器の小片が僅かに出土しているが、本土坑の時期は埋土から近世と考えられる。

66号土坑（第111図、第50表、PL.20）

位置(座標)：X軸=36,502、Y軸=-39,383

本土坑は3区を東西に分断する12号溝の西側にあり、

付近には65・67・68号土坑が点在し、13・16号溝と重複する。平面形状は円形を呈し、規模は径0.86m、深さ19cmを測る。底面は平坦。埋土は暗褐色土で、ローム粒・ブロックを少量混入することから、人為的堆積と考えられる。重複関係は不明。

遺物には未掲載遺物に土師器片・小片が僅かに出土しているが、本土坑の時期は埋土から近世と考えられる。

67号土坑（第111図、第50表、PL.20）

位置(座標)：X軸=36,501、Y軸=-39,387

本土坑は3区を東西に分断する12号溝の西側にあり、付近には65・66・68・69号土坑が点在する。平面形状は円形を呈し、規模は径1.02m、深さ17cmを測る。底面はほぼ平坦。埋土は暗褐色土で、ローム粒・ブロックを少量混入することから、人為的堆積と考えられる。

遺物の出土はない。本土坑の時期は、埋土から近世と考えられる。

68号土坑（第111図、第50表、PL.20）

位置(座標)：X軸=36,500、Y軸=-39,388

本土坑は3区を東西に分断する12号溝の西側にあり、付近には65・67・69号土坑が点在する。現代の畑に一部を壊されるが、平面形状は円形を呈し、規模は径0.83m、深さ11cmを測る。底面はほぼ平坦。埋土は暗褐色土で、ローム粒・ブロックを少量混入することから、人為的堆積と考えられる。

遺物の出土はない。本土坑の時期は、埋土から近世と考えられる。

69号土坑（第111図、第50表、PL.20）

位置(座標)：X軸=36,500、Y軸=-39,390

本土坑は3区を東西に分断する12号溝の西側にあり、付近には67・68・71号土坑が点在する。現代の畑に一部を壊されるが、平面形状は円形を呈し、規模は径0.85m、深さ22cmを測る。底面はほぼ平坦。埋土は暗褐色土で、ローム小ブロックを少量混入することから、人為的堆積と考えられる。

遺物の出土はない。本土坑の時期は、埋土から近世と考えられる。

70号土坑（第111図、第50表、PL.20）

位置(座標)：X軸=36,495、Y軸=-39,396

本土坑は3区を東西に分断する12号溝の西側にあり、付近には71～73・105号土坑が点在する。平面形状は長

第3章 検出された遺構と遺物

方形を呈し、規模は長軸1.45m、短軸0.96m、深さ12cmを測る。長軸方向は西北西を向く。底面は平坦。埋土は暗褐色土で、ローム粒・ブロックを少量混入することから、人為的堆積と考えられる。

遺物には未掲載遺物に須恵器の小片が僅かに出土しているが、本土坑の時期は埋土から近世と考えられる。

71号土坑（第111図、第50表、PL.20）

位置(座標)：X軸=36,499、Y軸=-39,394

本土坑は3区を東西に分断する12号溝の西側にあり、付近には69・70・72号土坑が点在する。現代の畑に一部を壊されるが、平面形状は円形を呈し、規模は径1.0m、深さ13cmを測る。底面は平坦。埋土は暗褐色土で、ローム粒を多く混入することから、人為的堆積の可能性あり。

遺物には未掲載遺物に土師器片と須恵器小片が少量出土しているが、本土坑の時期は埋土から近世と考えられる。

72号土坑（第111図、第50表、PL.20）

位置(座標)：X軸=36,494、Y軸=-39,394

本土坑は3区を東西に分断する12号溝の西側にあり、付近には70・73・84号土坑が点在する。現代の畑に一部を壊されるが、平面形状は円形を呈し、規模は径0.67m、深さ6cmを測る。底面は平坦。埋土は暗褐色土で、ロームブロックを混入することから、人為的堆積と考えられる。

遺物には未掲載遺物に土師器片が僅かに出土しているが、本土坑の時期は埋土から近世と考えられる。

73号土坑（第111図、第50表、PL.20）

位置(座標)：X軸=36,494、Y軸=-39,392

本土坑は3区を東西に分断する12号溝の西側にあり、付近には70・72・84号土坑が点在する。現代の畑に一部を壊されるが、平面形状は円形を呈し、規模は径0.80m、深さ24cmを測る。底面はほぼ平坦。埋土は暗褐色土で、ローム小ブロックを少量混入することから、人為的堆積と考えられる。

遺物の出土はない。本土坑の時期は、近世と考えられる。

74号土坑（第111図、第50表、PL.20）

位置(座標)：X軸=36,489、Y軸=-39,390

本土坑は3区を東西に分断する12号溝の西側にあり、付近には82～84号土坑が点在する。現代の畑に一部を

壊されるが、平面形状は円形を呈し、規模は径1.02m、深さ25cmを測る。底面はほぼ平坦。埋土は暗褐色土で、ローム小ブロックを少量混入することから、人為的堆積と考えられる。

出土遺物には土師器片と須恵器小片、近現代の土器類1片があり、本土坑の時期は近代か。

75号土坑（第112図、第50表、PL.20）

位置(座標)：X軸=36,493、Y軸=-39,382

本土坑は3区を東西に分断する12号溝の西側にあり、付近には76・77・79号土坑が点在する。平面形状は楕円形を呈し、規模は長軸0.9m、短軸0.63m、深さ13cmを測る。長軸方向は西北西を向く。底面は平坦。埋土は暗褐色土で、ロームブロックを混在し、炭化物が多い。人為的堆積と考えられる。

遺物の出土はない。本土坑の時期は、埋土から近世以降と考えられる。

76号土坑（第112図、第50表、PL.20）

位置(座標)：X軸=36,492、Y軸=-39,382

本土坑は3区を東西に分断する12号溝の西側にあり、付近には75・77～79号土坑が点在する。平面形状は方形を呈し、規模は長軸0.6m、短軸0.55m、深さ7cmを測る。長軸方向は西北西を向く。底面はほぼ平坦。埋土は暗褐色土で、ローム粒を含み、炭化物が多い。人為的堆積かは不明。

遺物の出土はない。本土坑の時期は、埋土から近世以降と考えられる。

77号土坑（第112図、第50表、PL.20）

位置(座標)：X軸=36,491、Y軸=-39,384

本土坑は3区を東西に分断する12号溝の西側にあり、付近には76・78～81号土坑が点在する。平面形状は方形を呈し、規模は長軸0.55m、短軸0.5m、深さ7cmを測る。長軸方向は北西を向く。底面はほぼ平坦。埋土は暗褐色土で、ローム粒を含み、炭化物が多い。為的堆積かは不明。

遺物には未掲載遺物に土師器片が僅かに出土しているが、本土坑の時期は埋土から近世以降と考えられる。

78号土坑（第112図、第50表、PL.20）

位置(座標)：X軸=36,490、Y軸=-39,383

本土坑は3区を東西に分断する12号溝の西側にあり、付近には76・77・80・81号土坑が点在する。平面形状は

方形を呈し、規模は長軸0.55m、短軸0.55m、深さ7cmを測る。底面はやや掘り鉢状。埋土は暗褐色土で、ローム粒を含み、炭化物が多い。人為的堆積かは不明。

遺物の出土はない。本土坑の時期は、埋土から近世以降と考えられる。

79号土坑（第112図、第50表、PL.20）

位置(座標)：X軸=36,494、Y軸=-39,383

本土坑は3区を東西に分断する12号溝の西側にあり、付近には75～77号土坑が点在する。平面形状は方形を呈し、規模は長軸1.15m、短軸1.03m、深さ48cmを測る。長軸方向は北北東を向く。底面は平坦。埋土は暗黄褐色土で、ローム小ブロックを多量に混在することから、人為的堆積と考えられる。

出土遺物には、未掲載遺物として近世の国産施釉陶器1片、近現代の十能瓦1片があり、本土坑の時期は近世以降と考えられる。

80号土坑（第112図、第50表、PL.21）

位置(座標)：X軸=36,490、Y軸=-39,386

本土坑は3区を東西に分断する12号溝の西側にあり、付近には77・78・82・83・86号土坑が点在し、81号土坑と重複する。平面形状は円形を呈し、規模は径0.87m、深さ16cmを測る。底面は平坦。埋土は暗褐色土で、ローム小ブロックを少量混入することから、人為的堆積と考えられる。土層断面の観察から、81号土坑より本土坑が新しい。

遺物の出土はない。本土坑の時期は、重複から近世と考えられる。

81号土坑（第112図、第50表、PL.21）

位置(座標)：X軸=36,490、Y軸=-39,385

本土坑は3区を東西に分断する12号溝の西側にあり、付近には77・78・82・83・86号土坑が点在し、80号土坑と重複する。平面形状は楕円形を呈し、規模は長軸(0.87)m、短軸0.78m、深さ23cmを測る。長軸方向は北西を向く。底面はほぼ平坦。埋土は明暗褐色土で、ローム粒・小ブロックを少量混入することから、人為的堆積と考えられる。土層断面の観察から、80号土坑より本土坑が古い。

遺物には未掲載遺物に土師器片が僅かに出土しているが、本土坑の時期は埋土から近世と考えられる。

82号土坑（第112図、第50表、PL.21）

位置(座標)：X軸=36,498、Y軸=-39,387

本土坑は3区を東西に分断する12号溝の西側にあり、付近には74・80・81号土坑が点在し、83・86号土坑と隣接する。平面形状は方形を呈し、規模は長軸0.7m、短軸0.62m、深さ15cmを測る。長軸方向は北北東を向く。底面はやや凹凸ぎみ。埋土は暗褐色土で、ローム小ブロックを混在することから、人為的堆積と考えられる。

遺物には未掲載遺物にガラス等を出土させていることから、本土坑の時期は、近代以降と考えられる。

83号土坑（第112図、第50表、PL.21）

位置(座標)：X軸=36,497、Y軸=-39,387

本土坑は3区を東西に分断する12号溝の西側にあり、付近には74・80・81号土坑が点在し、82・86号土坑と隣接する。平面形状は楕円形を呈し、規模は長軸0.81m、短軸0.65m、深さ6cmを測る。長軸方向は北西を向く。底面はほぼ平坦。埋土は暗褐色土で、ロームブロックを少量混入することから、人為的堆積と考えられる。

遺物の出土はない。本土坑の時期は、埋土から近世以降と考えられる。

84号土坑（第112図、第50表、PL.21）

位置(座標)：X軸=36,492、Y軸=-39,394

本土坑は3区を東西に分断する12号溝の西側にあり、付近には72・73号土坑が点在する。現代の畑に一部を壊されるが、平面形状は円形を呈し、規模は径1.0m、深さ17cmを測る。底面は平坦。埋土は暗褐色土で、ローム小ブロックを少量混入することから、人為的堆積と考えられる。

遺物の出土はない。本土坑の時期は、埋土から近世と考えられる。

86号土坑（第112図、第50表、PL.21）

位置(座標)：X軸=36,497、Y軸=-39,386

本土坑は3区を東西に分断する12号溝の西側にあり、付近には74・80・81号土坑が点在し、82・83号土坑と隣接する。平面形状は円形を呈し、規模は径1.17m、深さ24cmを測る。底面はほぼ平坦。埋土は暗褐色土で、ローム小ブロックを混入することから、人為的堆積と考えられる。

遺物には未掲載遺物に土師・須恵器小片が出土し、他に不明な鉄製品片1点が出土している。本土坑の時期は、

埋土から近世と考えられる。

87号土坑（第113図、第50表、PL.21）

位置(座標)：X軸=36,484、Y軸=-39,391

本土坑は3区を東西に分断する12号溝の西側にあり、付近には88～92号土坑が点在する。平面形状は円形を呈し、規模は径0.93m、深さ8cmを測る。底面は平坦。埋土は暗褐色土で、ローム小ブロックを少量混入することから、人為的堆積と考えられる。

遺物には未掲載遺物に土師・須恵器の小片、中世の国産焼物片が出土しており、本土坑の時期は近世以降と考えられる。

88号土坑（第113図、第50表、PL.21）

位置(座標)：X軸=36,483、Y軸=-39,394

本土坑は3区を東西に分断する12号溝の西側にあり、付近には87・89～92号土坑が点在する。平面形状は円形を呈し、規模は径1.05m、深さ22cmを測る。底面は西側に段を有するが平坦。埋土は暗褐色土で、ローム小ブロックを少量混入することから、人為的堆積と考えられる。

遺物には未掲載遺物に土師器片と須恵器小片が僅かに出土しているが、本土坑の時期は埋土から近世と考えられる。

89号土坑（第113図、第50表、PL.21）

位置(座標)：X軸=36,486、Y軸=-39,394

本土坑は3区を東西に分断する12号溝の西側にあり、付近には87・88・90～92号土坑が点在する。平面形状は方形を呈し、規模は長軸0.9m、短軸0.9m、深さ13cmを測る。長軸方向は北西を向く。底面は平坦。埋土は暗褐色土で、ローム小ブロックを少量混入することから、人為的堆積と考えられる。

遺物の出土はない。本土坑の時期は、埋土から近世と考えられる。

90号土坑（第113図、第50表、PL.21）

位置(座標)：X軸=36,485、Y軸=-39,393

本土坑は3区を東西に分断する12号溝の西側にあり、付近には87・88号土坑が点在し、89・91・92号土坑と近接する。平面形状は楕円形を呈し、規模は長軸0.85m、短軸0.65m、深さ12cmを測る。長軸方向は北西を向く。底面はほぼ平坦。埋土は暗褐色土で、ローム小ブロックを少量混入することから、人為的堆積と考えられる。

遺物には未掲載遺物に土師器片と須恵器小片が少量出土しているが、本土坑の時期は埋土から近世と考えられる。

91号土坑（第113図、第50表、PL.21）

位置(座標)：X軸=36,484、Y軸=-39,398

本土坑は3区を東西に分断する12号溝の西側にあり、付近には87～89号土坑が点在し、90号土坑と近接、92号土坑と重複する。平面形状は方形を呈し、規模は長軸0.65m、短軸(0.52)m、深さ5cmを測る。長軸方向は北東を向く。底面はほぼ平坦。埋土は暗褐色土で、ロームブロックを少量混入することから、人為的堆積と考えられる。土層断面の観察から、92号土坑より本土坑が新しい。

遺物には未掲載遺物に土師器片が僅かに出土しているが、本土坑の時期は埋土から近世と考えられる。

92号土坑（第113図、第50表、PL.21）

位置(座標)：X軸=36,484、Y軸=-39,398

本土坑は3区を東西に分断する12号溝の西側にあり、付近には87～89号土坑が点在し、90号土坑と近接、91号土坑と重複する。平面形状は円形を呈し、規模は径(0.65)m、深さ8cmを測る。底面は西寄りが凹む。埋土は暗褐色土で、ロームブロックを少量混入することから、人為的堆積と考えられる。土層断面の観察から、91号土坑より本土坑が古い。

遺物の出土はない。本土坑の時期は、埋土から近世と考えられる。

93号土坑（第113図、第50表、PL.21）

位置(座標)：X軸=36,480、Y軸=-39,395

本土坑は3区を東西に分断する12号溝の西側にあり、付近には西に6号住居、東に94号土坑がある。平面形状は円形を呈し、規模は径0.95m、深さ26cmを測る。底面はほぼ平坦。埋土は暗褐色土で、ローム小ブロックを多量に含むことから、人為的堆積と考えられる。

遺物には未掲載遺物に土師器片と須恵器小片が僅かに出土しているが、本土坑の時期は埋土から近世と考えられる。

94号土坑（第113図、第50表、PL.21）

位置(座標)：X軸=36,479、Y軸=-39,394

本土坑は3区を東西に分断する12号溝の西側にあり、付近には93・95～98・127号土坑が点在する。平面形状は楕円形を呈し、規模は長軸0.68m、短軸0.52m、

深さ8cmを測る。長軸は南北方向を向く。底面はほぼ平坦。埋土は暗褐色土で、ロームブロックを少量混入することから、人為的堆積と考えられる。

遺物の出土はない。本土坑の時期は、埋土から近世と考えられる。

95号土坑（第113図、第50表、PL.21）

位置(座標)：X軸=36,479、Y軸=-39,393

本土坑は3区を東西に分断する12号溝の西側にあり、付近には93・94・97・98・127号土坑が点在し、96号土坑と重複する。平面形状は円形を呈し、規模は径0.9m、深さ12cmを測る。底面はほぼ平坦。埋土は暗褐色土で、ローム小ブロックを含み、焼土粒を多く含む。人為的堆積と考えられる。土層断面の観察から、96号土坑より本土坑が新しい。

遺物には未掲載遺物ではあるが土師器片が多く出土しており、本土坑の時期は古代と考えられる。

96号土坑（第113図、第50表、PL.21）

位置(座標)：X軸=36,478、Y軸=-39,393

本土坑は3区を東西に分断する12号溝の西側にあり、付近には93・94・97・98・127号土坑が点在し、95号土坑と重複する。平面形状は不整形で、複数の土坑が重複している可能性もある。規模は長軸2.2m、短軸1.0m、深さ14cmを測る。長軸方向は東北東を向く。底面は3カ所に分かれ、それぞれがほぼ平坦。埋土は暗褐色土で、ローム小ブロックを少量含み、焼土粒を僅かに混入する。人為的堆積と考えられる土層断面の観察から、95号土坑より本土坑が古い。

遺物には未掲載遺物ではあるが土師器片が出土しており、本土坑の時期は古代と考えられる。

97号土坑（第113図、第50表、PL.21）

位置(座標)：X軸=36,477、Y軸=-39,395

本土坑は3区を東西に分断する12号溝の西側にあり、付近には93～96号土坑が点在し、98・127号土坑と重複する。平面形状は円形を呈し、規模は径0.6m、深さ12cmを測る。底面はやや掘り鉢状。埋土は明暗褐色土で、ローム粒・ブロックを多く含むことから、人為的堆積と考えられる。土層断面の観察から、98・127号土坑より本土坑が新しい。

遺物には未掲載遺物に土師器片と須恵器小片が僅かに出土しているが、本土坑の時期は重複から近世と考えら

れる。

98号土坑（第113図、第50表、PL.21）

位置(座標)：X軸=36,477、Y軸=-39,395

本土坑は3区を東西に分断する12号溝の西側にあり、付近には93～96号土坑が点在し、97・127号土坑と重複する。平面形状は円形を呈し、規模は径0.78m、深さ15cmを測る。底面はやや掘り鉢状。埋土は暗褐色土で、ローム小ブロックを少量含むことから、人為的堆積と考えられる。土層断面の観察から、97号土坑より本土坑が旧く、127号土坑より新しい。

遺物の出土はない。本土坑の時期は、埋土から近世と考えられる。

99号土坑（第114図、第50表、PL.21）

位置(座標)：X軸=36,476、Y軸=-39,397

本土坑は3区を東西に分断する12号溝の西側にあり、付近には重複する97・98・127号土坑と100号土坑が点在する。平面形状は楕円形を呈し、規模は長軸1.21m、短軸0.9m、深さ18cmを測る。長軸方向は北西を向く。底面は平坦。埋土は暗褐色土で、ローム小ブロックを僅かに混入することから、人為的堆積の可能性あり。

出土遺物は未掲載遺物に近現代の陶磁器1片があり、本土坑の時期は近代か。

100号土坑（第114図、第50表、PL.21）

位置(座標)：X軸=36,477、Y軸=-39,401

本土坑は3区を東西に分断する12号溝の西側にあり、調査区境に位置し、北側に6号住居や101号土坑がある。北側のみの調査で、平面形状は不明。調査区境の規模は長さ1.28m、深さ27cmを測る。底面は中央がやや凹む。埋土は暗褐色土で、砂質ぎみで、締まりが弱い。人為的堆積かは不明。

遺物の出土はなく、時期も不明。

101号土坑（第114図、第50表、PL.22）

位置(座標)：X軸=36,482、Y軸=-39,403

本土坑は3区を東西に分断する12号溝の西側にあり、6号住居の西側に隣接する。平面形状は円形を呈し、規模は径0.98m、深さ32cmを測る。底面は平坦。埋土は暗黄褐色土で、ロームブロックを多量に混在させることから、人為的堆積と考えられる。

遺物には未掲載遺物に土師器片が出土しているが、本土坑の時期は埋土から近世と考えられる。

102号土坑 (第114図、第50表、PL.22)

位置(座標)：X軸=36,484、Y軸=-39,401

本土坑は3区を東西に分断する12号溝の西側にあり、6号住居と重複する。平面形状は円形を呈し、規模は径0.87m、深さ19cmを測る。底面は平坦。埋土は暗黒褐色土で、ローム小ブロックを少量含むことから、人為的堆積と考えられる。遺構確認時点で、埋土の土色から6号住居より本土坑が新しいことが明確であった。

遺物の出土はない。本土坑の時期は、埋土から近世と考えられる。

103号土坑 (第114図、第50表、PL.22)

位置(座標)：X軸=36,488、Y軸=-39,400

本土坑は3区を東西に分断する12号溝の西側にあり、104号土坑に近接し、6号住居と接するように近接する。平面形状は円形を呈し、規模は径0.83m、深さ15cmを測る。底面はほぼ平坦。埋土は暗褐色土で、ローム小ブロックを僅かに含むことから、人為的堆積の可能性あり。

遺物の出土はない。本土坑の時期は、埋土から近世と考えられる。

104号土坑 (第114図、第50表、PL.22)

位置(座標)：X軸=36,488、Y軸=-39,401

本土坑は3区を東西に分断する12号溝の西側にあり、6号住居や103号土坑と近接する。平面形状は円形を呈し、規模は径0.85m、深さ12cmを測る。底面は平坦。埋土は暗褐色土で、ロームブロックを含むことから、人為的堆積と考えられる。

遺物には未掲載遺物に土師器片と須恵器小片が出土しているが、本土坑の時期は埋土から近世と考えられる。

105号土坑 (第114図、第50表、PL.22)

位置(座標)：X軸=36,492、Y軸=-39,403

本土坑は3区を東西に分断する12号溝の西側にあり、付近には106・107・126・129号土坑が点在する。平面形状は長方形を呈し、規模は長軸0.97m、短軸0.77m、深さ32cmを測る。長軸方向は西北西を向く。底面はほぼ平坦。埋土は暗褐色土で、汚れたロームブロックを僅かに混入することから、人為的堆積の可能性あり。

遺物には未掲載遺物に土師器片が僅かに出土しているが、本土坑の時期は埋土から近世と考えられる。

106号土坑 (第114図、第50表、PL.22)

位置(座標)：X軸=36,492、Y軸=-39,399

本土坑は3区を東西に分断する12号溝の西側にあり、付近には105・107・131号土坑が点在する。平面形状は長方形を呈し、規模は長軸0.95m、短軸0.67m、深さ31cmを測る。長軸方向は北北東を向く。底面はほぼ平坦。埋土は暗褐色土で、下位に汚れたロームブロックを少量混入することから、人為的堆積と考えられる。

遺物の出土はない。本土坑の時期は、埋土から近世と考えられる。

107号土坑 (第114図、第50表、PL.22)

位置(座標)：X軸=36,496、Y軸=-39,403

本土坑は3区を東西に分断する12号溝の西側にあり、付近には105・106・108・129号土坑が点在し、14号溝と重複する。また、本土坑の西側は、浅い土坑状の落ち込みとも重複する。平面形状は長方形を呈し、規模は長軸1.23m、短軸0.95m、深さ31cmを測る。長軸方向は西北西を向く。底面はほぼ平坦。埋土は暗褐色土で、混入物少なく、暗い。人為的堆積かは不明。108号土坑の埋土に近似する。土層断面の観察から、西側の落ち込みよりも旧く、14号溝より新しい。

遺物には未掲載遺物に土師器片と須恵器小片が出土し、他に不明な鉄製品片1点が出土している。本土坑の時期は、重複から近世以降と考えられる。

108号土坑 (第115図、第50表、PL.22)

位置(座標)：X軸=36,497、Y軸=-39,407

本土坑は3区西端にあり、付近には107・129号土坑が点在する。平面形状は長方形を呈し、規模は長軸1.27m、短軸1.08m、深さ31cmを測る。長軸方向は西北西を向く。底面は平坦。埋土は暗褐色土で、混入物少なく、暗い。人為的堆積かは不明。107号土坑の埋土に近似する。

遺物には未掲載遺物に土師器片と須恵器小片が出土しているが、本土坑の時期は埋土から近世以降と考えられる。

109号土坑 (第115図、第50表、PL.22)

位置(座標)：X軸=36,495、Y軸=-39,415

本土坑は3区西端の調査区境にあり、付近には110・112・132号土坑が点在する。平面形状は楕円形を呈し、規模は長軸0.95m、短軸0.8m、深さ11cmを測る。長軸方向は北東を向く。底面は平坦。埋土は暗褐色土で、ローム小ブロックを含むことから、人為的堆積と考えられる。

遺物には未掲載遺物に土師器片と須恵器小片が僅かに

出土しているが、本土坑の時期は埋土から近世以降と考えられる。

110号土坑（第115図、第50表、PL.22）

位置(座標)：X軸=36,493、Y軸=-39,415

本土坑は3区西端にあり、付近には109・112・132号土坑が点在する。平面形状は楕円形を呈し、規模は長軸0.88m、短軸0.77m、深さ15cmを測る。長軸方向は北北東を向く。底面はやや播り鉢状。埋土は暗褐色土で、ロームブロックを少量含む。混入物少なく、暗い。人為的堆積の可能性あり。107号土坑の埋土に近似する。

遺物には未掲載遺物に須恵器片が僅かに出土しているが、本土坑の時期は埋土から近世以降と考えられる。

112号土坑（第115図、第50表、PL.22）

位置(座標)：X軸=36,494、Y軸=-39,416

本土坑は3区西端の調査区境にあり、付近には109・110・113・132号土坑が点在する。調査区境のため全掘はできなかったが、平面形状は楕円形を呈し、規模は長軸(1.62)m、短軸1.57m、深さ33cmを測る。長軸は南北方向を向く。底面は平坦。埋土は暗褐色土で、ローム小ブロックを少量含むことから、人為的堆積と考えられる。

遺物には未掲載遺物に土師器小片と須恵器片が僅かに出土しているが、本土坑の時期は埋土から近世と考えられる。

113号土坑（第115図、第50表、PL.22）

位置(座標)：X軸=36,492、Y軸=-39,419

本土坑は3区西端にあり、付近には112・132号土坑が点在する。平面形状は円形を呈し、規模は径0.85m、深さ22cmを測る。底面は概ね平坦。埋土は明暗褐色土で、ローム粒を多く含み、明るい。人為的堆積の可能性あり。

遺物の出土はない。本土坑の時期は、埋土から近世と考えられる。

114号土坑（第115図、第50表、PL.22）

位置(座標)：X軸=36,488、Y軸=-39,423

本土坑は3区西端の調査区境にあり、付近には115・116号土坑が点在する。調査区境のため全掘はできなかった。平面形状は不明で、規模は壁際の長さ0.96m、深さ37cmを測る。底面は平坦。埋土は黒褐色土で、ローム粒・小ブロックを少量含むことから、人為的堆積と考えられる。また、土層断面の観察からは、1層の表土下から、3層の暗褐色土および4層のローム漸移層まで掘り込ん

でいる。

遺物には未掲載遺物に土師器片が出土しているが、本土坑の時期は埋土から近世と考えられる。

115号土坑（第115図、第50表、PL.22）

位置(座標)：X軸=36,488、Y軸=-39,422

本土坑は3区西端にあり、付近には114・116号土坑が点在する。平面形状は長方形を呈し、規模は長軸1.1m、短軸0.95m、深さ15cmを測る。長軸方向は北東を向く。底面はほぼ平坦。埋土は暗褐色土。人為的堆積かは不明。

遺物の出土はない。本土坑の時期は不明。

116号土坑（第115図、第50表、PL.22）

位置(座標)：X軸=36,489、Y軸=-39,420

本土坑は3区西端にあり、付近には114・115・117号土坑が点在する。平面形状は楕円形を呈し、規模は長軸1.05m、短軸0.83m、深さ16cmを測る。長軸方向は北西を向く。底面は平坦。埋土は暗褐色土。人為的堆積かは不明。

遺物には未掲載遺物に土師器片と須恵器小片が出土しているが、本土坑の時期は不明。

117号土坑（第116図、第50表、PL.23）

位置(座標)：X軸=36,488、Y軸=-39,416

本土坑は3区西端にあり、付近には3号住居、116・118～120号土坑が点在する。平面形状は円形を呈し、規模は径0.95m、深さ14cmを測る。底面は平坦。埋土は暗褐色土で、混入物がない。人為的堆積かは不明。

遺物には未掲載遺物に土師・須恵器片が僅かに出土しているが、本土坑の時期は埋土から近世と考えられる。

118号土坑（第116図、第50表、PL.23）

位置(座標)：X軸=36,488、Y軸=-39,415

本土坑は3区西端にあり、付近には3号住居、117・119・120号土坑が点在する。平面形状は方形を呈し、規模は長軸0.66m、短軸0.55m、深さ31cmを測る。長軸方向は西北西を向く。底面は播り鉢ぎみ。埋土は暗褐色土で、ロームブロックを含むことから、人為的堆積と考えられる。

遺物の出土はない。本土坑の時期は、埋土から近世と考えられる。

119号土坑（第116図、第50表、PL.23）

位置(座標)：X軸=36,486、Y軸=-39,415

本土坑は3区西端にあり、付近には117・118・120・

122号土坑が点在し、3号住居と僅かに重複する。平面形状は円形を呈し、規模は径0.85m、深さ15cmを測る。底面は平坦。埋土は暗褐色土で、ロームブロックを少量含むことから、人為的堆積と考えられる。遺構確認時点で、埋土の土色が3号住居より明るく、本土坑が新しいことが明確であった。

遺物の出土はない。本土坑の時期は、埋土から近世と考えられる。

120号土坑 (第116図、第50表、PL.23)

位置(座標)：X軸=36,490、Y軸=-39,415

本土坑は3区西端にあり、付近には3号住居、117～119号土坑が点在する。平面形状は方形を呈し、規模は長軸1.52m、短軸1.42m、深さ18cmを測る。長軸は東西方向を向く。底面は概ね平坦。埋土は暗褐色土で、混入物がほとんどない。人為的堆積かは不明。

遺物には未掲載遺物に土師器片と須恵器小片が出土しているが、本土坑の時期は埋土から近世と考えられる。

122号土坑 (第116図、第50表、PL.23)

位置(座標)：X軸=36,484、Y軸=-39,416

本土坑は3区西端の調査区境にあり、付近には3号住居、117～119号土坑が点在する。調査区境のため全掘はできなかった。平面形状は不明で、規模は壁際の長さ1.2m、深さ45cmを測る。底面は平坦。埋土は暗褐色土で、砂質ぎみで、締まりがやや弱い。人為的堆積かは不明。また、土層断面の観察からは、1層の表土下から、3層の暗褐色土および4層のローム漸移層をも掘り込んでいる。

遺物の出土はない。本土坑の時期は、埋土から近世以降と考えられる。

123号土坑 (第116図、第50表、PL.23)

位置(座標)：X軸=36,483、Y軸=-39,411

本土坑は3区西端にあり、付近には3号住居、124・130号土坑が重複して点在する。平面形状は円形を呈し、規模は径1.0m、深さ38cmを測る。底面はやや掘り鉢ぎみ。埋土は暗褐色土で、混入物がほとんどない。人為的堆積かは不明。

遺物には未掲載遺物に土師器片と須恵器小片が出土しているが、本土坑の時期は埋土から近世と考えられる。

124号土坑 (第116図、第50表、PL.23)

位置(座標)：X軸=36,486、Y軸=-39,409

本土坑は3区西端にあり、3号住居の東側に近接し、付近には123・125・128号土坑が点在し、130号土坑と重複する。平面形状は方形を呈し、規模は一辺が0.92m、深さ17cmを測るが、長軸は不明。底面は平坦。埋土は暗褐色土で、混入物ほとんどなく、暗い。人為的堆積かは不明。土層断面の観察から、130号土坑より本土坑が新しい。

遺物の出土はない。本土坑の時期は、重複から近世と考えられる。

125号土坑 (第116図、第50表、PL.23)

位置(座標)：X軸=36,486、Y軸=-39,405

本土坑は3区西端にあり、付近には104・126・128号土坑が点在する。平面形状は楕円形を呈し、規模は長軸1.63m、短軸1.41m、深さ38cmを測る。長軸方向は北西を向く。底面はほぼ平坦。埋土は灰黄褐色土と暗褐色土の2層に分層できる。埋土中にロームブロックを多量に混在させることから、人為的堆積と考えられる。

遺物には未掲載遺物に土師器片が出土しているが、本土坑の時期は埋土から近世と考えられる。

126号土坑 (第117図、第50表、PL.23)

位置(座標)：X軸=36,490、Y軸=-39,406

本土坑は3区西端にあり、付近には105・125・128・129号土坑が点在する。平面形状は大型の不整な方形を呈し、規模は長軸4.22m、短軸2.25mを測るもの、深さは8cmと浅い。長軸は東西方向を向く。底面はやや凹凸をもつ。埋土は暗褐色土で、混入物少なく、締まりが弱い。人為的堆積かは不明。

遺物には未掲載遺物に土師器片と須恵器小片が僅かに出土しているが、本土坑の時期は埋土から近世と考えられる。

127号土坑 (第113図、第50表、PL.21・23)

位置(座標)：X軸=36,477、Y軸=-39,395

本土坑は3区を東西に分断する12号溝の西側にあり、付近には93～96号土坑が点在し、97・98号土坑と重複する。平面形状は円形を呈し、規模は径0.97m、深さ25cmを測る。底面はほぼ平坦。埋土は暗褐色土で、98号土坑より暗く、焼土粒を僅かに混入する。人為的堆積かは不明。土層断面の観察から、97・98号土坑より本土坑が最も古い。

遺物の出土はない。本土坑の時期は、重複および埋土

から古代と考えられる。

128号土坑 (第117図、第50表、PL.23)

位置(座標)：X軸=36,489、Y軸=-39,408

本土坑は3区西端にあり、付近には3号住居、126号土坑や重複する124・130号土坑が点在し、14号溝と重複する。平面形状は楕円形を呈し、規模は長軸(1.91)m、短軸0.67m、深さ40cmを測る。長軸は東西方向を向く。底面は平坦。埋土は暗褐色土で、混入物少なく、やや粘質。人為的堆積かは不明。土層断面の観察から、14号溝より本土坑が古い。

遺物の出土はない。本土坑の時期は不明。

129号土坑 (第117図、第50表、PL.23)

位置(座標)：X軸=36,493、Y軸=-39,404

本土坑は3区西端にあり、付近には105・107・108・126・128号土坑が点在し、14号溝と重複する。平面形状は大型の方形を呈し、規模は長軸2.27m、短軸2.0m、深さ17cmを測る。長軸方向は北東を向く。底面は平坦で、堅く締まっている。カマド等の施設はなく、住居とは異なる。埋土は暗褐色土で、混入物少なく、やや粘質。人為的堆積かは不明。土層断面の観察から、14号溝より本土坑が古い。

遺物には未掲載遺物ではあるが土師器片・小片と須恵器片が少量出土しており、本土坑の時期は古代と考えられる。

130号土坑 (第116図、第50表、PL.23)

位置(座標)：X軸=36,486、Y軸=-39,409

本土坑は3区西端にあり、3号住居の東側に近接し、付近には123・125・128号土坑が点在し、124号土坑と重複する。平面形状は方形を呈し、規模は長軸1.55m、短軸1.09m、深さ23cmを測る。長軸方向は西北西を向く。底面は平坦。埋土は暗褐色土で、ロームブロックを少量含むことから、人為的堆積と考えられる。土層断面の観察から、124号土坑より本土坑が古い。

遺物には未掲載遺物に土師器片と須恵器小片が僅かに出土しているが、本土坑の時期は埋土から近世と考えられる。

131号土坑 (第117図、第50表、PL.23)

位置(座標)：X軸=36,489、Y軸=-39,400

本土坑は3区を東西に分断する12号溝の西側にあり、6号住居の北側に隣接し、付近には103～105号土坑が

点在する。平面形状は長方形を呈し、規模は長軸2.08m、短軸0.83m、深さ20cmを測る。長軸方向は北北東を向く。底面はほぼ平坦。埋土は暗褐色土で、ロームブロックを混入することから、人為的堆積と考えられる。

遺物には未掲載遺物に土師器片と須恵器小片が僅かに出土しているが、本土坑の時期は不明。

132号土坑 (第117図、第50表、PL.23)

位置(座標)：X軸=36,493、Y軸=-39,416

本土坑は3区西端にあり、付近には109・110・112・113号土坑が点在する。平面形状は楕円形を呈し、規模は長軸1.12m、短軸0.62mを測り、深さは61cmとかなり深い。長軸方向は北東を向く。埋土は暗褐色土で、ロームブロックを少量含むことから、人為的堆積と考えられる。

遺物の出土はない。本土坑の時期は、埋土から近世以降と考えられる。

133号土坑 (第118図、第50表、PL.24)

位置(座標)：X軸=36,474、Y軸=-39,378

本土坑は3区を東西に分断する12号溝の東側にあり、付近には7号住居がある。平面形状は楕円形を呈し、規模は長軸1.06m、短軸0.91m、深さ13cmを測る。長軸方向は北北西を向く。底面はほぼ平坦。埋土は暗褐色土と黄褐色土の2層に分層できる。埋土中にローム土を混在させることから、人為的堆積と考えられる。

遺物の出土はない。本土坑の時期は不明。

134号土坑 (第118図、第50表、PL.24)

位置(座標)：X軸=36,541、Y軸=-39,296

本土坑は6区中央にあり、南北に走向する1号溝と重複する。平面形状は不整な方形を呈し、規模は長軸(1.85)m、短軸1.75m、深さ32cmを測る。長軸は東西方向を向く。底面は平坦。埋土は黒褐色土を主に、2層に分層できる。埋土中にローム小ブロックを少量混在させることから、人為的堆積と考えられる。土層断面の観察から、1号溝より本土坑が古い。

遺物には未掲載遺物に土師器片、近世の在地区焙烙・鍋片が出土しており、本土坑の時期は近世と考えられる。

135号土坑 6号井戸に変更。

136号土坑 5号井戸に変更。

137号土坑 4号井戸に変更。

138号土坑 (第118図、第50表、PL.24)

位置(座標)：X軸=36,432、Y軸=-39,419

本土坑は2区南側にあり、付近には重複する8・9号住居、139・172・178・179号土坑が点在し、30号住居と重複する。平面形状は長方形を呈し、規模は長軸3.29m、短軸1.0m、深さ38cmを測る。長軸は東西方向を向く。底面は平坦。埋土は黒褐色土を主に、3層に分層でき、全体に締まりが弱い。埋土中にローム小ブロックを多量に混在させることから、人為的堆積と考えられる。遺構確認時点で、埋土の土色等が30号住居とは異なり、本土坑が新しいことは明確であった。

遺物には未掲載遺物に土師器片と須恵器小片が出土しているが、本土坑の時期は埋土から近世以降と考えられる。

139号土坑 (第118図、第50表、PL.24)

位置(座標)：X軸=36,434、Y軸=-39,419

本土坑は2区南側にあり、付近には重複する8・9号住居、138・172・178・179号土坑が点在し、30号住居と重複する。平面形状は長方形を呈し、規模は長軸3.51m、短軸0.94m、深さ37cmを測る。長軸は東西方向を向く。底面は平坦。埋土は明褐色土と黄褐色土の2層に分層でき、全体に締まりが弱い。埋土中にローム小ブロックを密に混在させることから、人為的堆積と考えられる。遺構確認時点で、埋土の土色等が30号住居とは異なり、本土坑が新しいことは明確であった。

遺物の出土はない。本土坑の時期は、埋土から近世以降と考えられる。

140号土坑 (第119図、第50表、PL.24)

位置(座標)：X軸=36,452、Y軸=-39,434

本土坑は2区中央にあり、付近には13・16・17号住居、180号土坑がある。なお、14号住居の南東隅に重複する。平面形状は楕円形を呈し、規模は長軸2.42m、短軸1.58m、深さ49cmを測る。長軸は東西方向を向く。底面は播り鉢状。埋土は黒褐色土と暗褐色土の2層に分層できる。埋土中にローム粒を含むことから、人為的堆積の可能性あり。遺構確認時点で、埋土の土色等が14号住居とは異なり、本土坑が新しいことは明確であった。

遺物には未掲載遺物ではあるが土師・須恵器片を多く出土していることから、本土坑の時期は古代の可能性もある。

141号土坑 (第119図、第50表、PL.24)

位置(座標)：X軸=36,470、Y軸=-39,413

本土坑は2区東側にあり、付近には142・146・183号土坑が点在し、29号住居と重複する。平面形状は長方形を呈し、規模は長軸2.95m、短軸0.99m、深さ18cmを測る。長軸方向は北北西を向く。底面は平坦。埋土は黒褐色土で、ローム粒・小ブロックを多く含み、締まりが弱い。人為的堆積と考えられる。遺構確認時点で、埋土の土色等が29号住居とは異なり、さらに住居のカマドを壊していることから、本土坑が新しいことは明確であった。

遺物には未掲載遺物に土師器片と須恵器小片、近世の国産施釉陶器片が出土しており、本土坑の時期は近世と考えられる。

142号土坑 (第119図、第50表、PL.24)

位置(座標)：X軸=36,466、Y軸=-39,410

本土坑は2区東側にあり、付近には141・143・146・147号土坑が点在する。平面形状は長方形を呈し、規模は長軸1.35m、短軸1.1m、深さ18cmを測る。長軸方向は北北東を向く。底面は平坦。埋土は暗褐色土で、ローム粒をやや多く、黒褐色土粒を少量含む。締まりやや弱い。人為的堆積の可能性あり。

遺物の出土はない。本土坑の時期は不明。

143号土坑 (第119図、第50表、PL.24)

位置(座標)：X軸=36,463、Y軸=-39,411

本土坑は2区東側にあり、付近には142・144～147・155号土坑が点在する。平面形状は長方形を呈し、規模は長軸1.76m、短軸1.32m、深さ33cmを測る。長軸方向は北北東を向く。底面は平坦。埋土は暗褐色土で、ローム粒を多量に、黒褐色土ブロックを少量含む。締まりやや弱い。人為的堆積の可能性あり。

遺物には未掲載遺物に土師器片と須恵器小片、時期不明の土器類片(近世以降と思われる)が出土しており、本土坑の時期は近世以降と考えられる。

144号土坑 (第119図、第50表、PL.24)

位置(座標)：X軸=36,461、Y軸=-39,408

本土坑は2区東側にあり、付近には23号住居、143・145・147・158号土坑が点在する。平面形状は長方形を呈し、規模は長軸1.45m、短軸0.75m、深さ18cmを測る。長軸方向は北北東を向く。底面は平坦。埋土は暗褐色土で、ローム小ブロック・白色軽石粒を少量含む。人為的

堆積と考えられる。

遺物の出土はない。本土坑の時期は不明。

145号土坑（第119図、第50表、PL.24）

位置(座標)：X軸=36,461、Y軸=-39,413

本土坑は2区東側にあり、付近には142～144・155号土坑が点在する。平面形状は長方形を呈し、規模は長軸1.05m、短軸0.85m、深さ16cmを測る。長軸方向は北北東を向く。底面は平坦。埋土は暗褐色土で、ローム粒を少量含む。人為的堆積の可能性あり。

遺物の出土はない。本土坑の時期は不明。

146号土坑（第120図、第50表）

位置(座標)：X軸=36,467、Y軸=-39,415

本土坑は2区東側にあり、付近には29号住居、141～143号土坑が点在する。平面形状は長方形を呈し、規模は長軸0.88m、短軸0.52m、深さ15cmを測る。長軸方向は北東を向く。底面はやや凹凸あり。埋土は暗褐色土と黄褐色土の2層に分層できる。全体に締まりがやや弱い。埋土中にローム小ブロックを密に混在させることから、人為的堆積と考えられる。

遺物の出土はない。本土坑の時期は不明。

147号土坑（第120図、第50表、PL.25）

位置(座標)：X軸=36,463、Y軸=-39,405

本土坑は2区東側にあり、付近には23号住居、142～144・158号土坑が点在する。平面形状は楕円形を呈し、規模は長軸1.71m、短軸0.9m、深さ23cmを測る。長軸方向は北北東を向く。底面は平坦。埋土は暗褐色土で、ローム小ブロックを多く、白色軽石粒を少量含む。人為的堆積と考えられる。

遺物の出土はない。本土坑の時期は不明。

148号土坑（第120図、第50表）

位置(座標)：X軸=36,456、Y軸=-39,403

本土坑は2区東側にあり、付近には23号住居、156～158号土坑が点在する。平面形状は円形を呈し、規模は径1.25m、深さ7cmを測る。底面は平坦。埋土は暗褐色土で、ローム粒・小ブロックを多く含むことから、人為的堆積と考えられる。

遺物の出土はない。本土坑の時期は不明。

150号土坑（第120図、第50表）

位置(座標)：X軸=36,477、Y軸=-39,423

本土坑は2区北側で、14号溝と25号溝が交差する北側

にある。平面形状は円形を呈し、規模は径1.01m、深さ27cmを測る。底面は平坦であるが、時期の新しいピットと重複する。

遺物には未掲載遺物に土師器片と須恵器小片が僅かに出土しているが、本土坑の時期は不明。

151号土坑（第120図、第50表、PL.25）

位置(座標)：X軸=36,482、Y軸=-39,432

本土坑は2区北側の調査区境にあり、付近には26号住居、152・153・184号土坑が点在する。全掘できなかったが、平面形状は円形を呈すると思われ、規模は径0.84m、深さ22cmを測る。底面はやや凹凸ぎみ。埋土は暗褐色土で、ローム小ブロックを多く含み、砂質ぎみ。人為的堆積と考えられる。

遺物には未掲載遺物に土師器小片が僅かに出土しているのみで、本土坑の時期は不明。

152号土坑（第120図、第50表、PL.25）

位置(座標)：X軸=36,481、Y軸=-39,433

本土坑は2区北側の調査区境にあり、付近には26号住居、151・153・184号土坑が点在する。平面形状は方形を呈し、規模は一辺1.05m、深さ25cmを測る。辺の方向は北東を向く。底面はやや凹凸をもつ。埋土は黒褐色土と黄褐色土の2層に分層できる。埋土中にローム土を主に混在させることから、人為的堆積と考えられる。

遺物には未掲載遺物に土師器片と須恵器小片、近現代の陶磁器片が出土しており、本土坑の時期は近代か。

153号土坑（第120図、第50表、PL.25）

位置(座標)：X軸=36,480、Y軸=-39,432

本土坑は2区北側の調査区境にあり、付近には26号住居、151・152・184号土坑が点在する。平面形状は円形を呈し、規模は径0.85m、深さ25cmを測る。底面は中央が凹む。埋土は暗褐色土で、白色軽石粒を少量含み、やや砂質ぎみ。人為的堆積かは不明。

遺物には未掲載遺物に土師器片が僅かに出土しているのみで、本土坑の時期は不明。

155号土坑（第120図、第50表、PL.25）

位置(座標)：X軸=36,460、Y軸=-39,415

本土坑は2区東側にあり、付近には143・145・159・161号土坑が点在する。平面形状は長方形を呈し、規模は長軸1.45m、短軸0.82m、深さ8cmを測る。長軸方向は北北東を向く。底面はほぼ平坦。埋土は暗褐色土で、

ローム粒を少量含み、やや砂質ぎみ。人為的堆積かは不明。

遺物の出土はない。本土坑の時期は不明。

156号土坑（第120図、第50表）

位置(座標)：X軸=36,454、Y軸=-39,404

本土坑は2区東側にあり、付近には1号掘立柱建物、148・157・158号土坑が点在する。平面形状は楕円形を呈し、規模は長軸1.17m、短軸0.95m、深さ47cmを測る。長軸方向は東西を向く。底面は中央が凹む。埋土は暗褐色土を主に、3層に分層できる。埋土中にローム土を混在させることから、人為的堆積と考えられる。

遺物の出土はない。本土坑の時期は不明。

157号土坑（第121図、第50表）

位置(座標)：X軸=36,456、Y軸=-39,406

本土坑は2区東側にあり、付近には144・148・156・158号土坑が点在する。平面形状は円形を呈し、規模は径1.4m、深さ25cmを測る。底面はほぼ平坦。埋土は暗褐色土で、ローム粒・小ブロックを多く含むことから、人為的堆積と考えられる。

遺物の出土はない。本土坑の時期は不明。

158号土坑（第121図、第50表）

位置(座標)：X軸=36,457、Y軸=-39,407

本土坑は2区東側にあり、付近には144・148・156・157号土坑が点在する。平面形状は円形を呈し、規模は径1.13m、深さ21cmを測る。底面は平坦。埋土は黒褐色土で、ローム粒・小ブロックを少量含むことから、人為的堆積と考えられる。

遺物には未掲載遺物ではあるが土師器片を多量に出土させていることから、本土坑の時期は古代の可能性がある。

159号土坑（第121図、第50表、PL.25）

位置(座標)：X軸=36,457、Y軸=-39,421

本土坑は2区中央にあり、付近には11号住居、160～162・166号土坑が点在する。平面形状は長方形を呈し、規模は長軸1.89m、短軸1.53m、深さ69cmを測る。長軸方向は東北東を向く。底面は概ね平坦。埋土は暗褐色土を主に、3層に分層できる。埋土中にローム小ブロックを多く混在させることから、人為的堆積と考えられる。

遺物には未掲載遺物に土師器片が僅かに出土しているが、本土坑の時期は不明。

160号土坑（第121図、第50表、PL.25）

位置(座標)：X軸=36,454、Y軸=-39,452

本土坑は2区中央にあり、付近には1号掘立柱建物、161～163・173号土坑が点在する。平面形状は円形を呈し、規模は径0.8m、深さ75cmを測る。底面は中央が大きく凹む。埋土は暗褐色土を主に、2層に分層できる。埋土中にローム小ブロックを少量混在させることから、人為的堆積と考えられる。

遺物には未掲載遺物に土師器片が僅かに出土しているが、本土坑の時期は不明。

161号土坑（第121図、第50表、PL.25）

位置(座標)：X軸=36,454、Y軸=-39,419

本土坑は2区中央にあり、付近には159・160・162～164号土坑が点在し、11号住居のカマドと僅かに重複する。平面形状は方形を呈し、規模は一辺が1.45m、深さ37cmを測る。辺の方向は北北西を向く。底面は北側が一段低くなるが平坦。埋土は暗褐色土を主に、2層に分層できる。埋土中にローム小ブロックを少量混在させることから、人為的堆積と考えられる。遺構確認時点で、11号住居のカマドに壊されていたことから、本土坑が住居より古いことは明らかであった。

遺物の出土はない。本土坑の時期は、重複から古代と考えられる。

162号土坑（第121図、第50表、PL.25）

位置(座標)：X軸=36,452、Y軸=-39,419

本土坑は2区中央にあり、付近には11号住居、159～161・164・173号土坑が点在し、163号土坑と重複する。平面形状は方形を呈し、規模は長軸0.92m、短軸0.87m、深さ22cmを測る。長軸方向は北北西を向く。底面は概ね平坦。埋土は暗褐色土で、ローム粒・小ブロックを少量含むことから、人為的堆積と考えられる。土層断面の観察から、163号土坑より本土坑が古い。

遺物の出土はない。本土坑の時期は不明。

163号土坑（第121図、第50表、PL.25）

位置(座標)：X軸=36,452、Y軸=-39,419

本土坑は2区中央にあり、付近には11号住居、159～161・164・173号土坑が点在し、162号土坑と重複する。平面形状は円形を呈し、規模は径1.22m、深さ13cmを測る。底面は平坦。埋土は黒褐色土で、白色軽石粒・ローム粒を微量含むことから、人為的堆積の可能性あり。土

層断面の観察から、162号土坑より本土坑が新しい。

遺物の出土はない。本土坑の時期は不明。

164号土坑（第121図、第50表、PL.25）

位置(座標)：X軸=36,451、Y軸=-39,421

本土坑は2区中央にあり、11号住居の南側に近接し、付近には161～163・165号土坑が点在する。平面形状は長方形を呈し、規模は長軸1.77m、短軸1.25m、深さ25cmを測る。長軸方向は北東を向く。底面はほぼ平坦。埋土は暗褐色土を主に、2層に分層できる。埋土中にローム小ブロックを混在させることから、人為的堆積と考えられる。

遺物には未掲載遺物に土師器片と須恵器小片が僅かに出土しているが、本土坑の時期は不明。

165号土坑（第122図、第50表、PL.25）

位置(座標)：X軸=36,448、Y軸=-39,424

本土坑は2区中央にあり、付近には11・15・16号住居、162～164号土坑が点在する。平面形状は長方形を呈し、規模は長軸1.16m、短軸0.97m、深さ28cmを測る。長軸方向は北北西を向く。底面は中央が凹む。埋土は暗褐色土と黄褐色土の2層に分層できる。埋土中にローム小ブロックを少量混在させることから、人為的堆積と考えられる。

遺物の出土はない。本土坑の時期は不明。

166号土坑（第122図、第50表、PL.25）

位置(座標)：X軸=36,457、Y軸=-39,427

本土坑は2区中央にあり、付近には17号住居、159・180号土坑が点在する。平面形状は長方形を呈し、規模は長軸2.04m、短軸1.78m、深さ47cmを測る。長軸方向は北東を向く。底面はほぼ平坦。埋土は暗褐色土を主に、3層に分層できる。埋土中にローム小ブロックを少量混在させることから、人為的堆積と考えられる。

遺物には未掲載遺物に土師器片と須恵器小片が出土しているが、本土坑の時期は不明。

167号土坑（第122図、第50表）

位置(座標)：X軸=36,458、Y軸=-39,437

本土坑は2区中央にあり、付近には14・17号住居がある。平面形状は長方形を呈し、規模は長軸1.45m、短軸0.91m、深さ37cmを測る。長軸方向は北北西を向く。底面は平坦。埋土は暗褐色土を主に、2層に分層できる。人為的堆積かは不明。

遺物には未掲載遺物に土師器片と須恵器小片が出土しているが、本土坑の時期は不明。

170号土坑（第122図、第50表、PL.25）

位置(座標)：X軸=36,466、Y軸=-39,425

本土坑は2区中央にあり、付近には18号住居、182号土坑が点在する。平面形状は円形を呈し、規模は径1.09m、深さ11cmを測る。底面はほぼ平坦。埋土は暗褐色土で、ローム粒を微量に含む。人為的堆積かは不明。

遺物には未掲載遺物に土師器片小片が僅かに出土しているのみで、本土坑の時期は不明。

171号土坑（第122図、第50表）

位置(座標)：X軸=36,445、Y軸=-39,431

本土坑は2区中央にあり、重複する15・16号住居の南側に位置する。平面形状は長方形を呈し、規模は長軸1.7m、短軸1.34m、深さ44cmを測る。長軸方向は北西を向く。底面は段をもつがほぼ平坦。埋土は暗褐色土を主に、3層に分層できる。埋土中にローム小ブロックを混在させることから、人為的堆積と考えられる。

遺物には未掲載遺物ではあるが土師器片と須恵器小片を多量に出土させていることから、本土坑の時期は古代の可能性はある。

172号土坑（第122図、第50表、PL.25）

位置(座標)：X軸=36,438、Y軸=-39,425

本土坑は2区南側にあり、20号溝の南側に近接し、付近には30号住居、139号土坑がある。平面形状は楕円形を呈し、規模は長軸1.28m、短軸0.85m、深さ55cmを測る。長軸方向は北北西を向く。底面は中央がやや凹む。埋土は暗褐色土を主に、4層に分層できる。埋土中にローム小ブロックを混在させることから、人為的堆積と考えられる。

遺物には未掲載遺物に土師器片と須恵器小片を僅かに出土しているが、本土坑の時期は不明。

173号土坑（第123図、第50表、PL.26）

位置(座標)：X軸=36,452、Y軸=-39,415

本土坑は2区中央にあり、付近には1・2号掘立柱建物、160・162・163号土坑が点在する。平面形状は円形を呈し、規模は径0.8m、深さ26cmを測る。底面は平坦。埋土は暗褐色土と黄褐色土の2層に分層できる。埋土中にローム土を主に混在させることから、人為的堆積と考えられる。

遺物の出土はない。本土坑の時期は不明。

174号土坑 (第123図、第50表、PL.26)

位置(座標)：X軸=36,435、Y軸=-39,410

本土坑は2区南側にあり、付近には8・9号住居、175・179・181号土坑が点在し、19号溝と重複する。平面形状は円形を呈し、規模は径1.35m、深さ36cmを測る。底面は平坦。埋土は暗褐色土で、ローム粒・小ブロックを多く、黒褐色土小ブロックを少量含むことから、人為的堆積と考えられる。遺構確認時点で、埋土の土色等が19号溝とは異なり、179号土坑と同様に本土坑が古いことは明らかであった。

遺物には未掲載遺物に須恵器片、近世の在地系焼き物片を出土させており、本土坑の時期は近世か。

175号土坑 (第123図、第50表、PL.26)

位置(座標)：X軸=36,433、Y軸=-39,411

本土坑は2区南側の調査区境にあり、付近には174・178・179・181号土坑がある。平面形状は楕円形を呈し、規模は長軸1.55m、短軸1.24m、深さ29cmを測る。長軸方向は東北東を向く。底面は平坦。埋土は黒褐色土で、ローム粒・小ブロックをやや多く含むことから、人為的堆積と考えられる。

遺物の出土はない。本土坑の時期は不明。

176号土坑 (第123図、第50表、PL.26)

位置(座標)：X軸=36,435、Y軸=-39,432

本土坑は2区南側にあり、付近には172・177号土坑が点在する。平面形状は楕円形を呈し、規模は長軸1.42m、短軸1.03m、深さ43cmを測る。長軸は南北方向を向く。底面はほぼ平坦。埋土は暗褐色土を主に、2層に分層できる。埋土中にローム小ブロックを多く混在させることから、人為的堆積と考えられる。

遺物の出土はない。本土坑の時期は不明。

177号土坑 (第123図、第50表、PL.26)

位置(座標)：X軸=36,432、Y軸=-39,431

本土坑は2区南側にあり、付近には176号土坑がある。一部を攪乱により壊されている。平面形状は楕円形を呈し、規模は長軸1.63m、短軸0.87m、深さ25cmを測る。長軸方向は北北西を向く。底面は平坦。埋土は黒褐色土と暗褐色土の2層に分層できる。また、埋土中には、礫が多く混入していたことから、人為的堆積と考えられる。

遺物の出土はない。本土坑の時期は不明。

178号土坑 (第123図、第50表、PL.26)

位置(座標)：X軸=36,430、Y軸=-39,414

本土坑は2区南側の調査区境にあり、付近には138・139・174・175・179・181号土坑が点在する。全掘できなかったが、平面形状は長方形を呈すると思われ、確認できた規模は長軸(1.8)m、短軸1.03m、深さ23cmを測る。長軸方向は北北東を向く。底面は平坦。埋土は黒褐色土で、ローム粒・小ブロックを少量含むことから、人為的堆積と考えられる。

遺物の出土はない。本土坑の時期は不明。

179号土坑 (第123図、第50表)

位置(座標)：X軸=36,433、Y軸=-39,413

本土坑は2区南側にあり、付近には8・9号住居、138・174・175・178・181号土坑が点在し、19号溝と重複する。平面形状は楕円形を呈し、規模は長軸1.4m、短軸1.0m、深さ15cmを測る。長軸方向は北西を向く。底面は平坦。埋土は黒褐色土で、ローム粒・小ブロックを微量に含むことから、人為的堆積の可能性あり。土層断面の観察から、19号溝より本土坑が古い。

遺物には未掲載遺物に土師器片と須恵器小片、近現代の陶磁器片を出土させており、本土坑の時期は近代か。

180号土坑 (第124図、第50表、PL.26)

位置(座標)：X軸=36,454、Y軸=-39,433

本土坑は2区中央にあり、14・17号住居に近接し、付近には140・166・167号土坑が点在する。平面形状は長方形を呈し、規模は長軸1.83m、短軸0.82m、深さ33cmを測る。長軸方向は北西を向く。底面は平坦。埋土は暗褐色土を主に、3層に分層できる。埋土中にローム小ブロックを少量混在させることから、人為的堆積と考えられる。

遺物には未掲載遺物ではあるが土師・須恵器片を多く出土させていることから、本土坑の時期は古代の可能性もある。

181号土坑 (第124図、第50表、PL.26)

位置(座標)：X軸=36,434、Y軸=-39,408

本土坑は2区南側の調査区境にあり、付近には174・175・178・179号土坑が点在する。全掘できなかったが、平面形状は円形を呈すると思われ、確認できた規模は径1.2m、深さ32cmを測る。底面は平坦。埋土は黒褐色土で、ローム小ブロックをやや多く含むことから、人為的堆積

と考えられる。

遺物には未掲載遺物に土師器片を僅かに出土しているが、本土坑の時期は不明。

182号土坑（第124図、第50表）

位置(座標)：X軸=36,467、Y軸=-39,428

本土坑は2区中央にあり、付近には20号住居、170号土坑が点在する。平面形状は円形を呈し、規模は径1.03m、深さ22cmを測る。底面は平坦。埋土は暗褐色土で、白色軽石粒を微量に含む。人為的堆積かは不明。

遺物の出土はない。本土坑の時期は不明。

183号土坑（第124図、第50表、PL.26）

位置(座標)：X軸=36,474、Y軸=-39,416

本土坑は2区東側にあり、付近には29号住居、141号土坑が点在し、25号溝と重複する。平面形状は長方形を呈し、規模は長軸1.93m、短軸1.11m、深さ31cmを測る。長軸方向は西北西を向く。底面は平坦。埋土は黒褐色土で、白色軽石粒を微量に含む。人為的堆積かは不明。遺構確認時点で、埋土の土色等が25号溝と異なり、本土坑が古いことは明らかであった。

出土遺物には未掲載遺物に近現代の陶磁器2片、瓦3片があり、本土坑の時期は近代か。

184号土坑（第124図、第50表、PL.26）

位置(座標)：X軸=36,478、Y軸=-39,432

本土坑は2区北側にあり、付近には25・26号住居、151～153号土坑が点在する。平面形状は円形を呈し、規模は径0.97m、深さ41cmを測る。底面は平坦であるが、中央がピット状に凹む。埋土は暗褐色土で、白色軽石粒・ローム小ブロックを少量、焼土粒を微量に含む。人為的堆積と考えられる。

遺物の出土はない。本土坑の時期は不明。

185号土坑（第124図、第50表、PL.26）

位置(座標)：X軸=36,443、Y軸=-39,440

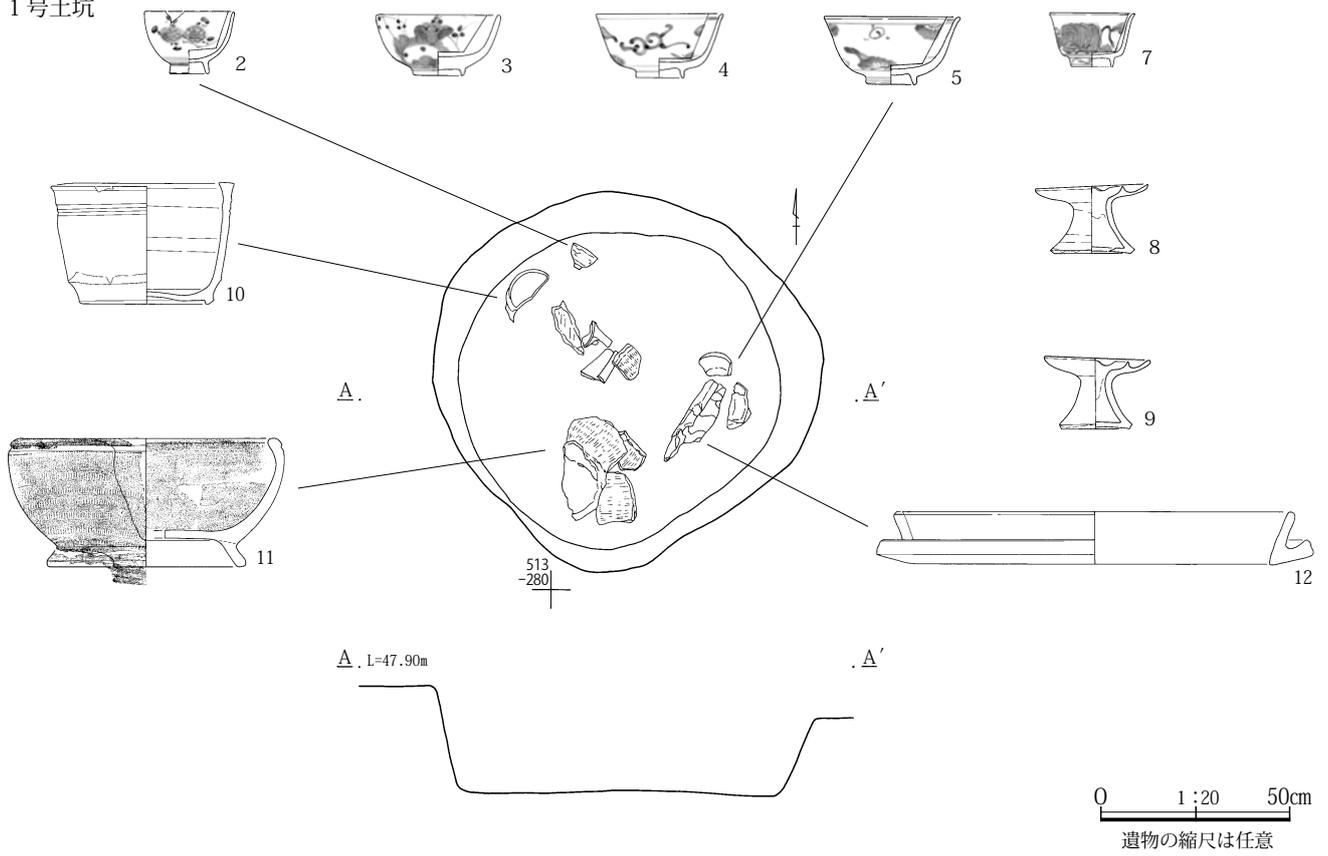
本土坑は2区中央にあり、12・13号住居の南側に位置する。平面形状は楕円形を呈し、規模は長軸1.0m、短軸0.63m、深さ37cmを測る。長軸方向は北東を向く。底面は平坦。埋土は黒褐色土と暗褐色土を主に、4層に分層できる。埋土中にロームブロックを多く混在させることから、人為的堆積と考えられる。

遺物の出土はない。本土坑の時期は不明。

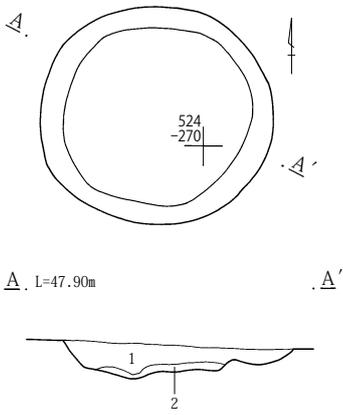
186号土坑 7号井戸に変更。

第3章 検出された遺構と遺物

1号土坑

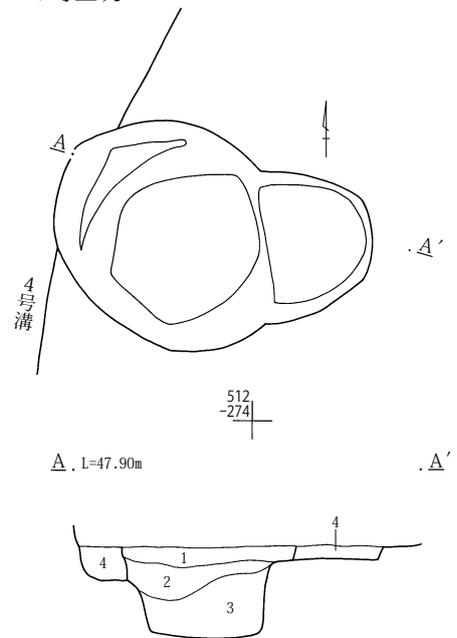


2号土坑



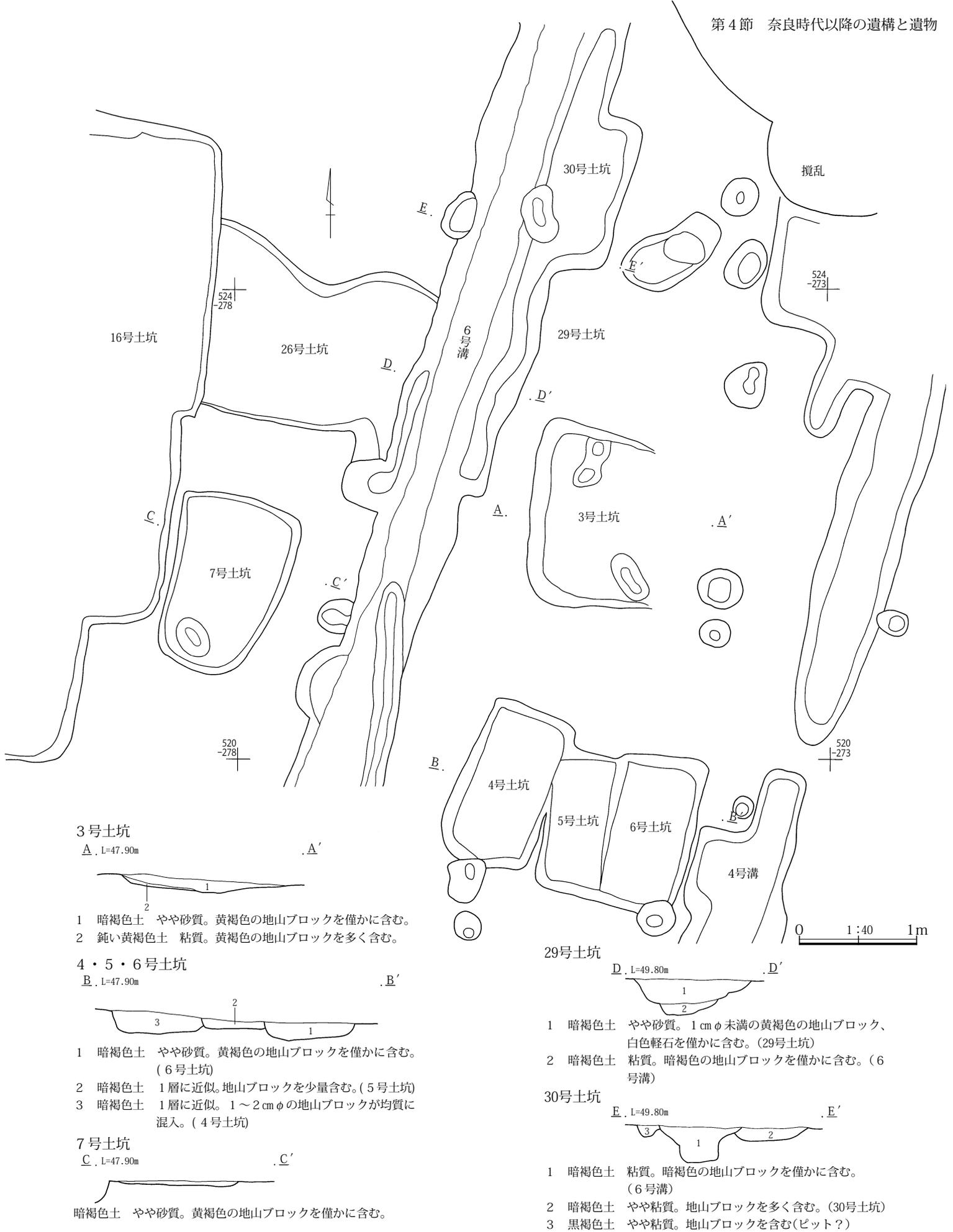
- 1 暗褐色土 やや砂質。黄褐色の地山ブロックを含む。
- 2 褐灰色土 やや砂質。黄褐色の地山ブロックが散在。

8号土坑

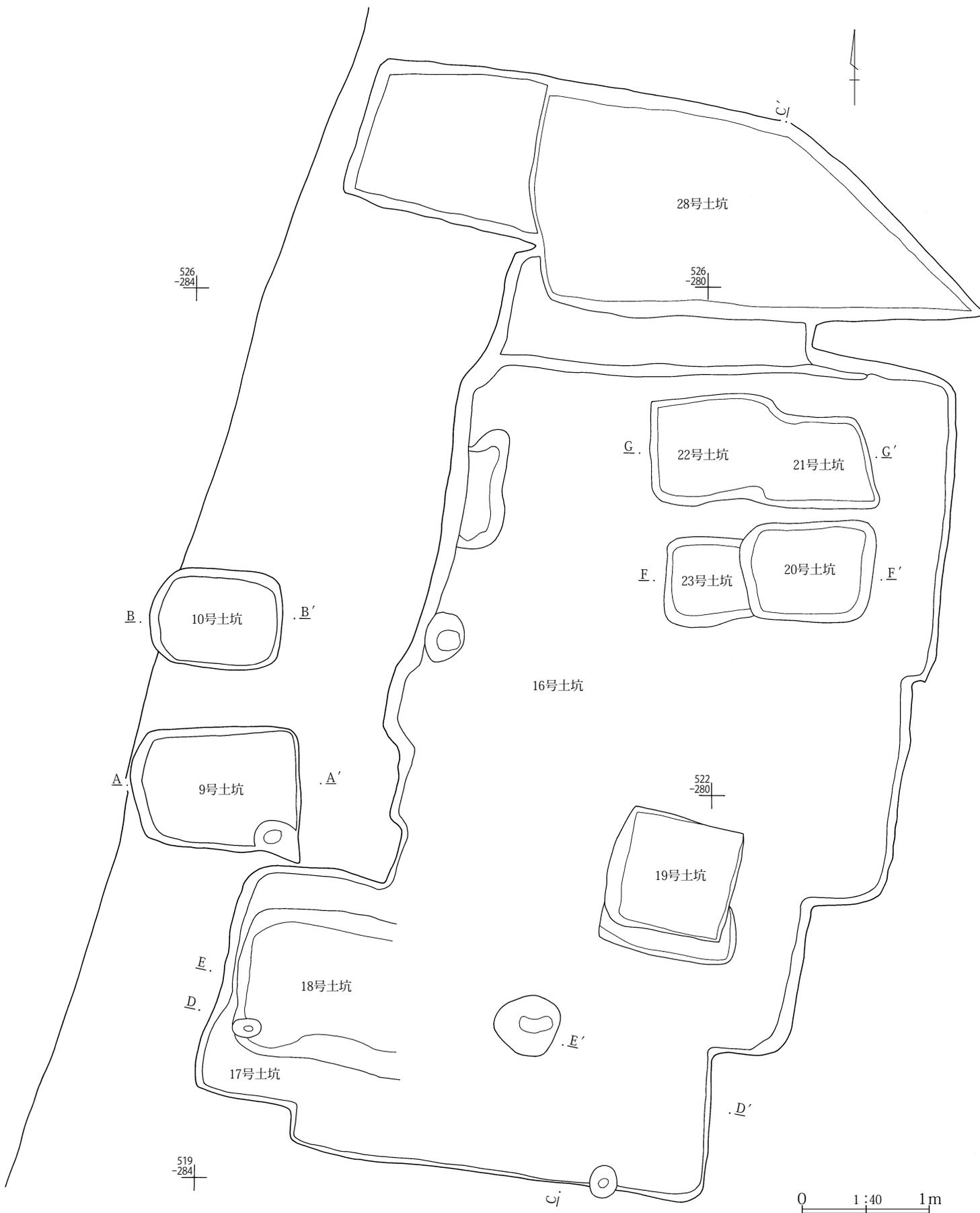


- 1 暗褐色土 やや砂質。黄褐色の地山ブロックを僅かに含む。
- 2 暗褐色土 1層に近似。地山ブロックを少量含む。
- 3 暗褐色土 1層に近似。1~2cmφの地山ブロックを均質に含む。
- 4 暗褐色土 1層に近似。2~5cmφの地山ブロックが混入。

第100図 1・2・8号土坑平面図



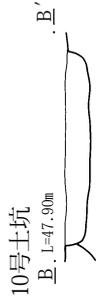
第101図 3~7・29・30号土坑平面図



第102図 9・10・16～23・28号土坑平面図

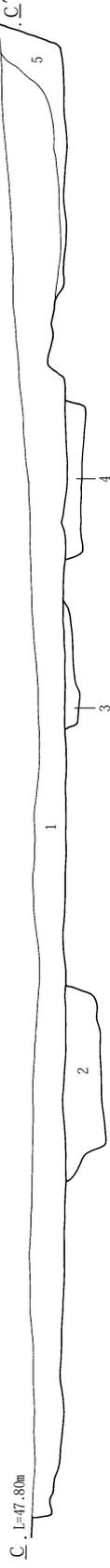


暗褐色土 やや砂質。黄褐色の地山ブロックが少量混入。



暗褐色土 やや砂質。黄褐色の地山ブロックが少量混入。

16・19・22・23・28号土坑



16・19・22・23・28号土坑C-C'

- 1 暗褐色土 やや砂質。黄褐色の地山ブロックを僅かに含む。(16号土坑)
- 2 暗褐色土 1層に近似。層下部に地山ブロックを多量に含む。(19号土坑)
- 3 暗褐色土 地山ブロックを多く含む。(23号土坑)
- 4 暗褐色土 地山ブロックを多く含む。(22号土坑)
- 5 暗褐色土 1層に近似。炭化物、白色鉱物を含む。(28号土坑)

16・17号土坑



16・17号土坑D-D'

- 1 暗褐色土 やや砂質。黄褐色の地山ブロックを僅かに含む。(16号土坑)
- 2 鈍い黄褐色土 やや砂質。地山ブロックをやや多く含む。(17号土坑)

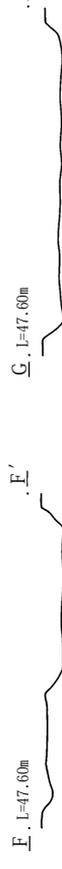
16～18号土坑



16～18号土坑E-E'

- 1 暗褐色土 やや砂質。黄褐色の地山ブロックを僅かに含む。(16号土坑)
- 2 鈍い黄褐色土 やや砂質。地山ブロックをやや多く含む。(17号土坑)
- 3 暗褐色土 地山ブロックを多く含む。(18号土坑)

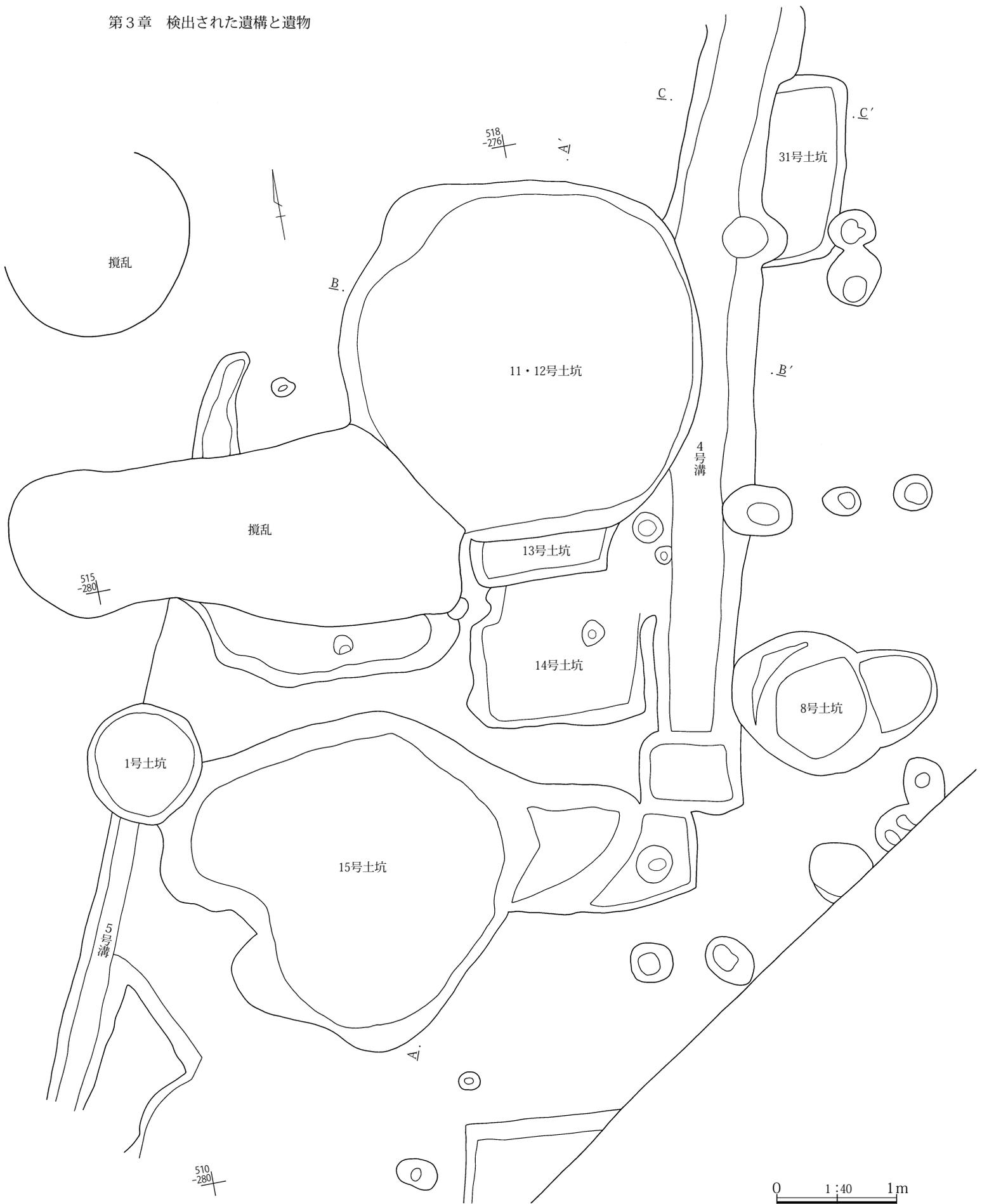
20・23号土坑



21・22号土坑



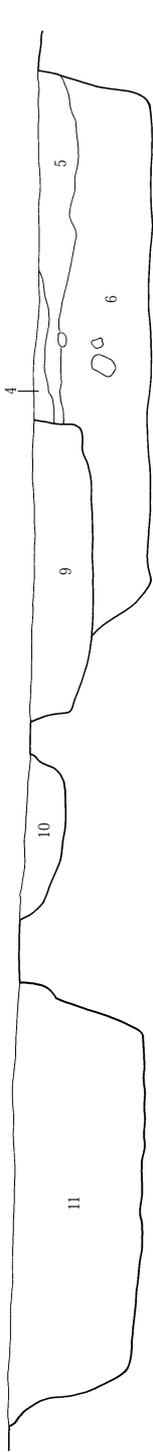
第103図 9・10・16～23・28号土坑土層断面図



第104図 11～15・31号土坑平面図

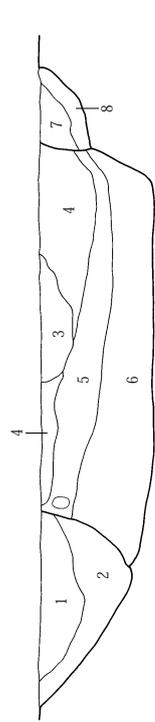
11～15号土坑

A. L=47.90m



11・12号土坑、4号溝

B. L=47.90m



11～15号土坑A-A'、11・12号土坑・4号溝B-B'

- 1 黒褐色土 やや砂質。ほぼ均質で白色軽石が層上部に混在。(11号土坑)
- 2 暗褐色土 粘質。ほぼ均質。1cmφ程の地山ブロックが僅かに混入。(11号土坑)
- 3 黒褐色土 やや砂質。白色軽石混在。1cmφ程の地山ブロックが混在。(12号土坑)
- 4 鈍い黄褐色土 6層を主体に地山ブロックと黒褐色土が混在。(12号土坑)
- 5 暗褐色土 3層を主体に、地山ブロックと6層が混在。(12号土坑)
- 6 鈍い黄褐色土 砂礫層。1～10cmφ程の砂礫が多量に混在。(12号土坑)
- 7 黒褐色土 やや砂質。層下部に地山ブロック(約1cmφ)が混入。(4号溝)
- 8 暗褐色土 粘質。層下部に地山ブロック(約1cmφ)が混入。(4号溝)
- 9 暗褐色土 やや砂質。黄褐色の地山ブロックを多く含む。(13号土坑)
- 10 暗褐色土 やや砂質。黄褐色の地山ブロックを僅かに含む。(14号土坑)
- 11 暗褐色土 砂質。1～5cmφの礫と地山ブロックを多く含む。(15号土坑)

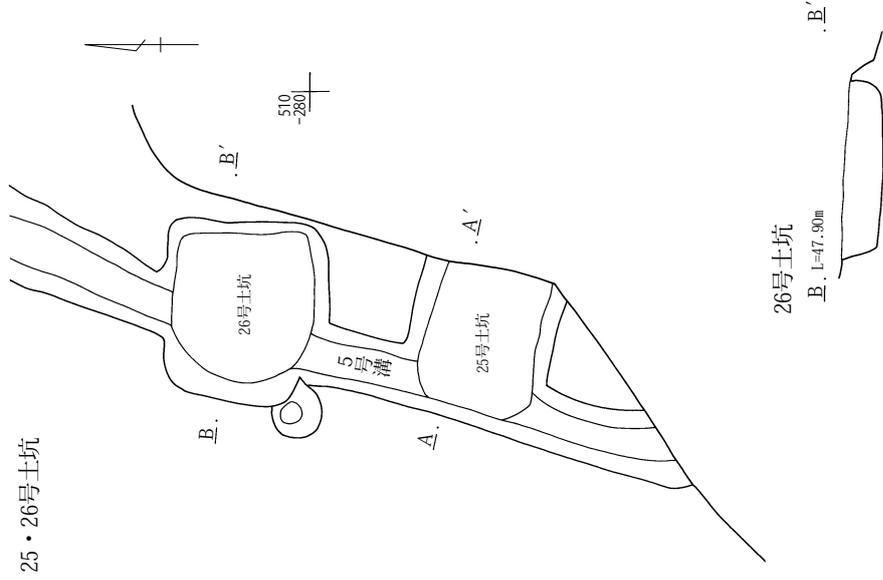
31号土坑、4号溝

C. L=49.80m



- 1 黒褐色土 やや砂質。黄褐色の地山ブロックを含む。(4号溝)
- 2 鈍い黄褐色土 粘質。地山ブロックを多く含む。(4号溝)
- 3 暗褐色土 粘質。地山ブロックを含む。(31号土坑)

25・26号土坑



25号土坑

A. L=47.90m



暗褐色土
やや砂質。1～3cmφ程の黄褐色の地山ブロックを含む。

26号土坑

B. L=47.90m

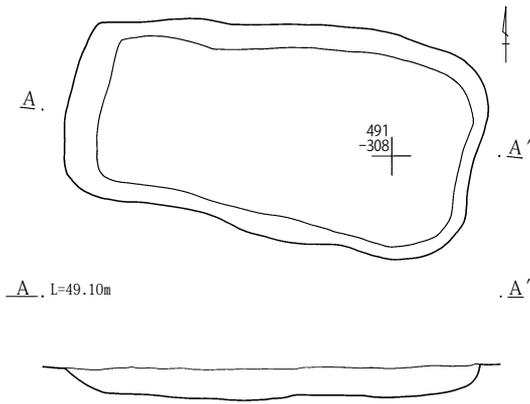


暗褐色土
やや砂質。1～3cmφ程の黄褐色の地山ブロックを含む。

第105図 11～15号土坑土層断面図、25・26号土坑平面図

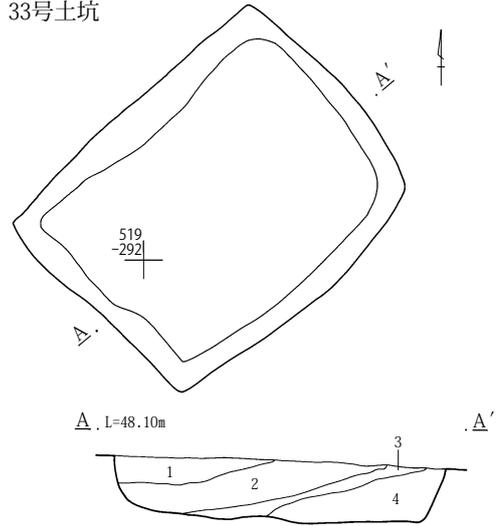
第3章 検出された遺構と遺物

32号土坑



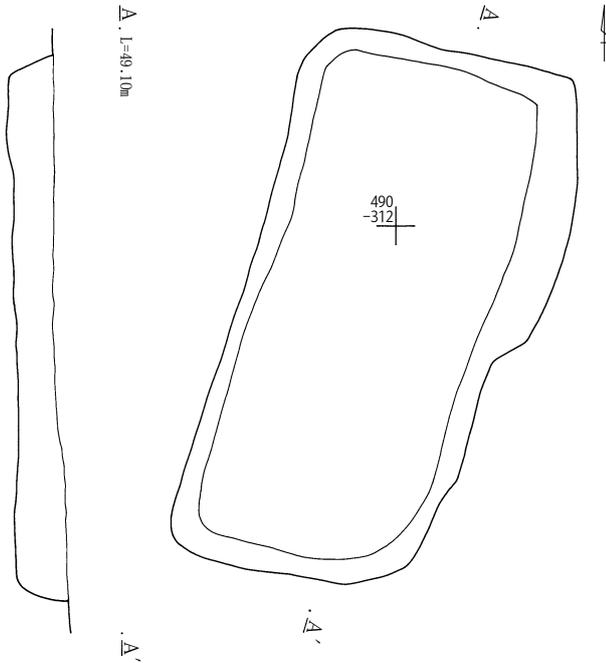
暗褐色土 ロームブロックを少量含む。

33号土坑



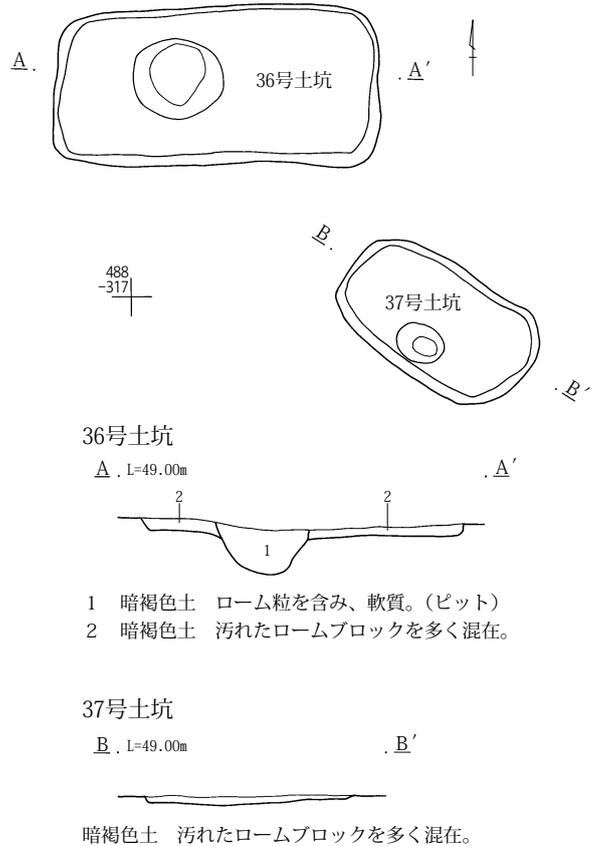
- 1 暗褐色土 ローム粒を多く含む。
- 2 黒褐色土 混入物少なく黒くしまっている。
- 3 明暗褐色土 ローム小ブロックを多く含み、1層より明るい。
- 4 黒褐色土 ローム粒を少量含み、2層よりやや明るい。

34号土坑



暗褐色土 ローム小ブロックを僅かに混入する。

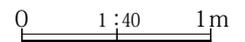
36・37号土坑



- 1 暗褐色土 ローム粒を含み、軟質。(ピット)
- 2 暗褐色土 汚れたロームブロックを多く混在。

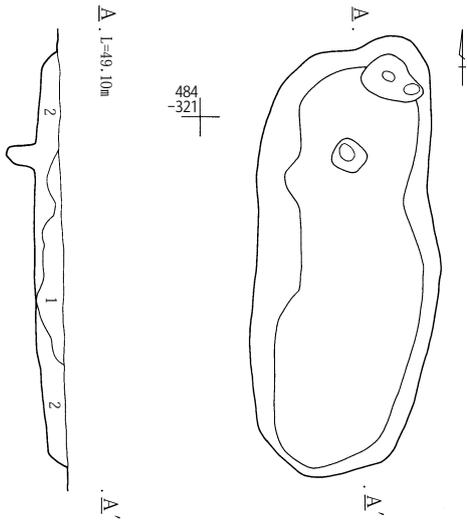
37号土坑

暗褐色土 汚れたロームブロックを多く混在。



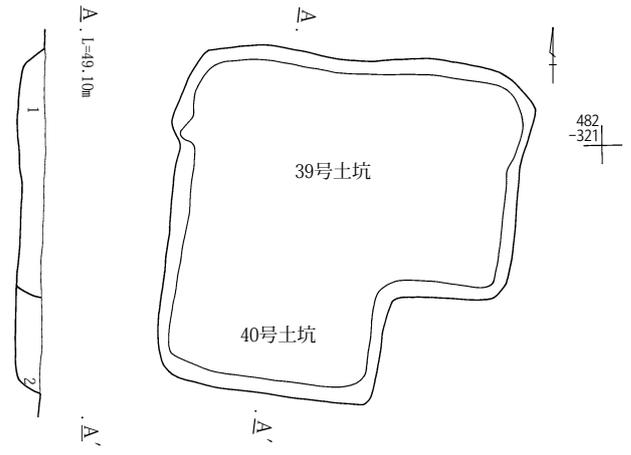
第106図 32～34・36・37号土坑平面図

38号土坑



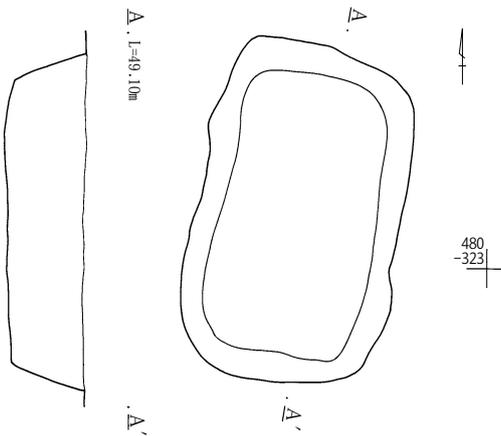
- 1 暗褐色土 混入物はない。
- 2 明暗褐色土 ローム粒を少量含む。

39・40号土坑



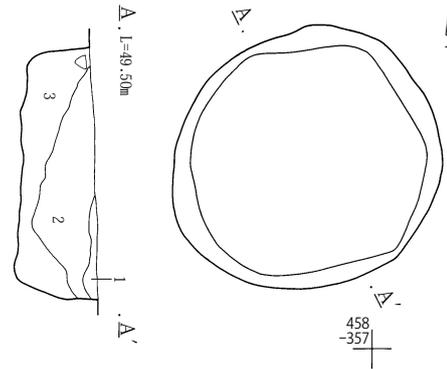
- 1 暗褐色土 汚れたロームブロックを多く含む。(39号土坑)
- 2 暗褐色土 ローム粒を少量含み、1層より暗い。(40号土坑)

41号土坑



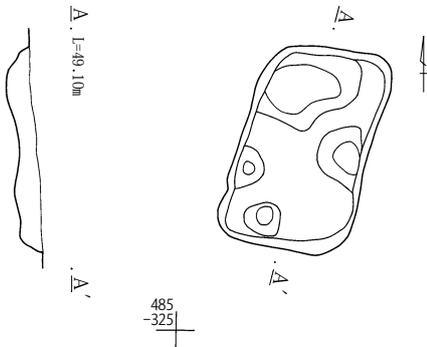
暗褐色土 下位に少量のローム小ブロックを混入。

43号土坑



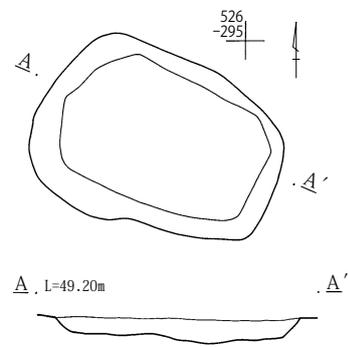
- 1 明暗褐色土 ローム小ブロックを多量に混在。
- 2 暗褐色土 混入物は少ない。
- 3 明暗褐色土 ローム粒を多量に含み明るい。

42号土坑

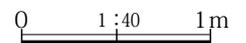


暗褐色土 汚れたロームブロックを含む。

47号土坑

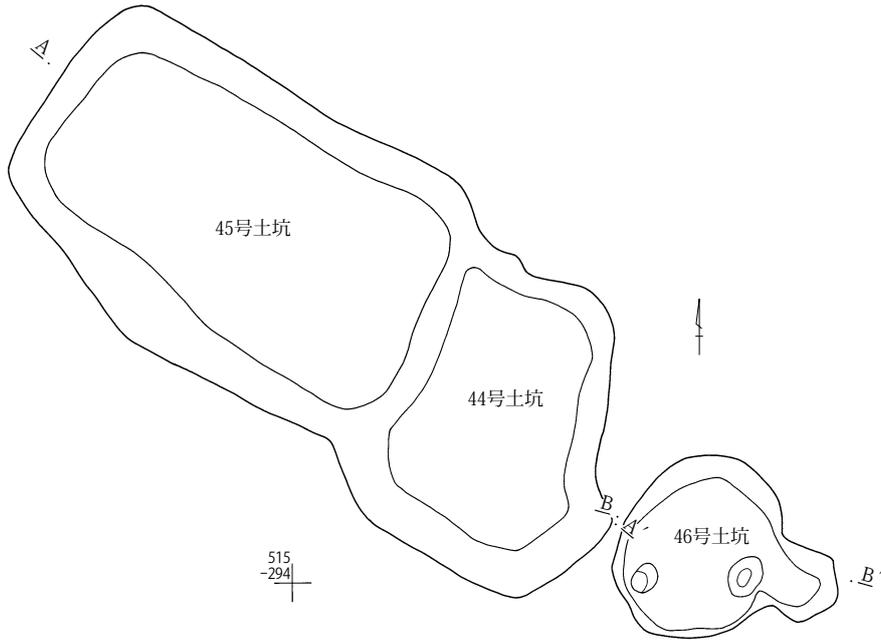


明暗褐色土 ローム粒を多く含み、炭化物を混入。



第107図 38～43・47号土坑平面図

44～46号土坑

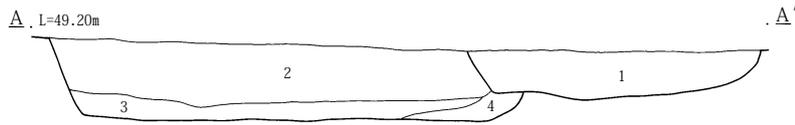


46号土坑



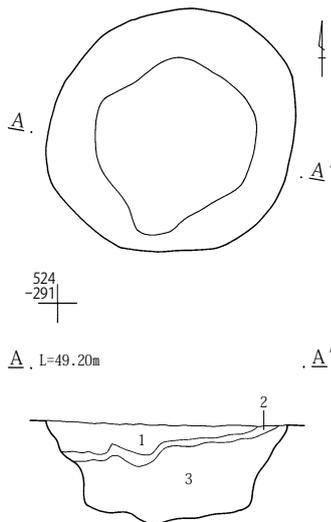
暗褐色土 ローム粒、ブロックを混在する。

44・45号土坑



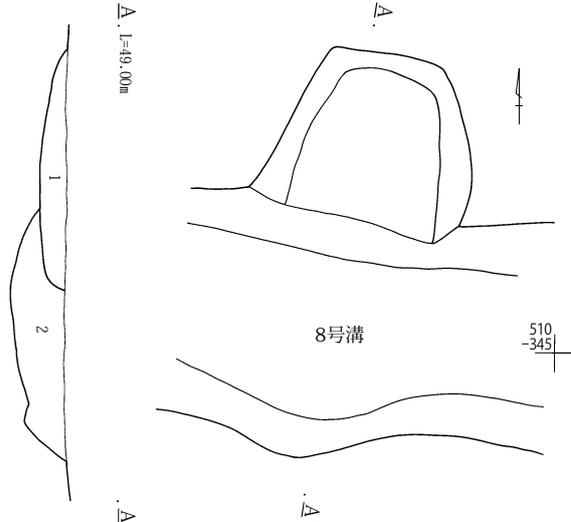
- 1 明褐色土 ローム粒を多く含み、ローム小ブロックを少量混在。(44号土坑)
- 2 明褐色土 ローム粒、ブロックを多量に混在させる。(45号土坑)
- 3 明暗褐色土 ローム粒を混在させ、2層よりやや暗く、締まっている。(45号土坑)
- 4 明褐色土 ロームブロックを多量に混在させる。2層より暗い。(45号土坑)

48号土坑

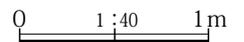


- 1 明暗褐色土 ローム粒を多く含む。
- 2 明褐色土 ロームブロックを多量に混在し、強く締まる。
- 3 明暗褐色土 ローム粒、黒色土ブロックを混在し、締まる。

49号土坑

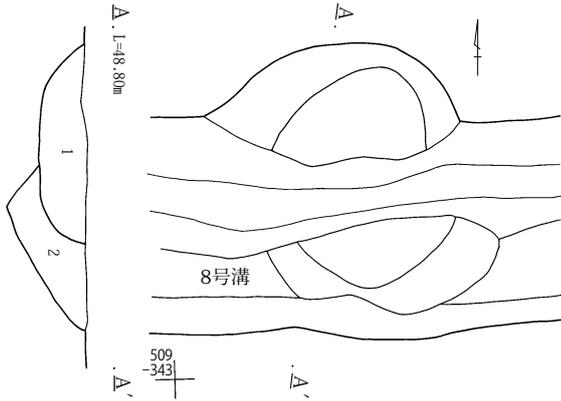


- 1 明暗褐色土 混入物少ない。ローム粒多し。(49号土坑)
- 2 明褐色土 ローム粒・ブロックを混入。(8号溝)



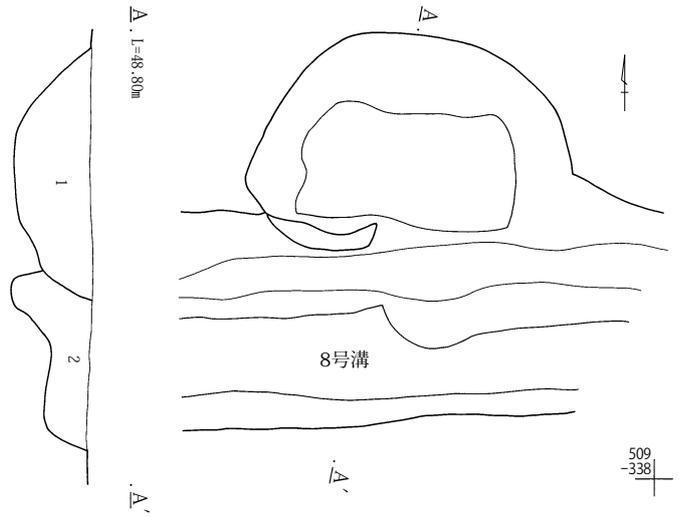
第108図 44～46・48・49号土坑平面図

50号土坑



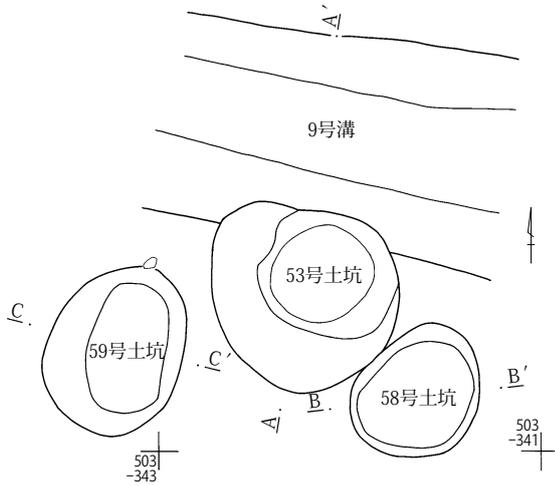
- 1 暗褐色土 ロームブロックを少量混入。(50号土坑)
- 2 暗褐色土 50号土坑よりやや明るい。(8号溝)

51号土坑

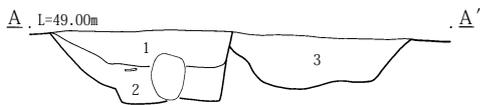


- 1 暗褐色土 ローム大ブロックを多量に混在。(51号土坑)
- 2 暗褐色土 ロームブロックを少量含む。(8号溝)

53・58・59号土坑

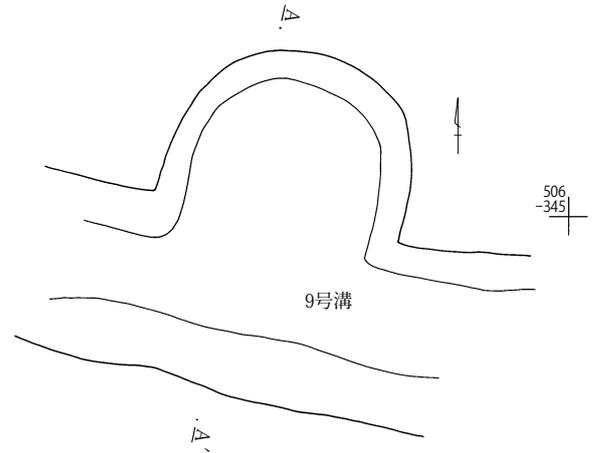


53号土坑



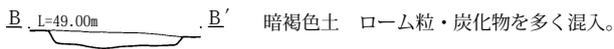
- 1 明褐色砂礫層 細かい砂礫を主体とする。(53号土坑)
- 2 暗褐色土 ローム小ブロックを少量含む。(53号土坑)
- 3 暗黒褐色土 混入物少ない黒土。(9号溝)

52号土坑

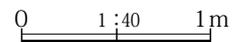
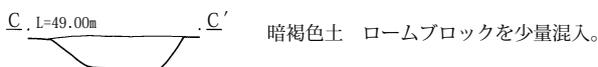


- 1 暗褐色土 混入物少ない。(52号土坑)
- 2 暗黒褐色土 混入物少ないが、1層より黒い。(9号溝)

58号土坑



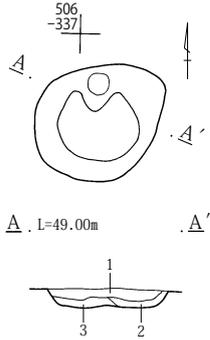
59号土坑



第109図 50～53・58・59号土坑平面図

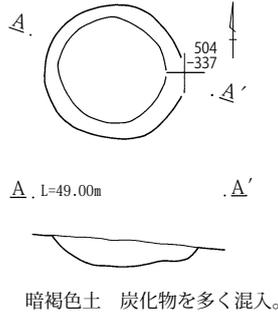
第3章 検出された遺構と遺物

54号土坑

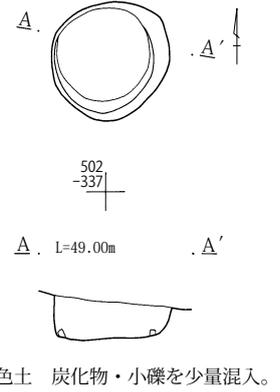


- 1 暗褐色土 炭化物、小礫を混入。
- 2 暗褐色土 1層より明るいが、混入物は少ない。
- 3 明褐色土 ロームブロックを多量に含む。

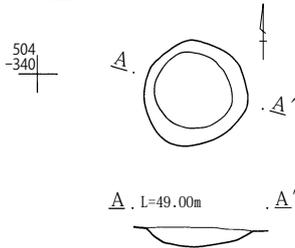
55号土坑



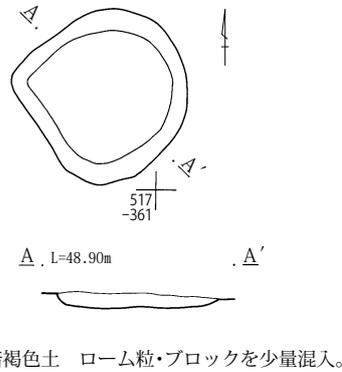
56号土坑



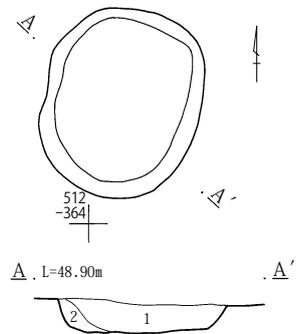
57号土坑



61号土坑

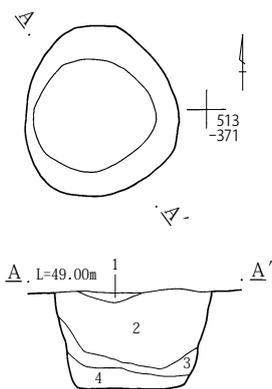


62号土坑



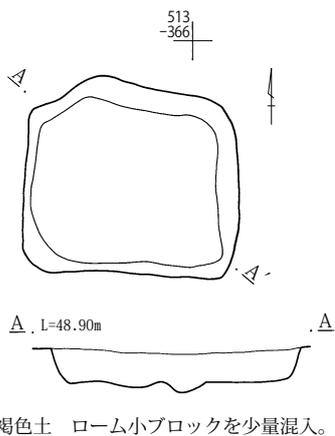
- 1 暗黒褐色土 ロームブロックを少量混入。
- 2 明褐色土 ロームブロックを多量に含む。

64号土坑

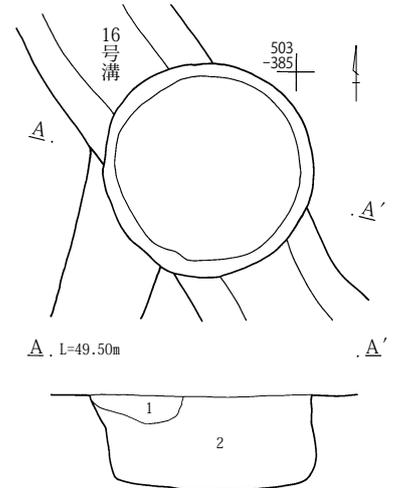


- 1 明暗褐色土 現代の耕作土。
- 2 暗褐色土 ローム小ブロックを多量に混在。
- 3 黄色土 ロームを主体とする。
- 4 暗褐色土 2層より黒く、ローム小ブロックを混入。

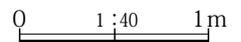
63号土坑



65号土坑

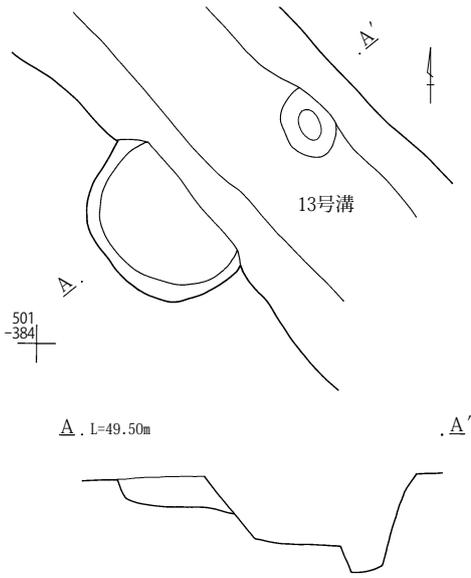


- 1 明暗褐色土 現代の耕作土。
- 2 暗褐色土 上位ほどローム小ブロックを多く混入する。



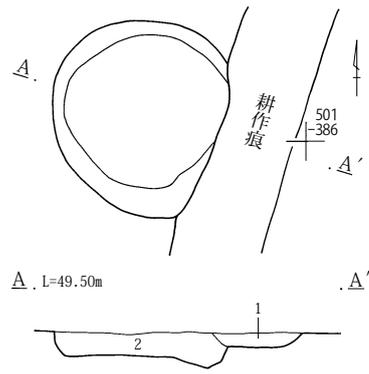
第110図 54～57・61～65号土坑平面図

66号土坑



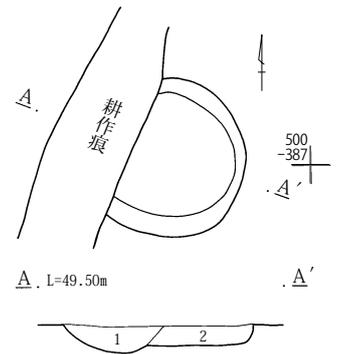
暗褐色土 ローム粒・ブロックを少量混入。

67号土坑



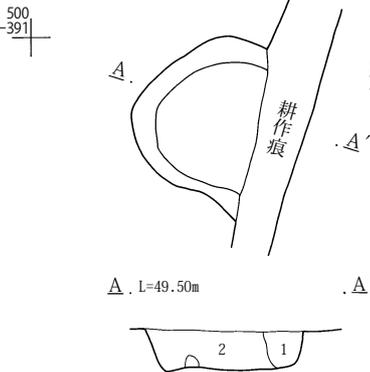
- 1 明暗褐色土 現代の耕作土。
- 2 暗褐色土 ローム粒・ブロックを少量混入。

68号土坑



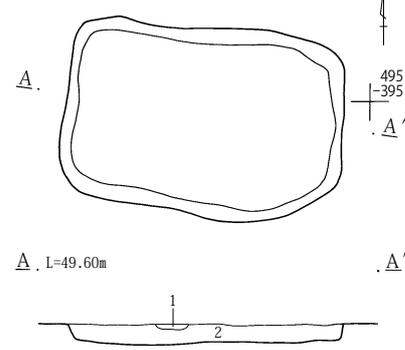
- 1 明暗褐色土 現代の耕作土。
- 2 暗褐色土 ローム粒・ブロックを少量混入。

69号土坑



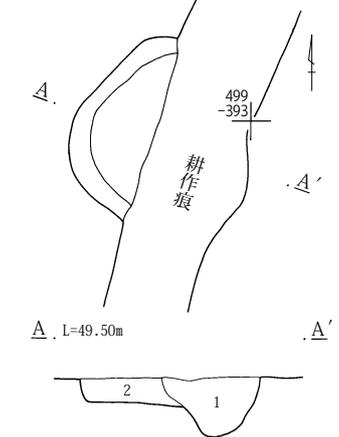
- 1 明暗褐色土 現代の耕作土。
- 2 暗褐色土 ローム小ブロックを少量混在。

70号土坑



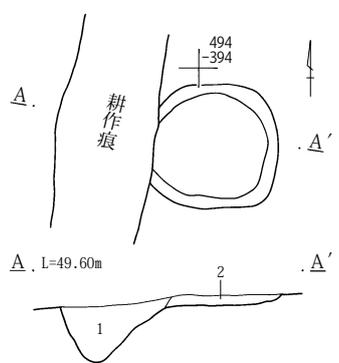
- 1 明暗褐色土 現代の耕作土。
- 2 暗褐色土 ローム粒・小ブロックを少量混在。

71号土坑



- 1 明暗褐色土 現代の耕作土。
- 2 暗褐色土 ローム粒を多く混在。

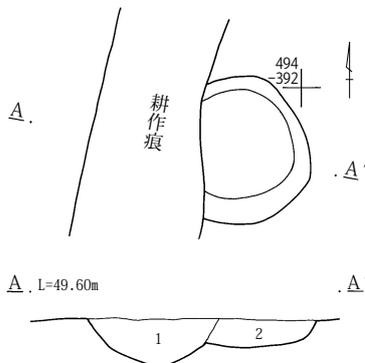
72号土坑



- 1 明暗褐色土 現代の耕作土。
- 2 暗褐色土 ロームブロックを混入。

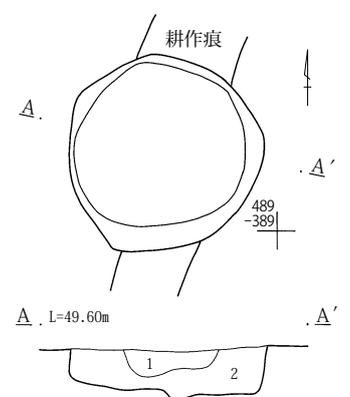
0 1:40 1m

73号土坑



- 1 明暗褐色土 現代の耕作土。
- 2 暗褐色土 ローム小ブロックを少量混入。

74号土坑

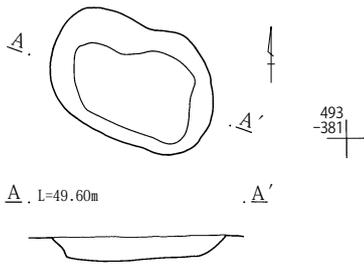


- 1 明暗褐色土 現代の耕作土。
- 2 暗褐色土 ローム小ブロックを少量混入。

第111図 66～74号土坑平面図

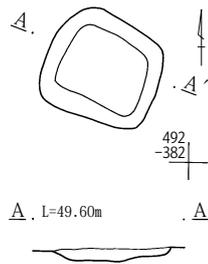
第3章 検出された遺構と遺物

75号土坑



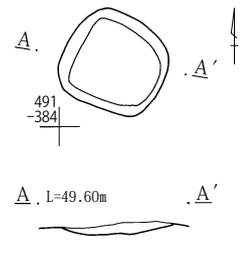
暗褐色土 ロームブロックを混入。炭化物を多く含む。

76号土坑



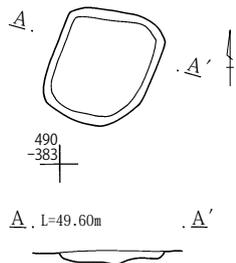
暗褐色土 ローム粒を含み、炭化物が多い。

77号土坑



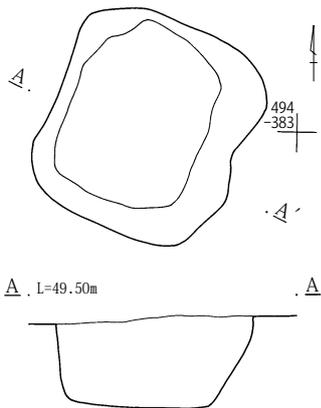
暗褐色土 ローム粒を含み、炭化物が多い。

78号土坑



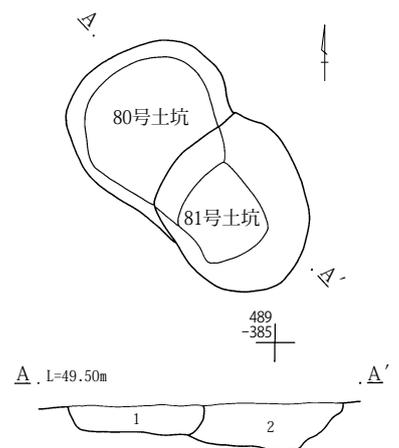
暗褐色土 ローム粒を含み、炭化物が多い。

79号土坑



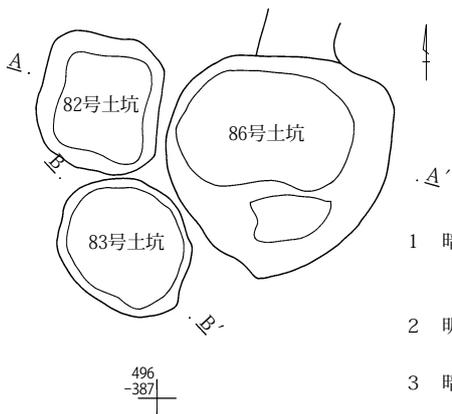
暗黄褐色土 ローム小ブロックをかなり多量に混在させる。

80・81号土坑



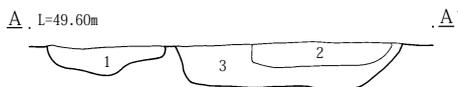
- 1 暗褐色土 ローム小ブロックを少量混入する。(80号土坑)
- 2 明暗褐色土 ローム粒・小ブロックを少量混入し、1層より明るい。(81号土坑)

82・83・86号土坑

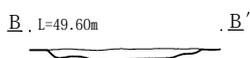


- 1 暗褐色土 ローム小ブロックを混在。(82号土坑)
- 2 明暗褐色土 現代の耕作土。
- 3 暗褐色土 ローム小ブロックを混在。(86号土坑)

82・86号土坑

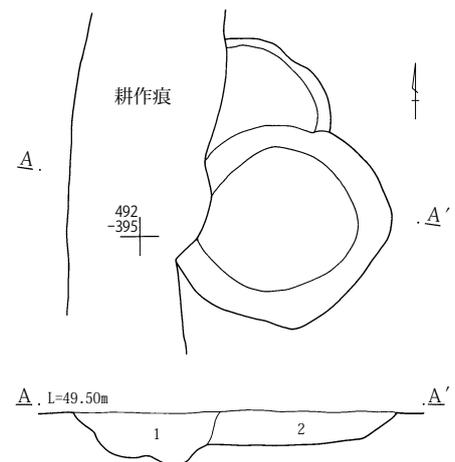


83号土坑

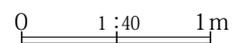


暗褐色土 ロームブロックを少量混入する。

84号土坑

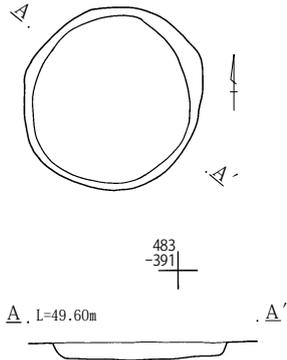


- 1 明暗褐色土 現代の耕作土。
- 2 暗褐色土 ローム小ブロックを少量混入する。



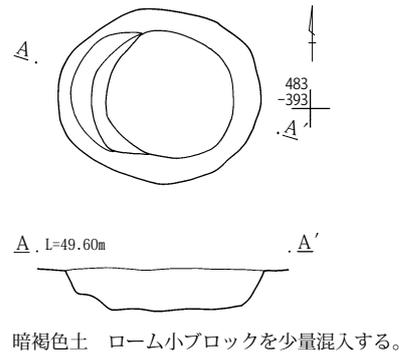
第112図 75～84・86号土坑平面図

87号土坑



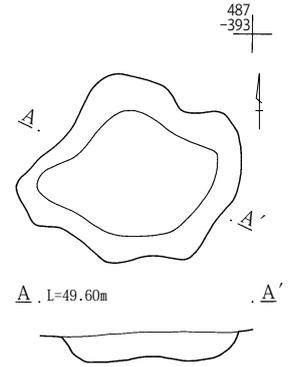
暗褐色土 ローム小ブロックを少量混入する。

88号土坑



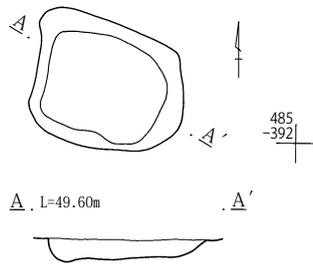
暗褐色土 ローム小ブロックを少量混入する。

89号土坑



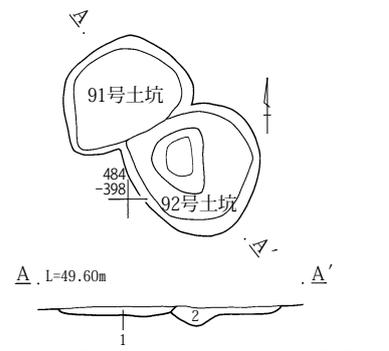
暗褐色土 ローム小ブロックを少量混入する。

90号土坑



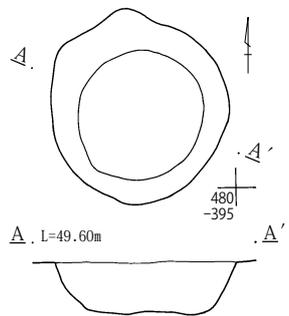
暗褐色土 ローム小ブロックを少量混入する。

91・92号土坑



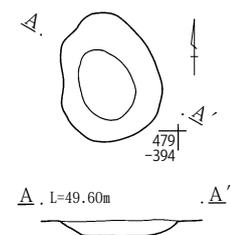
- 1 暗褐色土 ロームブロックを少量混入する。(91号土坑)
- 2 暗褐色土 1層よりやや明るく、ロームブロックを少量混入する。(92号土坑)

93号土坑



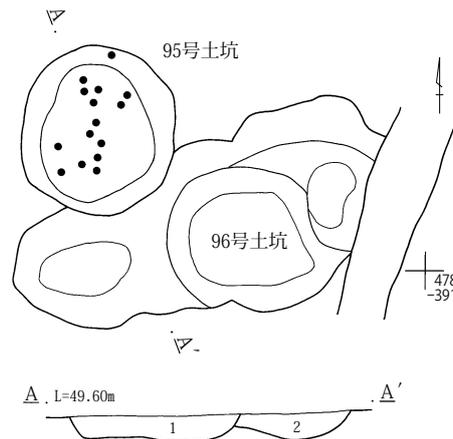
暗褐色土 ローム小ブロックを多量に含む。

94号土坑



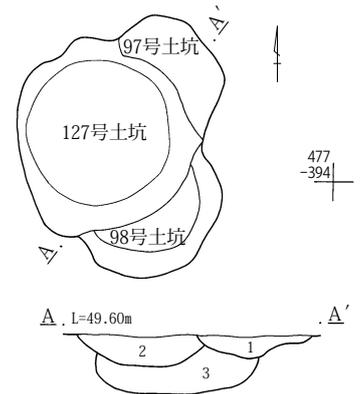
暗褐色土 ローム小ブロックを少量混入する。

95・96号土坑

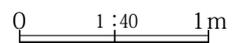


- 1 暗褐色土 ローム小ブロックを僅かに、焼土粒を多く含む。(95号土坑)
- 2 暗褐色土 ローム小ブロックと焼土粒を含み、1層より暗い。(96号土坑)

97・98・127号土坑



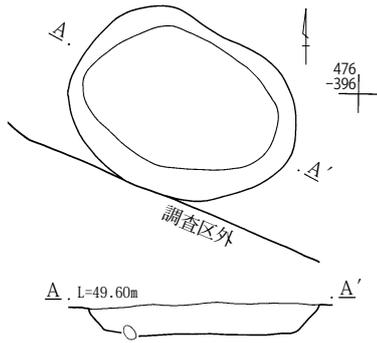
- 1 明暗褐色土 ローム粒・ブロックを多く含む。(97号土坑)
- 2 暗褐色土 ローム小ブロックを少量含む。(98号土坑)
- 3 暗褐色土 2層より暗く、焼土粒を僅かに含む。(127号土坑)



第113図 87～98・127号土坑平面図

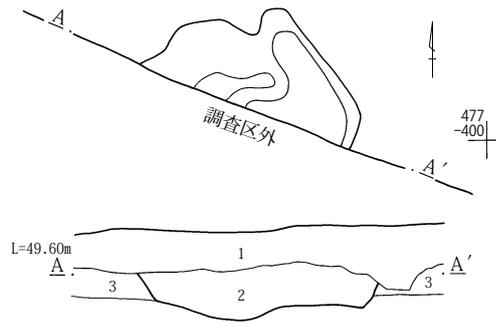
第3章 検出された遺構と遺物

99号土坑



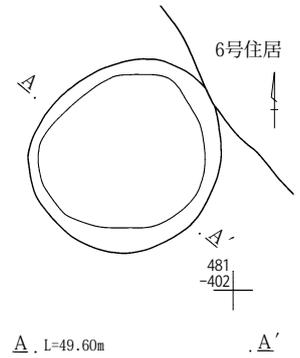
暗褐色土 ローム小ブロックを僅かに含む。

100号土坑



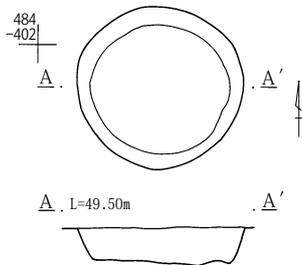
- 1 暗褐色土 表土。
- 2 暗褐色土 砂質ぎみで、締まりが弱い。
- 3 黄褐色土 ローム漸移層。

101号土坑



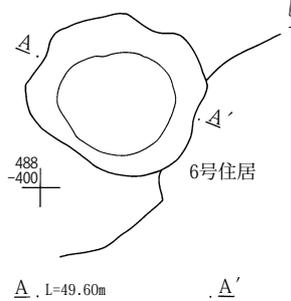
暗黄褐色土 ロームブロックを多量に含む。

102号土坑



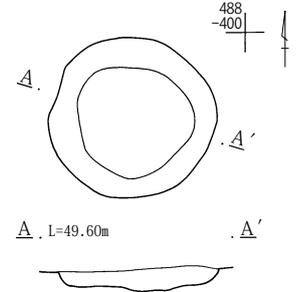
暗黒褐色土 ローム小ブロックを少量に含む。

103号土坑



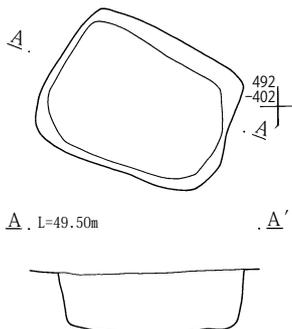
暗褐色土 ローム小ブロックを僅かに含む。

104号土坑



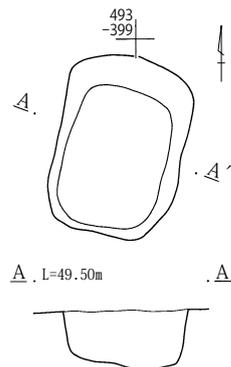
暗褐色土 ロームブロックを混入。

105号土坑



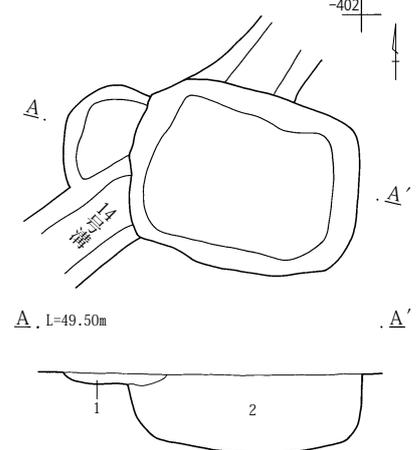
暗褐色土 汚れたロームブロックを僅かに含む。

106号土坑

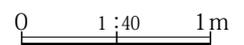


暗褐色土 下位に汚れたロームブロックを少量含む。

107号土坑

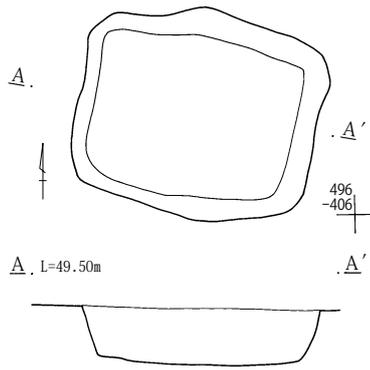


- 1 暗褐色土 2層より明るく、ロームブロックを混入。
- 2 暗褐色土 混入物少なく暗い。108号土坑と近似。(107号土坑)



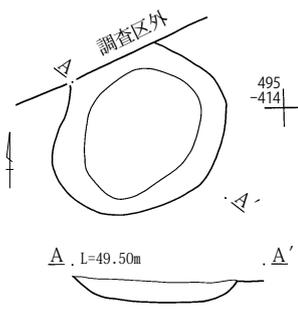
第114図 99～107号土坑平面図

108号土坑



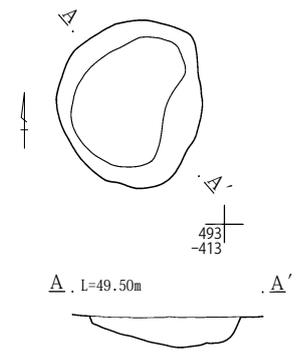
暗褐色土
混入物少なく暗い。107号土坑と近似。

109号土坑



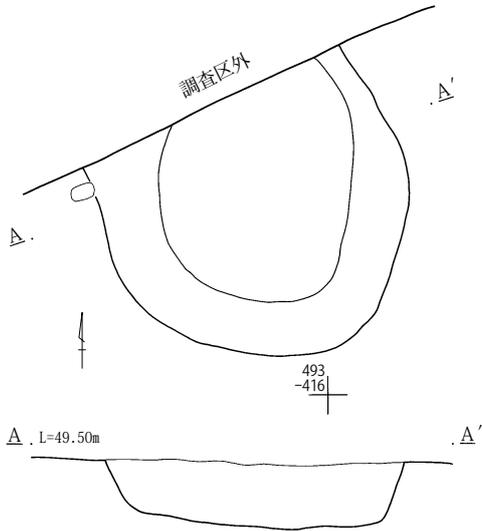
暗褐色土 ローム小ブロックを少量含む。

110号土坑



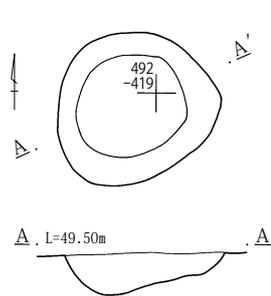
暗褐色土 ローム小ブロックを少量含む。

112号土坑



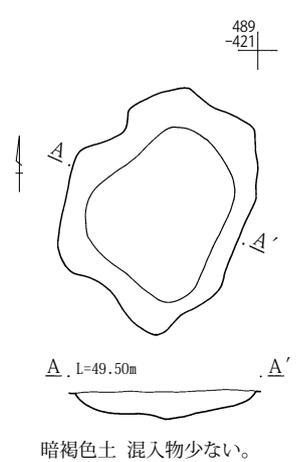
暗褐色土 ローム小ブロックを少量含む。

113号土坑



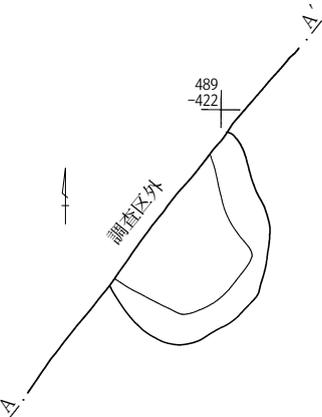
明暗褐色土 ローム粒を多く混入し明るい。

115号土坑

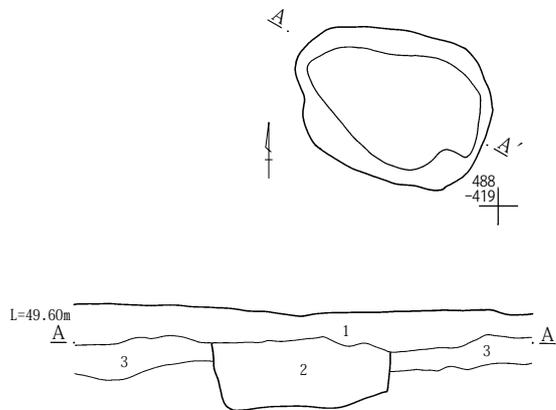


暗褐色土 混入物少ない。

114号土坑

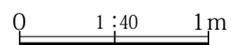


116号土坑



暗褐色土 混入物少ない。

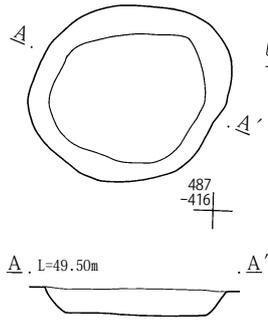
- 1 暗褐色土 表土。(耕作土)
- 2 黒褐色土 ローム粒・小ブロックを少量含む。締りやや弱い。(114号土坑)
- 3 暗褐色土 混入物のあまり見られない堆積層。



第115図 108～110・112～116号土坑平面図

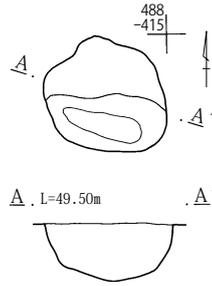
第3章 検出された遺構と遺物

117号土坑



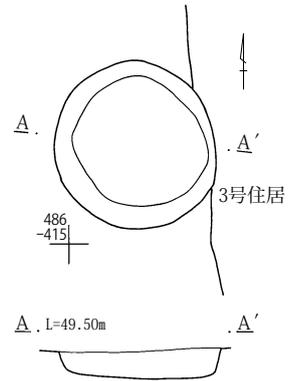
暗褐色土 混入物なし。

118号土坑



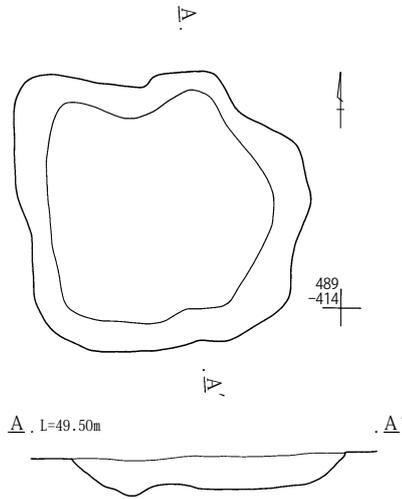
暗褐色土 ロームブロックを含む。

119号土坑



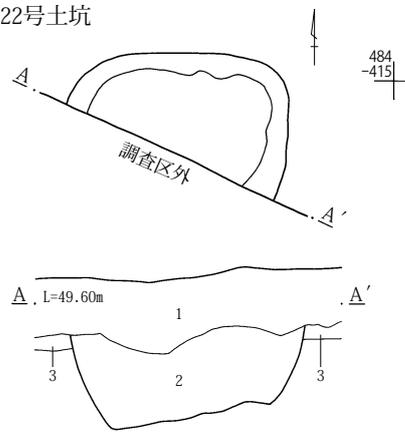
暗褐色土 ロームブロックを少量含む。

120号土坑



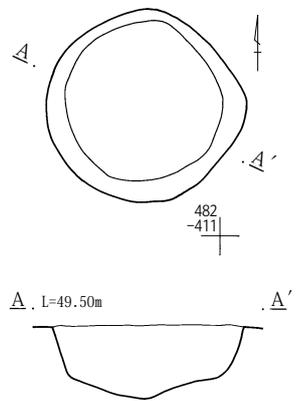
暗褐色土 混入物なし。

122号土坑



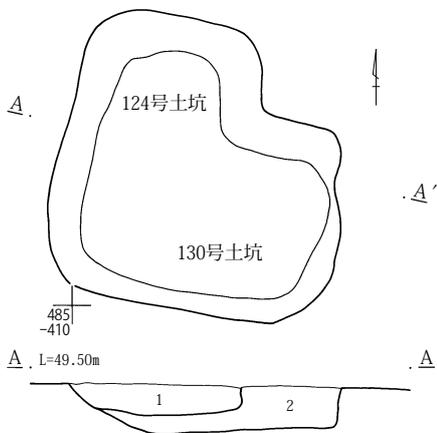
- 1 暗褐色土 表土。(耕作土)
- 2 暗褐色土 若干砂性を帯び、縮まりやや弱い。
- 3 暗褐色土 混入物のあまり見られない堆積層。

123号土坑



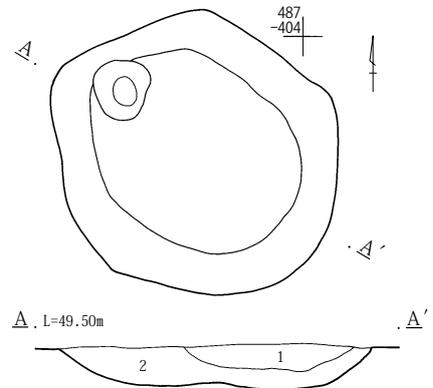
暗褐色土 混入物はほとんどない。

124・130号土坑

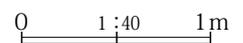


- 1 暗褐色土 2層より暗く、混入物ほとんどない。(124号土坑)
- 2 暗褐色土 ロームブロックを少量含む。(130号土坑)

125号土坑

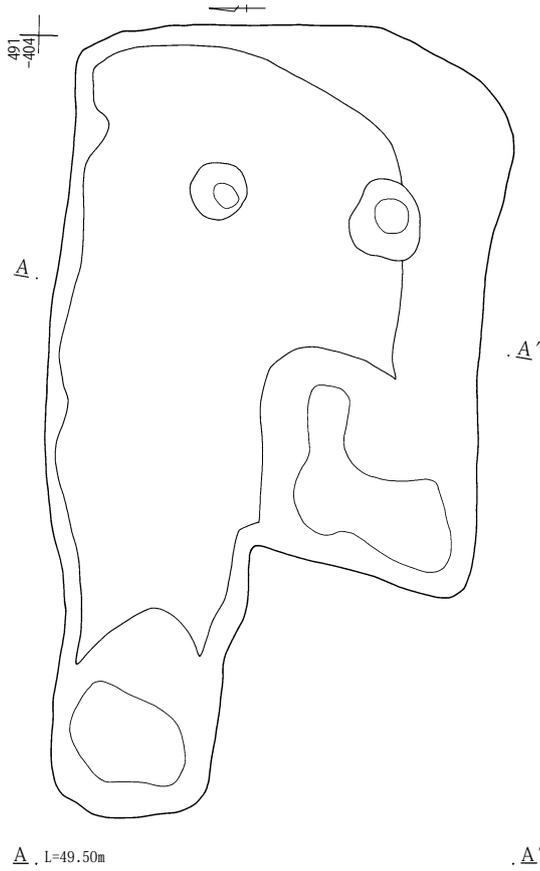


- 1 灰黄褐色土 灰黄色ロームブロックを多量に混在。
- 2 暗褐色土 混入物少ない。



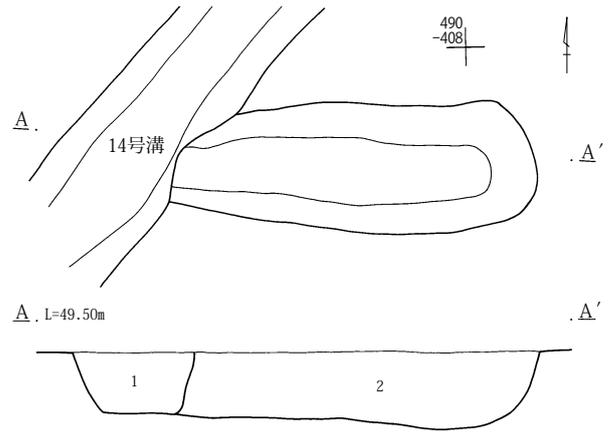
第116図 117～120・122～125・130号土坑平面図

126号土坑



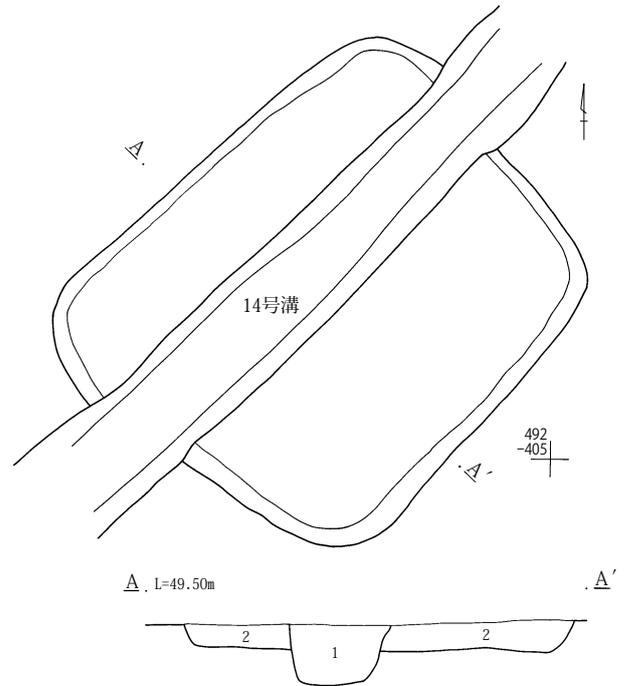
暗褐色土 混入物少なく、締まりが弱い。

128号土坑



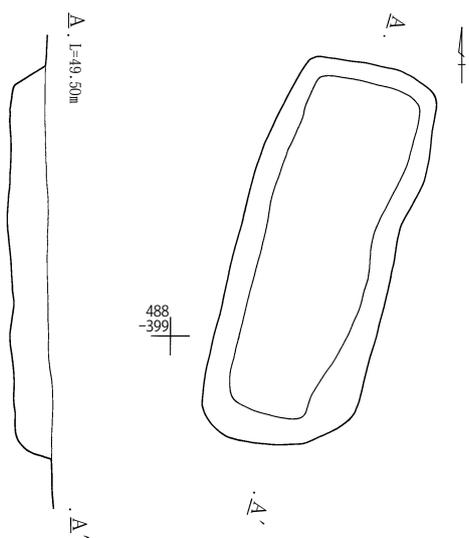
- 1 暗黒褐色土 2層より黒く、砂質ぎみ。(14号溝)
- 2 暗褐色土 混入物少ない。(128号土坑)

129号土坑



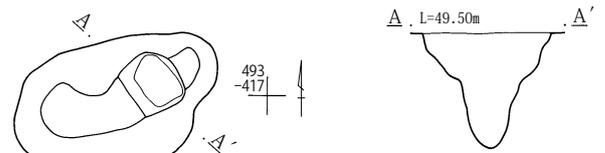
- 1 暗黒褐色土 黒く、砂質ぎみ。(14号溝)
- 2 暗褐色土 1層よりやや明るい。混入物少なく、やや粘質。(129号土坑)

131号土坑

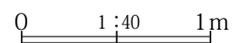


暗褐色土 ロームブロックを含む。

132号土坑



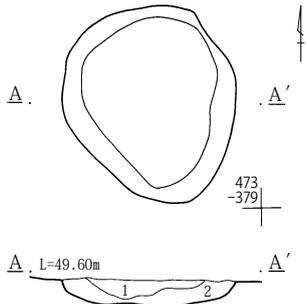
暗褐色土 ロームブロックを少量含む。



第117図 126・128・129・131・132号土坑平面図

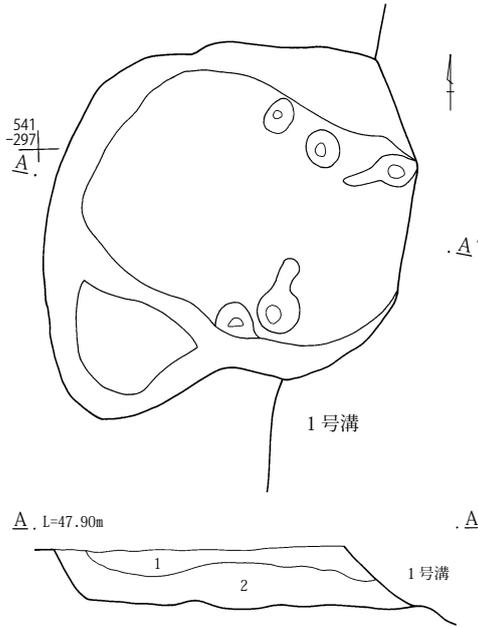
第3章 検出された遺構と遺物

133号土坑



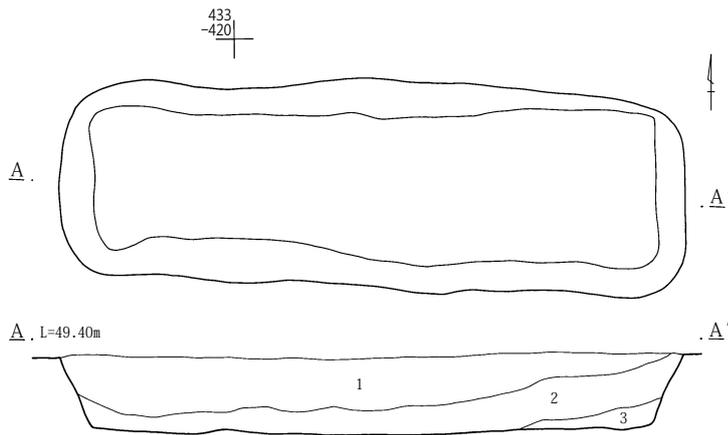
- 1 暗褐色土 ローム土、炭化物を含む。
- 2 黄褐色土 暗褐色土を少量含む。

134号土坑



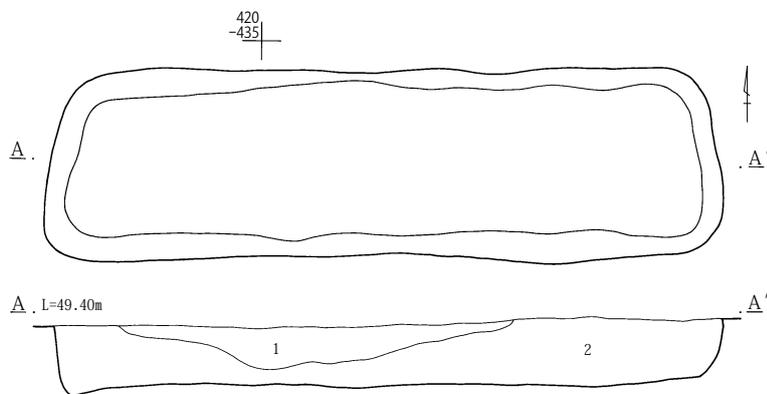
- 1 黒褐色土 砂質ぎみ。ローム粒をやや多く、白色軽石粒を微量含む。
- 2 黒褐色土 ローム粒、小ブロックを少量含み、白色軽石粒を微量含む。

138号土坑

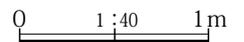


- 1 暗褐色土 ローム小ブロックを多量含む。
- 2 黒褐色土 ローム粒を微量含む。
- 3 暗褐色土 ローム小ブロックを多量含む。

139号土坑

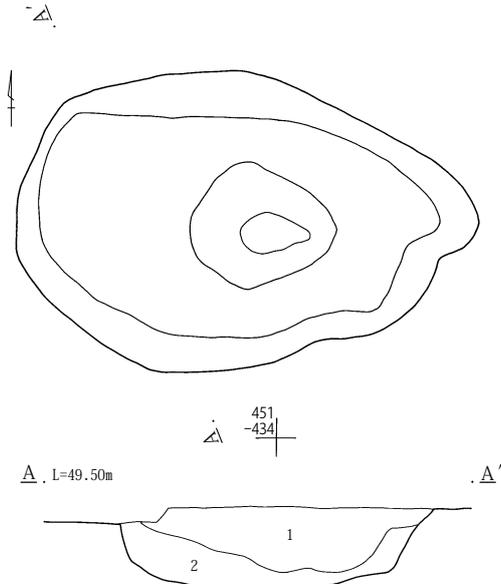


- 1 暗褐色土 ローム粒を少量含み、砂質ぎみ。
- 2 黄褐色土 ローム小ブロックを密に、暗褐色土を少量含む。焼土粒を微量含む。



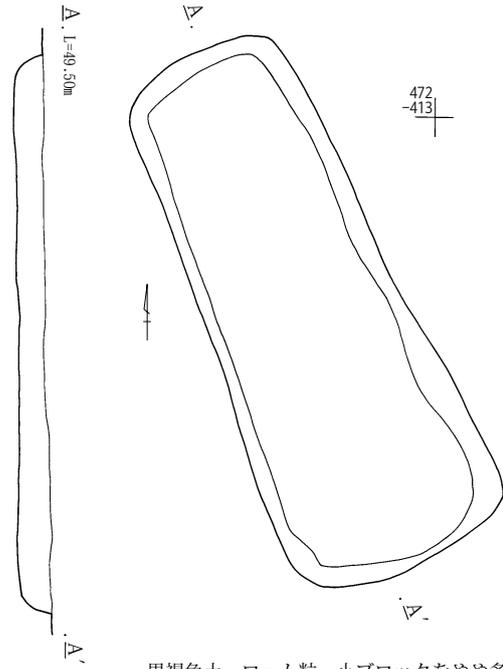
第118図 133・134・138・139号土坑平面図

140号土坑



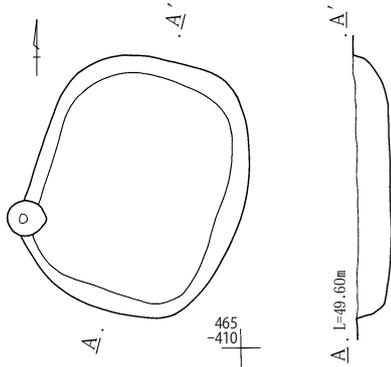
- 1 黒褐色土 白色の軽石粒を含む。やや粘質。
- 2 暗褐色土 ローム粒を含む。

141号土坑



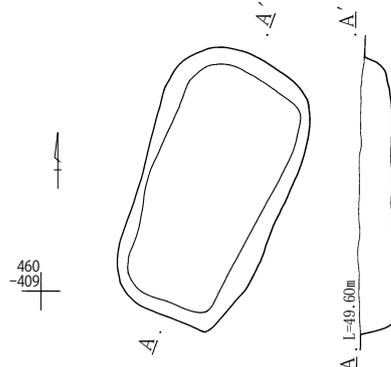
黒褐色土 ローム粒・小ブロックをやや多く含む。

142号土坑



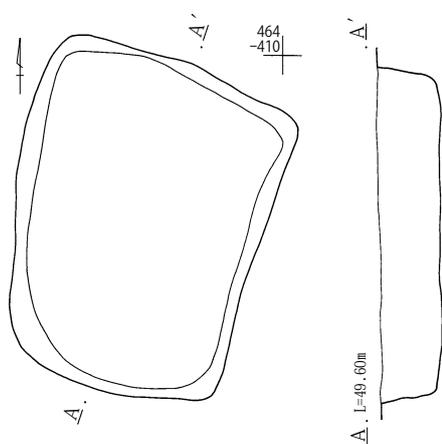
暗褐色土 ローム粒をやや多く、黒褐色土粒を少量含む。

144号土坑



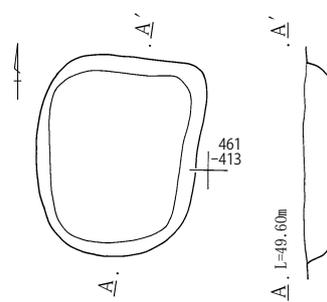
暗褐色土 ローム小ブロック・白色軽石粒を少量含む。

143号土坑

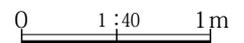


暗褐色土 ローム粒を多量に、黒褐色土小ブロックを少量含む。

145号土坑

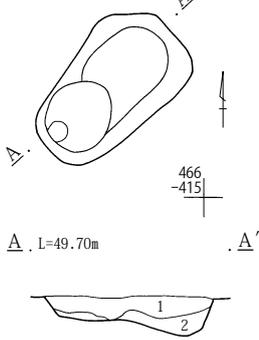


暗褐色土 ローム粒を少量含む。



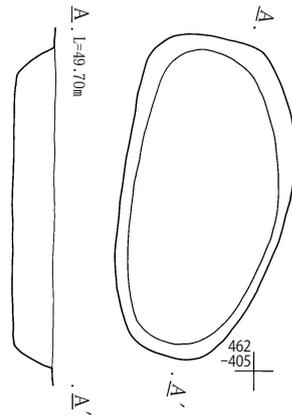
第119図 140～145号土坑平面図

146号土坑



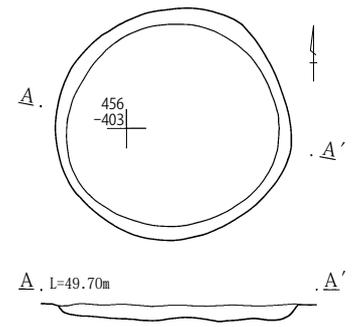
- 1 暗褐色土 ローム小ブロックを多く含む。
- 2 黄褐色土 暗褐色土を少量含む。

147号土坑



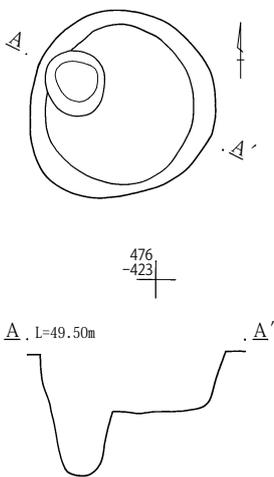
暗褐色土 ローム小ブロックをやや多く、
白色軽石粒を少量含む。

148号土坑

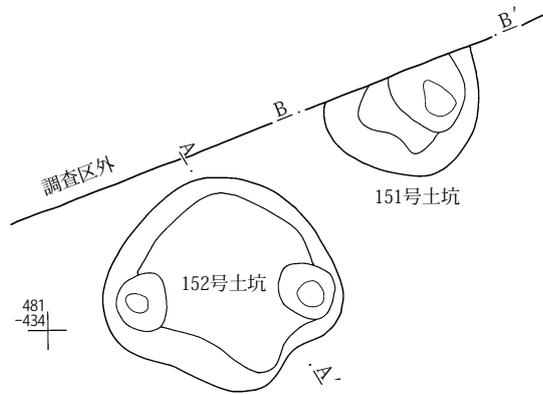


暗褐色土 ローム粒・小ブロックを多く含む。

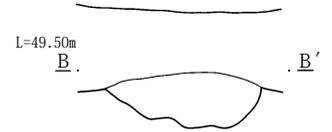
150号土坑



151・152号土坑

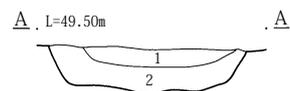


151号土坑



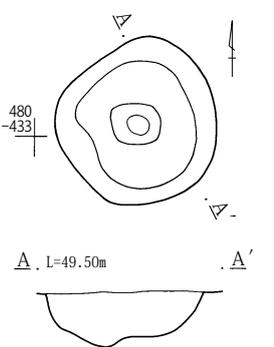
暗褐色土
ローム小ブロックを多く含み、砂質ぎみ。

152号土坑



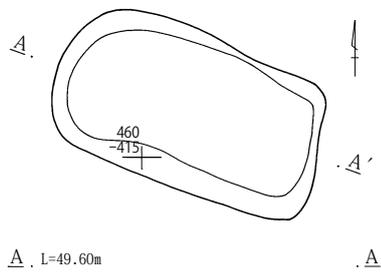
- 1 黒褐色土 白色軽石粒・ローム小ブロックを少量含む。
- 2 黄褐色土 ローム土を主体とし、暗褐色土を少量含む。

153号土坑



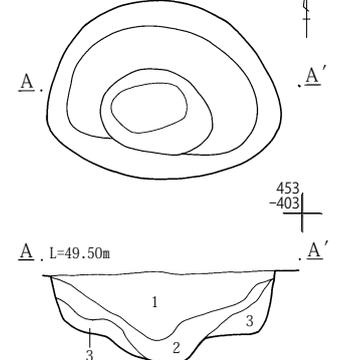
暗褐色土 白色軽石粒を少量含む。

155号土坑

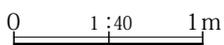


暗褐色土 ローム粒を少量含む。

156号土坑

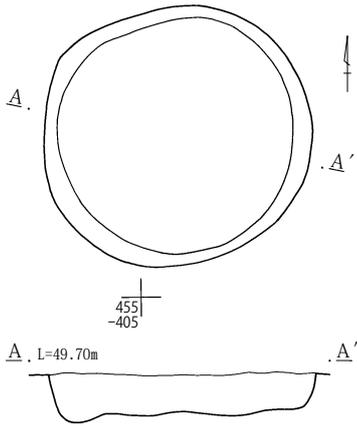


- 1 暗褐色土 白色軽石粒を少量、ローム小ブロックを微量含む。
- 2 暗褐色土 ローム土を多く含み、明るい。
- 3 黄褐色土 ローム土を主体とし、暗褐色土小ブロックを少量含む。



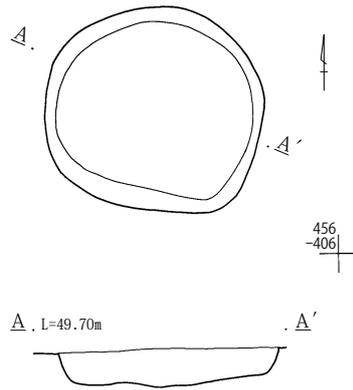
第120図 146～148・150～153・155・156号土坑平面図

157号土坑



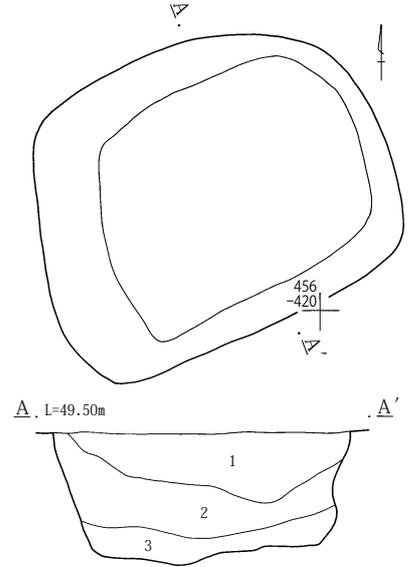
暗褐色土 ローム粒・小ブロックを多く含む。

158号土坑



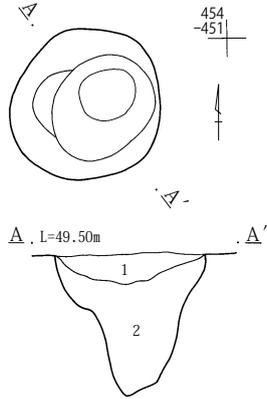
黒褐色土 ローム粒・小ブロックを少量含む。やや粘質。

159号土坑



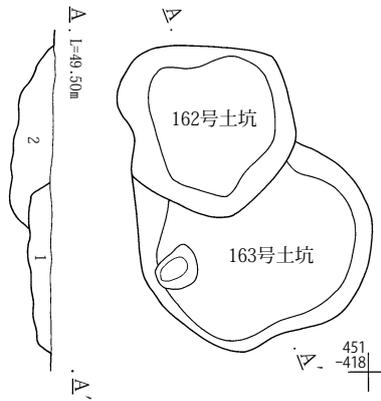
- 1 暗褐色土 白色軽石粒を少量含む。やや砂質。
- 2 暗褐色土 白色軽石粒・ローム小ブロックを少量含む。
- 3 暗褐色土 ローム小ブロックをやや多く、白色軽石粒を微量含む。

160号土坑



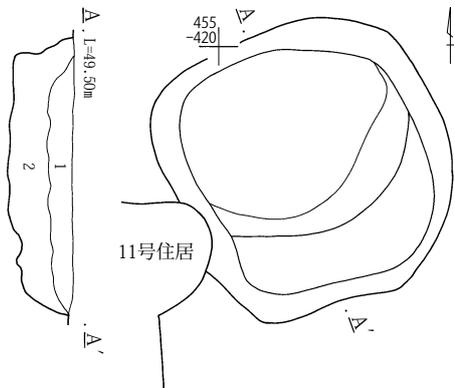
- 1 暗褐色土 白色軽石粒を少量含む。
- 2 暗褐色土 白色軽石粒を微量、ローム粒・小ブロックを少量含む。

162・163号土坑



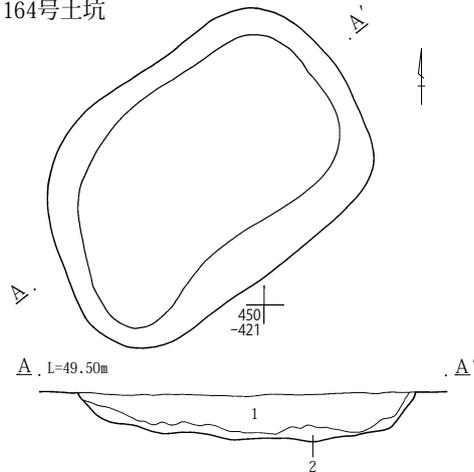
- 1 黒褐色土 白色軽石粒・ローム粒を微量含む。(163号土坑)
- 2 暗褐色土 ローム粒・小ブロックを少量含む。(162号土坑)

161号土坑

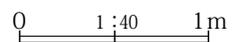


- 1 暗褐色土 白色軽石粒を少量含む。
- 2 暗褐色土 黒褐色・ローム小ブロックを少量含む。

164号土坑



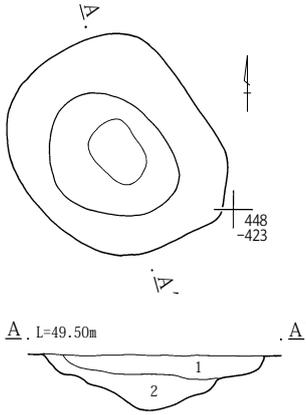
- 1 暗褐色土 白色軽石粒を微量、ローム小ブロックを少量含む。
- 2 暗褐色土 ローム小ブロックをやや多く含む。



第121図 157～164号土坑平面図

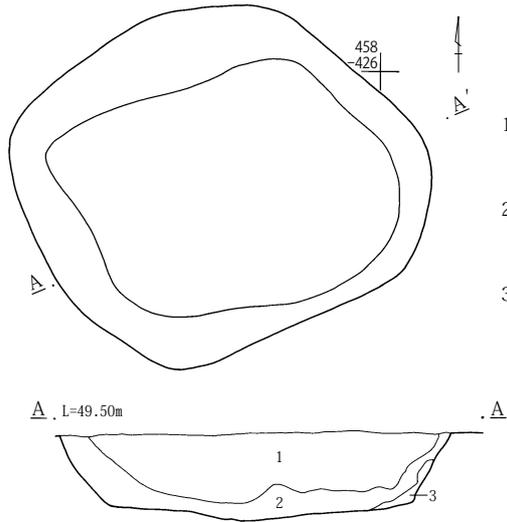
第3章 検出された遺構と遺物

165号土坑



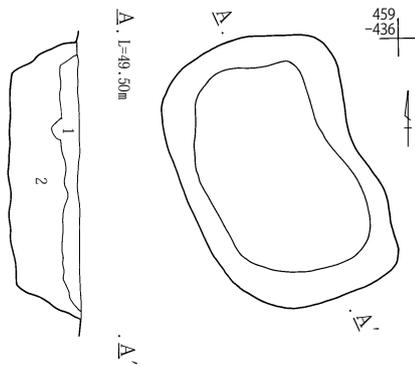
- 1 暗褐色土 ローム小ブロックを少量、白色軽石粒を微量含む。
- 2 黄褐色土 黒褐色小ブロックを少量含む。

166号土坑



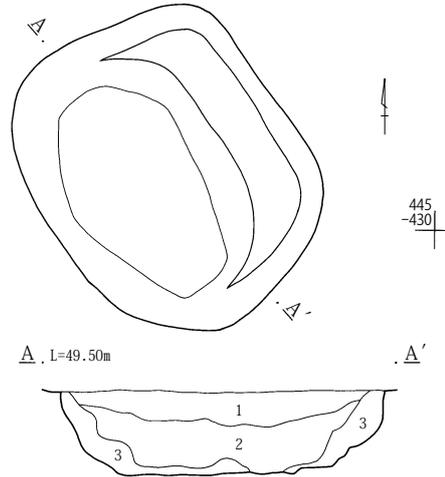
- 1 暗褐色土
白色軽石粒を少量、ローム粒を微量含む。
- 2 暗褐色土
白色軽石粒を微量、ローム小ブロックを少量含む。
- 3 黄褐色土
ローム土を主体に、暗褐色土を少量含む。

167号土坑



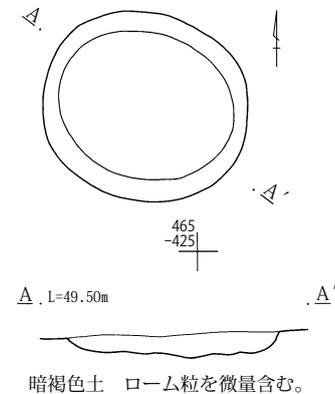
- 1 暗褐色土 白色軽石粒を少量、焼土粒を微量含む。
- 2 暗褐色土 白色軽石粒・焼土粒を微量含む。

171号土坑

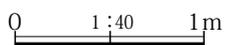


- 1 暗褐色土 白色軽石粒を少量、焼土粒を微量含む。やや粘質。
- 2 暗褐色土 白色軽石粒・焼土粒を微量、ローム粒を少量含む。
- 3 黒褐色土 ローム小ブロックをやや多く含む。

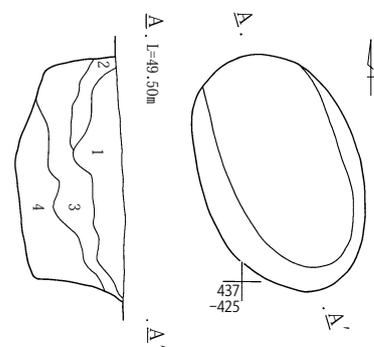
170号土坑



暗褐色土 ローム粒を微量含む。



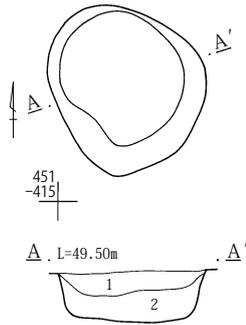
172号土坑



- 1 暗褐色土 白色軽石粒を少量、ローム粒を微量含む。
- 2 暗褐色土 ローム粒を少量含む。
- 3 暗褐色土 ローム粒・白色軽石粒を微量含む。
- 4 暗褐色土 ローム小ブロックを少量含む。

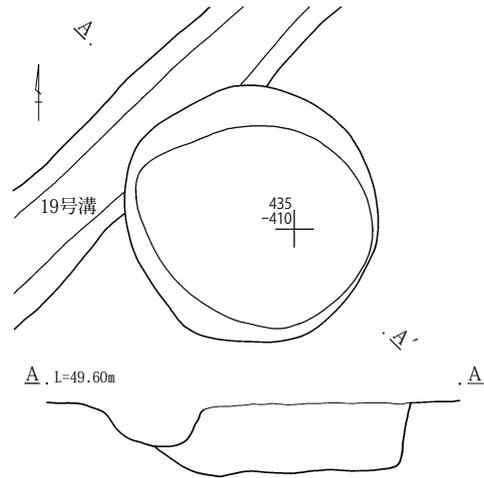
第122図 165～167・170～172号土坑平面図

173号土坑



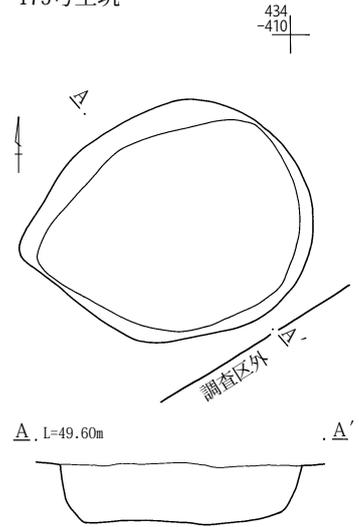
- 1 暗褐色土 白色軽石粒・ローム小ブロックを微量含む。
- 2 黄褐色土 ロームを主体に、暗褐色土小ブロックを少量含む。

174号土坑



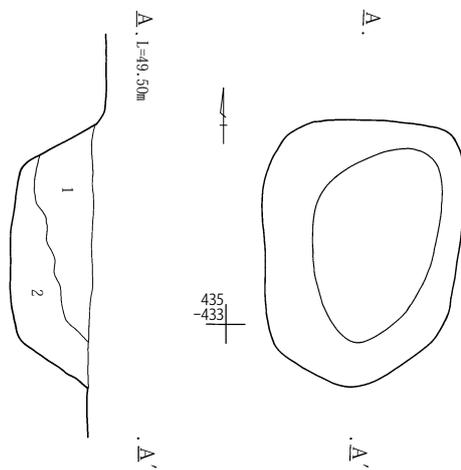
暗褐色土 ローム粒・小ブロックを多く、黒褐色土小ブロックを少量含む。

175号土坑



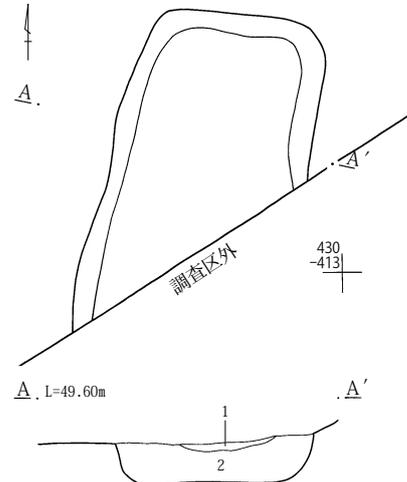
黒褐色土 ローム粒・小ブロックをやや多く含む。若干粘質。

176号土坑



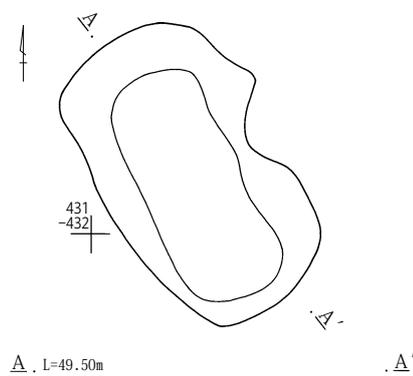
- 1 暗褐色土 ローム小ブロックを多く、白色軽石粒を微量含む。
- 2 暗褐色土 ローム粒を微量含む。

178号土坑



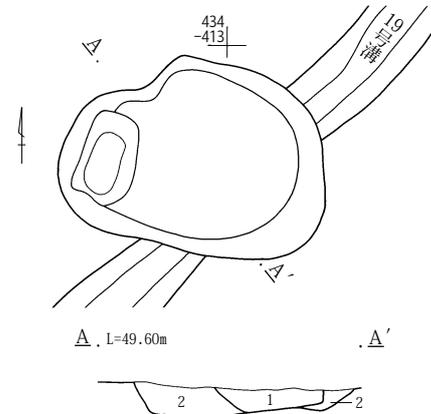
- 1 暗褐色土 表土。砂質やや強い。
- 2 黒褐色土 ローム粒・小ブロックを少量含む。

177号土坑

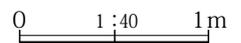


- 1 黒褐色土 ローム粒を微量含む。やや粘質。
- 2 暗褐色土 ローム粒をやや多く含む。

179号土坑



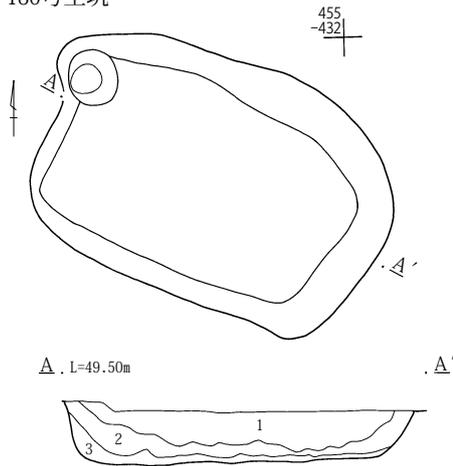
- 1 黒褐色土 ローム粒を少量含む。やや粘質。(19号溝)
- 2 黒褐色土 ローム粒・小ブロックを微量含む。(179号土坑)



第123図 173～179号土坑平面図

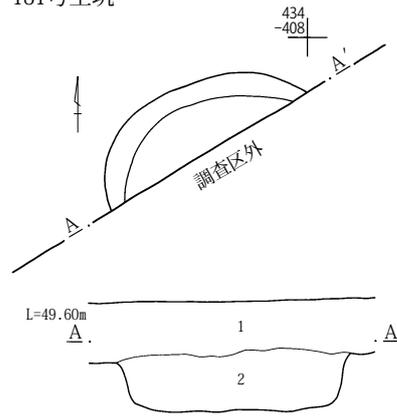
第3章 検出された遺構と遺物

180号土坑



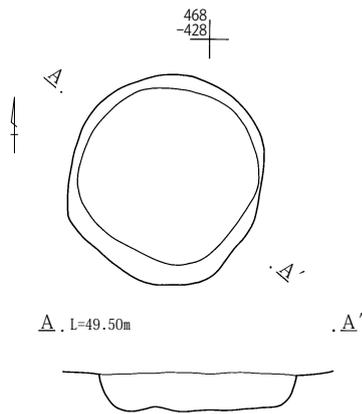
- 1 暗褐色土 白色軽石粒を少量、ローム粒を微量含む。
- 2 黒褐色土 ローム粒・小ブロックを少量含む。やや粘質。
- 3 暗褐色土 ローム土を多量に混入。

181号土坑



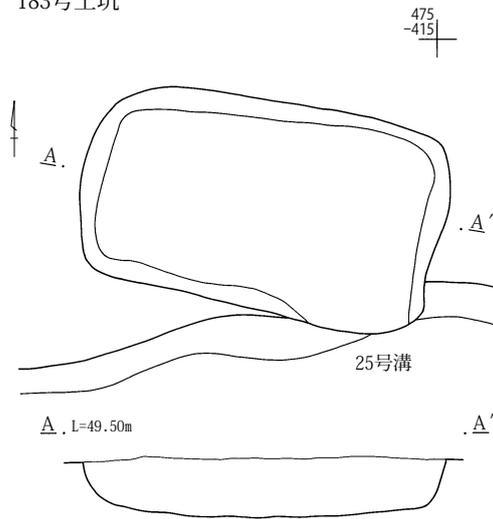
- 1 暗褐色土 表土。砂質やや強い。
- 2 黒褐色土 ローム小ブロックをやや多く含む。

182号土坑



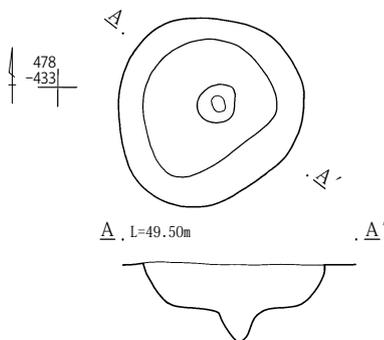
暗褐色土 白色軽石粒を微量含む。

183号土坑



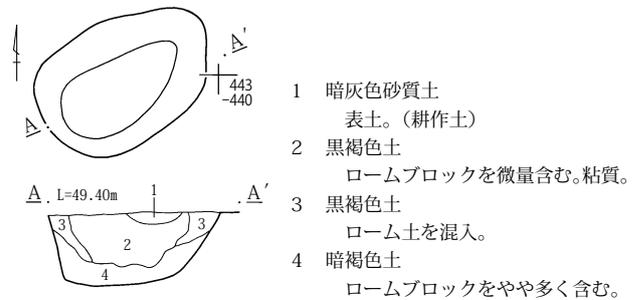
黒褐色土 白色軽石粒を微量含む。

184号土坑

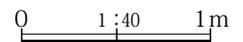


暗褐色土 ローム小ブロックを少量、焼土粒を微量含む。

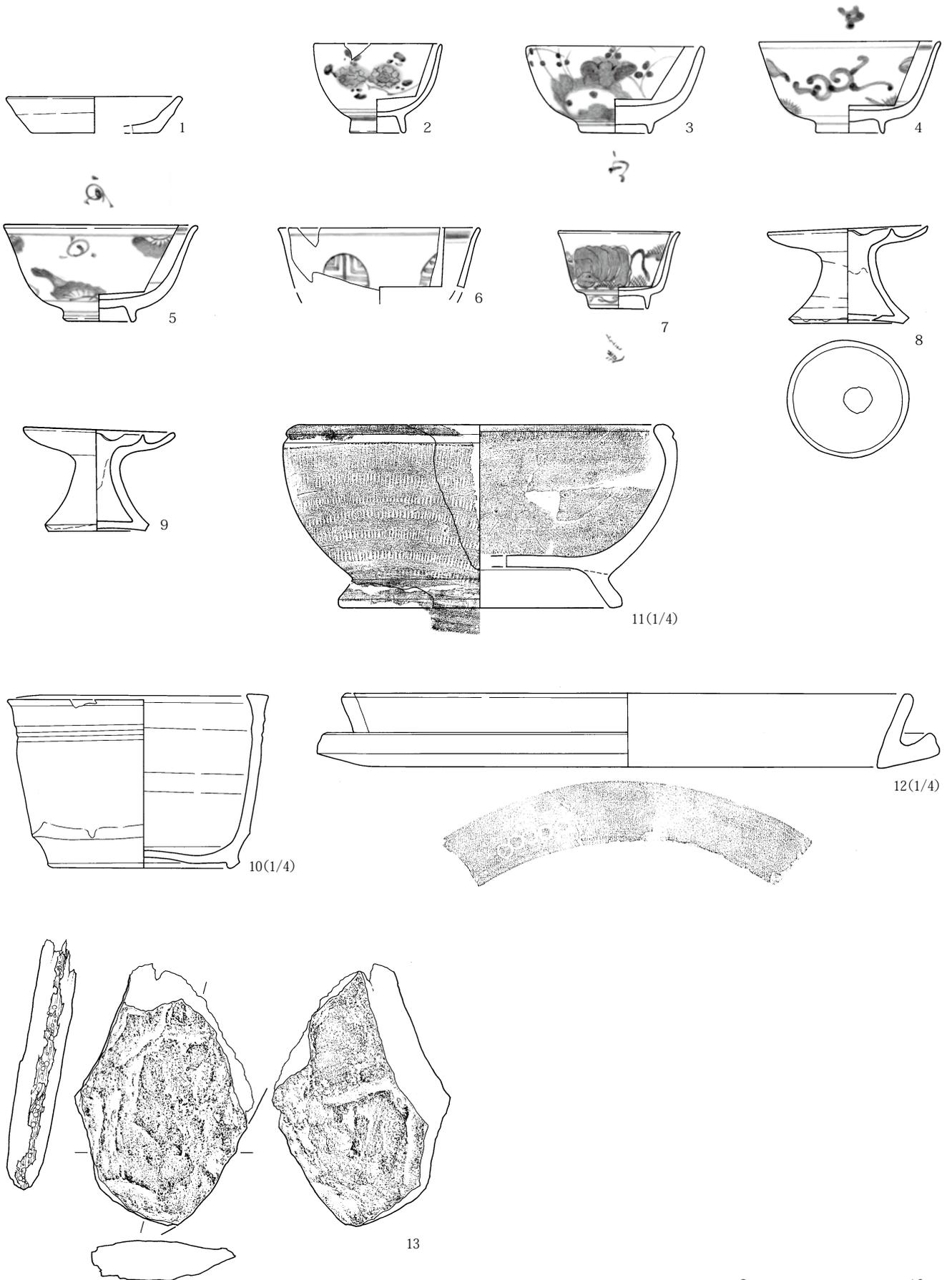
185号土坑



- 1 暗灰色砂質土 表土。(耕作土)
- 2 黒褐色土 ロームブロックを微量含む。粘質。
- 3 黒褐色土 ローム土を混入。
- 4 暗褐色土 ロームブロックをやや多く含む。



第124図 180～185号土坑平面図



第125図 1号土坑出土遺物

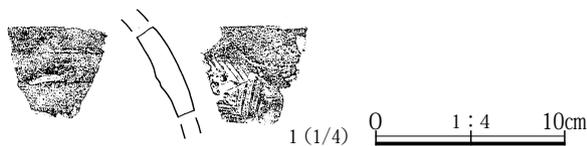
第3章 検出された遺構と遺物

第30表 1号土坑出土遺物観察表

挿図番号 図版番号		NO.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値(cm)		胎土／焼成／ 色調	成形・整形の特徴	摘要
第125図 PL.43		1	須恵器 杯	埋土中 口縁部～底部片	口 9.4 底 6.9	高 2.0	細砂粒／酸化焰／ 鈍い橙	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転ヘラナデか。	

挿図番号 図版番号		NO.	種類 器種	出土位置 残存率	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	色調	成形・整形の特徴	備考
第125図 PL.43		2	肥前磁器 小碗	埋土中 ほぼ完形	6.9	3.0	4.9	白	高台はやや高い。外面の主文様は花と折れ枝、裏文様は不明文様を2カ所に描く。高台脇と高台境に細線による2重圏線。やや焼成不良で不規則な貫入がはいる。	
第125図 PL.43		3	肥前磁器 碗	埋土中 ほぼ完形	9.5	4.0	4.8	灰白	外面は雪輪梅樹文。高台内に不明銘。	波佐見系
第125図 PL.43		4	瀬戸・美濃磁器 端反碗	埋土中 体部1/3欠	9.8	3.8	4.9～ 5.0	白	外面は3方の唐草文間に不明文様を配する。不明文様は素地に釘彫りで文様を描いた後に濃みを入れる。口縁部内面に幅広と細線による圏線各1条。底部内面、2重圏線内に不明文様。	
第125図 PL.43		5	瀬戸・美濃磁器 端反碗	埋土中 ほぼ完形	10.3	4.0	5.3	白	器壁やや厚い。外面に不明文様を上下に入れ替え、各3カ所に描く。口縁部内面に幅広と細線による圏線各1条。底部内面、2重圏線内に不明文様。	
第125図 PL.43		6	瀬戸・美濃磁器 端反碗	埋土中 1/4	(11.0)	—	—	白	口縁部小さく外反。外面に丸文。口縁部内面は幅広と細線各1条の圏線。	
第125図 PL.43		7	肥前磁器か杯	埋土中 完形	6.5	3.1	4.3	白	答鐘弱翁、牧童の一節「笛弄晚風三两聲」、「笛は晚風に弄す三两声」を記し、表に草と笛を吹く牧童、牛を描く。高台内に「○○造」の銘。○は判読不能。	
第125図 PL.43		8	京・信楽系陶器灯 火受台	埋土中 口縁部1/2 欠	(8.7)	6.0	4.9～ 5.3	灰白	受け部を1カ所「U」字状に挟る。脚底部外面から脚外面下端は回転篋削り。脚底部内面から柱部外面下端まで透明に近い灰釉。細かい貫入がはいる。脚底部中央付近を外面側から細かく打ち欠いて円孔を開ける。二次加工後の用途は不明。	
第125図 PL.43		9	京・信楽系陶器灯 火受台	埋土中 口縁部1/2 欠	(8.1)	5.2	5.7	灰白	受け部を1カ所「U」字状に挟る。脚底部外面から脚外面下端は回転篋削り。脚底部内面から柱部外面下端まで透明に近い灰釉。細かい貫入がはいる。	
第125図 PL.43		10	瀬戸・美濃陶器半 胴甕	埋土中 ほぼ完形	19.0	13.0	12.8	鈍い黄 橙	口縁部外面下に2条の凹線。口縁端部は内側に突出し、端部上面は平坦。口縁端部上面に目痕5カ所。体部外面中位以下は回転篋削り。内面から体部外面下位に柿釉。	
第125図 PL.43		11	在地系土器 火鉢	埋土中 体部1/3 底部完	(27.1)	20.7	13.4	暗灰	断面暗灰色、器表付近浅黄橙色、外面器表暗灰色から黒色、内面器表浅黄橙色から暗灰色。高台は貼り付け。外面は回転施文具により施文。口縁端部のみ磨き。	
第125図 PL.43		12	在地系土器 釜輪	埋土中 1/4	(41.4)	—	5.4	灰黄褐	内側の立ち上がりは高い。底面は丸みを有し、「○」の押印を連続して施す。	

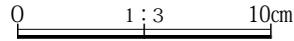
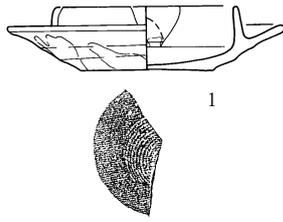
挿図番号 図版番号		NO.	器種 形態・素材	出土位置	長 (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	重 (g)	製作・使用状況	石材
第125図 PL.47		13	板碑片	埋土中	(14.4)	(9.7)	2.3	362.6	加工意図は不明だが、左辺側に敲打・摩耗痕がある。板碑としての外形は右辺側下半のみ残り、裏面側には横位工具痕がある。	雲母石英片岩



第126図 2号土坑出土遺物

第31表 2号土坑出土遺物観察表

挿図番号 図版番号		NO.	種類 器種	出土位置 残存率	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	色調	成形・整形の特徴	備考
第126図		1	常滑陶器 甕	埋土中 肩部片	—	—	—	灰	外面器表は橙色。外面に押印状の叩き目。	中世

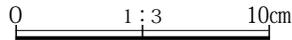
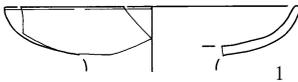


第127図 11号土坑出土遺物

第32表 11号土坑出土遺物観察表

陶磁器類

挿図番号 図版番号	NO.	種類 器種	出土位置 残存率	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	色調	成形・整形の特徴	備考
第127図	1	志戸呂陶器 灯火受皿	埋土中 1/4	(10.4)	(5.2)	2.5	鈍い赤 褐	受け部は口縁部より高い。受け部に2カ所アーチ状の扶りを入れる。体部外面下半以下は回転篋削り。内面から口縁部外面に錆釉。	

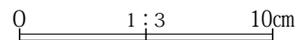
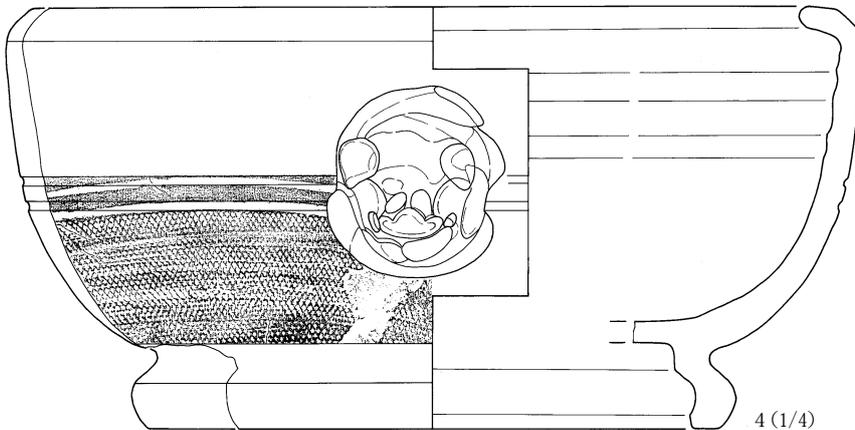
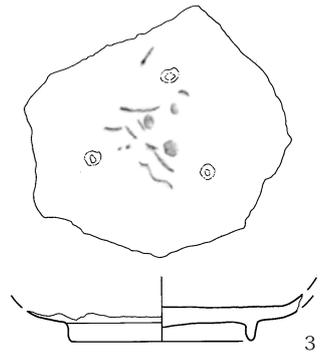
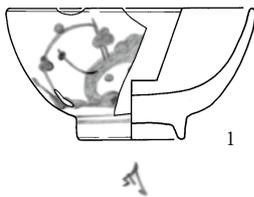


第128図 14号土坑出土遺物

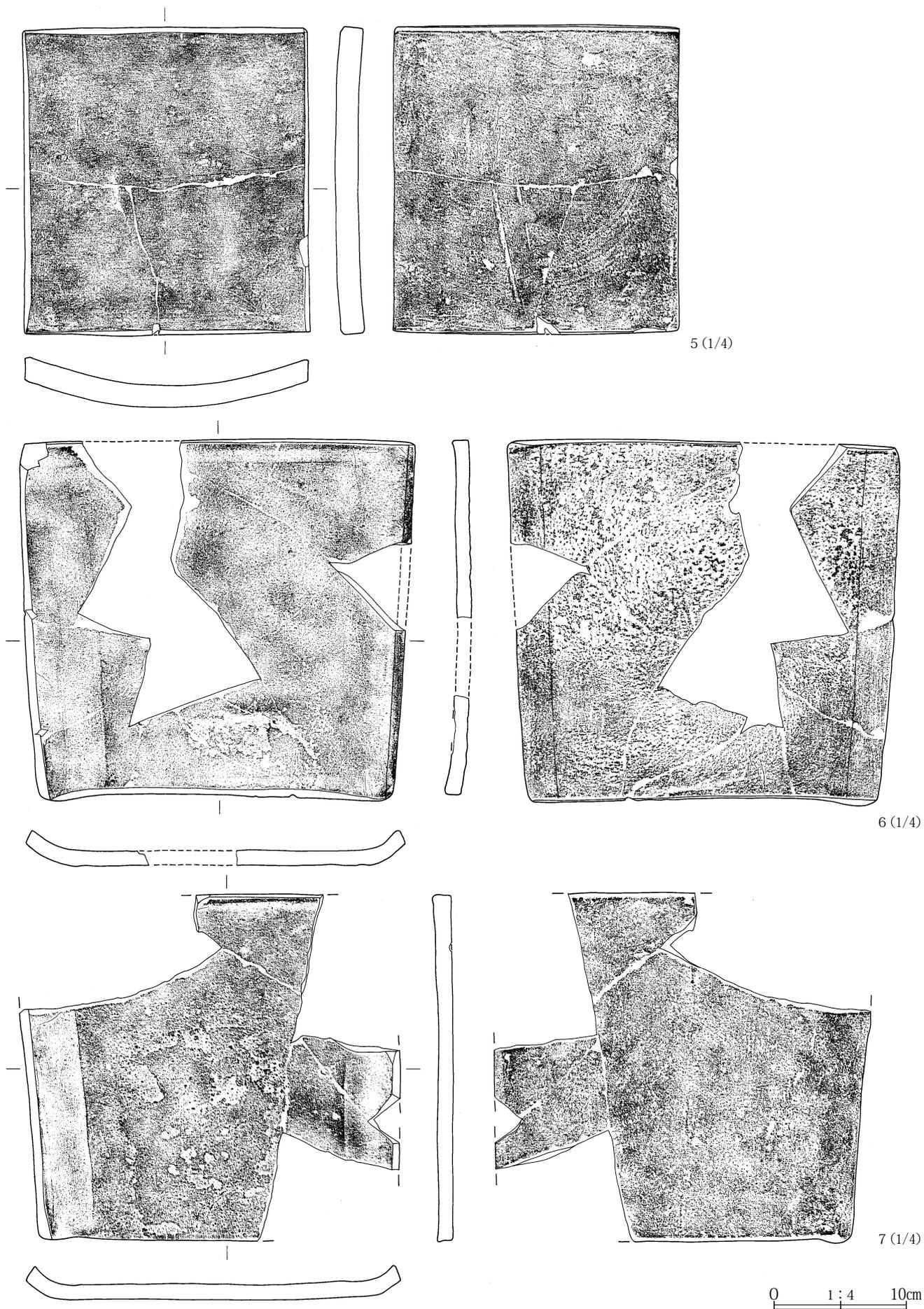
第33表 14号土坑出土遺物観察表

陶磁器類

挿図番号 図版番号	NO.	種類 器種	出土位置 残存率	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	色調	成形・整形の特徴	備考
第128図	1	美濃陶器 皿	埋土中 1/8	(11.4)	-	-	黄灰	外面口縁部以下は回転篋削り。内外面に灰釉。貫入がはいる。底部欠損のため摺り絵は認められないが、御深井製品であろう。	



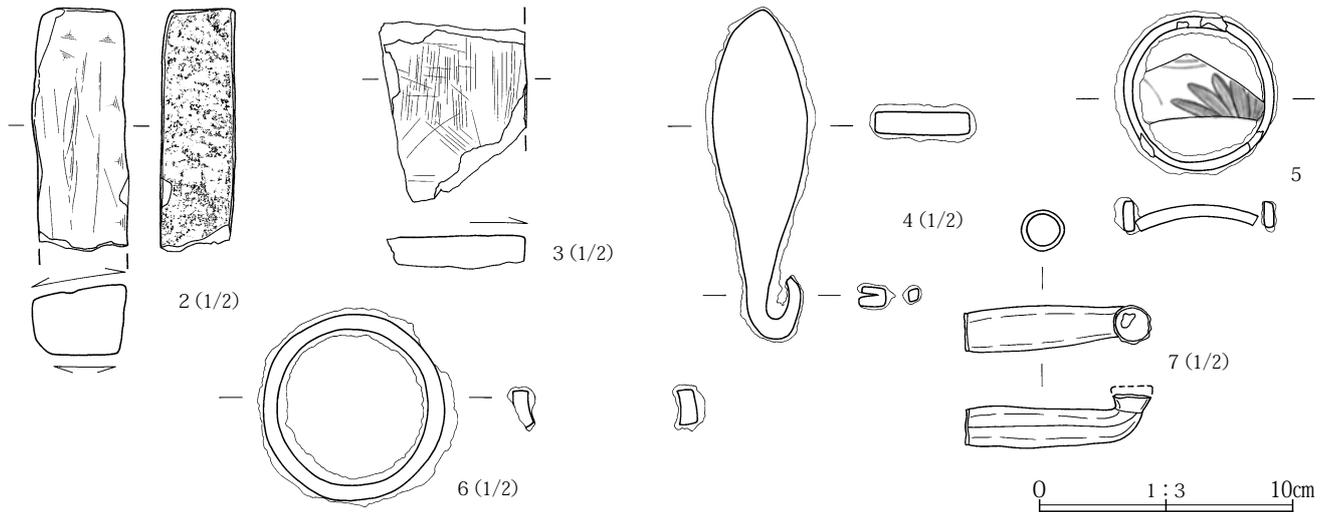
第129図 15号土坑出土遺物(1)



第130図 15号土坑出土遺物(2)

第34表 15号土坑出土遺物観察表

挿図番号 図版番号		種類 器種	出土位置 残存率	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	色調	成形・整形の特徴	備考
第129図	1	肥前磁器 碗	埋土中 口縁部1/2 欠	(9.6)	4.0	5.1	灰白	外面に雪輪梅樹文。高台内に不明銘。具須は黒っぽく発色。	
第129図	2	瀬戸・美濃磁器飯 碗	埋土中 完形	11.3	3.8	6.0	白	外面に具須?で松を描き、松ぼっくりを赤で描く。	近現代
第129図	3	美濃陶器 摺り絵皿	埋土中 底部	—	7.0	(1.8)	オリ ブ黄	底部内面鉄絵具による型紙摺り。線が細く、鉄絵具も薄いたため文様は不鮮明。内面に灰釉。細かい貫入がはいる。底部内面に目痕3カ所。いわゆる御深井。	
第129図	4	在地系土器 火鉢	埋土中 1/4	(42.3)	(29.8)	22.3	黒褐・ 鈍い黄 褐	断面黒褐色、器表付近にぶい黄褐色、器表黒色。外面中位に凹線を2条廻らし、その下に回転施文具より細かい格子状文を施す。施文後に、簡略化した獅子の取っ手を貼り付け。外面格子状文部より上位は磨き調整。外面の格子状文以外から口縁端部内面に黒色物を塗布。口縁端部内面には黒色物が垂れた痕跡が残る。いわゆる塗り物。高台端部は擦れか人為的な擦りにより平坦となる。	近現代
第130図	5	瓦 平瓦	埋土中 完形	縦23.4	横21.3	厚1.7	鈍い褐・ 黒褐	下面は型板の跡が残り、上面はナゼ板による撫で。のし瓦か。	
第130図	6	瓦 十能瓦	埋土中 1/4欠	縦27.0	横26.3 ~29.7	厚1.1	黒・灰 黄	凸面には型肌痕が残る。凹面は撫で、四周は直線的な撫で。	
第130図	7	瓦 十能瓦	埋土中 2/3	縦20.2	横—	厚1.2	黒・灰 黄	凸面には型肌痕が残る。凹面は撫で、四周は直線的な撫で。	



第131図 16号土坑出土遺物

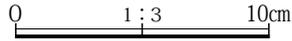
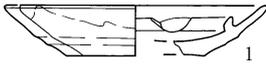
第35表 16号土坑出土遺物観察表

挿図番号 図版番号		器種 形態・素材	出土位置	長 (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	重 (g)	製作・使用状況	石材
PL.47	1	砥石 切り砥石	埋土中	(7.9)	3.7	(3.5)	162.9	上端小口部に平鑿状の工具痕。被熱・剥落して不明瞭だが、左側面は砥石特有の光沢面がなく、使用されていない可能性が高い。	流紋岩
第131図 PL.47	2	砥石 切り砥石	埋土中	(6.4)	2.9	2.0	56.1	表裏面を砥面として使用。両側面は割り取り後、磨き整形を施す。裏面側右辺はタガネ状工具により面取り。	砥沢石
第131図 PL.47	3	砥石 切り砥石	埋土中	(4.8)	(3.8)	(0.9)	21.6	背面側に使用面が残る砥石破片。	珪質頁岩

金属製品

挿図番号 図版番号	NO.	種類 器種	出土位置 残存率	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	特徴・状態	備考
第131図 PL.49	4	鉄製品 不明	埋土中 完形か	8.7	2.5	0.6	28.7	下端部はフック状。錆化が激しい。	
第131図 PL.49	5	鉄製品 環状品	埋土中 完形	径 6.3	—	0.5	—	錆化が激しい。環状の鉄製品内に近現代染付磁器が偶然挟まる。	
第131図 PL.49	6	鉄製品 環状品	埋土中 完形	径 4.9	1.1	0.4	28.3	錆化が激しい。	
第131図 PL.49	7	銅製品 煙管雁首	埋土中 火皿欠損	(4.8)	1.1	—	11.9	羅字挿入部は膨らみを持ち、端部に横線廻る。	

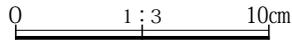
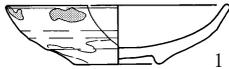
第3章 検出された遺構と遺物



第132図 20号土坑出土遺物

第36表 20号土坑出土遺物観察表

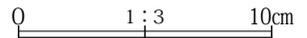
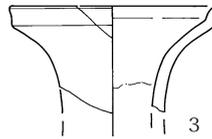
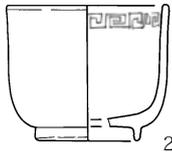
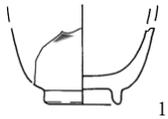
挿図番号 図版番号		種類 器種	出土位置 残存率	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	色調	成形・整形の特徴	備考
第132図	1	瀬戸・美濃陶器灯 火受皿	埋土中 1/4	(10.2)	(5.4)	2.0	灰白	受け部を1カ所「U」字状に抉る。口縁部外面以下は回転篋削り。全面錆釉を施釉後に口縁部外面以下を拭う。	



第133図 26号土坑出土遺物

第37表 26号土坑出土遺物観察表

挿図番号 図版番号		種類 器種	出土位置 残存率	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	色調	成形・整形の特徴	備考
第133図 PL.43	1	瀬戸・美濃陶器灯 火皿	埋土中 口縁部2/3 欠	(8.6)	3.4	2.3	浅黄	口縁部外面以下は回転篋削りで、高台は碁笥底状に削る。内面から口縁部外面に飴釉。口縁端部内外面に油煙付着。	



第134図 28号土坑出土遺物

第38表 28号土坑出土遺物観察表

挿図番号 図版番号		種類 器種	出土位置 残存率	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	色調	成形・整形の特徴	備考
第134図	1	瀬戸・美濃磁器小 碗	埋土中 底部	-	2.9	-	白	内面と高台内は透明釉、体部から高台外面はクローム青磁釉。体部外面に緑色の銅板転写による文様。	近現代
第134図	2	肥前磁器か碗	埋土中 1/4	(6.4)	(4.0)	5.3	白	高台端部を除く外面に呉須釉。口縁部外面に簡略化した雷文帯。	
第134図	3	肥前磁器 瓶	埋土中 1/4	(8.0)	-	-	灰白	口縁部は受け口状を呈する。内外面の釉は青みがかり、胎土も十分磁化していない。	焼成不良

4 井戸

検出された井戸は、2区で1基、5区で4基、6区で2基の計7基である。その時期は、後述する大溝の底面から検出されるなど、溝よりも旧いことが明らかとなっており、中世ないし近世と考えられる。なお、砂質なローム土を掘り込んだ井戸であるため、崩落の危険から完掘できた井戸は少ない。同様に、工場跡地にあつては、基礎のコンクリート等により完掘できていない。

以下、各井戸ごとに記載する。

1号井戸（第135図、第53表、PL.16）

位置(座標)：X軸=36,538、Y軸=-39,274

本井戸は6区中央東寄りにあり、南北に走向する3号溝の東側で、近世以降の土坑群の北側に位置する。本井戸の上部には、工場跡の基礎コンクリートがあり、崩落の危険が及ばない範囲での調査を行った。上面は径3.8m程の円形を呈し、断面形状は上方が開く漏斗状となる。縦坑部の径は2.1mと広く、大型の井戸の可能性が高い。しかし、崩落の危険から、調査は南半のみとし、深さも1m程で終了した。底面は検出されていない。埋土は、やや砂質な黒褐色土と暗褐色土を主体とする。埋土中にロームブロックや黄褐色の地山ブロックを多量に混在させることから、人為的堆積と考えられる。

出土遺物には、未掲載遺物に土師器片や須恵器片があるが、時期は不明。周辺の遺構状況から、近世の可能性が高い。

2号井戸（第135図、第53表）

位置(座標)：X軸=36,492、Y軸=-39,316

本井戸は5区の南東端に位置し、周辺には32・34・36・37号土坑がある。上面は径2.1m程の円形を呈し、断面形状は上方が開く漏斗状となる。縦坑部の径は0.86mを測る。砂質なローム土のため、縦坑の壁は崩落が著しいようで、壁面には大きく抉れる部分がみられる。このため、調査は西側の半面のみとし、深さ1.6mまでを掘削し終了した。底面は検出されていない。埋土は、暗褐色土を主体に明暗褐色土との8層に分層できる。埋土中にロームブロックや白灰色のロームブロックを多量に混在させることから、人為的堆積と考えられる。

出土遺物もなく、時期は不明。周辺の遺構状況から、近世の可能性が高い。

3号井戸（第136図、第53表、PL.16）

位置(座標)：X軸=36,517、Y軸=-39,357

調査時は、60号土坑として調査を行った。本井戸は5区の西端にあり、東西に走向する8号溝の北側に位置し、周辺には61～64号土坑がある。上面は径2.0m程の円形を呈し、断面形状は上方が開く漏斗状となる。縦坑部の径は0.9mを測る。砂質なローム土のため、縦坑の壁は崩落が著しいようで、壁面には大きく抉れる部分が2段みられる。このため、調査は南側の半面のみとし、深さ1.2mまでを掘削し終了した。底面は検出されていない。埋土は、最上層がロームブロックを僅かに含む暗黒褐色土で、その下が1・2層とした黒褐色土と黄褐色土に分層できる。埋土中にロームブロックやローム土を多量に混在させることから、人為的堆積と考えられる。

出土遺物もなく、時期は不明。周辺の遺構状況から、近世の可能性が高い。

4号井戸（第137図、第53表、PL.24）

位置(座標)：X軸=36,505、Y軸=-39,336

調査時は、137号土坑として調査を行った。本井戸は4・5区の境にあり、南北走向する2号溝内の中央南寄りに検出された。2号溝の調査時には、本井戸の存在は予測されていなかったが、溝の精査の段階で明らかとなった。井戸の大半が2号溝と重複するため、詳細は不明である。残存する井戸は、2号溝の西壁に井戸上部の一部と、溝底面下の縦坑部である。溝の西壁に残存する井戸の形状から、上方が開く漏斗状の断面を呈すると考えられる。また、残存する井戸内には、溝底面下の縦坑にまで拳大から人頭大の円礫が詰まり、溝との新旧は明らかであった。人為的堆積と考えられる。残存する縦坑の径は1.15mを測る。また、縦坑については、溝底面より0.8m程を掘削(溝上面からは2.0m)して終了した。底面は検出されていない。

遺物の出土はない。重複する2号溝との新旧は本井戸が旧く、時期は中世ないし近世と考えられる。

5号井戸（第136図、第53表、PL.24）

位置(座標)：X軸=36,520、Y軸=-39,329

調査時は、136号土坑として調査を行った。本井戸は5区の中央に位置し、南北走向する2号溝内の中央北寄り底面に検出された。2号溝の調査時には、本井戸の存在は予測されていなかったが、溝の精査の段階で明らか

となった。井戸の大半が2号溝と重複するため、詳細は不明である。残存する井戸は、2号溝の底面下に検出された縦坑部のみである。残存する縦坑の径は1.24mを測り、溝底面から井戸底面までの深さ0.6m、溝上面から井戸底面までの深さ1.74mを測る。底面は、掘り鉢状となる。埋土は、暗褐色土と底面付近に暗灰色粘質土が堆積する。埋土中にローム小ブロックやローム土を混在させることから、人為的堆積と考えられる。

遺物の出土はない。重複する2号溝との新旧は本井戸が旧く、時期は中世ないし近世と考えられる。

6号井戸（第136図、第53表、PL.24）

位置(座標)：X軸=36,518、Y軸=-39,287

調査時は、135号土坑として調査を行った。本井戸は5・6区の境にあり、南北走向する3号溝内の中央南寄り底面に検出された。3号溝の調査時には、本井戸の存在は予測されていなかったが、溝の精査の段階で明らかとなった。井戸の大半が3号溝と重複するため、詳細は不明である。残存する井戸は、3号溝の底面下に検出された縦坑部のみである。残存する縦坑の径は1.14mを測り、溝底面から井戸底面までの深さ0.37m、溝上面から井戸底面までの深さ1.46mを測る。底面は、平坦となる。埋土は、暗褐色土が主体となり、底面付近では暗褐色土と黄褐色ローム土とが薄く互層となっている。埋土中にローム小ブロックやローム土を混在させることから、人為的堆積と考えられる。

遺物の出土はない。重複する3号溝との新旧は本井戸が旧く、時期は中世ないし近世と考えられる。

7号井戸（第137図、第53表、PL.26）

位置(座標)：X軸=36,447、Y軸=-39,400

調査時は、186号土坑として調査を行った。本井戸は2区の東側にあり、南北走向する23号溝の西側、東西走向する20・24号溝の北側に位置する。上面は径1.07mの円形を呈し、断面形状は漏斗状とはならない。深さは1.57mを測る。底面は、平坦となる。埋土は、黒褐色土が主体となり、底面付近には暗褐色土が堆積する。埋土中にロームブロックを混在させることから、人為的堆積と考えられる。

出土遺物もなく、時期は不明。周辺の遺構状況から、近世の可能性が高い。

5 ピット

検出されたピットは、2区で158基、3区で56基、4区で4基、5区で152基、6区で160基の計530基である。これらのピットは、縄文・弥生時代に比定できるものではなく、古代以降のものと考えられるが、その大半は近世以降の可能性が高い。また、ピットの検出傾向とすると、各調査区の面積にもよるが、2区および5・6区に多く、4区では極端に少ないという偏りがある。特に、5・6区における状況では、近世以降と考えられる土坑群の周辺に多く検出されており、4区およびその周辺の近世以降の土坑の希薄な地点では、ピット数も極端に少ない。2区においては、全体に散漫である。

検出されたピットは、その埋土をA～E類に分類し、埋土別のグループ化を図った。その結果、A類とした暗褐色土を埋土とするピットは、各区に存在するものの5区に最も多く、次いで6区でも多い。B類の黒褐色土を埋土とするピットは、6区でみられるのみで、他ではない。C類の褐色土を埋土とするピットは、A類と同様に5・6区に比較的多い。D類の褐色土を埋土とするピットは、全体に少ない。E類とした黒褐色土を埋土とするピットでは、5・6区にはみられず、2・3区において最も多く存在する。

なお、各ピットの埋土分類における土層注記は、以下の通りである。

A類 暗褐色土

砂質で締まりあり。白色軽石粒を少量含み、小砂粒を微量混入させる。

B類 黒褐色土

やや砂質で締まりあり。白色軽石粒を少量含む。

C類 褐色土

ロームブロックを含み、炭化物粒を少量、白色軽石粒を微量含む。

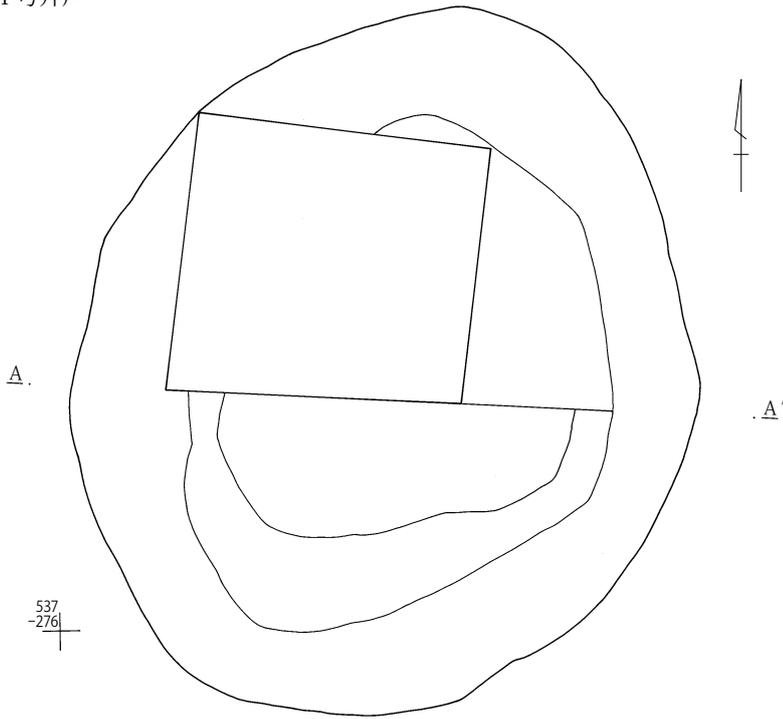
D類 褐色土

やや砂質で締まりが弱い。ロームブロックを多量に、炭化物粒を少量含む。

E類 黒褐色土

ロームブロック・焼土粒・炭化物粒を少量含み、白色軽石粒を微量含む。

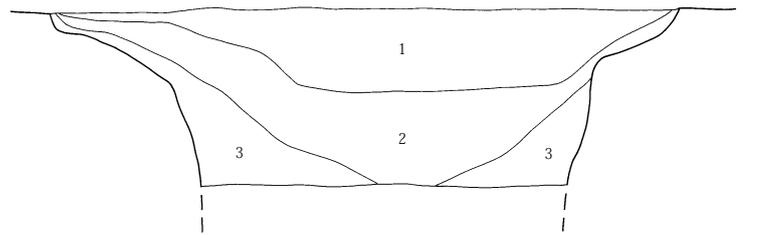
1号井戸



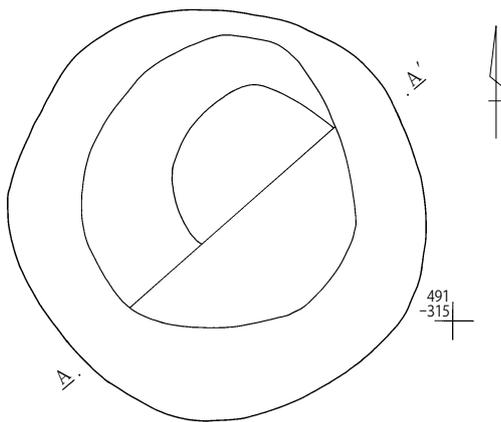
1号井戸

- 1 黒褐色土
上位を中心に白色軽石を含み、やや砂質。
- 2 暗褐色土
ロームブロックを含み、白色軽石を少量含む。5 cm程の礫を混入し、やや砂質。
- 3 暗褐色土
2層に近似し、黄褐色の地山ブロックを多く含む。砂質。

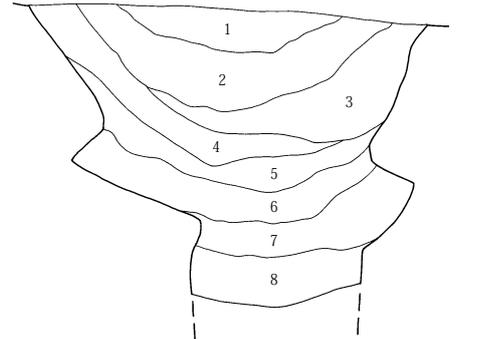
A . L=47.80m



2号井戸



A . L=48.90m



2号井戸

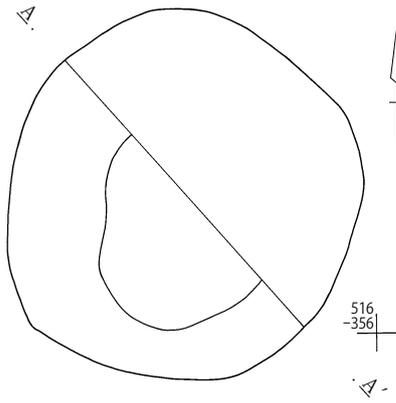
- 1 暗褐色土 汚れたローム粒を多く含み、2層より明るい。
- 2 暗褐色土 1層に近似するが、やや暗い。
- 3 暗褐色土 ロームブロックを少量含み、全体に黒い。
- 4 暗褐色土 3層に近似するが、ロームブロックを多く含む。
- 5 暗褐色土 3・4層より明るく、ロームブロックを多く含む。
- 6 明暗褐色土 白灰色のロームブロックを混入させる。
- 7 明暗褐色土 6層と近似するが、白灰色のロームブロックを多く含む。
- 8 暗褐色土 混入物が少なく、暗い。

0 1:40 1m

第135図 1・2号井戸平面図

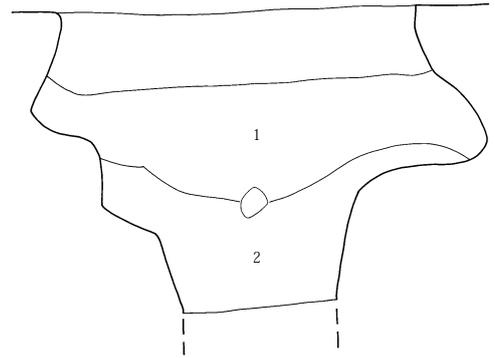
第3章 検出された遺構と遺物

3号井戸



A, L=48.90m

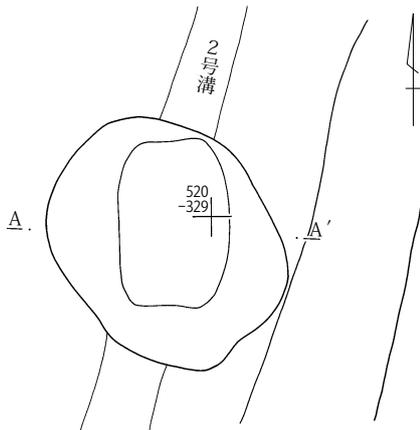
A'



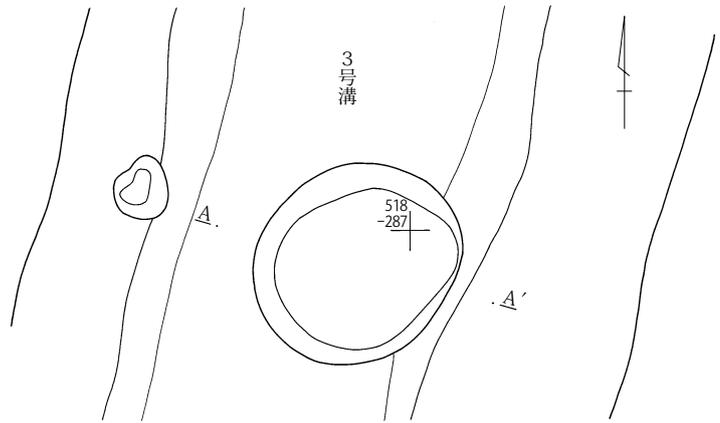
3号井戸 (60号土坑)

- 1 黒褐色土 ロームブロックを多量に含み、礫を少量混入。
 - 2 黄褐色土 ローム土を主体とし、暗褐色土を少量含む。
- 60号土坑 近世
 暗黒褐色土 ロームブロックを僅かに混入。

5号井戸

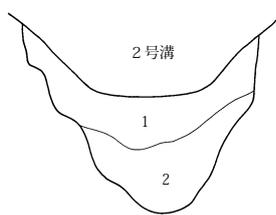


6号井戸



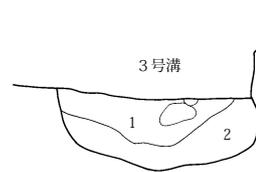
A, L=47.60m

A'



A, L=47.30m

A'

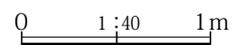


5号井戸 (136号土坑)

- 1 暗褐色土 暗灰色粘質土、ローム小ブロックをやや多く含む。
- 2 暗灰色粘質土 ローム土を少量含み、粘性が強い。

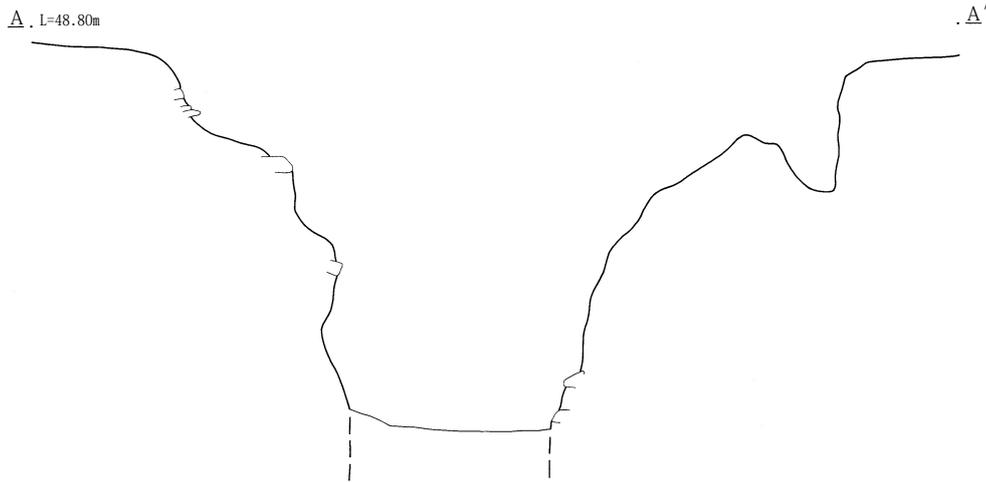
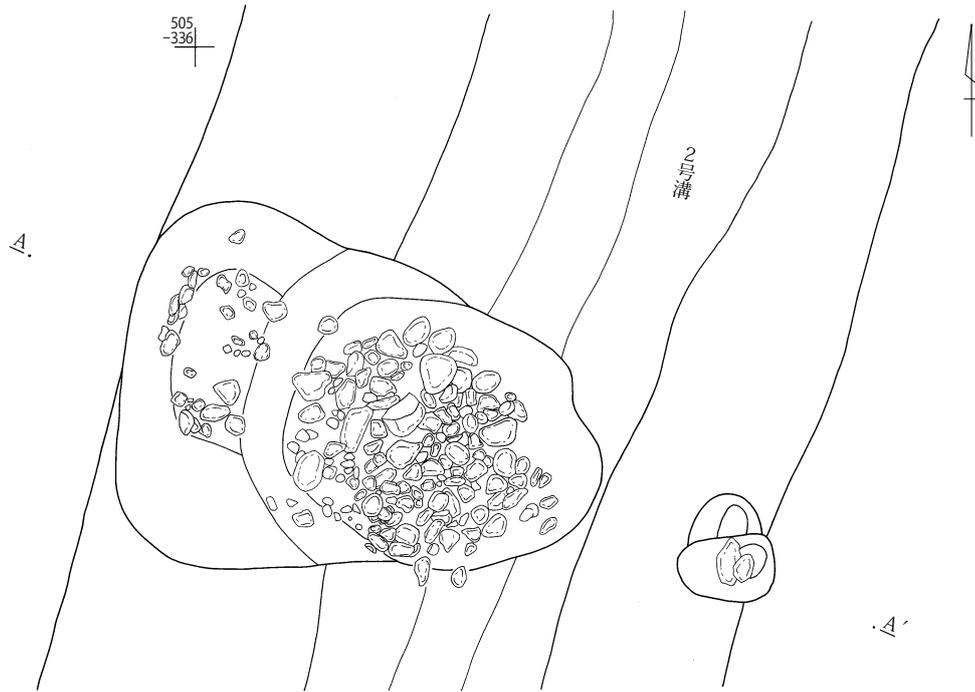
6号井戸 (135号土坑)

- 1 暗褐色土 暗灰色粘質土を含み、ローム小ブロックを微量含む。10cm大の礫を混入。
- 2 暗褐色土 暗褐色土と薄い黄褐色ローム土との互層。粘質ぎみ。

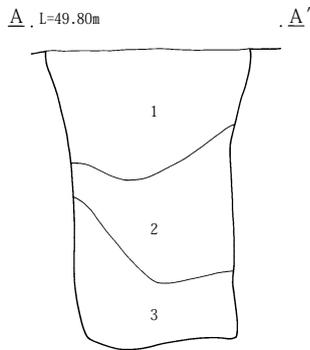
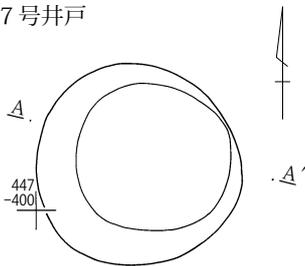


第136図 3・5・6号井戸平面図

4号井戸

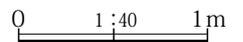


7号井戸



7号井戸 (186号土坑)

- 1 黒褐色土 ロームブロックを多く含む。
- 2 黒褐色土 ロームブロックを少量含む、1層よりも暗い。
- 3 暗褐色土 ローム土と暗褐色土の混在土。



第137図 4・7号井戸平面図

6 溝

検出された溝は、2区で7条、3区で3条、4区で1条、5区で2条、6区で6条、2・3区に跨がる溝2条、2～4区に跨がる溝1条、3・4区に跨がる溝2条、5・6区に跨がる溝2条の計26条を数える。溝の大半は、中世ないし近世の時期と考えられ、特に1号溝では多量の遺物が出土している。中には、溝の埋没後に、路や地境として現在に至っているものも存在する。

以下、各溝ごとに記載する。

1号溝（第138～141・148～153図、第39・54表、PL.27・43・44・47・49）

位置(座標)：X軸＝36,509～36,544

Y軸＝-39,329～39,293

本溝は、6区北側の工場跡地の攪乱が著しい部分の南側に検出され、6区の中央西寄りを南北に走向し、途中で西へ直角に大きく向きを変え、さらに南西方向へ大きく向きを変えながら5区を蛇行するように走向し、2本の溝となって南下する。南端部は、再度西へ向きを直角に変え、南北走向する2号溝を横切る形となり、その先は後述する8号溝となる。確認できた溝の規模は、延長58.0m、6区では上幅2.2m、底面幅0.5m、深さ0.66mを測り、5区の蛇行する辺りでは西側が上幅1.1m、深さ0.25m、東側が上幅1.2m、深さ0.35mを測る。両端の比高差は1.2mと北端が低く、その勾配は2.3%である。また、6区において134号土坑と重複するが、本溝が新しい。埋土は、全体に暗褐色土を主体とするが、5区の蛇行する辺りでは黄灰色土や暗黄褐色土等の堆積もみられる。本溝位置が現在の地割に残る点から、区画溝と考えられ、流水していた可能性も否定できない。

なお、6区の北側に隣接する矢部遺跡1区では、本溝の延長は検出されていないことから、遺跡境となる道路下に想定される東西に延びる溝(17号溝の延長)を起点に南へ延びる溝の可能性が高い。

溝内における遺物の出土状況は、第141図に示したように、6区の南北走向部から西へ直角に大きく向きを変え辺りの埋土中下部に、多量の遺物が集中して出土している。出土した遺物には、図示した1～18(瀬戸・美濃磁器、肥前磁器、製作地不詳磁器)、21～28(瀬戸・美濃陶器、京・信楽系陶器、萩陶器か)の碗類(小碗、碗、

丸碗、筒形碗、端反小碗、端反碗、広東形碗)が26点、19の小皿(肥前磁器)、20の水滴(製作地不詳磁器)、29の摺り絵皿(美濃陶器)、30の青緑釉皿(肥前陶器)、31の灯火皿(瀬戸・美濃陶器)と灯火受皿(瀬戸・美濃陶器)、33・34の徳利(美濃陶器)、35～37の播り鉢(堺・明石陶器、瀬戸陶器)、38～49の焙烙(在地系土器)、50の焙烙か鍋(在地系土器)および火を扱う製品の天井部片と思われる51(在地系土器)、52～57の十能(在地系土器)、火消し壺の蓋と思われる58(在地系土器)、59の鉢(在地系土器)、火鉢ないし鉢と思われる60(土器)、61～65の火鉢(在地系土器)、手焙りと思われる66・67(在地系土器)、68の甕(在地系土器)がある。また、石製品には、69の砥沢石製の切り砥石、ニッ岳軽石製で略蒲鉾状を呈した各面が研磨整形されている70、71の粗粒輝石安山岩製の穀臼の下臼、72の粗粒輝石安山岩製の五輪塔の水輪がある。この72は、上面側中央に浅い円孔(長径10.2cm・短径9.0cm・深さ2.7cm)を穿ち、周囲に小円孔を5孔配しており、水輪を再利用したもの。金属製品には、73の鉄鋳物製鍋の口縁部片があり、やはり遺物集中内からの出土である。他に、未掲載遺物として土師器・須恵器の小片、近世の国産磁器32片、国産施釉陶器24片、在地系焙烙・鍋144片、在地系皿1片、在地系焼物137片、瓦19片、近現代の陶磁器2片、土器類1片が出土している。なお、これら出土遺物には若干近現代の遺物が混じるものの、江戸時代(18世紀後半以降)の遺物が主体を占め、在地火鉢類も江戸期の良好な資料である。

本溝の時期は、出土遺物から近世以降と考えられる。

2号溝（第138～140・154図、第40・54表、PL.27・44）

位置(座標)：X軸＝36,466～36,550

Y軸＝-39,345～39,320

本溝は、6区西側の端に検出され、5・6区の区境付近から5区の中央西よりを経て、4・5区の区境を直線的に南北走向する大溝であり、その両端は調査区外へ延びる。走向方向は、先の1号溝および後述の12号溝とほぼ平行し、その間隔は約40mを測る。確認できた溝の規模は、延長88.5m、上幅3.0～4.5m、底面幅0.35～0.45mと狭く、深さ1.2～1.5mを測り深い。断面形状は葉研状に近く、底面の標高値は北側に向かって徐々に低い値となっている。両端の比高差は60cmを測り、その勾配は0.7%である。また、本溝の間では、1号溝ない

し8号溝が横切るように交差するが、本溝の方が古いと考えられる。溝の底面下には、4号井戸(137号土坑)と5号井戸(136号土坑)が検出されており、本溝より古いことは明らかである。さらに、2号住居とも重複しているが、本溝が新しい。埋土は、暗褐色土を主体とし、中間には黒褐色土が堆積する。溝の規模等から、計画的な区画溝ないし水路の可能性も否定できない。

出土遺物は極めて少なく、図示した1の片口鉢(在地系土器)1点がある。この片口鉢は、口縁部が玉縁状となり、外面と口縁部から体部内面の器表は凍て状の剥離多く、口縁部内面と体部外面中位の剥離は特に著しい。体部内面中位と底部内面中央付近は使用により平滑で、体部内面下位と底部内面周縁は使用により器表が摩滅しており、播り鉢として使用されたもので、14世紀中頃と思われる。他に、未掲載遺物として土師器・須恵器片、近世の国産施釉陶器1片、在地系焙烙・鍋1片、近現代の陶磁器1片が出土している。

本溝の時期は、出土遺物から近世以降と考えられる。

3号溝 (第138・142・155図、第41・54表、PL.27・44)

位置(座標)：X軸=36,499～36,537

Y軸=-39,293～39,283

本溝は6区の中央で東西に分割するように南北に走向する大溝で、一部が5区との境ともなっている。工場跡地のために攪乱が著しく、溝を途切れ途切れに調査せざるを得なかった。確認できた溝の規模は、延長56.0m、上幅3.0～4.0m、底面幅1.3m、深さ0.8～1.1mを測り、断面形状は箱堀状を呈し、その両端は調査区外へ延びる。両端の比高差は1.0mと北端が低く、その勾配は1.8%である。また、溝の底面下には6号井戸(135号土坑)が検出され、本溝より古いことは明らかである。埋土は、暗褐色土と暗灰褐色土を主体に、黒褐色土や黄褐色土が堆積する。2号溝と同様に、溝の規模等から、計画的な区画溝ないし水路の可能性も否定できない。

なお、1号溝と同様に、6区の北側に隣接する矢部遺跡1区では、本溝の延長は検出されておらず、遺跡境となる道路下に想定される東西に延びる溝(17号溝の延長)を起点に南へ延びる溝の可能性が高い。

出土遺物は少なく、図示した1の柳茶碗(瀬戸・美濃陶器)、2の灯火皿(瀬戸・美濃陶器)、3の火鉢(在地系土器)がある。他に、未掲載遺物として土師器片、近世

の国産磁器7片、国産施釉陶器10片、近現代の陶磁器53片、土器類50片、瓦6片、十能瓦6片、ガラス1片が出土している。

本溝の時期は、出土遺物から近世以降と考えられる。

4号溝 (第138・156図、第42・54表、PL.27・44)

位置(座標)：X軸=36,512～36,524

Y軸=-39,275～39,272

本溝は6区の中央南東寄り、近世以降の土坑が集中する辺りにあり、先の3号溝の東側11mにほぼ平行して南北に走向する。また、本溝の西側に位置する5号および6号溝とも、3mの間隔を置いて平行するようである。確認できた溝の規模は、延長12.4m、上幅0.6m、底面幅0.4m、深さ27cmを測る。溝の北端は工場跡地の攪乱により不明で、南端は調査区外へ延びる。両端の比高差はない。8・31号土坑と重複するが、両土坑よりも本溝が新しい。埋土は、黒褐色土と鈍い黄褐色土に分層される。溝の性格および流水の可能性は不明。

出土遺物は僅かで、図示した1の菊皿(瀬戸・美濃陶器)がある。他に、未掲載遺物として近世の国産磁器1片、国産施釉陶器1片、在地系焙烙・鍋1片、瓦1片が出土している。

本溝の時期は、出土遺物から近世以降と考えられる。

5号溝 (第138図、第54表、PL.28)

位置(座標)：X軸=36,508～36,517

Y軸=-39,282～39,279

本溝は6区の中央南東寄り、近世以降の土坑が集中する辺りにあり、先の3号溝の東側7m、4号溝の西側3mにほぼ平行して南北に走向する。確認できた溝の規模は、延長9.3m、上幅0.4m、底面幅0.3m、深さ9cmを測る。しかし、本溝の北側延長上には、同方向に延びる6号溝が存在しており、両者が同一溝である可能性が極めて高い。南端は、調査区外へ延びる。両端の比高差はない。重複する遺構には、1・25・26号土坑があるが、いずれの土坑よりも本溝が古い。埋土は、黄褐色の地山ブロックを僅かに含む暗褐色土である。溝の性格および流水の可能性は不明。

出土遺物は極めて少なく、未掲載遺物に近世の国産施釉陶器1片、在地系焙烙・鍋1片がある。

本溝の時期は、出土遺物から近世以降と考えられる。

6号溝 (第138図、第54表、PL.28)

位置(座標)：X軸=36,518～36,527

Y軸=-39,278～39,274

本溝は6区の中央南東寄り、近世以降の土坑が集中する辺りにあり、先の3号溝の東側7m、4号溝の西側3mにほぼ平行して南北に走向し、先の5号溝と同一溝の可能性が極めて高い。溝の北端は、工場跡地の攪乱の直前で東側へと向きを変える。確認できた溝の規模は、延長9.2m、上幅0.7m、底面幅0.3m、深さ30cmを測る。両端の比高差はない。重複する遺構には、29・30号土坑があり、本溝は29号土坑より旧く、30号土坑より新しい。埋土は、暗褐色の地山ブロックを僅かに含む暗褐色土である。溝の性格および流水の可能性は不明。

出土遺物は極めて少なく、未掲載遺物に土師器の小片、近世の国産施釉陶器2片、近現代の土器類3片、十能瓦2片がある。

本溝の時期は、出土遺物から近世以降と考えられる。

7号溝 (第138図、第54表)

位置(座標)：X軸=36,519～36,530

Y軸=-39,326～39,318

本溝は、5区の中央で南北走向する2号溝と、蛇行する1号溝との間に検出された。北半は南北に走向し、途中で南西へ向きを変えるが、1・2号溝とは交差しない。確認できた溝の規模は、延長14.0m、上幅35cm、深さ7cmと細く浅い。両端の比高差はない。重複する遺構もなく、黄褐色ロームブロックを混入する暗褐色土を埋土とする。溝の性格および流水の可能性は不明。

出土遺物もなく、時期も不明。

8号溝 (第138図、第54表、PL.28)

位置(座標)：X軸=36,511～36,368

Y軸=-39,510～39,333

本溝は東西に直進する溝で、4・5区の東西方向に延びる区境の位置にある。溝の東端は、6区から4区にかけて南北走向する2号溝を横切り、5区を蛇行するように南下した1号溝の南端部に接続する。西端は、南へ直角に大きく向きを変え、9号溝を横切り、その先は10号溝となる。確認できた溝の規模は、延長35.2m、上幅0.93m、底面幅0.5m、深さ30cmを測る。両端の比高差は40cmと東端が低く、その勾配は1.1%である。重複する遺構には、49～51号土坑があり、いずれの土坑よりも

本溝が古い。埋土は、暗褐色土ないし明褐色土である。

出土遺物は極めて少なく、未掲載遺物に土師・須恵器の小片が僅かに出土したのみである。

本溝の時期は、1号溝に続く溝と考えられることから近世以降と考えられる。

9号溝 (第138・143・144図、第54表、PL.28)

位置(座標)：X軸=36,504～36,512

Y軸=-39,339～39,375

本溝は4区を主に3区へ延びる溝で、先の8号溝の南側に位置し、東西方向にやや斜めに直進する溝である。溝の東端は、2号溝の西側約3mの位置を先端とし、西側へ延びる。途中、8号溝が南へ直角に向きを変える辺りで8号溝と交差し、西端は12号溝と交差して調査区外となる。確認できた溝の規模は、延長36.4m、上幅0.9m、底面幅0.5m、深さ34cmを測る。両端の比高差は20cmと西端が低く、その勾配は0.5%である。重複する遺構には、52・53号土坑があり、両土坑よりも本溝が古い。また、交差する8号溝との新旧は不明であるが、12号溝とは本溝の方が古い。埋土は、暗黒褐色土である。溝の性格および流水の可能性は不明。

出土遺物は極めて少なく、未掲載遺物に縄文土器片と土師・須恵器片が僅かに出土したのみである。

本溝の時期は、不明。

10号溝 (第138・143・144図、第54表、PL.28)

位置(座標)：X軸=36,461～36,510

Y軸=-39,370～39,369

本溝は3・4区の区境の位置にあり、溝の北端は東西方向に延びる8号溝の西端と接続し、東側に膨らむように弧状に南へ延びる溝である。8号溝との接続部で9号溝と交差し、南へ延びる途中で11号溝、13号溝とも交差する。確認できた溝の規模は、延長49.8m、上幅1.8mと広く、底面幅は0.5～0.7mで2ないし3条の溝が集合している状況がある。深さは25～40cmを測る。両端の比高差は30cmと北端が低く、その勾配は0.6%である。交差する溝はあるが、その新旧は不明。埋土は、暗褐色土と黒褐色土である。

出土遺物は極めて少なく、未掲載遺物に土師器片、近現代の陶磁器3片、土器類6片がある。

本溝の時期は、8号溝を経て1号溝に続くことから近世以降と考えられる。

11号溝 (第138・157図、第43・54表、PL.44)

位置(座標)：X軸=36,506～36,509

Y軸=-39,370～39,381

本溝は3区の北側にあり、9号溝に平行するように東西方向にやや斜めに直進する溝である。溝の東端は10号溝に接続し、途中で12号溝を横切るように交差し、西端は遺構外へ延びる。確認できた溝の規模は、延長10.8m、上幅1.0m、底面幅0.7m、深さ13cmを測る。両端の比高差はない。交差する12号溝との新旧は不明。溝の性格および流水の可能性は不明。

出土遺物には、図示した1の皿(肥前磁器)があり、未掲載遺物に土師・須恵器片、近世の国産磁器2片、国産施釉陶器2片、近現代の陶磁器7片、土器類4片、瓦3片、十能瓦3片、ガラス1片が出土している。

本溝の時期は、出土遺物から近世以降と考えられる。

12号溝 (第138・143・144・147図、第54表、PL.28・29)

位置(座標)：X軸=36,439～36,511

Y軸=-39,393～39,376

本溝は3区の中央東寄りおよび2区東側にあり、両区を跨いで(2区と3区の間は、現道のため未調査)南北方向に直進する大溝である。3区においては、溝の北端は9号溝と交差して調査区外へと延び、区内の途中で11号溝が横切るように交差し、13溝および15号溝が斜めに交差する。また、本溝の走向方向は、先の2号溝および3号溝とほぼ平行し、その間隔は約40mを測る。2区においては、本溝の西側に位置する23号溝と併走し、途中で24号溝と交差する。南端は20号溝の東端がT字状に取り付き、直進する本溝は調査区外へと延びる。確認できた溝の規模は、2・3区の総延長75.2m、上幅2.4m、底面幅0.5～0.7m、深さ1.3mを測る。両端の比高差は20cmと北端が低く、その勾配は0.3%である。交差する9・13号溝とは本溝が新しく、11・15・24号溝との新旧は不明。また、南端でT字状に取り付く20号溝とは、同一時期と考えられる。埋土は、暗褐色土・黒褐色土を主体に茶褐色土・赤褐色土が堆積し、底面付近では灰褐色砂質土等の砂質土および砂礫層が確認されている。溝の規模等から計画的な区画溝であり、底面での砂礫層の存在から流水を伴う水路と考えられる。

出土遺物は極めて少なく、未掲載遺物に土師・須恵器片、近現代の陶磁器1片、土器類2片、瓦1片がある。

さらに、溝の埋土中からは馬歯が出土している。

本溝の時期は、2・3号溝と同様の区画溝と考えられ、20号溝と同時期であることから近世以降と考えられる。

13号溝 (第138・143・144図、第54表、PL.28)

位置(座標)：X軸=36,462～36,505

Y軸=-39,352～39,385

本溝は3区の北側から4区の南側へと、北西から南東へ直線ぎみに延びる溝である。3区においては、溝の北西端は調査区外へと延び、区内の途中で12号溝と斜めに交差し、さらに3・4区境にある10号溝とも斜めに交差し、南東端は4区を経た調査区外へと延びる。確認できた溝の規模は、延長52.5m、上幅1.5m、底面幅0.5m、深さ40cmを測る。両端の比高差はない。交差する12号溝とは本溝が旧く、10号溝との新旧は不明。埋土は、黒褐色土・黒褐色砂質土・暗褐色土が堆積する。溝の性格および流水の可能性は不明。

出土遺物は極めて少なく、未掲載遺物に土師・須恵器片、近世の国産磁器1片、近現代の陶磁器1片、瓦1片、十能瓦1片である。

本溝の時期は、出土遺物および12号溝との重複から近世以降と考えられる。

14号溝 (第138・145・146・158図、第44・54表、PL.28・44)

位置(座標)：X軸=36,436～36,497

Y軸=-39,450～39,403

本溝は3区の西側および2区中央付近にあり、両区を跨いで(2区と3区の間は、現道のため未調査)北東から南西方向へ直進する溝である。3区においては、溝の北東端は調査区外へと延び、区内の途中で107・128・129号土坑と、さらに3号住居と重複する。2区においては、25・26号溝と斜めに交差し、13・14・17号住居と重複し、さらに20・22・24号溝とも交差して南西端は調査区外へと延びるものの、1区では検出されていない。確認できた溝の規模は、2・3区の総延長74.80m、上幅0.7m、底面幅0.3m、深さ42cmを測る。両端の比高差は20cmと南西端が低く、その勾配は0.3%である。重複する遺構ないし交差する溝との新旧は、107号土坑とは本溝が旧く、それ以外の住居および土坑よりは新しい。また、交差する溝とは不明。埋土は、黒褐色土ないし暗褐色土を主として住居や土坑埋土よりも黒く砂質ぎみで、褐灰色

第3章 検出された遺構と遺物

土や褐色土も僅かに堆積する。溝の性格および流水の可能性は不明。

出土した遺物には、図示した1の須恵器杯があり、未掲載遺物に土師・須恵器片が多量に出土しているが、本溝の時期を特定する遺物はない。

本溝の時期は、遺構の重複および埋土から近世以降と考えられる。

15号溝 (第138・143・144図、第54表、PL.29)

位置(座標)：X軸=36,469～36,493

Y軸=-39,381～39,392

本溝は3区の中央北寄りを先端に、南南東方向に直進する溝である。途中で12号溝と斜めに交差し、南南東端は調査区外へと延びる。確認できた溝の規模は、延長25.0m、上幅1.0m、底面幅0.5m、深さ23cmを測る。両端の比高差は20cmと西端が低く、その勾配は0.8%である。交差する12号溝との新旧は、本溝が新しい。溝の性格および流水の可能性は不明。

出土遺物は極めて少なく、未掲載遺物に近現代の陶磁器1片、十能瓦1片のみである。

本溝の時期は、遺構の重複および出土遺物から近代と考えられる。

16号溝 (第138・143・144図、第54表)

位置(座標)：X軸=36,501～36,504

Y軸=-39,383～39,386

本溝は3区の北西部にあり、13号溝の北西端の南側に僅かに検出された。確認できた溝の規模は、長さ5.5m、上幅0.8m、深さ20cmを測る。両端の比高差はない。65・66号土坑と重複し、その新旧は65号土坑より本溝が旧く、66号土坑とは不明。埋土は、暗褐色土を主とする。溝の性格および流水の可能性は不明。

遺物の出土はないが、時期は遺構の重複から近世以降と考えられる。

17号溝 (第138図、第54表)

位置(座標)：X軸=36,543～36,544

Y軸=-39,232～39,237

本溝は6区の東隅となる三角地の調査地点にあり、調査地の北縁に東西に走向する大溝である。調査地点が狭く、溝の南半のみの調査となった。大溝は、6区と北隣となる矢部遺跡I区との境を画する東西方向の現道下に存在するようで、調査区内では攪乱が著しいためか本地

点以外では検出されておらず、その全貌は不明。調査地点の東端で4号住居と重複し、西側で18号溝と交差する。確認できた溝の規模は、長さ5.0m、上幅(1.3)m、深さ74cmを測る。両端の比高差は10cmと西端が低く、その勾配は2.0%である。重複する4号住居との新旧は本溝が新しく、18号溝とは不明。埋土は、暗褐色土を主に、暗灰色粘質土や暗灰褐色土、明灰色粘質土を堆積させる。溝の規模等から、計画的な区画溝ないし水路の可能性も否定できない。

遺物の出土はないが、時期は2・3号溝と同様の区画溝と考えられることから近世以降か。

18号溝 (第138図、第54表)

位置(座標)：X軸=36,540～36,544

Y軸=-39,236～39,237

本溝は6区の東隅となる三角地の調査地点にあり、調査地の西側を南北方向に走向する溝である。17号溝と交差するが、その新旧は不明。確認できた溝の規模は、長さ4.2m、上幅0.6m、深さ8cmを測る。両端の比高差は20cmと北端が低く、その勾配は5.0%である。溝の性格および流水の可能性は不明。

遺物の出土もなく、時期は不明。

19号溝 (第138図、第54表、PL.29)

位置(座標)：X軸=36,425～36,507

Y軸=-39,423～39,367

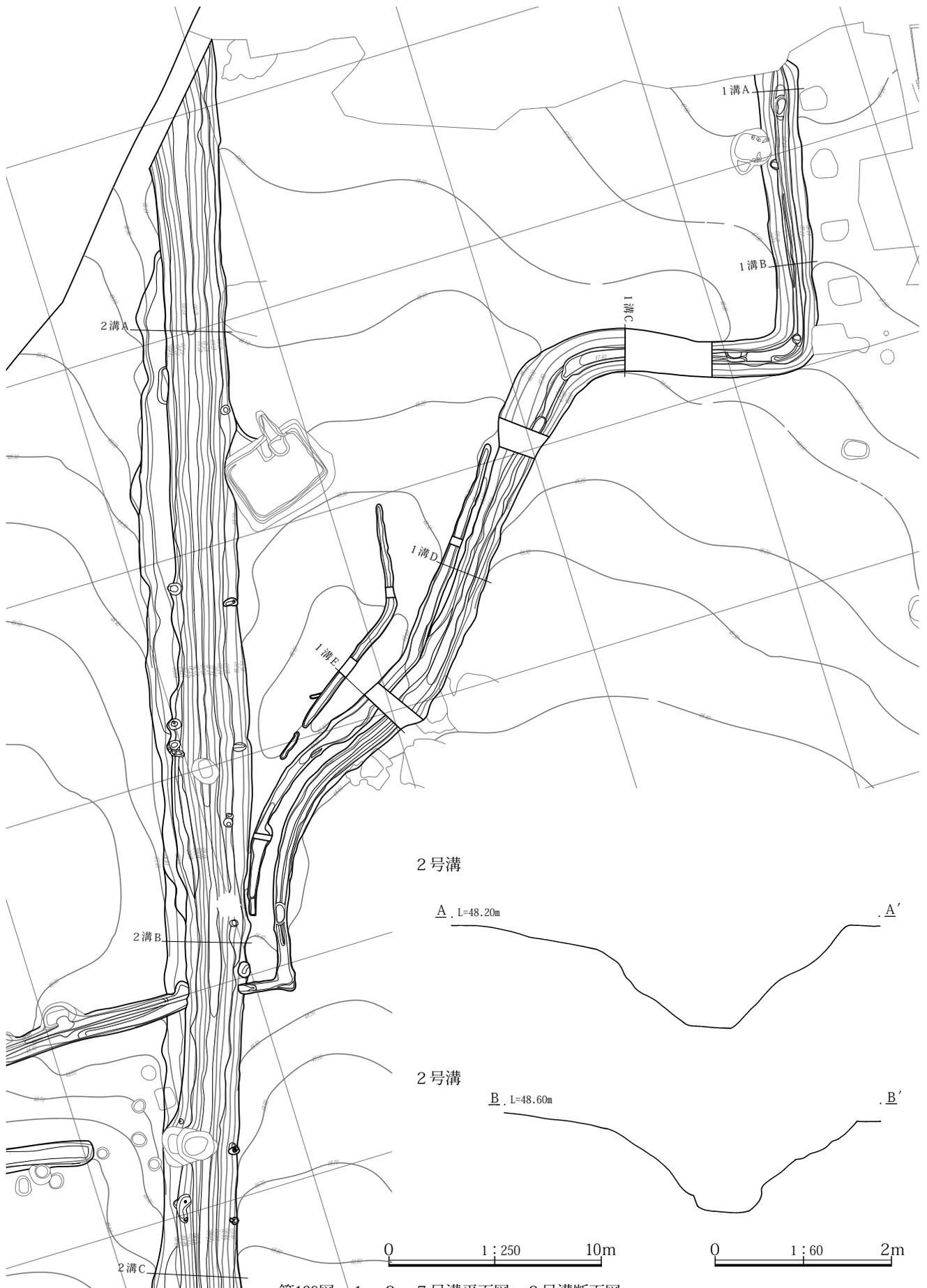
本溝は4区西側の10号溝の東側を概ね併走する溝で、3区の東側を経て、2区の南東付近を直進する。溝の北端は10号溝と11号溝の交点付近を先端とし、南へ延びながら弧状を呈して南端は攪乱のため不明となるが、10号溝と13号溝の交差付近を通り、2・3区では北東から南西方向へ直線的に延びる。途中の3区で10・13号溝と、2区で12・20・23・24号溝とそれぞれ交差するが、その新旧は不明。また、2区で174・179号土坑と重複し、その新旧は本溝が新しい。確認できた溝の規模は、2区から4区までの総延長110.7m、上幅0.4m、深さ17cmを測る。両端の比高差は40cmと南西端が低く、その勾配は1.0%である。埋土は、黒褐色土を主とする。溝の性格および流水の可能性は不明。

出土遺物は極めて少なく、未掲載遺物に土師器片のみである。

本溝の時期は、不明。

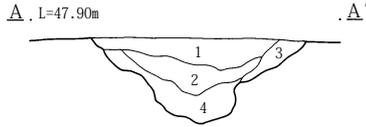


第138図 溝配置図



第139図 1・2・7号溝平面図、2号溝断面図

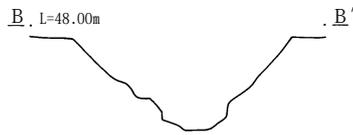
1号溝



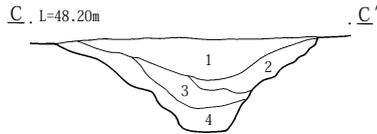
1号溝 A-A'

- 1 暗褐色土 暗灰色土を混入し、白色パミスを少量含む。灰色味がかり砂質ぎみ。
- 2 暗褐色土 暗灰色土を少量、白色パミス微量含む。
- 3 暗褐色土 酸化鉄分を少量含み、白色パミスを微量含む。
- 4 暗褐色土 ローム粒、酸化鉄分を少量含む。若干粘質。

1号溝



1号溝



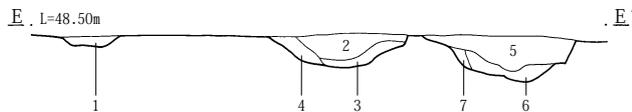
1号溝 C-C'

- 1 暗褐色土 暗灰色土を混入し、白色パミスを少量含む。灰色味がかり砂質ぎみ。
- 2 暗褐色土 ローム小ブロックを少量含む。
- 3 暗褐色土 暗灰色土を少量、白色パミスを微量含む。
- 4 暗褐色土 ローム粒、酸化鉄分少量含む。若干粘性を帯びる。

1号溝



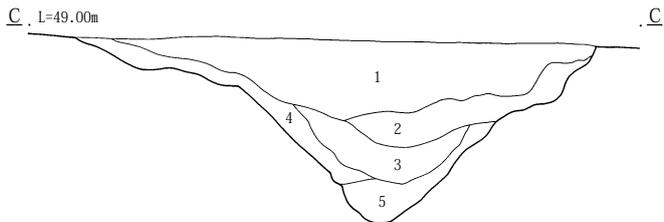
1・7号溝



1・7号溝 E-E'

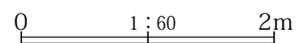
- 1 暗褐色土 黄褐色ロームブロックを混入。(7号溝)
- 2 暗褐色土 ローム小ブロックを少量含む。
- 3 黄灰色土 暗褐色土、灰色砂質土を少量含む。炭化物を微量含む。
- 4 暗黄褐色土 暗褐色土を少量含む。
- 5 暗褐色土 暗灰色小ブロックを少量含む。
- 6 暗褐色土 ローム小ブロック、灰色砂質土粒を少量含む。
- 7 黄褐色土 暗褐色土を混入。

2号溝

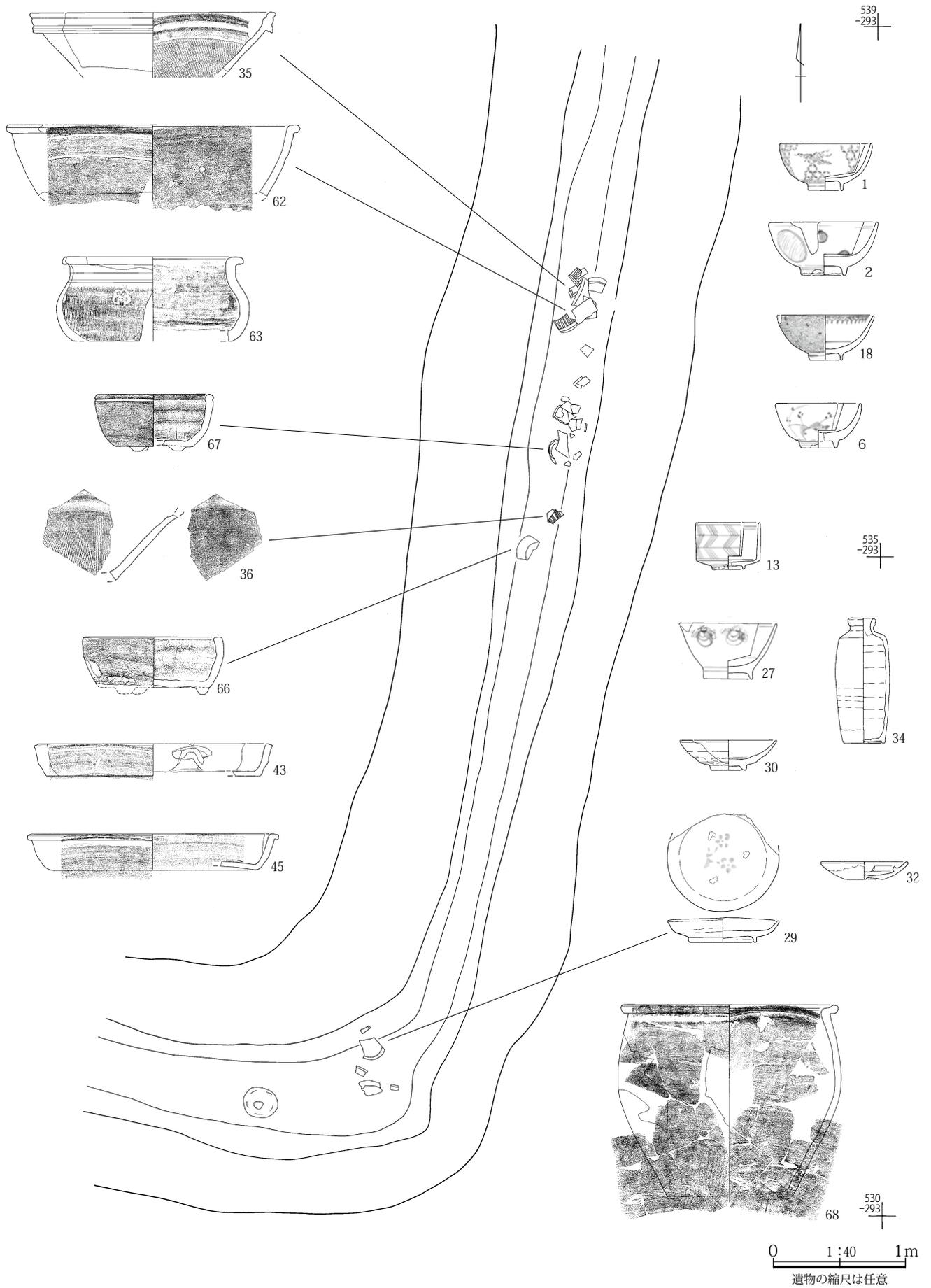


2号溝 C-C'

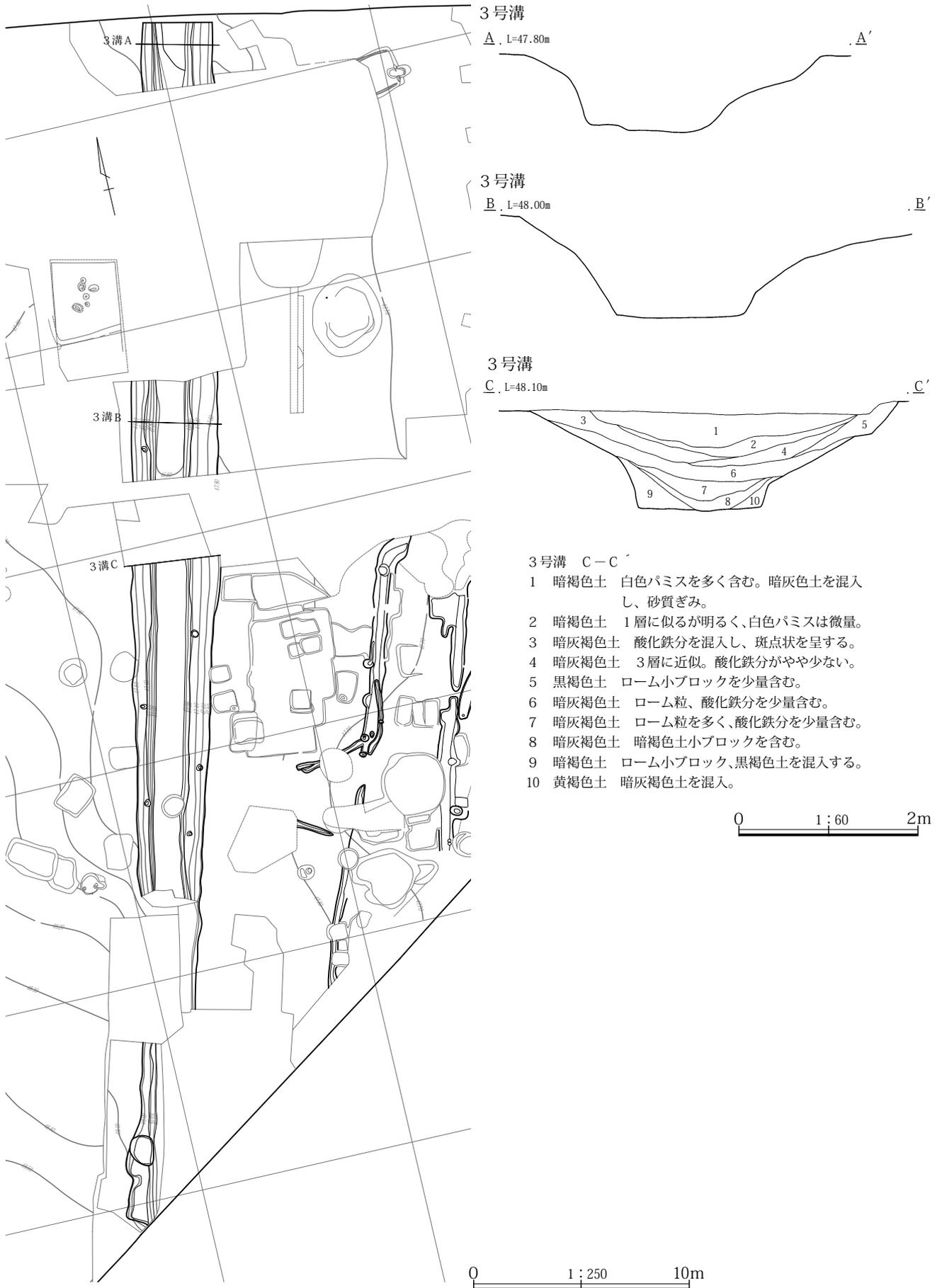
- 1 暗褐色土 暗灰色土小ブロックを少量、白色パミスを微量含む。若干砂質ぎみ。
- 2 暗褐色土 白色パミス、暗灰色粘質土、ローム粒を少量、1cm前後の小礫を含む。
- 3 黒褐色土 炭化物を混入。5cm大程の礫を含む。
- 4 暗褐色土 ローム粒・小ブロックを少量含、炭化物微量含む。
- 5 暗褐色土 暗灰色土を混入し、酸化鉄分を少量含む。1cm前後の小礫を僅かに含む。



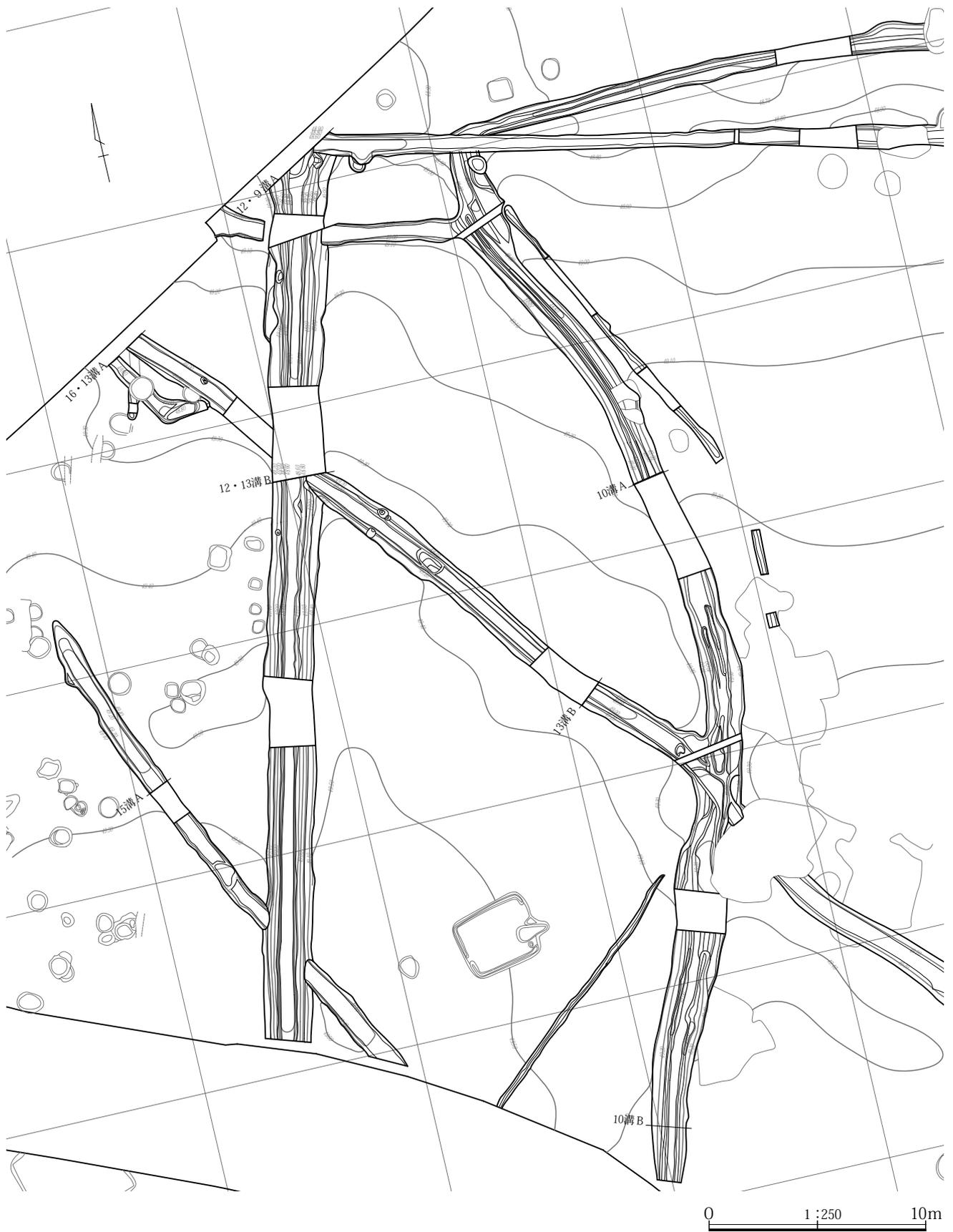
第140図 1・2・7号溝 土層断面図



第141図 1号溝 遺物出土状態平面図

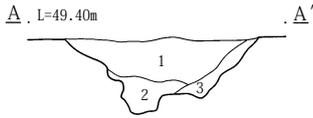


第142図 3号溝平面図、土層断面図



第143図 9・10・12・13・15・16号溝平面図

10号溝



10号溝 A-A'

- 1 暗褐色土 耕作土混入し、砂質ぎみ。ローム小ブロックを微量含む。
- 2 黒褐色土 ローム小ブロックを少量含む。
- 3 黒褐色土 ローム粒、小ブロックを少量含む。締まりあり。

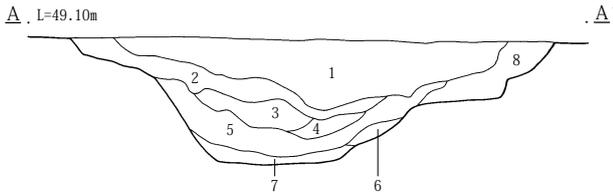
10号溝



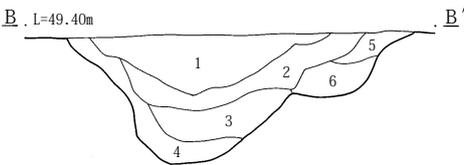
12・9号溝 A-A'

- 1 暗褐色土 耕作土混入し、砂質ぎみ。白色パミスを微量、3～5 cm大の礫を含む。
- 2 暗褐色土 ローム小ブロックを少量含む。
- 3 黒褐色土 3～5 cm大の礫を少量含む。
- 4 黒褐色土 3層に近似。ローム土少量混入し、色調やや明るい。
- 5 暗褐色土 ローム土混入。1 cm程の小礫を含む。締まりあり。
- 6 暗灰褐色砂質土 灰褐色砂質土と暗褐色土の混土層。
- 7 茶褐色土 ローム土を主体とし、暗褐色土を少量混入。締まりあり。
- 8 暗褐色土 ロームブロック多量混入。黒褐色土少量含む。締まりあり。(9号溝)

12・9号溝



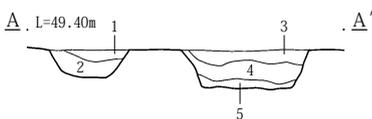
12・13号溝



12・13号溝 B-B'

- 1 暗褐色土 白色パミスを微量含む。1 cm程の小礫を含む。砂質ぎみ。
- 2 黒褐色土 5 mm前後の小礫を微量含む。締まりあり。
- 3 黒褐色土 1 cm程の小礫を含み、暗褐色土ブロックを少量含む。締まりあり。
- 4 暗褐色土 ローム土混入。小礫を微量含む。締まりあり。
- 5 黒褐色土 灰褐色砂を少量含み、砂質ぎみ。(13号溝)
- 6 黒褐色砂質土 灰褐色砂を多量含み、5 mm程の小礫を多く含む。(13号溝)

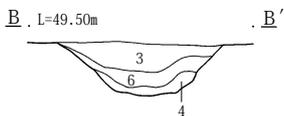
13・16号溝



13・16号溝 A-A'

- 1 暗褐色土 ローム土を微量含む。(16号溝)
- 2 暗褐色土 ローム土混入し、1層より色調明るい。(16号溝)
- 3 黒褐色土 灰褐色砂少量含み、砂質ぎみ。(13号溝)
- 4 黒褐色砂質土 灰褐色砂を多量含み、砂質強い。(13号溝)
- 5 黒褐色土 灰褐色砂混入し、砂質ぎみ。(13号溝)

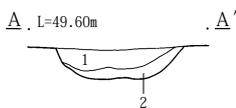
13号溝



13号溝 B-B'

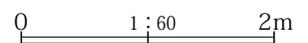
- 3 黒褐色土 灰褐色砂少量含み、砂質ぎみ。
- 4 黒褐色砂質土 灰褐色砂を多量含み、砂質強い。
- 6 暗褐色土 灰褐色砂を多く、黒褐色土を少量含む。

15号溝

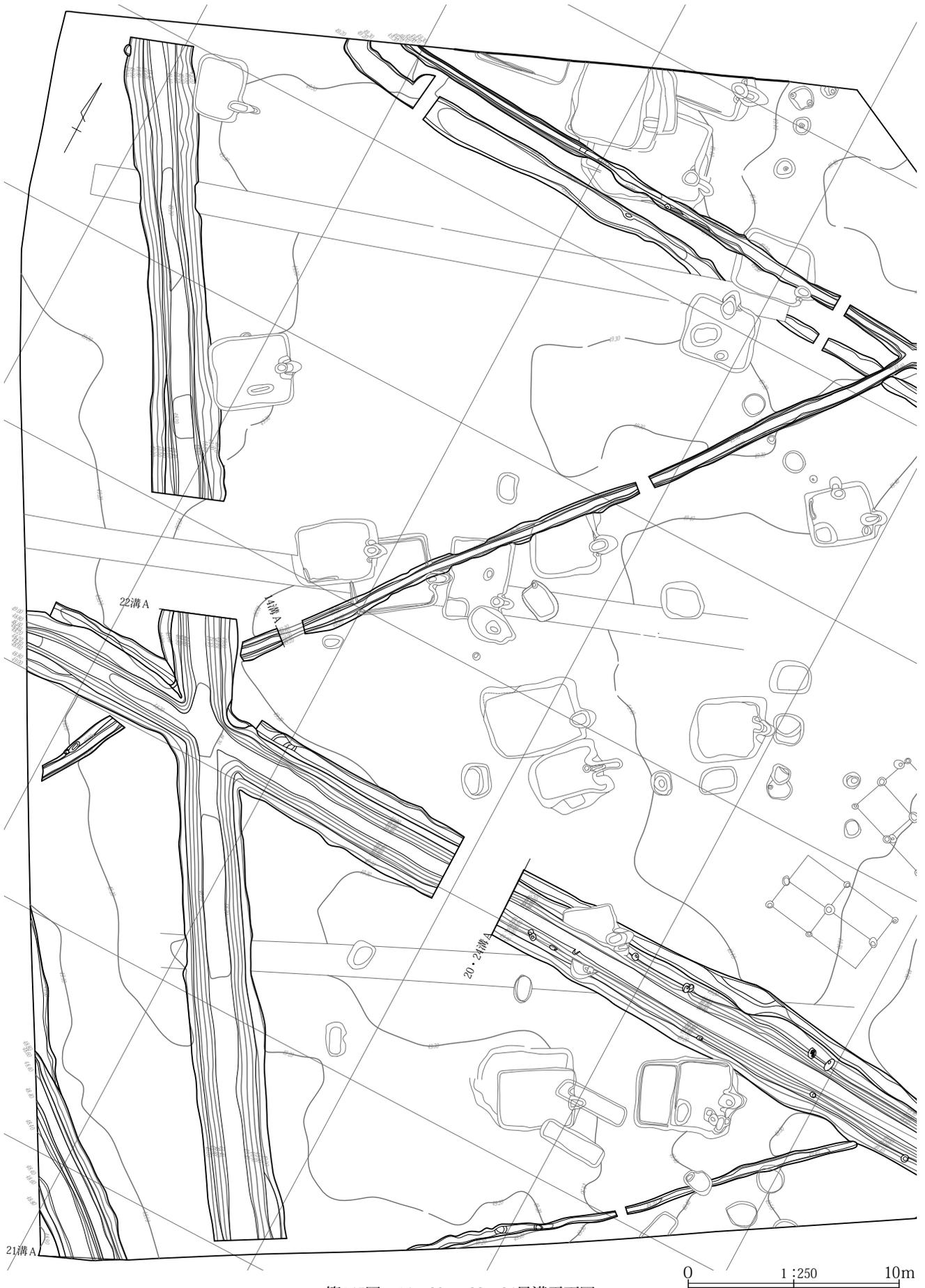


15号溝 A-A'

- 1 黒褐色土 ローム粒を少量、白色パミスを微量含む。
- 2 暗褐色土 ローム土を混入。

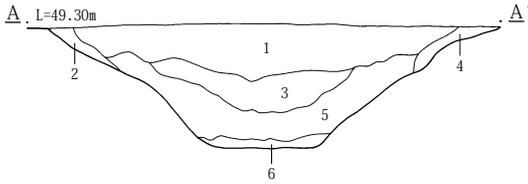


第144図 9・10・12・13・15・16号溝土層断面図



第145図 14・20～22号溝平面図

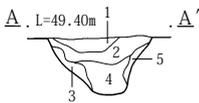
22号溝



22号溝A-A'

- 1 黒褐色土 耕作土混入し、白色パミスを多く含む。砂質ぎみ。
- 2 褐色土 ローム粒を多量に含む。
- 3 暗褐色土 ローム粒・ブロックを含む。
- 4 暗褐色土 3層に近似するが、より暗い。
- 5 黄褐色土 ローム粒・ブロックを多量に含む。
- 6 砂礫層 砂を主に、5mm程の小礫を含む。

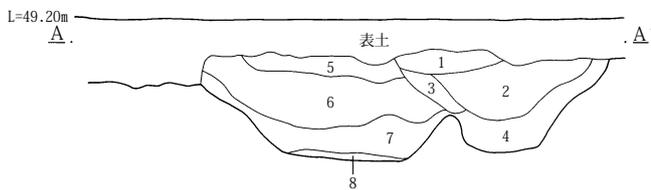
14号溝



14号溝A-A'

- 1 褐灰色土 耕作土混入し、砂質ぎみ。
- 2 黒褐色土 混入物なく、締まりあり。
- 3 褐色土 ローム粒子を多く含む。
- 4 暗褐色土 ローム粒子・ブロックを含む。
- 5 褐色土 ローム粒子を多く含む。

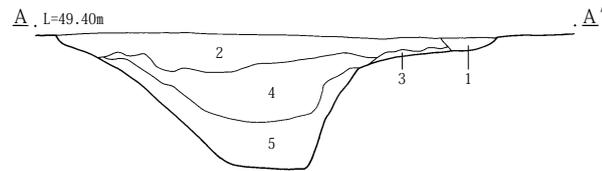
21号溝



21号溝A-A'

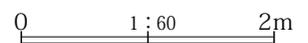
- 1 暗褐色土 黒褐色土の小ブロックを多く含む。(21-A号溝)
- 2 暗褐色土 ローム粒を少量含む。やや砂質ぎみ。(21-A号溝)
- 3 黒褐色土 暗褐色土の小ブロックを少量含む。(21-A号溝)
- 4 黄褐色土 ローム土を主体とし、暗褐色土と暗灰色砂質土小ブロックを含む。(21-A号溝)
- 5 暗褐色土 ローム粒を少量含む。締まりあり。(21-B号溝)
- 6 暗褐色土 ローム粒を微量含む。5層よりやや明るい。(21-B号溝)
- 7 黄褐色土 ローム土を主体とし、暗褐色土を混入。暗灰色砂質土粒を少量含む。(21-B号溝)
- 8 黄褐色砂質土 ローム土に暗灰色砂(川砂)、小砂利を多量に混入。(21-B号溝)

20・24号溝



20・24号溝A-A'

- 1 暗褐色土 ローム粒を少量含む。締まり強い。(24号溝)
- 2 褐色土 ローム粒子を多く含む部分あり。(20号溝)
- 3 黄褐色土 ロームブロックを多く含む。(20号溝)
- 4 黒褐色土 混入物が少なく、粘質が強い。(20号溝)
- 5 暗褐色土 ローム粒子を多く含む、粘質ぎみ。(20号溝)



第146図 14・20～22・24号溝土層断面図

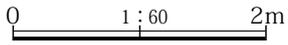
第3章 検出された遺構と遺物

25・26号溝

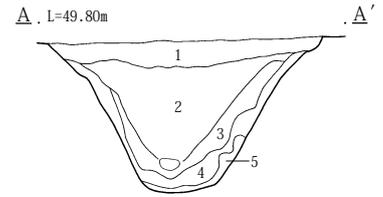


25・26号溝

- 1 暗褐色土 ローム粒を少量含む。締まりやや強い。(25号溝)
- 2 黄褐色土 ローム粒を多量に含む。締まり強い。(25号溝)
- 3 黄褐色土 ローム粒・ブロックを含む。締まり強い。(25号溝)
- 4 暗褐色土 ローム粒を少量含む。締まりやや強い。(26号溝)



12号溝

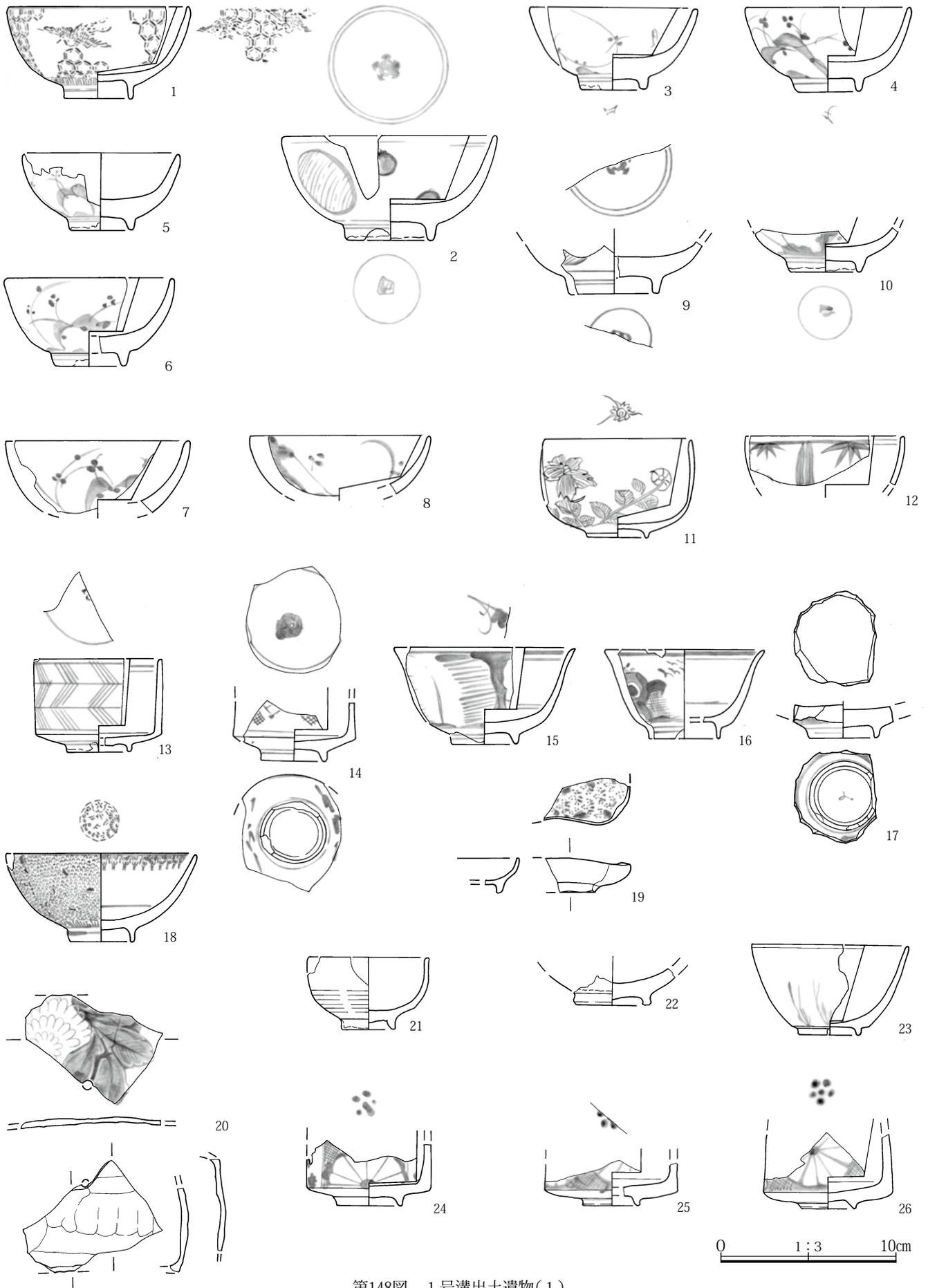


12号溝 A-A'

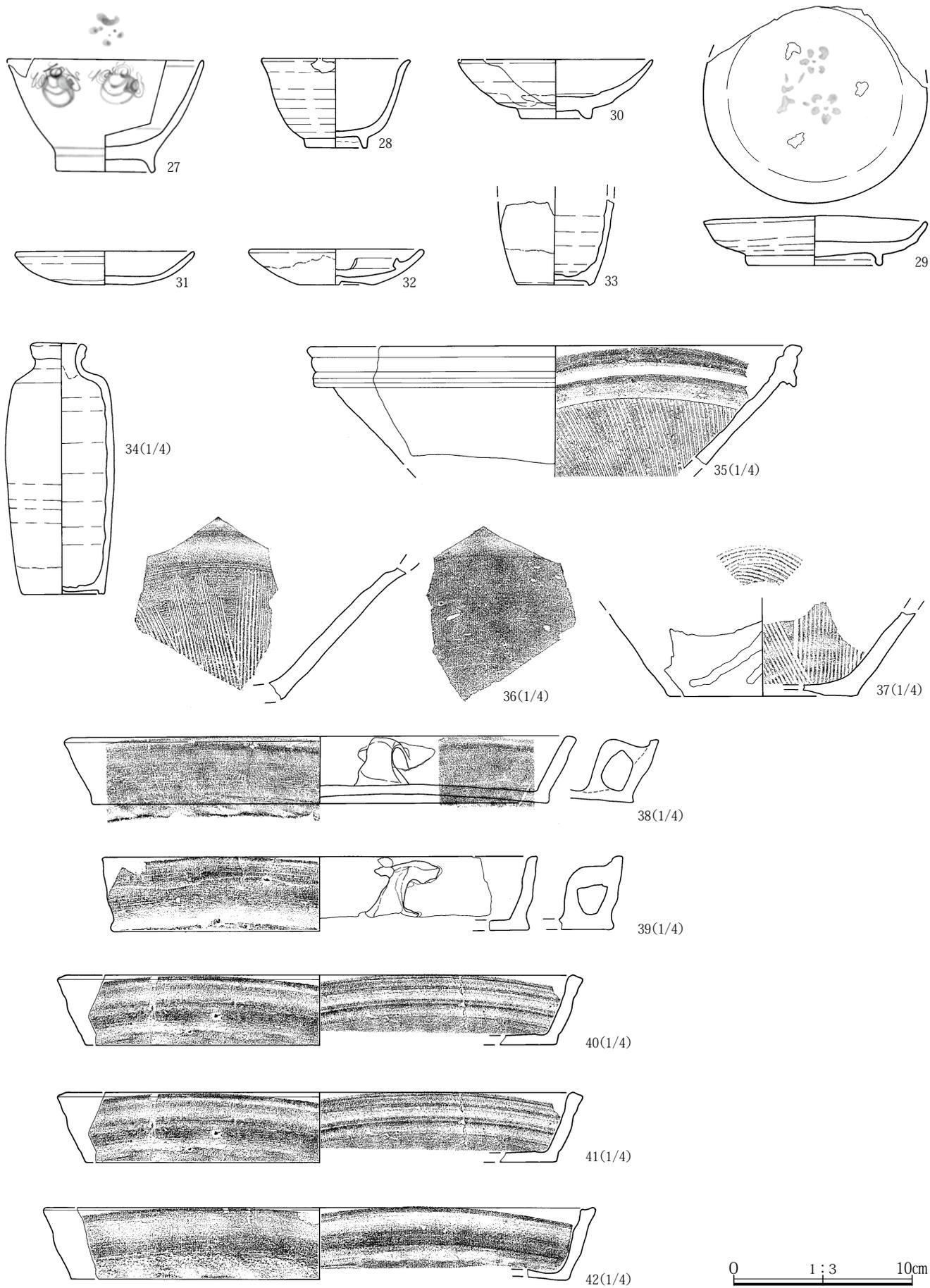
- 1 黒褐色土 1 cm程の小礫を含む。砂質ぎみ。
- 2 黒褐色土 2～3 cm程の小礫を含む。
- 3 黒褐色土 1・2層に近似するが、明るい。
- 4 赤褐色土 部分的にロームブロックを含む。
- 5 砂質砂礫層 1～3 cmの礫を多量に含む。



第147図 12・25・26号溝平面図、土層断面図

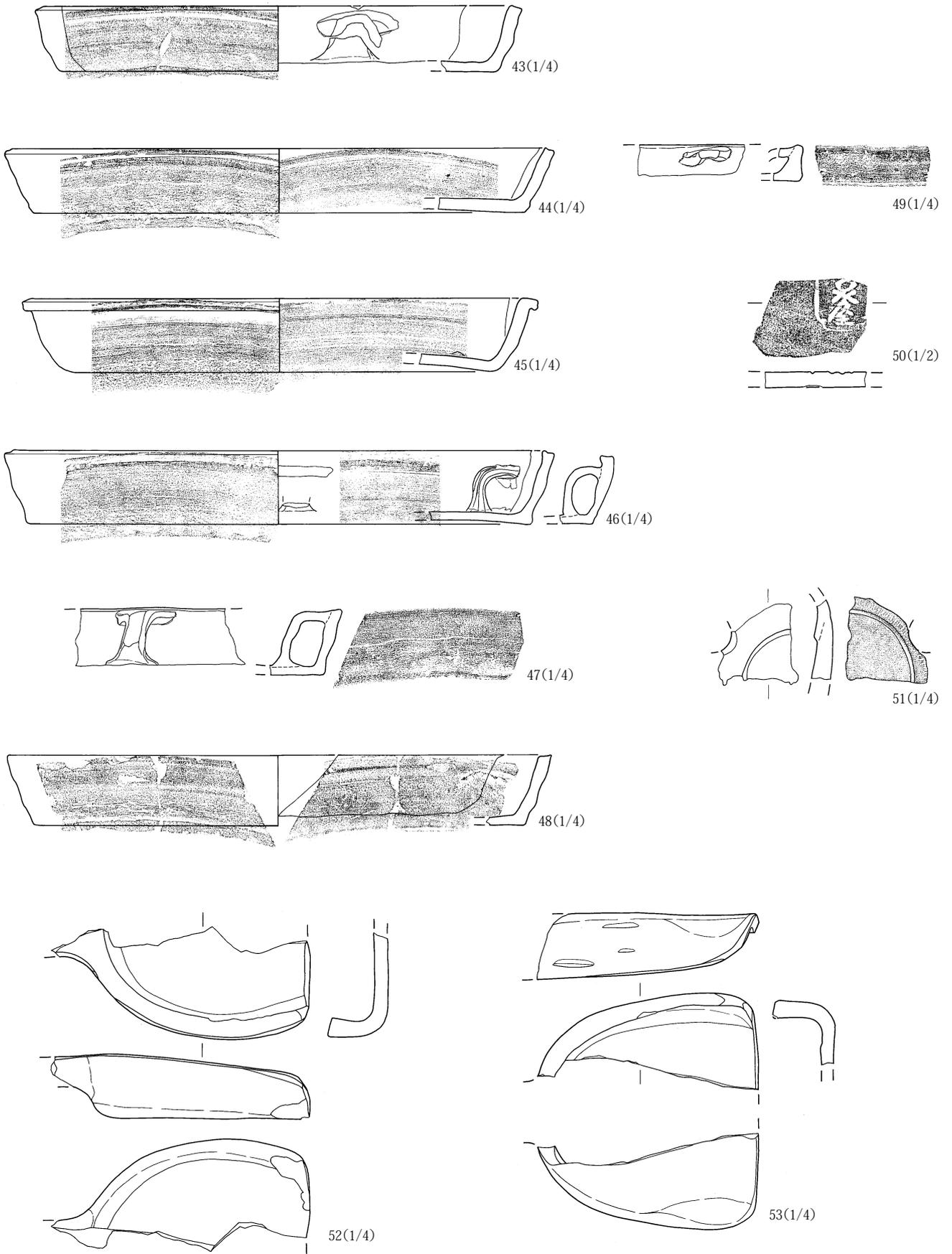


第148図 1号溝出土遺物(1)



0 1:3 10cm

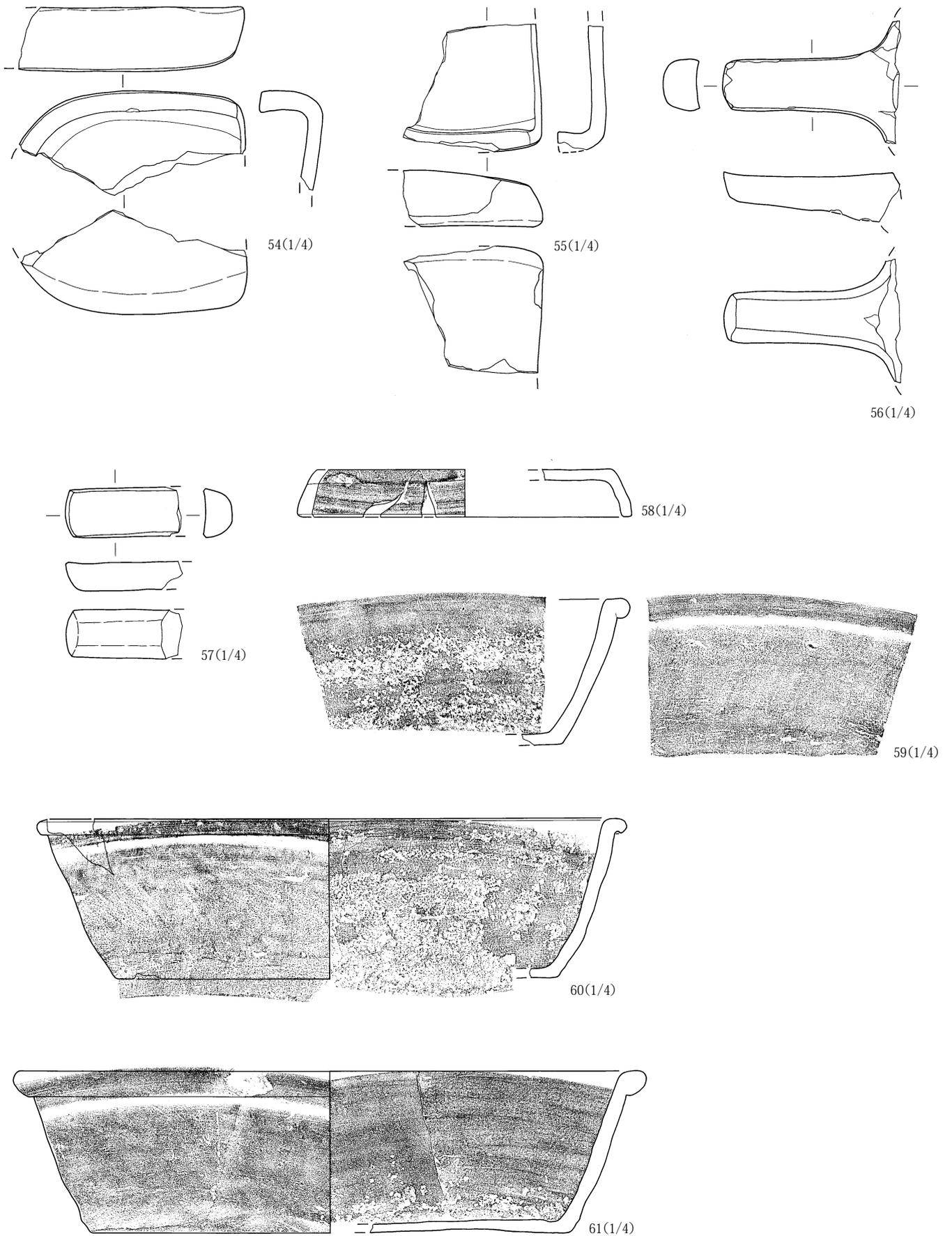
第149図 1号溝出土遺物(2)



0 1:4 10cm

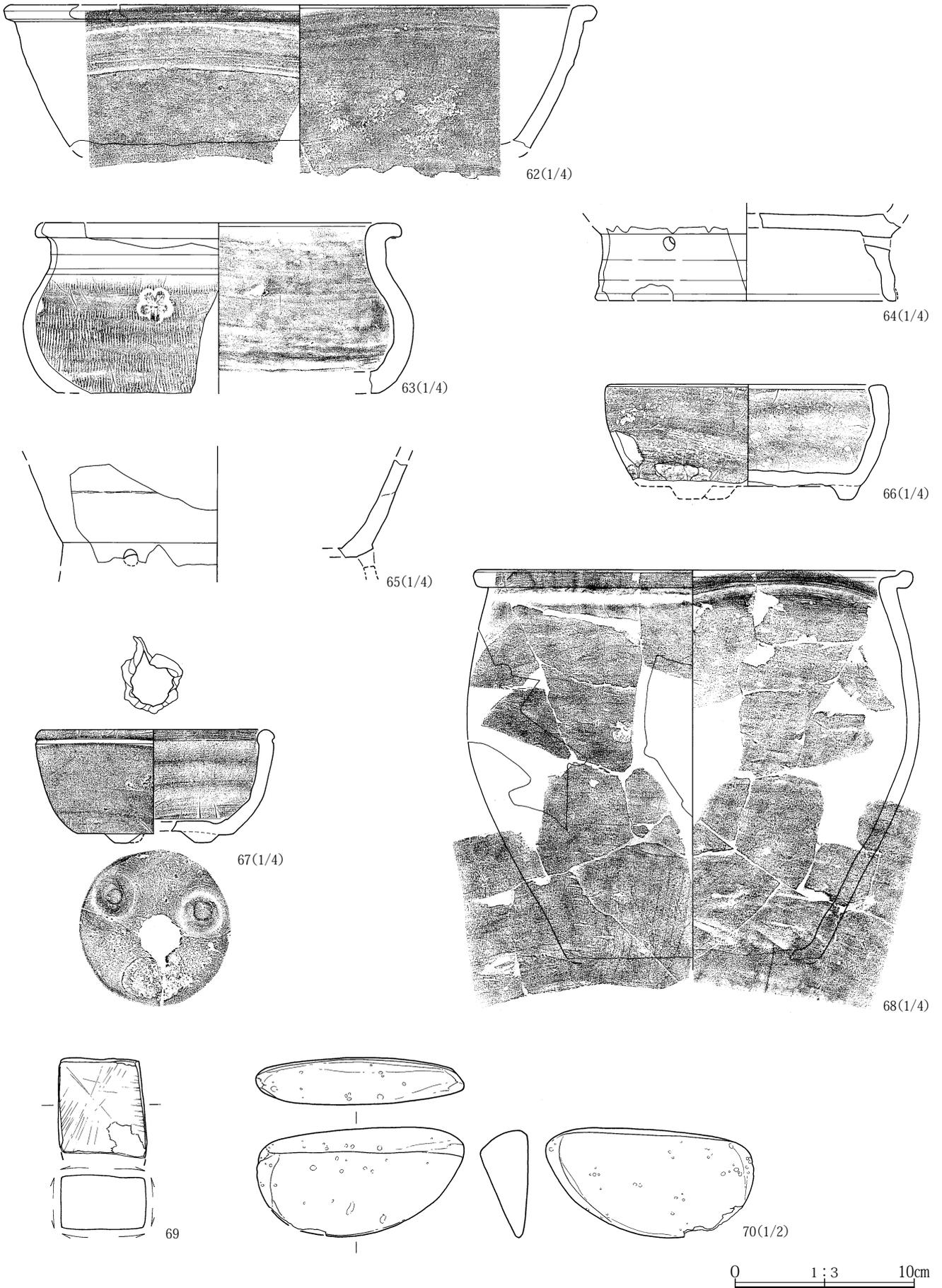
第150図 1号溝出土遺物(3)

第3章 検出された遺構と遺物

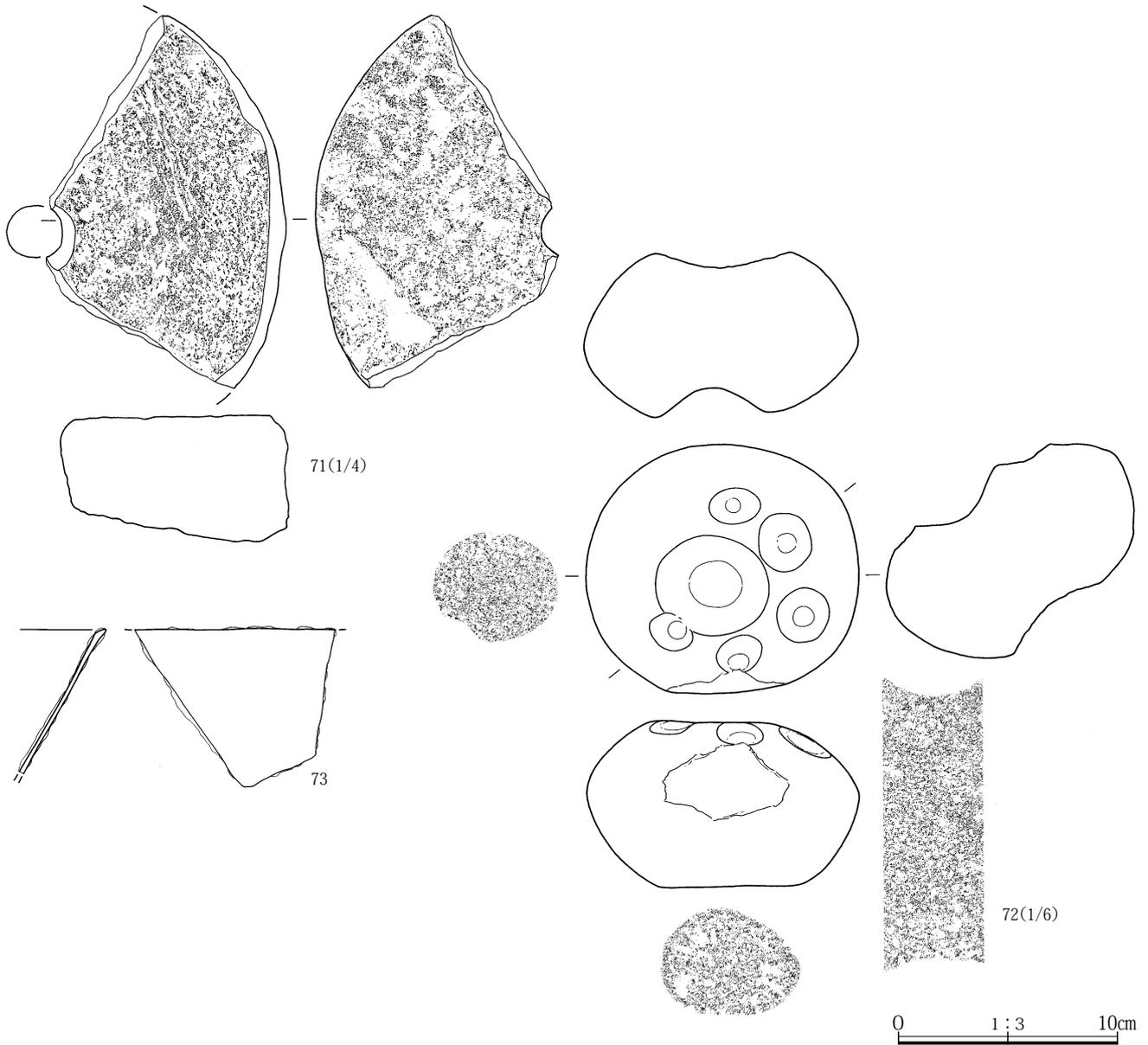


0 1:4 10cm

第151図 1号溝出土遺物(4)



第152図 1号溝出土遺物(5)



第153図 1号溝出土遺物(6)

第39表 1号溝出土遺物観察表

挿図番号 図版番号		NO.	種類 器種	出土位置 残存率	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	色調	成形・整形の特徴	備考
第148図 PL.43	1	瀬戸・美濃磁器碗	埋土中 2/3	(10.3)	(3.9)	5.2	白	外面は型紙摺りによる亀甲と鶴文を3単位配す。内面は型紙摺りによる亀甲文と2羽の鶴を1カ所か2カ所に配す。残存部には1カ所。	近現代	
第148図 PL.43	2	肥前磁器 碗	埋土中 口縁部1/2 底部完	(12.0)	4.8	5.9	灰白	体部外面に大小の丸文。高台内は1重圏線内に不明銘。口縁部内面と底部内面周縁に2重圏線。見込みの五弁花はコンニャク印判。	波佐見系 9と組み物か	
第148図 PL.43	3	肥前磁器 碗	埋土中 口縁部1/2 底部完	(9.5)	3.6	4.7	灰白	外面は雪輪梅樹文。高台内に不明銘。高台径が小さい。	波佐見系	
第148図 PL.43	4	肥前磁器 碗	埋土中 口縁部1/4 底部1/2	(9.3)	3.6	4.7	灰白	外面は簡略化した雪輪梅樹文。高台内に不明銘。	波佐見系	
第148図	5	肥前磁器 碗	埋土中 口縁部1部 底部完	(8.8)	3.6	4.3	灰白	器高低い。外面は簡略化した雪輪梅樹文。呉須は薄く、濃み部分は見えにくい。	波佐見系	
第148図	6	肥前磁器 碗	埋土中 1/4	(9.6)	(4.0)	5.0	灰白	外面は簡略化した雪輪梅樹文。底部器壁は厚い。	波佐見系	
第148図	7	肥前磁器 碗	埋土中 1/3	(10.4)	—	—	灰白	外面はやや簡略化した雪輪梅樹文。	波佐見系	
第148図	8	肥前磁器 碗	埋土中 1/5	(10.2)	—	—	灰白	外面は雪輪梅樹文。	波佐見系	

第4節 奈良時代以降の遺構と遺物

挿図番号 図版番号	NO.	種類 器種	出土位置 残存率	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	色調	成形・整形の特徴	備考
第148図	9	肥前磁器 碗	埋土中 1/2	—	(5.0)	—	灰白	体部外面に大小の丸文。底部内面周縁は2重圏線。見込みの五弁花はコンニャク印判。高台内は1重圏線内に不明銘。	波佐見系 2と組み物か
第148図	10	肥前磁器 碗	埋土中 底部	—	4.0	—	灰白	体部外面は雪輪梅樹文。高台内は1重圏線内に不明銘。	
第148図 PL.43	11	肥前磁器 丸碗	埋土中 口縁部1/2 欠	(8.4)	3.4	5.6	白	主文様に3本の草花を素描で大きく描く。裏文様は不明。見込み文様も素描で描く。やや焼成不良で粗い貫入がはいる。	
第148図	12	肥前磁器 丸碗	埋土中 1/4	(8.9)	—	—	白	外面は竹か笹文。口縁部内面は2重圏線。	
第148図	13	肥前磁器 筒形碗	埋土中 1/4	(7.2)	(3.6)	5.2	灰白	体部外面は圏線間に鋸歯状文。高台脇と高台外面に1重圏線。口縁部内面に2重圏線。見込みは1重圏線内に簡略化した五弁花。高台脇と高台内に釉切れあり。	
第148図	14	瀬戸・美濃磁器筒 形碗	埋土中 底部	—	3.5	—	灰白	体部外面の残存部に井桁状と格子状文残る。高台脇に簡略化した龍状の文様。底部内面は1重圏線内に不明文様。焼成不良により釉が白濁し、胎土の磁化も不十分。	
第148図	15	瀬戸・美濃磁器端 反碗	埋土中 口縁部1/4 底部1/2	(10.2)	(3.6)	5.4	白	外面は簡略化した文様を染付。内面は口縁部と底部周縁に2重圏線。見込みに不明文様。焼成不良により釉はやや白濁。	
第148図	16	瀬戸・美濃磁器端 反碗	埋土中 1/4	(9.0)	(4.0)	5.1	白	口縁部内外面幅広い圏線。内面は口縁部と体部下位内面に細い1重圏線。外面は海浜風景の染付。やや焼成不良で不規則な貫入がはいる。	
第148図	17	肥前磁器 碗(二次加工品)	埋土中 底部	—	3.8	—	灰白	体部外面は染付。高台内に不明銘。底部周縁を、内面側からの細かい敲打により円盤状に成形。	波佐見系
第148図 PL.43	18	製作地不詳磁器碗	埋土中 口縁部1/3 底部完	(10.8)	3.7	5.0	白	内外面は型紙摺りによる施文。口縁部内面は嬰珞文。底部内面は1重圏線内に松竹梅文。	近現代
第148図	19	肥前磁器 小皿	埋土中 1/4	—	—	—	白	糸切り細工による変形小皿。高台は粘土紐の貼り付け。内面は呉須による型紙摺り。	
第148図	20	製作地不詳磁器水 滴	埋土中 天井部片	—	—	—	白	平面形は長方形。上面は型により菊文を浮き出させ、葉の部分に呉須を施す。天井部側面寄りに小孔が1カ所残る。天井部外面透明釉。内面は無釉で中央に指撫で痕残る。	
第148図	21	瀬戸・美濃陶器小 碗	埋土中 口縁部1部 底部完	(6.8)	3.0	4.1	淡黄	外面の体部以下は回転篋削り。内面から高台脇付近に灰釉。貫入がはいる。	
第148図	22	瀬戸・美濃陶器碗	埋土中 底部	—	4.2	—	灰白	削り出し高台。内面から高台脇に灰釉。貫入がはいる。柳茶碗と同様な胎土と釉調。底部の器壁はやや厚い。	
第148図 PL.43	23	京・信楽系陶器碗	埋土中 1/2	(8.9)	(3.4)	5.1	灰白	高台脇は水平に削り込む。底部内面の器壁は非常に薄い。体部外面に鉄絵具による若松文。内面から高台脇に灰釉。細かい貫入がはいる。いわゆる小杉茶碗。	
第148図 PL.43	24	瀬戸・美濃陶器筒 形碗	埋土中 下半	—	3.7	—	灰白	陶器染付。体部外面に菊花文、格子状と井桁状文をそれぞれ、相対する2カ所に描く。底部内面周縁に1重圏線。見込みに梅鉢状の文様。	
第148図	25	瀬戸・美濃陶器筒 形碗	埋土中 1/2	—	(3.0)	—	灰白	体部外面に菊花文の染付。高台脇に1重圏線。底部内面は1重圏線内に星梅鉢状の染付。	26と組み物か
第148図	26	瀬戸・美濃陶器筒 形碗	埋土中 1/2	—	3.0	—	明オ リーブ 灰	体部外面に菊花文の染付。高台脇に1重圏線。底部内面は1重圏線内に星梅鉢状の染付。	25と組み物か
第149図 PL.43	27	瀬戸・美濃陶器広 東形碗	埋土中 口縁部1/3 欠	(10.9)	5.5	6.3	灰白	全体に粗い貫入がはいる。口縁部外面に呉須と鉄絵具による宝珠文を2個一対で配する。高台外面に2重圏線。口縁部内面に1重圏線。底部内面は1重圏線内に不明文様。	
第149図 PL.43	28	萩陶器か 端反小碗	埋土中 1/4	(8.3)	3.4	5.0	灰白	内面から口縁部外面に藁灰釉。口縁部外面下位から高台内面は黒褐色に発色する鉄泥。高台端部も鉄泥を塗布。高台内は無釉。内面に貫入がはいる。	萩焼 深川諸窯か
第149図 PL.43	29	美濃陶器 摺り絵皿	埋土中 口縁部1/2 欠	12.4	7.4	2.8	浅黄橙	いわゆる御深井。底部内面に鉄絵具による型紙摺りで草花文。内面から口縁部外面に灰釉。底部内面に目痕4カ所。	
第149図 PL.43	30	肥前陶器 青緑釉皿	埋土中 1/4	(10.8)	3.9	3.2	灰白・ オリー ブ灰	内面に青緑釉、口縁部外面から体部外面に透明釉。見込みは蛇ノ目釉剥ぎ。	内野山
第149図 PL.43	31	瀬戸・美濃陶器灯 火皿	埋土中 1/3	(9.8)	(4.0)	1.8	灰	体部外面下半以下は回転篋削り。前面に錆釉施釉後、体部外面下以下を拭う。	
第149図	32	瀬戸・美濃陶器灯 火受皿	埋土中 1/2	(9.4)	(4.4)	2.0	灰白	外面の口縁部以下は回転篋削り。底部外面中央に削り残しがあり、据わりが悪い。受け部の1カ所を「U」字状に抉る。全面に錆釉を薄く施釉後、口縁部外面以下の釉を拭う。	
第149図	33	美濃陶器 徳利	埋土中 1/2	—	(5.2)	—	オリー ブ灰	外面は回転篋削り。高台の台部分は細かい敲打により打ち欠く。外面は灰釉施釉後に体部外面下位以下の釉を拭う。	
第149図 PL.43	34	美濃陶器 徳利	埋土中 体部上位 1/2欠	4.2	6.2	18.8	黄灰	肩は張り、口縁部の折り返しは幅広。体部外面上位付近以下は回転篋削り。頸部内面から体部外面下位に灰釉。	
第149図	35	堺・明石陶器 摺り鉢	埋土中 1/8	(36.4)	—	—	明赤褐	口縁部は縁帯をなす。口縁部内面は丸みを帯び段をなす。口縁部内面のすり目は回転横撫でにより撫で消す。外面の口縁部以下は回転篋削り。無釉。	

第3章 検出された遺構と遺物

挿図番号 図版番号	NO.	種類 器種	出土位置 残存率	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	色調	成形・整形の特徴	備考
第149図	36	瀬戸陶器 播り鉢	埋土中 体部片	—	—	—	鈍い橙 ～浅黄 橙	内外面に錆釉。内面下位は使用によりやや平滑となる。	
第149図	37	瀬戸陶器 播り鉢	埋土中 1/4	—	(14.0)	—	橙	体部外面から底部外面回転篋削り。錆釉施釉後、底部外面の釉を拭う。内面は使用により器表が摩滅。	
第149図 PL.44	38	在地系土器 焙烙	埋土中 2/3	37.0	34.0	4.9	鈍い黄 橙	断面中央は灰黄色、器表付近はにぶい黄橙色、内面器表と底部外面器表は黒褐色から褐灰色、口縁部から体部外面の器表は黒褐色から黒色。底部外面から体部外面に砂状痕。内面から体部外面下位は回転横撫で。体部外面下位の砂状痕をほとんど撫で消す。体部外面下端を窪ませ、底部との境は明瞭。内耳は3カ所のうち、相対する2カ所残存。	
第149図	39	軟質陶器 焙烙	埋土中 1/5	(32.0)	(31.0)	(5.5)	浅黄橙	底部外面の器表を除き黒色。底部外面の器表は灰褐色。底部外面から体部外面下位に砂状痕。内面から体部外面下位は回転横撫で。体部外面の砂状痕は撫で消すが窪みは残る。体部外面下端は篋撫で。口縁端部は丸みを有し、僅かに外反。内耳は1カ所残存。	
第149図	40	軟質陶器 焙烙	埋土中 1/6	(33.8)	(31.8)	(5.1)	浅黄橙	底部外面の器表を除き黒色。底部外面の器表は灰褐色。底部外面から体部外面下位に砂状痕。内面から体部外面下位は回転横撫で。体部外面の砂状痕は撫で消すが窪みは残る。体部外面下端は篋撫で。口縁端部は丸みを有し、僅かに外反。内耳は1カ所残存。	
第149図	41	在地系土器 焙烙	埋土中 1/6	(37.6)	(35.0)	5.2	灰白	底部外面の器表を除き黒色。底部外面の器表は灰白色。底部外面から体部外面下位に砂状痕。内面から体部外面は回転横撫で。体部の砂状痕を撫で消す。体部外面の下端は篋撫で。口縁端部丸みを帯びる。	
第149図	42	在地系土器 焙烙	埋土中 1/6	(4.1)	(37.0)	5.3	灰白	断面中央は暗灰色、器表付近は灰白色、口縁部から体部内外面の器表は黒色。底部内外面の器表は灰褐色。底部外面から体部外面下位に砂状痕。内面から体部外面中位は回転横撫で。体部外面下位の砂状痕部分は指頭厚痕状の窪みが連続する。口縁端部上面は窪み、内面側は明瞭な稜を外面側は緩い稜をなす。体部中位は肥厚。	
第150図	43	在地系土器 焙烙	埋土中 1/6	(34.0)	(32.0)	4.7	橙	断面中央は暗灰色、器表付近は橙色、器表は黒褐色から黒色。口縁端部は僅かに窪み、内面側は丸みを持つが、外面側は緩い稜をなす。底部外面から体部外面下位まで砂状痕。内面から体部外面中位は回転横撫で。外面器表は底部外面のみ黒味が弱い。内耳は1カ所残存。	
第150図	44	在地系土器 焙烙	埋土中 1/4	(39.0)	(36.0)	4.7	鈍い黄 橙	内面の器表は暗灰色、口縁部から体部外面の器表は黒色。底部外面の器表は浅黄橙色から灰黄色。底部外面から体部外面下位は砂状痕。体部外面下位は指頭厚痕状に窪み、下端は篋撫で。内面から体部外面中位は回転横撫で。外面口縁部下に接合痕残る。残存部端内面に内耳接合痕残る。	
第150図	45	在地系土器 焙烙	埋土中 1/4	(37.8)	(31.6)	5.4	暗灰	断面は暗灰色、器表付近はにぶい黄橙色、内面器表は灰黄色、口縁部から体部外面器表は黒色、底部外面は黄灰色。底部外面から体部外面下位は砂状痕。外面の体部と底部境は丸みを有し、皺状亀裂を生じている。体部外面中位に接合痕残る。口縁部は稜をなして外方に折れる。口縁端部外面は窪み、上下端は明瞭な稜をなす。	
第150図	46	在地系土器 焙烙	埋土中 1/4	(38.8)	(36.9)	5.4	浅黄橙	断面中央は暗灰色、器表付近は浅黄橙色。器表は浅黄橙色から暗灰色。口縁端部は窪み、内外の端部は緩い稜をなす。底部外面から体部外面下位は砂状痕。内面から体部外面中位は回転横撫で。内面の2カ所に内耳が残る。体部外面のみ黒味が強い。	
第150図	47	在地系土器 焙烙	埋土中 破片	—	—	5.8	鈍い橙・ 灰褐	にぶい黄橙色から灰褐色。二次被熱により変色か。底部外面から体部外面下半は砂状痕。体部外面下半は指頭厚痕状に窪む。内面から体部外面中位は回転横撫で。体部外面中位に接合痕残る。内耳は1カ所残存。	
第150図	48	在地系土器 焙烙	埋土中 1/8	(38.8)	(36.0)	5.1	橙	口縁端部は水平であるが、外面のみ小さく突き出る。外面器表のみ黒褐色。底部外面から体部外面中位砂状痕。内面から体部外面は回転横撫で。体部外面下半の砂状痕はほとんど撫で消す。体部外面下端は篋撫で。内耳貼り付け痕1カ所残る。	
第150図	49	在地系土器 焙烙	埋土中 破片	—	—	—	浅黄橙	体部外面は窪み、体部と底部の境は明瞭な稜をなす。内面に耳を貼り付ける。丸底。底部外面から体部外面は使用により黒変。	
第150図	50	在地系土器 焙烙か鍋	埋土中 底部小片	—	—	—	褐灰・ 鈍い黄 橙	内面に「?屋」の押印。江戸時代の可能性高い。	
第150図	51	在地系土器 不詳	埋土中 破片	—	—	—	鈍い黄 橙	内面の器表は黒褐色、外面の器表は黒色。外面は磨き調整後に凹線と刻み目状文を廻らす。内面は円形状の穴を粘土板で塞いだ痕跡が明瞭に残る。天井部周囲に円孔。火を扱う製品の天井部片であろう。	
第150図	52	在地系土器 十能	埋土中 身部1/2	—	—	4.7	黒・灰 黄	断面黒色、器表付近灰黄色、器表黒色。底部外面から側面の外面に型肌痕残る。	

第4節 奈良時代以降の遺構と遺物

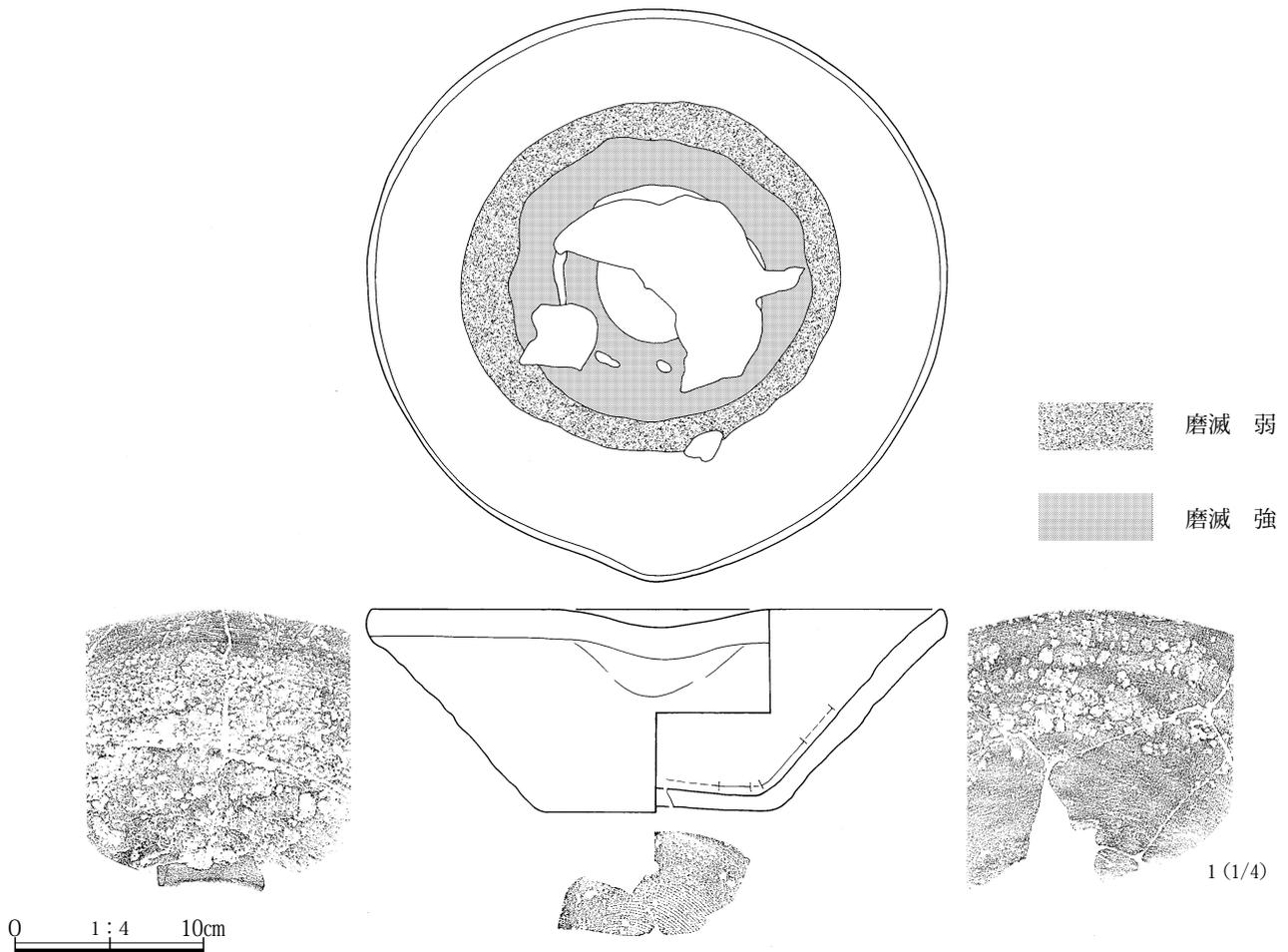
挿図番号 図版番号	NO.	種類 器種	出土位置 残存率	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	色調	成形・整形の特徴	備考
第150図	53	在地系土器 十能	埋土中 身部1/3	—	—	—	灰・灰 黄・黒	断面灰色、器表付近灰黄色、器表黒色。底部外面から側面の外面に型肌痕残る。器壁やや薄い。	
第151図	54	在地系土器 十能	埋土中 身部1/3	—	—	—	黒・灰 黄・黒 褐	断面中央の1部黒色、断面中央から器表付近灰黄色、器表黒色。器壁やや厚い。底部外面から側面の外面に型肌痕残る。	
第151図	55	在地系土器 十能	埋土中 身部1/4	—	—	—	暗灰・ 灰黄	断面暗灰色、器表付近灰黄色、器表暗灰色。底部外面から側面の外面に型肌痕残る。	
第151図	56	在地系土器 十能	埋土中 柄	13.2	幅4.0	厚2.5	黒褐・ 鈍い橙	柄も型で作り、身に近い部分の底面と側面に型肌痕が残る。柄端部から2/3は型肌痕を撫で消す。上面は型作りの際の強い撫でつけによりやや窪む。	
第151図	57	在地系土器 十能	埋土中 柄1/2	—	—	—	灰・灰 黄・黒	柄も型で作り、残存部の底面から側面の型肌痕を撫で消す。上面は型作りの際の強い撫でつけによりやや窪む。小型品。	
第151図	58	在地系土器 火消壺 蓋か	埋土中 1/6	(25.0)	(22.0)	3.6	灰黄・ 黒	断面から器表付近灰黄色、器表黒色。天井部外面に型肌痕残る。焙烙に似るが、蓋の可能性高い。	
第151図	59	在地系土器 鉢	埋土中 1/8	—	—	11.0	黄灰・ 浅黄・ 黒褐	断面暗灰色、器表付近浅黄色、器表黒褐から灰黄色。口縁端部付近丁寧な回転横撫で。体部外面鈍削り。底部外面に型肌痕残る。	
第151図 PL.44	60	土器 火鉢か鉢	埋土中 底部欠	44.0	(33.2)	12.1	灰・淡 黄・黄 灰	断面暗灰色、器表付近灰白色、器表黒から暗灰色。底部はほとんど欠損するが、底部外面が意図的に擦られている可能性高い。	
第151図 PL.44	61	在地系土器 火鉢	埋土中 1/3	(46.8)	(35.8)	12.3	黒・灰 黄	断面黒色、器表付近と底部外面の器表は灰黄色、口縁部から体部の器表は黒色。底部内面と口縁端部の磨きを除けば焙烙と同様な製作法。	
第152図 PL.44	62	在地系土器 火鉢	埋土中 3/4	43.0	—	—	灰・鈍 い橙・ 黒	断面は黒色、器表付近にはぶい橙色、器表は黒色のサンドイッチ状。仕上げ段階は焼き焼成。内面から口縁端部上面は横位磨き調整で光沢を持つ。口縁端部外方に折り返す。口縁部外面は回転横撫で、体部外面は撫でて、成形時の指押さえ痕残る。	
第152図	63	在地系土器 火鉢	埋土中 1/5	(27.0)	—	—	褐灰・ 鈍い黄 橙・黒 褐	体部下位に丸みを帯びる。体部外面は回転施文具による施文後、花形の押印を施す。頸部外面と口縁端部付近は磨き調整後に黒色物を塗布し、光沢を放つ。	
第152図	64	在地系土器 火鉢	埋土中 底部1/4	—	(22.0)	—	黄灰・ 浅黄	断面黄灰色、器表付近浅黄色、器表黒から暗灰色。底部外面に型肌痕残る。高台は貼り付け。高台の付け根に円孔1カ所残存。円孔は焼成前に外面からあける。	
第152図	65	在地系土器 火鉢か	埋土中 体部下位片	—	—	—	黒褐・ 灰黄	断面黒褐色、器表付近から器表灰黄色。高台と底部境に穿孔か挟りが1カ所残る。内面は回転横撫で調整。外面は磨き調整。体部外面に磨き前の横線1条。	
第152図 PL.44	66	在地系土器 手焙りか	埋土中 底部1部欠	21.7	(16.5)	8.6	鈍い橙・ 黒褐	断面中央暗灰色、器表付近にぶい橙色、器表黒から黒褐色。口縁部を中心に器表の剥離が著しい。内面回転横撫で。体部外面粗い磨き。底部外面の器表剥離も著しい。底部外面は型肌痕残る。	
第152図 PL.44	67	在地系土器 手焙りか	埋土中 ほぼ完形	17.6	11.5	8.5	鈍い黄 橙・灰 黄褐	断面から器表付近にぶい黄橙色、器表灰黄褐から暗灰色。底部に裁頭円錐形の脚を3カ所貼り付ける。底部外面に型肌痕残る。体部外面下端は回転鈍削り。口縁部外面に1条の凹線。底部中央に焼成後、外面からの敲打による円孔を開け、植木鉢に転用した可能性高い。	植木鉢に転用か
第152図 PL.43	68	在地系土器 甕	埋土中 上半2/3と 底部欠	(31.7)	—	—	灰・浅 黄・黒	断面黒色、器表付近浅黄色。器表黒色。口縁部は外反し、端部を小さく上方に立ち上げる。口縁部回転横撫で。体部内面横位撫でて、組作り痕残る。体部外面の上位から中位は横位の粗い磨き。体部外面下位は縦位の磨き。底部外面は砂状痕。	

石製品

挿図番号 図版番号	NO.	器種 形態・素材	出土位置	長 (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	重 (g)	製作・使用状況	石材
第152図 PL.47	69	砥石 切り砥石	埋土中	5.7	4.9	3.0	132.2	四面使用?裏面・左側面は光沢がなく、粗い斜位線条痕が残り、使用されていない可能性が高い。	砥沢石
第152図 PL.47	70	石製品 不明	埋土中	4.1	7.6	1.7	24.2	製作意図不明。各面とも研磨整形されている。小口部は研磨に伴う稜が生じている。略蒲鉾状を呈する。	二ツ岳軽石
第153図 PL.47	71	石臼 下臼	埋土中	径3.06	—	7.8	3254.4	石臼の管理が不十分で、すり合せ面の副溝は完全に消滅している。軸穴は推定径1.1cm。	粗粒輝石安山岩
第153図 PL.47	72	石製品 水輪	埋土中	23.1	24.9	15.3	11300.0	上面側中央に浅い円孔(長径10.2cm・短径9.0cm・深さ2.7cm)を穿ち、周囲に小円孔5を配す。水輪を再利用したものだ。製作意図については判断する根拠がない。	粗粒輝石安山岩

金属製品

挿図番号 図版番号	NO.	種類 器種	出土位置 残存率	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	特徴・状態	備考
第153図 PL.49	73	鉄铸件 製品 鍋	埋土中 口縁部片	—	—	0.2	—	口縁端部付近肥厚し、端部は内傾。	

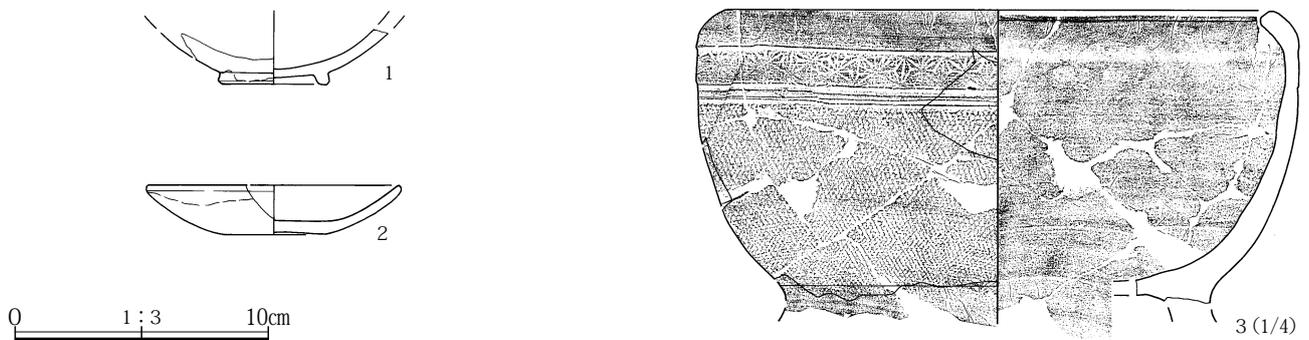


第154図 2号溝出土遺物

第40表 2号溝出土遺物観察表

陶磁器類

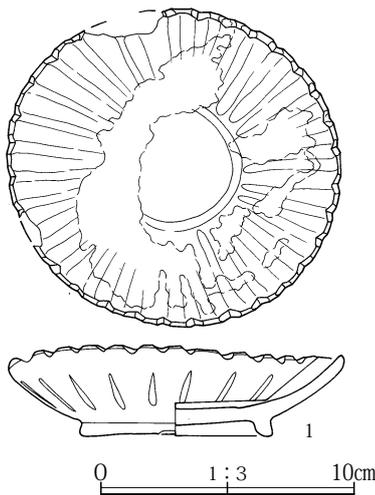
挿図番号 図版番号	NO.	種類 器種	出土位置 残存率	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	色調	成形・整形の特徴	備考
第154図 PL.44	1	在地系土器 片口鉢	埋土中 底部2/3欠	30.0	(12.5)	10.8	灰黄	器表のみ灰色から暗灰色。最終段階で燻し焼成。口縁部は玉縁状。外面と口縁部から体部内面の器表は凍て状の剥離多い。口縁部内面と体部外面中位の剥離は特に著しい。体部内面中位と底部内面中央付近は使用により平滑。体部内面下位と底部内面周縁は使用により器表が磨滅。すり鉢として使用。底部外面回転糸切り無調整。	14世紀中頃



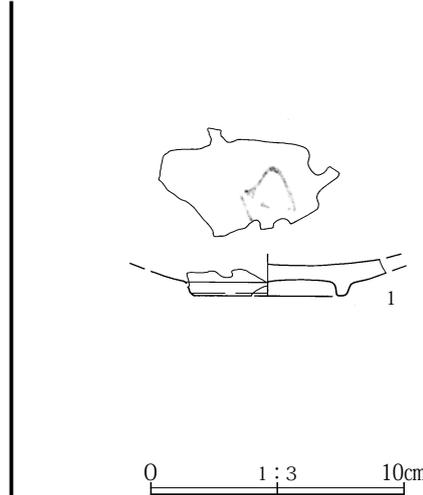
第155図 3号溝出土遺物

第41表 3号溝出土遺物観察表

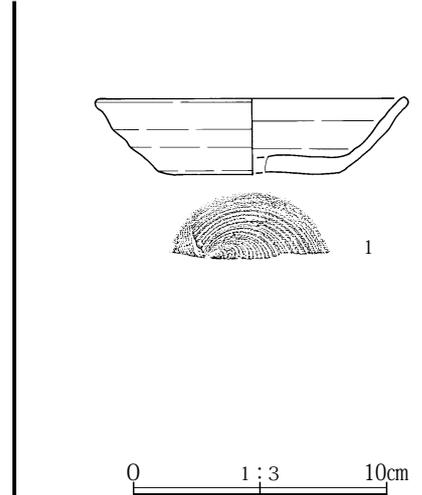
陶磁器類									
挿図番号 図版番号	NO.	種類 器種	出土位置 残存率	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	色調	成形・整形の特徴	備考
第155図	1	瀬戸・美濃陶器 柳茶碗	埋土中 底部	-	4.2	-	灰黄	削り出し高台。内面から高台脇に灰釉。粗い貫入がはいる。残存部外面に鉄絵具による柳文の1部が残る。	
第155図	2	瀬戸・美濃陶器 灯火皿	埋土中 口縁部1部 底部3/4	(9.8)	4.1	1.9	灰白	外面の口縁部以下は回転鑿削り。前面に錆釉を施釉後、外面の口縁部以下を拭う。	
第155図 PL.44	3	在地系土器 火鉢	埋土中 1/3	(28.7)	-	-	黄灰	断面は黄灰色、器表付近は灰白色、器表は黒色。仕上げ段階は燻し焼成。口縁端部から外面の器表は磨き調整により光沢を持つ。外面は回転施文具により施文。脚は貼り付け部から欠損。	近現代



第156図 4号溝出土遺物



第157図 11号溝出土遺物



第158図 14号溝出土遺物

第42表 4号溝出土遺物観察表

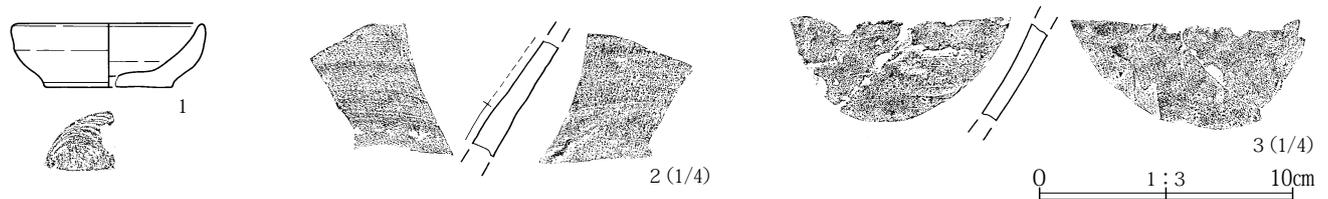
陶磁器類									
挿図番号 図版番号	NO.	種類 器種	出土位置 残存率	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	色調	成形・整形の特徴	備考
第156図 PL.44	1	瀬戸・美濃陶器 菊皿	埋土中 ほぼ完形	12.5～ 13.2	7.4～ 7.6	3.0～ 3.6	灰白	全体に歪む。内面は型により菊花状に成形し、体部外面は鑿状工具により施文。製作時に高台端部の1部が欠損するが、そのまま黄瀬戸釉を前面施釉。内面に青釉(銅か)を流す。	

第43表 11号溝出土遺物観察表

陶磁器類									
挿図番号 図版番号	NO.	種類 器種	出土位置 残存率	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	色調	成形・整形の特徴	備考
第157図 PL.44	1	肥前磁器 皿	埋土中 1/4	-	(6.0)	-	灰白	前面施釉。底部内面に「日」の字染付。やや焼成不良で胎土も十分磁化していない。	

第44表 14号溝出土遺物観察表

土器類								
挿図番号 図版番号	NO.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値(cm)		胎土／焼成／ 色調	成形・整形の特徴	摘要
第158図 PL.44	1	須恵器 杯	埋土中 1/3	口 11.8 底 6.0	高 3.0	細砂粒/還元焰/灰	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転糸切り無調整。	



第159図 20号溝出土遺物

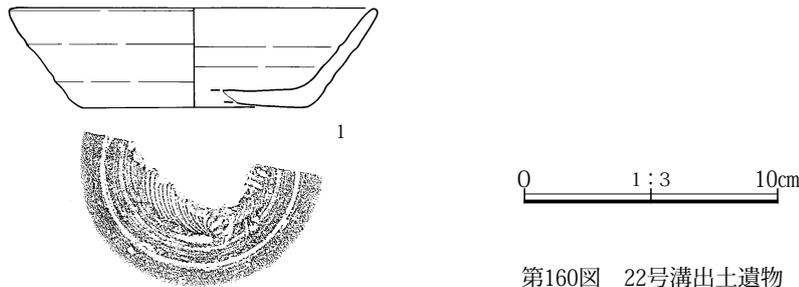
第3章 検出された遺構と遺物

第45表 20号溝出土遺物観察表

挿図番号 図版番号		種 類	出土位置 残存率	計 測 値(cm)	胎土 / 焼成 / 色調	成形・整形の特徴	摘 要
第159図	1	須恵器 杯	埋土中 1/5	口 7.4 高 2.5 底 5.0	細砂粒 / 酸化焰 / 橙	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転糸切り無調整。	

陶磁器類

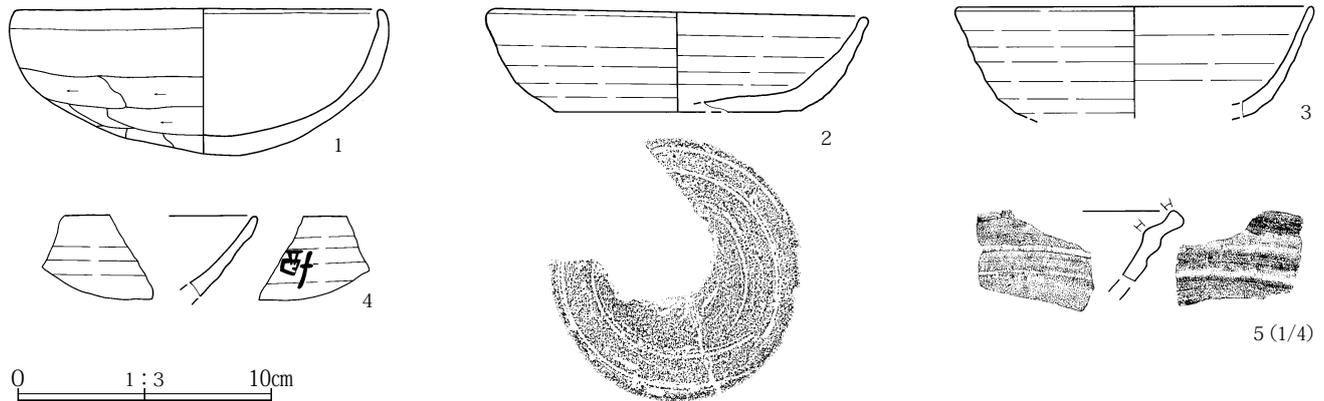
挿図番号 図版番号	NO.	種 類 器種	出土位置 残存率	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	色調	成形・整形の特徴	備考
第159図	2	尾張陶器 片口鉢	埋土中 体部片	-	-	-	灰白	体部内面下位は使用により平滑に摩滅。常滑窯片口鉢のI類にあたる。	中世
第159図	3	常滑陶器 費	埋土中 体部片	-	-	-	灰・灰 黄	外面の器表は暗赤褐色。外面は刷毛状工具による撫で。	中世



第160図 22号溝出土遺物

第46表 22号溝出土遺物観察表

挿図番号 図版番号		種 類	出土位置 残存率	計 測 値(cm)	胎土 / 焼成 / 色調	成形・整形の特徴	摘 要
第160図 PL.44	1	須恵器 杯	埋土中 1/4	口 14.1 高 3.9 底 9.0	細砂粒 / 還元焰 / 灰 白	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転糸切り後周囲を回転ヘラ削り。	



第161図 25号溝出土遺物

第47表 25号溝出土遺物観察表

挿図番号 図版番号		種 類	出土位置 残存率	計 測 値(cm)	胎土 / 焼成 / 色調	成形・整形の特徴	摘 要
第161図 PL.44	1	土師器 杯	埋土中 口唇部の大部分 欠損	口 14.2 高 5.7	細砂粒・粗砂粒 / 良好 / 橙	口縁部は上半が横ナデ、下半がナデ、体部から底部は手持ちヘラ削り。	
第161図 PL.44	2	須恵器 杯	埋土中 3/4	口 14.5 高 4.1 底 9.7	細砂粒・粗砂粒 / 還元焰 / 灰黄	ロクロ整形、回転右回り。底部回転ヘラ削り。	
第161図	3	須恵器 杯	埋土中 口縁部～体部片	口 13.8	細砂粒 / 還元焰 / 灰	ロクロ整形、回転右回りか。高台が貼付される形態か。	
第161図 PL.44	4	須恵器 杯	埋土中 口縁部片		細砂粒 / 還元焰 / 灰 黄褐	ロクロ整形、回転右回りか。内面は酸化焰焼成のためにぶい橙。	外面口縁部に墨書、「耐?」か。

陶磁器類

挿図番号 図版番号	NO.	種 類 器種	出土位置 残存率	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	色調	成形・整形の特徴	備考
第161図	5	瀬戸陶器 揺り鉢	埋土中 口縁部片	-	-	-	淡黄	内外面に錆釉。外面の轆轤目は顕著。口縁端部と屈曲部内面の突出部器表は削れる。削れ面自体は平滑であるが、小さい単位があり、単位境は低い稜をなす。同様な削れは連房初期のすり鉢に多く認められる。	

20号溝 (第138・145・146・159図、第45・54表、PL.29)

位置(座標)：X軸=36,439～36,441

Y軸=-39,395～39,453

本溝は2区の南側にあり、東西方向へ直線的に走向する大溝である。溝の東端は、12号溝にT字状に取り付き先端となる。24号溝が本溝の北縁を併走し、東側で19・23号溝が交差し、西側で14・22号溝が交差する。また、中央付近では8号住居と僅かに、10号住居とは大きく重複する。西端は調査区外へと延びるが、2区の西側となる1区では溝は検出されていない。確認できた溝の規模は、延長58.5m、上幅2.7m、底面幅0.8m、深さ1.1mを測る。両端の比高差は40cmと東端が低く、その勾配は0.7%である。重複する8・10号住居より本溝が新しく、東端がT字状に取り付く12号溝とは同一時期と考えられ、併走する24号溝より旧く、それ以外の交差する溝との新旧は不明。埋土は、褐色土、黒褐色土、暗褐色土が堆積する。12号溝に接続する溝であることから、流水を伴う水路と考えられる。

出土した遺物には、図示した1の須恵器杯、2の片口鉢(尾張陶器)、3の甕(常滑陶器)があり、2・3の時期は共に中世。他に、未掲載遺物として多量の土師・須恵器片、近世の国産磁器1片、国産施釉陶器1片、近現代の陶磁器2片、土器類3片、瓦1片、十能瓦2片が出土している。

本溝の時期は、12号溝と同時期であることおよび遺構の重複等から近世以降と考えられる。

21号溝 (第138・145・146図、第54表)

位置(座標)：X軸=36,417～36,420

Y軸=-39,437～39,442

本溝は2区の南西隅に僅かに検出され、北西から南東に走向する大溝である。土層断面の確認から、2条の大溝が重複していることが明らかとなり、北側の溝を21-A号溝、南側の溝を21-B号溝とし、その新旧は北側の21-A号溝が新しい。溝の両端は共に調査区外へと延びるが、2区の西側となる1区では溝は検出されておらず、北西方向へ延びる延長は1・2区間の用水路部分に想定される。確認できた溝の規模は、21-A・B共に長さ7.0m、上幅は21-Aが1.6m、21-Bは2.0m以上、底面幅は21-Aが0.6m、21-Bが1.0m、深さは21-Aが70cm、21-Bが80cmを測る。両端の比高差はない。埋土は、21-A

では上位に暗褐色土を主に黒褐色土、下位に黄褐色土を堆積する。21-Bでは上位に暗褐色土を、下位に黄褐色土、底面上に黄褐色砂質土が堆積する。溝の規模等から計画的な区画溝であり、21-B底面での暗灰色砂と小砂利の存在から流水を伴う水路と考えられる。

出土した遺物には、未掲載遺物に土師・須恵器片が多いものの、時期を特定する遺物はない。

本溝の時期は、埋土から近世以降と考えられるが不明。

22号溝 (第138・145・146・160図、第46・54表、PL.29・44)

位置(座標)：X軸=36,421～36,469

Y軸=-39,431～39,461

本溝は2区の西側にあり、1・2区境の現在の用水路とほぼ併走するように、北西から南東に走向する大溝である。溝の両端は調査区外へと延び、途中で19・21号住居と重複し、14号溝および20・24号溝と交差する。確認できた溝の規模は、延長57.5m、上幅3.2m、底面幅0.9m、深さ0.95mを測る。両溝の両端の比高差はない。重複する19・21号住居より本溝が新しく、交差する14・20・24号溝との新旧は不明。埋土は、黒褐色土、暗褐色土、黄褐色土を主とし、底面上には砂を主とした砂礫層が薄く堆積する。溝の規模等から計画的な区画溝であり、底面での砂礫層の存在から流水を伴う水路と考えられる。

出土した遺物には、図示した1の須恵器杯があり、未掲載遺物に土師・須恵器片、灰釉陶器片が出土しているものの、時期を特定する遺物はない。

本溝の時期は、埋土から近世以降と考えられるが不明。

23号溝 (第138図、第54表、PL.29)

位置(座標)：X軸=36,438～36,464

Y軸=-39,399～39,391

本溝は2区の東側にあり、3区から延びる12号溝の西側に併走し、南北方向に直線的に走向する溝である。溝の両端は調査区外へと延びるが、北側となる3区では本溝の延長は検出されていない。また、19・20・24号溝と途中で交差するが、その新旧は不明。確認できた溝の規模は、延長27.7m、上幅1.5m、底面幅0.5m、深さ58cmを測る。両端の比高差はなく、溝の性格および流水の可能性も不明。

出土した遺物は極めて少なく、未掲載遺物に近世の在地系焙烙・鍋1片のみである。

本溝の時期は、埋土および出土遺物から近世以降と考えられる。

24号溝 (第138・145・146図、第54表、PL.29)

位置(座標)：X軸=36,443～36,456

Y軸=-39,453～39,378

本溝は2区の東側から中央南寄りにあり、北東から南西へ延び、さらに20号溝の北縁を併走して西へ直線的に延びる溝である。溝の両端は調査区外へと延び、途中で10号住居と重複し、東側で12・19・23号溝と、西側で14・22号溝と交差する。確認できた溝の規模は、延長78.3m、上幅0.4～0.7m、底面幅0.3～0.5m、深さ30cmを測る。両端の比高差は60cmと西端が低く、その勾配は1.0%である。重複する10号住居および併走する20号溝より新しく、他の交差する溝との新旧は不明。溝の性格および流水の可能性は不明。

出土遺物は少なく、未掲載遺物に土師・須恵器片、灰釉陶器片があるものの、時期は不明。

25号溝 (第138・147・161図、第47・54表、PL.29・44)

位置(座標)：X軸=36,475～36,474

Y軸=-39,450～39,410

本溝は2区の北側にあり、ほぼ東西方向に走向する溝で、すぐ南側には26号溝が併走する。溝の両端は調査区外へと延び、途中で25・28・29号住居および183号土坑と重複するが、いずれの遺構よりも本溝が新しい。また、14号溝と交差するが、新旧は不明。確認できた溝の規模は、延長39.8m、上幅0.7～0.9m、底面幅0.3m、深さ46cmを測る。両端の比高差は10cmと西端が低く、その勾配は0.2%である。埋土は、暗褐色土と黄褐色土を主とする。溝の性格および流水の可能性は不明。

出土した遺物には、図示した1の土師器杯、2～3の須恵器杯があり、4の外開口縁部には墨書「耐？」がある。5は播り鉢(瀬戸陶器)。他に、未掲載遺物として土師・須恵器片、羽釜片が多量に出土している。

本溝の時期は、5の播り鉢を出土していることから近世以降と考えられるが不明。

26号溝 (第138・147図、第54表、PL.29)

位置(座標)：X軸=36,474～36,472

Y軸=-39,453～39,406

本溝は2区の北側にあり、ほぼ東西方向に走向する溝で、すぐ北側には25号溝が併走する。溝の両端は調査区

外へと延び、途中で29号住居と重複するが、住居よりも本溝が新しい。また、14号溝と交差するが、新旧は不明。確認できた溝の規模は、延長46.7m、上幅0.7～1.5m、底面幅0.45～1.0m、深さ25cmを測る。両端の比高差は20cmと西端が低く、その勾配は0.4%である。埋土は、暗褐色土を主とする。溝の性格および流水の可能性は不明。

遺物の出土はなく、時期は不明。

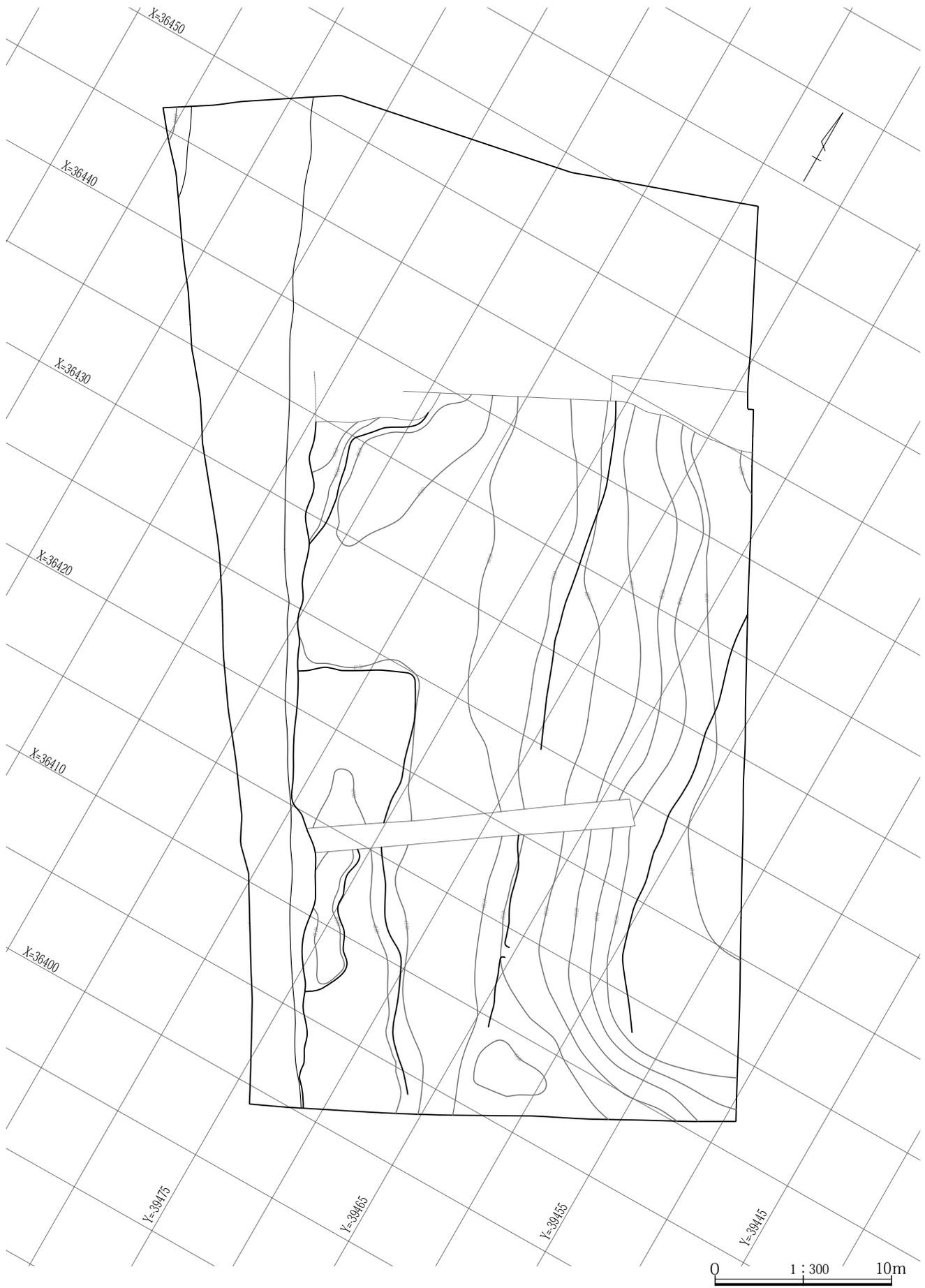
7 水田

調査範囲の南西端に位置し、一段低い低地部となる1区において、試掘調査の結果、浅間山を給源とするAs-B軽石が薄く堆積していると共に、その直下に水田耕土が存在することが明らかとなったため、この1区を対象に水田遺構の調査を行った。1区の調査時の現状は水田耕作地であり、南西に隣接する鹿島浦遺跡2・3区との遺跡境には休泊堀用水路が流れている。なお、鹿島浦遺跡では、古代水田遺構は検出されていない。

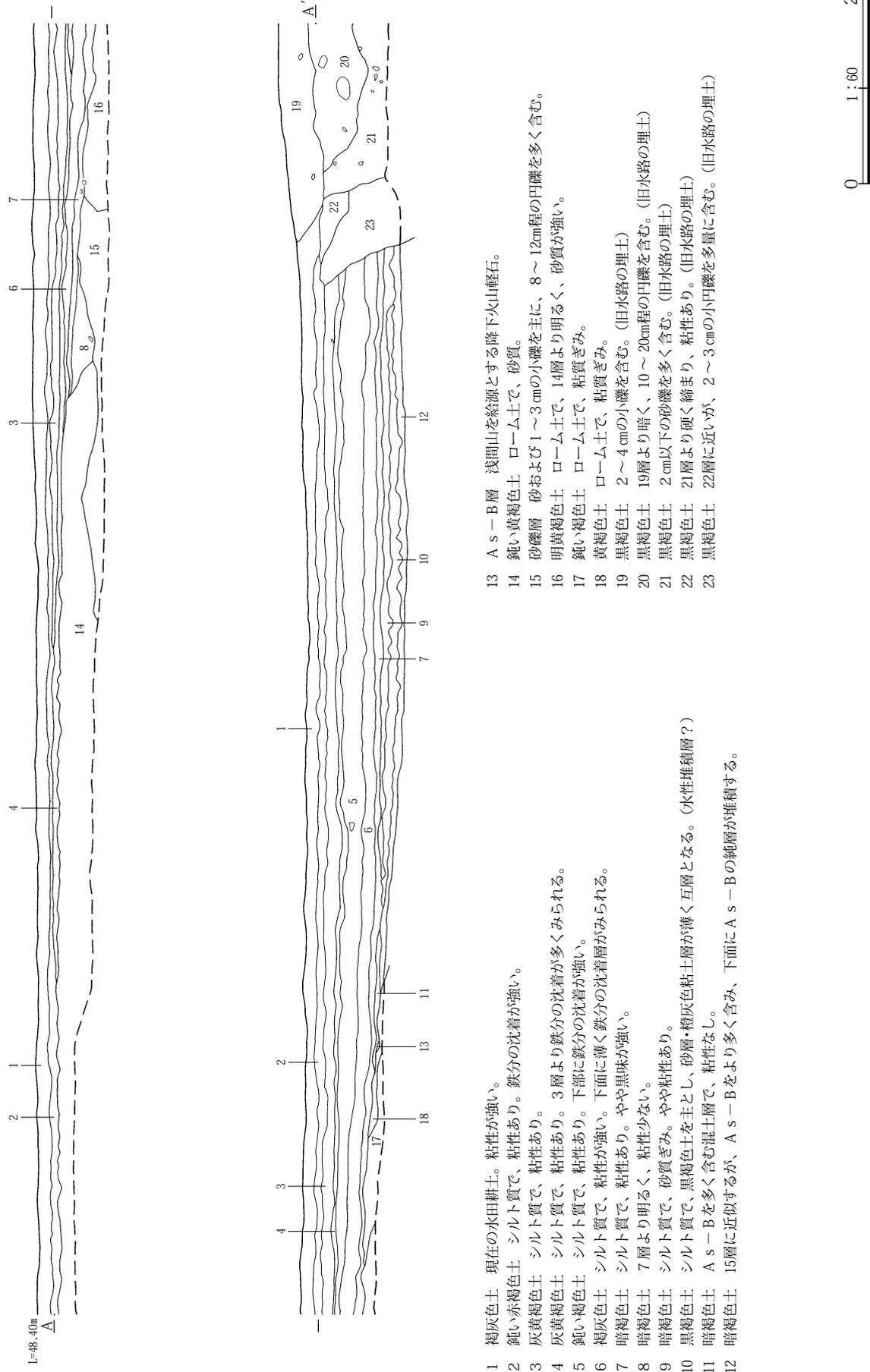
検出された古代水田遺構は、以下の通りである。

As-B下水田 (第162・163図、PL.30・31)

本調査区で検出された古代水田は、As-B下の水田遺構であり、その検出面積は540.13㎡に及ぶ。調査区は、北東側が2区からの台地が続く(2区南西端の遺構確認面の標高値は49.10m、1区北東端での遺構確認面の標高値48.40m)、中央付近で変換部となり西側への斜面地となる。さらに、その斜面地の南西は平坦な低地部となる。調査区の東壁での土層断面(第163図)では、区全体に広がる現在の水田耕作土および鉄分沈着層となる1・2層が覆い、北側ではローム上面まで切り土して耕地改良されている状況が解る。斜面部から南側では、灰黄褐色土の3・4層や鈍い褐色土の5層、褐灰色土の6層、暗褐色土の7層が堆積し、共にシルト質で、4～6層の下部には鉄分の沈着および沈着層が見られ、水田の耕地であったことが窺える。南側の低地となる平坦部においては、9層としたシルト質な暗褐色土、10層ではシルト質な黒褐色土と砂層・橙灰色粘土層が薄く互層となって堆積している。この10層の堆積のあり方は、洪水等に起因した水性堆積の状況が想定される。そして7・10層下には、As-B混土層となる暗褐色土の11・12層が堆積し、13層および12層下面にはAs-B軽石層(純層)が0.5～1cm



第 162 図 1 区 As-B 下水田平面図



- 1 褐灰色土 現在の水田耕土。粘性が強い。
- 2 鈍い赤褐色土 シルト質で、粘性あり。鉄分の沈着が強い。
- 3 灰黄褐色土 シルト質で、粘性あり。
- 4 灰黄褐色土 シルト質で、粘性あり。3層より鉄分の沈着が多くみられる。
- 5 鈍い褐色土 シルト質で、粘性あり。下部に鉄分の沈着が強い。
- 6 褐灰色土 シルト質で、粘性が強い。下面に薄く鉄分の沈着層がみられる。
- 7 暗褐色土 シルト質で、粘性あり。やや黒味が強い。
- 8 暗褐色土 7層より明るく、粘性少ない。
- 9 暗褐色土 シルト質で、砂質。やや粘性あり。
- 10 黒褐色土 シルト質で、黒褐色土を主とし、砂層・橙灰色粘土層が薄く互層となる。(水性堆積層?)
- 11 暗褐色土 As-Bを多く含む混土層で、粘性なし。
- 12 暗褐色土 15層に近似するが、As-Bをより多く含む、下面にAs-Bの純層が堆積する。
- 13 As-B層 浅間山を給源とする降下火山軽石。
- 14 鈍い黄褐色土 ローム土で、砂質。
- 15 砂礫層 砂および1~3cmの小礫を主に、8~12cm程の円礫を多く含む。
- 16 明黄褐色土 ローム土で、14層より明るく、砂質が強い。
- 17 鈍い褐色土 ローム土で、粘質。粘質が強い。
- 18 黄褐色土 ローム土で、粘質。粘質が強い。
- 19 黒褐色土 2~4cmの小礫を含む。(旧水路の埋土)
- 20 黒褐色土 19層より暗く、10~20cm程の円礫を含む。(旧水路の埋土)
- 21 黒褐色土 2cm以下の砂礫を多く含む。(旧水路の埋土)
- 22 黒褐色土 21層より硬く締まり、粘性あり。(旧水路の埋土)
- 23 黒褐色土 22層に近いが、2~3cmの小円礫を多量に含む。(旧水路の埋土)

第163図 1区東壁土層断面図

前後と薄く堆積しており、その下面はシルト質の粘性の強い黒色土で凹凸面となっている。なお、南端には現在の休泊堀用水路の前進となる2時期の旧用水路跡が、19～21層および22・23層として確認されている。

この土層断面からも解るように、As-B下の水田は低地部の平坦面に検出することができ、1区の南西側となる部分に確認された。ただし、南西端においては、旧用水路跡によって壊されている。

As-B下の水田面は、シルト質の粘性の強い黒色土で凹凸が一面に広がり、部分的には凹凸の強弱も見られる。明確な畦状の高まりは検出されていないものの、等高線に沿った状態で、斜面下端付近に北北西から南南東へと向かうライン状に僅かな段差が、また東側ではそのラインから北東(斜面側)への僅かな高まりが短く確認できた。この僅かな段差が、水田の境になると考えられる。また、南西側へ6m前後離れた箇所にも同様な段差がみられ、並行するように同方向へ延びるが、途中で南西へと直角に曲がる。やはり、標高値47.70m付近と、等高線に沿っている。この段差も、水田の区画を示した状況と考えられる。

こうした点から、区画の単位や面積は不明瞭ながらも、区画された水田が営まれていたことが窺える。

水田に伴う遺物の出土はない。1区の遺構外遺物としては、土師・須恵器片や陶磁器類がある。また、旧用水路からは、陶磁器類が出土している。

8 遺構外出遺物

古代の土器類 (第164図、表48、PL.45)

遺構外での古代の土器類の出土状況をみると、住居跡が多く検出された2区が最も多く、次いで3区に多い。また、住居跡の希薄な4～6区では、遺構外の土器類も少ない。

図示した遺物には、土師器杯に1・8があり、1は2区から、8は4区からの出土している。2・4・6は須恵器杯蓋で、2・4が2区から、6が3区から出土している。3・9・11は須恵器杯で、3が2区、9が4区、11が6区から出土している。10は灰釉陶器の瓶の胴部で、長頸壺の可能性をもち、5区から出土。7は台付き甕で、3区から出土。5は土錘で、2区から出土している。なお、2の須恵器杯蓋の外面摘みには、墨書がみられるも

の判読不能。

陶磁器類 (第164～166図、表48、PL.45)

遺構外での中世以降の陶磁器類の出土状況は、中世遺物は極めて希薄であり、近世以降の遺物が調査区全体に散漫に出土している。

図示した遺物としては、出土した調査区別に12～15が1区からで、12は片口鉢(瀬戸・美濃陶器)、13は播り鉢(堺・明石陶器)、14は片口鉢(在地系土器)で中世、15は甕(渥美陶器?)である。なお、12・15は旧用水路からの出土である。

2区からは、16の器壁が厚く、火鉢などの体部片の周囲を細かく敲打して円盤状に整形した、在地系土器の二次加工品が出土している。

3区からは、17～26が出土している。17～19は碗(肥前磁器)、20は広東形碗(肥前磁器)で、これらは波佐見系。21は猪口(肥前磁器)。22は皿(肥前陶器)で京焼風陶器。24は灯火受皿(京・信楽系陶器)。25・26は片口鉢(在地系土器)で共に中世。

4区からは、27の灯火受皿(瀬戸・美濃陶器)、28の播り鉢(丹波陶器)が出土している。

5区からは、29～35が出土している。29は香炉(肥前磁器)。30は碗体部片の周囲を細かく敲打し、小型円盤状に整形した円盤状製品(肥前磁器)で、波佐見系の二次加工品。31は小片であるが、龍泉窯系青磁の碗。32は灯火受皿(瀬戸・美濃陶器)。33は片口鉢(瀬戸・美濃陶器)と思われ、底部高台内に不明の墨書がある。34は甕(渥美陶器)で、中世。35は焙烙(在地系土器)。

6区からは、36～54が出土している。36～40は碗類で、36～38は碗(肥前磁器)、39は丸碗(肥前磁器)、40は製作地不詳磁器の碗。41・42は円盤状製品で、41(肥前磁器)は碗底部の周囲を細かく打ち欠いて円盤状に加工した波佐見系の二次加工品。42(瀬戸・美濃磁器)は碗の破片の周囲を細かく打ち欠き、円盤状に仕上げた近現代の二次加工品。43は水滴(肥前磁器か)。44は鉢(肥前磁器)で、高台内無釉部に朱色で文字が記されており、焼継に伴う文字の可能性もある。45は皿(肥前磁器)。46は御神酒徳利(肥前磁器)。47は小碗(瀬戸・美濃陶器)で、48は呉器手碗(肥前陶器)。49は皿(美濃陶器)。50は徳利(製作地不詳陶器)。51は播り鉢(瀬戸陶器)。52は片口鉢(在地系土器)で、中世。53・54はガラスビンで、54の底部外面

には山マークの下に「文」の浮き文字がある。

石製品 (第166図、表48、PL.48)

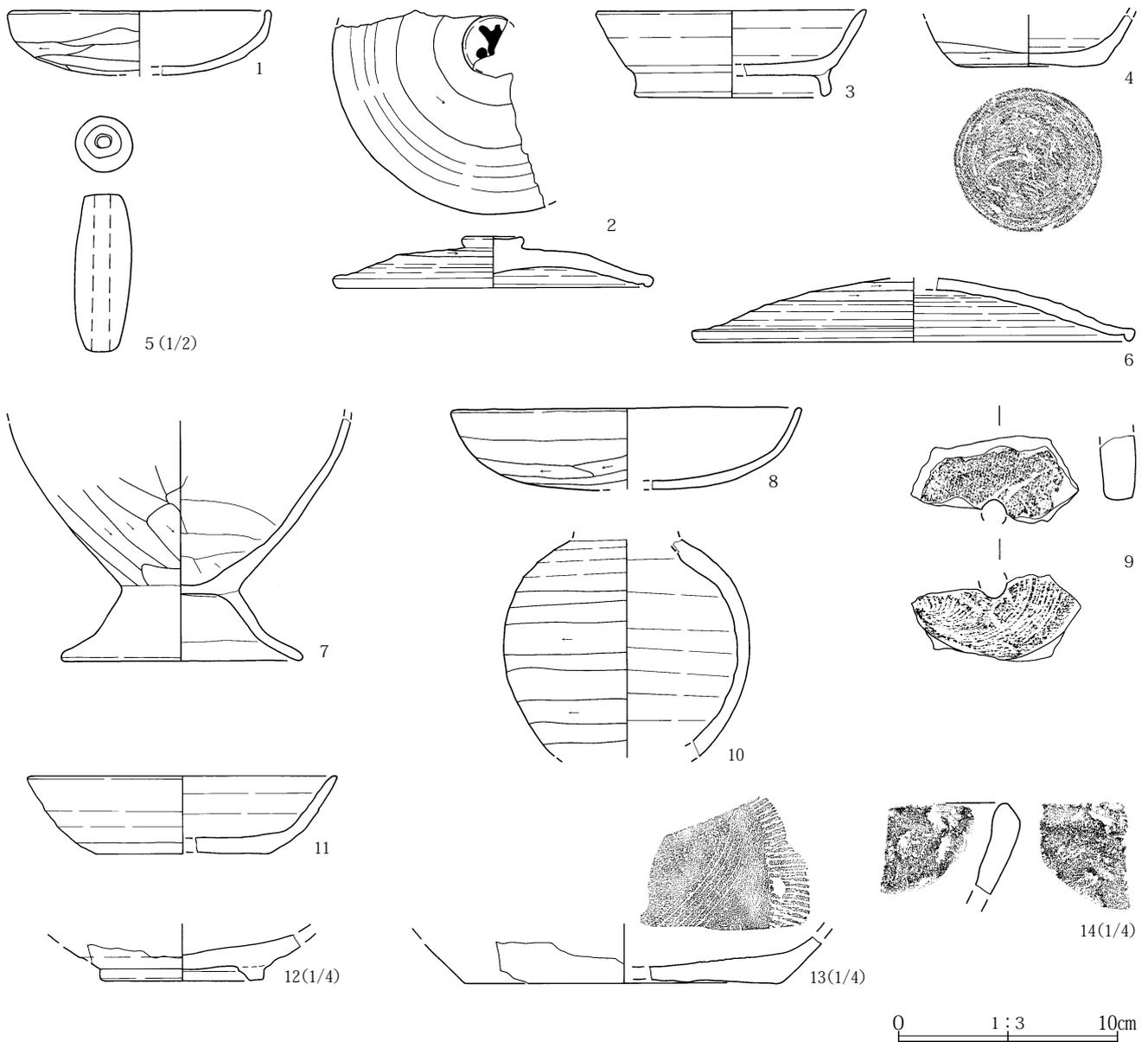
遺構外での石製品の出土は、台地の北斜面側に多く、6区からの遺物が最も多い。

55は3区出土の切り砥石、56・57は5区出土の切り砥石、58～62は6区出土の切り砥石で、これらの石材には粗粒輝石安山岩・ホルンフェルス・珪質粘板岩が用いられている。63は6区から出土した粗粒輝石安山岩製の石鉢で、体部外面は敲打整形により、内面は磨き整形され、底部中央が浅く窪む。64は6区から出土した粗粒輝石安山岩製の楕円礫の石製品で、背面側に径3.6cmの浅

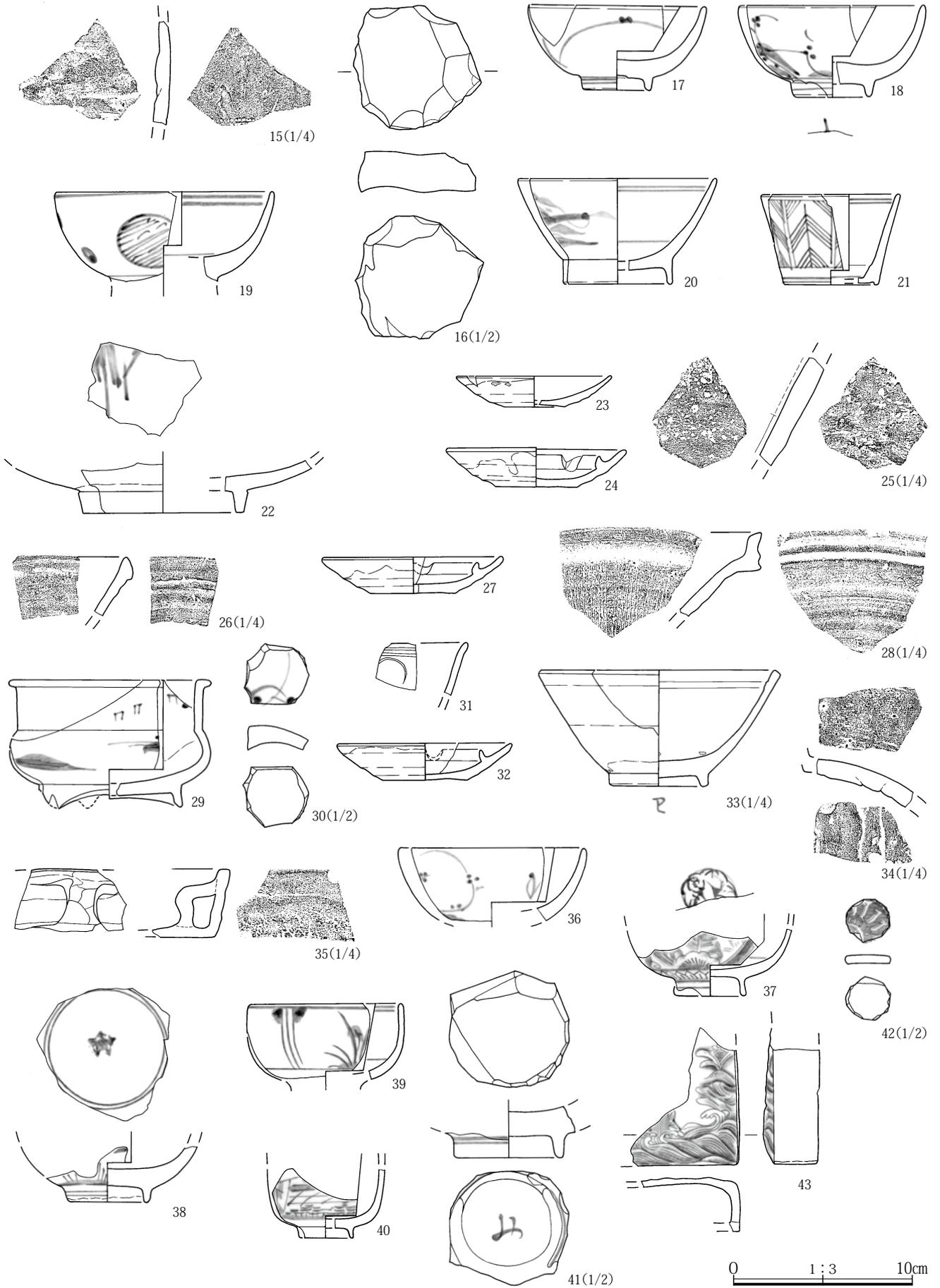
い孔(内面平滑化)を穿ち、裏面側・側縁には敲打痕があり、側縁の打痕は短軸方向に直線的に並ぶ。

金属製品 (第167図、表48、PL.49)

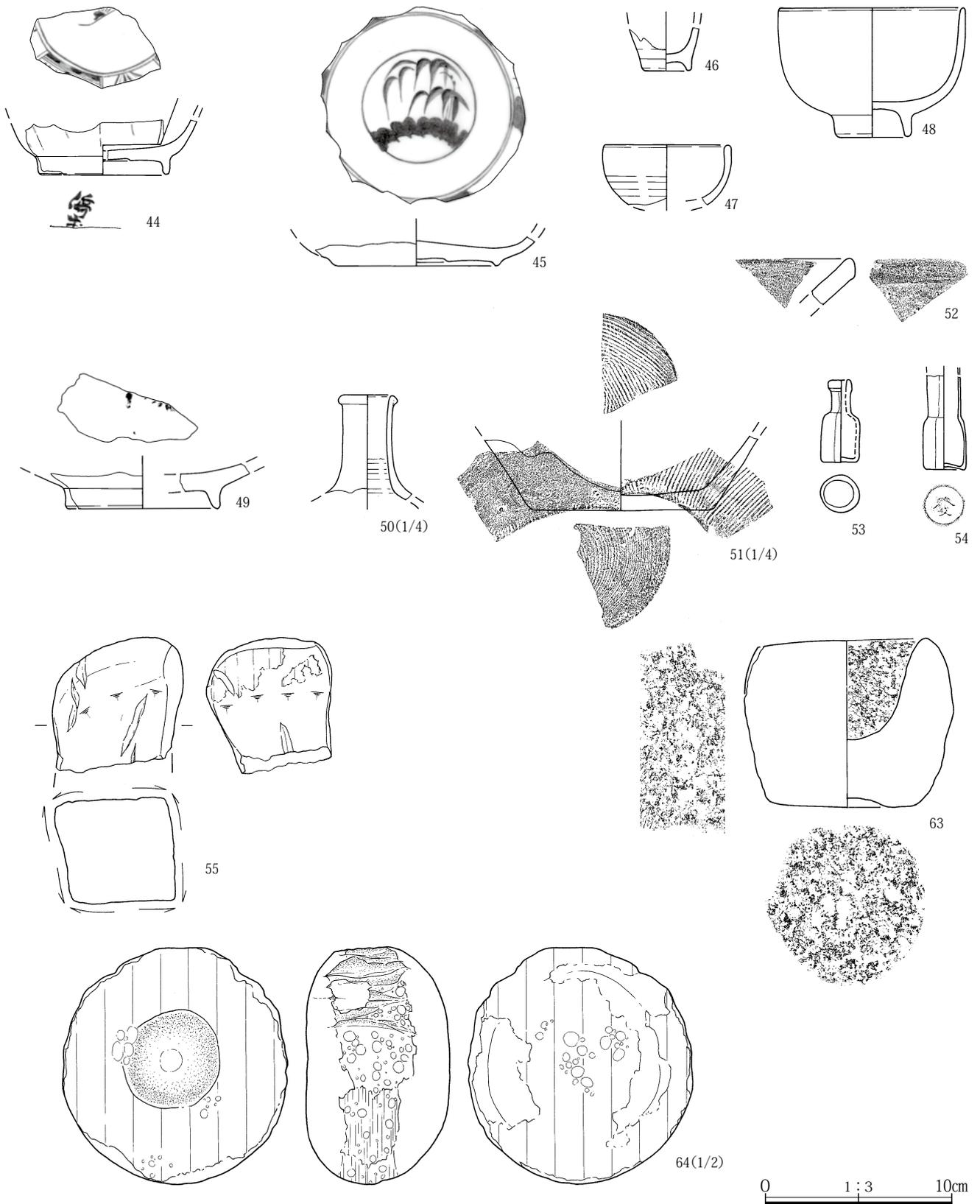
65は2区の表土からで、銅製の煙管吸口である。66～70は寛永通寶で、68は6区の表土から、それ以外は3区に所在する6号住居の埋土上層からである。この6号住居の埋土上層からは、先述した1号土坑出土遺物10(第125図)の半胴甕と接合した破片が、古銭と共に出土している。68は新寛永で、背に「元」か。66・67・69・70は錆が著しいものの、その錆の状態および僅かに判読できる銭名から、1文の寛永鉄銭と考えられる。



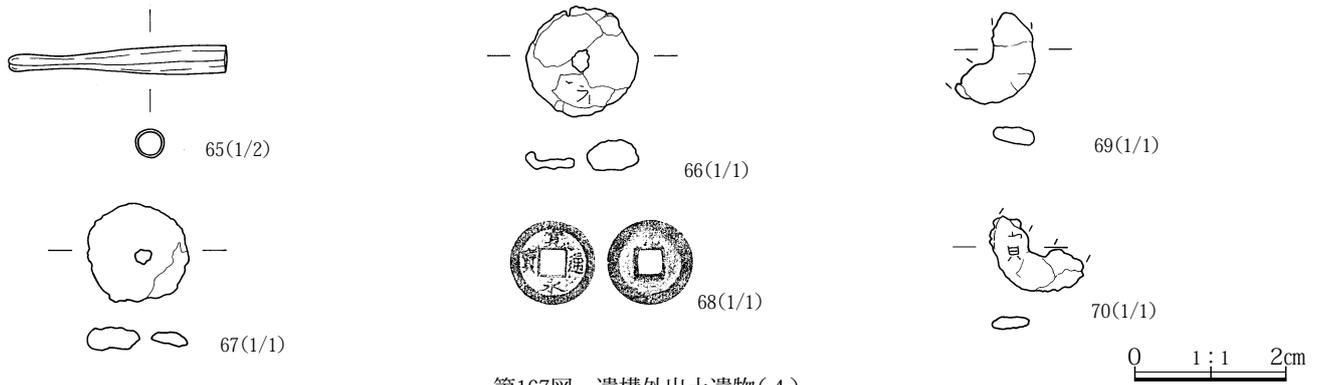
第164図 遺構外出土遺物(1)



第165図 遺構外出土遺物(2)



第166図 遺構外出土遺物(3)



第167図 遺構外出土遺物(4)

第48表 遺構外出土遺物観察表

土器類		種 類	出土位置 残存率	計 測 値(cm)	胎土 / 焼成 / 色 調	成形・整形の特徴	摘 要
第164図 PL.45	1	土師器 杯	2区 1/5	口 11.6	細砂粒 / 良好 / 鈍 い赤褐	口縁部は横ナデ、体部から底部は手持ちヘラ削り。	
第164図 PL.45	2	須恵器 杯蓋	2区 1/3	口 14.0 高 2.3 摘 2.6	細砂粒 / 還元焰 / 鈍い黄	ロクロ整形、回転右回り。摘みは貼付、天井部は中ほどまで回転ヘラ削り。	外面摘みに墨書、欠損部のため判読不能。
第164図 PL.45	3	須恵器 杯	2区 1/5	口 12.0 高 3.9 底 8.8 台 8.2	細砂粒 / 還元焰 / 灰白	ロクロ整形、回転右回り。高台は貼付、底部は回転ヘラナデ。	
第164図	4	須恵器 杯蓋	2区 底部～体部下位	底 6.5	細砂粒 / 還元焰 / 灰白	ロクロ整形、回転左回り。底部回転糸切り後周囲を回転ヘラ削り。	
第164図 PL.45	5	土製品 土錘	2区 完形	長 4.8 径 1.7 孔 0.5 重 13.0	微砂粒 / 良好 / 鈍 い黄褐	上端は径1.0cmの平坦面をつくる。側面はナデ。	
第164図	6	須恵器 杯蓋	3区 口縁部～天井部 片	口 20.0	細砂粒 / 還元焰 / 灰	ロクロ整形、回転右回り。天井部は中ほどまで回転ヘラ削り。	
第164図 PL.45	7	土師器 台付甕	3区 脚部～胴部下半	脚 10.6	細砂粒 / 良好 / 鈍 い黄橙	脚部は貼付、胴部はヘラ削り、脚部は横ナデ。内面は胴部がヘラナデ、脚部は横ナデ。	
第164図 PL.45	8	土師器 杯	4区 1/4	口 15.7	細砂粒 / 角閃石 / 良好 / 橙	口縁部横ナデ、体部上半ナデ、下半から底部は手持ちヘラ削り。	
第164図 PL.45	9	須恵器 杯	4区 底部片	孔 0.7	細砂粒 / 酸化焰 / 鈍い橙	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転糸切り無調整。底部中央に穿孔。	
第164図 PL.45	10	灰釉陶器 瓶	5区 胴部	頸 5.0 胴 11.0	細砂粒 / 長石 / 還 元焰 / 灰白	ロクロ整形、回転右回り。頸部から口縁部は貼付、胴部は下位～中位が回転ヘラ削り。	施釉方法不明。長頸壺か。
第164図 PL.45	11	須恵器 杯	6区 1/4	口 13.8 高 3.5 底 8.0	細砂粒 / 還元焰 / 灰白	ロクロ整形、回転右回りか。底部は回転ヘラ削りか。	

陶磁器類

挿図番号 図版番号	NO.	種 類	出土位置 残存率	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	色 調	成形・整形の特徴	備考
第164図	12	瀬戸・美濃陶器 片口鉢	1区 底部	—	7.2	—	淡黄	内面に灰釉。貫入がはいる。内面に目痕3カ所。	
第164図	13	堺・明石陶器 播り鉢	1区 底部片	—	(19.0)	—	赤褐	全体に水摩を受ける。底部のすり目はクロスパターン。	
第164図	14	在地系土器 片口鉢	1区 口縁部片	—	—	—	黄灰	還元炎焼成で、軟質須恵質。器表のほとんど摩滅。ごく1部残存する器表は灰色。口縁部は玉縁状をなし、端部は尖り気味。	中世
第165図	15	瀬美陶器? 甕	1区 体部片	—	—	—	灰	内外面撫で調整で、内面には接合痕が残る。外面に叩き目残る。	
第165図	16	在地系土器 不詳 (二次加工品)	2区 完形	—	—	—	浅黄・ オリ ブ黒	断面中央暗灰色、器表付近から内面器表浅黄色、外面黒色。器壁が厚く、火鉢などの体部片の周囲を細かく敲打して円盤状に整形。	二次加工品
第165図	17	肥前磁器 碗	3区 口縁部1/6 底部1/2	(9.8)	(3.6)	4.7	灰白	外面は雪輪梅樹文か。	波佐見系
第165図	18	肥前磁器 碗	3区 1/4	(10.0)	(4.0)	5.1	灰白	外面は簡略化した雪輪梅樹文。高台内に不明銘。	波佐見系
第165図	19	肥前磁器 碗	3区 1/4	(12.0)	—	—	灰白	外面に大小の丸文。口縁部内面に2重圏線。底部内面周縁に1重圏線。	波佐見系

第3章 検出された遺構と遺物

挿図番号 図版番号	NO.	種類 器種	出土位置 残存率	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	色調	成形・整形の特徴	備考
第165図	20	肥前磁器 広東形碗	3区 1/3	(11.0)	(6.0)	5.9	灰白	器壁やや厚い。外面は簡略化した山水文。口縁部内面は細線による2重圏線。体部内面下位は1重圏線。	波佐見系か
第165図	21	肥前磁器 猪口	3区 1/6	(7.6)	(5.2)	5.1	灰白	小型の猪口。外面に矢羽根状文。口縁部内面に2重圏線。底部内面周縁に1重圏線。	
第165図	22	肥前陶器 皿	3区 1/8	—	(9.0)	—	灰黄	内面は呉須による施文か。若干釉が白濁し、焼成不良気味。高台脇以下は無釉。	京焼風陶器
第165図	23	京・信楽系陶器灯 火皿	3区 1/3	(8.4)	(3.4)	1.7	灰黄	外面口縁部以下は回転篋削り。内面から口縁部外面に透明に近い灰釉。貫入がはいる。口縁部外面の無釉部に油煙付着。	
第165図 PL.45	24	瀬戸・美濃陶器灯 火受皿	3区 口縁部1/3 欠	10.0	4.5	2.2	灰	受け部の1カ所を「コ」の字状に扶る。外面の口縁部以下を回転篋削り。全面に錆釉を施釉後、体部外面中位以下を拭う。	
第165図	25	在地系土器 片口鉢	3区 体部片	—	—	—	鈍い橙・ 灰黄褐	断面中央と器表は灰黄褐色。内面上部の器表は剥離。内面器表中位は使用により平滑となり、下位は器表が摩滅。	中世
第165図	26	在地系土器 片口鉢	3区 口縁部片	—	—	—	灰	還元炎で須恵質に焼きあがる。器壁は薄く、口縁部は玉縁状。口縁部外面は折り返したように小さい段を有する。内面は強い横撫でにより僅かに内湾させ、横撫で部は凹線状に窪む。	中世
第165図	27	瀬戸・美濃陶器灯 火受皿	4区 1/4	(10.0)	(4.7)	2.0	鈍い黄	受け部に「コ」の字状に近い扶り。口縁部外面以下は回転篋削り。前面に錆釉施釉後、口縁部外面以下を拭う。	
第165図	28	丹波陶器 播り鉢	4区 口縁部片	—	—	—	灰黄褐	器表はにぶい褐色。口縁部は上方に立ち上げ、端部は小さく外反。口縁端部外面は2状の凹線廻る。口縁部内面はすり目を撫で消す。体部外面の轆轤目は顕著。	
第165図	29	肥前磁器 香炉	5区 口縁部 1部、 底部1/4	(10.3)	(8.0)	7.2	白	口縁部は長く立ち上がり、端部は水平近く折れる。内外面に海浜風景を描いたと考えられ、内面にも帆掛船状の染付が1部残る。体部内面から高台内まで施釉後、高台内中央から周縁の釉を削る。高台は施釉後、3方をアーチ状に扶る。	
第165図	30	肥前磁器 円盤状製品(碗)	5区 完形	—	—	—	灰白	碗体部片の周囲を細かく敲打し、小型円盤状に整形。	波佐見系 二次加工
第165図	31	龍泉窯系青磁 碗	5区 口縁部小片	—	—	—	浅黄	貫入がはいる。口縁部内面に施文。残存部外面は無文。	
第165図	32	瀬戸・美濃陶器灯 火受皿	5区 1/4	(9.8)	(4.6)	2.0	灰	受け部の扶り部は残存しない。外面口縁部以下は回転篋削り。全面に錆釉を施釉後、口縁部外面以下を拭う。	
第165図	33	瀬戸・美濃陶器片 口鉢か	5区 口縁部1 部、底部完	(18.0)	7.5	8.7	淡黄	口縁部は内面に折り返し、下部に低い段差を有する。口縁部外面以下は回転篋削り。内面から高台脇に灰釉。底部内面に目痕5カ所。高台内に不明墨書。	
第165図	34	渥美陶器 甗	5区 肩部片	—	—	—	浅黄	断面は浅黄色、器表は灰色。外面に叩き目。外面に自然釉かかる。内面の接合痕は明瞭。	中世
第165図	35	在地系土器 焙烙	5区 耳部片	—	—	—	鈍い黄 橙・黒 褐	器表は黒褐色からにぶい黄褐色。底部外面から体部外面下半まで型肌痕。外面口縁部下に明瞭な接合痕。内面に幅広いの耳を貼り付ける。	
第165図	36	肥前磁器 碗	6区 1/4	(10.4)	—	—	灰白	外面は雪輪梅樹文であろう。	波佐見系
第165図	37	肥前磁器? 碗	6区 1/2	—	(4.0)	—	白	外面は細線による染付が主体。高台外面に2重圏線。底部内面周縁に1重圏線。見込みは松竹梅文。文様はやや滲む。	
第165図	38	肥前磁器 碗	6区 底部	—	4.5	—	灰白	外面に植物文。雪輪梅樹文ではない。高台径やや大きい。底部内面周縁に2重圏線。見込みの五弁花はコンニャク印判。	波佐見系 判。
第165図	39	肥前磁器 丸碗	6区 1/3	(8.4)	—	—	白	外面は区画内に花卉文。口縁部内面に2重圏線。底部内面周縁に1重圏線。	
第165図	40	製作地不詳磁器碗	6区 1/3	—	(3.0)	—	白	体部外面に海浜風景の染付。	
第165図 PL.45	41	肥前磁器 円盤状製品(碗)	6区 完形	—	(4.0)	—	灰白	高台外面に2重圏線。高台内に不明銘。碗底部の周囲を細かく打ち欠いて円盤状に加工する。高台欠損部の加工は粗く、この部分は欠損か。	波佐見系 二次加工
第165図 PL.45	42	瀬戸・美濃磁器 円盤状製品(碗)	6区 完形	幅1.6	厚0.35	—	白	外面に緑、青、茶色の3色を使用した銅板転写。破片の周囲を細かく打ち欠き、円盤状に仕上げる。	近現代 二次加工
第165図 PL.45	43	肥前磁器か 水滴	6区 1/4	—	—	3.0	白	角形の水滴。文様の下部にあたる側面は無釉。表面は型により鯉の滝登りを表し、流水部分に呉須を塗る。	
第166図 PL.45	44	肥前磁器 鉢	6区 1/4	—	(7.0)	—	白	平面形は8角形であろう。粗い貫入がはいる。蛇ノ目凹形高台。高台内無釉部に朱色で文字が記される。残存部には認められないが、焼継に伴う文字の可能性はある。	

第4節 奈良時代以降の遺構と遺物

挿図番号 図版番号	NO.	種類 器種	出土位置 残存率	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	色調	成形・整形の特徴	備考
第166図	45	肥前磁器 皿	6区 底部	—	8.7	—	白	蛇ノ目凹形高台。底部内面周縁に2重圈線。見込みは1重 圈線内に笹文。	
第166図	46	肥前磁器 御神酒德利	6区 底部	—	2.6	—	灰白	高台端部を除く外面に透明釉。残存部は無文。	
第166図	47	瀬戸・美濃陶器 小碗	6区 1/2	(6.6)	—	—	灰白	内外面に灰釉。細かい貫入がはいる。体部外面は回転篋削 り。	
第166図 PL.45	48	肥前陶器 呉器手碗	6区 1/2	(9.7)	(2.0)	6.9	灰白	高台はやや高く、高台内の扱りは深い。細かい貫入がはいる。 呉器手碗としては器高低い。	
第166図	49	美濃陶器 皿	6区 1/4	—	(8.0)	—	淡黄	高台端部を除き灰釉。底部内面、鉄釘具による型紙摺り。 いわゆる御深井。粗い貫入がはいる。	
第166図	50	製作地不詳陶器 德利	6区 2/3	4.2	—	—	灰白	口縁端部は折り返して丸みを持つ。頸部内面から外面に黒 釉。釉は鮫肌状。	
第166図	51	瀬戸陶器 播り鉢	6区 1/5	—	(13.0)	—	黄灰・ 浅黄橙	内外面に錆釉。底部外面は回転糸切無調整。	
第166図	52	在地系土器 片口鉢	6区 口縁部片	—	—	—	灰	器表は暗灰色。焼成は陶器質。	中世
第166図	53	ガラス ピン	6区 完形	1.2	2.0	4.4	透明	気泡少量含む。口縁部を除く側面に型痕残る。側面の厚さ にムラが多い。	
第166図	54	ガラス ピン	6区 完形	—	2.2	—	透明	気泡やや含む。底部外面に山マークの下に「文」の浮き文 字。側面に型痕残る。口縁端部は細かいキザギザとなるが、 当初からの状態であろう。	

石製品

挿図番号 図版番号	NO.	器種 形態・素材	出土位置	長 (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	重 (g)	製作・使用状況	石材
第166図 PL.48	55	砥石 切り砥石	3区包含層	(7.3)	7.0	5.8	339.9	四面使用。上端部破片。	粗粒輝石安山 岩
PL.48	56	砥石 切り砥石	5区包含層	(8.3)	(4.1)	4.1	109.4	左右の側面は節理面で破損、表裏面のみ使用面を確認する ことができる。	ホルンフェル ス
PL.48	57	砥石 切り砥石	5区包含層	(4.7)	4.0	3.7	85.9	四面使用。右側面に深く長い片彫り状の条線(幅2mm・深 さ1mm弱)がある。上端部破片。	砂岩
PL.48	58	砥石 切り砥石	6区包含層	6.2	5.4	1.3	77.4	四面使用。上下両端は欠損後、粗く磨き整形。	流紋岩
PL.48	59	砥石 切り砥石	6区包含層	6.3	3.0	2.1	49.3	四面使用。断面糸巻状を呈する砥石破損面を磨き整形する。 上端小口部は割り取り後、平盤状の工具で整形。	流紋岩
PL.48	60	砥石 切り砥石	6区包含層	(6.2)	(4.1)	(1.4)	38.6	背面および下端小口に整形面が残る。砥石特有の光沢面が なく、使用されていない可能性が高い。	頁岩
PL.48	61	砥石 切り砥石	6区包含層	4.2	3.4	(0.6)	7.5	表裏面を砥面として使用。厚さ0.6cmを測る。	珪質粘板岩
PL.48	62	砥石 切り砥石	6区包含層	5.2	(4.0)	0.7	21.1	表裏面とも剥落しており、使用面の状況は不明。	珪質粘板岩
第166図 PL.48	63	石鉢	6区包含層	口径8.4	—	高さ9.0	1068.1	体部外面は敲打整形、内面は磨き整形。底部中央は浅く窪 み、周辺は擦れて摩耗している。	粗粒輝石安山 岩
第166図 PL.48	64	石製品 楕円磔	6区包含層	8.5	8.0	5.2	504.3	背面側に径3.6cmの浅い孔(内面平滑化)を穿ち、裏面側・ 側縁には敲打痕がある。側縁の打痕は短軸方向に直線的に 並ぶ。断面V字状を呈し、対象物が角付いたエッジを有す ることが分かる。表裏面の摩耗面とは風化度が異なるよう にも見える。	粗粒輝石安山 岩

金属製品

挿図番号 図版番号	NO.	種類 器種	出土位置 残存率	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	特徴・状態	備考
第167図 PL.49	65	銅製品 煙管吸口	2区 完形	5.8	0.8	—	5.2	細身で口付部が膨らみをもつ。	
第167図 PL.49	66	寛永通寶	6号住居 完形	—	—	—	—	錆が著しいが、「永」の1部が確認できる。1文の寛永鉄銭。	
第167図 PL.49	67	寛永通寶か	6号住居 完形	—	—	—	—	周囲に鉄分が付着し銭文観察不可能。	
第167図 PL.49	68	寛永通寶	6区 完形	径 2.3	—	0.1	1.4	新寛永。背「元」カ。	
第167図 PL.49	69	寛永通寶か	6号住居 1/2	—	—	—	—	錆が著しく銭文判読不可能。1文の寛永鉄銭か。	
第167図 PL.49	70	寛永通寶	6号住居 1/2	—	—	—	—	錆が著しいが「寛」の1部が判読できる。1文の寛永鉄銭。	

第49表 住居一覧表

住居番号	位置		平面形	主軸方位	規模(m・㎡)				付属施設			カメラ位置	掘り方	重複遺構	時期/備考
	X座標	Y座標			長辺	短辺	壁高	床面積	壁周溝	貯蔵穴	床下土坑				
1 6	X = 36,549 ~ 36,551	Y = 39,268 ~ 39,271	方形	N-83°-E	(1.65)	2.05	0.43	(2.31)	有	—	—	東壁中央南寄	—	—	9世紀後半
2 5	X = 36,530 ~ 36,536	Y = 39,319 ~ 39,325	横長方形	N-12°-W	4.80	3.85	0.55	13.34	有	—	—	北壁中央東寄	部分的に凹凸状	2号溝	9世紀第2四半期
3 3	X = 36,485 ~ 36,489	Y = 39,410 ~ 39,415	方形	N-89°-E	3.80	3.60	0.28	10.23	—	—	—	東壁中央南寄	—	119号土坑、14号溝	9世紀第3四半期
4 6	X = 36,542 ~ 36,543	Y = 39,232 ~ 39,234	方形	不明	(2.00)	(1.70)	0.35	(1.14)	有	—	—	—	—	17号溝	9世紀代
5 6	X = 36,540 ~ 36,544	Y = 39,284 ~ 39,288	方形	不明	(3.80)	(3.00)	0.53	(10.02)	—	—	—	—	—	—	9世紀代
6 3	X = 36,480 ~ 36,488	Y = 39,395 ~ 39,403	縦長方形	N-71°-E	6.90	5.00	0.53	23.29	有	有	1基	東壁中央やや南寄	部分的に凹凸状	102号土坑	9世紀第3四半期
7 3	X = 36,472 ~ 36,476	Y = 39,372 ~ 39,378	縦長方形	N-87°-E	3.70	3.10	0.20	9.77	有	有	—	東壁中央南寄	—	—	9世紀第2四半期
8 2	X = 36,435 ~ 36,439	Y = 39,413 ~ 39,417	横長方形	N-65°-E	3.60	2.95	0.50	8.28	有	有	2基	東壁中央	—	9号住居、20号溝	9世紀第3四半期
9 2	X = 36,434 ~ 36,438	Y = 39,415 ~ 39,419	方形	不明	3.30	(1.83)	0.37	(4.74)	有	—	—	—	—	8号住居	9世紀第3四半期
10 2	X = 36,439 ~ 36,443	Y = 39,421 ~ 39,425	横長方形	N-45°-E	3.35	(2.85)	0.55	(4.09)	—	—	—	東壁中央やや南寄	—	20・24号溝	9世紀第3四半期
11 2	X = 36,451 ~ 36,456	Y = 39,420 ~ 39,424	縦長方形	N-73°-E	3.50	3.00	0.47	6.78	—	—	—	東壁中央	—	161号土坑	9世紀第3四半期
12 2	X = 36,449 ~ 36,454	Y = 39,440 ~ 39,445	縦長方形	N-60°-E	3.85	3.03	0.50	8.59	有	—	—	東壁中央	—	13号住居	9世紀第1四半期
13 2	X = 36,449 ~ 36,455	Y = 39,437 ~ 39,442	縦長方形	N-56°-E	4.00	3.52	0.30	(10.13)	有	—	—	東壁中央南寄	全体やや凹凸	12・14号住居、14号溝	9世紀第1四半期
14 2	X = 36,451 ~ 36,456	Y = 39,433 ~ 39,438	横長方形	N-70°-E	3.87	2.87	0.25	(9.21)	—	—	—	東壁中央南寄	—	13号住居、140号土坑、14号溝	9世紀第1四半期
15 2	X = 36,445 ~ 36,450	Y = 39,425 ~ 39,430	縦長方形	N-51°-E	3.50	3.12	0.44	5.65	—	—	1基	北東壁中央	—	16号住居	9世紀第4四半期
16 2	X = 36,446 ~ 36,452	Y = 39,427 ~ 39,434	縦長方形	N-48°-E	4.50	3.47	0.45	11.64	—	有	1基	東壁中央南寄	—	15号住居	9世紀第3四半期
17 2	X = 36,455 ~ 36,459	Y = 39,430 ~ 39,435	方形	N-51°-E	3.20	(2.75)	0.34	(6.12)	—	—	—	東壁中央南寄	—	14号溝	8世紀第2四半期
18 2	X = 36,462 ~ 36,467	Y = 39,420 ~ 39,424	縦長方形	(新)N-53°-E (旧)N-39°-W	3.14	2.85	0.30	6.73	旧床に有	有	1基	(新)東壁中央南寄 (旧)北壁中央	旧床面平坦	—	9世紀第1四半期 新旧の建て替え?
19 2	X = 36,455 ~ 36,460	Y = 39,447 ~ 39,453	縦長方形	N-58°-E	3.85	3.45	0.40	10.80	—	—	—	東壁中央	全体やや凹凸	22号溝	8世紀末から9世紀初頭
20 2	X = 36,467 ~ 36,472	Y = 39,429 ~ 39,434	横長方形	N-9°-W	3.54	2.95	0.35	8.11	—	—	—	北壁中央	—	—	9世紀第1四半期

調査区 番号	位置		平面形	主軸方位	規模(m・㎡)				付属施設			カマド位置	掘り方	重複遺構	時期／備考
	X座標	Y座標			長辺	短辺	壁高	床面積	壁周溝	貯蔵穴	床下土坑				
21 2	X = 36,467 ~ 36,471	Y = 39,455 ~ 39,459	横長方形	N-75°-E	3.05	2.37	0.28	5.25	—	—	—	東壁中央南寄	—	22号溝	9世紀第3四半期 刻線文字紡錘車
22 2	X = 36,465 ~ 36,470	Y = 39,394 ~ 39,400	方形	不明	4.76	4.07	0.27	11.60	—	—	—	—	—	—	9世紀第3四半期
23 2	X = 36,458 ~ 36,464	Y = 39,397 ~ 39,404	縦長方形	N-63°-E	5.12	3.84	0.30	17.81	有	有	1基	東壁中央南寄	—	—	8世紀第3四半期 銅製容器「鉄柄付銅製杓」
24 2	X = 36,474 ~ 36,479	Y = 39,439 ~ 39,443	縦長方形	N-16°-W	(4.00)	3.55	0.90	(10.98)	有	—	1基	北壁中央	全体凹凸	25・26・31号住居	9世紀第3四半期
25 2	X = 36,472 ~ 36,478	Y = 39,434 ~ 39,441	縦長方形	N-91°-E	5.50	4.50	0.47	(13.74)	—	—	土坑1基、 ピット2基	東壁中央南寄	—	24・31号住居、25号溝	9世紀第3四半期
26 2	X = 36,478 ~ 36,481	Y = 39,434 ~ 39,440	縦長方形	N-75°-E	(4.50)	(2.20)	0.50	(4.86)	—	有	ピット3基	東壁中央南寄	一部貼り床	24・31号住居	9世紀第3四半期
27 2	X = 36,475 ~ 36,478	Y = 39,443 ~ 39,448	方形	不明	(4.38)	(1.20)	0.30	(2.96)	有	有?	土坑1基、 ピット1基	東壁?	貼り床	—	9世紀後半
28 2	X = 36,471 ~ 36,475	Y = 39,428 ~ 39,433	縦長方形	N-85°-E	3.92	2.90	0.36	8.19	—	—	—	東壁南寄	—	25号溝	8世紀後半
29 2	X = 36,467 ~ 36,473	Y = 39,413 ~ 39,420	縦長方形	N-63°-E	5.00	4.00	0.53	16.01	有	—	2基	東壁中央南寄	—	141号土坑、25・26号溝	8世紀第2四半期
30 2	X = 36,431 ~ 36,436	Y = 39,419 ~ 39,424	縦長方形	N-61°-E	3.70	2.90	0.45	13.75	—	—	—	東壁中央やや南寄	—	138・139号土坑	9世紀後半
31 2	X = 36,475 ~ 36,480	Y = 39,437 ~ 39,440	方形	N-74°-E	(3.90)	(1.35)	0.17	(3.92)	—	有	—	東壁中央南寄	—	24・25・26号住居	9世紀第3四半期以前

第3章 検出された遺構と遺物

第50表 土坑一覧表

番号	調査区	位置		平面形状	規模(m)			長軸方位	重複関係	時期/備考
		X座標	Y座標		長軸(径)	短軸	深さ			
1	6	X=36,514	Y=-39,280	円形	1.00	—	0.27	—	15土坑、5溝(5溝→1土)	近世以降
2	6	X=36,524	Y=-39,270	円形	1.15	—	0.18	—		不明
3	6	X=36,522	Y=-39,275	方形	1.47	(1.06)	0.10	N-3°-E		近代?
4	6	X=36,520	Y=-39,276	長方形	1.38	0.82	0.18	N-23°-E	5土坑(4土→5土)	近世
5	6	X=36,519	Y=-39,275	長方形	1.22	(0.50)	0.08	N-22°-E	4・6土坑(4土→5土→6土)	不明
6	6	X=36,520	Y=-39,274	長方形	1.35	0.75	0.15	N-10°-E	5土坑(5土→6土)	不明
7	6	X=36,522	Y=-39,278	長方形	1.53	0.95	0.03	N-13°-E		不明
8	6	X=36,513	Y=-39,274	長方形	1.68	1.15	0.47	N-82°-W		近世?
9	6	X=36,522	Y=-39,284	長方形	1.31	0.95	0.18	N-90°-E		近世
10	6	X=36,523	Y=-39,284	長方形	1.03	0.78	0.13	N-85°-W	3溝	近世以降
11	6	X=36,516	Y=-39,276	不明	(0.84)	—	0.48	N-68°-W	12土坑(12土→11土)	近世以降
12	6	X=36,516	Y=-39,276	円形	3.00	—	0.60	—	11・13土坑、4溝(4溝→12土→11・13土)	近世?
13	6	X=36,515	Y=-39,276	不明	1.55	—	0.30	—	12土坑(12土→13土)	近世以降
14	6	X=36,514	Y=-39,276	長方形	1.40	(0.96)	0.21	N-81°-W		近世以降
15	6	X=36,512	Y=-39,278	不整形円形	2.50	—	0.68	—	1土坑	近世以降
16	6	X=36,522	Y=-39,280	不整形長方形	6.90	3.95	0.25	N-15°-E	17~23土坑(18土→17土→16土、19~23土→16土)	近世以降
17	6	X=36,520	Y=-39,283	方形	1.90	—	0.15	N-10°-E	16・18土坑(18土→17土→16土)	不明
18	6	X=36,521	Y=-39,283	長方形	(1.50)	1.17	0.07	N-78°-W	16・17土坑(18土→17土→16土)	不明
19	6	X=36,521	Y=-39,280	正方形	0.95	0.95	0.22	N-12°-E	16土坑(19土→16土)	不明
20	6	X=36,524	Y=-39,279	長方形	0.98	0.78	0.10	N-90°-E	16・23土坑(20土→16土)	近世以降
21	6	X=36,525	Y=-39,279	長方形	0.92	0.72	0.09	N-90°-E	16・22土坑(21土→16土)	不明
22	6	X=36,525	Y=-39,280	方形	0.95	0.85	0.10	N-90°-E	16・21土坑(22土→16土)	不明
23	6	X=36,524	Y=-39,280	方形	(0.65)	0.70	0.04	N-90°-E	16・20土坑(23土→16土)	不明
24	欠番									
25	6	X=36,509	Y=-39,281	方形	(0.83)	0.75	0.11	N-71°-W	5溝(5溝→25土)	近世以降
26	6	X=36,510	Y=-39,281	方形	0.95	0.85	0.20	N-85°-W	5溝(5溝→26土)	近世以降
27	6	X=36,513	Y=-39,282	円形	0.70	—	0.27	—		近代?
28	6	X=36,527	Y=-39,280	長方形	3.40	(1.72)	0.33	N-84°-W		近代?
29	6	X=36,523	Y=-39,276	長方形	(1.90)	0.90	0.19	N-18°-E	6溝(6溝→29土)	不明
30	6	X=36,525	Y=-39,275	方形	1.36	0.69	0.15	N-16°-E	6溝(30土→6溝)	不明
31	6	X=36,517	Y=-39,274	長方形	1.63	(0.63)	0.05	N-18°-E	4溝(31土→4溝)	不明
32	5	X=36,491	Y=-39,309	長方形	2.17	1.15	0.17	N-83°-W		近世
33	5	X=36,519	Y=-39,292	長方形	1.74	1.42	0.33	N-50°-E		近世
34	5	X=36,490	Y=-39,312	長方形	2.88	1.55	0.27	N-17°-E		近世
35	欠番									
36	5	X=36,489	Y=-39,317	長方形	1.67	0.83	0.06	N-87°-W		近世
37	5	X=36,488	Y=-39,315	長方形	1.07	0.63	0.05	N-56°-W		近世
38	5	X=36,483	Y=-39,320	楕円形	2.21	0.97	0.16	N-0°-E		近世
39	5	X=36,482	Y=-39,323	長方形	1.80	1.28	0.13	N-83°-W	40土坑(40土→39土)	近世
40	5	X=36,482	Y=-39,322	方形	(0.53)	1.18	0.14	N-7°-E	39土坑(40土→39土)	近世
41	5	X=36,480	Y=-39,324	長方形	1.77	1.05	0.42	N-8°-E		近世
42	5	X=36,486	Y=-39,324	長方形	1.10	0.67	0.12	N-14°-E		近世
43	4	X=36,459	Y=-39,357	円形	1.35	—	0.43	—		近世
44	5	X=36,516	Y=-39,293	方形	1.58	(1.25)	0.26	N-19°-E	45土坑(45土→44土)	近代?
45	5	X=36,517	Y=-39,294	長方形	2.50	1.52	0.42	N-50°-W	44土坑(45土→44土)	近代?
46	5	X=36,515	Y=-39,292	円形	0.98	—	0.13	—		近世
47	5	X=36,525	Y=-39,295	長方形	1.27	0.90	0.12	N-67°-W		近世
48	5	X=36,525	Y=-39,290	円形	1.26	—	0.51	—		近世以降
49	5	X=36,511	Y=-39,346	長方形	1.26	1.00	0.12	N-8°-E	8溝(8溝→49土)	近世以降
50	5	X=36,510	Y=-39,342	楕円形	1.50	1.20	0.25	N-20°-W	8溝(8溝→50土)	近世以降
51	5	X=36,511	Y=-39,339	楕円形	1.65	1.30	0.40	N-87°-W	8溝(8溝→51土)	近世以降
52	4	X=36,506	Y=-39,346	円形	1.25	—	0.12	—	9溝(9溝→52土)	不明
53	4	X=36,504	Y=-39,342	円形	0.95	—	0.38	—	9溝(9溝→53土)	近代?
54	4	X=36,506	Y=-39,337	円形	0.65	—	0.09	—		不明
55	4	X=36,504	Y=-39,337	円形	0.76	—	0.13	—		近代?
56	4	X=36,503	Y=-39,337	円形	0.63	—	0.22	—		近代?
57	4	X=36,504	Y=-39,339	円形	0.55	—	0.10	—		近代?
58	4	X=36,503	Y=-39,342	円形	0.68	—	0.08	—		近代?
59	4	X=36,504	Y=-39,343	楕円形	0.93	0.68	0.17	N-8°-E		近世以降
60	欠番									
61	5	X=36,517	Y=-39,361	円形	0.85	—	0.08	—		近世
62	5	X=36,513	Y=-39,364	楕円形	1.00	0.85	0.18	N-25°-E		近世
63	5	X=36,512	Y=-39,366	方形	1.12	1.00	0.21	N-89°-W		近世

第4節 奈良時代以降の遺構と遺物

番号	調査区	位置		平面形状	規模(m)			長軸方位	重複関係	時期/備考
		X座標	Y座標		長軸(径)	短軸	深さ			
64	5	X=36,513	Y=-39,372	円形	0.81	—	0.52	—		近世
65	3	X=36,502	Y=-39,386	円形	1.10	—	0.47	—	16溝(16溝→65土)	近世
66	3	X=36,502	Y=-39,383	円形	0.86	—	0.15	—	13・16溝	近世
67	3	X=36,501	Y=-39,387	円形	1.02	—	0.17	—		近世
68	3	X=36,500	Y=-39,388	円形	0.83	—	0.11	—		近世
69	3	X=36,500	Y=-39,390	円形	0.85	—	0.22	—		近世
70	3	X=36,495	Y=-39,396	長方形	1.45	0.96	0.12	N-82°-W		近世
71	3	X=36,499	Y=-39,394	円形	1.00	—	0.13	—		近世
72	3	X=36,494	Y=-39,394	円形	0.67	—	0.06	—		近世
73	3	X=36,494	Y=-39,392	円形	0.80	—	0.24	—		近世
74	3	X=36,489	Y=-39,390	円形	1.02	—	0.25	—		近代?
75	3	X=36,493	Y=-39,382	楕円形	0.90	0.63	0.13	N-70°-W		近世以降
76	3	X=36,492	Y=-39,382	方形	0.60	0.55	0.07	N-70°-W		近世以降
77	3	X=36,491	Y=-39,384	方形	0.55	0.50	0.07	N-65°-W		近世以降
78	3	X=36,490	Y=-39,383	方形	0.55	0.55	0.07	N-75°-W		近世以降
79	3	X=36,494	Y=-39,383	方形	1.15	1.03	0.48	N-25°-E		近世以降
80	3	X=36,490	Y=-39,386	円形	0.87	—	0.16	—	81土坑(81土→80土)	近世
81	3	X=36,490	Y=-39,385	楕円形	(0.87)	0.78	0.23	N-38°-W	80土坑(81土→80土)	近世
82	3	X=36,498	Y=-39,387	方形	0.70	0.62	0.15	N-9°-E		近代以降
83	3	X=36,497	Y=-39,387	楕円形	0.81	0.65	0.06	N-43°-W		近世以降
84	3	X=36,492	Y=-39,394	円形	1.00	—	0.17	—		近世
85	欠番									
86	3	X=36,497	Y=-39,386	円形	1.17	—	0.24	—		近世
87	3	X=36,484	Y=-39,391	円形	0.93	—	0.08	—		近世以降
88	3	X=36,483	Y=-39,394	円形	1.05	—	0.22	—		近世
89	3	X=36,486	Y=-39,394	方形	0.90	0.90	0.13	N-65°-W		近世
90	3	X=36,485	Y=-39,393	楕円形	0.85	0.65	0.12	N-59°-W		近世
91	3	X=36,484	Y=-39,398	方形	0.65	(0.52)	0.05	N-53°-E	92土坑(92土→91土)	近世
92	3	X=36,484	Y=-39,398	円形	(0.65)	—	0.08	—	91土坑(92土→91土)	近世
93	3	X=36,480	Y=-39,395	円形	0.95	—	0.26	—		近世
94	3	X=36,479	Y=-39,394	楕円形	0.68	0.52	0.08	N-5°-W		近世
95	3	X=36,479	Y=-39,393	円形	0.90	—	0.12	—	96土坑(96土→95土)	古代
96	3	X=36,478	Y=-39,393	不整形	2.20	1.00	0.14	N-68°-E	95土坑(96土→95土)	古代
97	3	X=36,477	Y=-39,395	円形	0.60	—	0.12	—	98・127土坑(127土→98土→97土)	近世
98	3	X=36,477	Y=-39,395	円形	0.78	—	0.15	—	97・127土坑(127土→98土→97土)	近世
99	3	X=36,476	Y=-39,397	楕円形	1.21	0.90	0.18	N-61°-W		近代?
100	3	X=36,477	Y=-39,401	不明	1.28	—	0.27	—		不明
101	3	X=36,482	Y=-39,403	円形	0.98	—	0.32	—		近世
102	3	X=36,484	Y=-39,401	円形	0.87	—	0.19	—	6住居(6住→102土)	近世
103	3	X=36,488	Y=-39,400	円形	0.83	—	0.15	—		近世
104	3	X=36,488	Y=-39,401	円形	0.85	—	0.12	—		近世
105	3	X=36,492	Y=-39,403	長方形	0.97	0.77	0.32	N-69°-W		近世
106	3	X=36,492	Y=-39,399	長方形	0.95	0.67	0.31	N-20°-E		近世
107	3	X=36,496	Y=-39,403	長方形	1.23	0.95	0.31	N-77°-W	14溝(14溝→107土)	近世以降
108	3	X=36,497	Y=-39,407	長方形	1.27	1.08	0.31	N-80°-W		近世以降
109	3	X=36,495	Y=-39,415	楕円形	0.95	0.80	0.11	N-27°-E		近世以降
110	3	X=36,493	Y=-39,415	楕円形	0.88	0.77	0.15	N-6°-E		近世以降
111	欠番									
112	3	X=36,494	Y=-39,416	楕円形	(1.62)	1.57	0.33	N-3°-E		近世
113	3	X=36,492	Y=-39,419	円形	0.85	—	0.22	—		近世
114	3	X=36,488	Y=-39,423	不明	0.96	—	0.37	N-37°-E		近世
115	3	X=36,488	Y=-39,422	長方形	1.10	0.95	0.15	N-31°-E		不明
116	3	X=36,489	Y=-39,420	楕円形	1.05	0.83	0.16	N-60°-W		不明
117	3	X=36,488	Y=-39,416	円形	0.95	—	0.14	—		近世
118	3	X=36,488	Y=-39,415	方形	0.66	0.55	0.31	N-72°-W		近世
119	3	X=36,486	Y=-39,415	円形	0.85	—	0.15	—	3住居(3住→119土)	近世
120	3	X=36,490	Y=-39,415	方形	1.52	1.42	0.18	N-4°-W		近世
121	欠番									
122	3	X=36,484	Y=-39,416	不明	1.20	—	0.45	—		近世以降
123	3	X=36,483	Y=-39,411	円形	1.00	—	0.38	—		近世
124	3	X=36,486	Y=-39,409	方形	0.92	—	0.17	—	130土坑(130土→124土)	近世
125	3	X=36,486	Y=-39,405	楕円形	1.63	1.41	0.38	N-60°-W		近世
126	3	X=36,490	Y=-39,406	不整形	4.22	2.25	0.08	N-82°-W		近世
127	3	X=36,477	Y=-39,395	円形	0.97	—	0.25	—	97・98土坑(127土→98土→97土)	古代
128	3	X=36,489	Y=-39,408	楕円形	(1.91)	0.67	0.40	N-85°-W	14溝(128土→14溝)	不明
129	3	X=36,493	Y=-39,404	方形	2.27	2.00	0.17	N-45°-E	14溝(129土→14溝)	古代
130	3	X=36,486	Y=-39,409	方形	1.55	1.09	0.23	N-81°-W	124土坑(130土→124土)	近世

第3章 検出された遺構と遺物

番号	調査区	位置		平面形状	規模(m)			長軸方位	重複関係	時期／備考
		X座標	Y座標		長軸(径)	短軸	深さ			
131	3	X=36,489	Y=-39,400	長方形	2.08	0.83	0.20	N-16°-E		不明
132	3	X=36,493	Y=-39,416	楕円形	1.12	0.62	0.61	N-62°-E		近世以降
133	3	X=36,474	Y=-39,378	楕円形	1.06	0.91	0.13	N-14°-W		不明
134	6	X=36,541	Y=-39,296	不整形	(1.85)	1.75	0.32	N-77°-W	1溝(134土→1溝)	近世
135										欠番
136										欠番
137										欠番
138	2	X=36,432	Y=-39,419	長方形	3.29	1.00	0.38	N-88°-W	30住居(30住→138土)	近世以降
139	2	X=36,434	Y=-39,419	長方形	3.51	0.94	0.37	N-90°-E	30住居(30住→139土)	近世以降
140	2	X=36,452	Y=-39,434	楕円形	2.42	1.58	0.49	N-90°-E	14住居(14住→140土)	古代?
141	2	X=36,470	Y=-39,413	長方形	2.95	0.99	0.18	N-20°-W	29住居(29住→141土)	近世
142	2	X=36,466	Y=-39,410	長方形	1.35	1.10	0.18	N-15°-E		不明
143	2	X=36,463	Y=-39,411	長方形	1.76	1.32	0.33	N-18°-E		近世以降
144	2	X=36,461	Y=-39,408	長方形	1.45	0.75	0.18	N-20°-E		不明
145	2	X=36,461	Y=-39,413	長方形	1.05	0.85	0.16	N-9°-E		不明
146	2	X=36,467	Y=-39,415	長方形	0.88	0.52	0.15	N-50°-E		不明
147	2	X=36,463	Y=-39,405	楕円形	1.71	0.90	0.23	N-9°-E		不明
148	2	X=36,456	Y=-39,403	円形	1.25	—	0.07	—		不明
149										欠番
150	2	X=36,477	Y=-39,423	円形	1.01	—	0.27	—		不明
151	2	X=36,482	Y=-39,432	円形	0.84	—	0.22	—		不明
152	2	X=36,481	Y=-39,433	方形	1.05	1.05	0.25	N-30°-E		近代?
153	2	X=36,480	Y=-39,432	円形	0.85	—	0.25	—		不明
154										欠番
155	2	X=36,460	Y=-39,415	長方形	1.45	0.82	0.08	N-20°-E		不明
156	2	X=36,454	Y=-39,404	楕円形	1.17	0.95	0.47	N-90°-E		不明
157	2	X=36,456	Y=-39,406	円形	1.40	—	0.25	—		不明
158	2	X=36,457	Y=-39,407	円形	1.13	—	0.21	—		古代?
159	2	X=36,457	Y=-39,421	長方形	1.89	1.53	0.69	N-71°-E		不明
160	2	X=36,454	Y=-39,452	円形	0.80	—	0.75	—		不明
161	2	X=36,454	Y=-39,419	方形	1.45	1.45	0.37	N-20°-W	11住居(161土→11住)	古代
162	2	X=36,452	Y=-39,419	方形	0.92	0.87	0.22	N-18°-W	163土坑(162土→163土)	不明
163	2	X=36,452	Y=-39,419	円形	1.22	—	0.13	—	162土坑(162土→163土)	不明
164	2	X=36,451	Y=-39,421	長方形	1.77	1.25	0.25	N-61°-E		不明
165	2	X=36,448	Y=-39,424	長方形	1.16	0.97	0.28	N-14°-W		不明
166	2	X=36,457	Y=-39,427	長方形	2.04	1.78	0.47	N-65°-E		不明
167	2	X=36,458	Y=-39,437	長方形	1.45	0.91	0.37	N-22°-W		不明
168										欠番
169										欠番
170	2	X=36,466	Y=-39,425	円形	1.09	—	0.11	—		不明
171	2	X=36,445	Y=-39,431	長方形	1.70	1.34	0.44	N-35°-W		古代?
172	2	X=36,438	Y=-39,425	楕円形	1.28	0.85	0.55	N-17°-W		不明
173	2	X=36,452	Y=-39,415	円形	0.80	—	0.26	—		不明
174	2	X=36,435	Y=-39,410	円形	1.35	—	0.36	—	19溝(174土→19溝)	近世?
175	2	X=36,433	Y=-39,411	楕円形	1.55	1.24	0.29	N-52°-E		不明
176	2	X=36,435	Y=-39,432	楕円形	1.42	1.03	0.43	N-2°-E		不明
177	2	X=36,432	Y=-39,431	楕円形	1.63	0.87	0.25	N-24°-W		不明
178	2	X=36,430	Y=-39,414	長方形	(1.80)	1.03	0.23	N-10°-E		不明
179	2	X=36,433	Y=-39,413	楕円形	1.40	1.00	0.15	N-50°-W	19溝(179土→19溝)	近代?
180	2	X=36,454	Y=-39,433	長方形	1.83	0.82	0.33	N-60°-W		古代?
181	2	X=36,434	Y=-39,408	不明	1.20	—	0.32	—		不明
182	2	X=36,467	Y=-39,428	円形	1.03	—	0.22	—		不明
183	2	X=36,474	Y=-39,416	長方形	1.93	1.11	0.31	N-81°-W	25溝(183土→25溝)	近代?
184	2	X=36,478	Y=-39,432	円形	0.97	—	0.41	—		不明
185	2	X=36,443	Y=-39,440	楕円形	1.00	0.63	0.37	N-54°-E		不明
186										欠番

第51表 ピット一覧表

番号	調査区	位置		規模(m)		埋土分類
		X座標	Y座標	径	深さ	
1	6	X=36,551	Y=-39,267	0.23	0.16	A
2	6	X=36,550	Y=-39,267	0.21	0.21	A
3	6	X=36,550	Y=-39,267	0.21	0.27	A
4	6	X=36,549	Y=-39,267	0.28	0.26	A
5	6	X=36,550	Y=-39,267	0.25	0.22	A
6	6	X=36,549	Y=-39,267	0.30	0.39	A
7	6	X=36,548	Y=-39,268	0.51	-	A
8	6	X=36,552	Y=-39,272	0.26	0.26	A
9	6	X=36,552	Y=-39,272	0.30	0.25	A
10	6	X=36,551	Y=-39,273	0.19	0.26	A
11	6	X=36,551	Y=-39,273	0.22	0.18	A
12	6	X=36,550	Y=-39,273	0.24	0.18	A
13	6	X=36,550	Y=-39,272	0.34	0.37	A
14	6	X=36,546	Y=-39,270	0.38	0.45	A
15	6	X=36,542	Y=-39,270	0.20	0.21	A
16	6	X=36,541	Y=-39,270	0.26	0.41	C
17	6	X=36,541	Y=-39,269	0.32	0.32	A
18	6	X=36,537	Y=-39,269	0.28	0.10	C
19	6	X=36,539	Y=-39,273	0.46	0.27	C
20	6	X=36,537	Y=-39,272	0.32	0.36	C
21	6	X=36,537	Y=-39,271	0.28	0.31	C
22	6	X=36,536	Y=-39,271	0.26	0.26	C
23	6	X=36,524	Y=-39,272	0.28	0.12	B
24	6	X=36,524	Y=-39,273	0.35	0.33	B
25	6	X=36,525	Y=-39,274	0.25	0.16	A
26	6	X=36,524	Y=-39,274	0.43	0.56	B
27	6	X=36,523	Y=-39,274	0.42	0.35	B
28	6	X=36,521	Y=-39,274	0.35	0.29	B
29	6	X=36,521	Y=-39,274	0.26	0.21	C
30	6	X=36,521	Y=-39,272	0.26	0.18	C
31	6	X=36,521	Y=-39,270	0.23	0.21	C
32	6	X=36,521	Y=-39,271	0.26	0.20	C
33	6	X=36,520	Y=-39,272	0.32	0.15	C
34	6	X=36,520	Y=-39,272	0.18	0.27	C
35	6	X=36,520	Y=-39,271	0.17	0.19	B
36	6	X=36,519	Y=-39,270	0.32	-	C
37	6	X=36,518	Y=-39,270	0.46	0.21	A
38	6	X=36,518	Y=-39,271	0.28	0.16	C
39	6	X=36,518	Y=-39,271	0.15	0.33	C
40	6	X=36,518	Y=-39,274	0.30	0.16	B
41	6	X=36,517	Y=-39,272	0.21	0.17	C
42	6	X=36,517	Y=-39,273	0.40	0.25	D
43	6	X=36,516	Y=-39,273	0.47	0.50	D
44	6	X=36,517	Y=-39,273	0.49	0.33	D
45	6	X=36,516	Y=-39,272	0.50	0.21	B
46	6	X=36,516	Y=-39,272	0.40	0.26	B
47	6	X=36,516	Y=-39,271	0.33	0.06	A
48	6	X=36,514	Y=-39,273	0.27	0.21	A
49	6	X=36,514	Y=-39,273	0.32	0.45	D
50	6	X=36,514	Y=-39,274	0.28	0.54	D
51	6	X=36,512	Y=-39,273	0.42	0.08	B
52	6	X=36,512	Y=-39,274	0.40	0.16	D
53	6	X=36,512	Y=-39,274	0.40	0.07	A
54	6	X=36,512	Y=-39,274	0.54	0.69	D
55	6	X=36,557	Y=-39,315	0.32	0.02	C
56	6	X=36,558	Y=-39,313	0.42	0.24	C
57	6	X=36,559	Y=-39,311	0.20	0.33	C
58	6	X=36,558	Y=-39,312	0.27	0.27	C
59	6	X=36,556	Y=-39,305	0.29	0.53	B
60	6	X=36,555	Y=-39,306	0.32	0.41	B
61	6	X=36,555	Y=-39,306	0.34	0.69	B
62	6	X=36,554	Y=-39,306	0.29	0.56	B
63	6	X=36,554	Y=-39,306	0.25	0.55	B
64	6	X=36,553	Y=-39,283	0.30	0.45	A
65	6	X=36,552	Y=-39,283	0.26	0.32	A

番号	調査区	位置		規模(m)		埋土分類
		X座標	Y座標	径	深さ	
66	6	X=36,552	Y=-39,282	0.32	0.44	A
67	6	X=36,551	Y=-39,276	0.52	0.39	C
68	6	X=36,540	Y=-39,278	0.34	0.42	A
69	6	X=36,535	Y=-39,281	0.27	0.33	A
70	6	X=36,543	Y=-39,286	0.24	0.13	A
71	6	X=36,543	Y=-39,286	0.42	0.37	A
72	6	X=36,543	Y=-39,286	0.48	0.37	A
73	6	X=36,543	Y=-39,286	0.27	0.36	A
74	6	X=36,543	Y=-39,286	0.18	0.39	A
75	6	X=36,543	Y=-39,286	0.52	0.41	A
76	6	X=36,540	Y=-39,286	0.36	0.45	A
77	6	X=36,540	Y=-39,285	0.28	0.36	A
78	6	X=36,540	Y=-39,286	0.26	0.30	C
79	6	X=36,540	Y=-39,286	0.55	0.34	C
80	6	X=36,540	Y=-39,287	0.24	0.24	C
81	6	X=36,539	Y=-39,287	0.10	0.07	A
82	6	X=36,539	Y=-39,287	0.16	0.13	A
83	6	X=36,539	Y=-39,287	0.32	0.21	A
84	6	X=36,539	Y=-39,286	0.24	0.25	A
85	6	X=36,531	Y=-39,289	0.28	0.25	C
86	6	X=36,532	Y=-39,288	0.42	0.45	C
87	6	X=36,532	Y=-39,288	0.24	0.50	C
88	6	X=36,531	Y=-39,289	0.34	0.47	C
89	6	X=36,530	Y=-39,291	0.28	0.27	A
90	6	X=36,543	Y=-39,280	0.30	0.25	A
91	6	X=36,542	Y=-39,279	0.38	0.45	A
92	6	X=36,541	Y=-39,280	0.25	0.50	A
93	6	X=36,542	Y=-39,290	0.34	0.29	A
94	6	X=36,541	Y=-39,290	0.18	0.19	A
95	6	X=36,541	Y=-39,291	0.22	0.28	A
96	6	X=36,541	Y=-39,291	0.25	0.19	A
97	6	X=36,538	Y=-39,292	0.38	0.37	A
98	6	X=36,537	Y=-39,294	0.37	0.39	A
99	6	X=36,533	Y=-39,295	0.46	0.21	C
100	6	X=36,541	Y=-39,298	0.65	0.61	A
101	6	X=36,541	Y=-39,299	0.29	0.78	A
102	6	X=36,543	Y=-39,302	0.44	0.46	B
103	6	X=36,542	Y=-39,302	0.92	0.47	B
104	6	X=36,543	Y=-39,306	0.62	0.43	A
105	6	X=36,541	Y=-39,306	0.78	0.37	A
106	6	X=36,541	Y=-39,307	0.42	0.48	B
107	6	X=36,540	Y=-39,310	0.35	0.32	C
108	6	X=36,539	Y=-39,310	0.33	0.46	C
109	6	X=36,540	Y=-39,309	0.29	0.59	B
110	6	X=36,539	Y=-39,308	0.29	0.45	B
111	6	X=36,537	Y=-39,308	0.45	0.35	B
112	6	X=36,536	Y=-39,309	0.56	0.76	C
113	6	X=36,535	Y=-39,305	0.45	0.45	B
114	6	X=36,537	Y=-39,305	0.63	0.42	C
115	6	X=36,536	Y=-39,304	0.36	0.41	A
116	6	X=36,539	Y=-39,303	0.33	0.41	A
117	6	X=36,537	Y=-39,303	0.23	0.28	A
118	6	X=36,538	Y=-39,301	0.45	0.43	C
119	6	X=36,538	Y=-39,299	0.40	0.35	A
120	6	X=36,538	Y=-39,298	0.50	0.59	A
121	6	X=36,538	Y=-39,299	0.52	0.53	C
122	6	X=36,534	Y=-39,299	0.46	0.34	A
123	6	X=36,531	Y=-39,304	0.45	0.41	A
124	6	X=36,531	Y=-39,330	0.42	0.78	A
125	6	X=36,525	Y=-39,275	0.49	0.39	B
126	6	X=36,525	Y=-39,276	0.42	0.12	B
127	6	X=36,522	Y=-39,277	0.33	0.24	B
128	6	X=36,521	Y=-39,277	0.28	0.13	C
129	6	X=36,521	Y=-39,278	0.38	0.21	C
130	6	X=36,519	Y=-39,278	0.32	0.23	C

第3章 検出された遺構と遺物

番号	調査区	位置		規模(m)		埋土分類
		X座標	Y座標	径	深さ	
131	6	X=36,519	Y=-39,277	0.26	0.26	C
132	6	X=36,519	Y=-39,277	0.14	0.23	C
133	6	X=36,518	Y=-39,278	0.28	-	B
134	6	X=36,519	Y=-39,276	0.38	0.29	B
135	6	X=36,519	Y=-39,276	0.25	0.48	B
136	6	X=36,516	Y=-39,278	0.20	0.51	B
137	6	X=36,515	Y=-39,275	0.25	0.56	D
138	6	X=36,514	Y=-39,275	0.18	0.38	D
139	6	X=36,514	Y=-39,277	0.22	0.28	D
140	6	X=36,514	Y=-39,278	0.17	0.32	D
141	6	X=36,512	Y=-39,276	0.34	0.39	B
142	6	X=36,511	Y=-39,276	0.35	0.25	B
143	6	X=36,511	Y=-39,275	0.38	0.22	D
144	6	X=36,509	Y=-39,278	0.44	0.17	D
145	6	X=36,509	Y=-39,283	0.21	0.13	B
146	6	X=36,509	Y=-39,283	0.27	0.35	B
147	6	X=36,510	Y=-39,287	0.36	0.30	D
148	6	X=36,510	Y=-39,287	0.24	0.19	D
149	6	X=36,510	Y=-39,287	0.19	0.16	D
150	6	X=36,510	Y=-39,283	0.24	0.17	B
151	6	X=36,511	Y=-39,282	0.34	0.24	C
152	6	X=36,511	Y=-39,282	0.25	0.11	B
153	6	X=36,512	Y=-39,281	0.26	0.30	B
154	6	X=36,512	Y=-39,282	0.24	0.18	B
155	6	X=36,513	Y=-39,284	0.44	0.30	D
156	6	X=36,513	Y=-39,284	0.47	0.18	D
157	6	X=36,516	Y=-39,280	0.18	0.23	D
158	6	X=36,517	Y=-39,280	0.28	0.55	B
159	6	X=36,520	Y=-39,281	0.48	0.47	C
160	6	X=36,523	Y=-39,282	0.40	0.41	B
161	5	X=36,529	Y=-39,292	0.42	0.38	A
162	5	X=36,528	Y=-39,292	0.40	0.45	C
163	5	X=36,528	Y=-39,292	0.34	0.41	C
164	5	X=36,529	Y=-39,298	0.32	0.57	C
165	5	X=36,527	Y=-39,298	0.30	0.54	C
166	5	X=36,527	Y=-39,300	0.66	0.52	A
167	5	X=36,528	Y=-39,301	0.55	0.61	A
168	5	X=36,528	Y=-39,301	0.35	0.29	A
169	5	X=36,528	Y=-39,302	0.35	0.67	A
170	5	X=36,526	Y=-39,304	0.21	0.37	A
171	5	X=36,526	Y=-39,302	0.23	0.22	A
172	5	X=36,526	Y=-39,301	0.23	0.31	A
173	5	X=36,524	Y=-39,289	0.20	0.26	C
174	5	X=36,523	Y=-39,289	0.34	0.30	C
175	5	X=36,524	Y=-39,290	0.40	0.33	C
176	5	X=36,524	Y=-39,290	0.46	0.85	D
177	5	X=36,523	Y=-39,290	0.30	0.21	C
178	5	X=36,523	Y=-39,295	0.30	0.22	A
179	5	X=36,521	Y=-39,295	0.35	0.27	A
180	5	X=36,521	Y=-39,296	0.37	0.17	A
181	5	X=36,524	Y=-39,296	0.34	0.34	A
182	5	X=36,524	Y=-39,296	0.42	0.38	A
183	5	X=36,524	Y=-39,299	0.32	0.25	A
184	5	X=36,522	Y=-39,300	0.32	0.47	A
185	5	X=36,522	Y=-39,304	0.36	0.21	A
186	5	X=36,523	Y=-39,308	0.48	0.26	A
187	5	X=36,522	Y=-39,309	0.23	0.35	C
188	5	X=36,522	Y=-39,311	0.56	0.46	A
189	5	X=36,522	Y=-39,311	0.32	0.40	A
190	5	X=36,520	Y=-39,310	0.45	0.35	A
191	5	X=36,524	Y=-39,321	0.42	0.52	C
192	5	X=36,522	Y=-39,324	0.26	0.35	A
193	5	X=36,516	Y=-39,310	0.34	0.29	C
194	5	X=36,517	Y=-39,309	0.44	0.28	C
195	5	X=36,519	Y=-39,299	0.27	0.38	A

番号	調査区	位置		規模(m)		埋土分類
		X座標	Y座標	径	深さ	
196	5	X=36,517	Y=-39,297	0.42	0.47	A
197	5	X=36,516	Y=-39,296	0.34	0.23	A
198	5	X=36,518	Y=-39,295	0.27	0.35	C
199	5	X=36,519	Y=-39,294	0.35	0.24	C
200	5	X=36,519	Y=-39,293	0.51	0.28	C
201	5	X=36,520	Y=-39,292	0.37	0.30	C
202	5	X=36,518	Y=-39,293	0.34	0.22	C
203	5	X=36,514	Y=-39,291	0.44	0.27	C
204	5	X=36,514	Y=-39,291	0.32	0.34	C
205	5	X=36,514	Y=-39,292	0.38	0.32	C
206	5	X=36,515	Y=-39,293	0.34	0.27	C
207	5	X=36,513	Y=-39,293	0.26	0.34	C
208	5	X=36,514	Y=-39,295	0.33	0.34	A
209	5	X=36,514	Y=-39,295	0.35	0.39	A
210	5	X=36,512	Y=-39,294	0.29	0.35	C
211	5	X=36,512	Y=-39,296	0.22	0.13	A
212	5	X=36,511	Y=-39,297	0.28	0.30	A
213	5	X=36,510	Y=-39,299	0.32	0.26	A
214	5	X=36,511	Y=-39,298	0.40	0.22	A
215	5	X=36,513	Y=-39,305	0.40	0.20	C
216	5	X=36,511	Y=-39,304	0.32	0.24	C
217	5	X=36,510	Y=-39,303	0.62	0.54	C
218	5	X=36,507	Y=-39,301	0.34	0.34	C
219	5	X=36,508	Y=-39,303	0.28	0.40	C
220	5	X=36,508	Y=-39,304	0.52	0.37	C
221	5	X=36,511	Y=-39,316	0.36	0.18	A
222	5	X=36,508	Y=-39,318	0.30	0.29	A
223	5	X=36,508	Y=-39,315	0.68	0.17	A
224	5	X=36,502	Y=-39,321	0.28	0.20	A
225	5	X=36,504	Y=-39,306	0.33	0.38	C
226	5	X=36,502	Y=-39,297	0.32	0.44	C
227	5	X=36,500	Y=-39,295	0.45	0.61	A
228	5	X=36,500	Y=-39,296	0.64	0.39	A
229	5	X=36,497	Y=-39,310	0.96	0.67	C
230	5	X=36,496	Y=-39,310	0.28	0.25	C
231	5	X=36,498	Y=-39,311	0.58	0.30	C
232	5	X=36,499	Y=-39,311	0.27	0.28	C
233	5	X=36,499	Y=-39,312	0.76	0.60	C
234	5	X=36,499	Y=-39,313	0.55	0.29	C
235	5	X=36,499	Y=-39,313	0.25	0.25	A
236	5	X=36,499	Y=-39,313	0.46	0.28	A
237	5	X=36,499	Y=-39,314	0.74	0.42	C
238	5	X=36,497	Y=-39,313	0.35	0.44	A
239	5	X=36,496	Y=-39,315	0.24	0.33	A
240	5	X=36,497	Y=-39,318	0.50	0.20	A
241	5	X=36,498	Y=-39,317	0.33	0.36	A
242	5	X=36,499	Y=-39,318	0.55	0.31	C
243	5	X=36,499	Y=-39,319	0.20	0.26	A
244	5	X=36,550	Y=-39,320	0.54	0.21	C
245	5	X=36,501	Y=-39,321	0.29	0.20	A
246	5	X=36,500	Y=-39,321	0.25	0.17	A
247	5	X=36,499	Y=-39,321	0.25	0.27	A
248	5	X=36,500	Y=-39,322	0.22	0.25	A
249	5	X=36,500	Y=-39,323	0.42	0.17	A
250	5	X=36,500	Y=-39,323	0.20	0.12	A
251	5	X=36,500	Y=-39,324	0.36	0.30	A
252	5	X=36,500	Y=-39,324	0.35	0.21	A
253	5	X=36,500	Y=-39,325	0.35	0.30	A
254	5	X=36,501	Y=-39,326	0.52	0.38	A
255	5	X=36,502	Y=-39,327	0.20	0.36	A
256	5	X=36,495	Y=-39,301	0.45	0.50	A
257	5	X=36,493	Y=-39,302	0.28	0.32	A
258	5	X=36,492	Y=-39,304	0.34	0.31	D
259	5	X=36,491	Y=-39,304	0.44	0.29	A
260	5	X=36,494	Y=-39,305	0.37	0.34	A

第4節 奈良時代以降の遺構と遺物

番号	調査区	位置		規模(m)		埋土分類
		X座標	Y座標	径	深さ	
261	5	X=36,492	Y=-39,306	0.25	0.26	A
262	5	X=36,494	Y=-39,309	0.31	0.33	A
263	5	X=36,494	Y=-39,309	0.18	0.25	A
264	5	X=36,494	Y=-39,310	0.30	0.20	A
265	5	X=36,494	Y=-39,310	0.34	0.34	A
266	5	X=36,495	Y=-39,313	0.28	0.40	A
267	5	X=36,488	Y=-39,310	0.18	0.15	A
268	5	X=36,488	Y=-39,310	0.42	0.35	A
269	5	X=36,489	Y=-39,311	0.54	0.44	A
270	5	X=36,489	Y=-39,315	0.19	0.27	A
271	5	X=36,489	Y=-39,315	0.27	0.25	A
272	5	X=36,487	Y=-39,316	0.27	0.30	A
273	5	X=36,489	Y=-39,318	0.46	0.54	A
274	5	X=36,491	Y=-39,320	0.18	0.35	A
275	5	X=36,482	Y=-39,317	0.26	0.27	A
276	5	X=36,483	Y=-39,318	0.30	0.34	A
277	5	X=36,484	Y=-39,317	0.24	0.31	A
278	5	X=36,484	Y=-39,317	0.26	0.34	A
279	5	X=36,485	Y=-39,317	0.32	0.31	A
280	5	X=36,484	Y=-39,318	0.23	0.33	A
281	5	X=36,485	Y=-39,318	0.24	0.24	A
282	5	X=36,486	Y=-39,319	0.23	0.26	A
283	5	X=36,486	Y=-39,319	0.23	0.16	A
284	5	X=36,487	Y=-39,322	0.66	0.31	A
285	5	X=36,485	Y=-39,322	0.18	0.44	A
286	5	X=36,485	Y=-39,322	0.16	0.32	A
287	5	X=36,485	Y=-39,323	0.18	0.32	A
288	5	X=36,484	Y=-39,322	0.18	0.24	A
289	5	X=36,484	Y=-39,323	0.18	0.41	A
290	5	X=36,482	Y=-39,325	0.16	0.32	A
291	5	X=36,483	Y=-39,325	0.16	0.19	A
292	5	X=36,485	Y=-39,325	0.66	0.45	A
293	5	X=36,486	Y=-39,327	0.28	0.27	A
294	5	X=36,532	Y=-39,330	0.24	0.24	A
295	5	X=36,532	Y=-39,333	0.40	0.33	A
296	5	X=36,532	Y=-39,339	0.57	0.32	A
297	5	X=36,532	Y=-39,343	0.28	0.22	A
298	5	X=36,529	Y=-39,332	0.28	0.34	A
299	5	X=36,525	Y=-39,337	0.92	0.68	A
300	5	X=36,528	Y=-39,343	0.46	0.27	D
301	5	X=36,528	Y=-39,344	0.70	0.36	D
302	5	X=36,531	Y=-39,349	0.35	0.47	A
303	5	X=36,528	Y=-39,350	0.42	0.39	A
304	4	X=36,502	Y=-39,348	0.42	0.40	C
305	4	X=36,500	Y=-39,343	0.35	0.25	C
306	4	X=36,500	Y=-39,342	0.36	0.25	C
307	4	X=36,496	Y=-39,341	0.42	0.29	C
308	5	X=36,489	Y=-39,330	0.28	0.34	A
309	5	X=36,488	Y=-39,330	0.50	0.62	A
310	5	X=36,483	Y=-39,332	0.28	0.28	A
311	5	X=36,481	Y=-39,332	0.33	0.32	A
312	5	X=36,479	Y=-39,339	0.40	0.51	C
313	5	X=36,479	Y=-39,337	0.42	0.32	C
314	5	X=36,476	Y=-39,334	0.27	0.29	A
315	5	X=36,476	Y=-39,335	0.28	0.43	A
316	5	X=36,473	Y=-39,341	0.52	0.34	A
317	3	X=36,500	Y=-39,386	0.34	0.24	A
318	3	X=36,497	Y=-39,388	0.58	0.61	A
319	3	X=36,498	Y=-39,404	0.25	0.24	E
320	3	X=36,498	Y=-39,404	0.25	0.33	E
321	3	X=36,496	Y=-39,403	0.36	0.37	E
322	3	X=36,498	Y=-39,405	0.33	0.37	E
323	3	X=36,498	Y=-39,405	0.30	0.17	E
324	3	X=36,497	Y=-39,405	0.30	0.29	E
325	3	X=36,497	Y=-39,406	0.36	0.41	E

番号	調査区	位置		規模(m)		埋土分類
		X座標	Y座標	径	深さ	
326	3	X=36,497	Y=-39,408	0.50	0.35	E
327	3	X=36,496	Y=-39,408	0.85	0.19	E
328	3	X=36,491	Y=-39,399	0.65	0.42	E
329	3	X=36,493	Y=-39,401	0.21	0.28	E
330	3	X=36,492	Y=-39,401	0.26	0.42	E
331	3	X=36,494	Y=-39,403	0.27	0.38	E
332	3	X=36,493	Y=-39,404	0.25	-	E
333	3	X=36,493	Y=-39,404	0.25	0.41	E
334	3	X=36,494	Y=-39,405	0.37	0.22	E
335	3	X=36,494	Y=-39,405	0.23	0.17	E
336	3	X=36,495	Y=-39,405	0.50	0.42	E
337	3	X=36,493	Y=-39,410	0.43	0.36	E
338	3	X=36,494	Y=-39,411	0.30	0.36	E
339	3	X=36,494	Y=-39,412	0.62	0.50	E
340	3	X=36,495	Y=-39,414	0.74	0.34	E
341	3	X=36,491	Y=-39,418	0.65	0.43	C
342	3	X=36,490	Y=-39,417	0.57	0.28	D
343	3	X=36,490	Y=-39,419	0.65	0.21	D
344	3	X=36,488	Y=-39,420	0.34	0.33	D
345	3	X=36,487	Y=-39,422	0.32	0.41	D
346	3	X=36,487	Y=-39,421	0.29	0.75	D
347	3	X=36,487	Y=-39,421	0.29	0.21	D
348	3	X=36,484	Y=-39,412	0.29	0.21	E
349	3	X=36,483	Y=-39,413	0.24	0.32	E
350	3	X=36,482	Y=-39,410	0.56	0.38	E
351	3	X=36,482	Y=-39,408	0.25	-	E
352	3	X=36,482	Y=-39,409	0.27	-	E
353	3	X=36,482	Y=-39,409	0.35	0.23	E
354	3	X=36,482	Y=-39,410	0.40	0.18	E
355	3	X=36,482	Y=-39,409	0.25	0.24	E
536	3	X=36,482	Y=-39,408	0.22	0.19	E
357	3	X=36,484	Y=-39,406	0.25	0.28	E
358	3	X=36,484	Y=-39,406	0.63	0.35	E
359	3	X=36,486	Y=-39,406	0.32	0.60	E
360	3	X=36,487	Y=-39,405	0.25	0.34	E
361	3	X=36,488	Y=-39,402	0.88	0.39	E
362	3	X=36,487	Y=-39,403	0.53	0.24	E
363	3	X=36,487	Y=-39,403	0.56	0.46	E
364	3	X=36,486	Y=-39,402	0.32	0.37	E
365	3	X=36,485	Y=-39,403	0.39	0.25	E
366	3	X=36,484	Y=-39,403	0.56	0.31	E
367	3	X=36,481	Y=-39,403	0.46	0.53	E
368	3	X=36,480	Y=-39,404	0.35	0.33	E
369	3	X=36,479	Y=-39,405	0.38	0.29	E
370	3	X=36,487	Y=-39,396	0.72	0.18	A
371	3	X=36,481	Y=-39,393	0.75	0.42	C
372	3	X=36,480	Y=-39,393	0.62	0.62	C
373	2	X=36,476	Y=-39,417	0.35	0.24	
374	2	X=36,476	Y=-39,416	0.33	0.30	
375	2	X=36,475	Y=-39,417	0.22	0.23	
376	2	X=36,475	Y=-39,417	0.32	0.27	
377	2	X=36,475	Y=-39,418	0.34	0.31	
378	2	X=36,471	Y=-39,413	0.37	0.48	
379	2	X=36,470	Y=-39,409	0.28	0.12	
380	2	X=36,469	Y=-39,409	0.38	0.12	
381	2	X=36,466	Y=-39,415	0.32	0.37	
382	2	X=36,464	Y=-39,412	0.26	0.18	
383	2	X=36,462	Y=-39,412	0.34	0.33	
384	2	X=36,460	Y=-39,416	0.27	0.19	
385	2	X=36,459	Y=-39,414	0.29	0.28	
386	2	X=36,460	Y=-39,412	0.24	0.28	
387	2	X=36,457	Y=-39,413	0.52	0.17	
388	2	X=36,457	Y=-39,413	0.34	0.45	
389	2	X=36,456	Y=-39,412	0.30	0.31	
390	2	X=36,455	Y=-39,414	0.48	0.53	

第3章 検出された遺構と遺物

番号	調査区	位置		規模(m)		埋土分類
		X座標	Y座標	径	深さ	
391	2	X=36,453	Y=-39,517	0.44	0.95	
392	2	X=36,452	Y=-39,515	0.28	0.23	
393	2	X=36,452	Y=-39,513	0.40	0.51	
394	2	X=36,452	Y=-39,410	0.49	0.50	
395	2	X=36,454	Y=-39,408	0.29	0.42	
396	2	X=36,454	Y=-39,409	0.40	0.19	
397	2	X=36,455	Y=-39,408	0.27	0.13	
398	2	X=36,452	Y=-39,403	0.35	0.33	
399	2	X=36,453	Y=-39,400	0.23	0.17	
400	2	X=36,452	Y=-39,399	0.40	0.30	
401	2	X=36,447	Y=-39,398	0.28	0.23	
402	2	X=36,447	Y=-39,398	0.23	0.05	
403	2	X=36,447	Y=-39,401	0.28	0.16	
404	2	X=36,445	Y=-39,403	0.42	0.25	
405	2	X=36,448	Y=-39,406	0.31	0.23	
406	2	X=36,448	Y=-39,408	0.50	0.32	
407	2	X=36,446	Y=-39,408	0.45	0.46	
408	2	X=36,444	Y=-39,407	0.50	0.19	
409	2	X=36,447	Y=-39,410	0.43	0.36	
410	2	X=36,445	Y=-39,417	0.25	0.23	
411	2	X=36,446	Y=-39,420	0.27	0.38	
412	2	X=36,441	Y=-39,418	0.32	0.41	
413	2	X=36,441	Y=-39,418	0.22	0.81	
414	2	X=36,441	Y=-39,411	0.48	0.61	
415	2	X=36,441	Y=-39,410	0.66	0.54	
416	2	X=36,439	Y=-39,416	0.26	0.54	
417	2	X=36,440	Y=-39,410	0.30	0.47	
418	2	X=36,439	Y=-39,405	0.38	0.51	
419	2	X=36,438	Y=-39,419	0.42	0.15	
420	2	X=36,477	Y=-39,422	0.51	0.38	
421	2	X=36,477	Y=-39,423	0.32	0.31	
422	2	X=36,477	Y=-39,424	0.24	0.18	
423	2	X=36,475	Y=-39,427	0.62	0.21	
424	2	X=36,476	Y=-39,429	0.47	0.26	
425	2	X=36,476	Y=-39,429	0.33	0.16	
426	2	X=36,478	Y=-39,428	0.37	0.26	
427	2	X=36,478	Y=-39,429	0.25	0.22	
428	2	X=36,480	Y=-39,428	0.56	0.24	
429	2	X=36,481	Y=-39,428	0.35	0.14	
430	2	X=36,481	Y=-39,430	0.70	0.50	
431	2	X=36,481	Y=-39,430	0.37	0.31	
432	2	X=36,482	Y=-39,430	0.43	0.23	
433	2	X=36,482	Y=-39,431	0.40	0.32	
434	2	X=36,480	Y=-39,431	0.37	0.33	
435	2	X=36,479	Y=-39,431	0.37	0.18	
436	2	X=36,479	Y=-39,431	0.38	0.18	
437	2	X=36,478	Y=-39,431	0.47	0.12	
438	2	X=36,478	Y=-39,431	0.36	0.12	
439	2	X=36,477	Y=-39,432	0.35	0.18	
440	2	X=36,477	Y=-39,434	0.38	0.12	
441	2	X=36,474	Y=-39,436	0.34	0.67	
442	2	X=36,471	Y=-39,435	0.22	0.16	
443	2	X=36,470	Y=-39,435	0.25	0.18	
444	2	X=36,470	Y=-39,434	0.78	0.63	
445	2	X=36,469	Y=-39,434	0.44	0.10	
446	2	X=36,468	Y=-39,433	0.27	0.29	
447	2	X=36,468	Y=-39,435	0.29	0.31	
448	2	X=36,468	Y=-39,435	0.28	0.19	
449	2	X=36,466	Y=-39,437	0.35	0.43	
450	2	X=36,467	Y=-39,437	0.35	0.62	
451	2	X=36,468	Y=-39,437	0.34	0.49	
452	2	X=36,469	Y=-39,437	0.37	0.51	
453	2	X=36,468	Y=-39,438	0.24	0.24	
454	2	X=36,468	Y=-39,438	0.25	0.23	
455	2	X=36,468	Y=-39,438	0.35	0.22	

番号	調査区	位置		規模(m)		埋土分類
		X座標	Y座標	径	深さ	
456	2	X=36,469	Y=-39,439	0.32	0.20	
457	2	X=36,469	Y=-39,439	0.37	0.22	
458	2	X=36,469	Y=-39,440	0.33	0.22	
459	2	X=36,469	Y=-39,440	0.38	0.43	
460	2	X=36,467	Y=-39,441	0.30	0.23	
461	2	X=36,467	Y=-39,441	0.47	0.45	
462	2	X=36,466	Y=-39,440	0.63	0.40	
463	2	X=36,465	Y=-39,442	0.29	0.19	
464	2	X=36,466	Y=-39,442	0.38	0.27	
465	2	X=36,471	Y=-39,443	0.33	0.28	
466	2	X=36,467	Y=-39,445	0.29	0.54	
467	2	X=36,468	Y=-39,445	0.45	0.21	
468	2	X=36,467	Y=-39,447	0.57	0.43	
469	2	X=36,469	Y=-39,449	0.33	0.23	
470	2	X=36,470	Y=-39,449	0.44	0.42	
471	2	X=36,470	Y=-39,454	0.30	0.13	
472	2	X=36,468	Y=-39,462	0.32	0.09	
473	2	X=36,460	Y=-39,457	0.38	0.34	
474	2	X=36,461	Y=-39,454	0.35	0.64	
475	2	X=36,462	Y=-39,451	0.48	0.48	
476	2	X=36,460	Y=-39,447	0.30	0.19	
477	2	X=36,463	Y=-39,445	0.55	0.30	
478	2	X=36,464	Y=-39,443	0.42	0.17	
479	2	X=36,462	Y=-39,442	0.25	0.20	
480	2	X=36,461	Y=-39,433	0.42	0.44	
481	2	X=36,463	Y=-39,434	0.39	0.32	
482	2	X=36,464	Y=-39,433	0.44	0.40	
483	2	X=36,466	Y=-39,427	0.41	0.16	
484	2	X=36,465	Y=-39,424	0.37	0.39	
485	2	X=36,461	Y=-39,427	0.42	0.30	
486	2	X=36,460	Y=-39,426	0.36	0.45	
487	2	X=36,460	Y=-39,423	0.37	0.38	
488	2	X=36,456	Y=-39,426	0.22	0.17	
489	2	X=36,456	Y=-39,427	0.39	0.33	
490	2	X=36,455	Y=-39,428	0.50	0.25	
491	2	X=36,454	Y=-39,426	0.42	0.17	
492	2	X=36,453	Y=-39,425	0.25	0.18	
493	2	X=36,452	Y=-39,426	0.48	0.59	
494	2	X=36,452	Y=-39,427	0.32	0.14	
495	2	X=36,453	Y=-39,428	0.34	0.18	
496	2	X=36,453	Y=-39,428	0.32	0.28	
497	2	X=36,451	Y=-39,434	0.36	0.22	
498	2	X=36,450	Y=-39,437	0.42	0.35	
499	2	X=36,459	Y=-39,440	0.25	0.06	
500	2	X=36,457	Y=-39,441	0.26	0.28	
501	2	X=36,455	Y=-39,441	0.36	0.35	
502	2	X=36,454	Y=-39,444	0.31	0.59	
503	2	X=36,454	Y=-39,444	0.70	0.38	
504	2	X=36,451	Y=-39,446	0.52	0.46	
505	2	X=36,455	Y=-39,447	0.47	0.52	
506	2	X=36,457	Y=-39,446	0.62	0.46	
507	2	X=36,455	Y=-39,449	0.32	0.32	
508	2	X=36,454	Y=-39,449	0.43	0.58	
509	2	X=36,453	Y=-39,449	0.65	0.49	
510	2	X=36,450	Y=-39,454	0.30	0.39	
511	2	X=36,450	Y=-39,450	0.26	0.17	
512	2	X=36,450	Y=-39,424	0.35	0.15	
513	2	X=36,448	Y=-39,436	0.28	0.17	
514	2	X=36,448	Y=-39,436	0.28	0.19	
515	2	X=36,448	Y=-39,437	0.54	0.16	
516	2	X=36,446	Y=-39,439	0.33	0.23	
517	2	X=36,447	Y=-39,440	0.62	0.33	
518	2	X=36,450	Y=-39,455	0.44	0.23	
519	2	X=36,441	Y=-39,421	0.33	0.51	
520	2	X=36,440	Y=-39,424	0.40	0.50	

番号	調査区	位置		規模(m)		埋土分類
		X座標	Y座標	径	深さ	
521	2	X=36,440	Y=-39,426	0.32	0.47	
522	2	X=36,440	Y=-39,426	0.20	0.19	
523	2	X=36,438	Y=-39,449	0.67	0.30	
524	2	X=36,438	Y=-39,449	0.23	-	
525	2	X=36,432	Y=-39,430	0.35	0.33	
526	2	X=36,429	Y=-39,432	0.55	0.21	
527	2	X=36,427	Y=-39,433	0.45	0.45	
528	2	X=36,427	Y=-39,420	0.30	0.13	
529	2	X=36,426	Y=-39,424	0.34	0.20	
530	2	X=36,424	Y=-39,438	0.54	0.35	

第52表 掘立柱建物一覧表

遺構番号	調査区	位置		規模(m、本)							桁行方向	所属時期/備考
		X座標	Y座標	桁行長	桁行間	梁行長	梁行間	柱穴数	柱穴径	柱穴深さ		
1	2	X=36,451~36,456	Y=-39,409~39,415	3間 4.40	2.20	2間 3.30	1.65	9	0.28~0.45	0.17~0.46	N-69°-W	古代か 総柱建物(東柱を有する)
2	2	X=36,445~36,450	Y=-39,410~39,416	3間 5.10	2.35 2.75	2間 3.00	1.45 1.55	7	0.28~0.50	0.12~0.32	N-82°-W	古代か 総柱建物(東柱を有する)

第53表 井戸一覧表

番号	調査区	位置		上面形状	断面形状	規模(m)			重複遺構	所属時期/備考
		X座標	Y座標			上面径	縦坑径	深さ		
1	6	X=36,538	Y=-39,274	円形	漏斗状	3.80	2.10			近世
2	5	X=36,492	Y=-39,316	円形	漏斗状	2.10	0.86	(1.60)		近世
3	5	X=36,517	Y=-39,357	円形	漏斗状	2.00	0.90	(1.20)		近世/旧60号土坑
4	5	X=36,505	Y=-39,336	円形	漏斗状	—	1.15	(2.00)	2号溝(4井→2溝)	中・近世/旧137号土坑
5	5	X=36,520	Y=-39,329	—	—	—	1.24	1.74	2号溝(5井→2溝)	中・近世/旧136号土坑
6	6	X=36,518	Y=-39,287	—	—	—	1.14	1.46	3号溝(6井→3溝)	中・近世/旧135号土坑
7	2	X=36,447	Y=-39,400	円形	縦形	1.07	—	1.57		近世/旧186号土坑

第3章 検出された遺構と遺物

第54表 溝一覧表

番号	調査区	位置		規模(m)			走向方向	重複遺構/交差溝	所属時期/備考	
		X座標	Y座標	長さ	上面幅	底面幅				深さ
1	5・6	X = 36,509 ~ 36,544	Y = 39,329 ~ 39,293	58.00	2.20 ~ 1.10	0.50	0.25 ~ 0.66	南北—東西— —南西	134号土坑	近世以降 南端は8号溝と接続
2	5・6	X = 36,466 ~ 36,550	Y = 39,345 ~ 39,320	88.50	3.00 ~ 4.50	0.35 ~ 0.45	1.20 ~ 1.50	南北	2号住居、4・5号井戸、8号溝	近世以降
3	6	X = 36,499 ~ 36,537	Y = 39,293 ~ 39,283	56.00	3.00 ~ 4.00	1.30	0.80 ~ 1.10	南北	10号土坑、6号井戸	近世以降
4	6	X = 36,512 ~ 36,524	Y = 39,275 ~ 39,272	12.40	0.60	0.40	0.27	南北	31号土坑	近世以降
5	6	X = 36,508 ~ 36,517	Y = 39,282 ~ 39,279	9.30	0.40	0.30	0.09	南北	1・25・26号土坑	近世以降 6号溝と同一の可能性あり
6	6	X = 36,518 ~ 36,527	Y = 39,278 ~ 39,274	9.20	0.70	0.30	0.30	南北	29・30号土坑	近世以降 5号溝と同一の可能性あり
7	5	X = 36,519 ~ 36,530	Y = 39,326 ~ 39,318	14.00	0.35		0.07	南北—南西		時期不明
8	5	X = 36,511 ~ 36,368	Y = 39,510 ~ 39,333	35.20	0.93	0.50	0.30	ほぼ東西	49 ~ 51号土坑、2号溝	近世以降 東端は1号溝、西端は9号溝と接続
9	3・4	X = 36,504 ~ 36,512	Y = 39,339 ~ 39,375	36.40	0.90	0.50	0.34	東西	52・53号土坑、8・12号溝	時期不明
10	4	X = 36,461 ~ 36,510	Y = 39,370 ~ 39,369	49.80	1.80	0.50 ~ 0.70	0.25 ~ 0.40	南北 (弧状)	9・13号溝	近世以降 北端は8号溝、11号溝に接続
11	3	X = 36,506 ~ 36,509	Y = 39,370 ~ 39,381	10.80	1.00	0.70	0.13	東西	12号溝	近世以降 東端は10号溝と接続
12	2・3	X = 36,439 ~ 36,511	Y = 39,393 ~ 39,376	75.20	2.40	0.50 ~ 0.70	1.30	南北	9・11・13・15・24号溝	近世以降 南端付近で20号溝と接続
13	3・4	X = 36,462 ~ 36,505	Y = 39,352 ~ 39,385	52.50	1.50	0.50	0.40	北西から 南東	10・12号溝	近世以降
14	2・3	X = 36,436 ~ 36,497	Y = 39,450 ~ 39,403	74.80	0.70	0.30	0.42	北東から 南西	3・13・14・17号住居、107・128・129号土坑、20・22・24 ~ 26号溝	近世以降
15	3	X = 36,469 ~ 36,493	Y = 39,381 ~ 39,392	25.00	1.00	0.50	0.23	南南東	12号溝	近代
16	3	X = 36,501 ~ 36,504	Y = 39,383 ~ 39,386	5.50	0.80		0.20	北西から 南東	65・66号土坑、13号溝	近世以降
17	6	X = 36,543 ~ 36,544	Y = 39,232 ~ 39,237	5.00	(1.30)		0.74	東西	4号住居・18号溝	近世以降
18	6	X = 36,540 ~ 36,544	Y = 39,236 ~ 39,237	4.20	0.60		0.08	南北	17号溝	時期不明
19	2 ~ 4	X = 36,425 ~ 36,507	Y = 39,423 ~ 39,367	110.70	0.40		0.17	南東—南西	174・179号土坑、10・12・13・20・23・24号溝	時期不明
20	2	X = 36,439 ~ 36,441	Y = 39,395 ~ 39,453	58.50	2.70	0.80	1.10	東西	8・10号住居、14・19・22・23・24号溝	近世以降 東端は12号溝と接続
21	2	X = 36,417 ~ 36,420	Y = 39,437 ~ 39,442	7.00	21-A 1.60 21-B 2.00	21-A 0.60 21-B 1.00	21-A 0.70 21-B 0.80	北西から 南東	21-A・Bの2本の溝が重複	近世以降?
22	2	X = 36,421 ~ 36,469	Y = 39,431 ~ 39,461	57.50	3.20	0.90	0.95	北西から 南東	19・21号住居、14・20・24号溝	近世以降?
23	2	X = 36,438 ~ 36,464	Y = 39,399 ~ 39,391	27.70	1.50	0.50	0.58	南北	19・20・24号溝	近世以降
24	2	X = 36,443 ~ 36,456	Y = 39,453 ~ 39,378	78.30	0.40 ~ 0.70	0.30 ~ 0.50	0.30	北東から 南西—東西	10号住居、12・14・19・22・23号溝	時期不明
25	2	X = 36,475 ~ 36,474	Y = 39,450 ~ 39,410	39.80	0.70 ~ 0.90	0.30	0.46	東西	25・28・29号住居、183号土坑、14号溝	近世以降?
26	2	X = 36,474 ~ 36,472	Y = 39,453 ~ 39,406	46.75	0.70 ~ 1.50	0.45 ~ 1.00	0.25	東西	20・29号住居、14号溝	時期不明

第4章 自然科学分析

自然科学分析の対象としたのは、23号住居出土の銅製容器である。この銅製容器は、住居のカマド右袖脇の床面から底部を下にやや傾いた状態で出土した遺物である。銅製容器の内面全体をほぼ一周するように赤黒い部分がリング状に存在し、さらにその上位にもやや薄目の色調となる暗褐色部分が一部に存在していることから、容器内面に付着した何らかの内容物の付着物である可能性が考えられた。この状況は、出土時の傾いた状態により、赤黒いリング状の部分が水平になるような状態にあったものと想定された。一方、この23号住居は、床面付近の埋土中に多くの炭化材が確認されていることや、床面の一部が被熱により焼土化していること等から焼失住居の可能性が高く、銅製容器の外面にも炭化物のような黒色の物質が斑状に付着している。なお、住居の時期は、出土土器から8世紀第3四半期と考えられることから、銅製容器も同時期の遺物と想定されていた。

以上の考古学的観察・視点をより明確にするため、銅製容器の材質の成分分析、内面付着物に対する内面黒色部の由来推定分析、内面黒色部と外面付着物に対する放射性炭素年代測定を株式会社加速器分析研究所に委託した。結果は、以下の通りである。

向矢部遺跡出土銅製容器の自然科学分析

1 分析の概要と試料採取・試料名称

(1) 分析の概要

この銅製容器について、銅の材質を確認するための成分分析、内面黒色部の由来を推定する分析、そして内面黒色部と外面の付着物による放射性炭素年代測定を実施した。銅の材質分析は蛍光X線分析によって行われた。内面黒色部の由来推定は、顕微鏡観察、エネルギー分散型蛍光X線分析装置を備えた可搬形走査電子顕微鏡による元素分析(SEM-EDS分析)、赤外分光分析、炭素・窒素安定同位体比及び総炭素量・総窒素量分析の結果を総合して検討した。年代測定は加速器質量分析(AMS)法を用いた。

(2) 試料採取と試料の名称

内面の2種類の黒色部と外面より、炭素・窒素安定同位体比及び総炭素量・総窒素量分析と年代測定用の試料採取が行われた。内面黒色部のうち、赤黒いリング状の部分から採取された試料を試料1、その上位にある暗褐色の部分から採取された試料を試料2、外面から採取された試料を試料3とした。内面の試料は付着が極めて薄く、採取が困難であった。外面の試料は比較的厚く付着した部分を選んで採取することができた。その後、顕微鏡観察と写真撮影を行った上で、内面黒色部のSEM-EDS分析、赤外分光分析に用いる試料が試料1、2の部位から採取された。これらの試料名は、分析方法の違いに関わらず統一的に用い、採取を行った部位についても同様に記載している。

以下、銅の成分分析、内面黒色部の由来推定、放射性炭素年代測定の順に記述する。顕微鏡観察は分析全体に関わるが、主に内面黒色部の由来推定を目的に行われたため、その項で記載する。

2 銅の成分分析

(1) 試料

はじめに全体の状態を肉眼と顕微鏡で観察した。容器の表面は全体的に錆に覆われているため、今回の成分分析のためにわずかに破損している口縁部の一部を削り、地金を露出させていた。しかし、この部位を分析に用いるためには、装置の特性上、脆弱な口縁部を下にすることになることなど、諸条件を考慮した結果、底部外面を選んで分析を実施することとなった。

(2)分析方法

蛍光X線分析によって銅の成分を分析する。この方法はサンプリングが困難な文化財の材質調査に広く用いられている手法であり、エネルギー分散型装置は、試料を破壊せずに元素情報を引き出せるため多用される。表面分析法であるため、遺物表面の状況に大きく左右されるが、遺物保存の観点から考えれば、外観上の変化を伴わない本分析法は遺物の構成元素を知るためには極めて有効な手法となる。

調査に用いた装置は、セイコーインスツルメンツ(株)製エネルギー分散型蛍光X線分析装置(SEA2120L)である。本装置は下面照射型の装置であり、X線管球はRh、コリメーターサイズは10mmφである。本調査における測定条件は結果とともに図1に記す。

得られた特性X線スペクトルは元素定性を実施した後、FP法(ファンダメンタルパラメーター法)を用いたスタンダードレス分析により定量演算を行い、相対含有率(wt%)を求めた。但し、算出された結果は半定量的なものであるため、結果の評価には注意する必要がある。

(3)分析結果と所見

結果を図1に示す。検出された元素はCu(銅)、As(ヒ素)、Ag(銀)、Bi(ビスマス)であり、Sn(錫)やPb(鉛)は認められない。FP法による定量結果によれば、銅が97%とほとんどを占める。本結果は、緑青などの腐食生成物の上から測定を行った結果であるが、表面クリーニングを行って口縁部に銅色の地金が露出している点も含めれば、銅製容器は青銅製ではなく銅製と見て良い。

砒素、銀といった元素も少量含まれるが、これらは青銅から検出されることが多い元素である。主に粗銅に含まれ、精錬によって減少することが報告されており(佐々木, 1998)、原料鉱石からの精錬過程で除去しきれていない不純元素と捉えられる。

今回の分析結果を考えると、容器の材質は、純度の比較的高い銅であったと考えられる。銅は延性が高く、叩き出しによって、薄い金属製品を作れることから、出土した容器の形状からみても妥当と言える。

3 内面黒色部の由来推定

(1)試料

上述の通り、内面は全体的に錆に覆われている。その中で全体をほぼ一周する帯状の赤黒い部分とそこから採取した試料を試料1、その上位にあるやや薄い暗褐色の部分とそこから採取した試料を試料2とする。

(2)分析方法

①顕微鏡観察

観察は、放射性炭素年代測定等の試料が採取された後に行った。まず、全体を概観し、写真撮影を行った。その状態を見て精査する場所を決めた。精査するにあたって、写真撮影を行う際に、遺物を不自然な状態で置き固定する必要があるため、脆弱な箇所を曲げないように、撮影箇所の選択には注意した。撮影は、マクロレンズを装着し、リングフラッシュを用いて撮影した。マイクロスコープによる精査では、色の濃い部分(試料1)と、色の薄い部分(試料2)およびその境界部分を、年代測定試料採取などで傷が付いていない場所を中心に観察、撮影した。撮影は、キーエンス製のVHX-1000を用いた。

②SEM-EDS分析

微量採取した内面付着物を水平試料載台にカーボン両面テープで固定し、エネルギー分散型蛍光X線分析装置(JED-2300)を備えた日本電子製可搬形走査電子顕微鏡(JCM-5700)により、元素分析を実施した。なお、分析は加速電圧20kV、低真空モード(30Pa)で行い、図中に示した領域における元素情報を得た。測定条件の詳細は分析結果とともに図2に記した。

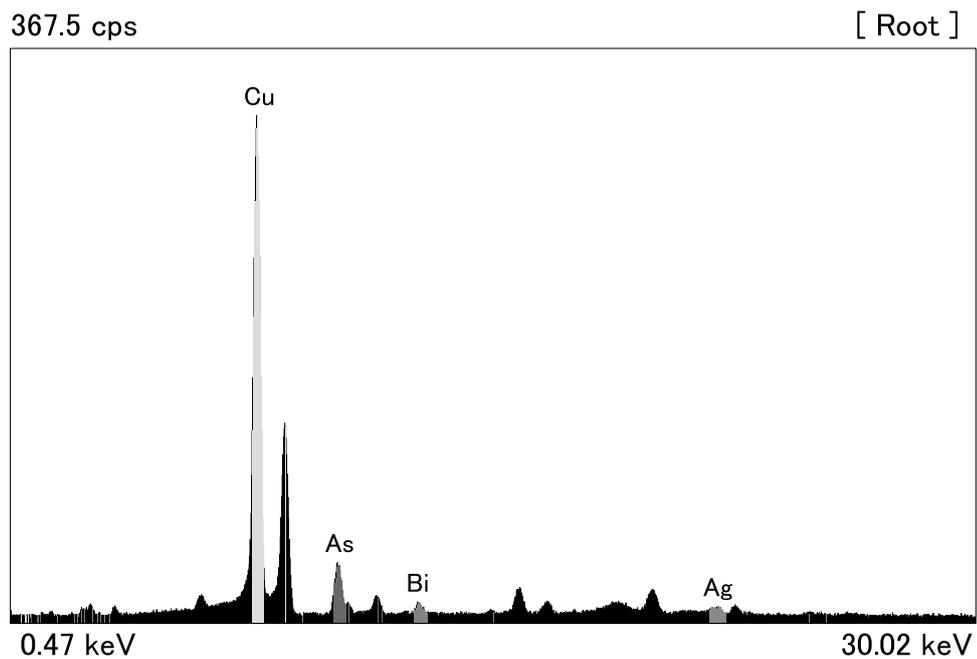
③赤外分光分析

微量採取した内面付着物をダイヤモンドエクスプレスにより加圧成型した後、顕微FT-IR装置(サーモエレクトロン(株)製Nicolet Avatar 370,Nicolet Centaurus)を利用し、測定を実施した。なお、赤外線吸収スペクトルの測定は、

[測定条件]

測定装置	SEA2120L
管球ターゲット元素	Rh
測定時間(秒)	300
有効時間(秒)	213
コリメータ	φ10.0mm
励起電圧(kV)	50
管電流(μA)	3
フィルター	なし
マイラー	OFF
雰囲気	大気

[X線スペクトル]



[定量結果]

Cu	96.58(wt%)	2468.389(cps)
As	2.80(wt%)	37.678(cps)
Ag	0.18(wt%)	2.635(cps)
Bi	0.45(wt%)	3.463(cps)

図1. 蛍光X線分析結果

作成した試料を鏡下で観察しながら測定位置を絞り込み、アパーチャでマスクングした後、透過法で測定した。得られたスペクトルはベースライン補正などのデータ処理を施した後、吸光度(ABS)で表示し、測定条件及び各種補正処理の詳細については、FT-IRスペクトルと共に図3、4に示した。

④炭素・窒素安定同位体比及び総炭素量・総窒素量分析

試料1、2が採取され、以下の手順で化学処理、測定を行った。

メス・ピンセットを使い、目視で土等の付着物を取り除く。次に、酸-アルカリ-酸(AAA:Acid Alkali Acid)処理により不純物を化学的に取り除く。その後、超純水で中性になるまで希釈し、乾燥させる。AAA処理における酸処理では、通常1 mol/l (1M)の塩酸(HCl)を用いる。アルカリ処理では水酸化ナトリウム(NaOH)水溶液を用い、0.001Mから1Mまで徐々に濃度を上げながら処理を行う。今回は試料量が微量であること等から、0.001Mまでとした。この試料をスズコンテナに封入し、超高純度酸素とともにEA(ガス化前処理装置:Thermo Fisher Scientific社製 Flash EA1112)内の燃焼炉に落とし、スズの酸化熱を利用して1000℃の高温で試料を燃焼・ガス化させ、酸化触媒で完全酸化させる。680℃の還元カラムで窒素酸化物を還元し、水を過塩素酸マグネシウムでトラップ後、45℃の分離カラムでN₂とCO₂を分離する。この時、TCDで各々検出し、総炭素量、総窒素量を求める(表1)。分離したN₂とCO₂はそのままHeキャリアガスとともにインターフェースを通して質量分析計に導入する。

安定同位体分析は、質量分析計(Thermo Fisher Scientific社製 DELTA V)を使用し、炭素の安定同位体比($\delta^{13}C$)と窒素の安定同位体比($\delta^{15}N$)を測定する。 $\delta^{13}C$ の測定ではIAEAのSucrose ANUを、 $\delta^{15}N$ の測定ではN1を標準試料とする。

(3)分析結果と所見

①顕微鏡観察

図版1に遺物全体の写真を、図版2～4に顕微鏡による拡大像を示す。以下に試料1、試料2の各部分における観察結果を述べる。

試料1は容器全体にリング状に付着する。幅が厚い箇所、薄い箇所、色調が濃い箇所、不明瞭な箇所などさまざまであるが、色調が濃く明瞭な場所での最大幅は2cm程度である。典型的な場所では、赤黒色であるが(写真8など)、境界付近を拡大しても段差はほとんどないことから、極めて薄い層が付着しているか、もしくは銅の表面部分に変質した可能性を示している。表面は0.05mm程度の不規則で細かな突起が覆っている(写真11、12)。写真では、先端部が白く丸く見えるが、これは機器のリング照明が反射してハレーションを起こしているためで、実際は同色である。このように個々の粒子は赤黒色の物質でコーティングされたような部分が多いが、一部鉱物の微粒子が見える。このことから、表面の突起は、表面に付着した土壌粒子であると考えられ、経年変化により、基質の中に取り込まれたような状態になっていると思われる。また、写真1～7でわかるように、試料1は赤黒色であるのに対し、底の部分は青緑色をしているため、境界は明瞭である。写真9に境界部の拡大写真を載せたが、これでも境界部分は明瞭に分かれている。下部が白みがかって見えるのは、露光条件を試料1の方に合わせたためで、本来の色は写真1～7で見られる青緑色である。ただし、底の部分にも土壌、鉱物等の不純物が多く付着し、その多くは試料1と同様基質と癒着している。

試料2は、容器の縁の一部に見られる暗褐色の部分で、試料1と比べると色調が薄い。試料1がやや赤みがかっているのに対し、試料2はやや青い。写真1～3にみられるように、全体として見ると両者の境界は明瞭だが、写真13、14のように拡大して見ると両者の質感は似ており、基質の色調も漸移的で明瞭ではない。

試料2も試料1と同様シルト粒子の付着が見られ、基質と癒着した状態が認められる。試料2と試料1の違いは、基質の色調の違い以外に、斑点状に1mm以下の白みがかった部分が点在することがあげられる。このような構造は、試料1でも見られるが、試料2の方が斑点が多い。写真ではかなり白みがかって見えるが、これは周辺の暗い部分を見やすくするため光量を上げているからであり、実際には青緑色に近い。これらの斑点は、銅の炭酸塩化合物(緑青)に由来すると思われる。

このように、試料1、試料2は、何らかの物質が付着して周辺から浮き上がっているような状態ではなく、銅表面が

変質し、付着したシルト粒などの不純物が癒着した状態のように見える。また、両者ともに1mm前後の緑青のような斑点が見られることなどから、試料1、試料2は付着物ではなく、銅の表面に土壌などの不純物などが混じって変質したものとも考えられる。試料1と試料2の色調の違いは、容器の表面に付着した土壌の成分、主に炭素などの有機物の違いに起因するか、もしくは、銅酸化物の色調の違い(CuOは黒く、Cu₂Oは赤みがかかる)などが複合していると思われる。また、後述する化学分析の結果により煤などの炭化物付着の可能性が指摘されるが、表面の観察の状況から極めて薄く、かつ銅表面の錆層と融合している状況が考えられる。なお、試料1と底面との境目は明瞭である。底面は青緑色をしており、銅の炭酸塩化合物(緑青)に由来すると思われる。

②SEM-EDS分析

結果を図2に示す。試料1から検出された元素は、C(炭素)、O(酸素)、Fe(鉄)、Cu(銅)、As(砒素)、Al(アルミニウム)、Si(ケイ素)、Ca(カルシウム)である。試料2もほぼ同様であるが、Fe(鉄)は認められず、Ag(銀)が検出されている。取得した元素情報から、どちらの試料も緑青(検出元素:C、O、Cu)を多く含み、土壌等の鉱物(検出元素:Si、Al、Ca、O)も混じることが確認されるが、黒色の要因となるような元素を明確には把握できない。可能性として考えられるのは炭素が鉄であるが、鉄は試料2では確認されていない点から炭素がより有力となる。但し、炭素は緑青の構成元素でもあるため、今回の元素分析では黒色となる原因の特定は出来ない。

③赤外分光分析

FT-IRスペクトルを図3、4に示す。顕微装置下では、両試料には緑青や鉱物片が多く、黒色物質はこれらの表面に薄く付着した状況にある。黒色物質そのものを対象に測定を実施することは難しい状況から、本分析では緑青に付着した黒色物質(黒色部分A)と緑青部分(B)においてスペクトルを取得し、両者の差スペクトル(A-B)によって黒色物質の赤外線吸収特性を評価する。試料1、2の差スペクトル(A-B)における赤外線吸収特性は、3400cm⁻¹付近の幅広く強い吸収帯と、1580cm⁻¹、1400cm⁻¹付近の吸収帯によって特徴付けられる。試料1では1050cm⁻¹付近にも吸収が認められるが、本吸収は珪酸塩鉱物におけるSi-O基の伸縮振動である。

なお、試料1、2の差スペクトル(A-B)を自社スペクトルデータベースでサーチした結果では、炭化材とマッチング率が高い結果が得られている。図中最下段に炭化材の実測スペクトルを比較資料として掲げたが、ほぼ同じ波数域に特性吸収が見られ、スペクトルパターンもほぼ一致することが確認される。SEM-EDSによる元素分析結果では、黒色物質の元素を特定することは出来ていないが、FT-IRによる赤外線吸収特性によれば、銅製容器の内面付着物は試料1、2とも炭化材に類似した特性を有する。どちらも内面に薄く付着する状況にあることより、炭粉あるいは煤などに由来する可能性が挙げられる。ただし、炭化以前の物質がどのようなものであったのかまでは言及できない。

④炭素・窒素安定同位体比及び総炭素量・総窒素量分析

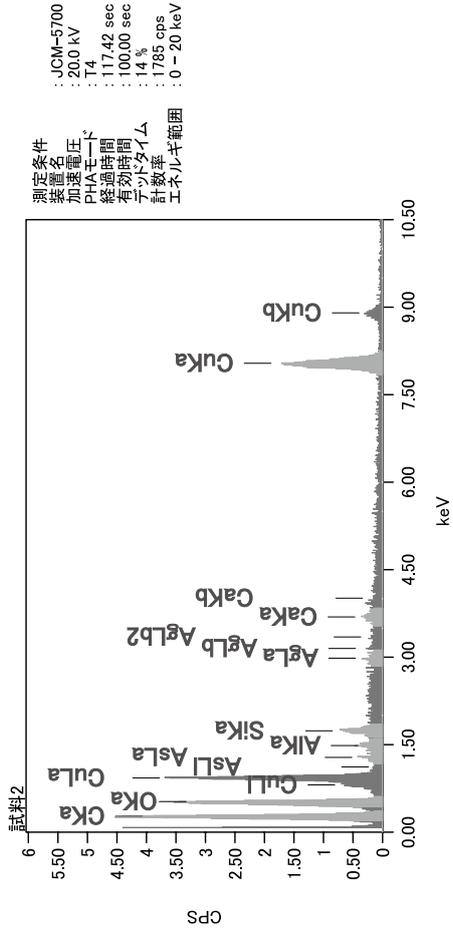
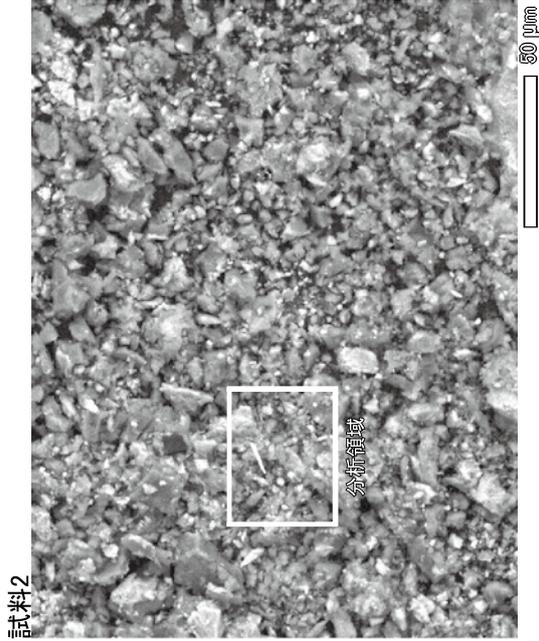
分析結果を表1に示す。この分析手法は、主に動植物など有機物の分析に用いられ、特に考古学の分野では土器付着物の由来や人骨を用いた食性の復元等に用いられており、そういった参照データが比較的充実している(赤澤ほか、1993、吉田、2006等)。以下それらのデータを参照しつつ、結果に検討を加える。

試料1の $\delta^{13}C$ は-20.9‰で、C₃植物より若干高く、海産物に近い。 $\delta^{15}N$ は6.19‰で、C₃植物やそれらを食べる草食動物の中では高い範囲、海産物としては低い範囲に位置する。総炭素量は17.4%と動植物としては低い値と見られる。総窒素量は検出限界以下であった。

試料2の $\delta^{13}C$ は-22.8‰で、C₃植物の中では比較的高い範囲に位置する。 $\delta^{15}N$ は8.17‰で、C₃植物の範囲より若干高く、海産物の範囲に重なる。総炭素量は58.1%と動植物としては妥当な値と見られる。総窒素量は1.85%で、動植物の範囲ではやや低いほうと見られる。C/N比を算出すると31.4で、C₃植物の中でも高い範囲に含まれる。

参照データが豊富な動植物を中心に検討するとこのように考えられ、特定の種類に絞り込むのが難しい。他方、土壌のデータ(米山、1987)を参照すると、今回の測定結果に重なるものが認められる。土壌の値は土質や地域などによって異なるため、単純な比較はできないが、顕微鏡による観察結果も合わせて考えると、試料に土壌等が含まれる可能性も

タイトル	: 試料2
装置	: JCM-5700
加速電圧	: 20.00 kV
倍率	: x 600
画像	: 反射電子立体像



タイトル	: 試料1
装置	: JCM-5700
加速電圧	: 20.00 kV
倍率	: x 600
画像	: 反射電子立体像

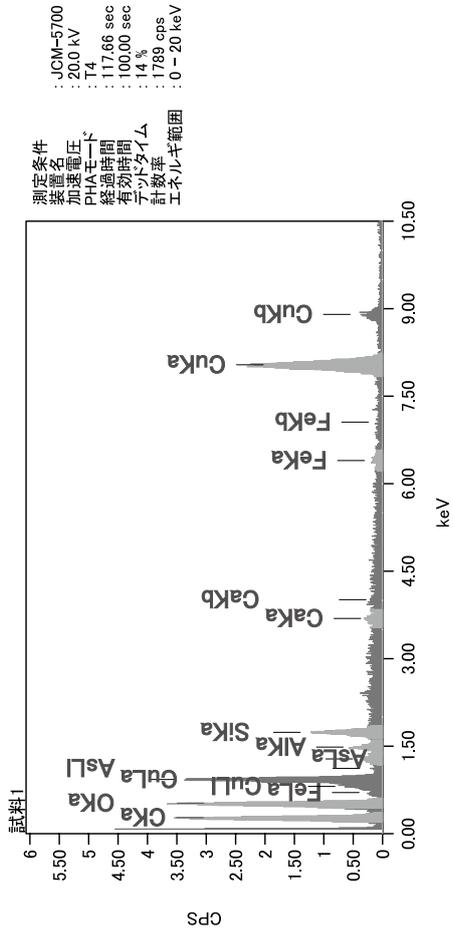
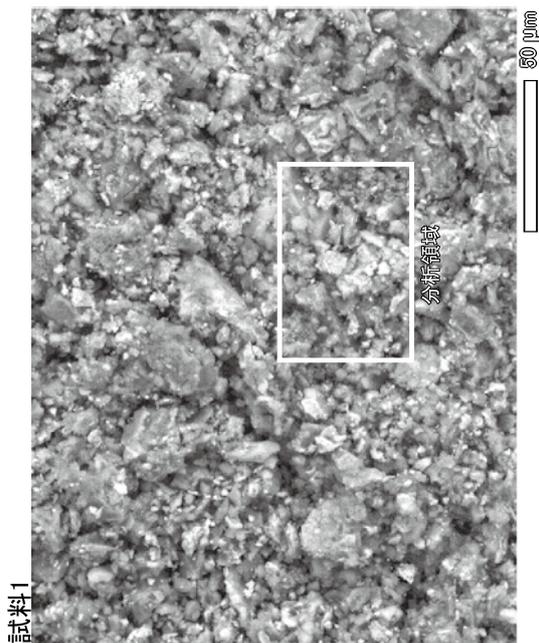


図2. 内面付着物の元素分析結果

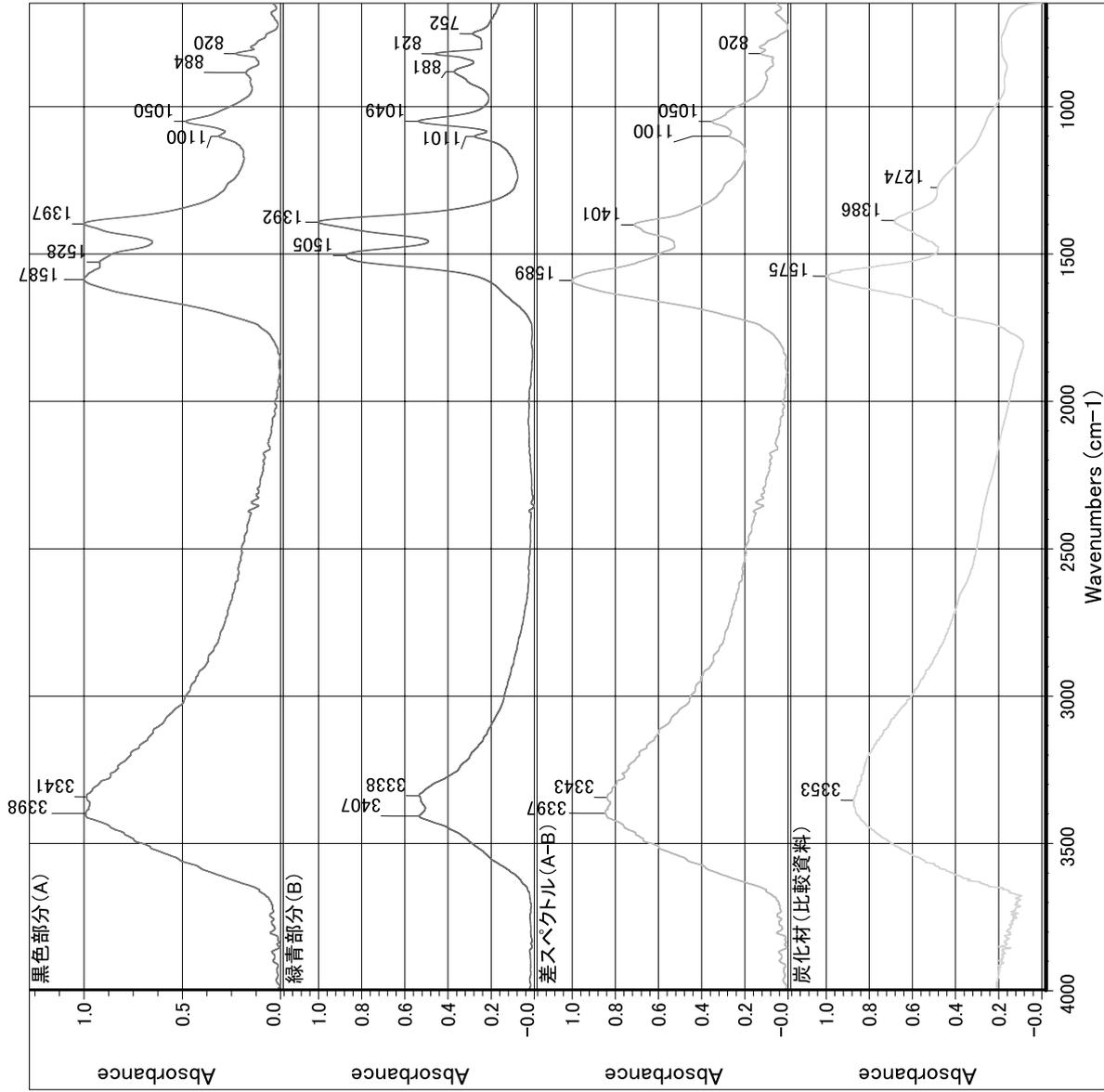


図3. 試料1のFT-IRスペクトル

測定情報

サンプルスキャン回数: 64
 バックグラウンドスキャン回数: 64
 分解能: 4,000
 サンプルゲイン: 8.0
 ミラー速度: 1.8988

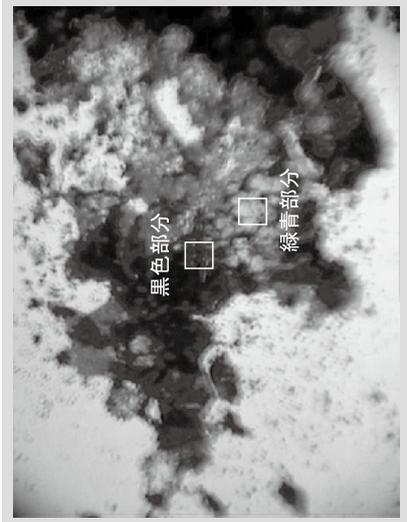
光学系の構成

検出器: MCT/A
 ビームスプリッタ: KBr
 光源: IR

備考

ダイヤモンドエクスプレス成型
 顕微透過法
 可変アパーチャ使用
 オートベースライン補正
 スムージング処理
 Y軸正規化

可視像



測定情報
 サンプルスキャン回数: 64
 バックグラウンドスキャン回数: 64
 分解能: 4,000
 サンプルゲイン: 8.0
 ミラー速度: 1.89988

光学系の構成

検出器: MCT/A
 ビームスプリッタ: KBr
 光源: IR

備考

ダイヤモンドエクスプレス成型
 顕微透過法
 可変アパーチャ使用
 オートベースライン補正
 スムージング処理
 Y軸正規化

可視像

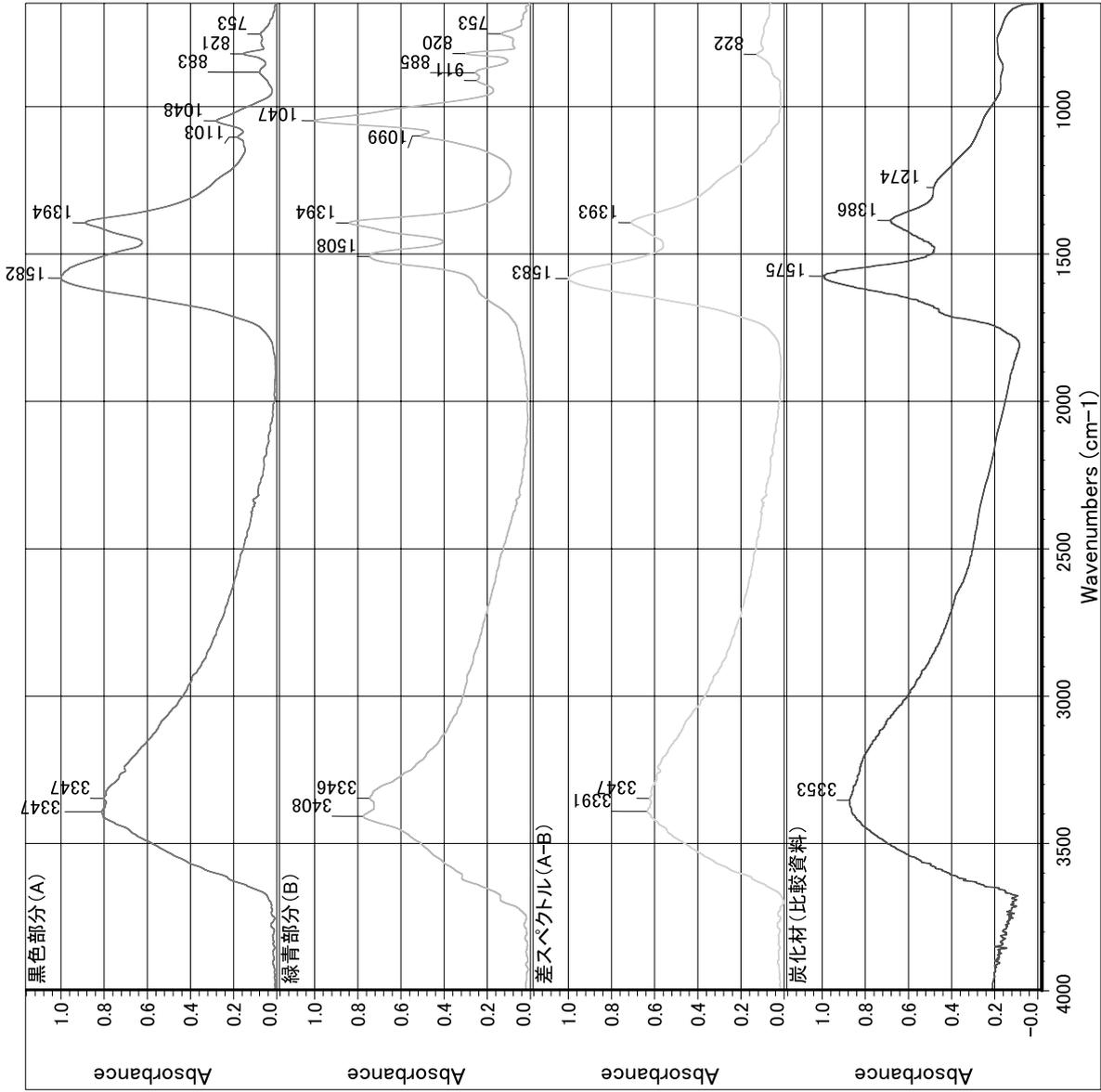
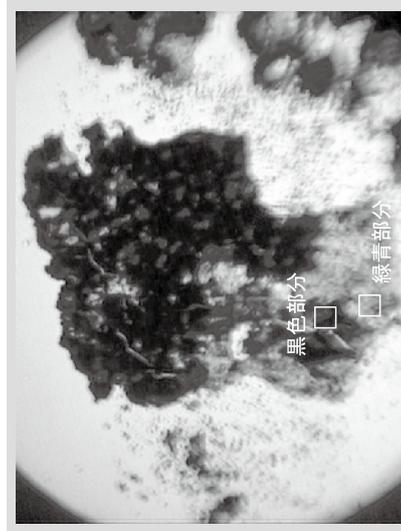


図4. 試料2のFT-IRスペクトル

検討する必要がある。

このように、試料が動植物に由来する有機物である可能性を中心に検討したが、試料1、2とも明確にどのような有機物であるか特定するには至らなかった。由来となる物質が単一ではなく、複合している可能性も考えられる。

表1

試料名	$\delta^{13}\text{C}$ (‰) (MASS)	$\delta^{15}\text{N}$ (‰) (MASS)	総炭素量(%)	総窒素量(%)	C/N比
試料1	-20.9	6.19	17.4	検出限界以下	-
試料2	-22.8	8.17	58.1	1.85	31.4

注) $\delta^{15}\text{N}$ については、窒素量が少なく適正出力を得られなかったため、約1.97‰の補正をかけている。±0.6‰程度の誤差が予想される。

⑤各種分析結果のまとめ

内面黒色部は、顕微鏡観察によると銅の表面に土壌粒子等が付着して変質したと見られる状況が観察され、試料1と試料2の違いが生じる原因として、基質の色の違い、緑青の状態の違い、付着した不純物の違いなどが指摘される。また、その表面に極めて薄く認められる黒色の部分については、SEM-EDS分析で炭素に由来する可能性が示され、さらに赤外分光分析で炭化材に類似する結果が示されたことから、炭粉や煤が付着した可能性が考えられる。炭素・窒素安定同位体比及び総炭素量・総窒素量分析の結果も、これらの検討結果に矛盾するものではない。このように、内面黒色部の由来は単純ではなく、複合的に考える必要がある。

なお、黒色の原因が炭素である場合、銅製容器が出土した遺構が焼失住居跡と考えられること、さらに内面黒色部のうち赤黒い色調が明瞭に観察される試料1のリング状の分布が、出土時の傾きに関係するあり方を示すことを考慮すると、内面黒色部の形成に住居焼失時の火災に伴う煤等が関与したことが一つの可能性として考えられる。

4 放射性炭素年代測定(AMS測定)

(1)試料

試料は内面から採取された試料1、外面から採取された試料3である。試料1は極めて薄い付着物を微量採取した。試料3は比較的付着の厚い部分を選び、粉状の黒色物質を採取した。

(2)分析方法

化学処理、測定、算出は以下の手順で行われた。

①化学処理工程

- 1)メス・ピンセットを使い、目視で土等の混入物を取り除く。
- 2)酸-アルカリ-酸(AAA: Acid Alkali Acid)処理により不純物を化学的に取り除く。その後、超純水で中性になるまで希釈し、乾燥させる。AAA処理における酸処理では、通常1 mol / ℓ (1M)の塩酸(HCl)を用いる。アルカリ処理では水酸化ナトリウム(NaOH)水溶液を用い、0.001Mから1Mまで徐々に濃度を上げながら処理を行う。
- 3)試料を燃焼させ、二酸化炭素(CO₂)を発生させる。
- 4)真空ラインで二酸化炭素を精製する。
- 5)精製した二酸化炭素を鉄を触媒として水素で還元し、グラファイト(C)を生成させる。
- 6)グラファイトを内径1mmのカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、測定装置に装着する。

②測定方法

加速器をベースとした¹⁴C-AMS専用装置(NEC社製)を使用し、¹⁴Cの計数、¹³C濃度(¹³C / ¹²C)、¹⁴C濃度(¹⁴C / ¹²C)の測定を行う。測定では、米国立標準局(NIST)から提供されたシュウ酸(HOxII)を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

③算出方法

- 1) $\delta^{13}\text{C}$ は、試料炭素の ^{13}C 濃度($^{13}\text{C} / ^{12}\text{C}$)を測定し、基準試料からのずれを千分偏差(‰)で表した値である(表2)。AMS装置による測定値を用い、表中に「AMS」と注記する。
- 2) 14C年代(Libby Age: yrBP)は、過去の大気中 ^{14}C 濃度が一定であったと仮定して測定され、1950年を基準年(0 yrBP)として遡る年代である。年代値の算出には、Libbyの半減期(5568年)を使用する(Stuiver and Polach, 1977)。14C年代は $\delta^{13}\text{C}$ によって同位体効果を補正する必要がある。補正した値を表2に、補正していない値を参考値として表3に示した。14C年代と誤差は、下1桁を丸めて10年単位で表示される。また、14C年代の誤差($\pm 1\sigma$)は、試料の14C年代がその誤差範囲に入る確率が68.2%であることを意味する。
- 3) pMC (percent Modern Carbon)は、標準現代炭素に対する試料炭素の ^{14}C 濃度の割合である。pMCが小さい(^{14}C が少ない)ほど古い年代を示し、pMCが100以上(^{14}C の量が標準現代炭素と同等以上)の場合Modernとする。この値も $\delta^{13}\text{C}$ によって補正する必要があるため、補正した値を表2に、補正していない値を参考値として表3に示した。
- 4) 暦年較正年代とは、年代が既知の試料の ^{14}C 濃度を元に描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の ^{14}C 濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。暦年較正年代は、14C年代に対応する較正曲線上の暦年代範囲であり、1標準偏差($1\sigma = 68.2\%$)あるいは2標準偏差($2\sigma = 95.4\%$)で表示される。グラフの縦軸が14C年代、横軸が暦年較正年代を表す。暦年較正プログラムに入力される値は、 $\delta^{13}\text{C}$ 補正を行い、下一桁を丸めない14C年代値である。なお、較正曲線および較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、暦年較正年代の計算に、IntCal09データベース(Reimer et al., 2009)を用い、OxCalv4.1較正プログラム(Bronk Ramsey, 2009)を使用した。暦年較正年代については、特定のデータベース、プログラムに依存する点を考慮し、プログラムに入力する値とともに参考値として表3に、グラフを図5に示した。暦年較正年代は、14C年代に基づいて較正(calibrate)された年代値であることを明示するために「cal BC/AD」(または「cal BP」)という単位で表される。

(3)測定結果と所見

試料1は、化学処理の過程4)において、回収された二酸化炭素の量から試料に含まれる炭素に相当する量を確認したところ0.11mgであった。この重量では年代測定に必要な炭素量に達していないため、追加の採取を検討したが、試料1の黒色部は非常に薄く、付着物として採取できる量は限られている。さらに、燃焼させた試料全体の重量2.02mgに占める炭素相当量(0.11mg)が約5%で、植物等に由来する通常の炭化物(50~70%程度となることが多い)に比べて極めて低い値であることから、年代測定に適した炭化物とは言いがたいことなどを考慮した結果、年代測定を行わないこととした。なお、ここで示された試料1の炭素相当量と、別の分析による試料1の総炭素量(表1)とは一致しない。これらはほぼ同じ場所から採取しているが、別の機会に採取されたため、厳密には同一試料でないことによると考えられる。

試料3の14C年代は 1300 ± 20 yrBP、暦年較正年代(1σ)は668~765cal ADの間に3つの範囲で示される。この年代値は、出土土器から考えられる8世紀第3四半期という時期を含み、おおむね整合的な結果と考えられる。なお、試料3の燃焼された試料全体に占める炭素相当量は約69%で、木炭等の炭化物として妥当な値である。

表2

測定番号	試料名	採取場所	試料形態	処理方法	δ 13C (‰) (AMS)	δ 13C補正あり	
						Libby Age (yrBP)	pMC (%)
IAAA-111207	試料3	銅製杓外面付着物	炭化物	AAA	-21.03±0.39	1,300±20	85.04±0.22

[#4609]

表3

測定番号	δ 13C補正なし		暦年較正用 (yrBP)	1 σ 暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲
	Age (yrBP)	pMC (%)			
IAAA-111207	1,240±20	85.73±0.21	1,302±20	668calAD - 694calAD (39.5%) 701calAD - 707calAD (5.6%) 748calAD - 765calAD (23.0%)	662calAD - 723calAD (64.4%) 740calAD - 771calAD (31.0%)

[参考値]

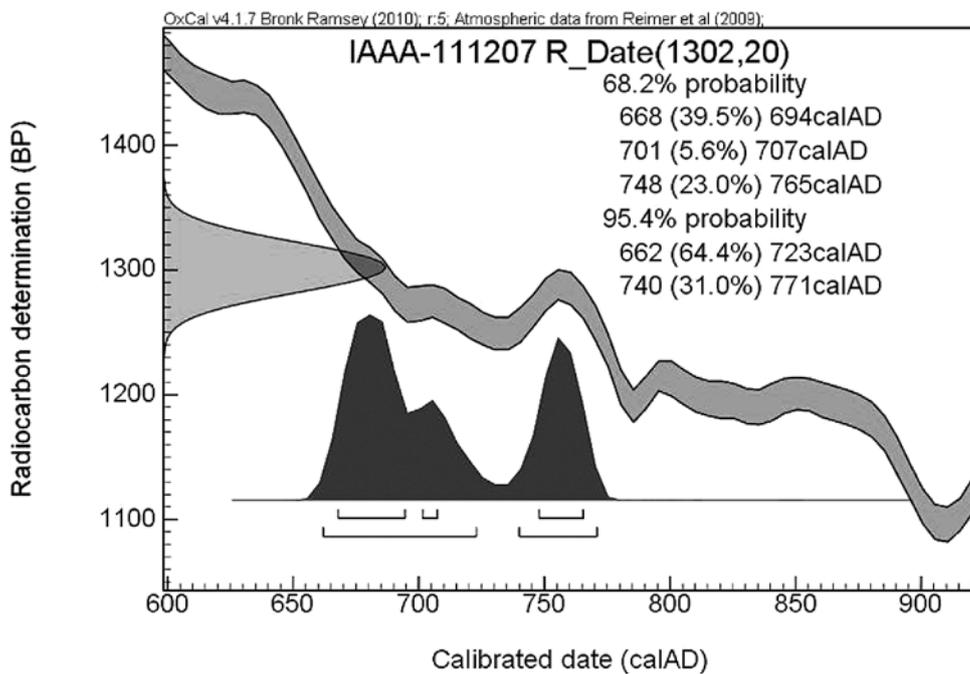
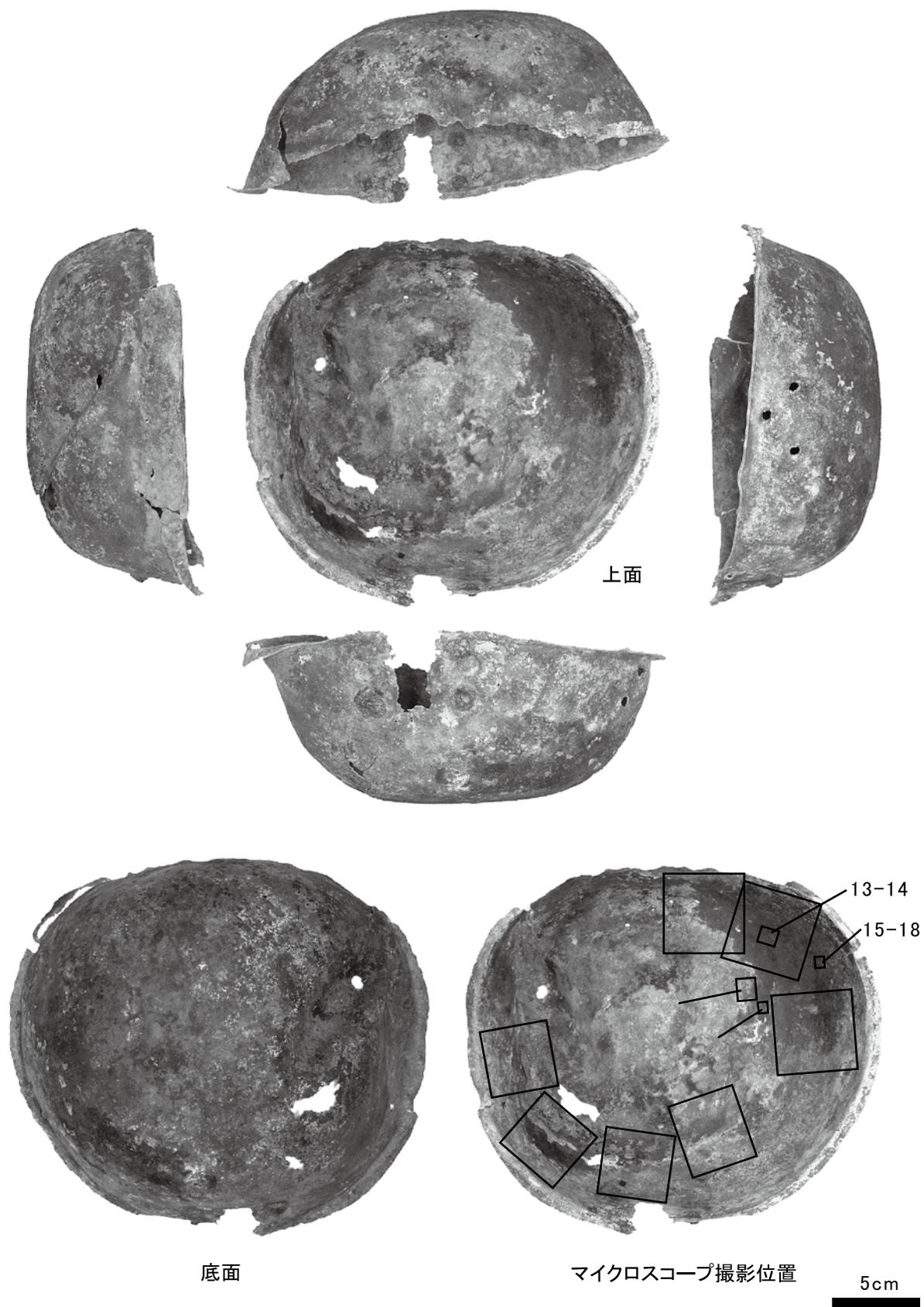


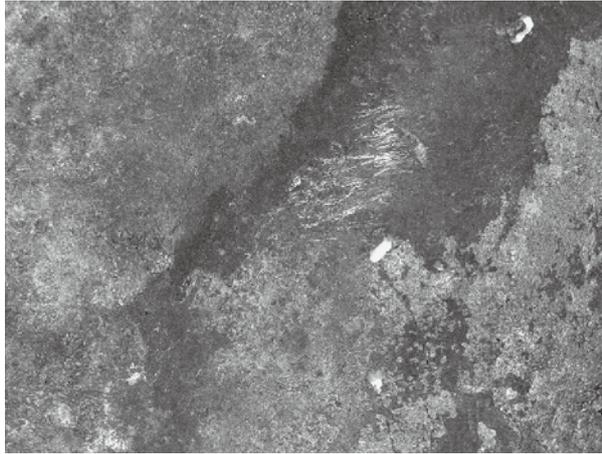
図5 暦年較正年代グラフ (参考)

引用文献

Bronk Ramsey C., 2009, Bayesian analysis of radiocarbon dates, Radiocarbon 51 (1), 337-360.
 Reimer P. J. et al., 2009, IntCal09 and Marine09 radiocarbon age calibration curves, 0-50,000 years cal BP, Radiocarbon 51 (4), 1111-1150.
 Stuiver M. and Polach H. A., 1977, Discussion: Reporting of 14C data, Radiocarbon 19 (3), 355-363.
 赤澤威・米田穰・吉田邦夫, 1993, 北村縄文人骨の同位体食性分析, 中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書11 -明科町内- 北村遺跡((財)長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書14), (財)長野県埋蔵文化財センター, 445-468.
 佐々木稔, 1998, 遺構・遺物から推定される銅精錬法, 季刊考古学, 62, 36-39.
 山田富貴子, 1986, 赤外線吸収スペクトル法, 機器分析のてびき第1集. 化学同人, 1-18.
 米山忠克, 1987, 土壌-植物系における炭素、窒素、酸素、水素、イオウの安定同位体自然存在比: 変異、意味、利用, 日本土壤肥科学雑誌, 58 (2), 252-268.
 吉田邦夫, 2006, 煮炊きして出来た炭化物の同位体分析, 新潟県立歴史博物館研究紀要 7, 51-58.

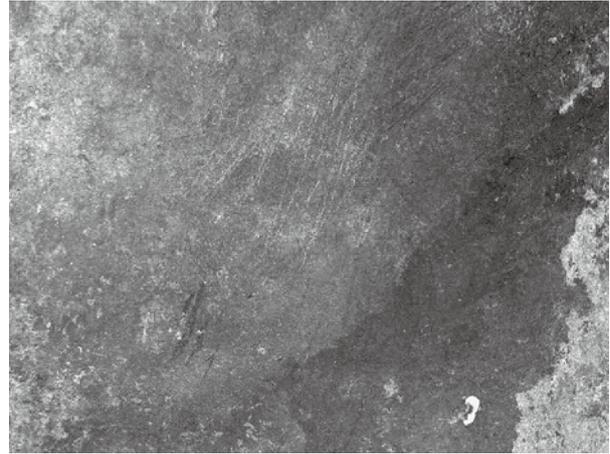


図版2 金属製品観察(2)



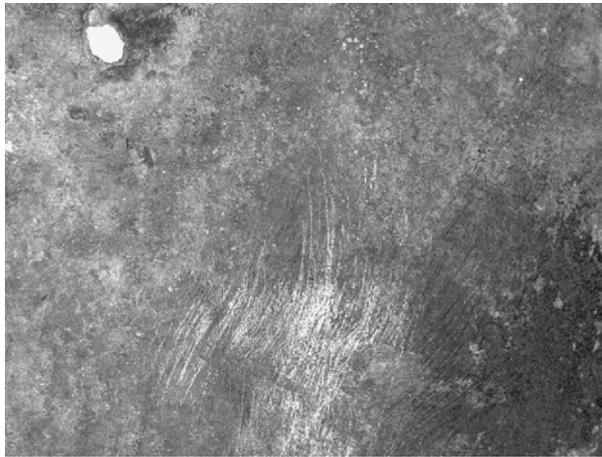
1.表面の状況

1cm



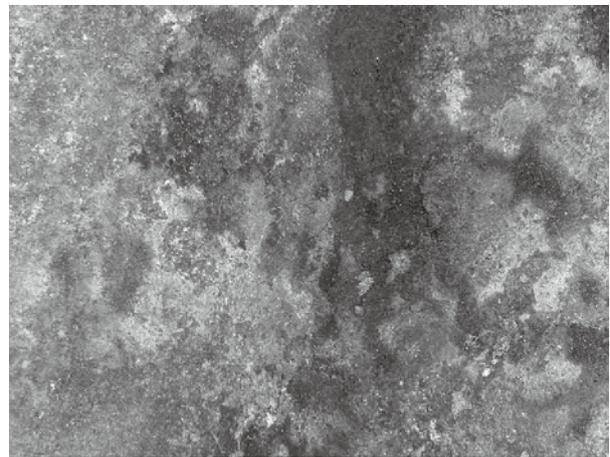
2.表面の状況

1cm



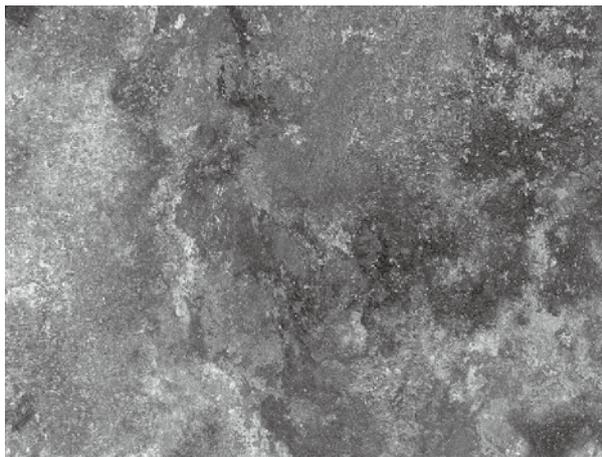
3.表面の状況

1cm



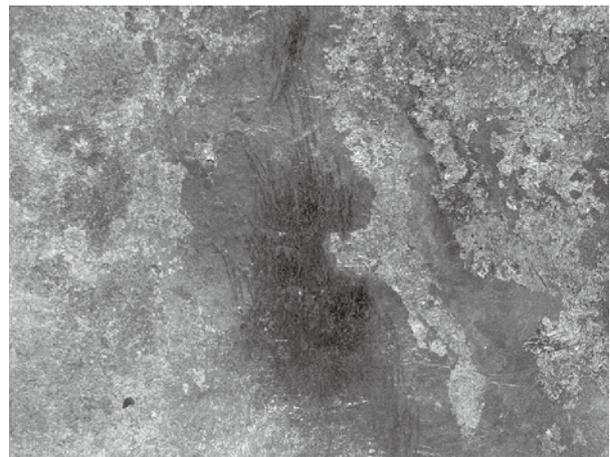
4.表面の状況

1cm



5.表面の状況

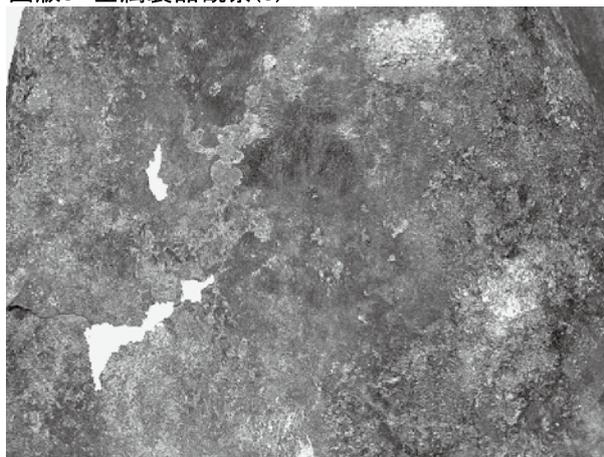
1cm



6.表面の状況

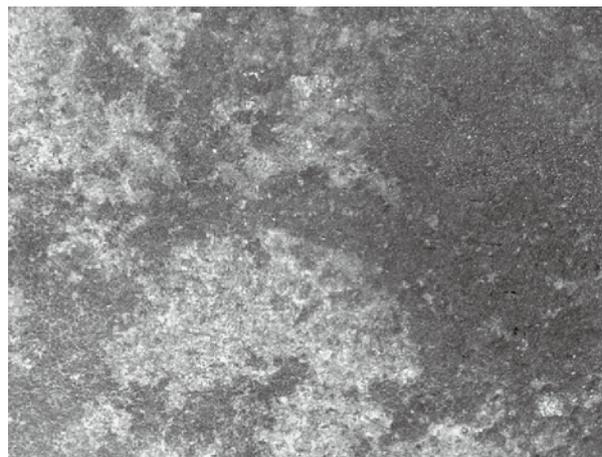
1cm

図版3 金属製品観察(3)



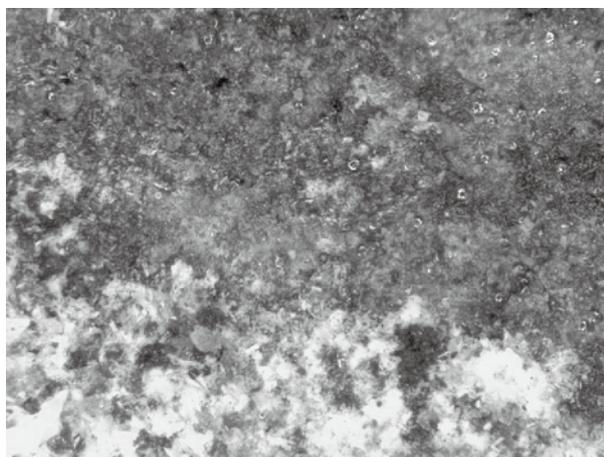
7.表面の状況

1cm



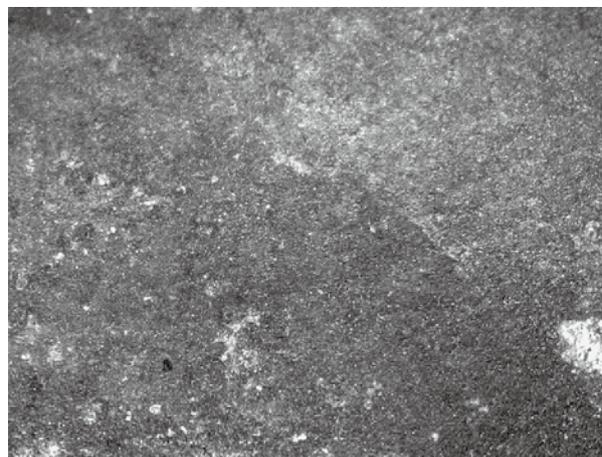
8.試料1の境界

1mm



9.試料1の境界(拡大)

0.5mm



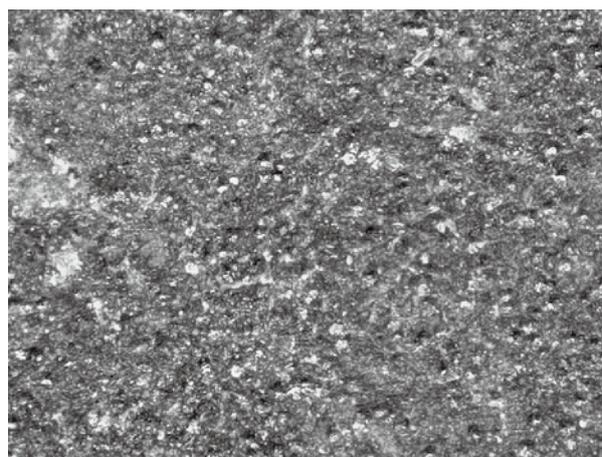
10.試料1の拡大

1mm



11.試料1の拡大(通常)

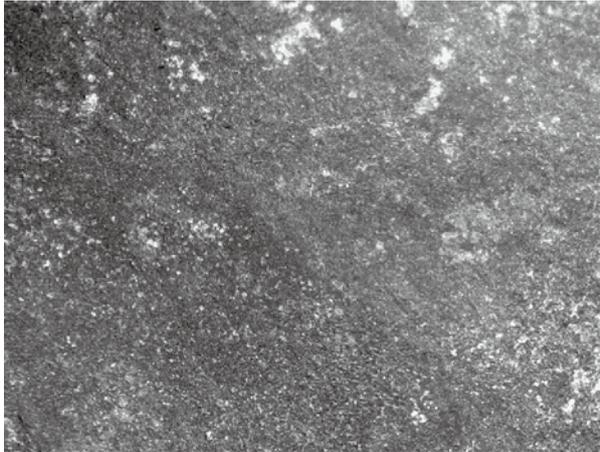
0.5mm



12.試料1の拡大(合成像)

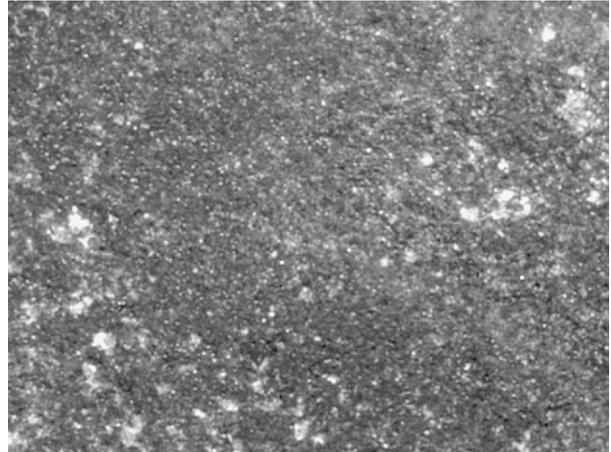
0.5mm

図版4 金属製品観察(4)



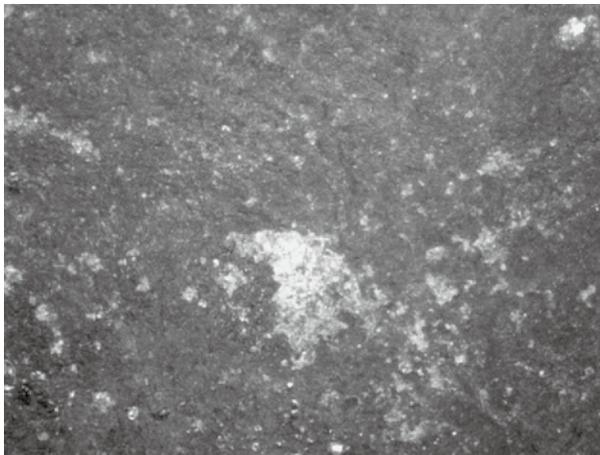
13.試料1と2の境界

1mm



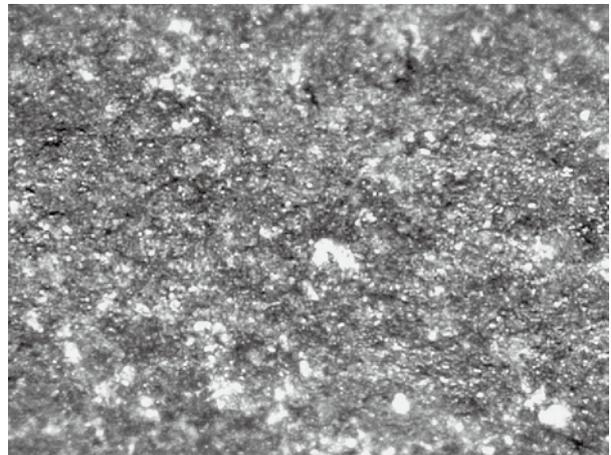
14.試料1と2のの境界

1mm



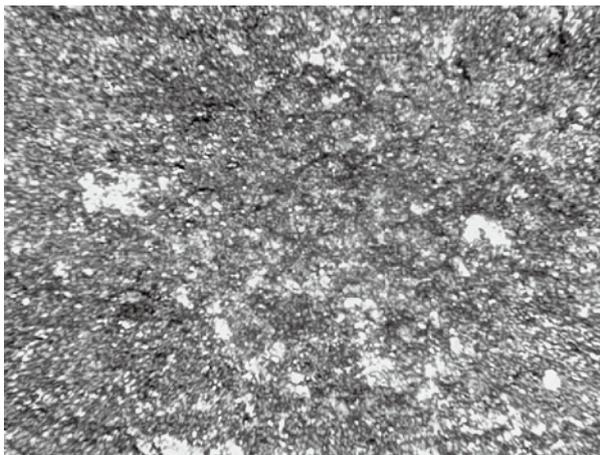
15.試料2の状況

1mm



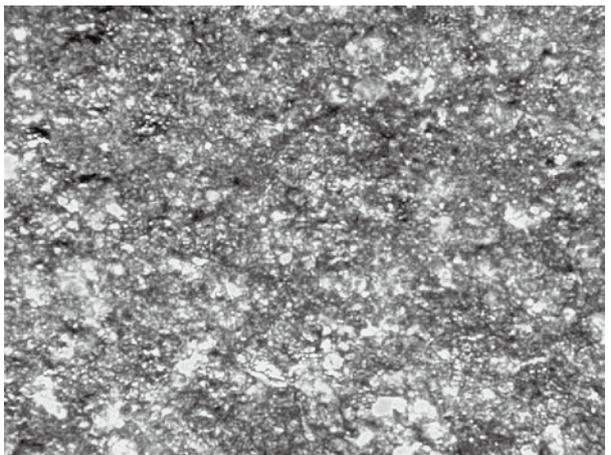
16.試料2の拡大(通常)

0.5mm



17.試料2の拡大(合成像)

0.5mm



18.試料2の拡大(合成像)

0.5mm

第5章 調査の成果（総括）

第1節 23号住居出土の 銅製容器について

本調査において、23号住居から多くの土器類と共に銅製容器が出土していることは、先述の通りである。本県におけるこの種の銅製容器は初例であり、全国的にも数例が知られるのみで、その実態は殆ど不明な状況にある。本項では、この銅製容器についての詳細な検討を加え、今後の研究の進展を図りたい。

（1）出土した住居の概略と出土状況

住居の概要

銅製容器を出土した23号住居は、長辺5.12m、短辺3.84m、壁高30cm、床面積17.81㎡を測る縦長方形を呈し、床面は平坦で、周溝が検出されている。床面付近には、炭化物および小炭化材が多く出土し、床面の中央やや西側には、被熱による焼土化した部分が検出されていることから、焼失住居の可能性が高い。カマドは東壁の中央南寄りに位置し、両袖部は住居内に張り出し、燃焼部は住居内から壁の外側に、さらに煙道部が外側へ突出する。カマドの焚き口天井部には3個体の甕を連結させた状態で出土、燃焼部にも1個体の甕が正位で出土する等、残存状況は極めて良好。貯蔵穴はカマドの右側で、住居の南東隅に位置する。

住居内での遺物の出土は、カマド周辺に多く集中し、特にカマド前・右側における出土状態が極めて良好であった。また、完形品に近い土器が多いのも特徴で、土器以外には鉄斧がある。

住居の年代は、出土土器から8世紀第3四半期と考えられる。

銅製容器の出土状況

銅製容器は、カマドの右袖脇の床面から僅かに傾いた（正位に近い）状態で出土しており、銅製容器と接するように甕と共に出土した。この出土位置は、カマド右袖と貯蔵穴との僅かな間であり、置かれていた原位置を保っているものと考えられる。

（2）銅製容器の観察

銅製容器の観察は、以下の通りである。

- 1) 銅製容器は、口端部の一部を欠くが、ほぼ完形。外径22cm、内径20cm、高さ7.5cm程で、口縁部は外側に1cmほど屈曲し、底部は丸底を呈している。器厚は極めて薄く、総じて1mm程で、重量は272.7g（錆を含む）と軽い。なお、一部に歪みをもつ。
- 2) 容器の内面全体をほぼ一周するように赤黒い部分がリング状に存在し、さらにその上位にもやや薄い色調の暗褐色部分が一部に存在していることから、容器内面に付着した何らかの内容物の可能性が考えられた。しかも、この状況は、出土時の傾いた状態により、赤黒いリング状の部分が水平になるような状態にあったものと想定された。さらに、外面には炭化物（木炭）が付着している。
- 3) 側面には、先ず6個の鉋留め箇所（左右の上下は鉄鉋で4個、左右の中央は銅鉋で2個）、上部を頂点とした三角形状に3孔を有し（径5mm、内面から外面へ雑に穿つ）、さらに細い銅鉋留め（1個残存）が確認できる。
- 4) 6個の鉋留め箇所には、その中央が大きく縦長の長方形に破損が認められる。また、この部分の口縁部は屈曲せず、むしろ直立ぎみとなっている。
- 5) 内面の3孔部周辺には、径1.5cm程の凹凸状の痕跡が横方向に浅く連続的に連なっている状況が数段みられる。X線写真（PL. 51）でも、側面および底面に器厚の厚みに濃淡が臙氣に確認でき、敲打による叩き出しの可能性をもつ。
- 6) 表面クリーニングにより、口縁部の一部に見られる地金は、鮮やかな銅色を見せている。

（3）自然科学分析結果から観た銅製容器

先の第4章に、分析の報告を掲載しているが、再度要約しておく。

〈銅の成分分析〉

蛍光X線分析による結果、検出された成分元素はCu（銅）、As（ヒ素）、Ag（銀）、Bi（ビスマス）であり、Sn（錫）

やPb（鉛）は認められず、FP法による定量結果では銅が97%を占める。つまり、青銅製ではなく銅製ということになる。

また、容器の材質は、純度の高い銅であったことから、叩き出しによる製法で薄い仕立てに製作されたことは、容器の表面に残る連続した凹凸からしても妥当となる。

〈内面黒色部の由来推定〉

内面黒色部は、顕微鏡観察によると銅の表面に土壌粒子等が付着して変質したと見られる状況が観察され、試料1と試料2の違いが生じる原因として、基質の色の違い、緑青の状態の違い、付着した不純物の違いなどが指摘された。また、その表面に極めて薄く認められる黒色の部分については、SEM-EDS分析で炭素に由来する可能性が、赤外分光分析で炭化材に類似する結果が示されたことから、炭粉や煤が付着した可能性が考えられる。さらに、炭素・窒素安定同位体比及び総炭素量・総窒素量分析の結果も、これらの検討結果に矛盾するものではなかった。

以上の分析結果から、黒色の原因が炭素である場合、銅製容器が出土した遺構が焼失住居と考えられること、さらに内面黒色部のうち赤黒い色調が明瞭に観察される試料1のリング状の分布が、出土時の傾きに関係するあり方を示すことを考慮すると、内面黒色部の形成に住居焼失時の火災に伴う煤等が関与したことが一つの可能性として考えられる。

〈放射性炭素年代測定(AMS測定)〉

容器外面に付着した炭化材(試料3)の14C年代は1300±20yrBP、暦年較正年代(1σ)は668～765cal ADの間に668～694calAD(39.5%)、701～707calAD(5.6%)、748～765calAD(23.0%)の3つの範囲が示された。なお、この炭化材は、住居の焼失に伴い付着したものと考えられる。

住居内での遺物の出土状況および焼失住居という点からしても銅製容器が住居に伴う遺物であり、出土した土器から8世紀第3四半期の時期を与えることができる。このことを踏まえると、測定値は土器年代を含むやや古い年代値といえよう。

(4)類例

類例を調べるにあたっては、毛利光俊彦氏から茨城県武者塚古墳の例の存在をご教授いただいた(註1)。類例には、以下のものがある。

茨城県武者塚古墳出土例(第168図1)

昭和61年に刊行された報告書(註2)に、「青銅製鉄柄付杓」として記述されている。

武者塚古墳は、土浦市(旧新治郡新治村)上坂田に所在し、昭和58年に発掘調査が行われた。直径23m程の円墳で、主体部は雲母片岩板石を用いた地下式両袖型箱形横穴式石室。玄室に6体分の人骨が確認され、2号人骨の頭髪(みづら)が著名。副葬品は前室からで、最終埋葬に伴ったとされる装飾大刀や銀製带状金具、青銅製鉄柄付杓があり、7世紀後半とされる。

この青銅製鉄柄付杓は、全長45.6cmを測る完形品で、容器本体と鉄製の柄からなる。本体は最大径(口径)19.6cm、高さ8.3cm、厚さ2mm程で、口辺部は幅1cm程で外折する。柄の左側に近くには、幅3.2cmで、外方に1cm程突き出す片口をもつ。本体の所々には槌の痕跡が残るといふ。また、全体に歪みが認められる。柄は長さ28.6cm、幅1.4cm、厚さ4mmで、先端を6cm程下方へ折り曲げている。本体との接合部は不整五角形を呈し、3箇所を青銅製の鉾で外面から留めている。柄には所々に布片の付着が認められ、仔細な観察から带状の布を巻き付けていたことが判明しているとの記述がある。

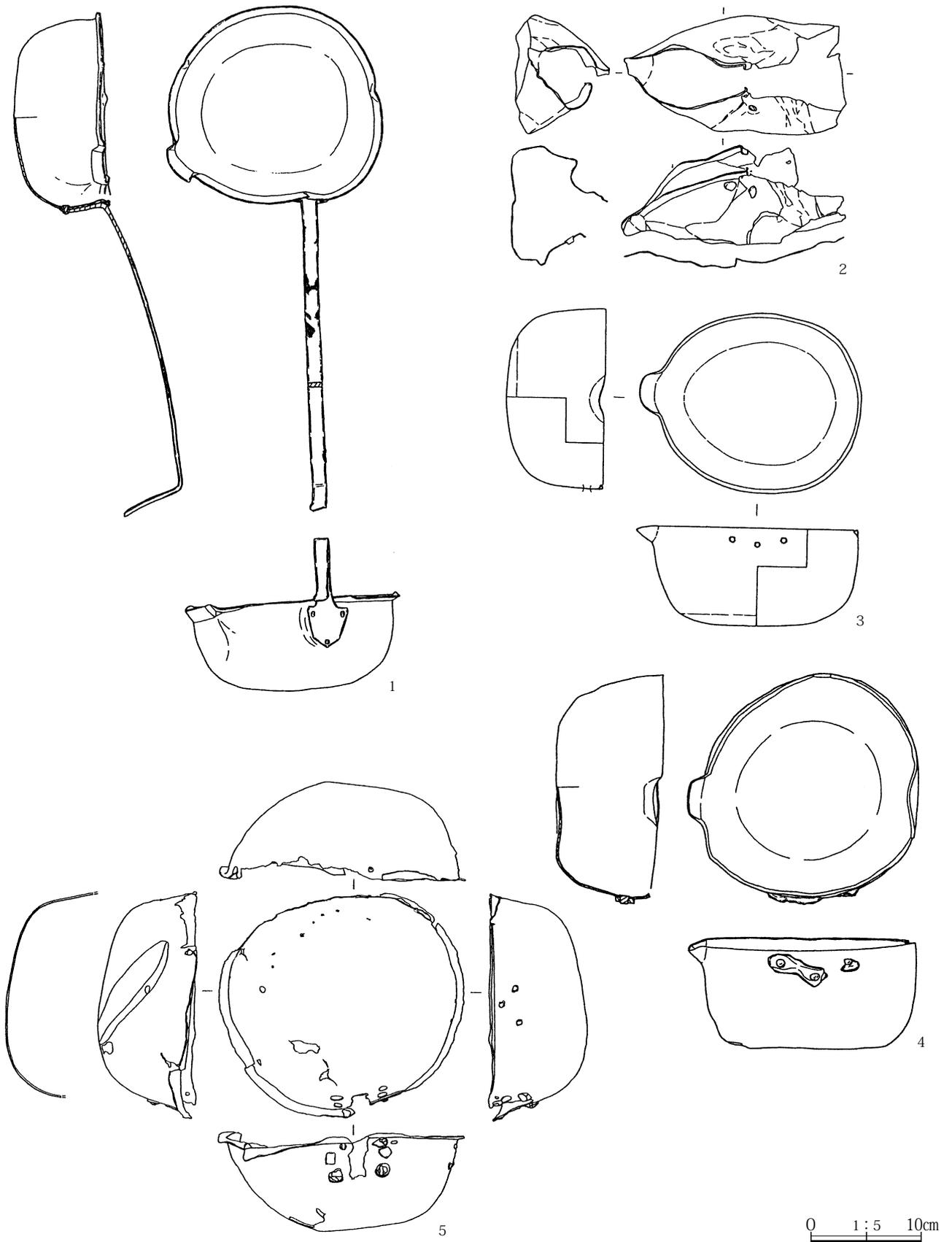
また、報告では、山口県見島ジーコンボ116号墳出土例と千葉県花前I遺跡40号住居出土例を示し、片口の存在や底部形態から、柄香炉・火熨斗とは一線を画するとし、その機能面から「杓」としている。さらに、本品が後世の「長柄銚子」に系譜的に発展していくとの指摘をしている。

茨城県御園生遺跡49号住居出土例(第168図2)

平成15年に刊行された報告書(註3)に、「青銅製柄杓」として記述されている。

御園生遺跡は、鹿嶋市宮中に所在し、平成13年に発掘調査が行われた。古墳時代から奈良・平安時代の竪穴住居が計94軒検出され、その中の49号住居から青銅製柄杓が出土している。

この49号住居は、長軸5.0m、短軸4.82m、壁高40～52cmを測る方形を呈し、カマドを北西壁中央にもち、壁周



第168図 「鉄柄付銅製杓」集成図

- 1 茨城県武者塚古墳 2 茨城県御園生遺跡49号住居
 3 千葉県花前I遺跡40号住居 4 山口県ジーコンボ116号墳 5 本遺跡23号住居

溝を全周させ、支柱穴を4本有する。出土遺物には、土師・須恵器の坏・椀・蓋・鉢・甕・甔・手捏土器、石製紡錘車、鉄鏃・鉄釘等が多数あり、これら出土遺物から7世紀後葉とされている。

青銅製柄杓は、南西壁際の覆土下層から潰れた状態で出土し、柄は無く、容器本体の1/3程を欠損する。残存する長さは(20.5)cm、幅12.2cm、厚さ9.1cm、重量(148.1)gと記述されている。容器本体は、外側に突出した片口が付き、口辺部は幅8mm程が外折し、片口部から左側90°付近の側面には鉾が2個残存し、この部分に柄を鉾留めしたことが解る。鉾留めは、上を平にした逆三角形に3個の鉾による。底面形は、潰れたことにより本来の形状をとどめていないが、丸底である可能性は高い。また、X線写真からは、器厚の厚みに濃淡があるようで、敲打による痕跡の可能性が高く、叩き出しによるものと考えられる。なお、容器の厚みは、1mm前後と思われる。千葉県花前I遺跡40号住居出土例(第168図3)

昭和59年に刊行された報告書(註4)に、「銅製柄杓」として記述されている。

花前I遺跡は、柏市舟戸字花前に所在し、昭和52年度に発掘調査が行われた。奈良・平安時代の竪穴住居25軒、掘立柱建物11棟が検出され、金鉗・羽口等の鍛冶道具やインゴット状の鉄素材といった鉄製品が多く出土し、隣接する花前II遺跡と共に9世紀後半の鉄生産遺跡として著名。その中の、40号住居から銅製柄杓が出土している。

この40号住居は、長軸4.9m、短軸4.7m、壁高40～55cmを測る方形を呈し、カマドを北壁中央にもち、壁周溝を巡らせる。出土遺物は多く、土師・須恵器の坏(内黒・墨書を含む)・甕、土玉、石製紡錘車、砥石、鉄製品に鎌・鉄鏃・タガネ状工具・棒状鉄製品・刀子・鉋?・釘、鉄滓等があり、鍛冶炉の検出はないが製鉄に関連する住居とされ、これら出土遺物から9世紀後葉から10世紀前葉とされている。

銅製柄杓は、南西隅の西壁際の覆土中位に出土し、柄は無く、容器本体のみである。長径20.3cm、短径16.4cm、高さ8.95cmを測る。容器本体は、外側に突出した片口が付き、口辺部は内面側がやや厚くなる。片口部から左側90°付近の側面に鉾止めの痕跡があり、この部分に柄を鉾留めしたことが解る。鉾留めは、上を平にした逆三角形に3個の鉾によると考えられる。底面形は、丸底で

ある。

山口県見島ジーコンボ116号墳出土例(第168図4)

昭和58年に刊行された報告書(註5)に、「銅椀」として記述されている。最初に公表された例である。

見島ジーコンボ古墳群は、萩市の沖合46.3kmの日本海に浮かぶ見島に所在し、昭和35年から3ケ年にわたり見島の総合的学術調査が、昭和57年に3基の古墳の発掘調査が行われた。昭和52年に山口県指定史跡、出土品は昭和54年に山口県指定有形文化財(考古資料)、昭和59年に国史跡に指定されている。

「銅椀」が出土したのは116号墳で、8世紀以降とされ、柄は無く、容器本体のみである。容器本体の大きさは花前I遺跡例よりもやや大きく、形状は外側に突出した片口が付き、口辺部は内面側がやや厚く、片口部から左側90°付近の側面に鉾止めの痕跡があり、鉾留め位置も花前I遺跡例に近似する。ただし、底面形は、歪んでいるのか丸底とは異なる。

下関市要須遺跡出土例

平成22年7月に、下関市教育委員会から要須遺跡出土の「銅製杓」が報道(註6)されている。

記事によると、全長63.8cm、銅製容器本体と鉄製の柄が組み合った状態(容器本体は残存が悪い)で土坑から出土。土坑からは、8～9世紀の土器が出土している。容器本体は、縁とそれに続く底の一部が残存し、縁には注ぎ口のような曲がった部分があるとしている。また、全国で6例目となるが、容器本体と柄が残る事例は西日本初という。

以上、5遺跡の例を示すことができた。この種の銅製容器は、「鉄柄付銅製杓」ないし「青銅製柄杓」、「銅製柄杓」、「銅製杓」と称され、本来は銅製の容器本体に鉄製の長い柄(端部が曲がった)が付いたもので、その様は一見すると「柄香炉」に似た形状を呈しているものである。また、要須遺跡での報道からすると、本遺跡での出土例は全国で7例目ということになる。

(5)類例との比較

ここでは、数少ない類例と本遺跡出土の銅製容器とを比較する。ただし、類例については実見しておらず、報告書に掲載された図と写真からである。

〈形状比較〉

全体的な形状は、完形品としてある1の武者塚古墳例、容器本体に鉄柄が残る要須遺跡例からすると、「鉄柄付銅製杓」は銅製の容器本体に鉄製の端部が曲がった長い柄が付いたもので、鉄柄接合部の左側に外側に突き出す片口をもち、容器の底は丸底風である。

次に、各部位の形状を比較する。

口縁部形状： 1・2および本遺跡の5では、口縁部は幅1cm程を外折する。しかし、3・4は銅椀と同様に、外折せずに内面側がやや厚くなる。

片口部： 1～4の口縁部には、いずれも外側に突き出す片口をもち、その位置は鉄柄接合部の左側にある。要須遺跡例も同様と思われる。しかし、本遺跡の5では片口はない。

柄の接合部： 1～4は下方を頂点とした逆三角形に3箇所の鋳留めを行うが、1では下方の頂点位置が深く、2～4は頂点位置が浅いといった違いがある。しかし、本遺跡の5では鋳留め形状が大きく異なり、左右の縦位に計6箇所の鋳留めを行っている。また、鉄鋳を用いていることから、本来は鉄柄が付いていたことが解る。さらに、この鋳留め部の口縁部外折は直立となり、1の口縁部外折下に鉄柄を接合するあり方は異なる状態が見て取れる。

底部形状： 2・4の底部形状は歪みのため不明であるが、1・3および本遺跡の5は丸底に近い。

成・整形（製作法）： 1は容器本体の所々に槌の痕跡が残るとされることから、叩き出しによるものと考えられる。2はX線写真から敲打による連続的な痕跡があるようで、やはり叩き出しによるものと考えられる。しかも、容器の厚みも本遺跡例と同様に、かなり薄いと思われる。本遺跡の5では、内面に径1.5cm程の凹凸状の痕跡が横位方向に浅く連続的に数段みられ、X線写真でも側面および底面に器厚の濃淡が臆気に確認できることから、敲打による叩き出しによるものと考えられ、加えて、器厚もかなり薄く仕立てられている。3・4の状況は不明。

その他： 5には他の例に見られない点として、鉄柄接合部の右側に上部を頂点とした三角形に3箇所の孔（径5mm、内面から外面へ雑に穿つ）を有し、さらに鉄柄接合部の反対側には細い銅鋳留めが残存している点

が挙げられる。

以上の形状比較から、本遺跡出土の銅製容器（「鉄柄付銅製杓」）は片口をもたない点で大きく他と異なるものの、共通する部分も多い。こうした形状差からすると、例は少ないものの次のように形状分類できる。

A類・・容器本体に片口をもつタイプ。

A-1 容器本体の口縁部が外折するもの。（1・2）

A-2 容器本体の口縁部が外折せずに内面側がやや厚くなるもの。（3・4）

B類・・容器本体に片口をもたないタイプ。（5）

一方、本遺跡例5に見られた、3箇所の孔や細い鋳留めといった他に見られない点からすれば、本遺物の特異な使用法をも含めた状況を考えざるを得ないと思われる。特に、3箇所の孔のあり方は、容器全体が叩き出しによる薄く丁寧な作りであるのに対し、内側から外側への雑な穿孔の仕方であり、他の例からしても本来の「鉄柄付銅製杓」とは異なる使用に関わる可能性が高い。つまり、「鉄柄付銅製杓」の使用用途とは別に、その後の使用目的のために無理に孔を穿孔させた可能性である。ただし、その機能からすれば、液体状のものを注ぎ出すための孔（濾し口）と推測でき、片口と同様の機能であることは否めない。また、細い鋳留めが何であるかは、類例もなく、現段階では不明である。

〈年代〉

1の武者塚古墳例は7世紀後半、2の御園生遺跡49号住居例は7世紀後葉とされ、いずれも7世紀代のものである。3の花前I遺跡40号住居例は9世紀後葉から10世紀前葉、4の見島ジーコンボ116号墳例は8世紀以降、さらに要須遺跡例は8～9世紀ということであり、本遺跡23号住居例5は8世紀第3四半期であることから、出土年代では本遺跡例が3番目の古さということになる。また、こうした出土年代からすると、「鉄柄付銅製杓」の使用時間幅は7世紀後半から9世紀後葉ないし10世紀前葉に至る長期間であることが解る。とともに、分布範囲も広域である。ただし、製作年代や製作場所は不明で、出土年代＝製作年代ではないことは言うまでもない。最古例の1からすれば7世紀代以降の金属容器であることは間違いなく、遺物の性格上、伝世さらには転用といっ

た状況が含まれた中で、各遺跡から出土していることを考慮する必要がある。

(6)本遺跡出土の意味

先述してきたように、23号住居から出土した銅製容器は、全国的にも希少な「鉄柄付銅製杓」の容器本体であることが解った。ここでは、本遺跡から出土した意味について考えてみたい。

まず、本遺跡の位置からすると、古代の「山田郡」にあり、郡家の存在を裏付ける遺構・遺物が検出された遺跡はないが、本遺跡の西側には寺の存在を想起させる三彩や瓦塔・瓦を出土した八ヶ入遺跡、古代の大集落および東山道駅路(7世紀後半から8世紀前半)を検出した大道西遺跡・大道東遺跡・楽前遺跡・鹿島浦遺跡、そして北側に漆紙文書(8世紀後半)を出土した矢部遺跡などがあり、共に古代「山田郡」の中心地の一角をなす位置にあると言える。このような周辺の状況からすれば、「鉄柄付銅製杓」の存在は、郡家に関わる希(貴)品とも考えることができる。

一方で、本遺跡23号住居から出土した銅製容器は、「鉄柄付銅製杓」の鉄柄がない容器本体のみが出土した訳で、遺跡内からは鉄柄と思われる遺物は出土していない。この状況は、仮定ではあるが、「鉄柄付銅製杓」として使用された後、鉄柄の脱落等により単なる容器として転用された様が、住居から出土していることを物語っているようにも考えられる。同様に、鉄柄が脱落した状態にあるのは、御園生遺跡例や花前Ⅰ遺跡例、見島ジーコンボ例がある。また、御園生遺跡例や花前Ⅰ遺跡例も住居からの出土であり、本遺跡の状況と同じであることから転用されたものと考えることができよう。

註

- 註1 毛利光俊彦 2005『古代東アジアの金属容器Ⅱ(朝鮮・日本編)』
独立行政法人文化財研究所 奈良文化財研究所
- 註2 岩崎卓也・滝沢 誠 他 1986『武者塚古墳』茨城県新治村教育委員会
- 註3 新井保雄・成島一也 2003『御園生遺跡』財団法人 茨城県教育財団
- 註4 清藤一順・郷堀英司他 1984『常磐自動車道埋蔵文化財調査報告書Ⅱ—花前Ⅰ・中山新田Ⅱ・中山新田Ⅲ—』財団法人 千葉県文化財センター
- 註5 小野忠○・斎藤忠 1964『見島総合学術調査報告』山口県教育委員会
- 乗安和二三 1983『見島ジーコンボ古墳群』山口県教育委員会
- 乗安和二三 2000『見島ジーコンボ古墳群』『山口県史 資料編 考古1』山口県
- 註6 2007年7月6・7日付け報道記事

第2節 21号住居出土の刻書文字紡錘車について

本調査において、21住居から土器類と共に「米」と「毛」の二文字が刻まれた石製紡錘車が出土していることは、先述の通りである。この刻書文字は珍しく、本県でも刻書文字のある紡錘車は知られているが、本資料のような文字の例はない。ここでは、この刻書文字紡錘車について検討を加えたい。

(1)出土した住居の概略と出土状況

刻書文字紡錘車を出土した21号住居は、長辺3.05m、短辺2.37m、壁高28cm、床面積5.25㎡を測る横長方形を呈している。床面付近には、大きめな炭化物が多く出土し、焼失住居の可能性もある。カマドは東壁の中央南寄りに位置し、残存状態は極めて良好で、袖石には自然礫および面取りした凝灰岩質の石材を使用している。

住居内での遺物の出土は、カマドとその周辺に多く集中し、特にカマド内における出土状態が極めて良好。刻書文字紡錘車は、カマド右脇の床面付近から出土している。

住居の年代は、出土土器から9世紀第3四半期と考えられ、刻書文字紡錘車もこの時期のものと考えられる。

(2)刻書文字と刻書文字紡錘車の意味

刻書文字紡錘車は、断面形が逆台形を呈し、上面径4.4cm、下面径3.5cm、厚さ1.6cm、紡錘孔径0.9cm、重さ48.9gを測り、蛇紋岩製で、全面が丁寧に研磨されている。そして、上面に「米」と「毛」の二文字の刻書文字が確認できる。

高島英之氏によると、「毛」の文字は篆書体風の字形で、「米」と「毛」の二文字の刻書文字を紡錘車に併記された例は、これまでのところ全国的にもないという。

文字の意味については、「稲」や「穀」ではなく「米」の文字が記されたことに、作物としての「米」の語の重要性が感じられる。また、「毛」には「土毛」(その土地から産出するもの、土産(どさん)、草木などその土地から生じるもの)の意味があり、派生して広く農産物の意味があるという。

さらに、「米」と「毛」の土毛を意味する文字を記するこ

とにより、農業生産物の豊産を祈願する際に使用した可能性。或いは、紡錘車に「米」と「毛」の文字を併記することで、それらを奉獻することの代用として、この紡錘車が神仏に奉獻された可能性もあるとしている。

第3節 総括

今回の調査で、縄文時代から近現代にまで至る多くの遺構・遺物が検出され、中には「鉄柄付銅製杓」を転用した容器本体や刻書文字紡錘車といった全国的にも希少な遺物が出土している。ここでは、各時代の様相をまとめて総括としたい。

縄文時代

本遺跡1区と鹿島浦遺跡との境となる谷地(低地)を隔てた南西台地上には、大道東遺跡から楽前遺跡および鹿島浦遺跡に跨がる範囲には、中期後半から後期初頭にかけての大集落が存在するが、本遺跡においては集落に関わる遺構は検出されていない。遺物には前期から後期に至る土器の出土はあるものの、希薄な状態にある。

弥生時代

今回の調査では、僅かではあるが中期の遺物が出土している。本遺跡および周辺遺跡の調査においても、中期の遺物が散見できるのみで、集落に関わる遺構の検出はない。しかし、遺物の出土があることからすれば、近い場所に集落が存在することは明らかで、今後の発見を待たざるを得ない。

奈良・平安時代

今回の調査では、8世紀代の住居4軒(8世紀第2四半期:17・29号住居、第3四半期:23号住居、8世紀後半:28号住居)と、8世紀末から9世紀初頭にかかる住居1軒(19号住居)、9世紀代の住居26軒(9世紀第1四半期:12～14・18・20号住居、第2四半期:2・7号住居、第3四半期以前:31号住居、第3四半期:3・6・8～11・16・21・22・24～26号住居、第4四半期:15号住居、9世紀後半:1・27・30号住居、9世紀代:4・5号住居)の計31軒が検出され、8世紀第2四半期にはじまり、9世紀第4四半期までの間で、住居軒数の最も多い時期は9世紀第3四半期であることが解った。

本遺跡の南西に位置する鹿島浦、楽前、大道東の遺跡

では、7世紀末から8世紀代の住居が多く、9世紀代の住居はむしろ少なく減少している状況がある。大道東遺跡でみると、6世紀後半の住居は34軒、7世紀第1～2四半期の住居35軒、7世紀第2～3四半期の住居23軒、7世紀第4～8世紀第1四半期の住居18軒でこの時期まで東山道駅路が使用され、8世紀第2四半期の住居32軒、8世紀第3四半期の住居26軒、8世紀第4四半期の住居28軒、9世紀前半の住居13軒と少なくなり、それ以降の住居は検出されていない。北側の矢部遺跡では、約70軒の住居が検出され、8世紀代よりも9世紀代の住居が多く、本遺跡と同様な傾向にある。周辺の状況を詳細に見なくてはならないが、八ヶ入、大道西、大道東、鹿島浦の各遺跡から検出された東山道駅路の廃絶、さらには山田郡衙との関係の中で、集落の変遷に少しずつ変化が生じていることを窺わせている。

いずれにせよ、本遺跡が古代山田郡の中心地の一角をなす位置にあることは変わらない。そうした中に、希少な「鉄柄付銅製杓」の出土の由縁があると考えすることは、不可思議なことではない。

中・近世以降

中世の掘立柱建物は検出されていないが、陶磁器類は若干出土している。

近世から近代の遺構、特に江戸末から明治初期にかけての溝・土坑からは、多くの陶磁器類が出土した。中でも、1号溝においては江戸時代(18世紀後半以降)の遺物が主体を占め、在地火鉢類は江戸期の良好な資料であり、今後の県内における在地火鉢類を知る貴重な資料と言える。

写真図版



西へ延びる路線と金山丘陵(遺跡上空から南西方向を望む)



東へ延びる路線と県境(遺跡上空から北東方向を望む)



1区 全景(空中写真 上空から)



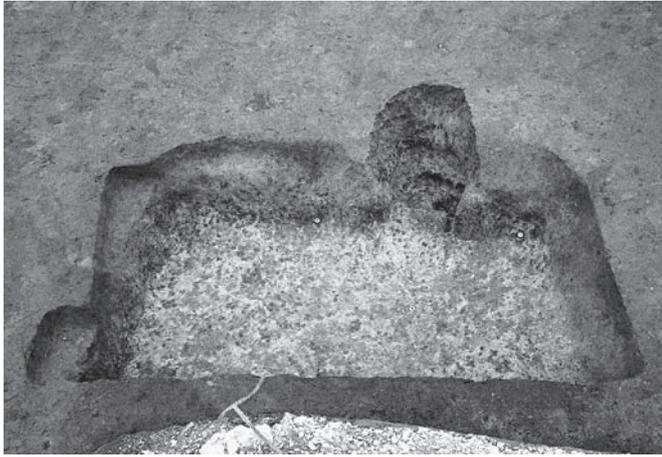
2区 全景(空中写真 上空から)



3・4区 全景(空中写真 上空から)



5・6区 全景(空中写真 上空から)



1号住居 床面全景 西から



1号住居 カマド 西から



2号住居 床面全景 南から



2号住居 遺物出土状態 南から



2号住居 カマド 南から



2号住居 掘り方全景 南から



3号住居 床面全景 西から



3号住居 カマド 西から



4号住居 西から



5号住居 西から



6号住居 床面全景 西から



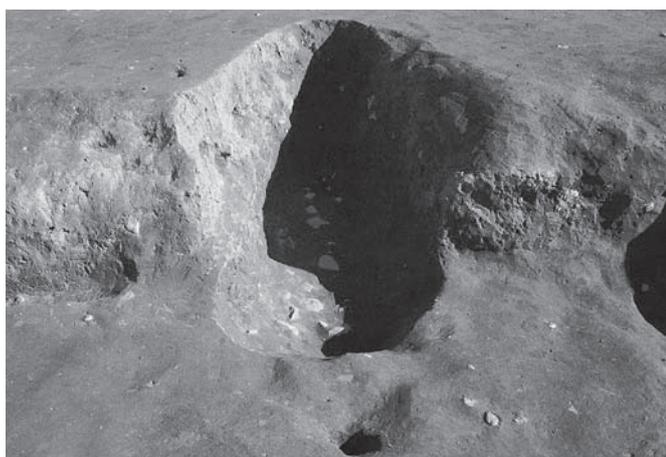
6号住居 遺物出土状態 西から



6号住居 鉄製品出土状態



6号住居 カマド遺物出土状態 西から



6号住居 カマド 西から



6号住居 掘り方全景 西から



7号住居 床面全景 西から



7号住居 カマド 西から



7号住居 カマド遺物出土状態 西から



8・9号住居 床面全景 南西から



8・9号住居 遺物出土状態 南西から



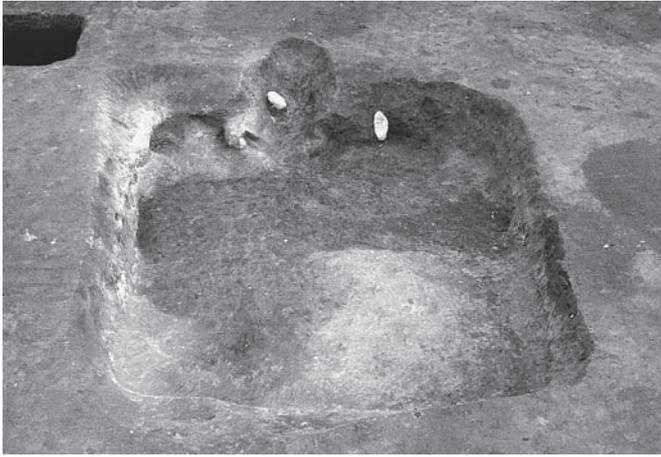
8号住居 カマド 西から



10号住居 床面全景 南西から



10号住居 カマド 南西から



11号住居 床面全景 南西から



11号住居 遺物出土状態 南西から



11号住居 カマド 南西から



12号住居 床面全景 南西から



12号住居 遺物出土状態 南西から



12号住居 カマド 南西から



13号住居 床面全景 南西から



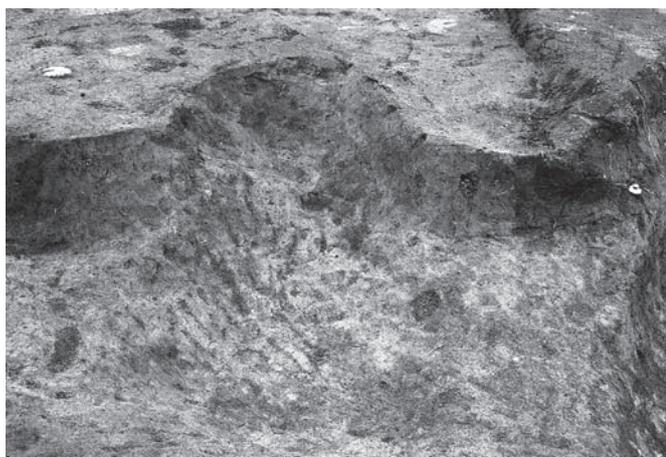
13号住居 カマド 南西から



13号住居 掘り方全景 南西から



14号住居 床面全景 南西から



14号住居 カマド 南西から



15号住居 床面全景 南西から



15号住居 遺物出土状態 南西から



16号住居 床面全景 南西から



16号住居 カマド 南西から



15・16号住居 掘り方全景 南西から



17号住居 床面全景 南西から



17号住居 カマド 南西から



18号住居 床面全景 南西から



18号住居 カマド 南西から



18号住居 カマド掘り方 南西から



18号住居 掘り方全景 南西から



19号住居 床面全景 南西から



19号住居 カマド 南西から



19号住居 カマド 西から



19号住居 カマド掘り方 南西から



19号住居 掘り方全景 南西から



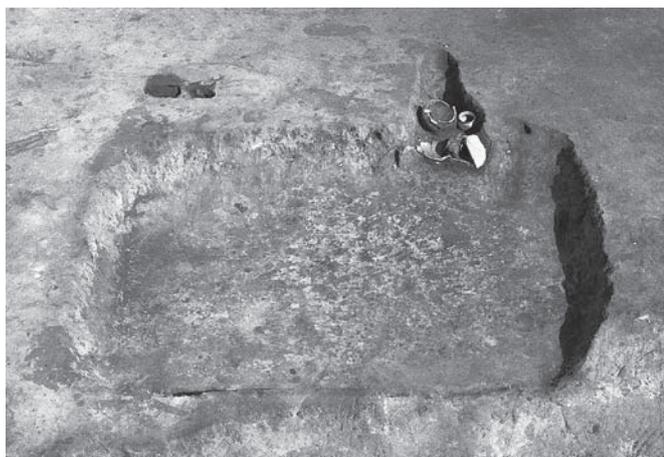
20号住居 床面全景 南から



20号住居 遺物出土状態 南から



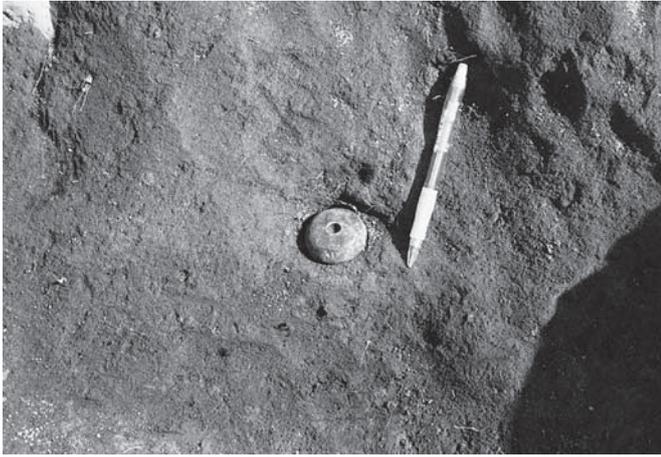
20号住居 カマド 南から



21号住居 床面全景 西から



21号住居 遺物出土状態 西から



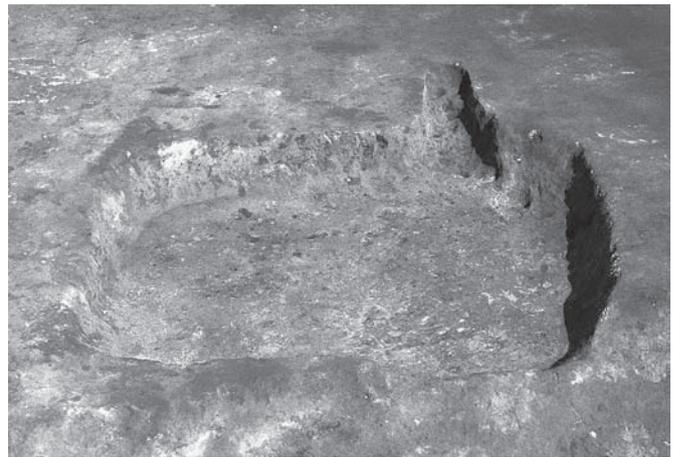
21号住居 紡鍾車出土状態



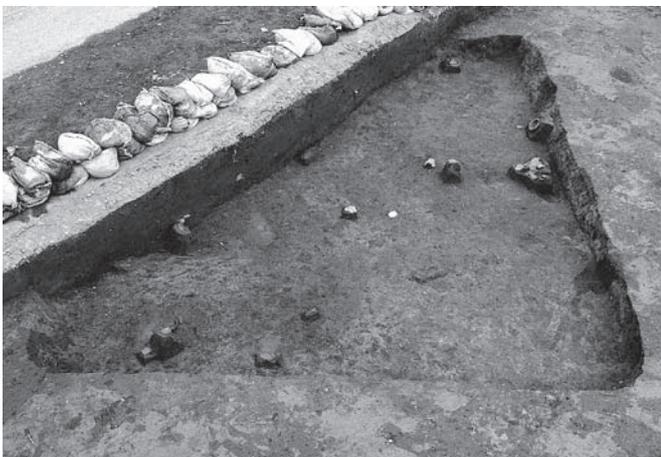
21号住居 カマド遺物出土状態 南西から



21号住居 カマド 西から



21号住居 掘り方全景 西から



22号住居 床面全景 西から



22号住居 掘り方全景 南から



23号住居 遺物出土状態 南西から



23号住居 遺物出土状態



23号住居 床面全景 南西から



23号住居 カマド周辺遺物出土状態



23号住居 カマド周辺遺物出土状態



23号住居 カマド遺物出土状態



23号住居 銅製容器出土状態



23号住居 カマド周辺遺物出土状態 南西から



23号住居 床面全景 南西から



23号住居 カマド 南西から



24号住居 床面全景 南から



25号住居 床面全景 西から



25号住居 カマド 西から



26号住居 床面全景 西から



26号住居 カマド 西から



24・25・26・31号住居 掘り方全景 西から



24号住居 床下土坑 西から



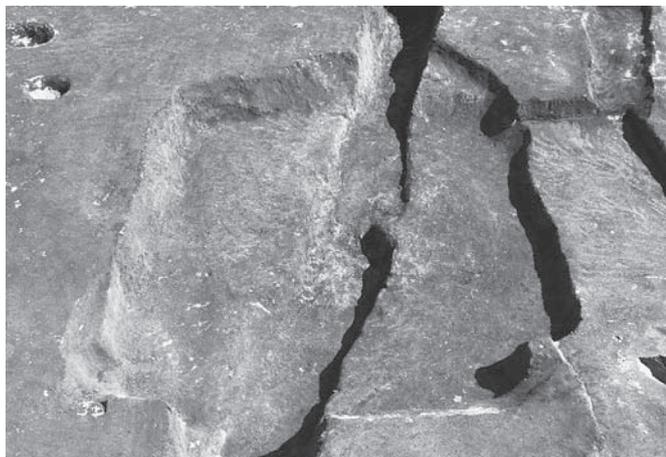
25号住居 床下土坑 東から



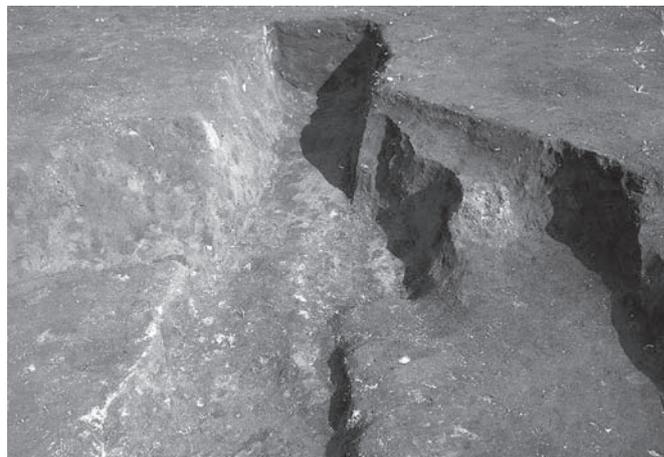
27号住居 床面全景 南から



27号住居 掘り方全景 南から



28号住居 床面全景 西から



28号住居 カマド 西から



29号住居 床面全景 南西から



29号住居 カマド 南西から



29号住居 掘り方全景 南西から



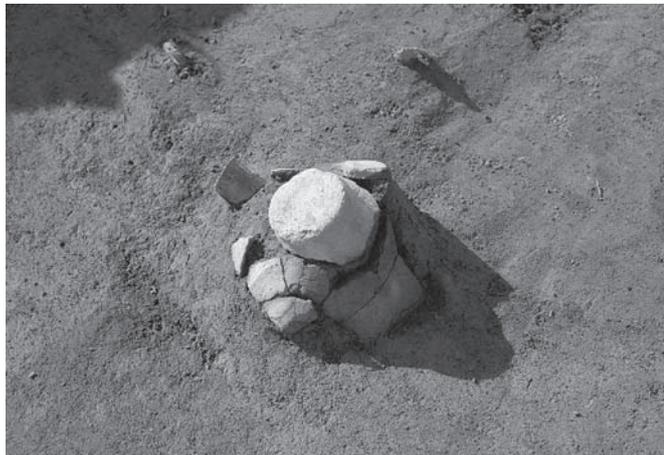
29号住居 床下土坑 南西から



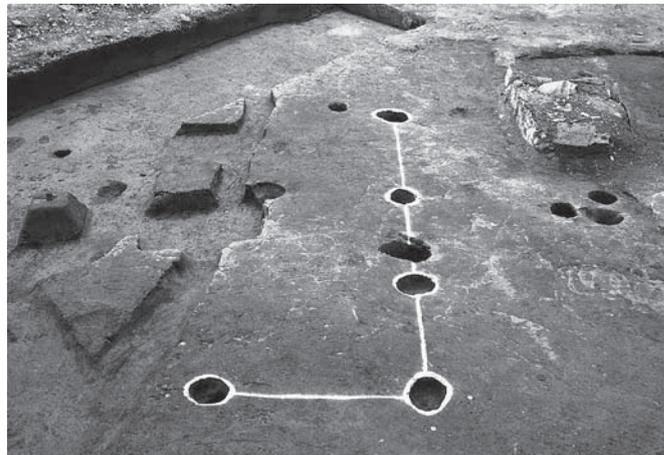
30号住居 床面全景 南西から



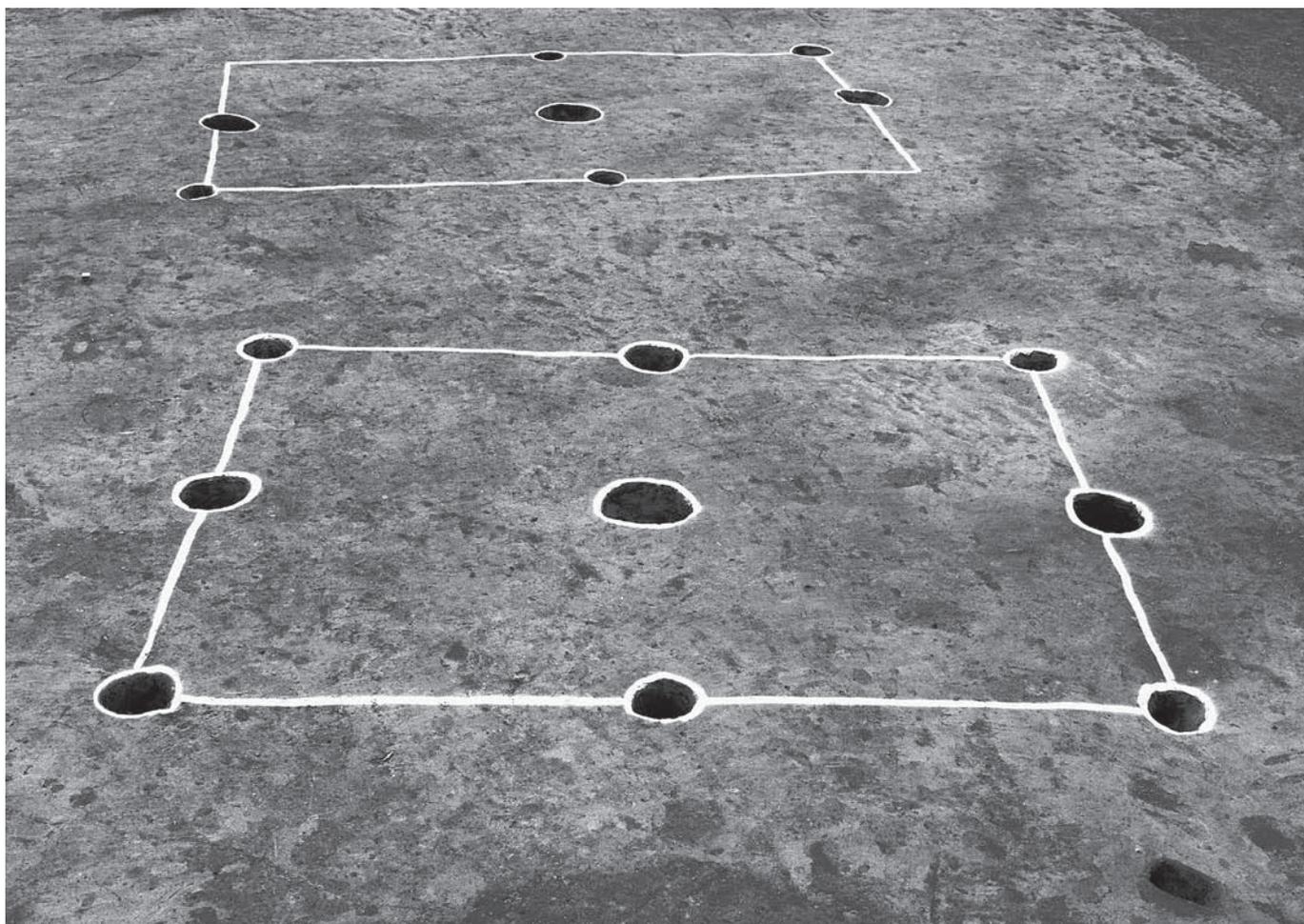
30号住居 カマド 南西から



縄文土器遺構外出土状況



1号住穴列 北から



1号掘立柱建物(手前)と2号掘立柱建物(奥)全景 北から



1号井戸 南から



3号井戸 南から



6区東側に集中する土坑群 北から



3～6号土坑 北から



11～14号土坑 東から



8・11～15号土坑 北から



16～23・28号土坑 北から



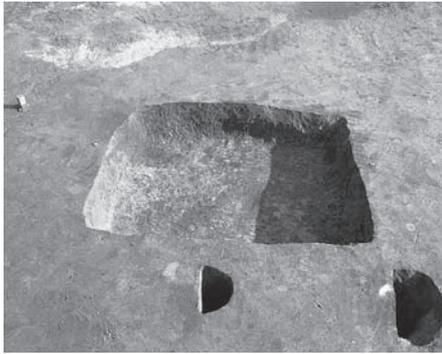
1号土坑 北から



9号土坑 南から



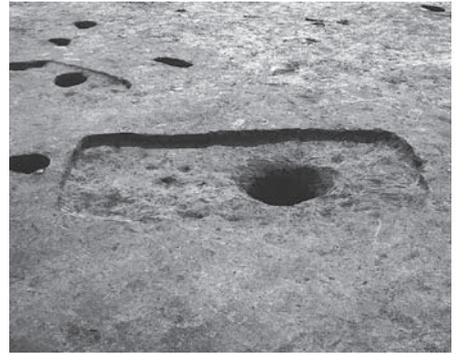
32号土坑 北から



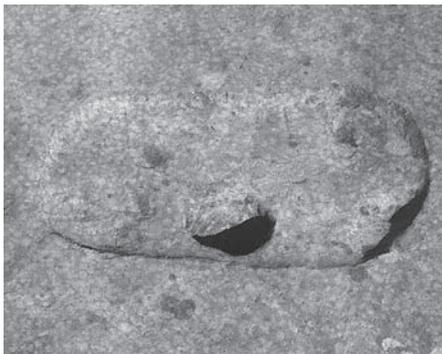
33号土坑 北西から



34号土坑 西から



36号土坑 北から



37号土坑 南西から



38号土坑 東から



39・40号土坑 西から



41号土坑 西から



42号土坑 西から



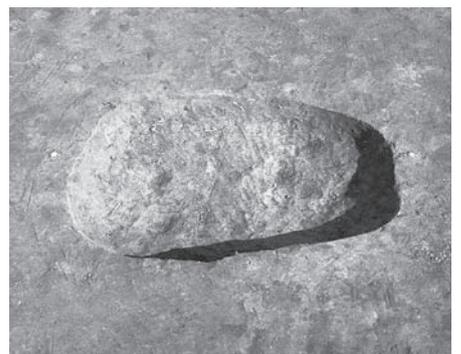
43号土坑 南から



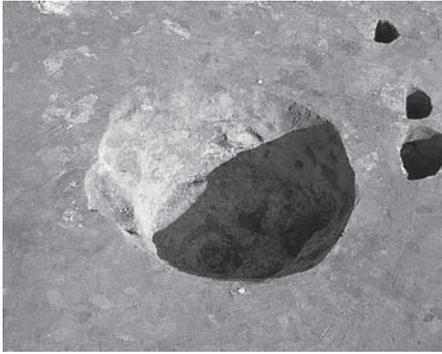
44・45号土坑 南西から



46号土坑 南から



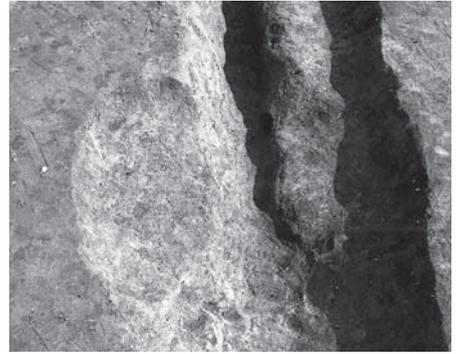
47号土坑 南から



48号土坑 西から



49号土坑 西から



50号土坑 西から



51号土坑 西から



52号土坑 西から



53・58号土坑 南西から



54号土坑 西から



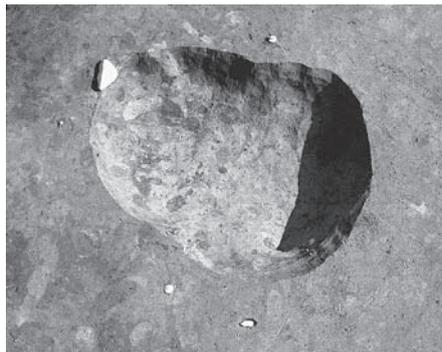
55号土坑 西から



56号土坑 東から



57号土坑 東から



59号土坑 西から



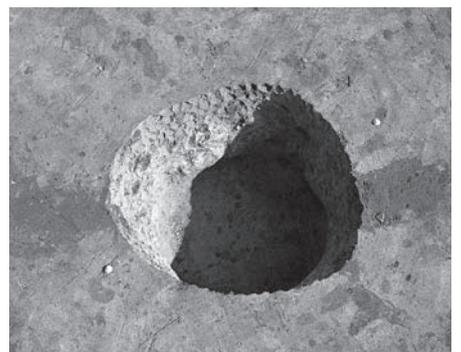
61号土坑 西から



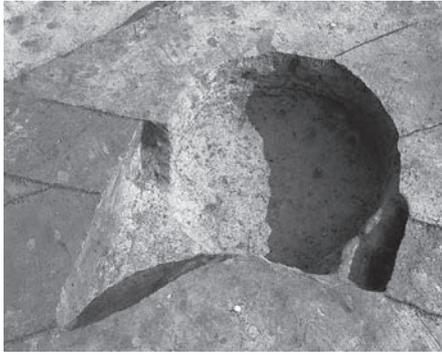
62号土坑 西から



63号土坑 西から



64号土坑 西から



65号土坑 東から



66号土坑 南西から



67号土坑 東から



68号土坑 西から



69号土坑 南から



70号土坑 南から



71号土坑 南から



72号土坑 南から



73号土坑 西から



74号土坑 東から



75号土坑 南から



76号土坑 西から



77号土坑 西から



78号土坑 西から



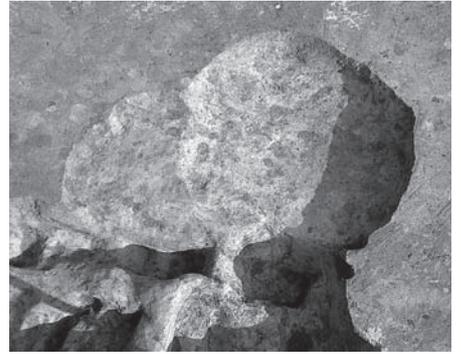
79号土坑 西から



80・81号土坑 南西から



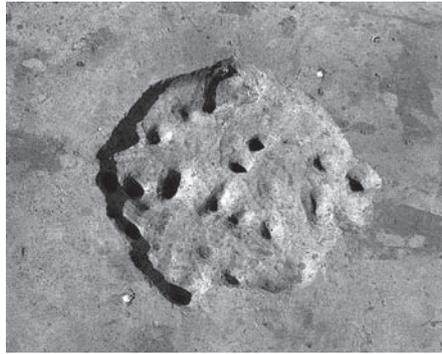
82・83・86号土坑 南東から



84号土坑 西から



86号土坑 西から



87号土坑 東から



88号土坑 東から



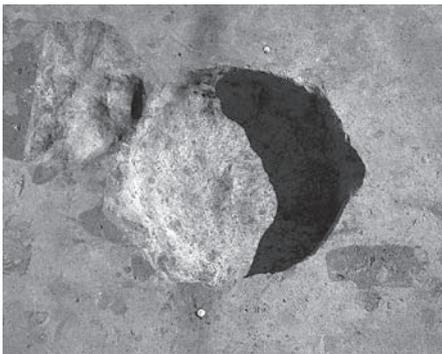
89号土坑 東から



90号土坑 東から



91・92号土坑 南西から



93号土坑 西から



94号土坑 西から



95・96号土坑 西から



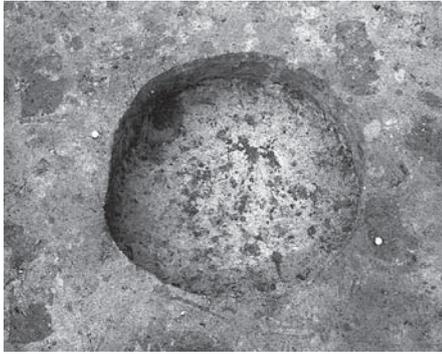
97・98・127号土坑 東から



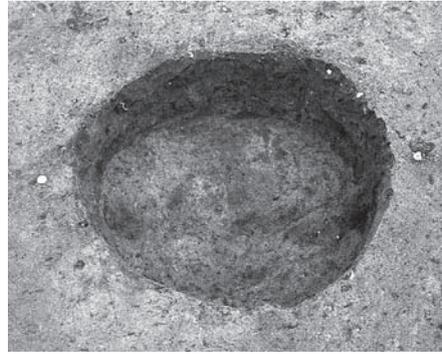
99号土坑 北から



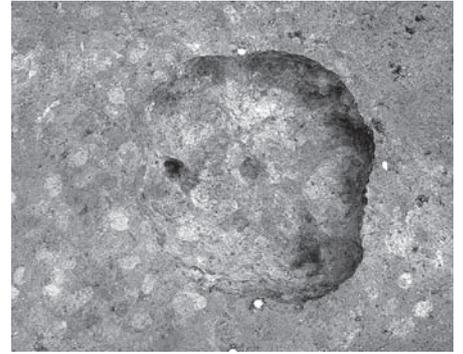
100号土坑 北から



101号土坑 南から



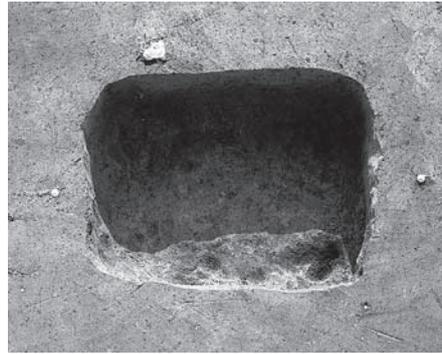
102号土坑 南から



103号土坑 西から



104号土坑 西から



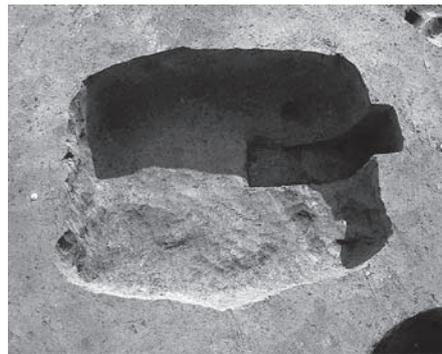
105号土坑 北から



106号土坑 西から



107号土坑 南から



108号土坑 北から



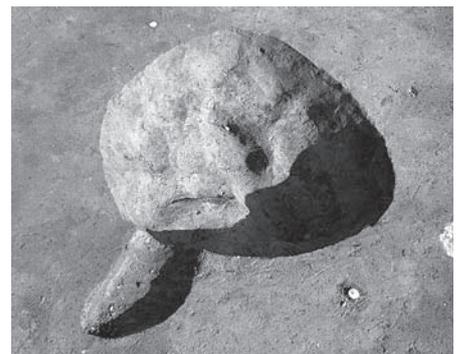
109号土坑 南東から



110号土坑 南から



112号土坑 南東から



113号土坑 西から



114号土坑 東から



115号土坑 東から



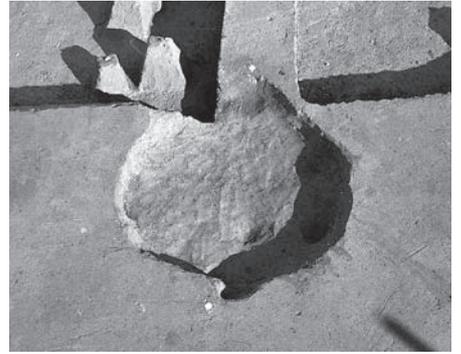
116号土坑 南東から



117号土坑 西から



118号土坑 西から



119号土坑 西から



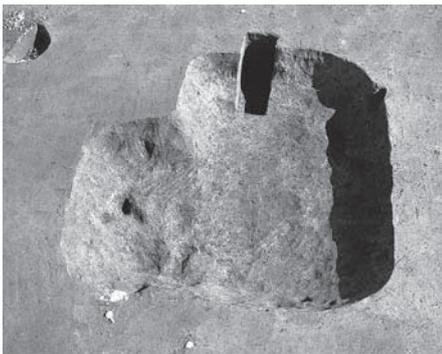
120号土坑 西から



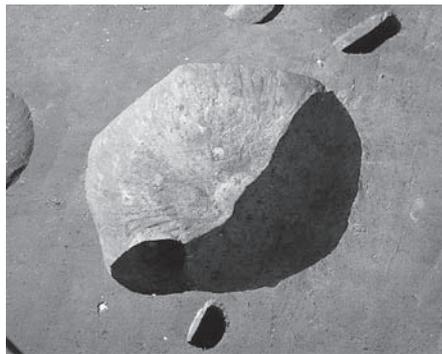
122号土坑 北から



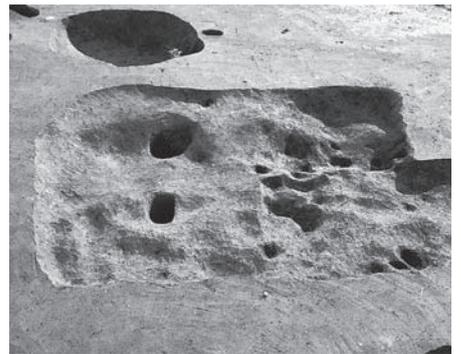
123号土坑 東から



124・130号土坑 西から



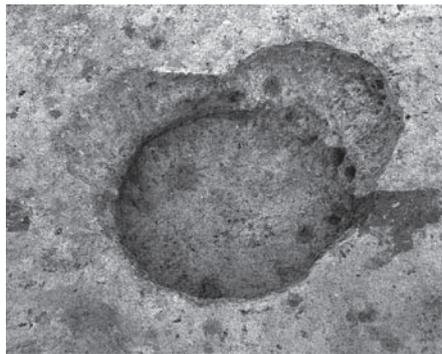
125号土坑 西から



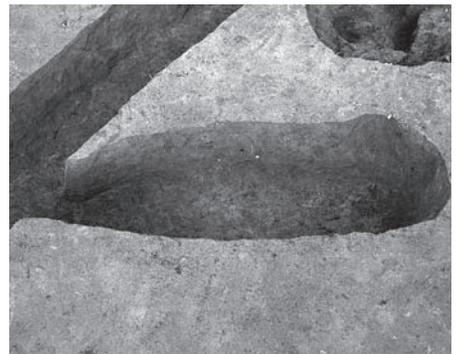
126号土坑 北から



126号土坑 東から



127号土坑 西から



128号土坑 南から



129号土坑 西から



131号土坑 西から



132号土坑 南東から



133号土坑 西から



134号土坑 西から



135号土坑(6号井戸) 南西から



136号土坑(5号井戸) 西から



137号土坑(4号井戸) 北西から



137号土坑(4号井戸) 東から



137号土坑(4号井戸) 東から



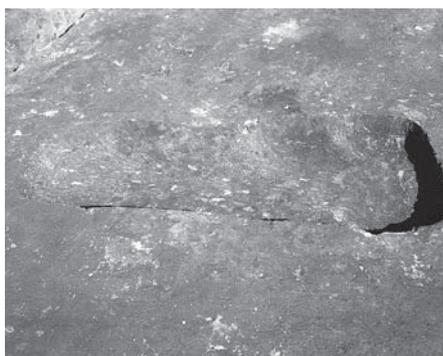
138号土坑 南から



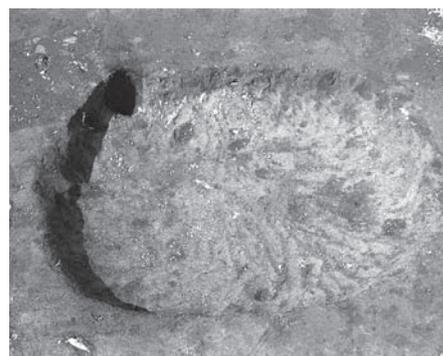
139号土坑 南から



140号土坑 北東から



141号土坑 南西から



142号土坑 南東から



143号土坑 南東から



144号土坑 南東から



145号土坑 南東から



147号土坑 南東から



151号土坑 南から



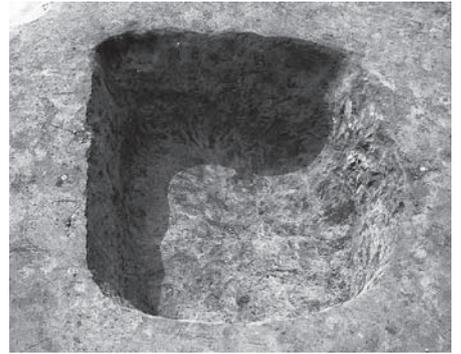
152号土坑 東から



153号土坑 北から



155号土坑 西から



159号土坑 東から



160号土坑 東から



161号土坑 東から



162・163号土坑 東から



164号土坑 西から



165号土坑 東から



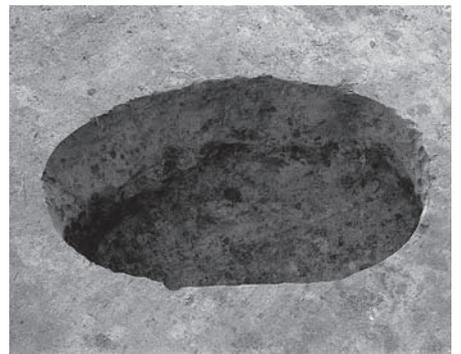
166号土坑 北から



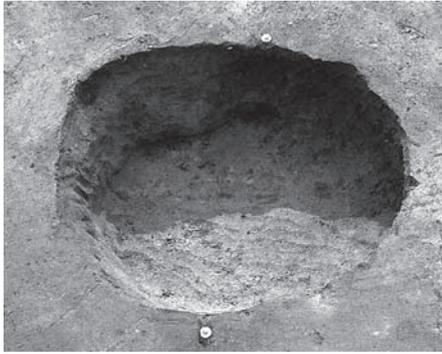
170号土坑 南から



170号土坑 北西から



172号土坑 東から



173号土坑 東から



174号土坑 東から



175号土坑 東から



176号土坑 西から



177号土坑 東から



178号土坑 北から



180号土坑 南西から



181号土坑 北西から



183号土坑 南から



184号土坑 東から



185号土坑 南から



186号土坑(7号井戸) 南から



1号溝 北から



2号溝 南から



2号溝 北から



3号溝 北から



4号溝 北から



5・6号溝 北から



8・9号溝 東から



10号溝 南から



12号溝北側 南から



13号溝 西から



14号溝北側 北から



14号溝南側 北から



12・15号溝 南東から



15号溝 北西から



19号溝 北から



20号溝 西から



22号溝 北西から



12号溝南側・23号溝 北から



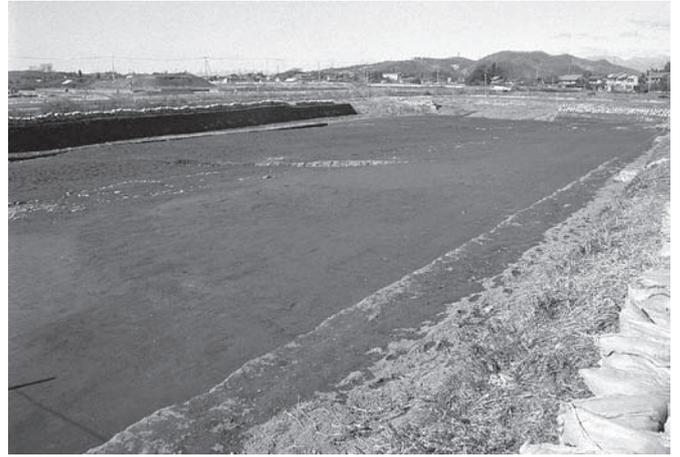
24号溝 北東から



25・26号溝 東から



1区 As-B下面 東から



1区 As-B下面 南東から



1区 As-B下 水田全景 西から



1区 As-B下 水田 南から



1区 As-B下 水田 西から



1区 As-B下 水田面 北西から



1区 As-B下 水田面 北西から



1区 As-B下 水田 東から



1区 As-B下 水田 南西から



1区 南東壁 東寄土層断面



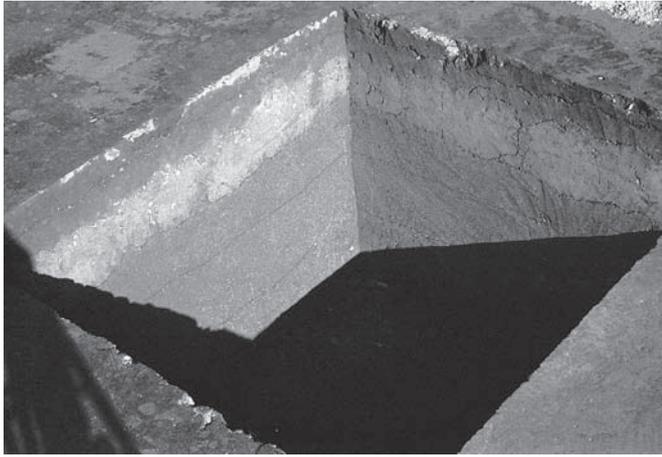
1区 南東壁 中央南寄土層断面



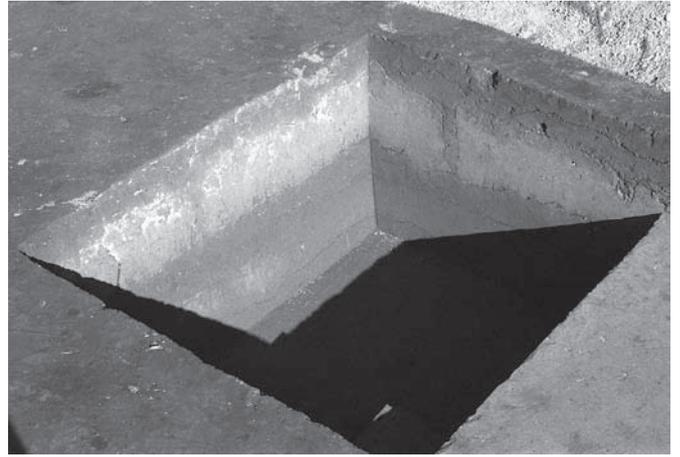
1区 南東壁 南端土層断面



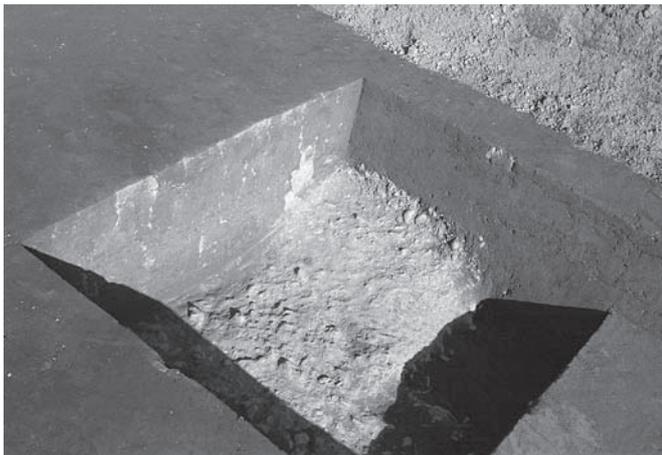
1区 南西端 旧河道跡 南東から



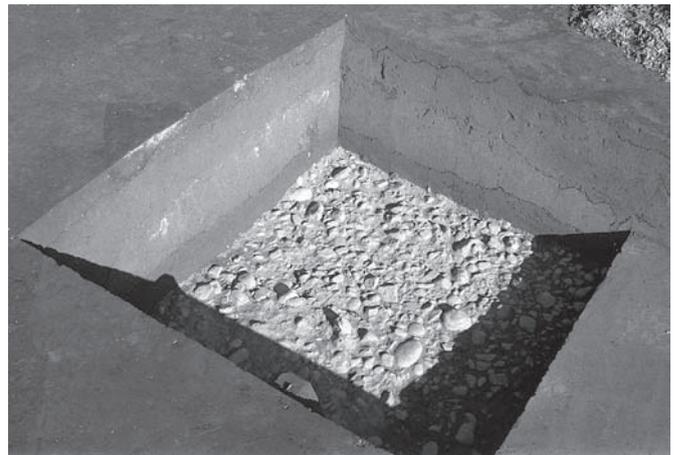
旧石器試掘 No.11 土層断面 南西から



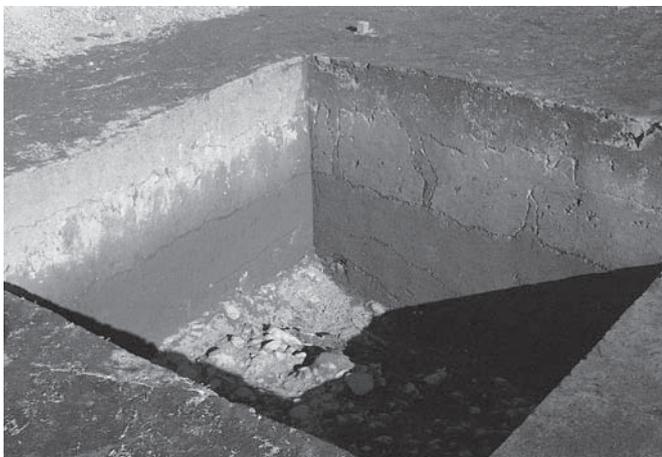
旧石器試掘 No.21 土層断面 南西から



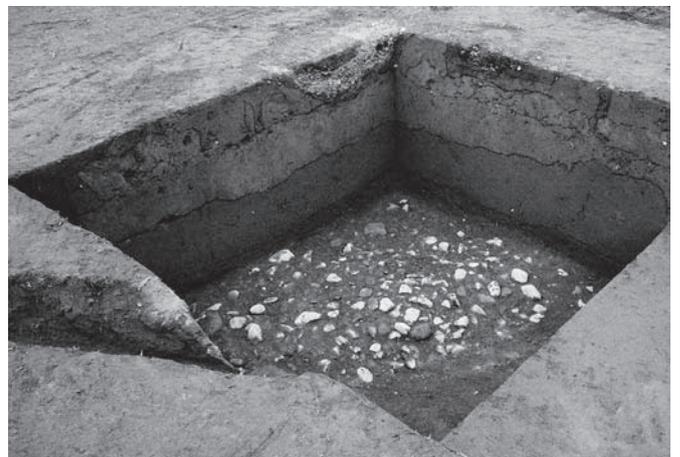
旧石器試掘 No.25 土層断面 南西から



旧石器試掘 No.27 土層断面 南西から



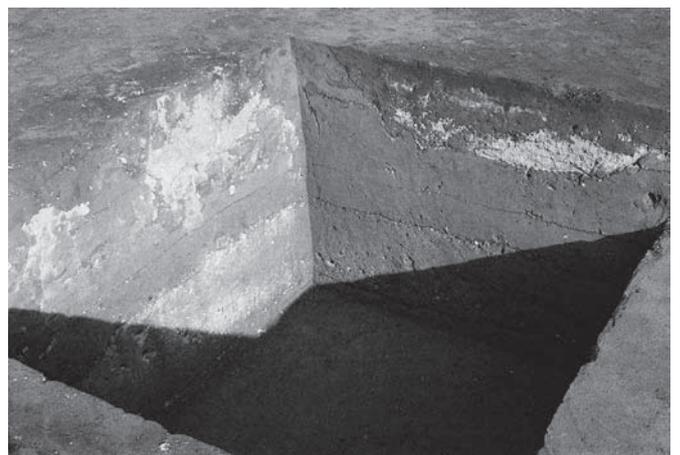
旧石器試掘 No.34 土層断面 南西から



旧石器試掘 No.40 土層断面 南西から



旧石器試掘 No.46 土層断面 南西から



旧石器試掘 No.50 土層断面 南西から



遺外1



遺外2



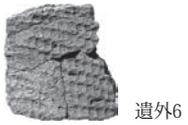
遺外3



遺外4



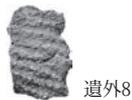
遺外5



遺外6



遺外7



遺外8



遺外9



遺外10



遺外11



遺外12



遺外13



遺外14



遺外15



遺外16



遺外17



遺外18



遺外19



遺外20



遺外21



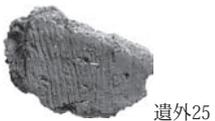
遺外22



遺外24



遺外23



遺外25



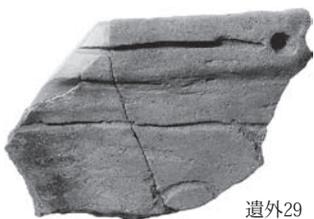
遺外26



遺外27



遺外28



遺外29



遺外30



遺外31



遺外32

PL.34



遺外33



遺外34



遺外35



遺外36



遺外37



遺外38



遺外39



遺外40



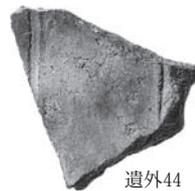
遺外41



遺外42



遺外43



遺外44



遺外45



遺外46



遺外47



遺外48



遺外49



遺外50



遺外51



遺外52



遺外53



遺外54



遺外55



遺外56



2住1



2住4



2住5



3住1



3住2



6住3



6住4



6住6



6住7



6住8



6住9



6住10



6住11



6住5



6住15



6住21



6住19



6住24



6住27

PL.36



6住28



7住2



7住3



7住4



7住5



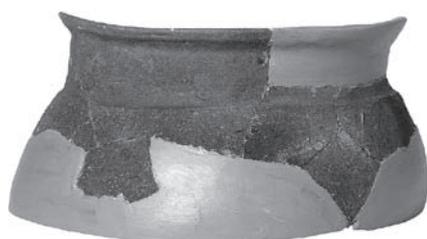
8住1



8住2



8住3



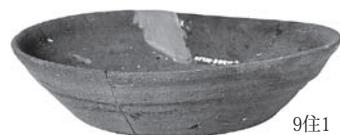
8住8



8住6



8住13



9住1



9住2



9住3



9住4



10住1



11住1



11住2



11住3



11住5



12住1



12住2



12住3



13住4



13住2



13住5



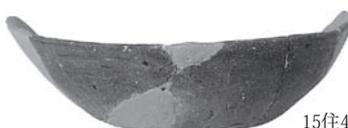
14住3



14住4



15住2



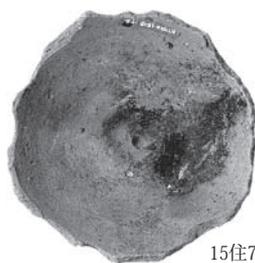
15住4



15住5



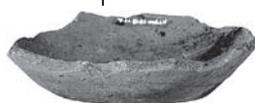
15住3



15住7



15住8



PL.38



15住9



15住10



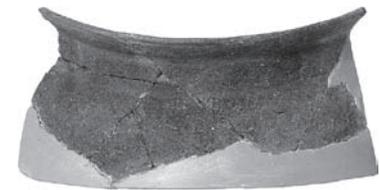
16住1



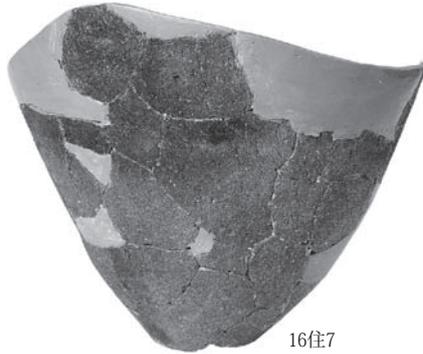
16住5



16住2



16住6



16住7



17住1



17住2



18住1



18住2



18住3



18住4



18住5



18住6



19住2



20住1



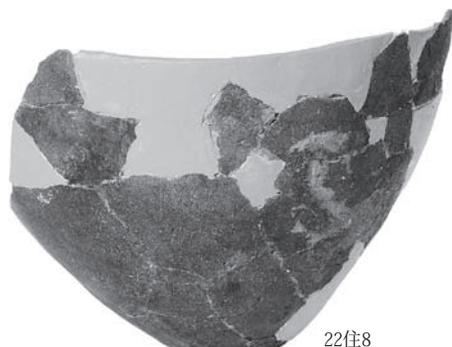
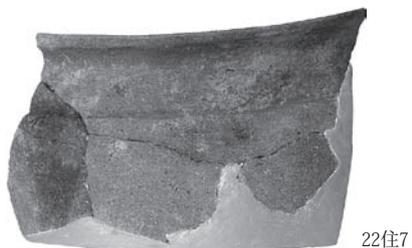
20住3



20住2



20住4



PL.40



23住1



23住2



23住3



23住4



23住5



23住8



23住6



23住7



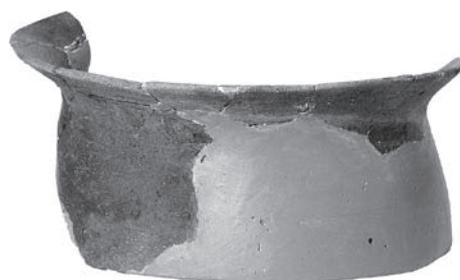
23住9



23住15



23住14



23住16



23住10



23住11



23住12



23住13



24住2



24住3



24住4



24住5



24住6



24住7

PL.42



24住8



24住9



25住1



25住4



25住5



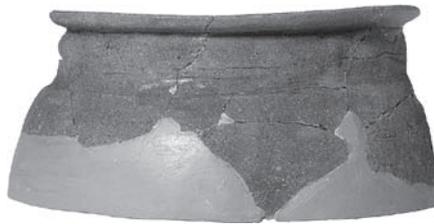
FT7903200001



25住7



26住1



26住2



27住1



28住1



28住2



29住3



29住1



29住2



29住4



30住2



1土2



1土3



1土4



1土5



1土7



1土8



1土9



1土10



1土11



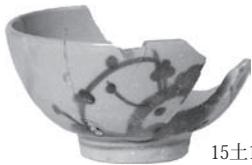
1土1



1土12



26土1



15土1



1溝1



1溝2



1溝3



1溝4



1溝11



1溝18



1溝23



1溝24



1溝27



1溝28



1溝30



1溝31



1溝29

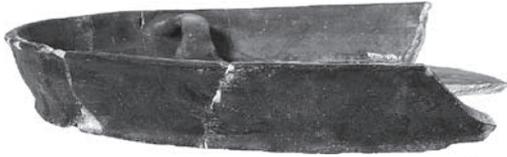


1溝34

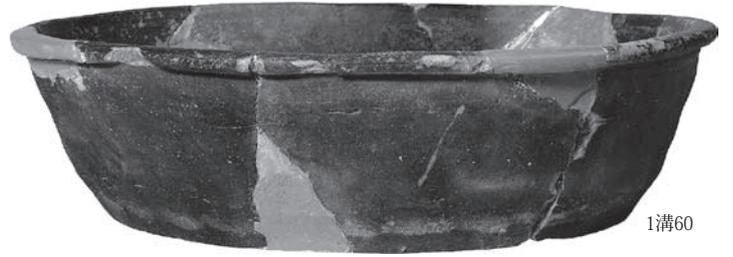


1溝68

PL.44



1溝38



1溝60



1溝61



1溝66



1溝62



1溝67



2溝1



3溝3



4溝1



11溝1



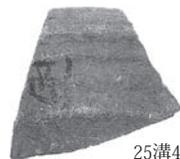
14溝1



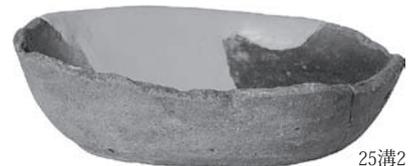
22溝1



25溝1



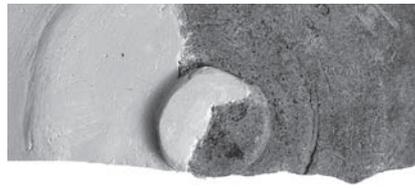
25溝4



25溝2



遺外1



遺外5



遺外3



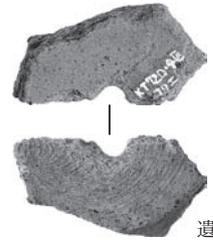
遺外2



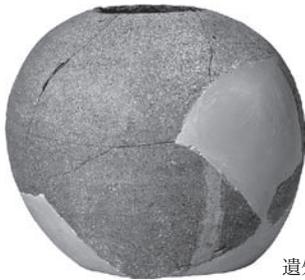
遺外7



遺外8



遺外9



遺外10



遺外11



遺外30



遺外21



遺外38



遺外39



遺外40



遺外41



遺外45

PL.46



遺外1



遺外2



遺外3



遺外4



遺外5



遺外6



遺外7



遺外8



遺外9



遺外10



遺外11



6住29



6住30



8住15



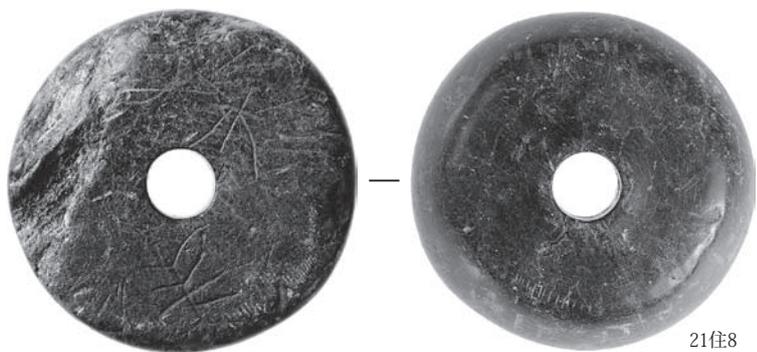
20住5



21住9



22住9



21住8



21住10



24住15



25住8



1土13



16土1



16土2



16土3



1溝71



1溝69



1溝70



1溝72

PL.48



遺外55



遺外56



遺外57



遺外58



遺外59



遺外60



遺外64



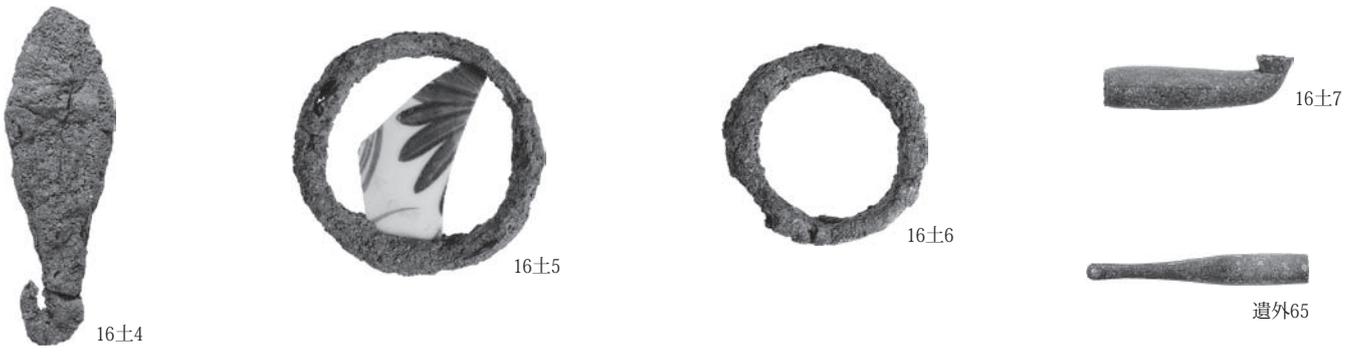
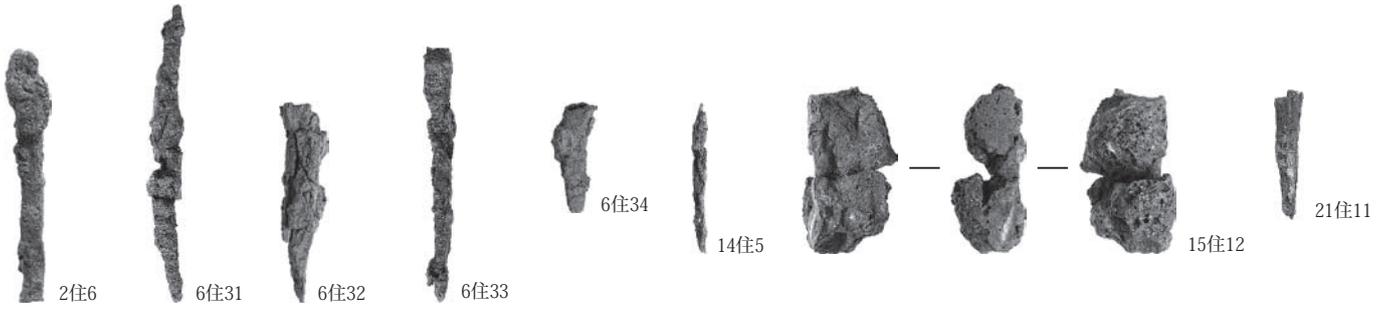
遺外61

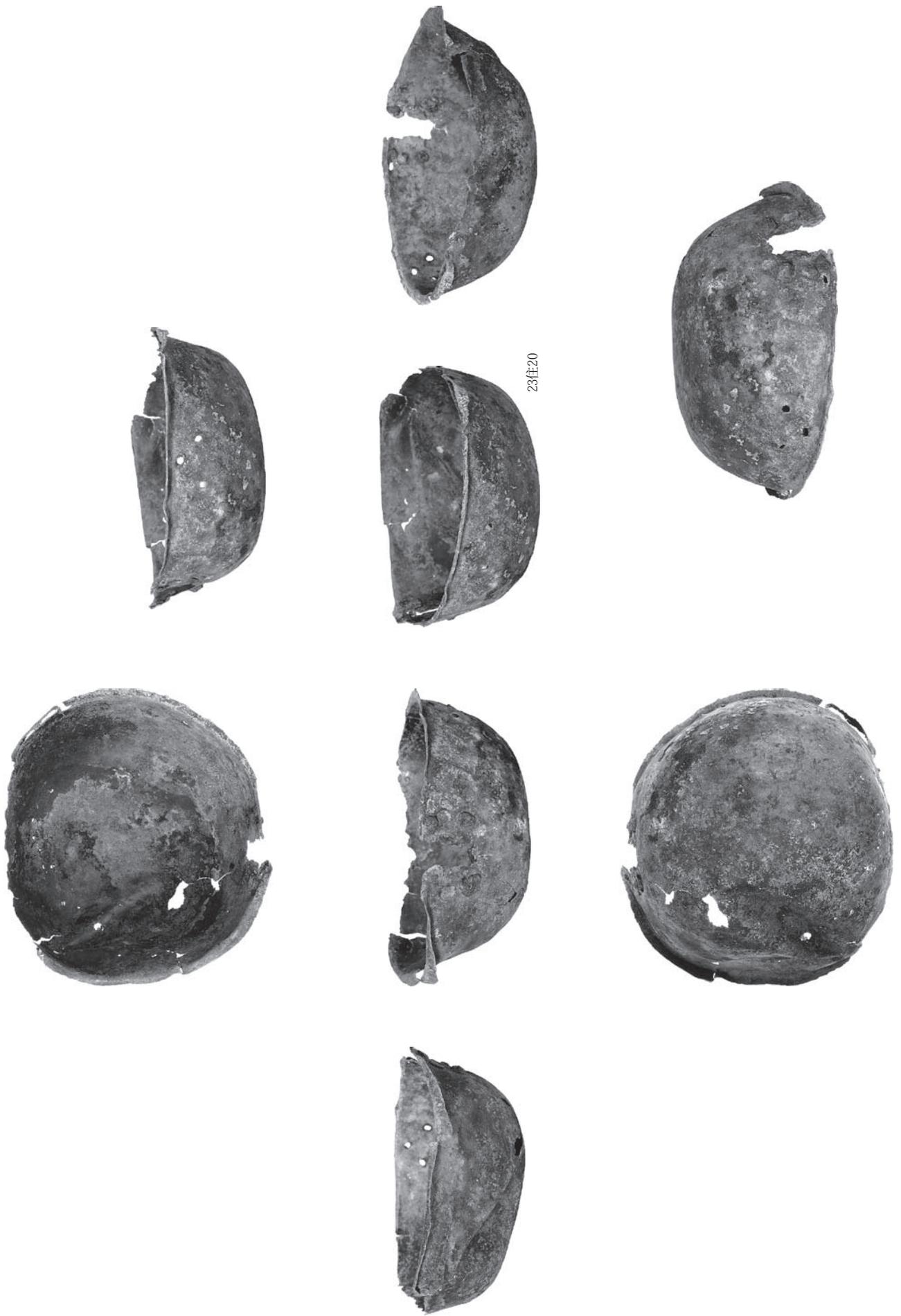


遺外62

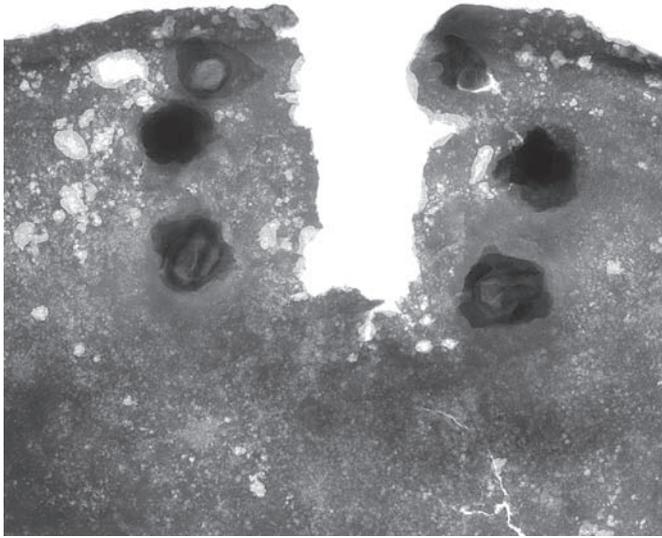


遺外63

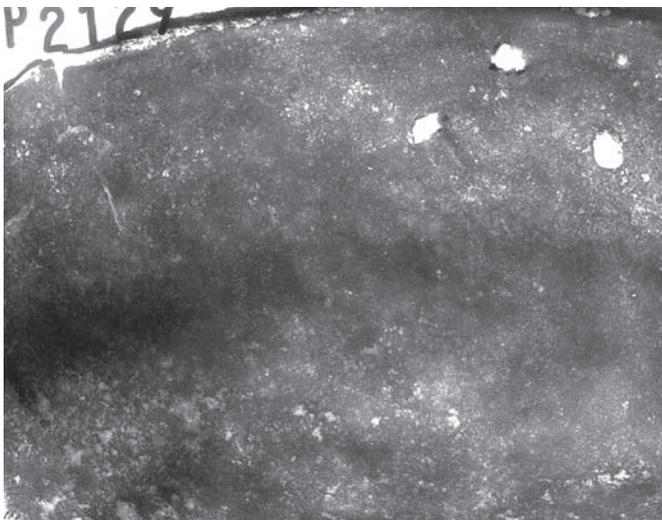




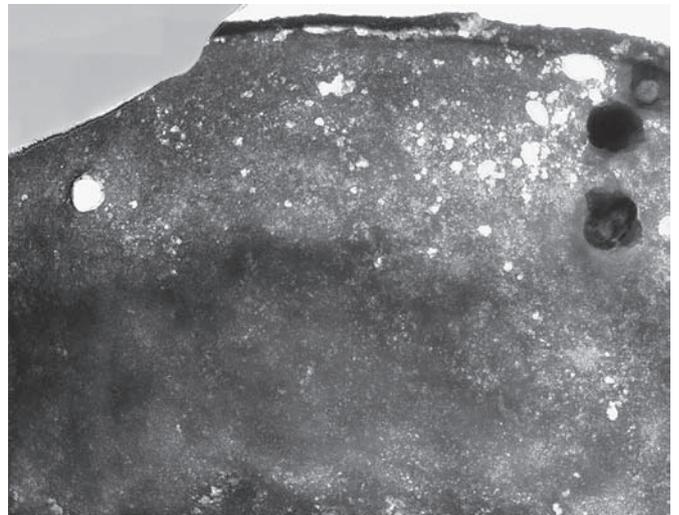
23件20



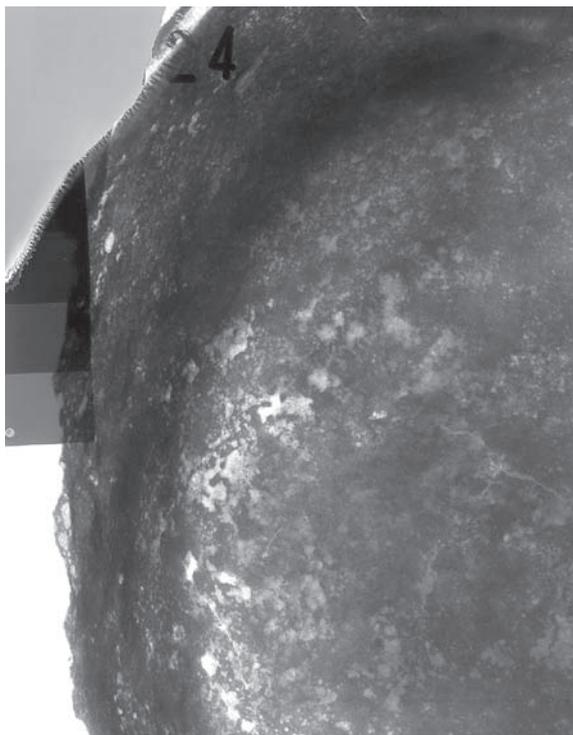
銅製容器 鋌留め部(内面)のX線写真



銅製容器 3孔付近のX線写真



銅製容器 鋌留めと3孔間の内面X線写真



銅製容器 底部内面(左側)のX線写真



銅製容器 底部内面(右側)のX線写真

報告書抄録

書名ふりがな	むかいやべいせき
書名	向矢部遺跡
副書名	北関東自動車道(伊勢崎～県境)地域埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書
シリーズ番号	531
編著者名	谷藤保彦
編集機関	財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
発行機関	財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
発行年月日	201203
作成法人ID	21005
郵便番号	377-8555
電話番号	0279-52-2511
住所	群馬県渋川市北橘町下箱田784番地2
遺跡名ふりがな	むかいやべいせき
遺跡名	向矢部遺跡
所在地ふりがな	ぐんまけんおおたしただかりまち
遺跡所在地	群馬県太田市只上町
市町村コード	10205
遺跡番号	T0291
北緯(日本測地系)	361941
東経(日本測地系)	1392340
調査期間	20040701-20050331
調査面積	15267
調査原因	道路建設
種別	集落
主な時代	奈良／平安／中世
遺跡概要	集落－奈良・平安－竪穴住居31軒＋掘立柱建物跡2棟＋土坑／生産－水田跡／中近世－土坑＋井戸＋ピット＋溝／その他－縄文・弥生－土器＋石器
特記事項	8世紀後半から9世紀にかけての集落。8世紀後半の住居から、鉄柄付銅製杓(容器本体)が出土。9世紀後半の住居からは、刻書文字紡錘車が出土した。

財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書 第531集

向矢部遺跡

北関東自動車道(伊勢崎～県境)地域埋蔵文化財発掘調査報告書

平成24(2012)年3月9日 印刷

平成24(2012)年3月16日 発行

編集・発行／財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

〒377-8555 群馬県渋川市北橋町下箱田784番地2

電話(0279)52-2511(代表)

ホームページアドレス <http://www.gunmaibun.org/>

印刷／上毎印刷工業株式会社
